



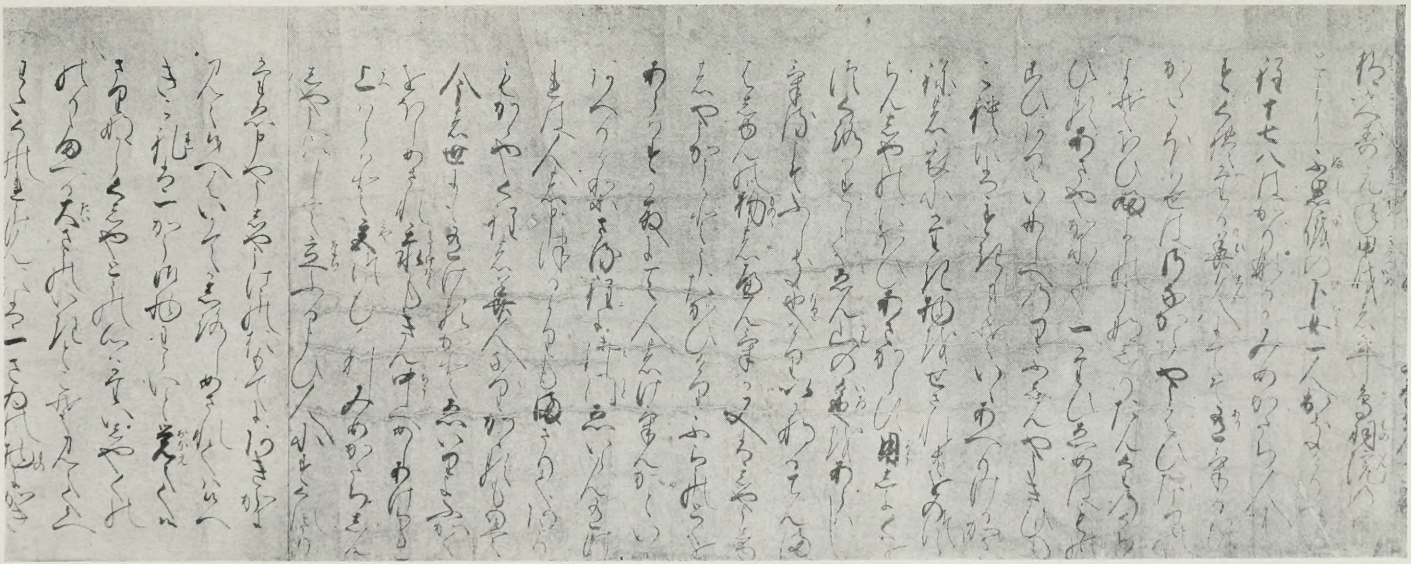
次田潤著

國文学史新講

明治書院發行



御伽草子 玉藻の前　大島雅太郎氏所藏（五四四頁參照）



玉藻前冒頭の一節　（大島雅太郎氏所藏）



修紫田舎源氏 表紙



同 右（歌川國貞畫）

（一一三三—四頁参照）



（三〇三頁參照）

鳥居清經畫 中村座場內 (假名手本忠臣藏)

國文學史新講 下卷 目次

第五篇　室町時代

圖版目次

卷頭圖版

挿入圖版

目次

第五篇　室町時代

第一章　時代の概觀

時代の區分

本書にいふ室町時代は建武中興(一九九四年)から、慶長八年(二二六三年)德川家康が將軍職を拜するまでの二百七十年間である。此の時代の初め六十年間は南北兩朝對立の世であり、それに續く二百十年間は、應仁の亂を境として前後の二期に分つ事が出來る。卽ち元中九年に南北兩朝が合一して以後の七十年間は、室町幕府の隆盛期であり、應仁以後の百四十年間は、戰國時代及び安土桃山時代である。かくて室町時代は、南北朝時代と室町時代前期と室町時代後期の三期に分たれるのである。以下此の順序を追うて時代の概觀を記述しようと思ふ。

(一) 南北朝時代

(一) 南北朝時代　建武中興は、前代の中頃以來興隆した國家觀念の覺醒と、幕府政治の積弊一掃の熱望とによつて成された、政治史上の一大改新であるが、公卿武門共に社會の改善に意を用ひなかつた爲に新政を厭ふ者が多く、遂に三年の後には再び武家政治の世となつた。延元元年十二月に後醍醐天皇が吉野に遷幸せられて以後の五十七年間は、兩皇統對立の世であつて、天下は再び戰亂の巷となり、民心の動搖思想の混亂は彌甚しかつたのであるが、尊氏が京都に幕府を開いて以後は、亂世に

も拘らず公武共に學問並に文藝を勵んだのであつて、精神文化には大いに見るべきものがあつた。而して當時思想上に最も大なる影響を與へたのは宋學と禪宗であつて、其の鼓吹に努めたのは言ふまでもなく、戰塵の外に超然としてゐた僧侶である。

南北朝の頃淨土門の諸宗も盛に活動したのであるが、殊に精神文化の開發に貢獻する所が多かつたのは禪宗である。禪宗には京都と鎌倉に所謂五山があつて、其の高僧智識は或は政治外交の顧問、若しくは學問文藝の指導者となつて盛に活動したのであるが、殊に朝廷及び足利氏の尊信を受けて、時代の木鐸となつたのは京都の五山十刹である。是より先鎌倉時代末期に、南宋に遊學した僧侶が程朱の學說を傳へた事は既に述べた通りであるが、彼等はまた南宋に於て興隆した勤王報國の思想をも傳へたのである。後醍醐天皇が天台の高僧玄慧を召して宋學を講ぜしめられ、又大燈國師妙超等に就いて禪學を修し給うたのは名高い事であつて、建武中興の偉業を志し給うたのも、一は此等の御修養に因ると言はれて居る。當時後醍醐天皇に近侍した貴紳が、盛に禪を修し宋學に親しんだのは當然であつて、日野資朝・藤原俊基・花山院師賢・北畠親房等の無比の誠忠も、其の感化に據る所が多いのである。更に北朝を見ると、漢學に秀で給うた光嚴・光明兩帝を始め奉り、博學宏才の貴紳には洞院公賢・二條良基・一條經嗣・同兼良等があり、又足利將軍鎌倉管領以下の武人中にも、學問文藝を嗜んだ者が多いのであつて、此等公武の學問も亦大體に於て宋學に傾き、詩文は唐宋を模範としたのである。なほ北朝方の貴族や武將が禪學を修めて、人格の修養に努めたのも注意すべき事である。

(二)室町時代前期

(二) 室町時代前期　南北朝時代は思想上の混亂時代であつて、精神文化には注意すべきものがあるが、物質文化には殆ど見るべきものが無かつた。元中九年に足利義滿等の奏請によつて、南北兩朝の媾和が成立して以後は、暫く天下の小康を得たので、京都を中心として始めて室町時代獨得の文化が發達した。足利將軍は尊氏以來代々禪を修め、儒學に通じ、また詩歌を嗜んだのであるが、義滿は殊に文學並に舞曲を好み、其の道の名人を保護した爲に、幸若舞や猿樂などが忽ち著しい發達を遂げた。義滿はまた莊嚴な室町の邸(花の御所)を營み、更に晩年には北山に別莊を構へて、善美を極めた金閣を建てて風流奢侈に耽つた爲に、建築美術工藝の如きも急激なる發達を遂げた。然し義滿が此等の土木工事に巨費を投じた結果として、幕府の財政は忽ち窮乏を告げ、人民は重稅を課せられて甚しく疲弊したのであつて、足利氏の衰亡の兆は既に其の黄金時代に胚胎したのである。義滿の後將軍家の威信は大いに衰へたのに反して、鎌倉管領以下各地の豪族の跋扈は益甚しくなつて、應永・永享・嘉吉の亂が引續き起つて天下は漸く亂れた。然し代々の將軍は天下の狀勢を顧みる事なく、ひたすら遊樂に耽り風流を事とし、武士庶民も亦上に傚つて豪奢な生活を送つたから、各種の藝術は益發達したのであつて、八代將軍義政の頃には東山時代の一時期を劃するに至つた。

東山時代

義政は義滿と同じく政治を顧みず奢侈風流に耽つた爲、財政は彌困難となり、人民は苛酷な收斂に苦しんだのであるが、加ふるに饑饉水旱が打續いて餓死する者が多かつた。當時後花園天皇は萬民の困窮を軫念遊ばされて、

残民爭採首陽薇　處處閉爐鎖竹扉　詩興吟酸春二月　滿城紅綠爲誰肥

といふ御製を以つて、義政の奢侈を諷諫し給うたが、反省する所がなかつた。當時將軍の威信は地に落ちて、實權は臣下の手に移つたのであるが、偶義政の弟義視と實子義尙との相續爭が導火線となつて、遂に十一年に亙る應仁の亂が起つた。かくて足利氏の運命は既に危險に瀕したのであるが、義政は應仁大亂の後更に隱栖の地を東山に求めて、閑雅幽邃な庭園を造り、義滿の金閣に倣つて銀閣を營み、内外の古器名畫を集め、又茶室を構へて頻りに茶會を催し、心ゆくまで風流を樂しんだ。當時義政に親しく仕へたのは茶道の祖と稱せられる珠光、造園・書畫・香茶・生花などに獨創的天才を發揮した相阿彌・能阿彌等であつて、是より茶の湯を中心とする各種の藝術は忽ち興隆して、上流武士の間に流行したのであるが、殊に美術工藝は明から傳はつた藝術の影響を受けて異常な發達を遂げた。即ち繪畫には雪舟・狩野元信(古法眼)の如き天才が現れて、それぞれ獨自の靈筆を揮ひ、金工には後藤祐乘、陶工には祥瑞五郎太夫の如き名匠が輩出して、支那に於て發達した美術工藝の粹を取入れて、此の時代特有の光彩を發揮した。東山時代の文化はかくの如く燦然たる光を放つたのであるが、義政が其の後半生を風流三昧に過したのは、内は夫人富子及び其の近親の專橫に惱まされ、外は豪族の跋扈に苦しめられた爲の自暴自棄の所爲であり、又遣るせない胸中の憂愁苦悶を晴らす爲の慰安の一手段であつた。又當時公卿を始めとして武士庶民が、一般に華美を好み遊樂に耽つたのも、末世に生を享けた苦惱を、暫時なりとも忘れようとする爲であつた。從つて當時の藝術を代表する茶の湯・猿樂・水墨畫

の如きものには、時代精神が最もよく反映して居るのであつて、其の中心生命とする幽玄思想は、前代のものに比して內容を異にして、醜惡な現實生活を回避しようとする、超俗的隱逸的傾向が著しいのである。

(三)室町時代後期

(三)　室町時代後期　應仁の亂以後の戰國時代から安土桃山時代に至るまでは、一括して室町時代の後期と稱する事が出來る。應仁の亂は花の都を擧げて焦土と化したのであつて、戰後の慘狀は

汝や知る都は野邊の夕雲雀あがるを見てもおつる涙は　　飯尾彥六左衞門尉作歌　應仁記所載

の一首によつても想像せられる。而して此の大亂が文學の上に及ぼした慘害は、一代の碩學であり且つ古書の蒐集家であつた、一條兼良の祕庫に收藏せられた七百餘合の典籍が、兵馬に蹂躙せられた一事によつても思半ばに過ぎるのである。而して應仁以後京都は絕えず權力爭奪の戰場となつたから、帝都の文化は全く地を拂つたのである。

戰國時代

然し戰國時代に京洛の戰亂を避けて地方に下つた公卿や僧侶は、中央の文化を其の地に扶植し、各地の大名も亦政治經濟に意を用ひると共に、文教の發達に保護を加へる者が多かつたから、地方の文化は著しく興隆した。當時經濟都市として最も殷賑を極めたのは、中國の山口、關東の小田原、近畿の堺である。山口は大內氏の財源地であつて、內外文物の集散地となつたばかりでなく、學問文藝も亦盛に行はれたのであつて、此の地に興隆した漢學は四國九州に傳播せられた。次に小田原は關東に雄名を轟かした北條氏の城下であつて、商業の繁榮は山口と對峙し、其の地で發達した文化はやがて

後年江戸に移されたのである。又堺は應永の頃大内義弘が近畿の要港として之を開いて以來、外來交物を輸入して殷盛を極め、戰國時代には一の獨立都城となつた爲に、京都の公卿僧侶を始め、一藝一能に長じた者で、此の地に難を避けた者が極めて多かつたから、此の地に發達した學問文藝は、後の江戸時代前期に於ける上方文化の源となつたのである。

安土桃山時代

前後一百年に亙る戰國亂離の世に、京都の文化が潰滅して地方に傳播せられた事は、右に述べた通りであるが、織田信長が足利幕府を倒潰し、皇室を奉戴して海內統一の大計を建てて以來、京都は漸く活氣を回復した。信長の大志は不幸にして不慮の災厄に遭つて挫折したけれども、豐臣秀吉は信長の遺業を繼いで天下を統一し、更に進んで海外遠征の壯圖を企て、又南蠻貿易を奬勵した爲に、新興文化は忽ち發達の途に就き、美術の方面では桃山時代の偉觀を呈した。桃山時代の藝術には東山時代の流風餘韻を存して、千利休の茶道が都鄙に流行し、又一時衰退してゐた能樂なども復興せられたのであるが、時代の趣味を最もよく代表するものは造形美術である。東山時代は繪畫によつて代表せられるが、桃山時代は建築中心の時代であつて、繪畫彫刻などは裝飾美術として獨得の發達を遂げた。而して當時の美術は、秀吉の如き豪放豁達な英雄の保護の下に、新興武士社會の趣味を基調として興つたのであるから、東山時代のものに比して全く傾向を異にして居る。秀吉は豪奢を好み、初め伏見城を築き、更に結構壯麗な大阪城や聚樂第などの大建築を起して世を驚かしたのであつて、其の金壁屏障に豪宕豐麗な彩筆を揮つたのは、狩野永德（元信の孫）と其の高弟の狩野山樂（木村光賴）である。永德・山樂等の

畫風は絢爛な色彩、雄大な構圖、豪快な筆致を特徴とするのであつて、城廓や書院造の裝飾に最も適して居るのであるが、其の他彫刻・金工・蒔繪・陶器などにも名匠が輩出して、卓拔な意匠と精巧な手法を發揮した。此等の美術に現れた特徴には、明末の好尚から受けた影響が多いのであるが、根柢となつて居るのは、素朴單純を好み豪快鮮明を喜ぶ、地方武士の純日本趣味である。かくて當時の造形美術には、國民の發展的獨創的な精神が遺憾なく反映して居るのであるが、文藝の方面には未だ之を見る事が出來なかつた。併しやがて起るべき江戸時代の文藝思潮の源は、此の時代に萌して居るのである。要するに安土桃山時代は、戰國時代の破壞の後を承けて、純日本精神の復活による建設時代に入つたのであつて、室町時代の大團圓であると同時に、江戸時代の序幕となつて居るのである。

室町時代の文學

室町時代の概觀を終つたから、當代に於ける國文學の一般傾向に就いて述べて置く。室町時代の文學界に起つた著しい現象は二三に止まらないのであるが、最も著しいのは下剋上の風潮に支配せられて、文學一般が民衆化し、從つて新形式の文藝が續出した事である。平安時代以來國文學の上位に置

抒情文學

かれた和歌は、當代に入つて益衰退し、勅撰集は只惰力によつて引續き撰進せられたけれども、室町幕府時代になつて間もなく斷絶し、次いで歌道の門閥も亦實權を失つて、和歌並に歌學は武士僧侶の手に移つた。和歌の中心が地下に移つて以後は、時代と共に益振はなくなつたのであるが、之に代つて上下に流行したのは連歌である。連歌はもと堂上歌人の間に餘技として弄ばれたものであるが、漸

北朝頃二條良基の保護の下に興隆して以來、著しい發達を遂げたのであつて、是より連歌師の地位は忽ち向上して、文壇の實權を握るやうになつた。室町時代の連歌は救濟によつて興隆し、宗砌等によつて革新せられ、宗祇に至つて完成せられたのであつて、戰國時代には他の文藝を壓して上下都鄙に流行した。併し宗祇以後は廣く行はれたのに拘らず、其の實質は益低下したのである。かくて連歌が行詰つた時新たに起つたのは、山崎宗鑑や荒木田守武等の俳諧連歌である。俳諧連歌は卑俗滑稽を旨とする平民文學であつて、近世に於ける俳諧の源泉である。

敍事文學

轉じて敍事文學を見ると、南北朝の頃には、前代文學の系統を引きながら時代思想を反映する作品に、『增鏡』『神皇正統記』『太平記』『徒然草』などが現れたが、室町時代になると、庶民階級に周く知られて居る典型的武人、若しくは史上の著名な事件を取り扱つた新樣式の『義經記』と『曾我物語』が現れた。『義經記』と『曾我物語』は、從來續出した長篇の物語から短篇の物語に移る過渡期の產物であつて、其の說話は時代と共に益民衆化せられて、御伽草子・舞の本・謠曲などの好題材となり、所謂判官物・曾我物が流行するやうになつた。御伽草子は前代まで行はれた王朝式の物語に代つて、廣く庶民階級に親しまれた一群の低級な物語であつて、舞の本も其の一部である。此等は從來の歷史物語・戰記物語・說話文學などから取材し、平易通俗な文章で記した、說敎的若しくは敎訓的な短篇小說であつて、讀者は婦女童幼である。御伽草子は庶民文學の重要なものであつて、其の特質としては類型的・卑俗的・迷信的・娛樂的・說敎的である事を擧げ得るのであるが、なほ童幼に讀み聞かせる口誦文學の性質を

帶びて居る事、及び其の一部のものが語物として行はれた事は注意すべき點である。

室町時代の新興藝術の中で最も重要なものは猿樂能と狂言である。猿樂能は前代に行はれた舞踊本位の延年舞・田樂・曲舞・猿樂などの長所を綜合して成つた貴族趣味の樂劇であり、狂言は田樂や猿樂の滑稽な物眞似の方面を承けた平民劇であつて、能の間に挿んで演じられた。而して能の詞章は謠曲であり、狂言の臺詞(せりふ)を記したものは狂言本である。謠曲の素材は御伽草子と共通する所が多く、趣味に於ては連歌と共通性を有して居るのであるが、狂言は庶民の現實生活から取材し、文章も當時の口語を用ひ、趣味に於ては俳諧若しくは狂歌に似た點があるのであつて、兩者は全く對照の妙を得て居る。謠曲は當代の文藝思想を代表する幽玄を生命とする古典的な劇詩であるが、狂言は寫實を主義とし卑俗滑稽を旨とする平民劇であつて、其の演出法も極めて自由であるから、劇文學としては謠曲よりも更に發達した性質を備へて居る。從つて後の戲曲脚本の發達に及ぼした影響は、謠曲よりも狂言の方に多いのであつて、歌舞伎芝居を狂言と呼んだのも偶然でない。當時の劇文學にはなほ幸若舞の詞即ち舞の本がある。併しこれは戰記物語から取材した幼稚な敍事的語物であつて、舞の筋を語る事を目的としたものであるから、純然たる劇文學とは言ひ難い。

室町時代の文學の特質

以上述べたやうに、室町時代の文壇には空前の新陳代謝が起つたのであつて、近世の平民文學の萌芽は悉く此の時代に發生したのである。而して當時の新興文學として最も注意すべきものは、連歌・御伽草子・(舞の本を含む)謠曲・狂言の四種である。此等は時代思潮の强烈な力に壓迫せられて、それぞれ一定の

型に塡まつたのであつて、形式内容共に類似したものが一團となつて現れたのである。從つて此等の文學は、其の中の一つ一つを取り出して考察する時には、變化に乏しく、文學的價値の乏しい感が起るが、是を一群の庶民文學として眺める時には、近世的な國民生活の諸相を觀取する事が出來るのであつて、國文學史上重要な地位を占めて居る。以下當代の新興文學に現れた文學的思潮の重要なものに就いて、簡單に説明を試みようと思ふ。

思想の特徴

室町時代の文學に共通する思想としては、佛教思想殊に民間信仰や迷信が浸潤して居る事、傳統を重んじ型を尊ぶ思想が漲つて居る事、古典文藝に對する憧憬が盛である事、佛教若しくは儒教の教訓的傾向がある事などを擧げる事が出來る。尤も此等の思想は文學の種類を異にするに從つて、其の程度又は現れを異にして居るのは言ふまでもない。例へば連歌や謠曲の如き、主として上流社會に行はれたものには、古典趣味と禪宗思想とに立脚する幽玄思想が横溢して居り、御伽草子や狂言の如き、庶民的要素の豐かな文學には、神佛の信仰迷信若しくは佛教の説教的色調が濃厚に現れて居る。今幽玄思想と民間の宗教思想とに就いて聊か述べて置かうと思ふ。

幽玄思想

幽玄思想は平安時代末期以來、文藝思潮の重要なるものとなつて居るのであるが、室町時代になると啻に文學に限らず、すべての藝道に通ずる思想となり、又其の特質は前代に發達した禪宗思想や武士的精神などと融合して、漸次平淡化したのである。元來幽玄思想は、古典的な華麗優艶の中に靜寂な詩境を見出さうとするのであつて、室町時代の文學に於てこれを追求した先驅者としては、兼好・良

基・救濟等を擧げ得るのであるが、正徹の和歌、宗砌・宗祇等の連歌、世阿彌の猿樂能などに至つて彌圓熟し、且つ廣く文壇を風靡するやうになつた。其の後戰國亂離の世になると、一般人心を支配した超世的隱遁的傾向の影響を受けて、古淡閑寂を喜ぶやうになり、室町末期には千利休の茶道に見るやうに、日常生活までも統一するやうになつた。

宗教思想

文藝上の幽玄思想の發達には、佛教思想の影響が著しいのであるが、これが現實生活と結び付いたものは、上下の人心を支配した所願成就の信仰若しくは迷信である。戰亂相踵ぎ人心の動搖が甚しかつた當時に、現世祈禱の宗教心が一般人心に浸潤したのは當然であつて、當代の文學は殆ど神佛信仰を勸める爲の宣傳の具に供せられた觀がある。例へば謠曲に於ては、英雄佳人の迷へる魂魄が一行脚僧の教化によつて忽ち濟度せられ、一草一木の精靈さへも、一遍の讀經によつて忽ち佛果を得るとせられて居る。又御伽草子に於ても、神佛の靈驗功德によつて、富貴榮達を得る事を說いた作品が極めて多いのであつて、此等の草子の終には、此の物語を聞く人は、必ず觀音の名號を十返づつ唱ふべきであると云ひ、又此の草子を讀むことは、即ち讚佛乘であるとさへ說いて居る。かくて佛教思想は文學上の作品を支配したのであるが、なほ其の神祕思想は傳統尊重の精神と結び付いて、古今傳授其の他諸藝道の傳授思想となり、また古典研究に影響したものは、解釋上に佛教的意義を附會するに至つたのである。要するに室町時代の文藝は殆どすべて佛教思想によつて支配せられたのである。

第二章　和歌の衰運

一　南北朝時代

室町時代の初期、即ち建武中興以後の凡そ六十年間はいはゆる南北朝時代であつて、文學は萎靡して振はなかつた。此の間に和歌の勅撰集は前代に引續いて撰ばれたけれども、因襲に流れて生氣がなく、遂に南北兩朝の和合の後なる後花園天皇の御代に至つて、全く絶えてしまつた。

風雅集

此の時代の最初の勅撰集は、前代の『續後拾遺集』に次ぐ第十七代集の『風雅和歌集』（二十巻）であつて、花園法皇御親ら光明天皇の貞和二年（南朝の後村上天皇の正平元年）に撰び給うたのである。此の集が花園院の御自撰である事は『勅撰目錄』や『拾芥抄』などに記されて居るのであるが、近來和田英松博士は『園大暦』（中園太政大臣公賢の日記）の貞和元年四月十七日の條下に、「今日雜訴沙汰有レ催、仍未刻參院〇中略其次勅撰事、人々詠歌有ニ付賜事一者可レ令レ奏、今度爲ニ御自撰一之間、不レ可レ有ニ撰者之儀一歟」とあるのを引いて、當時院中で政務を聞こしめされたのは光嚴上皇であるから、右の文中に御自撰とあるのは、同上皇を申すのであつて、從來此の集を花園院御自撰と見たのは、和漢の序文が花園院の宸作である爲に誤つたのであらうと云つて居られる。（皇室御撰之研究參照）かくて撰者に就いては異説があるのであるが、花園院も光嚴院も共に持明院統であり、又御歌風は京極派を承け給うたのであるから、此の集には爲兼の流を汲んだ人々の歌

を多く入れ給うたのである。試みに三十首以上採られた歌人と其の歌數を擧げて見れば、伏見院の八十五首を筆頭として、永福門院六十九首、花園院五十三首、爲兼五十二首、爲兼の妹從二位爲子三十八首、定家三十五首、後伏見院三十四首、光嚴院（後伏見院皇子）三十首、といふ順序である。從つて此の集は『玉葉集』と共に、此の前後の勅撰集中では最も清新な歌に富んで居る。左に花園院と光嚴院の御歌の中から、特に勝れて居ると拜せられるものを掲げて置く。

花園院

梢より落ち來る花ものどかにて霞ぞおもき入相の聲
夕立の雲飛びわくる白鷺のつばさにかけて晴るる日の影
空晴れて梢色濃き月の夜の風におどろく蟬の一聲
雲遠き夕日のあとの山ぎはに行くとも見えぬ雁のひとつら
風になびく尾花が末にかげろひて月遠くなる有明の庭
我が心すめるばかりに更けはてて月を忘れて向ふ夜の月

光嚴院

つばくらめ簾の外にあまた見えて春日のどけみ人影もせず
風わたる田の面の早苗色さめて入日のこれる岡の松原
草むらの蟲の聲より暮れそめて眞砂の上ぞ月になりぬる

夜鳥は高き梢に鳴き落ちて月靜かなるあかつきの山

さて『風雅集』は爲兼が撰んだ『玉葉集』と共に最も見るべき集であるが、二條家の人々からは非難せられて、「風體わろきは風雅、歌のわろきは玉葉」と言はれ、又此の二集は歌道の邪路を踏むものであるとして、讀む事を禁じたのである。是より先爲兼は歿して嗣子がなく、其の流派には花園院・光嚴院を措いてはもはや見るべき歌人は殆どなく、統率者であらせられた花園院の崩御と共に、京極派は凋落した。これに反して從來大覺寺統の庇護を蒙つてゐた二條家には、勝れた歌人が現れなかつたが、南北朝頃になつて以來、志を變じて持明院統（北朝）に仕へ、屢勅撰集の御沙汰を蒙り、其の門流は長く榮えた。

新千載集

即ち二條爲世の孫爲定は、後光嚴天皇の勅を奉じて、延文四年（南朝の正平十四年）に『新千載和歌集』（二十卷）を撰び、其の後數年を經て二條爲明（爲藤の子）は、同じく後光嚴天皇の勅命を蒙つて勅撰の事に從つたが半ばで歿したので、二條派の歌風を承けた頓阿が其の後を繼いで、貞治三年（南朝の正平十九年）十二月に至つて『新拾遺和歌集』（二十卷）を撰定した。

新拾遺集

其の後二十年を經て二條爲定の子爲遠は、後圓融天皇の仰せを蒙つて撰者となつたが、中途で世を去つたので、二條爲重（爲冬の子）が其の後を承けて從事し、後小松天皇の永徳三年（南朝の弘和三年）に撰上し、更に訂正を命ぜられて翌至徳元年（南朝の元中元年）に奏覽したのは『新後拾遺和歌集』（二十卷）である。

新後拾遺集

新千載・新拾遺には序が無かつたが、此の集には永徳二年三月二十八日の日附のある二條良基の假名の序が添へてある。良基は當時攝政太政大臣であり、且つ一流の歌人であつて、此の集には最も多くの歌を採られて居る。良基の傳は更に下に述べるつもりである。

吉野朝廷の和歌

南北朝騷亂の世にあつても和歌はなほ盛であつて、勅撰集は次々に撰ばれたのであるが、『風雅集』を除く外は二條家又は其の流を汲んだ歌人が撰んだものであるから、何れも古格を墨守して平弱であり陳套であつて、殆ど見るべきものが無かつた。而して『風雅集』以後の勅撰集は足利將軍の奏請に基づき、持明院統の勅命によつて撰定せられたものであるから、吉野朝廷の和歌は殆ど顧みられてゐない。翻つて吉野朝廷を見ると、後醍醐・後村上・長慶三天皇を始め奉り、宗良親王の如き勝れた歌人が居られたから、兵馬倥偬の際にも拘らず、毎に歌會歌合を催し給ひ、又屢百首七百首千首の類を召されたのであつて、吉野朝廷の和歌は中々盛であつた。當時吉野に於ける君臣の詠歌は『新葉和歌集』によつて代表せられるのであるが、此の集に先立つて行はれた歌合と千首和歌の、代表的なものに就いて簡單に述べて置く。

五百番歌合

元弘建武以來吉野朝廷に於て、頻りに歌合百首千首等の御催があつた事は、『新葉集』に採られたそれらの和歌の詞書によつて明かであるが、『新葉集』の撰定に最も近い頃に行はれ、従つて歌風も大體似て居るのは、天授元年の『五百番歌合』と翌天授二年の『長慶院御千首』である。『五百番歌合』（群書類從所收）は一名を『南朝五百番歌合』と呼ばれて居る。長慶天皇を始め奉り、親王公卿以下男女二十人の歌を春百番、夏五十番、秋百番、冬五十番、戀百五十番、雜五十番、都合五百番合せたのであつて、判者宗良親王は和歌を以て判を下されて居る。此の歌合は當時行はれた大規模のものであるばかりでなく、『新葉集』にも多く採られて居る點から見ても注意せらるべきものである。次に『長慶院御千首』は天皇

長慶院御千首

東宮（後亀山天皇）宗良親王以下の歌人が、同じ題で各千首の歌を詠んで、宗良親王に批判を求められたものである。現存する宗良親王の『詠千首和歌』及び藤原師兼の『詠千首和歌』（共に群書類従所收）は此の時の千首であらうと思はれるが、其の他の歌人のは宗良親王の千首の巻末に其の一部分が抄録せられて居り、又『新葉集』の中にも採られて居る。『五百番歌合』といひ、又此の千首といひ、共に宗良親王が批判を加へられたのは、

九六後醍醐天皇
├─九七後村上天皇
│　├─九八長慶天皇
│　└─九九後亀山天皇
└─宗良親王

親王が當時南朝方の歌壇に於ける第一人者であらせられた爲である。

宗良親王

宗良親王は後醍醐天皇の第八皇子である。御幼少の頃佛門に入つて尊澄法親王と申され、妙法院に住して天台座主となり給うたが、南北兩朝分立して騒亂の世となるに及んで還俗し給ひ、東海東山北陸の各地に轉戰せられた事は世に知られて居る。右に述べた千首和歌の事があつて後、再び出家せられたのであるが、薨去の年月は詳かでない。親王の御生母は二條爲世の女爲子であり、歌道の師となつたのは、從兄弟の爲定であるから、御歌風は自ら二條家の流を汲んで居られるのであるが、征東將軍となつて王事に奔走せられ、又常に時勢に就いて慨歎せられたから、御歌には尋常の歌人と異なつた特徴がある。

李花集

御家集には『李花集』二巻（群書類従所收）がある。一名を『中務卿宗良親王御集』といふ。集中の御歌は大部分が王事に盡瘁せられた頃に、實地に詠まれたものであつて、言々句々憂憤悲痛の御聲である。左に『李花集』の中から注意すべき御歌を抄出して見よう。

夕暮はみなともそこと知らすけの入海かけて霞む松原

霞めただいづれ都のさかひとも見ゆべき程の旅の空かは

入るをさへ惜しまでぞ見る夜半の月山のあなたを都と思へば

思ひ出づるこぞの八月の秋の月また曇れとて濡るる袖かな

君がため世のため何か惜しからむ捨ててかひある命なりせば　（新葉）

思ひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身なれむものとは　（同）

和歌の浦に友なき千鳥おくれゐて獨なくねを誰に聞かせむ

新葉集

次は前に其の名を擧げて置いた『新葉和歌集』（國歌大觀所收）の事である。其の成立に關しては富岡謙藏氏所藏古寫本の、「應永三十二年惠梵（後村上天皇の皇子師成親王の御法名）」の奧書に、「斯集、南朝慶壽院法皇御在位之時、詔於予叔父中務卿宗良親王而所被撰也。」とあるのに據つて明かである。即ち長慶天皇（慶壽院法皇）の御在位の時に、宗良親王に勅して撰ばしめられたものであるが、其の撰集の由來に就いては、從來『歷代和歌勅撰考』の說く所に從つて、當時北朝方で撰ばれた勅撰集に、南朝方の君臣の歌が顧みられなかつたのを遺憾に思召し、又一方に於ては、それ等の撰者即ち爲定・爲明・爲遠等は宗良親王と御緣故の深い人々であるに拘らず、足利氏に憚つて親王の御歌を一首も入れなかつたのを憤り給うて、自ら此の集を撰定せられたのであらうと考へられて居る。尤も最近大野木克豐氏は、後村上天皇が御在位中撰集の御志を持たせられ、それが騷亂の爲に實現せられなかつた事が、此の集の撰ばれ

特質

る動機に、一つの刺戟を與へたであらうと言はれたのは、注意すべき意見である。（日本文學所載「新葉和歌集」參照）さて撰集の由來は右に述べた通りであるが、是が一先づ完成した年月は詳かでない。撰集が成つて奉つた時、勅撰に準ずべき綸旨があつたのは弘和元年十月であつて、更に訂正して奏覽したのは其の年の十二月三日である。

『新葉集』に收められた歌は、其の序によれば、元弘の初から弘和の今に至るまで、南朝三代（後醍醐・後村上・長慶の御三代）五十年間の君臣の作、千四百餘首を選んで二十卷としたのである。集中で歌數の多いのは、後村上天皇の百首、撰者宗良親王の九十九首、長慶天皇の五十三首、妙光寺内大臣家賢（花山院師賢男）の五十二首、文貞公師賢の四十九首、後醍醐天皇の四十五首、冷泉入道前右大臣公泰の四十五首、前中納言爲忠の四十二首、尊良親王の四十首等である。尤も宗良親王の九十九首は御名の明記せられた歌の數であつて、此の外に讀人不知の歌で『李花集』其の他によつて、明かに親王の御作歌と認むべきものが五十餘首あるのであるから、實際に於ては親王の御歌の數が首位を占めて居るのである。かくて此の集は從來の勅撰集が、古今に亙つて廣く名歌を收めて居るのと異なつて、時代を當代に限り、而も南朝の君臣の作歌のみを採つて居るのであるが、なほ其の序文に萬葉から續後拾遺までを十七集と數へて、それ以後の北朝の勅撰集を認めてゐない所に、撰定の精神が明示せられて居る。

さて集中の作歌は、歌書よりも軍書に悲しき吉野の行在所に於ける君臣が、感懷の動く儘に詠出したものであるから、京都の月卿雲客の詠歌とは全く色調を異にして居る。其の歌風は大體に於て二條

風であつて、古格に滯んだ平弱なものが少くないのであるが、思想は概ね慨世憂國の氣に滿ち、風格も多くは悲壯激越である。集中の和歌には、『李花集』も同樣であるが、長い詞書のあるものが多いのであつて、國史研究の資料とすべきものが少くない。集中の歌人で注意すべきは、南朝三代の天皇を始め奉り、宗良親王・尊良親王・後村上天皇の中宮嘉喜門院、及び執政諸大臣等であるが、今は御製の中で殊に勝れて居ると拜せられるものを掲げ奉らう。

後醍醐天皇

都だにさびしかりしを雲晴れぬ吉野の奧の五月雨のころ
聞きわびぬ葉月ながき夜の月の夜寒に衣うつこゑ
臥しわびぬ霜寒き夜の床は荒れて袖にはげしき山おろしの風
まだ馴れぬ板屋の軒の村時雨おとを聞くにも濡るる袖かな
身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心の治め難さを
物思はで過ぎぬるかたの年月はいかに寢し夜の夢にかあるらむ

後村上天皇

かつ消えて庭にはあともなかりけり空にみだるる松の沫雪
一木まづ霧のたえまに見えそめて風に數そふ浦の松原
都をも同じ光と思はずば旅寢の月をたへて見ましや

とりのねに驚かされて曉の寢覺しづかに世を思ふかな
あはれはや浪をさまりて和歌の浦にみがける玉を拾ふ世もがな

長慶天皇

我が宿とたのまずながら吉野山花になれぬる春もいくとせ
風さむみ朝日もらぬ山陰に霜ながら散る木々のもみぢ葉
み吉野は風冴え暮れて雲間より見ゆる高嶺に雪はふりつつ
なにとかく濁りゆく世ぞ石清水人の國とは神もおもはじ
治まらぬ世の人ごとのしげければ櫻かざして暮らす日もなし
淋しさも聞きなれなばと慰めて思ひもいれぬ松風のこゑ

後醍醐天皇

後醍醐・後村上・長慶三帝が、王政復古の爲に幾多の辛酸を嘗めさせられた事は、今更申すまでもない事であるから、玆には學問文藝の方面に關する事を略述して置く。後醍醐天皇は儒學並に禪學を研修し給うたのであつて、英邁剛毅に渡らせられたのは、此等の御修養から得させられた所が少くないと思はれる。天皇は詩文に長じて居られたのであるが、御製集は傳はつてゐない。尤も御和歌は『新葉集』にあるものの外に、風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺等に合計四十二首見えて居る。建武中興の後には後世の龜鑑とする思召を以つて『建武年中行事』三卷『日中行事』一卷を著し給うた。此等は恒例及び日々の朝儀を記し給うたものであつて、順德院の『禁祕御抄』と共に斯道の寶典とせられて居る。後村

後村上天皇

上天皇は後醍醐天皇の第四皇子で、御名を義良（のりなが）親王と申した。延元四年八月父帝崩御の時御年十二歳で御卽位になり、正平二十三年に寶算四十一で吉野に於て崩御になつた。天皇も和歌に秀でさせられたが御製集は傳はつてゐない。『新葉集』に「百首歌よませ給うて前大納言爲定の許へ遣されける中に」と記された前掲の「あはれはや」以下三首の御製があるのを拜すると、和歌撰集の御思召があつたやうに思はれる。（大野木克豐氏の說に據る。）御製は後醍醐天皇の御製と共に『列聖全集』に收められて居る。

長慶天皇

又長慶天皇は後村上天皇の皇子で御名を寬成（ひろなり）親王と申し、後龜山天皇の御兄君である。學問を好ませられ又和歌に長じ、物語にも精通せられたのであつて、源氏の註釋に『仙源抄』一卷（群書類從所收）の御著がある。題名は仙洞御撰の源氏の抄の意である。此の書は『源氏物語』の詞の伊呂波引の辭書の鼻祖であるが、其の跋には定家の假名遣に對する御批判があつて、國語學史上に於ても注意すべき御著である。

二條派の歌人

吉野朝廷を中心とする和歌は略ぼ之を述べ終つたから、再び京方の歌壇に就いて考察しよう。南北朝の頃勅撰集の撰者となつた二條家には、家學を繼承するに足る歌人が無かつたから、其の歌學は却つて二條派を汲んだ、頓阿及び二條良基等によつて維持せられた。

頓阿

頓阿（文中元年寂八十四）は下野守二階堂光貞の子で、俗名を貞宗といひ、二條爲世に就いて二條派の歌學を承け、一代の尊信を受けた。比叡山と高野山に學んで學德共に高く、光嚴天皇の知遇を蒙り、また足利尊氏・同義詮・二條良基等とも親しく交はつた。頓阿はかねて西行を慕ひ、東山の雙林寺のほとりの西行の舊蹟に草庵を結んで、悠々自適して詠歌に耽つてゐた。歌學の書に『井蛙抄』六卷と、二條良基が記し留めた『愚問賢注』一卷（共に續群書類從に收む）

があり、(此の外に『水蛙眼目』一卷群書類従所收があるが、これは『井蛙抄』の雜談の部に序を添へて一卷としたものである。)家集に『草庵和歌集』四卷『續草庵和歌集』一卷共に校註國歌大系所收がある。續集には長歌・物名・折句・旋頭歌・廻文歌・誹諧歌・連歌百韻などをも收めて居る。頓阿は兼好・淨辨・慶運と合せて當時の和歌四天王と稱せられた。孰れも平明穩健を旨としたのであつて、勝れた歌人とは言ひ難いのであるが、傳統保守の外に何等の能も無かつた當時の歌壇に於ては、群を拔いてゐたのである。此の中で注意すべきは頓阿と兼好である。頓阿の作歌を見ると、二條派の短所もあるが、概ねなだらかな調で稍清新な想を詠んで居り、殊に自然を歌ふ事を得意としたやうである。

朝な朝な立ち出でて聞けば春の野のかすめる方に鶯の鳴く

初瀨山をのへの鐘の聲のうちに梢の花の色ぞ明けゆく

百舌のなく尾花が末の夕日かけ殘るもさびし秋の山里

月やどる澤田の面にふす鴫のこほりより立つあけがたの空

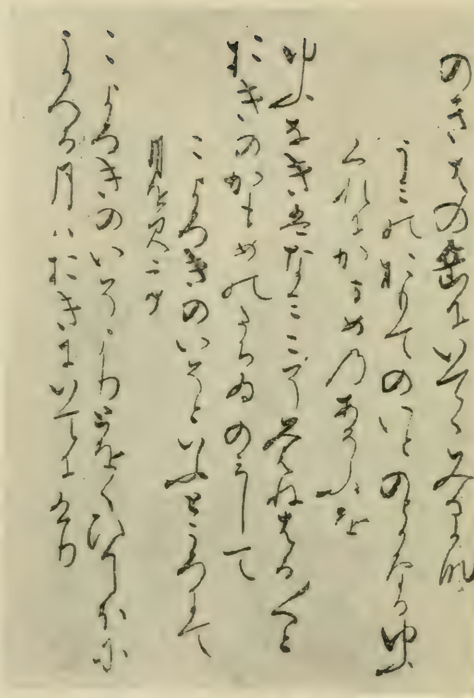
寢ざめする我が涙をもさそひけり鹿の音おろす峰の秋風

山かげの比良の湊に舟とめて月待つほどに小夜ふけにけり

此等によつて其の歌風を窺ふ事が出來る。頓阿は二條家の歌學を傳へた爲に、二條派の人々からは中興の祖と稱せられ、其の家集は長く模範とせられたのである。『草庵集』が江戸時代になつても一部の歌人の間に尊重せられた事は、梅月堂宣阿の『草庵集蒙求諺解』二十卷、櫻井元茂の『草庵集難注』一

卷、本居宣長の『草庵集玉箒』九卷及び『續草庵集玉箒』一卷の如き、註釋書や類題類句の類が著作せられたのを見ても察せられる。

頓阿に次いで名の聞えた歌人は『徒然草』の作者で知られてゐる兼好法師（觀應元年、正平五年、寂六十九）である。其の傳記は第六章に述べるとして、玆には專ら彼の家集によつて、其の生活並に歌風を略述して置く。兼好の歌集として後世に傳へられたものは、只自撰の家集があるのみである。自撰家集には『群書類從』所收の『兼好法師集』一卷の外に、寬文四年の刊本があるが、此等の原本と認められるのは前田侯爵家襲藏の自



兼好自筆家集（前田侯爵家藏）
（尊經閣叢刊に據る）

筆本である。此の書は諸所に兼好自ら手を下した字句の修正や歌の加除の跡があつて、流布本の原形を窺ひ得るばかりでなく、彼の筆蹟を見るべき逸品である。所收の和歌は二百八十五首であつて、流布本に比して多少の出入がある。兼好家集には詞書のある歌が多いのであつて、それによれば二條爲

世に和歌を學び、歌才によつて後宇多院の知遇を蒙つたばかりでなく、多くの親王家から和歌を召され、又二條家の爲世・爲藤・爲定や、平貞直等の家の歌合に招かれて歌を詠んで居る。其の他和歌を贈答した交友の中には、頓阿・淨辨及び東寺の長老道我僧正などがあつた。集中の和歌を見ると、彼は出家の前後に煩悶の多い日を送つたやうであり、又近畿地方は素より、東國地方を遍歷し、なほ雙岡に草庵を結んだ外に、法輪・修學院・横川などにも閑居してゐたのである。さて兼好の歌は二條派の流を汲んだのである。「手枕の野邊の初霜さゆる夜のねてのあさけに殘る月影」の詠歌によつて、手枕の兼好と呼ばれた事は世に知られて居る。其の家集中には憂世を歎じた作が多く、又敍景の作中に傑出したものが多い。

聞きてこそ驚かれぬれ雪のうちも待つべかりける鶯の聲
久方のくもゐのどかに出づる日の光ににほふ山櫻かな
逢坂の關吹き越ゆる風のうへに行方も知らず散る櫻かな
都にて思ひやられし富士のねを軒端の岡に出でて見るかな
ともすれば鳰の浮巣のうきながら水隱れ果てぬ世をなげくかな
いかにして慰むものぞ世の中を背かですぐす人に問はばや
住めばまた憂世なりけりよそながら思ひしままの山里もがな
山里はとはれぬよりも訪ふ人の歸りて後ぞ寂しかりける　（兼好法師集）

此等が佳作である。

二條良基

頓阿と共に二條家の歌風を振興したのは二條良基（嘉慶二年薨六十九）である。良基は關白道平の子で、光嚴・光明・崇光・後光嚴・後圓融の五帝に歴仕して關白となり、永德元年には太政大臣に任ぜられ、同二年には攝政となつた。儀式典禮に精通し、文學の才に富み、且つ文藝の一大保護者であつたが、殊に連歌史上に遺した功績は最も顯著である。（五〇二頁參照）歌學の著には『近來風體抄』一卷（續群書類從に收む）があり、作歌は『風雅集』以下の勅撰集に五十八首採られて居る。其の歌風は頓阿に似て居るが、伎倆に於ては稍劣つて居る。

尊氏及び義詮

更に將軍家を見ると、尊氏・義詮は共に和歌を嗜み、朝廷の御歌會の席に列なり、又百首の歌を詠んで居る。尊氏は爲定に就いて歌道を學んだのであつて、家集の『等持院殿御集』一卷の外に『等持院殿百首』一卷（共に續群書類從に收む）がある。又義詮には『寶篋院殿御百首』一卷（續群書類從に收む）が傳はつて居る。なほ尊氏の歌は『續後拾遺集』以下の勅撰集に、合計九十首許り入れられて居り、義詮のは風雅から新後拾遺までに、五十餘首採られて居る。

私撰歌集

南北朝の和歌を終るに當つて、當時の私撰歌集に就いて一言して置く。此の頃撰せられたと思はれる主なるものは、『群書類從』に收められた『柳風和歌抄』、（現存五卷）『續現葉和歌集』十卷、『臨永和歌集』十卷、『藤葉和歌集』、（二十卷中現存六卷）及び『續群書類從』所收の『安撰和歌集』（二十卷中現存八卷）等である。『柳風和歌抄』以下の四集は、鎌倉中期頃から後醍醐天皇の御代頃までの歌を撰んだものであるが、撰定年代も撰者も

法樂和歌で、應安二年六月十三日に叡覽に供した事が奥書に見えて居る。
其に未詳である。最後の『安撰和歌集』は安祥寺の興雅僧正が、其の寺の鎮守宮に奉納する爲に撰んだ

二　室町時代前期

元中九年に南北兩朝が合一して以後の二百十年間は、所謂室町時代であつて、國文學史上では應仁の亂を境として前後の二期に分つて見る事が出來る。其の前半期の凡そ七十五年間は、二條家がいよいよ衰へたのに對して、今川了俊・僧正徹等の反二條派の歌人が現れて、歌壇の牛耳を執つた時代である。今反二條派の歌人に就いて述べるに先立つて、勅撰集の事を述べて置く。

勅撰和歌集の斷絶

南北朝の最後の勅撰集は『新後拾遺集』であるが、其の後五十餘年の間勅撰の擧が無かつた。後花園天皇の永享五年に、飛鳥井雅世に勅命が下つて撰集に著手せしめられた。其の後五年を經て永享十年に成つたのは『新續古今和歌集』(二十卷)であつて、『古今集』の撰進以來五百三十餘年の長い歴史を持續した和歌勅撰集は、此の集を最後として斷絶したのである。古今から新續古今までの勅撰集を二十一代集といふ。勅撰集が其の後再興せられなかつたのは、一は政治の實權と共に、文藝の中心が宮廷から武門に移つた爲であり、二には歌道の門閥が全く衰へて撰者となるべき人材がなく、且つ和歌に代つて連歌が上下に流行した爲である。さて『新續古今集』には新古今時代の作を比較的多く入れて居るのであるが、當代の歌人では後小松院・後花園天皇の御製を始め、頓阿及び撰者自らの歌を多く採

飛鳥井家

つて居る。撰者の雅世（寶德四年歿六十三）は、新古今の撰者の一人に加へられた飛鳥井雅經の七代の孫裔である。雅經は俊成の門に學び、其の子孫は代々家學を傳へて、二條家の傍系をなしてゐたのであつて、雅世の子雅親及び雅康は、室町後期に二條家が衰へた頃には、歌道に於ける一方の門閥として尊重せられたのである。

冷泉家

當時二條家に家學を繼承するに足る人物が現れなかつた事は既に述べたのであるが、一方冷泉家は二條家と不和になつて以來、京極家と提携してゐたが、其の歌風は比較的自由であつた。而して冷泉家には爲相の子に爲秀（應安五年歿）があり、其の甥の爲尹（應永二十四年歿五十七）は、爲秀の後を繼いだのであるが、其の二子の時代になつて更に二家に分れた。即ち爲之は上冷泉の祖となり、持爲は下冷泉の祖となつた。爲秀は曾禰好忠の歌風を稱揚した程であつて、清新な歌を詠んだのであるが、其の門に學んだ今川了俊は即ち反二條派の鼻祖である。

今川了俊

了俊（應永二十七年歿九十六）は上總介範國の子で、俗名を貞世といつた。足利義詮・義滿の二代に仕へた有名な武將であつて、了俊は入道した後の法名である。應安四年に義滿に拔擢せられて鎭西探題となり、爾來二十七年の間其の地に武威を揚げ、殆ど九州を統一したのであるが、偶讒言に遭つて召還され、本國の遠江に退いて失意の中に晩年を送つた。了俊は幼少の頃から和歌を嗜み、冷泉爲秀に師事した。歌學に關する著書に『和歌所へ不審條々』一卷（二言抄とも云ふ）『了俊辨要抄』一卷『落書露顯』一卷（以上三部群書類從所收）等がある。了俊は冷泉家の歌風を承けて、頓阿を駁し二條派の歌學に反對すると共に、新古今風を稱揚し、

殊に爲兼の歌風を推賞した。彼はまた文筆に長じ、應永九年に著した『難太平記』以下二三の軍記を綴り、また紀行をも遺して居る。了俊の家集は傳はつてゐないが、二條派に對して攻擊を加へ、其の門から釋正徹の如き、當時一流の歌人を出したのは注意すべき事である。

正徹

正徹（長祿三年寂七十九）は姓を紀といひ、字は淸巖、號を招月といつた。備中の田舍武士の子に生れたが、幼少の頃に京都に出て、五山の一なる東福寺の栗棘庵に居り、佛照派の書記となつたので徹書記と稱した。當時五山の禪林は詩文の淵叢であつたのであるが、彼は幼少の頃から歌道に分け入り、終生風月に嘯き、又古典文學に陶醉したのであつて、其の歌才は當代一流であつた。彼は初め和歌を冷泉爲尹に學び、又今川了俊に師事したのであるが、後には冷泉派に慊らなくなつて、新古今時代の幽玄體を標準として、獨得の一體を創めて世に重んぜられた。烏丸光榮の『聽玉集』には正徹を評して「歌は上手なり、風體は惡しし、撰集には入れられぬなり。」と言つて居るけれども、其の家集『草根集』の詞書を見ると、堂上や武將に招かれて百首を詠み、歌會を催し、歌道の師範となつた事が隨所に見えるのであり、また家集の序は一條兼良が草して居るのであるから、當時一般の尊信を受けた事は明かである。正徹の歌學に關する著書には『なぐさめ草』一卷（群書類從所收）と『正徹物語』二卷とがある。前者は當時の歌史並に正徹の傳記資料として見るべく、又後者は歌學に關する彼の識見を窺ふべき好資料である。『群書類從』所收の『徹書記物語』と『續群書類從』所收の『淸巖茶話』は、二部を併せて『正徹物語』に相當するのであつて、之を分載したのは編者の疎漏である。

正徹の和歌の集には『正徹千首和歌』『正徹百首』（續群書類從に收む）などがあるが、家集の『草根集』（圖書刊行會本丹鶴叢書所收）は十五卷から成る尨大な歌集である。『草根集』は門人の正廣が編纂したものであつて、卷頭には一條兼良が文明五年七月下旬に記した序がある。序によれば、正徹は時折全く歌を廢した事もあつたが、心に深く根ざす思ひ草は春を迎へて再び萠え出るので、草根集と名づけたと云ふ。此の集には壯年の頃に詠んだ百首なども收められて居るが、大部分は晩年の作であつて、而も其の數はなほ一萬一千餘首に達して居る。卷二の詞書によれば、永享四年四月正徹が五十二歳の頃、今熊野の草庵が類燒の厄に遭つた時、彼が二十歳頃から詠み集めた和歌二萬六七千首を收めた三十餘帖の歌集を始め、和歌の抄物口傳の類が悉く一片の煙となつたと云ふ事であつて、此の事は序にも記されて居る。燒失した此等の作歌を加へる時は、生涯の詠歌は四萬首に達するのであつて、古今稀に見る多作家であつたと思はれる。さて『草根集』の卷一には、應永二十年（三十四歳）から享德二年（七十三歳）に至る間に詠んだ、一夜百首・一日百首・法樂百首の類を收め、卷二・三には永享元年（四十八歳）の正月から文安四年（六十七歳）の十一月に至るまでの詠草を日記體に集めて居る。これに續く卷四・五・六の三卷には、年月未詳の作歌を順序を立てずして集めて居るが、卷七から卷十四に至る八卷は、また歌日記になつてゐるのであつて、寶德元年正月（六十九歳）から長祿三年四月までの詠歌を日を追つて集め、卷十四の末尾には「此年之五月九日死去七十九歳」と註してある。なほ最終の卷十五は殘葉と標記した次第不同の卷であるが、是は恐らく正廣が拾收した卷であらうと言はれて居る。

「草根集」を繙いて見ると、其の作は日常の生活を藝術化したものであつて、佛教の臭味を帶びたものは稀であり、而も殆どすべて題詠である。而して正徹は如何なる題材をも取扱ひ、又あらゆる古典文藝の趣味や歌詞を自在に取入れて、綜合的な詩境を詠んで居る。其の歌風は彼が「抑歌道に於て定家を難(なん)せん輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべき事なり。」(正徹物語)と言つた語に徴しても明かであるやうに、定家の歌風を理想とし、幽玄體を標準としたのであるが、屢奇拔な著想を詠み、又材料を豊富にし、新奇な表現を試みて、とかく難解に陷つて居るのは源俊頼に似て居る。其の著しい特徴としては、夢幻的または靜寂深邃な美の世界を追求して居る事、綜合的繪畫的な詩境に憧れて居ること、纖細且つ鋭敏な感覺的描寫に長じて居る事などを擧げ得るのであつて、此等は時代を同じうする世阿彌の藝術と共通するのである。左に此等の特色を發揮した作歌の例を揭げよう。



正徹筆跡
（難波津に據る）

長閑なる日影とともに散る雪の露のみつもる庭の若草

殘なく雨は晴れつる庭たづみなほ雲うつす花のした蔭

雨くらき山本野邊を鷺ひとり飛び行く色にのこる暮かな

水底にめぐるやいかに島つ鳥うたかた浮ぶかがり火の影
庭たづみ柳のかけの一葉舟こぎ出でて來る秋のはつ風
目に見えぬ風は聞えていづくより音せぬ露の結びきぬらむ
古き世の野守の鏡くだけてや底にのこれる水と見ゆらむ
浦浪は松より暮るる沖中のはなれ小島にのこる日の影
かげつくる蔓ならべて谷ふかみ深山の寺に人も音せず
谷ふかき苔のしづくに落ちぞ來る松のはわたる嶺の月影
松さわぐ嶺の嵐も吹きしきて入相の鐘をうづむ雲かな
松に消え浪にあらはれ磯つたひ遠き浦わに行く千鳥かな
冬枯の庭におとせぬ風さえてうす雪こぼる夜半の月影

心敬

正徹の門人には心敬・宗砌・正廣等があり、又其の歌學並に歌風の影響を受けた者は極めて多かつたが、ここには心敬に就いて述べて置く。心敬（文明七年入寂七十）は北嶺十住心院の權僧都であつて、正徹に隨從する事三十年に及んだと言はれて居る。塵外に隱棲して和歌並に連歌を友としてゐたが、晩年には應仁の亂を避けて東國を遍歴し、太田道眞の許に身を寄せて宗祇等と連歌會を催し、又歌合の判者となつた。心敬の歌風は時代の影響を受けて、師の豐麗幽玄な風と異なつて著しく平淡となり、且つ宗教的色調を帯びて居る。殊に晩年は戰亂が續いた時であるから、慨世悲觀の聲を洩らした歌を詠んで居

る。心敬は師の歌學を承けて新古今風を尊重し、其の時代の歌人を推奨したのであつて、和歌並に連歌に關する識見を窺ふべき著に『ささめ言』二卷『老のくり言』一卷（以上群書類從所收）『ひとり言』一卷（續群書類從に收む）がある。心敬の歌集で現存するのは『權大僧都心敬集』一卷と『心敬僧都百首』（共に續群書類從に收む）である。

淺茅生や涙露けきあと訪へばむなしき花に夕風ぞ吹く
去年よりも月にうれへの色ぞ添ふ秋やはかはる老や悲しき
かかる世を後やはしのぶ何事も見しには劣るならひなりとも
いつまでの世を經むとてか武士の人を失ひ身をくだくらむ　（心敬僧都百首）

此等によつて心敬の歌風を知る事が出來る。

花山院長親

以上述べた了俊以下の人々は、冷泉派の流を汲んだ反二條派の歌人であるが、此の外に了俊より少じく後れて現れた花山院長親（永享元年薨）や、應仁前後の學者として名高い一條兼良（文明十三年薨八十）の如きも反二條派の歌學者である。長親は南朝の忠臣妙光寺内大臣家賢の子で、從一位右大臣となつた。文章博士であつて和漢の學を兼ね、和歌連歌を能くした點に於ては、同時代の二條良基に似て居る。二條派に屬する宗良親王から歌學を學んだのであるが、二條派に反對して新古今風に準據すべきことを主張した。其の歌學上の意見を窺ふべき著に『耕雲口傳』一卷があり、又歌風を見るべきものに『耕雲千首』一卷が現存して居る。（共に續群書類從に收む）耕雲は出家した後の號である。

一條兼良

次の兼良は關白經嗣の第二子で、攝政となり從一位太政大臣にまで昇つた。古今和漢の學に通じた一代の學者であつて、和歌並に連歌に長

じ、連歌の撰集としては『新玉集』二十卷を撰んだが、奏覽に先立つて戰亂の爲に湮滅した。其の國文學に關する多くの著書の中で殊に名高いのは、『日本紀纂疏』三卷、『花鳥餘情』三十卷、『古今集童蒙抄』二十卷、『梁塵愚案抄』二卷、『歌林良材集』二卷、『公事根源』一卷等である。兼良は正徹の『草根集』の爲に序文を書いた人であるから、二條派に反對した人である事は勿論であるが、歌論として纏まつた著書は無かつた。

要するに南北朝以後の七十五年間は、傳統を重んじて形式主義に流れた二條家に對する反對論が盛に起つた時代である。此の間に現れた歌人の中で、特に傑出したのは正徹であつて、其の他は歌人としてよりも、寧ろ歌論家として名を知られたのである。而してそれ等の人々が唱へた定家時代の幽玄體尊重の主張は、連歌の革新に直接又は間接に少からざる影響を與へたのである。當時の連歌に就いては次章に述べる。

三　室町時代後期

應仁の亂が始まつてから後、室町時代を終るまでの百三四十年間は戰亂の世であつて、文學の最も沈滯した時代である。室町時代前期に於て、反二條派の歌人が次々に現れて、一時勢力のあつた事は既に述べたのであるが、心敬以後には勝れた歌人が現れなかつたので、歌壇は再び二條派の末流によつて代表せられるやうになつた。室町時代後期の文藝は一般に古典趣味を重んじ、傳統の力に支配せ

られたのであつて、歌道に於ては二條家の形式的な歌學が尊重せられた。古今傳授の如きは其の代表的なものであつて、東常緣は其の方面で最も注意すべき人である。

東常緣

前代に於ける二條派の歌學は頓阿から經賢・堯尋の二代を經て常光院堯孝法印（康正元年寂六十五）に傳はつたのであつて、常緣は堯孝から之を學んだのである。東常緣（明應三年歿九十四）の祖は、源賴朝の時代に下總の守護職であつた千葉大介常胤であつて、其の子胤賴は下總國香取郡東庄（とうノ）に住み東氏を名乘つた。其の子重胤は京に上つて定家の敎を受け、和歌によつて實朝に仕へた。重胤の子胤行は爲家の女を娶り、且つ爲家から二條家の歌學の奧義を受けたのであつて、所謂古今傳授の源はここに發して居るのである。胤行から七代目の益之（嘉吉元年歿六十六）は即ち常緣の父であつて、雅世・了俊・堯孝等と交はり、歌人として名を知られた。さて常緣は下野守であつて、初め正徹に學んだのであるが、更に堯孝に就いて二條家の正統を受け、之を堂上家に傳へた。當時公武の歌道は殆ど絕えてゐたのであるが、常緣は其の支持者であつた爲に、一代に尊重せられたのである。歌學に關する著には『東野州聞書』二卷（師說の聞書である）『東野州消息』一卷等があり、又家集には『常緣集』一卷がある。（以上三部群書類從所收）

こき散らす風や吹くらむ青柳の絲にたまらぬ露のしら玉

月影は高嶺に更けて明けわたるふもとの野べに鶉なくなり

月に行くさよの中山なかなかに明けてはくらき霧の下道

此等によつて知られるやうに、其の歌風は平弱であつてさまで勝れてゐない。常緣に和歌の指導を受

けた人の中で名高いのは、連歌師の宗祇である。宗祇が常縁に和歌の事を尋ねた事は『常縁集』の詞書に見えて居るが、また古今傳授を承けた事は、『宗祇法師集』所載の長歌及び其の詞書によつて知る事が出來る。

古今傳授

古今傳授は常縁に始まつて、連歌師の宗祇（文龜二年寂八十二）に傳はり、宗祇から三流に分れた。即ち宗祇から三條西實隆（天文六年薨八十三）に傳はつたのは二條家の正系であつて、細川幽齋（慶長十五年歿七十七）に至つて一大勢力となつた。次に傍系は宗祇から連歌師の牡丹花肖柏（大永七年歿八十五）に傳はつた所謂堺傳授と、肖柏から奈良の林宗二（號を方正齋といひ『饅頭屋本節用集』の編者として知られて居る。）に傳へられた奈良傳授とである。抑も古今傳授は、必ずしも常縁から始まつたのでなく、それ以前からあつたのであるが、之を集大成したのは常縁である。而して其の內容は『古今集』の釋義の口傳と、特に祕傳として尊んだ切紙傳授とであつて、中にも名高いのは三木三鳥の大事である。三木とは「おがたまの木」「蓍に削花（めどにけづりばな）」「かはな草」の所謂三箇大事であり、三鳥とは「稻負鳥」「百千鳥」「呼子鳥」を云ふのである。此等はいづれも『古今集』の中の物名であるが、其の解釋をわざと神祕にして因襲的に尊重したもので、學說としては何等の價値もないのである。蓋し學問が萎靡沈滯し、且つ古書の散逸の甚しい當時であるから、一は歌道の門戶を飾る爲、一は糊口の資とする爲に祕傳とせられたのである。

宗祇

さて室町時代後期には和歌と連歌を兼ねる者が多かつたが、心敬・宗祇は其の代表的な人である。宗祇は連歌の巨擘であるが、二條家の歌學を傳へ、また和歌にも長じてゐた。家集に『宗祇法師集』一卷

（群書類從所收）がある。

夜を寒み梅が香ちかき手枕に月はかすみて春かぜぞ吹く

月はまだ山の端くらきたそがれに光さきだつ庭の卯の花

道たえて拂ふ人なき谷の戸の夕日がくれに散る木の葉かな

つもるかと起き出でて見ればさえし夜の月より薄き峯の初雪

夢さそふ鐘は麓に聲おちて雪に夜ふかきみねのともし火

湊風さ夜更けぬらし浮寝する由良の苫屋に月かたぶきぬ

此等が代表的な作である。要するに文學的價値はあまり高くない。宗祇はまた古典の研究家であつて、其の述作には『萬葉抄』（通稱宗祇抄）五卷、『古今和歌集兩度聞書』六卷、（常縁の説の聞書）『伊勢物語山口抄』一卷、及び源氏の帚木卷を註釋した『帚木別注』一卷等がある。

宗祇の門人

宗祇に就いて和歌若しくは古典を學んだ人は極めて多かつたが、連歌と和歌を兼ねたのは肖柏・猪苗代兼載・月村齋宗碩等である。肖柏は連歌の傍和歌を詠み、又八代集の校合に從事し、伊勢・源氏などにも通じてゐた。兼載も亦和歌に通じてゐたのであつて、和歌並に連歌に關する著書に『兼載雜談』一卷（群書類從所收）がある。宗碩も亦宗祇の學統を承けた人で、歌詞を類聚した『和歌藻鹽草』二十卷や、源氏の註釋『宗碩抄』六卷等の著がある。源氏の註釋で名高い『萬水一露』六十二卷は、宗碩の門人能登永閑の述作であつて、書中には宗碩の說を多く採つて居る。

三條西家の歌人

　宗祇の歌學を承けた堂上の文學者には三條西家の人々がある。三條西家は實隆・公條・實枝の三代に亙つて古典の研究に熱心であり、又連歌や和歌に長じてゐたのであるが、中にも盛名のあつたのは逍遙院實隆（天文六年歿八十三）である。實隆は和歌を飛鳥井雅親に學び、又宗祇に就いて古今傳授を受けた人であるが、連歌にも長じ、古典にも通じてゐた。家集の『雪玉集』（十八卷）は頓阿の『草庵集』と共に堂上歌人の模範とせられ、又後柏原天皇の御集『柏玉集』（十卷）及び冷泉政爲の『碧玉集』（六卷）と併せて三玉集と稱せられた。三玉集は當時の代表的歌集として廣く讀まれたのであるが、其の歌風は取立てて述べる程のものではない。實隆の子公條（稱名院）（永祿六年歿七十七）は和漢の學に通じ、且つ和歌に巧みであつた。其の述作には源氏の註釋書に『細流抄』二十卷がある。公條の子實枝（三光院）（天正七年歿六十九）は初の名を實澄と云つた。父祖の家風を承けて古典に精通し、『細流抄』を補つた『明星抄』五十五卷の著書がある。當時武人の中にも其の門を敲いて歌道の教を受け、又源氏の講義を聽く者が少くなかつた。此の實枝に學んだ細川幽齋は二條派の歌學の再興者であるが、便宜上江戸時代前期に讓る。

武門の和歌

　最後に武門の和歌に就いて一言述べて置く。戰國時代の將軍で文藝に長じたのは、八代の義政と其の子義尙である。義政は詩に長じ、又百首和歌を作り、屢歌合や連歌の會を催したのであつて、家集には『慈照院准后御集』一卷（續群書類從に收む）がある。義尙は兼良や常緣に就いて古典や和歌を學んだのであつて、歌才は父を凌駕してゐた。家集に『常德院殿御集』一卷（群書類從所收）が傳はつて居る。柳營に於ける文學は右の兩將軍によつて代表せられるのであるが、當時の武將の中には馬上に槊を橫たへて詩を賦し、

歌を詠ずる者が少くなかつた。蓋し武人の間に和歌が流行したのは、禪學茶道などと共に武士の修養に資する所があると考へられた爲である。武門の歌人として名高いのは太田持資（道灌）であるが、毛利元就・蒲生氏郷・新納忠元・北條長氏・武田信玄なども和歌や連歌を嗜んだのであつて、家集も傳はつて居る。此等の人々の作歌は、素より特に論ずる程のものではないからすべて省いて、只道灌の和歌に就いて述べて置く。太田道灌は上杉定正に仕へ、江戸城を築いた人であつて、文明十八年に刺客の爲に殺された。時に年五十五であつた。道灌は飛鳥井雅親に和歌を學び、文明六年には江戸城に於て心敬を判者として歌合を行ひ、又自ら「花月百首」續群書類從に收むを詠んだ。「花月百首」の中から二三の歌を擧げて見よう。

春來てもみるめなぎさの櫻花霞ふきとけ滋賀のうら風

あしびきの山もかひなくうづもれぬ雲も霞も花のにほひに

夕暮のあはれはものの數ならずしぎ立つ澤の有明の月

此等によつて察せられるやうに、歌としての價値は概ね低いのである。道灌の歌集として名高いのは『暮景集』群書類從所收であるが、其の歌數は三十餘首に過ぎない。此の集を道灌の家集とするのは奥書によるのであるが、其の署名に不審があり、又集中の詞書に道灌の十歳前後に相當する年月が見えて居るので、『平安紀行』と共に後世好事家が道灌に假託して編んだ僞書であると言はれて居る。史學雜誌四十二ノ一所載渡邊世祐博士論文參照　又一說には道灌の父資清（道眞）の作であらうとも言はれて居るが確證はない。『暮景集』中

の作で世に喧傳せられて居るのは、

いそがずば濡れざらましを旅人のあとより晴るる野路の村雨

かかる時さこそ命の惜しからめかねてなき身と思ひ知らずば

などである。

第三章　連歌の興隆

一　室町時代以前

連歌の起原

室町時代の和歌が萎靡不振の極に達した時、一方では前代まで專ら歌人の餘技として行はれた連歌が、枯渇した和歌に代つて文壇の表面に現れ、やがて和歌を壓倒して、上下都鄙の間に流行するやうになつた。連歌はもと三十一音の短歌の本末二句を、別々の人が唱和する事から始まつたものであつて、其の起原は極めて古い。日本武尊が甲斐國の酒折宮で「新治筑波を過ぎて幾夜か寢つる」と詠み給うたのに對して、火燒の翁が「かかなべて夜には九の夜日には十日を」と答へたといふのを起原とする說は、從來最も廣く行はれた所であつて、和歌を「敷島の道」といふのに對して、連歌を「筑波の道」とも呼んで居るのである。併し日本武尊の詠は片歌の問答であつて、同じ例は「古事記」の神武天皇の條などにも見えて居るのであるから、之を起原と見做す事は出來ない。一首の短歌を二人で詠んだ例は、

『萬葉集』卷八にある次の歌が、文獻に現れた最古のものである。

尼作頭句幷大伴宿禰家持所誂尼續末句和歌一首

佐保河の水をせきあげてうゑし田を　尼作　苅る早飯はひとりなるべし　家持續

平安時代の連歌

次いで平安時代になると、『伊勢物語』『大和物語』『蜻蛉日記』などに其の例が散見し、『拾遺集』の雜賀の部には十二句が見えて居る。而してこれを連歌と名づけたのは、何時の頃であるか明かでないが、勅撰集に連歌の部門を設けたのは『金葉集』が最初であつて、二十八句を載せて居る。かくて平安末期には、歌人の消閑の餘技として流行するやうになつたのであつて、時に數句を連ねる事も行はれ、又各の句は獨立しても意義を有するものとなり、其の特質も自ら變遷して、從來の和歌唱和式のものから離れて、滑稽機智を旨とする遊戲的なものとなつた。これは連歌がもと、一首の和歌を二人で唱和した本來の性質から、當然起る傾向であつて、眞の連歌の基は始めてここに發生したのである。併し平安末期の連歌はなほ掛詞や縁語などを用ひて、輕妙な諧謔を旨とするものであつて、未だ文學として見るに足るものではなかつた。左に當時の連歌の例を掲げる。

金葉集　卷第十　連歌

ゐたりける所の北のかたに聲なまりたる人のものいひけるを聞きて

あづま人の聲こそ北に聞ゆなれ　永成法師

みちの國よりこしにやあるらむ　律師慶範

しかの島を見て
つれなく立てるしかの島かな　　篤助
弓張の月のいるにも驚かで　　國忠

『今鏡』卷八「花のあるじ」
奈良の都を思ひこそやれ　　藤原公教
八重櫻秋の紅葉やいかならむ　　源有仁
しぐるるたびに色や重なる　　越後乳母

平安時代の連歌は主として二句を連ねたものであるが、末期には發句から脇句へ、脇句から第三第四へと續けて行く「くさり連歌」、即ち長連歌が發生した。右に掲げた『今鏡』の例の如きは其の一例（長連歌の斷片）であるが、これは花園左府有仁が中心となつて催したもので、當時既に女房も席に加はつてゐた事が分る。

鎌倉時代の連歌

次いで鎌倉時代の初期、後鳥羽天皇の御代には、和歌の會と共に連歌の會が盛に行はれたのであつて、當時宮廷を始め貴紳の邸に於て、夜を徹して連歌を樂んだ事は、『明月記』などによつて知る事が出來る。また當時「くさり連歌」を五十韻百韻と續けてゐた事は、これも『明月記』の記事に見えてゐるが、なほ『菟玖波集』の中に「後鳥羽院に奉りける百韻連歌」の如き詞書の散見するのを見て明かである。「くさり連歌」は句毎に推移する刹那の洒落機智を味ふのであつて、詠歌に疲れた歌人の餘技とし

て極めて恰好のものであつたから、自ら和歌の席上に於ける餘興として流行したのである。かくて連歌が盛に行はれる間に自ら二派を生じた。一は優雅を旨とする有心宗（一に柿の本）であり、他の一は卑俗を厭はず專ら諧謔を主とする無心宗（一に栗の本）であつて、後鳥羽院の御代に分たれたものである。其の後鎌倉時代の末期には、公卿ばかりでなく、武士僧侶や一般民衆の間にも盛に流行したのであるが、堂上と地下の間には自ら異なる傾向があり、又京と鎌倉の間にも差異があつた。併し概括的に言へば、鎌倉時代の中頃から無心宗は振はなくなり、有心宗は益隆盛になつたのである。以上は鎌倉時代の末に至るまでの連歌の沿革の概略である。

二　興隆期の連歌

南北朝の頃になると和歌が益衰頽したのに反して、獨り連歌は彌隆盛に向つたのであつて、建武元年八月の二條河原の落書に「京鎌倉をこきまぜて、一座そろはぬえせ連歌、在々所々の歌連歌、點者にならぬ人ぞなき」と謠はれる程の盛況を呈するに至つた。此の時連歌の保護者となつて、其の文學的地位を高めると共に、一定の法式を定めて基礎を確立したのは二條良基である。即ち良基は當時連歌の先達と云はれた善阿及び其の高足の救濟に就いて連歌を究め、又救濟等と謀つて式目を改定し、且つ救濟と協力して連歌の最初の撰集『菟玖波集』を編んで、連歌史上に一時期を劃したのである。

二條良基

『菟玖波集』は二十卷より成り、古今の連歌の附合二句及び發句を選出して、春・夏・秋・冬・神祇・釋教・

菟玖波集

戀・羇旅・雜體・發句に部類し、和漢二樣の序を添へて居る。時代は日本武尊の「新治つくば」の句から當時に及んで居るのであるが、句數の多いのは勿論當代である。而して作者は天皇皇族以下公卿僧侶女流庶人に至るまで、凡そ五百三十餘人に達して居るが、其の中で句數の多いのを順序に擧げれば、救濟・良基・梶井宮二品法親王・佐々木道譽・足利尊氏・藤原爲家・素阿・善阿等である。集中の詞書によれば、正和年中の「法輪寺千句」以下屢千韻七百韻が催されたのであつて、仙洞や貴紳の邸で行はれた百韻に至つては枚擧に遑のない程である。此等の連歌は後世湮滅したのであるが、幸にして此の集に其の片鱗を傳へて居るのは、連歌史の資料としても貴いものである。さて此の集が成つたのは、後村上天皇の正平十一年であるが、其の翌年には勅撰に準せられた。左に掲げるのは卷頭の數句である。

寶治元年八月十五夜百韻連歌に

山かげしるき雪のむら消と侍るに

あらたまの年の越えける道なれや　後嵯峨院御製

たたぬ烟とたちのぼる哉

春はまだ淺間のたけのうす霞　前大納言爲家

山の梶井坊にて百韻連歌侍りけるに

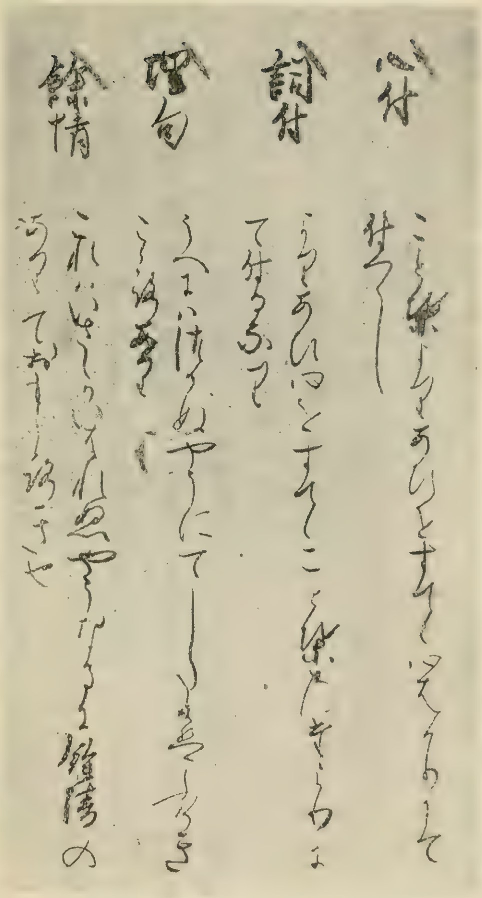
猶もこほるは滋賀のうら波

雪間より道ある山となりぬるに　二品法親王

月影寒くよこそふけけれ

初春は霞ながらも冬かとて　　前大納言爲氏

次に良基の連歌に關する述作に就いて述べよう。良基の連歌に關する最初の著作と思はれるのは、近年古典保存會で複製刊行せられた『連理祕抄』一卷である。此の書は室町の中期に寫した筆者未詳の寫本であるが、良基の著作である由の奧書があり、又救濟の跋に貞和五年七月十七日の日附がある。内容は前後二部より成り、前半には作法の心得を述べ、後半には式目を擧げて居るのであつて、（圖版參照）次に述べる『連歌新式』の前提となつて居る。次いで延文三年には、專ら連歌の作法を述べた『撃蒙句法』一卷を著したが、更に注意す



連理祕抄　猪熊信男氏藏
（古典保存會複製本に據る）

べきは、應安五年に成つた『連歌新式』一名『應安新式』一卷（群書類從所收）である。本書は救濟と協議して、從來行はれてゐた連歌の法式を改定して、時代に適合する新式目を制定したものであつて、是より長く斯道の寶典と仰がれた。（近年古典保存會で複製した天文十四年の寫本は現存する最古の寫本である）『連歌新式』に次いで成つたのは、宮內省圖書寮藏本の『知連抄』一卷（古典保存會で複製本あり）である。救濟・周阿及び自己の連歌の風體を論じ、且つ連歌の作法を說いたものである。以上擧げたものの外に、世に流布して居るのは『筑波問答』一卷（群書類從所收）である。此の書は連歌の起原・沿革・效驗以下、作法・學書・式目撰定の由來・會席の作法などを、問答體に記したもので、『連歌新式』と共に斯道に遊ぶ者の必讀書とせられた。良基の業績は大體以上の通りである。

救濟

周阿

連歌は地位が高く學識のある良基の誘導によつて忽ち興隆したのであるが、當時の有名な連歌師には、善阿門下の救濟・順覺・信照・良阿・十佛等があつた。就中上下の聲望を一身に集めたのは、救濟と其の高足の周阿であつて、良基と併せて連歌興隆期の三大功勞者と云はれて居る。救濟の傳は詳かでない。歌を冷泉爲相に學んだが、連歌に於ては善阿の高弟であつて、當時の宗匠として重んぜられ、良基と協力して連歌の基礎を確立した。其の連歌は師の善阿よりも遙かに醇雅であつて、其の句風は後世模範と仰がれた。周阿の傳も明かでない。今川了俊に招かれて九州に下つた事は、途上の吟によつて知られて居る。救濟が幽玄味の豐かな句を得意としたのに對して、周阿は寧ろ輕妙洒脫な句を詠んだ。左に救濟・周阿等の連歌を見るべき『紫野千句』（續群書類從に收む）の初の數句を掲げて置く。

楝さく野は紫の梢かな　　救　濟

雲こそはやし五月雨の頃　　周阿
夏の夜の星やあけぬに入りぬらん　　成阿
山の遠きは鹿の音もなし　　全貞

周阿の後には梵燈庵主（朝山修理大夫師綱）今川了俊などがあつたが、一代の宗匠と仰がれる程の大才がなかつたので、連歌は廣く流行したに拘らず、實質は却つて頽勢を示したのである。此の時連歌の興隆を圖つたのは良基の孫なる關白一條兼良であり、連歌の革新を提唱したのは宗砌法師である。

一條兼良

兼良は宗砌法師・智蘊法師等を招いて盛に連歌會を催したのであるが、又良基に倣つて連歌の法式を改定し、撰集をも編んで、斯道の發達向上に盡力したのである。即ち宗砌と協力して『初學抄』一卷を著して連歌の式目を改定し、又『和漢篇』一卷を著して和漢聯句の法式を定め、なほ『菟玖波集』以後の作家の佳句凡そ二萬を選んで、『新玉集』二十卷を編んだのである。尤も『新玉集』は應仁の大亂に遭ひ、桃花坊の典籍と共に散逸した事は既に述べた通りである。

宗砌

宗砌は俗名を高山民部丞時重と云つた。梵燈庵に學び、救濟に次ぐ巨擘と稱せられた。蓋し宗祇以前に現れた連歌師の隨一であらう。宗砌は從來閑却せられてゐた「心附け」を主張して、連歌の革新を圖つたのであつて、純正連歌の基を作つた功勞者である。なほ從來の連歌師が專ら自然を詠じたのに對して、更に人事をよんだ事も注意すべき點である。宗砌及び其の一派の連歌の作風は『續群書類從』所收の『文安千句』『寶德千句』によつて窺ふ事が出來る。

心敬

宗砌に次いで現れた十住心院の心敬僧都も連

歌で名高い人である。和歌を正徹に學び、連歌を救濟（一説に梵燈庵）に學んで、連歌並に和歌に盛名があつた。當時歌人並に連歌師は時代思潮の影響を受けて、歌道や連歌道を佛法と調和融合しようとしたのであるが、殊に心敬は熱心な提唱者であつた。從つて其の連歌は幽玄から更に靜寂な詩境に入つて居るのであつて、宗祇の句風の先驅となつて居る。其の歌學並に連歌に關する著述は、既に前章に擧げて置いたのであるが、其の外になほ主として連歌の事を述べた著書には、『馬上集』一卷、『心敬僧都庭訓』一卷（共に續群書類從に收む）などがある。宗砌・心敬時代の名高い連歌師には、智蘊・專順・宗伊・能阿・行助等があるが、今一々に就いて述べる遑がないから、『竹林抄』（五一一頁參照）の中から此等の人々の附合各一句を抄出して、當時の連歌の傾向を示す事にする。

　　松には風の聲ぞしぐるる
山もとの野を夕暮に鹿啼きて　　宗砌

　　夢うつつともわかぬ曙
月に散る花はこの世のものならで　　心敬

　　いにしへの芳野の宮を來てとへば
老木の花に山風ぞ吹く　　智蘊

　　宇治のわたりの山の端の月
あかつきの雲に初雁聲はして　　專順

むかへば月に人ぞ待たるる

夕露に花さく草の戸をささで　宗伊

心細きは老が身の秋

夜な夜なの空にかけ行く月を見て　能阿

眞砂の露をはらふ秋風

月寒き夜のしほひに雁おちて　行助

宗砌・心敬の頃幕府は北野に連歌會所を開き、又公家諸大名の間にも月次の連歌會を催したのであつて、連歌は都鄙に流行した。而して宗砌・心敬等によつて導かれた心附けの連歌を承けて、これを完成すると共に、更に之を全國に普及したのは連歌史上の巨人宗祇法師である。宗砌の頃から宗祇の歿するまでの間は連歌の黃金時代である。

三　宗祇と其の門流

宗祇法師

宗祇は歌人西行・俳聖芭蕉と並稱せられる連歌の巨匠であるが、其の出生地や生立などに就いては諸說があつて詳かでない。生國に就いては紀伊說と近江說とがあるが、江州の人とする說が妥當であらう。其の出身に關しては、伎樂師を業とする賤民の子であつた爲に、身分を憚つて他姓を借りて湯川氏を名乘つたとも云はれて居るが、飯尾氏とする說に從ふべきであらう。飯尾氏は奉行職として江州

に領地を持つてゐたのであるから、宗祇は恐らく其の一族であらう。幼少の頃僧侶となり、壯年になつて京に上り、宗砌・心敬を師として連歌に精進し、又吉田兼倶に就いて國書を學んで、廣く古典に通じてゐた。應仁の大亂が起つて以後は西行の行脚を慕つて、後半生を東西諸國の遍歷に過した。先づ應仁元年(四十七歲)には信濃路を辿つて「世にふるもさらに時雨の宿りかな」と歎じ、更に東に旅して筑波嶺を攀ぢ、黑髮山に登り、那須野を横ぎり、應仁二年十月に白河の關を越えた。其の行先は明かでないが、歸途には文明元年に武藏の河越に至り、太田道灌の父備中守資清(入道道眞)の許で心敬等の『下句連歌』(河越千句)の席に列し、翌年の春には武藏の隅田川のほとりに於て『吾妻問答』を著し、文明三年の春には美濃國郡上に東常縁を訪れて『古今集』の講義を聽き、また古今傳授を受け、文明五年に歸洛した。其の後再び常緣を訪ひ、又越路に下つた事もあるが、七八年間は主として東山の草庵種玉庵にあつて悠々自適の生活を送る間に、連歌の述作並に撰集に從事すると共に、屢『源氏物語』の講筵を開いた。文明十二年六十歲の時には、周防山口の大内政弘に招かれ、門人宗長を伴なつて其の地に下り、更に政弘の勸めによつて筑紫を遊歷し、(此の時「筑紫道の記」成る)翌年京都に歸つた。大内氏は當時海外貿易によつて繁榮を極めてゐたが、學問文藝の愛護者であつて、公卿・連歌師にして其の庇護を受けた者が多かつた。殊に宗祇は政弘の恩顧を蒙つたのであつて、其の後延德元年にも再び山口に下つた。延德明應の頃宗祇は近畿地方を遍歷する外には、遠く行脚する事もなかつたが、明應八年に七十九歲の高齡をも意とせず、「身や今年都をよその春霞」の句を殘して、越後の國守上杉氏をたよつて最後の旅に

出た。かくて二年の後文龜元年には宗長が訪れて來たので、翌年相携へて美濃に向つたが、途中で病を得、伊香保の溫泉に浴して武藏相模を旅し、文龜二年七月二十九日箱根湯本の早雲寺で寂した。享年八十二。遺骸は宗長の手によつて駿河の桃園なる定輪寺に埋葬せられた。宗祇の歿する前後の事は宗長の『宗祇終焉記』に詳かである。



宗祇肖像　伯爵南部利淳氏藏
（國華に據る）

　宗祇が其の後半生の間遠く東西を遍歷して、至る所に連歌を弘布した狀況は、大體右に述べた通りであるが、更に京都に於ける生活を見るに、彼は何時の頃からか東山に種玉庵を結んでゐたので、やがて之を號とした。文明五年には當時奈良に戰塵を避けてゐた一條兼良を訪ひ、文明七八年の頃には草庵に於て屢『源氏物語』の講筵を開き、後には三條西實隆の邸で講じてゐた。當時の連歌師の多くは古典文學の支持者であつたが、就中宗祇は萬葉・古今・伊勢・源氏などに通じて其の註釋を書き、又至る所で講筵を開いたのであつて、當時一流の古典研究家として推稱せられた。宗祇は實隆の斡旋によつて伏見宮家に伺候し、又貴紳の邸にも出入したが、長享二年（六十八歲）には將軍義尚に召されて、北野に於ける連歌會所の奉行を仰付けられ、更に後土御

門天皇の恩顧を蒙つて花の下の號を允許せられた。かくて宗祇晩年の聲望は上下都鄙に喧傳したのである。花の下の名は『菟玖波集』の序に「或詠二花下一、或嘯二月前一之輩、名譽雖レ垂二後世一、佳句不レ傳云々」とあるのに因るもので、『筑波問答』に後嵯峨天皇の御代の連歌流行の樣を記して、「地下にも花の本の好士多かりしかども云々」又「道生・寂忍・無生などいひしもの等、毘沙門堂・法勝寺の花のもとにて萬づのもの多く集めて、春毎に連歌し侍りし」と記して居るやうに、もとは花の下で連歌會を催された時、地下の者で其の席に列する事を許された名人を指したのである。而して宗祇が花の下の號を授けられて以後は、其の門人宗長にも賜はり、やがて一代の連歌宗匠に限つて、朝廷又は公卿の家から許される名譽の稱號となつたのである。(江戸時代には俳諧の宗匠に授けられるやうになつた。)

花の下

次に宗祇が連歌史上に遺した業績に就いて述べよう。宗祇の連歌の學書で名高いのは、文明二年に武藏で書いた『吾妻問答』一卷(群書類從所收)と、文明十一年に著した『老のすさみ』一卷(群書類從所收)である。前者は二條良基の『筑波問答』に倣つて、連歌に關する古人の諸說を引いて、自己の意見を問答體に記したものであり、後者は打田太郎左衛門(傳記未詳)の爲に、古人の句を評しながら、自己の主張を具體的に記述したものであつて、宗祇の連歌觀を窺ふべき好資料である。宗祇が撰した連歌の集には文明十八年に成つた『竹林抄』十卷(續群書類從に收む)と、明應四年に成つた『新撰菟玖波集』二十卷(續々群書類從所收)がある。『竹林抄』は宗砌・智蘊・心敬・專順・宗伊・能阿・行助の七師を竹林の七賢に擬して、各の附合と發句を選んで十卷としたもので、宗祇以前の代表的作家の連歌を見るのに至便の集である。『竹林抄』の序に「つたなき翁今撰

宗祇の撰著

くも老の浪に漂ひて、命の露もながらふるものならば、續菟玖波集をあつめん事を思へり。」と記して居るのは、即ち『新撰菟玖波集』を撰ぶ豫定を述べたものである。『新撰菟玖波集』は『竹林抄』を基として、更に宗祇時代の諸家の作品をも加へたものであつて、『菟玖波集』と共に連歌史上の二大撰集である。此の集は永享から明應の當時に至るまで六七十年間の作者二百五十一人の附合と發句を選んで、『菟玖波集』の例に倣つて分類したものである。集中には皇室を始めとして、堂上武門の句も多く採られて居るが、最も多いのは宗祇及び其の師友門流等の句である。而して此の集は連歌最盛期の撰集であり、而も宗祇は一の理想によつて撰んだのであるから、新古の句を雜然と配列した『菟玖波集』よりも遙かに完備して居る。宗祇の附合及び發句の撰集には、壯年頃の集に『萱草(わすれぐさ)』六卷（松井簡治博士藏寫本　續群書類從本は缺本）二卷があり、老年期の集に『老葉(わくらは)』十卷、晩年の集に『下草』（共に續群書類從に收む）がある。此の外に百韻千句の類も多く傳はつて居るが、今は省略して置く。なほ宗祇の歌集には『宗祇法師集』があり、紀行には『白河紀行』及び『筑紫道の記』一名『筑紫紀行』がある。

新撰菟玖波集

宗祇の連歌

宗祇以前に現れて連歌を中興し、又宗祇から敬慕せられた宗砌・心敬等は、從來の連歌を承けて、前句と附句との間の文法上の連絡をなるべく疎遠にすると共に、情趣によつて附ける所のいはゆる心附に苦心したのであるが、宗祇はこれを大成して純正連歌を完成したのである。其の作風は宗砌に比して、稍變化の妙に乏しく、且つ潑剌たる生氣を缺く憾はあるが、晩年の作はかすかな匂によつて連ねられ、詩味が高雅であり、且つ幽玄閑寂の心境に徹して居るのである。明應二年（七十三歲）に成つた

「獨吟山何百韻」は、宗長等によつて斯道の典型と仰がれたものであるが、明應五年の東山清水寺奉納の獨吟「本式連歌百韻」（續群書類從に收む）は、晩年の作風を最もよく代表するものである。

かぎりさへ似たる花なき櫻かな
　しづかに暮るる春風の庭
ほのかすむ軒端の峯に月出でて
　おもひもわかぬかりぶしの空
こしかたをいづくと夢のかへるらん
　行人見えぬ野邊のはるけさ
霜まよふ道はかすかにあらはれて
　かるるもしるき草むらのかけ　（「獨吟山何百韻」表八句）

宗祇が其の交友門弟と一座して催した連歌は極めて多いのであるが、就中後の連歌師から推稱せられたのは、宗祇・宗長・肖柏の三人が賦した長享二年正月の「水無瀨三吟百韻」（續群書類從に收む）である。左に其の表八句を掲げて置く。

何　人

雪ながら山もと霞む夕かな　　宗祇
　行水遠く梅にほふ里　　肖柏

河風に一むら柳春見えて　宗長
　舟さす音もしるき明方　宗祇
月や猶きりわたる夜に殘るらん　肖柏
　霜おく野原秋は暮れけり　宗長
鳴く蟲の心ともなく草かれて　宗祇
　垣根をとへばあらはなる道　肖柏

宗祇の發句

連歌の發句を言ひ切る傾向は平安末期の頃からあるのであるが、鎌倉時代にはこれに纏つた思想を表現する事を必要とし、更に室町時代になると、季や切字の法則なども設けられたから、發句は自ら單獨にも詠まれるやうになつたのである。併し發句のみを單獨の詩形として詠む事は、宗祇などによつて盛に行はれるやうになつたのであつて、而も宗祇は當時の發句を代表する作家であつた。宗祇の『筑紫道の記』に挿入せられてゐる發句は十九句であつて、何れもすぐれて居る。左に彼の發句の佳作を抄出して見よう。

　鳥の音も花のそこなる深山かな
草も木も月待つ露の夕かな
舟見えて霧も追門こす嵐かな
送り來てとふ宿すぐる時雨かな

雪晴れて川音さむき山路かな

此等は靜寂境に入つてゐるもので、後の芭蕉の發句と一脈相通ずる所がある。要するに宗祇は、新古今時代の幽玄有心の文藝を理想として、純正連歌を完成した一大詩人であつて、芭蕉が樹立した俳諧の正風は之を基礎としてゐるのであるから、文學史上に於ける宗祇の位置もまた、極めて重要であると言はねばならぬ。

肖柏

宗祇の歿後に連歌師として一世に重んぜられたのは、牡丹花肖柏と柴屋軒宗長の二人である。肖柏（大永七年歿八十五）の傳記は詳かでない。夢庵と號し又牡丹花とも稱した。三條西實隆に就いて伊勢・源氏の講義を聽き、其の註釋も記したが、また和歌に長じ、宗祇から古今傳授を受けた。連歌に於ては宗祇の高

宗長

弟であつて、禁中や公卿の連歌の席にも加はり、其の名聲は極めて高かつた。次に宗長（享祿五年歿八十五）は駿河の島田に生れ、幼少の時から國守今川義元に仕へ、十六歲の時宗祇の門下となり、爾來師の歿するまで四十餘年の間隨從して、よく師風を傳へた。宗祇の歿後には一世種玉庵となり、衆望を一身に集め、又花の下の稱號を授けられた。連歌の外に奧州白河に遊んだ時の紀行の『東路のつと』一卷や晩年の日記に『宗長手記』一卷などがあり、又連歌の批評註釋などがある。其の發句には「華咲く野は幾すぢの春の水」の如き艶麗なものがあり、又「朝霧や波の上なる秋の海」の如き雄大なものもある。

兼載

肖柏・宗長に次いで名高いのは猪苗代兼載と月村齋宗碩である。兼載（永正七年歿十）は一に兼栽とも記し、耕閑齋と號した。心敬の教を受けたとも云はれて居るが、兼載の『連歌比況集』の序に「宗祇法師といへ

る人ありて、余不敏なりと雖も屢その教を受け侍り。」とあるのによれば、宗祇の門人である。兼載は二條家の歌風を學んで、歌學並に詠歌に長じてゐた。其の著作には連歌の作法を說いた『若草山』一卷や連歌の式目を說いた『連歌本式』一卷などがあり、又宗砌・心敬・宗祇等の說を述べ且つ和歌に關する逸話を記した『兼載雜談』一卷などがある。作品には百韻千句の類の外に、連歌並に發句を集めた『園塵』二卷がある。兼載には子が無かつたので、甥の兼純を養つて嗣子としたが、其の子孫は代々伊達家に仕へ、江戸時代の末に至るまで連歌の家名を繼いでゐた。

宗碩

次に宗碩は河內の人である。宗祇及び三條西實隆に學び、後に同門の宗長と親しく交り、共に旅行した事もある。連歌の外に和歌にも長じてゐた事は前章に述べた通りである。

室町時代の末期に於て連歌師として盛名のあつたのは、宗碩又は肖柏の門人と云はれる周桂と宗牧である。周桂の門下には宗祇以後の連歌師として名聲の聞えた里村紹巴（慶長七年歿七十九）があり、宗牧の門下には里村昌休（天文二十一年歿四十二）がある。

紹巴

紹巴は里村北家の祖と云はれ、昌休の子の昌叱は里村南家の祖となり、其の子孫は代々江戸幕府の御連歌師となつた。紹巴は本姓を松村氏と云ひ奈良の人である。十九歲の時剃髮し周桂に師事したが、其の歿後には昌休に學び、後に一家をなして里村氏を冒した。紹巴は一代の宗匠として重んぜられ、織田信長・豐臣秀吉等の眷顧を受けて名聲は愈高かつた。

昌叱

紹巴に次いで名の聞えたのは昌叱であつて、父昌休の歿後は紹巴の保護を受け、且つ其の女婿となつた。紹巴・昌叱等が連歌師として名聲の高かつた事は宗祇に劣らなかつたのであり、當時連歌が廣く流行した事も

同樣であつたが、此の頃は古人の糟粕を嘗めて清新の氣を失ひ、文學としての價値は言ふに足らぬものであつた。其の後連歌師は、將軍家を始め大名の保護を受けて家名を支持し、恒例の連歌會は儀式的に行はれて明治の初年に及んだ。此の節は福井久藏氏著「連歌の史的研究」に據つた所が多い。

四　俳諧連歌の興隆

純正連歌の衰頽

純正連歌は既に述べた通り、有心連歌の系統を引いたのであつて、宗祇に至つて發達の頂上を極めたのであるが、其の歿後には陳套を墨守して千篇一律に流れ、更に時代を下るに從つて益衰頽し、遂に江戸時代には、纔かに形骸を存するに過ぎなくなつたのである。連歌がかくの如く早く衰頽した原因としては、宗祇以後稍煩瑣な法式を設けた事や、宗家を生じて家風を世襲するやうになつたこと、などを數へ得るのであるが、更に重大な原因は、連歌その物の本質にあつたのである。元來連歌は、一卷を統一する情調と、一句一句の變化の妙味とを生命とするものであるが、室町時代に流行した純正連歌は、和歌の教養を積んだ僧侶、又は遁世者によつて發達した文藝であり、之を嗜んだのは、主として貴族趣味を追ふ武家であつたから、其の題材趣味など悉く和歌の範圍を出る事なく、而も比較的に長大な詩形のものであるから、自ら變化に乏しく、單調に流れざるを得なかつたのである。即ち連歌は地下の文藝から向上して貴族的因襲的の文藝となつた時、既に衰頽すべき運命の下に置かれたのであつて、これを將來發展させるには、傳統的古典的の趣味から脱却して、別天地を開く事が必要

であつたのである。併しそれは當時の連歌師に期待する事は出來なかつた。

俳諧連歌

室町時代を通じて流行した純正連歌が行き詰つた時、之に代つて新たに擡頭したのは俳諧連歌である。單に俳諧ともいふ。俳諧連歌は、從來有心連歌のために壓倒せられてゐた無心連歌の系統から出て、新生面を開いたものであつて、純正連歌が因襲文藝となつて武門の間に支持せられてゐたのに對して、平易にして自由な天地に遊び得る平民文學として、民衆に歡迎せられたのである。而して俳諧連歌は、既に『菟玖波集』の中にもかなり多く採られて居り、又宗砌・智蘊等は連歌の餘興として之を試みたのであるが。宗祇に至つて稍盛に弄ばれるやうになつた。宗祇は「俳諧百韻」を遺して居る程であるから、當時既に流行したのであるが、其の後の連歌師の兼載・宗碩・周桂・宗牧等も形式ばつた連歌の座興として、屢俳諧連歌を試みたやうである。併し純正連歌に對抗して、眞に俳諧連歌を獨立した文學にしたのは、室町末期の山崎宗鑑と荒木田守武である。

山崎宗鑑

宗鑑は近江源氏の佐々木の一族であつて、隱岐前司義清の子孫である。本名を志那彌三郎範重と云つて、將軍義尙に仕へてゐたが、其の薨去の後遁世した。初め攝津の尼ヶ崎に住んでゐたが、後に山城の山崎に移つて山崎宗鑑と稱した。晩年に西國を行脚し、讃岐の觀音寺に一夜庵を結んで閑居してゐたが、天文二十二年に年八十九で歿した。宗鑑は初め連歌を嗜み、宗祇・宗長・肖柏等と交はつてゐたのであるが、元來奇才縱橫の人であつたから、遂に煩瑣な連歌を捨てて、飄逸洒脫な俳諧連歌に移つたのである。晩年に選集した『犬筑波集』一卷（俳諧文庫所收）は俳諧連歌の撰集の嚆矢として名高いものであるが、其の

犬筑波集

成立年代は詳かでない。此の集は春・夏・秋・冬・戀・雜に分類して附句を收錄したものであるが、作者の名は記されてゐない。其の多くは恐らく宗鑑の作であつて、他は其の時代の附句であらう。

霞の衣裾はぬれけり

佐保姫の春立ちながら尿をして

これは卷頭の句である。なほ名高い句を擧げれば、

太長刀に春風ぞ吹く

辨慶も今日や火花を散らすらん

月日の下に我は寢にけり

暦にて破れをつゞる古衾

上にかたかた下にかたかた

三日月の水にうつろふ影見えて

なほ宗鑑の發句には次の如きものがある。

元朝の見るものにせん富士の山

摺小木に知らすな蓼の花ざかり

月に柄をさしたらばよき團扇哉

手をついて歌申しあぐる蛙かな

要するに宗鑑の俳諧は卑俗を旨とすると共に、理智的な所があるのであつて、未だ文學的價値は乏しいのであるが、後の俳諧の素地を作つた功績は沒する事が出來ない。

荒木田守武

次に守武（天文十八年歿年七十七）は伊勢神宮の神官荒木田氏の一族で、姓を薗田と云つた。文明十九年十五歳の時に禰宜に任ぜられた。若年の頃から和歌連歌を好み、宗祇・宗長・兼載・肖柏等の教を受けたが、後に自由な俳諧に轉じた。宗鑑は俳諧の先鋒であつたが、其の句は放逸洒脱であつて、とかく猥雜にわたるものがあつた。然るに守武のは溫雅な趣があり、其の諧謔も何處となく上品であるのは、性格や趣味の相違によるのであらう。守武は用語の如きも、古今雅俗を問はず自由に取り入れたのであつて、俳諧としては更に一歩を進めた感がある。享祿三年に「獨吟百韻」を試みて居るが、殊に名高いのは天文九年の『獨吟千句』（一名『飛梅千句』）（俳諧文庫所收）であつて、彼の特色はこれによく現れて居る。

飛梅やかろがろしくも神の春
　われもく\の鳥うぐひす
長閑なる風ふくろふに山見えて
　目もとすさまじ月殘る影

これは『獨吟千句』の第一百韻の初四句である。なほ守武の發句を少しく揭げて見よう。

元朝や神代のことも思はるる
落花枝にかへると見れば胡蝶かな

撫子や夏野のはらの落し種
鶯の娘か鳴かぬほととぎす

守武は長篇の俳諧の範を垂れたのであるが、なほ俳諧の式目を定めて、後の貞德の式目の基礎を作つた事も注意すべき事である。要するに宗鑑と守武は時代の前後はあつたが、共に煩雜にして因襲に流れた連歌を棄てて、不完全ながらも俳諧の獨立を宣言した功勞者であつて、江戸時代に興隆した俳諧は、此の二人を祖として發展したのである。

第四章　歷史物語と戰記物語

一　歷史物語

室町時代に現れた歷史物語に『增鏡』があり、戰記物語に『太平記』があるが、更に戰記物語からは、一人の英雄若しくは著名な史實を主題として取扱つた『義經記』と『曾我物語』を派生し、歷史物語の系統からは、史論を基調とする『神皇正統記』以下の數書が現れた。先づ歷史物語に就いて述べよう。

增鏡

『增鏡』は『大鏡』の系統に屬する歷史物語である。治承四年後鳥羽天皇の御即位以後、元弘三年（正慶二年）後醍醐天皇が隱岐から還幸せられるまで、十五代凡そ百五十年間の事蹟を編年體に記して居る。書名は序文の中の

おろかなる心や見えむます鏡古きすがたにたちは及ばで

今もまた昔を書けばます鏡ふりぬる代々のあとに重ねむ

の唱和から出て居るのであつて、「ます鏡」は眞澄鏡の義である。卷數はもと三卷であつたが、流布本は七卷若しくは十卷になつて居る。

作者

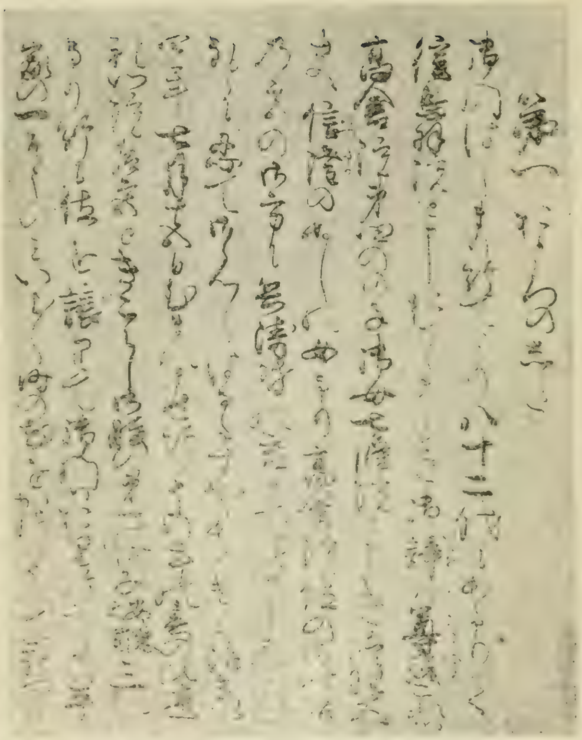
作者には從來二條良基・一條經嗣・一條兼良の三人が擬せられて居るのであるが、何れも確證があるのではない。此の外に兼良の子冬良の作とする說があるが、伴信友は冬良の生れた寬正五年から八十餘年前に當る永和二年、及び寬正五年から六十餘年前に當る、應永九年の奥書のある古寫本の存在を指示して、冬良說を否定して居る。（比古婆衣）以上擧げた諸說の外に、和田英松博士は、書中に冷泉家に關する事が多く見えて居るから、恐らく冷泉家の人の手に成つたものであらうと言つて居られるのは注意すべき說である。成立年代に就いては「增鏡詳解」（和田英松、佐藤球合著）の緒言に、此の書中の最後の記事の元弘三年から、永和二年（永正年間書寫の古本の奥書に見える年代）に至るまでの、四十餘年の間に記されたものであるとして居る。

組織

『增鏡』は嵯峨の清涼寺に於て、百餘歲の老尼が、參會の人々に昔物語をするといふ趣向によつて記されて居る。これは明かに『大鏡』以來の形式を踏襲したのであるが、編年體を採用したのと、一帖每に優雅な題名を附けたのとは、共に『榮華物語』の例に倣つたのである。帖數は二十帖であるが、流布本には錯簡がある。卽ち「內野の雪」と次の「煙の末々」とには一部分重複して居る所があり、年代にも前後して居る所がある。又「山のもみぢ葉」と次の「北野の雪」との間にも記述の重複があり、文章にも

略ぼ同じ所がある。應永九年書寫の奥書のある尾州德川侯爵家藏本や、永正十八年の奥書のある谷森善臣翁藏本の如き古寫本には、「煙の末々」「山のもみぢ葉」の二章を缺き、「今日の日影」が「つげの小櫛」と一つになつて「さしぐし」となつて居り、從つて流布本が二十章から成つて居るのと異なつて十七章に分たれて居る。(圖版に掲げた前田侯爵家尊經閣藏本は、後崇光院御筆と稱せられて居るものであるが、是も古本の系統に屬し十七章から成つて居る。)芳賀博士は流布本にかくの如き重複があるのは、原稿と書き改めたものとあつたのが後に紛れ込んだのであらうと言つて居られる。

芳賀博士遺著歴史物語



傳後崇光院御筆　増鏡　(前田侯爵家藏)

『増鏡』は皇室と武家の爭鬪史であつて、承久の討幕、兩皇統の迭立、西園寺家の榮華、北條氏の專横、元弘變亂の顛末等を特に

詳密に記して居る。尤も作者は皇室の衰運を慷慨して執筆したらしいのであつて、記述がその事に及ぶ時特に委曲を盡して居るのに對して、蒙古襲來の如き國家重大の事變に就いては、却つて簡單に記して居る。本書は主として治亂興亡の跡を記述して居るのであるが、宮廷の花やかな行事や文藝に關する種々の逸事なども多く記し、又平安朝の物語に倣つて、廣宮廷の祕事や公卿の情話などを物語つて居るのは、作者が文藝に關係の深い人であつた爲であらう。

文章　文章は『源氏物語』や『榮華物語』などを摸倣した擬古文であつて、優雅であり且つ流麗であるが、一體に氣力に乏しいのが短所である。從つて書中で最も勝れて居るのは、行幸節會などに關する優美な記述や、後鳥羽院の遠島遷幸の悲しい物語の類であつて、政治上の事變や戰亂の顚末などの記事は遙かに見劣りがする。要するに四鏡の中では『大鏡』に次ぐべき名篇であり、史實も概ね正確であるから歷史としての價値も十分にある。左に文例として揭げるのは、隱岐島に於ける後鳥羽院の御模樣を記し奉つた一節であつて、『源氏物語』の須磨卷の影響の多い部分である。

文例　藐姑射の山の峯の松もやうやう枝をつらねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ幾春を經ても、空行く月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべかりつる世を、ありありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ち別れ、己がちりぢりにさすらへ、磯の苦屋に軒を並べて、おのづからことゝふものとては、浦に釣りするあま小舟、鹽燒くけぶりのなびく方をも、我がふる里のしるべかとばかり眺めすごさせ給ふ。御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。

ましていつをはてとか廻り逢ふべき限だになく、雲の浪けぶりの波の幾重とも知らぬ境に、世を盡し給ふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。このおはします所は、人離れ里遠き島の中よりは少しひき入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦ふける廊など、けしきばかりことそぎたり。誠に「柴のいほりのたゞしばし」とかりそめに見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹きくるを聞こしめして、

我こそは新島守よおきの海の荒きなみ風心して吹け

同じ世にまたすみのえの月や見む今日こそよそにおきの島守

月の行方

池の藻屑

四鏡を『水鏡』『大鏡』『今鏡』『増鏡』の順序に序列する時は、神武天皇から後醍醐天皇に至るまでの假名文の國史を通讀する事が出來るのであるが、『今鏡』の次に現れた『彌世繼』が散逸して居るので、高倉安徳二帝の御代の記事が缺けて居る。其の缺を補ふ爲に書いたのは『月の行方』二卷であり、又『増鏡』の後を繼いで後醍醐天皇から後陽成天皇までの御代の事を記したのが『池の藻屑』十四卷である。此の二書は江戸時代に、伊勢神宮の神官荒木田武遇の女荒木田麗女の書いたものである。此等は史實に疎漏があり、文章もあまり勝れてゐないけれども、女流の筆に成つた歴史物語として注目に値するのである。二書とも『大鏡』以來の形式に倣つて、『月の行方』は山奥に住む老翁の昔語に擬して居り、『池の藻屑』は石山寺に詣でた老嫗が、人々に昔語をするのを書き留めた趣向によつて居る。

神皇正統記

『増鏡』は從來の歴史物語の系統を引いて現れたものであるが、『神皇正統記』以下數種の作品は、南北兩朝對立時代の世相が産み出した特色ある作品である。先づ『神皇正統記』に就いて考察しよう。本

書は神代から後村上天皇の御卽位に至るまでの國史であつて、南朝の忠臣北畠親房の著である。書名の由來に就いては、著者が「神代より正理にて受侍るいはれを宣ん事を志して、常に聞ゆる事は載せず。然れば神皇正統記とや名づけ侍るべき。」と言つて居るので明かである。現存する最古の寫本は、永享十年書寫の加賀白山比咩神社藏本四卷(國寶)であるが、此の外に應永四年書寫の奧書のある京都青蓮院藏本や、明德五年書寫本を大永八年に寫した、常陸の六地藏寺藏本などがあつたが散逸したらしく、其の所在は不明である。尤も青蓮院本の影寫本は內閣文庫に藏せられて居り、六地藏寺本は群書類從本に其の面目を傳へて居る。本書はもと二卷であつたが、白山本は四卷本であり、又慶安二年の流布刊本は六卷になつて居る。

北畠親房

親房は村上源氏の後裔で、師親の孫であり、權大納言師重の子である。博識宏才の人で、萬里小路宣房・吉田定房と共に後の三房と稱せられた。(大江匡房・藤原伊房・同爲房の三人を前の三房と云つたのに對して斯く呼ばれたのである。)後醍醐天皇の御信任を蒙り、壯年の頃大納言正二位に陞つたが、御輔導を承つてゐた世良親王(後醍醐天皇の皇子)が、元德二年に早世せられた時、哀悼の餘りに官を辭して入道した。其の後建武中興の世となつた時再び出仕し、棟梁の臣として種々獻策する所があり、次いで延元の亂には、其の子顯家・顯信と共に東西に奔走して、一家悉く忠節に身を捧げた。かくて晩年には勳功によつて從一位に敍せられ、大臣に準ぜられたが、後村上天皇の正平九年に大和の賀名生で薨じた。親房の一生は至誠奉公を以て終始して居るのであつて、其の功績は一々述べる遑は無いが、延元四年

成立の動機

前後の事は『神皇正統記』の成立に關係があるから、大體の事を記して置く。延元三年に親房の長子顯家が討死を遂げた時、顯信は陸奥介鎭守府將軍に任ぜられ、義良親王を奉じて陸奥に下る事になり、親房も其の一行に加はつたのであるが、偶海上で風浪の難に遭ひ、親王の御船は伊勢に吹き戻され、親房の乘船は常陸に漂著した。かくて親房は東北に於ける足利氏の根據地を覆さうとして諸所に苦戰したが、常陸の小田城（小田治久の居城）に據つて、賊將高師冬等の軍と戰つて敗れ、遂に興國三年の末に吉野に引上げた。是より先吉野に於ては、延元四年の秋に後醍醐天皇は、後事を親房に委囑すべき御遺勅を賜うて崩御になり、後村上天皇（義良親王）が御年僅かに十二で御即位になつた。當時親房が吉野に居つたならば、必ずや萬機を輔佐し奉る任に當つたのであらうが、未だ常陸を去ることの出來ない時であつたので、幼帝御輔導の資とする目的を以て、『神皇正統記』と『職原抄』とを草して、これを吉野朝廷に獻じたのである。白山本及び青蓮院本の奥書によれば、『神皇正統記』を著したのは延元四年の秋であるが、其の後更に五年を經て、興國四年に著者自ら增訂を施したのである。而して奥書に「旅宿之間、不蓄一卷之文書、纔尋得略皇代記、任彼篇目粗勒子細畢」と記して居るのによれば、座右に殆ど參考書を備へず、只記憶にまかせて記述したのであつて、親房が博覽强記の人であつた事を知ると共に、本書が尋常一樣の國史でない事も自ら明白である。なほ『職原抄』二卷（群書類從所收）は、官位敍任の沿革を述べて、人臣登用の道を明かにしたもので、奥書によれば興國元年の撰である。

特質

さて『神皇正統記』の卷頭には、

> 大日本は神國なり。天祖はじめて基を開き、日神ながく統を傳へ給ふ。我國のみ此事あり、異朝には其たぐひなし。此ゆへに神國といふなり。

と述べて、神代以來の國體を說き、治亂興亡の跡を敍べて、當代に及んで居るのであるが、其の主眼とする所は大義名分を論じ、南朝の皇統の正統である所以を明瞭にする事である。從つて本書は一般の國史と異なつて、史實の記載よりも史論に重きを置いて居り、又政治の得失を論じ、歷朝の御事蹟を記述した後には、屢帝王の鑑戒となるべき事を說いて居るのであつて、此等は後村上天皇を始め奉り、側近奉仕の者の參考に供する著者の意圖に出たものである。史論を含んだ史書には、既に前代に『愚管抄』『六代勝事記』の類が現れたのであるが、本書は更に進んで、徹頭徹尾建國精神の復活を提唱し、純日本思想を高唱して居るのである。蓋し親房は嘗て玄慧法師に就いて『資治通鑑』を讀み、之に精通してゐたのであつて、本書の史論殊に大義名分論は、明かに其の感化による所が多いのである。（田中義成博士著『南北朝時代史』に據る）要するに『神皇正統記』は著者が國體論・神道論・政治論を述べた一種の史論であるが、著者が、史家として卓見を抱いてゐた事は、賴朝や泰時などの功績を正當に認めてゐる點に、最もよく示されて居る。本書はまた江戶時代になつて、『大日本史』を始めとして、新井白石の『讀史餘論』や賴山陽の『日本外史』などに、多大の影響を與へたのであつて、後の勤王論に及ぼした感化の大なる點に於ても、注意すべき著述である。（以上田中義成博士著『南北朝時代史』を參考した）

文章

文章は遒勁謹嚴な和漢混淆文であつて、巧まず飾らざる中に氣概が横溢して居る。其の義と情を盡

した評論には讀者を感動させる力があり、悲壯な事變の記述には、感慨の情が滿ちてゐて、他の作品に見られない妙味がある。尤も其の文章には時代の通弊として語法上の缺點が少くない。

梅松論

南朝の『神皇正統記』に對して、北朝の人の筆に成つた史書に『梅松論』『源威集』『續神皇正統記』などがある。『梅松論』二卷（群書類從所收）は承久元年に源實朝が逝いて後に、政權が北條氏に落ちた時から書き起し、建武四年三月に金ヶ崎城が沒落するまでの事を記して居るのであるが、主とする所は足利尊氏の顯榮の由來である。卷末に「去程に春宮、光嚴院の御子御卽位有べしとて、大嘗會の御沙汰有て、公家は實に花の都にてぞ有し。」と記して居るのは、作者が正平四年の崇光天皇の御踐祚を知つて記したのであらうから、本書の成立年代は正平四五年の頃である。其の序に、北野の神宮寺毘沙門堂で、老僧が人々に昔語をするのを記し留めた事を述べて居るのは、言ふまでもなく四鏡の形式に倣つたのである。書名の由來に就いては、作者が卷尾に「或人是を書とめて、所は北野なれば、將軍の榮花梅とともに開け、御子孫長久、松と徳をひとしくすべし。飛梅老松年舊て、松風吹ば梅花薫ずるを、問と答ふとに准らへて梅松論とぞ申ける。」と記して居るので明かである。作者は詳かでないが、足利氏に仕へた人の手に成つた事は、内容から見て明白である。史實の記述は正確であるが、『神皇正統記』に見るやうな史論がなく、又文學としての價値も乏しい。

源威集

『梅松論』と種類を同じくするものに『源威集』二卷（佐竹家傳本、寫本）がある。足利氏の爲に源氏の興隆の次第を問答體に記述したものである。恐らく尊氏の部下が書いたのであらうが、著者は未詳である。

日本文學所收後藤丹治氏の解說に據る。次に『續神皇正統記』一卷（群書類從所收）は、光嚴天皇から後花園天皇に至るまで十代の事蹟を、北朝を中心として記したもので、小槻晴富の著である。『神皇正統記』の後を承けて記したものであるから、「續」の字を冠したのであるが、內容は彼が南朝の正統である所以を主張して居るのに對して、是は北朝を正統として記して居るのである。純然たる記錄體の史書であつて、文學的價値は殆ど無いと言つてよい。」

續神皇正統記

神皇正統錄

『神皇正統記』の名を摸倣したものに、なほ作者未詳の『神皇正統錄』三卷（續群書類從に收む）がある。神代から後鳥羽天皇の建長九年賴朝薨去の直前までを記して居る。諸書の抄錄から成る記錄體の史書である。

吉野拾遺

以上述べた歷史物語若しくは史書以外になほ『吉野拾遺』四卷がある。後醍醐後村上兩天皇の吉野行宮を背景とする回顧談を記したものであるが、系統的に記述したものでなく、『宇治拾遺物語』などの形式に倣つて、史話逸事並に說話を集めて居る。これに拾遺と名づけたのは、逸事を拾ふ意である。其の卷末に、

正平つちのえいぬの年の春、草のいほりの夜の雨に、吉野の花の露をしたてて、よしなしごと書きつらね侍るこそ、ものぐるほしけれ。　隱士松翁

と記して居るのに據れば、正平十三年に松翁と號する人が書いたのである。松翁に就いては從來三說がある。兼好に師事した命松丸の後身であるとする說、侍從忠房であるとする說、及び吉房朝臣とする說である。最後の說は『新安手簡』（新井白石と水戶の安積澹泊との贈答書簡の中で、主として和漢の

書籍に關する文を集めたもの。立原翠軒の編である。」に見えるものであつて、比較的重んずべき說であるが、なほ今後の研究を要するのである。本書に收められて居る記事は、後醍醐天皇が吉野の行在所に於て、

ここにても雲ゐの櫻咲きにけりただかりそめの宿と思ふに

と詠み給うた話を卷頭に置き、勾當內侍・辨內侍・伊賀局などの和歌や戀愛に關する逸話を記し、源中納言顯家の北方・熊王・右馬允行繼等の發心遁世の悲話を語り、又光物・天狗・怨靈・怪木などに關する說話を集めて居るのであつて、話の數は凡そ六十餘條である。戰死・出家・別離などに關する史話や、陰慘な氣に滿ちた怪異談の多いのは、悲慘な戰亂の世を背景とする吉野行宮の生活の一面を示すものであるが、文學談・戀愛談などを多く記して居るのは、稍不調和な感がある。史話の中には『神皇正統記』や『太平記』などに據つて記したかと思はれる點があり、又記事に時代の誤や他書の傳ふる所と符合しない所があるので、從來疑問の書であるとせられて居る。『群書類從』所收のものは二卷本であるが、其の奧書に次の如く記してある。

右吉野拾遺上下二卷、以所藏舊本書寫、以屋代弘賢藏本校合畢。流布印本僞造爲四卷、其第三第四文體不同、且記不奧吉野事、特所載發句咸係宗祇法師作、則後人竄入不待辨可知也。

卽ち塙保己一は流布本の卷三四の二卷を僞書として之を除いて居るのであるが、今日も大體に於て同樣に見られて居る。要するに本書の作者並に成立に就いては、なほ今後の研究に俟つべき所が多い。

二　戰記物語

太平記

室町時代に成つた戰記物語で傑出して居るのは『太平記』である。四十卷(別に劍卷一卷を附す)から成り、花園天皇の文保二年から、後村上天皇の正平二十二年(後光嚴天皇の貞治六年)に至るまで、五十餘年の間の治亂興亡の跡を記してゐる。更に内容をいへば、後醍醐天皇の御治世及び武家繁昌の事から筆を起し、元弘の變、北條氏の滅亡、建武中興、足利尊氏の謀叛を經て、南北兩朝の爭亂の有樣を記し、將軍義詮が逝いて後、細川賴之が幼君輔佐の任に當る爲に、西國から上洛するまでの事を敍述してゐる。書名は卷尾に「中夏無爲の代に成つて目出たかりし事共也」とあるのに據つて、長く續いた戰亂が漸く太平の世となつた事を喜んで、斯く題したのであると言はれて居るが、此の頃後藤丹治氏は、戰亂の記錄を太平と名づけたのは、反語若しくは忌詞であらうと言ふ說を發表せられた。『太平記理盡抄』(文明二年今川心性著)には本書は初め「安危由來記」と呼ばれたのが、後に「國家治亂記」「國家太平記」となり、更に「天下太平記」と改められたのであると言つて居るが、何に基づいたものか詳かでない。『太平記』の最終の年紀(正平二十二年)から三十五年後の應永九年には、既に『難太平記』(今川了俊の著)が現れて居るのであるから、或は最初から『太平記』と呼ばれてゐたものではないかと思はれる。

作者

作者に就いては『難太平記』に、南朝方の人が書いたのであらうと云ひ、又『太平記理盡抄』に、比叡山の玄慧法師が後醍醐天皇の思召を承けて記したものに、更に數人が書き繼いで行つたものである事

を詳密に述べて居るが、其の據る所は詳かでない。なほ菅政友は、書中に比叡山の事が最も委しく述べてあるから、作者は山法師であらうと言つて居る。此等の說にはそれぞれ一理があるのであるが、先年史料編纂所の調査により、『洞院公定日次記』應安七年五月三日の條に、「傳聞、去廿八九日之間、小島法師圓寂、云々、是近日翫天下太平記作者也、凡雖爲卑賤之器有名匠聞、可謂無念」とある事が發見せられて以後、小島法師を作者とする說が最も有力になつた。應安七年は『太平記』擱筆の時から、僅かに八年後に當るのであるから、小島法師說は有力な說に相違ないけれども、其の傳記に就いては何等知られてゐない。此の書は文章並に組織の上から見ても、一人の手に成つたものでない事は明かであるから、原作者はたとへ小島法師であるとしても、其の後更に幾人かの手によつて書き繼がれた事は確かである。從つて此の書にも多くの異本を生じたのであつて、水戶で編纂せられた『參考太平記』には九種を擧げて居るが、此の外になほ數種の異本が現存して居る。此等の異本の中で原形の面目を最もよく保存するものは『神田本太平記』である。神田本は神田男爵家所藏の零本であつて、先年國書刊行會から出版せられた。

『太平記』は既に述べたやうに、一人の作者により一定の方針の下に書かれたものではない。又寫された五十餘年の世相は極めて複雜であつて、政治上の實權にも幾度か變動があり、人心の動搖も亦甚しかつたのであるから、『平家物語』に見るやうな、全篇に亙る統一整齊の美が無く、又作者の態度も動搖して、或る部分は武家本位の記述となり、或る部分は皇室中心の記載となつてゐて、描寫の中心

が一定してゐない。しかのみならず、物語中に現れて來る人物は主として武士であり、其の演ずる所は殆ど殺伐を極めた合戰であるから、記事は概ね陰慘な氣に滿ちて、詩的興味を缺いて居る。從つて此の物語には『平家物語』の如き中心思想がなく、又情趣の豐かな挿話を缺くのであつて、讀者をして一種の物足りなさを感ぜしめるのであるが、他の一面には之を補ふべき別種の特長がある。其の最も著しい點は、儒佛二敎の感化による武士道の精神の勃興と、道義的觀念の發達に伴なふ多くの壯烈な物語を含んで居る事である。其の他神佛崇敬の念の篤い事や、因果應報の思想の盛である事なども、此の物語の特色である。武士の扮裝や合戰の有樣などは、從來の戰記物語にも可なり詳細に記されてゐたけれども、本書に至つて更に精密に記されて居り、又巧妙な戰法や武士の勇敢な振舞の如きも、詳述せられて居るのであつて、此等は文學を離れて、後の武士に甚大の感化を與へたのである。筆者は武門を憚つて、時に其の筆端を枉げてゐるけれども、やはり大義名分を忘れてゐないのであつて、屢正義に味方をして、『神皇正統記』に見るやうな、尊王論若しくは政治論をも記して居る。筆者はまた歷史的の事變を詳しく記述して居るのであるが、屢空想から成る脚色を加へ、又一體に發表が誇張に過ぎてゐるのであつて、記述の儘を直ちに史實と信ずる事は出來ないのである。從つて本書の記事に史實の誤のある事を指摘した人が少くない。了俊の『難太平記』の如きは其の最も著しいものであるが、伊勢貞丈の『安齋隨筆』にも此の事を論じて居る。又近くは菅政友や久米邦武博士等が、事實の誤謬を指摘して以來、楠公父子の訣別や兒島高德の話の如きも、架空的の物語であるとせられ、遂には

『太平記』全體を殆ど小說と異ならない作品であるとさへ論ずる人が現れたのである。併し其の後當時の記錄・日記などとの對照によつて、此の書が相當確實な史料によつて記された事が追々に究明せられたのであつて、他に據るべき史書のない此の時代の歷史としては、なほ相當に價値あるものと認められるやうになつた。

文章

『太平記』の文章は素より首尾一貫した體裁のものでなく、中には『平家物語』に見るやうな、韻文の要素を多分に取り入れた俊基朝臣東下りの條や、大塔宮熊野落の條のやうな、華やかな道行文などもあるが、大體に於て『源平盛衰記』を摸倣して、一層多くの漢語佛語を混へて、漢文調の勝つたものである。巧妙な對偶を用ひ、流麗な聲調を用ひた絢爛な文體は、時に內容が空虛となり、動もすれば眞面目を缺く感がある。文中に屢漢土の故事を引用し、また挿話の中に支那の史話傳說を多く引いて居る事は、從來の戰記物語と同じであるが、此の書に於ては一層頻繁になり、且つ概ね長大となつて居る。左に文例として一節を抄錄して置く。

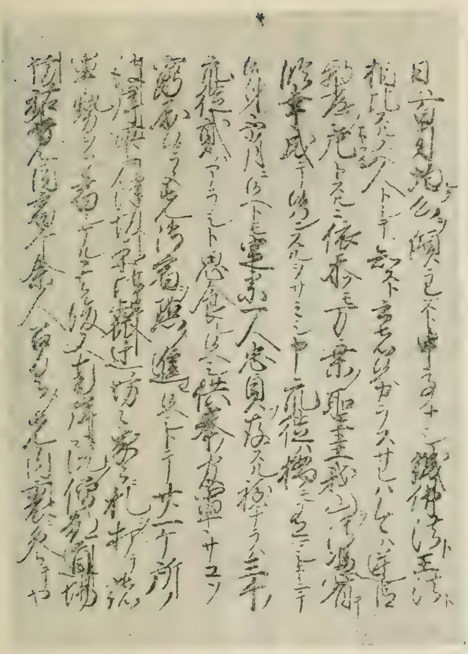
文例

賀名生皇居事

貞和五年正月五日四條繩手の合戰に、和田楠が一族皆亡びて、今は正行が舍弟次郞左衞門正儀ばかり生き殘りたりと聞えしかば、此の次でに殘る所なく皆退治せらるべしとて、高越後守師泰三千餘騎にて石川河原に向城を取て、互に寄りつ寄られつ合戰の止む隙もなし。吉野の主上は天の河の奧賀名生と云ふ所に、僅かなる黑木の御所を造りて御座あれば、彼の唐堯虞舜の古へ、茅茨剪らず、柴椽削らず、淳素の風もかくやと思

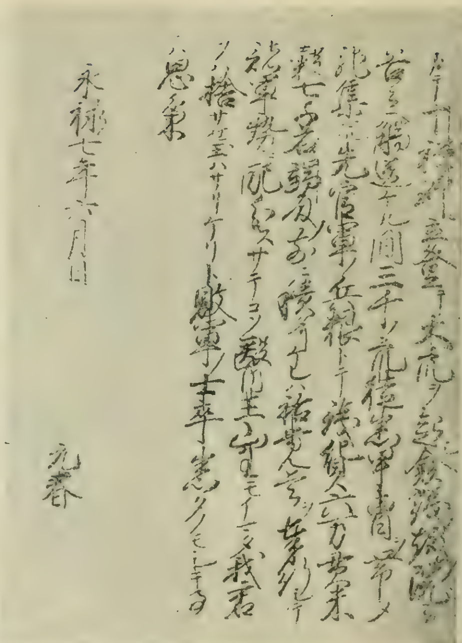
ひ知られて、誠なる方も有りながら、女院皇后は柴葺く庵のあやしきに、軒漏る雨を禦ぎかね、御袖の涙ほす隙なく、月卿雲客は木の下岩の陰に松葉を葺きかけ、苔の筵を片敷きて身を措く宿とし給へば、高峰の嵐吹き落ちて、夜の衣を返せども、露の手枕寒ければ、昔を見する夢もなし。況や其の郎從眷屬たる者は、暮山の薪を拾ひては、雪を戴くに膚寒く、幽谷の水を掬んでは、月を擔ふに肩やせたり。かくては一日片時も有りながらへん心地もなけれども、さすがに消えぬ露の身の、命あらばと思ふ世に、憑みを懸けてや殘るらん。

影響



吉川元春筆寫太平記

『太平記』は壯烈な武勇譚に富み、又巧妙な戰法を詳記して居るので、戰國時代の武士社會に愛讀せられたのであつて、陣中でこれを書寫した武將も多かつた。圖版に示した吉川元春が尼子義久の本據出雲國富田の月山城を攻擊する爲に、永祿五年から同九年に至る五箇年の間、洗合(松江市外)に滯陣中筆寫したものであつて、四十卷より成り、每



（吉川子爵家藏本）

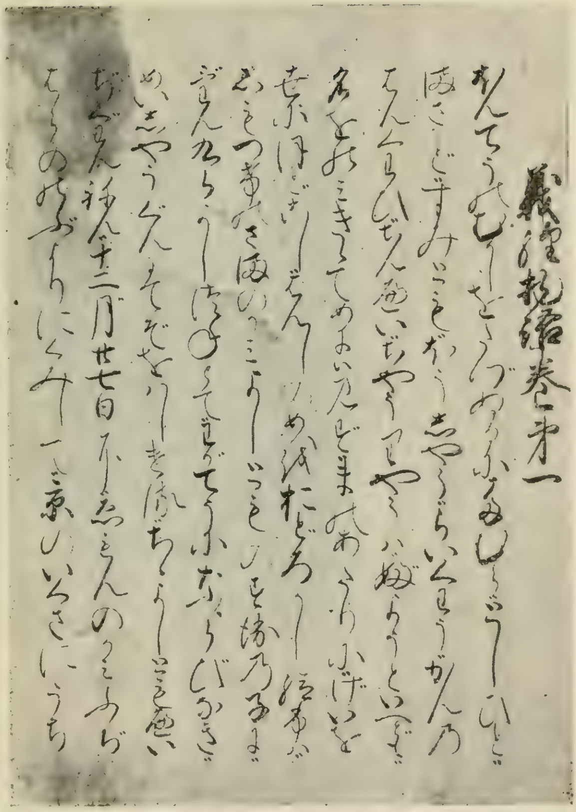
巻の末尾には書寫の年月を記し、且つ署名がある。『太平記』は江戸時代の戲曲脚本小說などの素材となつて益流布し、遂に太平記讀の如き辻講釋ともなつて、いよいよ民衆に親しまれるやうになつた。かくて江戸時代には、『太平記』の名を襲うた史書も次々に現れたのであつて、『前太平記』『前々太平記』『後太平記』の如きは其の著しいものである。

義經記

『平家物語』の系統を引いた戰記物語から出て、其の題材の範圍を縮小して一英雄に限り、文章を一層平易にして通俗的な讀物としたものに『義經記』と『曾我物語』がある。共に一英雄に關する種々の傳說を集成したものであつて、戰記物語から戲曲・小說・實錄などの通俗文學に移り行く、途上の作品として注意すべきものである。

『義經記』は源義經の傳說を系統的に集成した一代記であつて、もと『判官物語』『義經物語』『牛若物語』などと名づけて、章段を設けずに書いた寫本で行はれてゐたのであるが、後に假名に漢字を宛て

段を分つたのが流布本である。流布の版本には寛永十年版、正保二年版、萬治二年版、元祿二年版、其の他數種があるが、八卷より成り挿繪を挿入して居る。此の物語の作者は詳かでない。成立の年代に就いては、山崎美成の『海錄』に室町將軍の頃として居るが、近來御橋悳言氏は、本書卷六の「靜若宮八幡へ參詣の事」の條に、天龍寺の事が見えてゐるのに著眼して、此の寺に於て後醍醐天皇の御七周忌に落慶の供養が行はれた貞和元年（後村上天皇の興國六年）以後に書かれた物である事を考證せられた。



義經物語（高木武博士藏）

日本古典全集所收義經記解題參照

內容

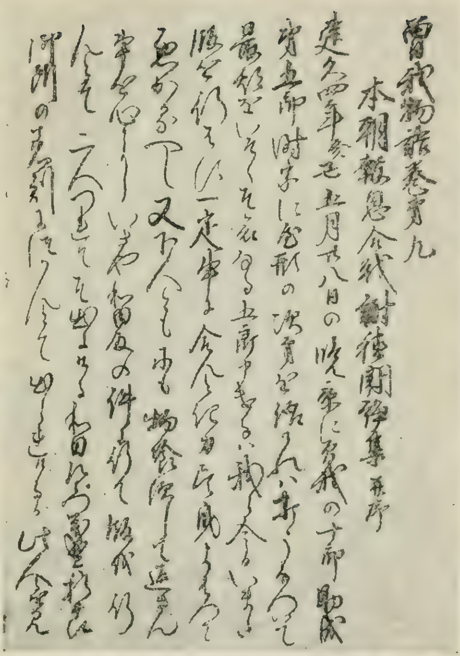
『義經記』一篇の物語は、母常磐の懷に抱かれて都落をする牛若丸の幼時に始まり、七歳の時鞍馬に

入つて武道を勵み、十六歳の時金賣吉次に伴なはれて陸奥に下り、平泉の秀衡に身を寄せた事を語り、次いで兄頼朝の擧兵を傳へ聞いて遙々馳せ上り、平家の追討に奔走したのであるが、讒臣のために兄の不興を蒙り、京にも住みかねて吉野にさまよひ、北國にさすらひ、更に轉じて奥州の秀衡の許に投じたが、泰衡に攻められて、遂に衣川の合戰に自害して果てるまでの、變化極まりなき劇的生涯を描いて居るのである。『平家物語』の作者が、平家の運命に同情を寄せて筆を執つたのと同じやうに、此の物語の作者も、數奇な運命に弄ばれた義經に同情して筆を執つたのである。而して『平家物語』の作者が、義經に就いては主として其の花やかな活動方面を物語つたのに對して、此の物語の作者が寧ろ義經の幼時のけなげな生立と、晩年の悲壯な失意の境遇とに主力を注いだのは、識見のある所である。本書の中心興味は、變轉極まりなき義經の境遇にある事は言ふまでもないが、其の間に辨慶や靜や佐藤繼信・忠信兄弟の如き副人物の壯烈な節義や美しい人情を織り込んで、物語の感興を深くして居る。文章は平明で稍卑俗に流れて居り、描寫には不自然な誇張があつて、『太平記』に比して遙かに遜色がある。併し後の文學に及ぼした影響は極めて著しいのであつて、所謂判官物と稱する多種多樣の作品が續々現れたのである。

曾我物語

次に『曾我物語』には十二卷の流布本以外に、眞字本系統の本門寺本(十卷)があり、又眞字本を假名交り文に書き直した大石寺本(十卷)南葵文庫本(十二卷)などがある。(本門寺と大石寺は共に日蓮宗富士五山の一である)山岸徳平氏の考察に據れば、此等の異本の中で本門寺本は最も原作に近いものであつて、大石寺本と南葵文庫本

とは、共に眞字本を假名交り文に書き改め、且つ佛教關係の故事や、物語に直接關係のない部分を省略して成つたものである。(圖版參照)而して流布本は、此等の異本の何れかを原據とし、『平家物語』を模範として幾多の潤色を施し、なほ書き足しなどして成つたものである。眞字本が最初現れたのは北條氏


曾我物語卷第九
本朝報恩合戰謝徳闘諍集 五序

大石寺本(松井簡治博士藏)

執權時代であらうが、流布本が成立したのは、室町幕府時代の初期乃至中期であらう。何れも作者未詳であるが、眞字本は比叡山の僧侶の手に成つたらしく、流布本は僧侶若しくは公卿の手を經て成立したものらしく思はれる。(以上日本文學聯講第二卷所載山岸徳平氏論文に據る。)

流布本『曾我物語』の初には一篇の物語の發端として、曾我兄弟の父が討たれた事を物語つて居る。卽ち伊豆の住人工藤祐經は京に出て小松内府重盛に仕へてゐたが、偶叔父の伊東祐親の爲に所領の伊東莊を橫領せられて以來、兩家の間に不和を生じ、祐經の郞黨は祐親を狙つて果さず、其の子河津三郞祐泰を討つて纔かに怨を晴らした事を物語つて居る。祐泰が討たれた時、其の遺子一萬(十郞祐成)は五歲、筥王(五郞時致)に三歲であつたが、母が曾我祐信の許に再嫁

した爲に、其の家に養育せられた。一萬と宮王は父の仇を討つ事を片時も忘れる事なく、けなげな覺



曾我物語繪卷（久原文庫藏）

悟を抱いて成長し、幾多の艱難を嘗めて諸處に祐經を窺つてゐたが、遂に建久四年五月に賴朝が富士の裾野に狩を催した時、祐經を狩場の館に討つて本懷を遂げ、兄祐成（二十二歲）は仁田四郎の手に斃れ、弟時致（二十歲）は捕へられて鎌倉で殺されたといふのが、一篇の主要部となつて居る。而して最後に、曾我兄弟の母及び祐成の情人虎が尼になつて、其の菩提を弔つた事などを記して後日譚として居る。

　此の物語には諸所に支那印度の故事を引き、又主要人物以外に、大磯の虎、化粧坂の遊君、手越の少將などの如き女性を點出して、劇的興味を添へて居るのであつて、此等は從來の戰記物語に傚つたのであるが、殊に『平家物語』の影響を最も多く受けて居る。即ち組織の方面に於て、卷數を十二卷としたのは、流布本平家に傚つたの

であり、終の二卷を後日譚に充てたのも、平家の灌頂卷に擬したのであるが、更に思想の方面では、儒教思想と共に佛教の因果思想が中心となつて居るのは、『平家物語』以下の戰記物語に學んだのである。要するに『曾我物語』は、曾我兄弟が一心協力して、父の仇を報じた悲壯な事件を歴史小說化したものであつて、事實の儘を記したもので無い事は、其の記述を『吾妻鑑』と對照する時極めて明瞭である。曾我兄弟の復讎は、事件そのものが既に壯烈である上に、事の行はれた當時は天下が漸く小康を得た時であるから、一層天下の耳目を聳動したのである。從つて之を記した『曾我物語』は、『義經記』と共に國民に歡迎せられたのであつて、作品としての價値は別として、後の文學に多くの材料を供給した點に於て、文學史上に重要な位置を占めて居る。

合戰記

室町時代は戰亂相踵いだ時であるから、種々の合戰記が次々に現れた。歴史上の著名な事變の顚末を記したものには、既に平安朝の後期に『將門記』『純友追討記』『陸奥話記』などが現れ、次いで鎌倉時代には『承久記』『承久軍物語』『竹崎五郎繪詞』（蒙古襲來繪卷の詞書）などが現れた。平安朝末期までのものは漢文で記されて居るが、鎌倉時代以後のものは、戰記物語の文章の影響を受けて、和漢混淆文や往來物に近い新文體で綴られて居るのであつて、文學としての價値は概ね乏しいけれども、文章としては見るべきものが少くない。而して室町時代には益多く現れたのであつて、其の著名なもののみでも、『明德記』三卷、『應永記』一卷、『嘉吉記』一卷、『文正記』一卷、『大塔物語』一卷、『應仁記』三卷、『應仁略

記』二卷、『應仁別記』一卷、『永祿記』一卷、『鎌倉大草紙』二卷、『結城戰場物語』一卷、『相州兵亂記』四卷、『笹子落の草子』一卷、『中尾落の草子』一卷等を擧げ得るのである。此等の合戰記は多くは作者未詳であり、文學的價値の乏しいものであるが、事變の直後に記されたものであるから、史料としては重要なものである。而して是を文學發展の上から見る時には、御伽草子や舞の本に素材を提供して居り、更に系統は慶長年間に現れた『豐鑑』『信長記』『太閤記』などに及んで居り、更に續出した實錄物・軍談物の源流となつてゐるのである。

さて室町時代に續出した前記の合戰記の中で文章の勝れて居るのは、『明德記』『應仁略記』『結城戰場物語』『笹子落の草子』『中尾落の草子』等である。『明德記』は明德二年の山名氏清の亂を記したもので、文章は『太平記』を摸倣して、所々に七五調を混へて流暢である。『承久記』『應仁記』と合せて從來三代記と呼ばれた。『應仁記』は有名な應仁の亂の顚末を記したものであるが、文章の最も勝れて居るのは『應仁略記』である。次に『結城戰場物語』は嘉吉元年に、結城氏朝が足利持氏の遺子を守つて戰に敗れた事件を記したもので、文章は從來の戰記物語を摸倣して流麗である。最後の『笹子落の草子』と『中尾落の草子』は、天文十一二年の頃、上總の笹子の城主武田三郎信茂及び中尾城主後藤兵庫助が、其の居城を枕に討死した顚末を記した平明な物語であつて、戰記物語よりも寧ろ御伽草子に近い作品である。（以上述べた『明德記』以下の作品は何れも『群書類從』に收められて居る。）なほ此等の戰記の中には繪卷があつたが、今は『結城合戰繪卷』の中の摸本一卷（帝國圖書館藏）があるのみである。

第五章　御伽草子と舞の本

一　御伽草子

御伽草子

平安朝の寫實的な物語の系統を引いた擬古小說は、鎌倉時代の頃既に創意を缺いて、徒らに古物語の摸倣に終ると共に、空想的要素を多分に含む不自然な作品となつたのであるが、其の流を汲んだ短篇小說は、室町時代から江戸時代の初期にかけても、なほ引續き現れた。而して室町時代に現れた小說は時代を下るに從つて、內容は益通俗的となり且つ敎訓的となり、文章も亦平易通俗を旨とするやうになつたのであつて、後世これを一括して御伽草子と呼んで居る。御伽草子といふ名稱は江戸時代中期の頃から用ひられたのであつて、通俗小說の義である。（御伽といふ語を附した草子の最も古いのは、江戸時代初期の御伽草子の『御伽物語』萬治二年『伽婢子』寛文六年『續伽婢子』寛文年間『御伽比丘尼』貞享四年などであつて、老幼婦女の慰みばなしの意である。）室町時代の御伽草子は初め繪卷の繪詞や、奈良繪入本や、繪の無い寫本などで行はれたのであつて、これが版本として流布したのは江戸時代になつてからである。

刊本

卽ち享保年間に大阪の書肆澁川清右衞門が『文正草子』以下二十三部を集めて『御伽草子』と名づけ、繪入橫本の叢書として出版したのが最初である。而してこれを活版に附したのは、今泉定介・畠山健兩氏校定の『御伽草子』が最初であつて、これに漏れた二十篇は萩野由之博士編纂の『新編御伽草

子』に收められた。其の後以上二書以外の作品十七篇は平出鏗二郎氏校訂の『室町時代小說集』に載せられ、又藤井乙男博士校訂の『御伽草紙』（有朋堂文庫の内）には、更に未刊本十六種を加へて居る。なほ最近出版せられた島津久基氏著『近古小說新纂初輯』には、前記の四書に漏れた稀覯本十五種（内四種は舞の本）を拾輯してある。かくて以上の諸活字本に收錄せられた作品は總數九十餘篇に達するのであるが、此の外になほ寫本の儘で傳はつてゐるものが少くない。此等の作品は悉く作者未詳であり、創作年代も多くは明かでないのであつて、中には江戸時代の初期に作られたものも混入して居るが、大體に於て室町時代の小說と見做してよい。

特質

御伽草子は傳統的な題材を取扱つた興味本位の短篇小說であつて、作者の個性は殆ど滅却せられて居り、素材・構想・表現・文體・用語等も概ね類型的であるから變化に乏しい。而して文章は概ね平易な擬古文であるが、蕪雜平凡であつて、引用した詩歌や故事などに當を得てゐないものがあり、又古文學の摸倣剽竊は至る所にある。更に其の內容を見ると、主として荒唐無稽な說話形式のものであつて、敍述には主客の顚倒があり、前後の矛盾などがあつて、作者の創作的伎倆の缺乏は隨所に暴露されて居る。從つて御伽草子の文學的價値は概ね低級であるが、其の題材は主として當時一般に行はれた說話から取つたものであり、而もよく世相を反映して居るものであるから、當時の生活を見るべき資料となるのである。更にまた之を歷史的價値の方面から見る時は、從來の貴族的古典的文學が頽廢して通俗的民衆的となり、やがて來るべき江戸時代の平民文學、殊に假名草子に接續する過渡期の作品と

して、國文學展開の上に重要なる位置を占めて居るのである。御伽草子は多種多樣の作品を含んで居るのであるが、概ね類型的であるから、之を幾つかの種類に分類する事が出來る。藤岡作太郎博士著『鎌倉室町時代文學史』には、戀物語・兒物語・嫉妬物語附遁世物語・繼子物語附嫁いぢめ物語・英雄說話・復讐物語・孝行譚・祝儀物・佛教に關する物語・異類物などに分類してあるが、此等の中には二種若しくは二種以上の交錯したものが多いのである。今は作品の比較的多いもの、若しくは著名な作品を含むものとして、(一)戀愛物附稚兒物(二)靈驗物附本地物(三)英雄物(四)祝儀物(五)擬人物の五種に就いて、それぞれ作品の例を擧げて其の特質を說明しようと思ふ。

(一)戀愛物附稚兒物

(一)戀愛物附稚兒物　御伽草子の戀愛物の大部分は、平安朝以來の戀愛物語を摸倣して居るのである。例へば『忍音物語』は鎌倉時代の『石淸水物語』を摸倣したものであつて、相思の男女が親の爲に引離されて、男は悲歎の餘り出家し、女は忍音に泣き悲しんで居る中に、宮中に召されて女御となり、やがて皇后になつたといふ筋の物語である。又『轉寢草子』は或大臣の姫君が、夢の中に契つた左大將にあこがれて石山寺に詣でると、觀音の靈驗によつて現に其の人に會ふ事が出來たが、さすがに意中を打明けかねて、遂に歸途近江の湖水に身を投げた。偶左大將は寺からの歸るさに、そこを通り掛つて姫君を救ひ上げ、晴れて夫婦になつて末長く榮えたといふのである。此の外になほ著名な戀愛物に『櫻の中將物語』『若草物語』『雨やどり』等がある。此等は何れも王朝時代の貴族的な戀愛を主題として居るのであるが、主人公の出家遁世を物語つて居る點や、一體に宗教思想が濃厚である點などに、

時代の傾向が現れて居る。

此の種の戀愛物語から分派して、武士僧侶の愛慾生活の裏面を寫したものは稚兒物語である。『秋夜長物語』を例にとつて見れば、瞻西上人がまだ桂海律師といつて叡山の衆徒であつた頃、寵愛してゐた三井寺の稚兒梅若君が、天狗に捕へられて行方が知られずなつたのに端緒を開いて、三井寺と叡山の間に戰爭が起り、遂に三井寺は炎上したが、梅若は岩竈から遁れ歸つて此の有様を見て入水し、桂海は悲歎のあまり其の遺骨を首に懸けて諸國を行脚し、後に東山に雲居寺を創建して、修行を勵んだといふのである。これに類した物語には『松帆浦物語』『鳥部山物語』『幻夢物語』『初瀬物語』『嵯峨物語』等があるが、何れも主人公が出家遁世するのであつて、戀愛の末路が悲劇的であるのが其の特徴である。

(二)靈驗物 附本地物

(二)靈驗物附本地物　御伽草子には當時の宗教思想の影響を受けてゐないものは稀であるが、特に神佛の靈驗を語つて居るものを靈驗物といひ、神佛の緣起を説いたものを本地物といふ。例へば『狐の草子』は或僧都が美人に誘はれて其の家に行き、七年の間樂しく暮してゐたが、或日三四人の若僧が訪れて來た時、主人の女房を始め侍女が悉く狐になつて逃げ去つたといふ筋であつて、物語の末に若僧と見えたのは、地藏菩薩が靈驗を示したものである事を明かにして居る。これなどは純然たる靈驗物の例であるが、多くは英雄傳說・繼子物語・嫉妬物語・孝行譚・祝儀物などに屬するものであつて、純粹の靈驗物は比較的に少いのである。繼子物語に屬する作品で靈驗を加味したものには『小落窪』『美

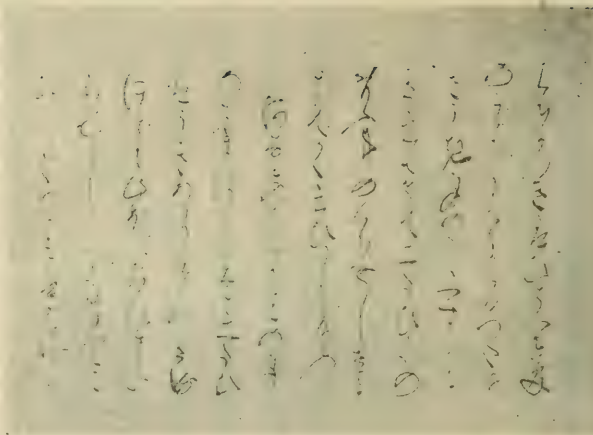
人くらべ』などがある。此等は『落窪物語』の系統を引いた作品であるが、前者は六角堂の觀音の利生を說き、後者は住吉明神の靈驗を語つて居る所に、此の時代の特質を示して居る。

鉢かづき草子

繼子物語に嫁いぢめの物語と靈驗譚を交錯した作品で最も名高いのは『鉢かづき草子』である。其の梗概は下の通りである。河内國交野に住む備中守さねたかは常に子供のないのを歎いてゐたが、偶一人の姫君が生れたので大いに喜んだ。北の方は其の姫君の頭に深い鉢を被せて、長谷の觀音に將來の繁榮を祈つて置いたが、不思議にも其の鉢は頭に附いて取れなくなつた。姫君は十三の時母に先立たれて以來繼母に育てられたが、遂に其の讒言によつて野原に捨てられてしまつた。姫君は悲歎の餘り水に身を投げたが、鉢のある爲に溺れる事もなく、人に救はれて流浪する中に、山蔭三位中將の家に召使はれ、やがて其の家の四男宰相に思はれて其の妻になつた。宰相の母は鉢かづきの姫を惡み、他の三人の嫂と共に嫁くらべをして恥かしめようと企てた。此の時忽ち姫の頭の鉢が落ちて、中から十二單の小袖や金銀の調度が現れ出たので、



奈良繪入本「鉢かづき草子」



（高野辰之博士藏）

宰相夫婦は喜び勇んで嫁くらべの席に列つた。姫は容貌が輝くほど美しい上に十二單を裝ひ、金銀の引出物をさへ差出したので、父母はこれより宰相夫婦を愛するやうになり、多くの所領を與へた。一方姫の父さねたかは其の後家運が衰へ、後妻との仲も面白くなかつたので、出家して修行に出たが、長谷の觀音の利生によつて姫にめぐり會ひ、宰相から河内國をもらひ、宰相夫妻と共に子孫繁昌したといふのである。而して最後に、

これただ長谷の觀音の御利生とぞ聞えける。今に至るまで觀音を信じ申せば、あらたに御利生ありと申し傳へはんべりける。この物語を聞く人は、常に觀音の名號を十返りづつ御唱へあるべきものなり。南無大慈大悲觀世音菩薩。

頼みてもなほかひありや觀世音二世安樂のちかひ聞くにも

と記してある。要するに靈驗物は、何れも不幸な境遇に置かれた主人公が、神佛の加護によつて忽ち繁榮するのであつて、不滿足な現實生活から解放せられて、空想世界に榮華を夢見る所に、當代の文學

たる特色があるのである。

次に本地物は本地垂跡說に基づいて、神佛の緣起を說くことを眼目とした物語である。『毘沙門の本地』『貴船の本地』『嚴島御本地』『梵天國』『おもかげ物語』(一名『辨才天本地』)等がそれであつて、何れも神佛の緣起を述べて、何々の本地であると結んだ荒唐無稽の說話である。此等の素材は佛教說話から取つたものが多いのであつて、何れも筋の稍複雜なものであるから梗概は省いて置く。

(三)英雄物

(三)英雄物　其の主なる題材は源平傳說・判官傳說・曾我傳說であつて、其の他は古英雄を主人公とする武功譚である。此等は戀愛譚・復讐譚・孝行譚・鬼神譚・靈驗譚などと結び付いて荒唐無稽な說話を形成して居るのであるが、此の時代の得意の作物であり、又民衆に最も喜ばれたものであるから、其の數はかなり多い。例へば『土蜘蛛草子』は源賴光と渡邊綱とが山蜘蛛を退治した說話を取扱つたものであり、『酒顚童子』は大江山の鬼退治を取扱つた草子であつて、此等は純然たる武功譚である。又『田村の草子』は坂上田村麿の傳說を本にして、豐玉姬と武甕槌命の神話に倣つて、大蛇傳說と靈驗譚とを結合した物語であり、『富士の人穴草子』は仁田四郎忠常が富士の人穴を探つた有名な說話に、富士權現の靈驗を織り込んだ物語である。英雄傳說を取扱つた作品は、下に述べる幸若舞の草子に極めて多いのである。

(四)祝儀物

(四)祝儀物　謠曲に祝言物が多いやうに、御伽草子の中にもめでたし〱で終つて居る作品がかなり多い。『七草草子』『梅津長者物語』『大悅物語』等は純粹の祝儀物であるが、靈驗物又は本地物の性

質を帶びた『文正草子』『物草太郎』『一寸法師』『福富草子』等も祝儀物であつて、物語としては寧ろ後者の方が勝れて居る。『文正草子』は鹿島大宮司さだみつの雜色の文太が、鹽燒を業として巨萬の富を積み、名を文正つねをかと改めたが、鹿島明神に祈つて儲けた二女の中、姉娘は關白の子三位中將の北の方となり、妹娘は宮中に召されて女御となり、文正は外戚として大納言に進み、一家悉く繁昌したといふ物語である。此の草子は祝儀と靈驗とを兼ねた作品であつて、子女が正月の讀初に必ず讀む慣例であつたと云ふ。次の『物草太郎』と『一寸法師』は童話に近い筋を含む作品であるが、前者はおたか大明神の權化であるが故に榮え、後者は住吉明神の申子である爲に成功したのであつて、祝儀物にして靈驗又は本地物を兼ねてゐる事は『文正草子』と同樣である。なほ『福富草子』は福富織部といふ放屁の名人があつて、その一藝によつて富み榮えたのを、隣の藤太が羨んでこれを眞似て失敗し、其の妻は織部を怨んで呪詛し、且つ外に出るのを待ち受けて噛みついたといふ物語である。これは物羨みをして失敗した舌切雀や花咲爺の話と同類の童話であるが、織部の成功には祝儀物の特色が見え、藤太の妻には嫉妬物語の傾向が著しいのであつて、種々の要素を含んで居る作品である。

(五)擬人物　祝儀物の條に擧げた『物草太郎』『一寸法師』『福富草子』の類は、後の童話の源泉として注意すべきものであるが、鳥獸蟲魚の類を人格化した擬人物(一に異類物)も亦童話に近い作品である。擬人物には戰記物語に倣つた合戰物、歌合に擬した歌合物、及び王朝時代の戀愛物語を模範とした戀愛物などがある。合戰物の名高い作は『精進魚類物語』(一名『魚鳥平家』)『鴉鷺合戰物語』等であ

る。前者は魚鳥元年八月一日に、精進物と魚鳥類とが座席の上下の爭から不和となり、互に合戰をした話であつて、『平家物語』に擬して作つたものであり、後者は京都の祇園林の鴉が、鴨の森の鷺の娘を戀して恥辱を受けたのが端緒となつて、合戰となつたが、烏鵲元年九月に決戰があつて後、何れも出家した事を物語つたものである。次に歌合物の例には、『鳥歌合』『蟲歌合』『調度歌合』『こほろぎ草子』などがある。『鳥歌合』は鷲を判者として、一番に鳶のきん助烏田の黑助の歌を合せ、以下十五番目の千鳥の百の助とかし鳥の七の助に至るまでの歌を擧げて居る。又『こほろぎ草子』には秋の蟲三十五種が集まつて、互に歌を詠む趣向を立てたもので、これも歌合物の一種である。次に戀愛物には『玉蟲草子』『のせ猿草子』『墨染櫻』『朝顏の露の宮』などがある。『玉蟲草子』は玉蟲姫を戀する蜻蛉の兵衛、蛙の雅樂助、蝗の宰相、鈴蟲の三位中將などが玉章や和歌を贈つて心を通はす話であり、『のせ猿草子』は丹波國のせ山の猿の子こけまるが、兎壹岐守の女玉よの姫に懸想し、狐のゐなかいどの媒介でめでたく結婚したといふ物語である。なほ『墨染櫻』と『朝顏の露の宮』とは草木の花を擬人した戀物語であつて、共に勝れた作品である。此の外になほ人間と禽獸草木との結婚を物語る作品がある。中納言の女かざしの姫君が菊の精と結婚した『かざしの姫君』、男鼠が畜生道の緣を遁れる爲に女と結婚した『鼠の草子』などが是である。要するに擬人物は種類も作品の數も極めて多いのであるが、何れも鳥獸蟲魚草木の名を借りたまでであつて、其の本來の特性を發揮したものが無いのは、幼稚の域を脫してゐないと言はねばならぬ。

以上述べた所によつて、御伽草子の特質は略ぼ明かにする事が出來たと思ふのであるが、元來婦女童幼の爲に作つた物語であるから、小說としては極めて低級である。併し其の素材は主として說話であつて、『今昔物語集』以後に廣く民間に流布した、各種の說話を保存して居る點に興味があるのである。而して此等の說話の範圍は國內のものばかりでなく、新しく支那印度から傳はつたものがあり、又遙かに泰西の說話から影響を受けたものもある。此等の外來說話は當時明との交通があり、又新たに南蠻との交通が開けた爲に輸入せられたのであつて、我が說話文學に新しい要素を加へたのは注意すべき事である。

二　舞の本

御伽草子に類似したものに舞の本がある。舞の本は幸若舞の詞章であるが、素材の種類、主題の取扱方、文章等が御伽草子と共通して居り、又中には草子を其の儘語物に用ひたのもあり、反對にもと語物として作られたものが、讀物として行はれたのもあるから、舞の本と御伽草子との間に明瞭な區別を設ける事は困難である。さて幸若舞は舞々とも呼ばれた。源義家の後胤桃井播磨守直常の孫の直詮（文明十二年歿七十八歳）が創めたものであるから、其の幼名の幸若丸を取つて舞の名としたのである。直詮の祖父の直常は南朝に仕へて武功があつたが、戰に敗れて所領越中の松倉城に退き、其の歿後に其の子直知は落魄して越前で歿した。直知が世を去つた時に其の子直詮は未だ幼少であつたが、比叡山に居る

舞と曲目

縁者をたよつて山に入り、和漢の學を修めた。幸若舞は直詮が山に居る頃、寺僧を慰める爲に創めたのであると傳へられて居る。其の創始の時代は明かでないが、恐らく應仁以前であつて、猿樂の能と同時代に流行したのである。幸若舞は下に述べるやうに、主として壯絶悲慘な英雄傳説を演ずるものであるから、自ら武家の歡迎を受けたのであつて、江戸時代になつてからも幕府の保護を受け、又貴人の宴席などにも招かれた。幸若舞の家は代々越前に住んでゐたが、江戸時代の初期には既に舞を棄てて音曲のみとなり、其の後明治維新の頃家元は絶えてしまつた。併し其の一派は今もなほ筑後の山門郡大江村に、纔かに其の名殘を存して居る。なほ幸若舞の女舞は江戸時代の中頃まであつた。

幸若舞は一名を草子舞とも呼ばれたのであつて、もとは草子に曲節を附けて吟誦したのであるが、後に大鼓と小鼓の囃を加へて、簡單素朴な所作を演ずるやうになつたのである。而して曲節は平曲・宴曲・曲舞などから脱化したものであり、舞技を演ずる太夫は立烏帽子に大口を著用したのである。舞の曲目は三十六番となつて居るが、組合には多少の出入がある。例へば貞享年間の書籍目錄には「大織冠」以下「腰越」に至るまでの三十六番を擧げて居るが、『群書一覽』には其の中の「鎌田」と「和泉が城」を缺いて、別に「夢合」と「剱讃歎（つるぎさんだん）」の二番を加へて居る。現存する曲目の總數は凡そ五十番であるが、此の外に御伽草子の中の或物も實演せられたやうである。現に「濱出」は御伽草子二十三部の中に加へられて居り、又「築島」は『新編御伽草子』の中に編入せられて居る。幸若舞の草子も御伽草子と同樣に讀物としても行はれた事は、「築島」「入鹿」「笛の卷」「和泉が城」其の他が奈良繪入本として傳へられ

て居るのを見て察知せられる。

題材

舞の本の作者並に成立年代は、御伽草子と同樣にすべて未詳である。中には一人の手に成つたのでなく、漸次書き改めたのもあるであらうし、また御伽草子を改修したのもあるであらう。曲目の中には「日本紀」「大織冠」「入鹿」「百合若大臣」「信田」「張良」のやうなものもあるが、大部分は源平時代の英雄傳説を取扱つたものである。源平物の中でも「築島」の如きは、清盛が經の島を築いた時、吉祥天女の化身の名月女が父の命乞をし、大日王の化身の松王が多くの人に代つて人柱となつた事を物語つて居るのであつて、是は本地物であり、又「濱出」は鎌倉の繁榮を語つた所謂祝儀物である。併し此等は寧ろ異例であつて、主なるものは武家の嗜好に迎合した武勇物である。即ち最多數を占めて居るのは判官物の十四番であつて、義經一代の事が悉く取扱はれて居り、これに次いで多いのは曾我物の七番である。判官物と曾我物が特に多いのは、弱者に同情し、悲壯な武勇を讃美する時代精神の反映であつて、幸若舞に限られた現象ではない。

特質

舞の本は主として戰記物語から素材を得て居るが、之に種々の傳説口碑を取入れたものであつて、場所事件の統一を缺くものが少くない。其の樣式は劇詩としての謠曲に比して、遙かに劇的要素の乏しい敍事詩的作品である。文章は時に『平家物語』に似た七五調の所もあるが、概して御伽草子に近い散文であつて、素朴であり平易である。かくて舞の本の文學的價値は、御伽草子と同じく低級であるが、謠曲と同じ題材を取扱つた作品が多く、又後の戲曲・脚本・小説などに幾多の材料を供給し、其の

文章は古淨瑠璃に多大の影響を與へたのであるから、劇文學の淵源研究の資料として、重要なものである。

第六章　隨筆日記紀行

徒然草

平安朝時代の『枕草子』以後隨筆文學の傑出したものを見なかつたのであるが、約三百五十年を經て南北朝時代に兼好法師の『徒然草』が現れた。『徒然草』は古來『枕草子』と併せて隨筆の雙璧と稱せられて居る。兼好の傳は詳かでない。江戸時代に書いた兼好の傳が數種あるが、多くは中園太政大臣公賢の日記『園太暦』を基にして、俗說又は想像によつて記したものであつて、而も所謂『園太暦』所載の記事と稱するものが、現存する諸本（完本は傳はつてゐない）に殆ど見えないのであるから、大體に於て信用し難いのである。從つて現在では『徒然草』と家集とによる外はないのであるが、今は姑く從來行はれた傳記の中で、稍信ずるに足ると思はれる事項をも取り交ぜて略傳を記して置く。

兼好法師

兼好は俗名を卜部兼好（吉田氏とも）といひ、代々京都の吉田神社に仕へた神道家の家に生れた。父は治部少輔兼顯といひ、兼好の長兄は大僧正慈遍であり、次兄は民部大輔兼雄であつて、彼は第三子であつた。兼好は壯年の頃宮中に仕へて藏人・左兵衛尉などに任ぜられ、特に後宇多院の寵遇を辱うし、歌人として宮廷を始め貴紳の間に重んぜられた。然るに中正元年（兼好四十二歳）に院が崩御遊ばされたので、哀悼に堪へずして剃髮し、俗名を其の儘に音讀して法名とした。其の後京洛の地は元弘戰亂の巷となつた

ので、戰塵を避けて木曾路に分け入り、御坂の邊に一時隱棲してゐたが、再び東國を遍歷して京に歸り、雙ヶ岡に草庵を結んで櫻を植ゑ、「植ゑおきし花とならびの岡の邊にあはれ幾代の春を過ぐさむ」と詠んだ。而して晩年には伊賀國國見山の麓田井庄（今の種生村）に移り、正平五年（北朝の觀應元年）に其の地で歿した。時に年六十八であつた。

成立年代

『徒然草』の成立に就いては三條西實枝（三光院實澄）の『崑玉集』によれば、今川了俊が、兼好の侍童であつた命松丸と從者伊豫太郎光貞をして、吉田と伊賀の草庵に遺つてゐた兼好の遺稿を拾ひ集めさせ、手許にあつた草案と共に纏めたのが『兼好法師家集』と『徒然草』とであるといふ。併し此の說の信じ難い證としては、『徒然草』の中に讀者を豫想した書き方のある事、及び各段の序列が整然としてゐる事などを擧げ得るのであつて、作者はやはり最初から纏まつた一篇の感想錄として書き遺したのであらうと思はれる。次に執筆年代に就いては、土肥經平の『春湊浪話』（存採叢書所收）に此の草子中の記事の考證によつて、前半を建武三年以前の作とし、後半を建武三年以後の執筆として居るのである。併し此の考證に用ひた資料は僅かに二箇條であり、而も其の考證は極めて杜撰なものであるから、是を其の儘採用する事は出來ない。最近橘純一氏は草子中の記事並に人物の官位などの年代を詳かに考覈して、後醍醐天皇の正中元年六月から元弘元年九月に至るまでの七箇年間、卽ち兼好が四十二歲から四十九歲までの間の或る時期に執筆したものである事を考證せられた。（歷史と國文學昭和六年一月號）思ふに兼好が此の草子を書いたのは、右の考證の通り建武中興以前であつて、作者晩年の作でない事は殆ど確實なやうである。

內容

『徒然草』は二卷より成り、二百四十餘段（章段は後人が便宜上分つたものである。）の長短樣々な隨感隨想を收めたもので、其の內容は自然と人生の觀察・追憶・批評・論說・見聞・考證などである。此の書は作者が自ら冒頭に記して居る通り、「心にうつり行くよしなしごと」を感想の涌くにまかせ、思ひ出づるにまかせて、斷續的に書き續けたものであるけれども、多くは數段に亙つて聯想を追うて書き列ねられて居る。これを文學の系統の上から見れば、『枕草子』に倣つた所が多い事は明かであつて、四季折々の景趣並に年中行事に對する趣味的觀察や、物盡しの形式による記述や、情景融合の詩的小品などがあるのは、其の影響の著しい點であるが、彼に見出し難い特色があるのは、一は時代の變遷により、一は作者の個性の相違によるのである。卽ち『徒然草』には覇氣に充ちた主張があり、高い識見による評論があり、人生に對する宗教的または哲學的の洞察があり、なほ達人らしい處世訓などがある。其の他逸話奇聞や有職故實に關する考證などの多い事も、此の書の特徵である。

兼好の思想

兼好は神道家に生れ、和歌に長じ、儒教老莊の學說にも親しみ、又佛門に歸依した人であつて、其の閱歷と學識は極めて多方面に亙つてゐる。『徒然草』に「文は文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことば、南華の篇、此の國の博士どもの書けるものも、古のはあはれなること多かり」と云ひ、又諸所に『古今集』『源氏物語』『枕草子』などの古典文學に關する事を記してゐるのを見ても、彼の涉獵がかなり廣かつた事を窺ふことが出來る。從つて『徒然草』に現れた兼好の思想は極めて複雜であつて、一見厭世と樂天、感情と意志、空想と現實などが相並び存し、且つ互に矛盾撞著してゐるやうな奇觀を

呈して居るのである。從來兼好を評して雜駁散漫な思想家であるとしたのも當然である。『徒然草』に現れた彼の思想は、かくの如く多種多樣であるが、其の著しいものを擧げれば、佛教の厭世思想、老莊の虛無思想、儒教の中庸思想、情趣尊重の享樂思想、王朝文化に憧憬する尙古思想の五つである。卽ち作者は書中至る所に、巧妙な譬喩を借りて無常迅速の世相を說き、名利に奔走して安き心のない人々の愚さを愍み、且つ之を戒めて居るのであるが、一方に於ては無慾恬淡にして物に執著しない老莊の思想にも共鳴し、又中庸の道を說く聖賢の教にも屢敬服して居るのである。併し兼好は極端な厭世家でもなく、また超俗の高士でもなく、一面に於ては平安朝文化の餘薰にあこがれて、現實生活の不滿足を補はうとしてゐる。卽ち彼は屢王朝文學に見るやうな、情景融合の詩境に自己を置いて眺めて居り、又再現し難い過去の文藝故實などに對する、追憶と憧憬の中に自己の趣味を滿足させてゐるのであつて、此等の點から考へると、兼好は理想と趣味に生きた人であつたのである。思ふに兼好は偏狹頑迷な思想家でもなく、また脫俗の高僧でもなかつた。小我に囚はれず名利の奴隷とならざる解脫の境に到達すると共に、現實生活に對しては別に彼獨得の趣味性に基づいて、中庸に安住する人生觀があり、處生觀があつたのであつて、彼はそれと共鳴するものを見出すとき、直ちに之を採用する所の廣汎なる常識と趣味とを備へてゐたのである。かくて兼好は物の表裏明暗を省察して、それぞれの眞を認めると共に、それにも增して美を認めたのであつて、彼自身にとつては、後世の批評家が言ふやうな矛盾を感せず、又撞著とも思はなかつたのであらう。要するに『徒然草』は詩人肌の思想家の

其の時々の自己を赤裸々に告白した感想錄である。而して之を時代の文學として見る時は、當時は政治宗敎思想文藝等あらゆる方面に於て、互に相容れざるものが對立相剋してゐた時代であつて、統一的機運と補綴的傾向とが著しく起つた時代の特徵は、やがて此の作品の上にも反映して居るのである。兼好が此の時代思潮に棹した人である事は、閱歷並に修養が既にこれを明白に物語つて居るのであつて、彼も亦時代の兒であつたのである。

文章

『徒然草』の文章は大體から見て兼好が創成した新擬古文であるが、其の中にも自ら二樣の文體がある。一は作者が憧れた平安朝の古典文學、殊に『枕草子』の文章の感化を受けたものであつて、純國文脈により雅言を自由に使驅した、流麗典雅な擬古文である。他の一は鎌倉時代の戰記物語を始め、說話文學隨筆日記などを經て發達した和漢混淆文を基とし、これに更に優雅な擬古文の長所を加へて、渾然融合した彼獨得の文章である。兼好の文章の特色はいふまでもなく、擬古的の和漢混淆文にあるのであつて、適度に古語漢語佛語を混用し、又漢文の句法を加味して或は平淡簡勁であり、或は輕妙洒脫であつて、才氣縱橫の筆致を示して居る。而して『徒然草』に存する此の二樣の文體は、題材の種類性質に應じて、それぞれ變化して其の妙趣を發揮して居る。例へば「神無月の頃」「長月二十日の頃」「春の暮つ方」「あやしの竹の編戶」「荒れたる宿の」「北の屋かげに」（例一）などの如き平安朝式の情景を描寫する時は、優麗典雅な擬古文を用ひて、屢平安朝の物語を凌ぐ程の筆致を示して居る。また「應長の頃」「仁和寺の法師」「下部に酒飮ますること」「奧山に猫又」「宿河原といふ所」の如き逸話奇聞

の類の敍事には、主として和漢混淆文を用ひて、警句に富み諷刺の妙があり、殊に敍事の進行に於て又印象的な描寫に於て、作者獨得の文才を揮ひ、他の作家の追隨を許さぬ特長がある。而して「名利に使はれて」「蟻の如くに集りて」（例二）「牛を賣る者あり」「世に從はむ人は」「達人の人を見る眼」の如き感想觀察評論などを記した諸條には、人情の機微を穿ち時弊を抉剔して、人をして傾聽せしむるものがある。其の文章は時として擬古的の事もあるが、多くは漢語を混へ漢文直譯の句法を加味して簡勁明快である。かくて兼好の文章は極めて自在であり、且つ洗煉せられてゐて、隨筆の文章としては清少納言と共に、我が文學史上に光彩を放つてゐる。蓋し「徒然草」の文學的價値は其の文章に負ふ所が尠くないのである。

文例

（例一）北の屋かげに消え殘りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轅も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども隈なくはあらぬに、人ばなれたる御堂の廊に、なみなみにはあらぬと見ゆる男、女と長押にしりかけて物語するさまこそ、何事にかあらむ盡きすまじけれ。かぶしかたちなどいとよしと見えて、えもいはぬにほひの、さとかをりたるこそをかしけれ。けはひなどはづれはづれ聞えたるもゆかし。

○

（例二）蟻の如くあつまりて、東西にいそぎ、南北に走る。高きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり。夕にいねて朝に起く。いとなむ所何事ぞや。生を貪り利を求めてやむ時なし。身を養ひて何事をか待つ。期する所ただ老と死とにあり。其の來る事速かにして、念々の間にとどまらず。これを

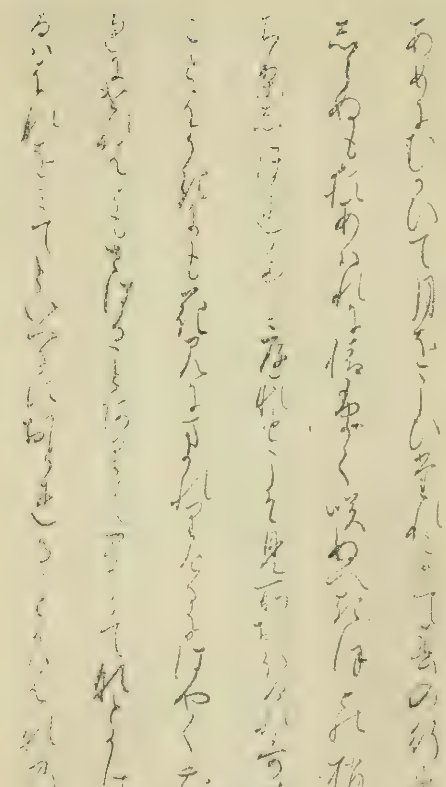
待つ間何のたのしみかあらむ。惑へるものはこれを恐れず。名利に溺れて先途の近き事をかへり見ねばなり。愚なる人はまたこれを悲しむ。常住ならむことを思ひて、變化の理を知らねばなり。

『徒然草』は戰國時代の頃までは其の名さへ知られてゐなかつたのであるが、慶長の頃から漸く世にもてはやされるやうになり、江戸時代の中期頃までは、他の古典文學を壓倒する程の勢を以て天下に流布した。而して江戸時代の初期には假名草子の中に、此の作品に擬し又はこれから暗示を得た幾多の作品が現れた。次いで元祿時代には西鶴や芭蕉にも多大の影響を與へ、やがて俳文の源泉ともなつたのであるが、其の他廣く通俗文學に影響を及ぼし、遂に兼好の逸話や傳説の如きものが、戲曲小說の題材に取扱はれるやうになつた。從つて『徒然草』の註釋は古來極めて多く現れたのであつて、其の數は『源氏物語』や『伊勢物語』にも劣らぬほどである。現存する最古の註釋書であり又諸註の原據となつたものは、慶長九年に刊行せられた古活字版の『つれづれ草壽命院抄』二冊である。此の版本は今は稀覯本となつて居るが、最近複製本が刊行せられた。

寫本及び刊本

『徒然草』は室町時代の末まで轉寫によつて傳へられてゐたが、江戸時代の初期に活字版が盛に行はれるやうになつてから、十數種の版本が次々に現れた。其の中で最も古いのは、嵯峨本と烏丸光廣本である。嵯峨本は藤原惺窩の門弟角倉素庵が、精巧な活字で印行した雲母摺であつて、印刻の美觀を以て名高いものである。烏丸光廣本は流布本の原據となつたもので、慶長十八年の奧書のある古活字版である。又宮內省圖書寮所藏の一本は、最近『日本古典全集』に影印して收められた。古寫本には諸

家に藏せられてゐる數種があるが、宮内省圖書寮所藏の細川幽齋所持本の轉寫本は、光廣本と共に古い面目を保持するものである。此の寫本は其の奥書によれば、幽齋が其の三男幸隆から讓り受けたものの轉寫本であつて、延寶七年の筆寫である。（圖版參照）以上述べたのは何れも流布本系統のものであるが、此等に對する異本として注意すべきものは、龍谷大學所藏の延德本、靜嘉堂文庫所藏の正徹自筆の『つれ〴〵種』などである。前者は延德の奥書のある寫本であり、後者は永享三年筆者が四十九歲の時の筆寫であつて、共に流布本に比して相違する所の多い異本として、最近學者の注意を



幽齋本徒然草
（宮内省圖書寮所藏）

惹くやうになつた。此の外最近松尾聰氏が發見せられた古寫本がある。是は更に古く、文明を下らざる頃のものであらうと言はれて居る。

日記及び紀行

『徒然草』以外に公卿や連歌師の隨筆又は日記がかなりあるのであるが、文學として價値のあるものは殆ど無い。此の間にあつて稍見るべきものは、王朝の女流日記の形式を踏襲した『竹むきの記』（二卷）（國書刊行會編史籍雜纂第一所收）である。筆者は日野資名の女で、西園寺公宗の夫人となつた竹向である。室町時代の亂世には、京都の公卿や武士僧侶で諸國を遍歷する者が多かつたから、幾多の紀行が續出した。當時現れた紀行で現存するものは凡そ四十種程あるが、多くは一卷若しくは二卷であり、內容文章共に類似して居るのであるから、今概括的に考察しようと思ふ。當時の紀行で文學として價値のあるものは、南北朝から文明年間までに現れたのであつて、大體二種類に分つ事が出來る。一は前代の紀行を摸倣した和歌の趣味を中心とするもので、其の文章も優雅な擬古文である。又他の一は和歌の外に連歌や漢詩を多く挿入したもので、文章は和漢混淆文、若しくは「侍り」を用ひた新古混用體であり、記述にも著しく新味がある。筑紫の僧宗久が京に上り更に東國から奧州を行脚した時の紀行『都のつと』や、二條良基が美濃の行宮に行つて後光嚴天皇に陪從した時の事を記した『小島の口ずさみ』などは、前者に屬する代表的紀行である。又今川了俊が九州探題となつて下る時に記した『道ゆきぶり』、一條兼良が美濃國に旅行した時の『藤河の記』、准后道興が北陸東海奧羽地方を遊歷した時の紀行『廻國雜記』、宗祇が筑紫を行脚した時に記した『筑紫道の記』などは後者に屬する出色のもので、作者の文藻を

見るべき作品である。室町時代に記された紀行は主として歌人連歌師の手に成つたもので、其の足跡は東は奥羽に及び、西は九州に及んで居るのであつて、地域は著しく擴張せられて居り、挿入せられた詩歌の種類も多いのであるが、時代を下るに從つて平凡單調になつた。かくて室町時代後期の紀行に主として記す所は、社寺名所舊蹟や、地方の風俗若しくは旅宿の有樣などであつて、從來の紀行に見るやうな自然の描寫や、筆者の心境の記述は著しく減じたのであつて、讀者に倦怠を感ぜしめるものが多い。要するに室町時代の紀行は、時代を經るにつれて、文學的價値が益低下したのであるが、從來の和歌を中心興味とする貴族的なものから、漢詩連歌發句の趣味を主とする、一種平民的な新しい趣味のものに推移したのは、江戸時代の紀行の先驅として注意すべき事である。なほ室町末期に公卿武士又は連歌師が書いた紀行は、文學的價値は乏しいのであるが、世相を反映するものが少くないのであつて、時代の研究資料として貴重なものが多い。

第七章　謠曲狂言及び小歌

一　謠曲

幸若舞に先だつて大成せられ、而も室町時代の藝術を代表するものは猿樂の能である。幸若舞はなほ舞踊の域を脱してゐないが、猿樂の能は謠と囃と形(かた)とから成る一種の樂劇である。而してこれを我

が演劇史の上から見れば、前代の說話・歌舞・謠物・雜伎等の長所を集成し、やがて江戶時代になつて起るべき淨瑠璃劇・歌舞伎劇の發達を導く重要なる位置に立つてゐる。猿樂の能は單に能ともいひ、明治の初期以來は能樂と呼ばれてゐる。能を演ずるには先づ一定の形式によつて造られた能舞臺があつて、主人公に扮したシテ、其の對手を勤めるワキ、及びシテ・ワキを助けるシテヅレ・ワキヅレ以下、子方・トモ・アヒなどの端役を勤める者などが登場して、臺詞を述べ歌をうたひ舞を演ずるのであるが、此の外に六人乃至八人の地謠方があつて、同吟によつて登場人物の臺詞を補ひ、又は仕種を說明し、更に四人の囃子方があつて、笛・小鼓・大鼓・太鼓を用ひて、それぞれの曲を奏するのである。而して能の臺本たる謠曲は、右の如き組織に應ずる爲に作られたもので、登場人物の臺詞または謠物の外に、なほ地謠方が吟誦する地の文をも含んでゐるのである。今謠曲に就いて述べるには、先づ猿樂の能の起原と發達の大要を略說して置かねばならぬ。

能の起原

猿樂の名はもと奈良朝の頃、支那から傳來した俗樂の散樂から出てゐるのであつて、猿樂の淵源をこれに求める事は廣く行はれてゐる所であるが、其の他に平安朝以來行はれた田樂や、鎌倉時代の中期に大成した延年舞などから起つたとする說があり、又古く推古天皇の朝に支那から我が國に渡來した伎樂に源を求める說もある。かくの如く猿樂の能の起原に就いては諸說があるのである。要するに猿樂の能はもと滑稽を旨とする對話問答や物眞似を演ずる雜伎から發足し、平安朝の末から鎌倉時代の初期にかけて、各種の歌を取入れると共に、曲舞・延年舞・田樂能などの長所を集成して、終に一の

樂劇となつたものである。而して樂劇としての能は、古典的な歌舞を生命としてゐるのであるが、能の一部として若しくは對立して行はれる狂言は、猿樂本來の滑稽な物眞似掛合の系統を承けて、寫實的喜劇として發達したのである。

能の流派

さて古風の猿樂は平安朝の末期以來、朝廷の儀式や社寺の神事法會などの餘興に用ひられたのであるが、鎌倉時代になると近畿地方に猿樂師の團體が出來て、其の地方の著名な社寺に附屬して猿樂座と稱へてゐた。鎌倉時代の末頃から南北朝にかけて、猿樂座として名高かつたのは、大和猿樂・近江猿樂・法勝寺猿樂・伊勢猿樂などであるが、室町時代初期には大和と近江の猿樂が最も榮えてゐた。而して近江猿樂は舞樂の如き優雅にして古典的な趣を出す事に努め、大和猿樂は寧ろ寫實を重んじて、戲曲的發展を圖つたのであるが、其の主義に於て進歩的であつた上に、引續き名人を輩出した大和猿樂は、從來の歌舞・雜伎・諸物などの粹を集めて、益發達を遂げ、終に他を凌駕して獨り榮えたのである。而して大和猿樂には圓滿井（金春）外山（寶生）結崎（觀世）坂戸（金剛）の四座があつた。其の末流を承けたのは金春であるが、新生面を拓いて能を完成したのは結崎である。後世五流といふのは、此の四座に、江戸時代になつて金春（一説には金剛）から分れた喜多流を加へたのである。

能の完成者

能を大成したのは結崎次郎清次（至徳元年歿五十二）及び其の子元清（嘉吉三年歿八十一他に異説がある。）である。結崎は他の三座と共に、春日神社の神事に猿樂を演じてゐたのであるが、將軍義滿に認められて其の擁護を受け、父は觀阿彌、元清は世阿彌の名を授けられた。觀阿彌は舞伎に堪能であつて、田樂・曲舞などの長所を取つ

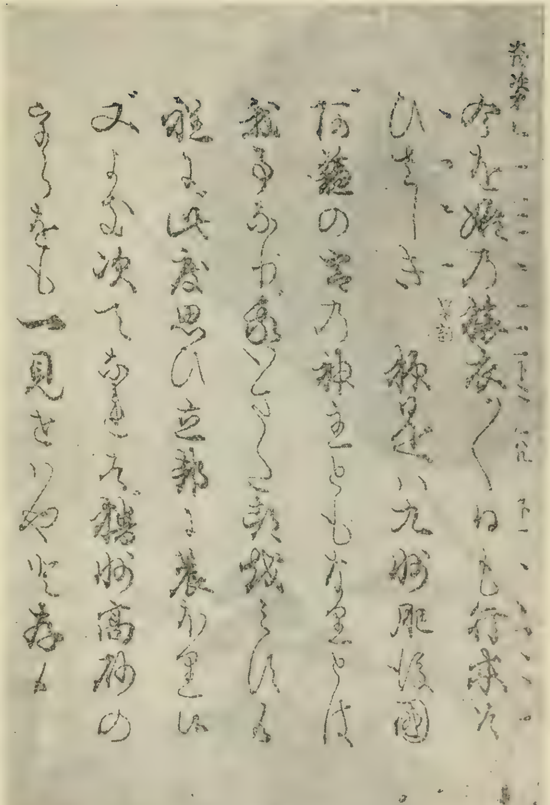
て猿樂に寫實風を加へる事に成功し、且つ自ら數曲を作つた。又其の子世阿彌は父にも勝る藝能と見識とを備へて、更に各種の舞伎の粹を集めて能を完成すると共に、從來の詞曲を改造しまた自ら數十番の新作を試みた。世阿彌は謠・舞・樂の三方面を兼ねた天才であつて、其の遺著には能の藝術論を記した『花傳書』、能の作法を說いた『能作書』、能樂史の根本資料となつた『申樂談儀』等、凡そ十六部があつて、いづれも後世能の金科玉條と仰がれた。此等の遺著は先年吉田東伍博士の手によつて拾集せられ、『世阿彌十六部集』(一卷)として刊行せられた。かくて世阿彌は能の大成者として、聲望を一身に集めたのであるが、義敎將軍の時に失脚し、其の後は世阿彌の甥元重(音阿彌)及び女婿氏信(金春禪竹)等が、これに代つて其の發達に努めた。併し音阿彌の後には特に勝れた名手がなかつたので、應仁以後は他の文藝と共に頓に衰運に向つたのである。能は其の後豐臣秀吉の保護の下に再び榮え、次いで江戶時代になつて歷代の將軍の愛護を受け、又諸大名にも愛好せられて、廣く天下に普及したのであるが、時代を經るに從つて漸く固定して、一の古典劇となつて今日に至つたのである。

謠曲は主として能役者の手に成つたのであつて、作者として先づ擧ぐべき者は觀世父子である。觀阿彌の作は極めて少數であるが、世阿彌の作と稱せられるものは百數十番に達して居る。併し其の中には古曲を改作補綴したものが少くないのであつて、眞に彼の作と信ずべきものは百番以內である。其の後の作者として知られてゐるのは、世阿彌の甥元重の子觀世小次郞信光、其の子彌次郞長俊、及び世阿彌の女婿金春禪竹、其の孫禪鳳等である。而して番數は普通內外二百番といはれて居るが、時

代と共に次々に作られたのであつて、豊臣氏の時代には五百番を超え、更に其の後多くの新作が現れた。かくて番數は極めて多いのであるが、實際に演じられた數は、流派の異なるに從ひ又時代によつて相違するけれども、凡そ二百番を出る事はなかつた。

能を演ずる場合には、題材の異なるものを組合せて番組を作るのであるが、其の數は五番を普通とする。（時には六番乃至十番演じた事がある。なほ近來は三番内外を以て慣例としてゐる。）五番の順序は一定してゐる。シテを中心として云へば、神・男・女・狂・鬼の順序に演ずるのであつて、之を脇能・二番目・三番目・四番目・尾能といふ。この組合は大體に於て其の儘謠曲の分類にも適用する事が出來る。今此の順序によつてそれぞれの題材と特質とを略說しようと思ふ。最初に演ずる脇能は曲柄によつて神事物とも稱せられる。其の題材は主として社寺の緣起や神話傳說などから取つたのであつて、祝言の意をこめたものが多い。例へば「老松」「賀茂」「高砂」「弓八幡」「松尾」「竹生島」「鶴龜」の如きである。二番目は修羅物といふ。戰場で討死した武人が修羅道の苦患に惱んでゐるのを、旅僧の回向によつて救ふといふ說話を取扱つたものが多いので、此の名稱を得たのである。其の素材は、『平家物語』『保元物語』『平治物語』などの如き戰記物語から取つたものが多い。例へば「田村」「兼平」「八島」「忠度」「箙」「巴」の如きである。三番目は女性を主人公とするものであるから一に鬘物といふ。主として『源氏物語』『伊勢物語』『大和物語』等の平安朝の物語、若しくは王朝式の情話から取つたものである。「井筒」「野宮」「夕顏」「住吉詣」「熊野」「松風」「羽衣」などが是に屬する。四番目は人情を主とするも

ので、時に主人公が感情の興奮した結果狂亂に陷るものがあるので、狂物又は狂女物ともいひ、又當時の世話巷談などから材料を取つたものが多いので、一に現代物とも稱へられてゐる。併し其の題材は必ずしも當時のものと限られてはゐないのであつて、古典文藝や「平家物語」「曾我物語」「義經記」などから取材したものも少くない。而して四番目物の番數は極めて多く、また内容の種類も樣々である。例へば曾我物・判官物と稱せられる數曲



光悦謡本「高砂」（嵯峨本考に據る）

の如きは、戰記物語から取材したものであるが、現代物の中には子を慕ふ親心を主題とした「隅田川」「三井寺」の如きがあり、父子若しくは主從の再會する說話を仕組んだものには「高野物語」「弱法師」等があり、又復讐說話を取扱つたものには「望月」「放下僧」等がある。かくて四番目が現實味の勝つた人

情物であるのは、三番目の題材が古典的であり、且つ幽玄な舞を中心とするのに對して、對照の妙を得てゐるのである。最後に五番目に演ずる尾能は、一に鬼畜物ともいふ。戰記や傳說中の鬼畜を征服する說話を取扱つたものが多いのであつて、太刀打や早舞などによつて、賑やかに演じ收めるのである。「土蜘蛛」「羅生門」「鞍馬天狗」「紅葉狩」「鵺」「龍虎」の如きがこれである。（番組を六番とする時には、最後に祝言物の「岩船」「猩々」の如きものを演ずる。）

謠曲の題材は舞の本や田樂の詞章と大差のないものであるが、其の結構脚色は遙かに發達を遂げて居る。尤も謠曲はなほ一幕物であるが、其の多くは中入を境として、シテが前後に姿を變へて現れる事によつて、自ら二部に區分せられて居る。中入のないものは古い形式のものであつて、いはゆる單式能であり、中入があつてシテが前ジテと後ジテとに分たれるものは、後に發達した形式であつて、複式能と呼ばれる。（單式複式は芳賀博士の命名による。）かくて複式能にあつては、前後の對照變化の妙があつて事件の推移を示し、内容を複雜にする事が出來るのであつて、劇としては單式能よりも一歩を進めたものである。神事能に就いて云へば、初めにワキの神主又は旅僧の如き者が現れて、神社又は名所を訪れて、そこに住む前ジテの漁夫や老人などに、神社の緣起又は名所の由來を尋ねる。前ジテの里人はそれに就いて委細を語つた後、何神の化身又は何の精靈であると告げて姿を消す。（中入）ワキは此の有樣を見て奇特の思ひをして、手向なり回向をしてゐると、後ジテが先に告げた神または精靈の正體を現して、御代を壽ぐ神舞の如きものを奏しつつ、天上に歸るといふ筋になつて居る。此の結構脚色は複式

能の定型であつて、之を二番目三番目などに應用したものは、いはゆる精靈能である。今修羅物に就いて見るに、シテは同じ英雄であつて、前ジテとしては里人となつて現れ、後ジテとしては英雄の亡靈となつて現れるのである。而して前ジテはワキの旅僧に對して、戰爭の梗概を委しく語つて姿を消し、中入後には後ジテはありし日の姿となつて現れて、其の後日の物語をするか、又は修羅の巷に苦しむ有樣を舞で示すのである。元來能は人を夢幻境に誘つて置いて、幽玄なる舞を示す事を中心としてゐるのであつて、精靈能は其の最も代表的なものである。併し右の如き結構による時は千篇一律の弊に陷り易く、又時としては中入の前後が、何等必然的の關係のない緣によつて結合せられるやうな無理を生ずるのである。此の弊を除く爲には、狂物に於けるが如く、ワキを殆ど傍觀者の位置に置くか、若しくは「小袖曾我」「夜討曾我」のやうに、全くワキを除き去つて、シテをして一層重要なる役を勤めしめるか、又はそれと反對に「安宅」に於ける富樫や「羅生門」の渡邊綱の如く、ワキの位置を高めてシテと同等にするのである。かくの如くなると、能は既に舞を中心とする敍事的なものから轉じて、寫實的な劇に一歩を進めて居るのであつて、現代物の多くは此の仕組によつて作られてゐる。かくて現代物には既に必ずしも舞を必要としないのであり、又結構に於ても必ずしも複式を必要としなくなるのである。卽ち現代物のシテは多くの場合前後同一であり、中入は單に場面を變へる爲の幕切の如きものとなつてゐるのであつて、これが爲に複雜な事件を取扱ふ事が出來るのである。「望月」や「鉢木」の如きは此の傾向の著しい作品であつて、從來の曲に比して遙かに劇的興味に富んでゐる。

謠曲の素材は主として過去の說話や文學などから取つてゐるのであるけれども、是をもとの姿の儘に取扱ふ事は稀であつて、多くは時代思想によつて潤色を加へるか、或は作者の理想によつて脚色するのである。先づ時代の反映として目につくのは、武士道の高唱と家庭道義の强調である。卽ち私情を棄てて主從の節義を尊重し、戀愛を否定して親子の愛情を先とするやうなものが多いのであつて、四番目物は主としてこれである。而して此等は劇的發達に近づいた現代物に多いのであつて、謠曲の本領は寧ろ他にあるのである。能は元來事件の發展や性格の變化などを重んずる後の劇文學と異なつて、主題は極めて單純な事件であり、しかも特に其の眞髓だけを取り出して、簡單な舞伎と歌曲によつて、これを象徵的に表現するのである。卽ち能はもと寫實的な物眞似から發達したものではあるけれども、現實社會を寫す事は狂言に讓つておいて、寧ろ神韻縹渺たる情趣の裏に、醜惡な現實を忘れようとしてゐるのである。能の特徵を最もよく表してゐる神事祝言能や精靈能の如きは、此の傾向が最も著しいのであつて、靜寂な夢幻境を現出する事を以て中心生命としてゐる。これは畢竟、夢幻的な神祕境に眞の美を認めるものであつて、平安朝以來の文藝の一主義であつた幽玄趣味の影響であるが、更に之を作者の理想の上から見る時は、夢幻的な美的境に於て永遠の人生を見出さうとして居るものと考へられる。而して此の傾向は不可思議威力を信ずる時代の宗教思想と容易に結合するのであつて、二番目三番目の曲に於ては、賤しい旅僧の只一片の回向によつても、なほ昔の英雄や美人の執著迷妄嫉妬は忽ちに消え去つて、永遠の安樂境に入る事を說いて居るのである。而して佛陀の靈驗や

讀經の功德は、鬼神天狗を降服せしめるばかりでなく、一草一木の末をもよく救濟し得る事を說いて居るのである。又他の一面に於ては、過去の文藝若しくは藝能に憧憬する時代思潮と結び附いて、和歌や音樂や舞伎の効力を主題として取扱ひ、また和歌技藝の達人を直ちに佛菩薩と仰いで居るのである。かくて謠曲に現れた中心思想は、現世を否定する消極的な人生觀から一歩を進めて、永遠の理想境に生き、當來の新生を希求する積極的な人生觀に到達してゐるのである。思ふに謠曲の作者は一の理想主義者であつて、其の作品には、夢幻的な美の世界に住し、永遠の樂土に生きようとする、希望と讃美とが充ちてゐるのである。

詞章

謠曲の文章の最も著しい特色は、古歌・古物語・戰記物語・朗詠・經文などの美辭麗句を巧みに補綴してゐる事である。これは宴曲や延年幸若の舞の詞などにも行はれた所であるが、謠曲に至つて一層發達を遂げてゐる。室町文學に此の種の文章が一般に行はれたのは、創作力が衰へて、徒らに古典を崇拜した結果であつて、世阿彌の如き天才でもなほ「能作書」の中に、能は古典の名歌名句を適當に引用して、書き上げるべき事を說いてゐるのである。かくて謠曲の文章の缺點としては、前後の矛盾や敍事の斷續などには無頓著に、只語句の緣を借り聯想の流をたどつて、徒らに出典語を臚列した部分が多くなつたのである。併しかくの如き缺點が目立つのは、目で讀み味ふ爲であつて、之を節面白く謠ふのを聞き、又それに合せて舞ふ姿を見る時には何等の不自然がなく、却つて斷續的に響いて來る古典的な語句から誘導せられる、幽玄な情調に引入れられるのを感ずるのである。即ち謠曲の文章は一句

一句の意味は離れ離れであつても、情調によつて統一せられ、聯想によつて繋がれてゐるのであつて、其の語調が所作や舞や曲節と離れる事のない所に妙味があるのである。更に詳細に見て行くと、節附の文章には頻りに佳句麗章を綴り合せてゐるのであるが、說明的な事詞や地の文章には、耳に聞いて理解せられ易い平家物語流の流麗平明な詞を用ひて居るのを認める。而して其の引用の語句が、古きに過ぎず新しきに傾かずして、平安鎌倉兩時代に標準を置いて居るのは、文章に品位を添へると共に耳に容り易からしめる爲の用意である。其の他修辭としては、在來の文學に廣く用ひられた懸詞・縁語・序詞・反復の如きものを用ひるのであつて、謠曲獨得の修辭といふほどのものは見出し難いのであり、而も此等の修辭法の使用は自由奔放である。これも畢竟聲調を快美にし、詞章の記憶を容易にする爲であつて、謠曲の文章の一特色である。要するに謠曲の文章は美辭麗章の集成ではあるが、全體の上から見る時には有機的な結合をしてゐるのであつて、綜合藝術たる能には極めて適切である。

シテ「これは都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に一人子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつつ、そなたとばかり思子の、跡を尋ねて迷ふなり。地下歌「千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、上歌 もとよりも、契假なる一つ世の、契假なる一つ世の、其の中をだに添ひもせで、ここやかしこに親と子の、四鳥の別これなれや、尋ぬる心のはてやらん、武藏の國と下總の中にある、隅田川にも著きにけり、隅田川にも著きにけり。シテ詞「のうのうわれをも舟に乘せて給はり候へ。ワキ「おことはいづくよりいづ方へ下る人ぞ。シテ詞「これは都より人を尋ねて

下る者にて候。ワキ「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此の舟には乗せまじいぞとよ。シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ。かたの如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも覺えぬ事な宣ひそよ。ワキ詞「げにげに都の人とて名にし負ひたるやさしさよ。シテ「のう其の言葉はこなたも耳にとまるものを、かの業平も此の渡りにて、名にし負はば、いざ言問はん都鳥、我が思ふ人はありやなしやと。詞「のう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ「あれこそ沖の鷗候よ。シテ「うたてやな、浦にては千鳥ともいへ鷗ともいへ、など此の隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。ワキ「げにげに誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ「沖の鷗と夕浪の、ワキ「昔にかへる業平も、シテ「ありやなしやと言問ひしも、ワキ「都の人を思妻、シテ「わらはも東（あづま）に思子の、行方を問ふは同じ心の、ワキ「妻をしのび、シテ「子を尋ぬるも、ワキ「思は同じ、シテ「戀路なれば。地上歌「われも又、いざ言問はん都鳥、いざ言問はん都鳥、我が思子は東路に、ありやなしやと問へども問へども、答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とや云ひてまし。げにや舟競ふ、堀江の川の水際に、來居つつ鳴くは都鳥。それは難波江これは又、隅田川の東（あづま）まで、思へば限なく、遠くも來ぬるものかな。さりとては渡守、舟こぞりて狹くとも、乗せさせ給へ渡守、さりとては乗せてたび給へ。ワキ詞「かかるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。「此の渡りは大事の渡りにて候。かまひて靜かに召され候へ。（「隅田川」の一節、觀世流謠本に據る）

二 狂言

狂言一般

狂言は主として對話と獨白とで進行する素朴な一幕劇であつて、猿樂の能と同じ舞臺で演出せられる。狂言は能と能との間に演ずるのであるが、能が主として古典的な悲劇を取扱ふのに對して、狂言は現代的な喜劇を演ずるのであつて、兩者はすべての點に於て對照の妙を得て居る。狂言では主役を演ずる役者(狂言師)をシテといひ、それに對應して補役を演ずる役者をアドといふ。アドは二人以上五六人に達する事がある。能と狂言は夙に交互に演じられたのである。卽ち例外の場合を除いて、五番立に就いて云へば、能五番に對して狂言四番を演ずるのが慣例となつて居る。さて狂言は演ずる順序によつて、脇狂言・二番目狂言・雜狂言の三種類に分たれて居る。最初に演ずる脇狂言は、脇能の次に出すのであつて、概ね祝賀の意を含むものである。例へば「末廣がり」「寶の槌」「連歌毘沙門」などである。二番目狂言は「靭猿」「二人大名」「萩大名」の類であつて其の數は三種の中で最も少い。雜狂言は番數も多く種類も多い。著名な作は「宗論」「膏藥煉」「朝比奈」「三人片輪」などである。なほ番組の最後に演ずるものを切狂言といつて、特に多くの人物の登場する「釣女」のやうなものを演ずる事になつて居る。

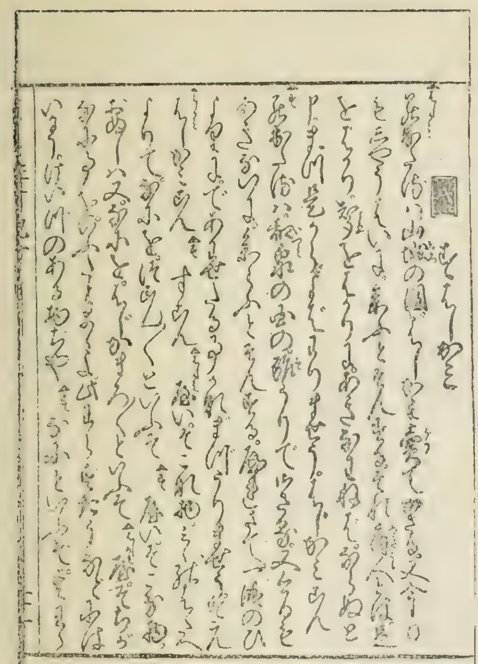
流派

能に流派があるやうに、狂言にも大藏・鷺・和泉の三流がある。傳統の最も古いのは大藏流であつて、金春禪竹の二男金春四郎次郎を祖として居る。大藏流に次いで古いのはそれから出た鷺流であつて、

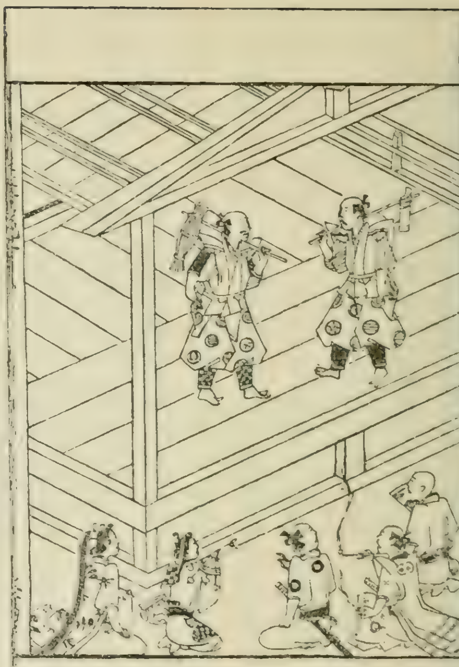
和泉流が一派を成したのは元和以降である。而して江戸時代には大藏と鷺とが對立して勢力があつたが、其の後和泉流が最も榮え、大藏流は衰へ、鷺流は明治の末に亡んだ。流派の異なるに從つて演出並に詞章に、多少の相違がある事は能と同じである。

作者

狂言は猿樂の能と共に室町時代の初期に完成したのであるが、初めは狂言師が氣轉に任せて、當座の滑稽を演じたのであるから、詞も姿も一定せず、番數も定まつてゐなかつた。狂言の最初の作者を玄慧法印とする說は信じ難いが、能に從屬する狂言は其の頃から發達したのであらう。後世傳承せられた狂言が、一時に作られたもので無い事は明かであるが、各曲の作者や年代を明かにする事は素より不可能である。享保六年に大藏流の家元彌太郎虎純が幕府へ差出した書上に、玄慧法印の作五十九番、金春四郎次郎・宇治彌太郎二代の作七十八番、其の他作者未詳のもの二十五番の曲名を列擧して居るが、これは家傳であり、而も後



古版本狂言記



同挿絵

世の記錄であるから、其の儘を信ずる事は出來ない。

狂言の詞章は古來專ら口授によつて傳承せられたのであるから、經驗を積む間に漸次洗煉せられた事は勿論であつて、是が始めて筆錄せられたのは餘程後世である。笹野堅氏の研究によれば、寛永十五年に大藏彌右衛門虎明が、是まで家に傳承せられた二百三番を、脇狂言類・大名狂言類・婿類山伏類・鬼類小名類・女狂言類・出家座頭類・萬葉類に分類して八册に筆錄したのが、記錄せられた最初である。(國語と國文學昭和五年四月號) 現在流布して居る狂言本は、五十番づつを集錄した『狂言記』『續狂言記』『拾遺狂言記』『狂言記外編』(各五卷)である。正編の最古の版本は萬治三年に上梓した美濃本五卷であるが、普通に行はれて居るのは半紙横本であつて、是に元祿・天保・嘉永の諸版がある。而して外編は元祿十三年に始めて上木せられた。此等の刊本は何流にも附かぬものであり、詞章にも省略があつて、實際演出せられるものに比して異なる所が多い。蓋し狂言本はもと狂言師の覺

書に過ぎなかつたのであり、且つ家元では漫りに之を書寫する事を許さなかつた爲である。併し最近活字版に附したものには實演に近いものが多い。試みに主なるものを擧げれば、大藏流のを收めたものに幸田露伴氏校訂の『狂言全集』(三冊)、伊藤喜一郎氏編『滑稽諧謔能間狂言全書』(一卷)等があり、鷺流のを集めたものに齋藤香村氏校訂の『謠曲文庫』の「狂言篇」(一卷)があり、和泉流のを集成したものには山脇元照氏編『和泉流狂言大成』(四冊)、野々村戒三・安藤常次郎兩氏編纂の『狂言集成』(一卷)などがある。

特質

狂言は能と並行して發達した藝術であるから、兩者の間には類似點が少からず見出される。例へば能に名乘があるやうに、狂言にも「罷り出でたる者は此あたりに住居致す者で御座る」のやうな形式がある。又能に祈や道行があるやうに、狂言にもそれがある。なほ終局に於て、能が陵舞で終るのと同じやうに、狂言も小舞で終つたり、「やるまいぞ〳〵」「はあ面目もござらぬ、のう〳〵恥かしや恥かしや」で走り込むのが多い。併しかくの如き類似は形式上の事であつて、狂言の特色は外にある。狂言は古典的貴族的な能の嚴肅な氣分を緩和する爲に演ずる、寫實的平民的な喜劇であるから、種々の要素が能と對照をなして居る。卽ち素材は少數の曲を除くほかは、現代の實際生活から取り、內容は主として平民的な諧謔を要素として居り、其の他役者の服裝や科白の如きものも、すべて現代的である。以下各要素の特色に就いて略說しよう。

素材

先づ登場人物を見ると雷・鬼・神・幽靈・古英雄などが現れる事もあるが、主として現代的人物である。

而して現代の人物の主なるものは大名・主人・僧侶・山伏・百姓・聟・女等であるが、此の外に商人・工匠・禰宜・醫師・占者・猿引・獵夫・船頭・盜賊・片輪者なども現れるのであつて、殆どあらゆる階級と職業を網羅して居る。次に取扱はれて居る社會的事象を見ると、室町時代に上下に流行した遊山・物詣・茶の湯・生花・連歌・賣競・系圖爭等を始として、庶民階級の儀式・娛樂・飲食・迷信から、博奕・偸盜・喧嘩・訴訟の如きものにまで觸れて居るのであつて、當時の社會狀態や日常生活は遺憾なく窺ふ事が出來る。

狂言の中には「福渡」「連歌毘沙門」「惠比須大黑」「三人百姓」等の如き祝言物があり、又「水論聟」「花子」「武悪」などの如く、主として人情を寫したものなどもあるが、大部分は日常の瑣事を滑稽化した作品である。而して滑稽を要素とするものは、作意の方面から見て、幾つかに分類する事が出來るのであるが、主要なものは以下の四種である。第一は言語上の洒落を主とするものである。例へば旅僧が秀句好きの船頭に、薩摩守の洒落を言つて船にただ乘りをする「薩摩守」や、酢賣と薑賣が、一方はスの音一方はカの音の附く語を連ねて、系圖爭をする「酢薑」や、日蓮宗の僧侶と淨土宗の僧侶が、經文の語句を料理に捩つて、互に自宗を褒める「宗論」などである。第二は小智詭策の破綻から起る滑稽を主眼とする作品である。不具を裝うて召抱へられた啞と座頭と躄が、主人の留守に酒を飲み亂舞して、それぞれ正體を暴露する「三人片輪」や、鬼の面を被つた太郎が、吝嗇な酒屋の伯母を嚇して酒を飲んだ後に、醉ひ臥して假面を剝がれる「伯母が酒」などは單純な例である。此の部類に屬するものには、詭計の暴露を二重に應用して内容を複雜にしたものがある。「鈍太郎」「附子(ぶす)」

「花子」などは詭策に懸つた者が更に相手を詭計に陷れるのであり、又「墨塗女」の如きは、自分の詭策が暴露して、相手から反對に詭計に懸けられるのであつて、興味が一層深くなつて居る。第三は人物若しくは事象の矛盾顚倒から生ずる滑稽を取扱つた作品である。雲を踏み外して落ちた雷が、醫者の鍼療を受けた代償として、旱水害を守る事を誓ふ「雷」（一名針立雷）や、鬼が鎭西八郎爲朝と首引をして引摺られる「首引」などのやうな、荒唐無稽なものもあるが、興味のあるのは、上位にあるべき者が無學無藝無作法であるが爲に、下位にあるべき者に飜弄せられる筋のものであつて、此等の大部分は次の第四の特徴を含んで居る。第四は無智・無能・臆病・健忘性・懶根性などの如き弱點を誇張した作品である。無學で貧しい僧侶が、檀家で讀經した後で、亭主の忘れた布施を催促する爲に、說法に託して貪欲な本心を暴露する「布施無い」や、非常識で健忘性の大名が、從者に萩の歌を敎へてもらつて萩見に行き、亭主から歌を所望せられて、下の句を思ひ出す事が出來なかつた「萩大名」などが、是の部類に屬する適例であつて、位置が顚倒してゐる點から見れば、第三に入れて差支ないのである。此の種類の滑稽を取扱つた作品の中には、臆病な瓜盜人が二度まで滑稽を演ずる「瓜盜人」の如きがあり、又初めに威張つた大名が、後に臆病な本性を暴露する「二人大名」のやうに、前後の照應の妙を得たものなどがある。

滑稽を要素とする狂言は、主として右に擧げたやうな類であるが、最も興味があるのは、此等の特徵を二つ以上兼ねた作品である。前に擧げた例の中にも二種以上に亙るものがあるが、なほ他の例を

示すならば、第一と第四の特徴を持つものには「名取川」の如きがあり、第二と第三の傾向を併有するものには「胸突」の如きがあり、第三と第四の特色を兼ねたものには「鎌腹」の如きがあり、又殆ど四種の特徴を全部含むものには「あかがり」の如き作がある。此等は何れも狂言中の出色の作品であつて、發端・葛藤・解決（又は破綻）の三要素から成つて居るのが多い。而して無學無能の大名や、無學貪欲な出家や、修法の效驗の無い似而非山伏や、禮儀作法を辨へない聟などが頻りに現れて來るのは、矛盾顚倒から起る可笑みを取扱ふ爲でもあるが、一方から考へると、室町時代のあさましい社會狀態の反映でもある。併し狂言に於ては、未だこれによつて、世相の半面を諷刺しようとしてはゐない。要するに狂言の內容は概ね單純であつて、場面の變化に乏しく、其の脚色は動もすれば千篇一律に陷つて居り、又人物の缺陷や詭計の暴露なども、最初から見え透いて居るのが多いのであつて、喜劇としては未だ幼稚の域を脫してゐない。

狂言は之を演出するに當つて、役者の服裝と所作が大切な要素となる事は言ふまでもない。役者の服裝は現代を寫してゐるのであつて、登場人物の身分に應じて異なつて居る。即ち大名は立烏帽子・素襖・長袴を著て小さ刀を佩き、冠者は半上下に腰帶を用ひるのであり、其の他出家・山伏・農夫・女などもそれぞれ時代の服裝をする。役者の所作には白（せりふ）に應ずる擧動があつて、これにも時代の生活が寫し出されて居る。なほ登場人物が聲を合せて歌を謠ひ、又小歌に合せて立ち舞ひなどして、舞臺の上に氣分を漂はせる用意などもある。

詞章

最後に狂言の詞章に就いて一言して置く。狂言は既に述べたやうに、對話と獨白とから成つて居るのであつて、後世の脚本の形式の源流をなして居る。其の言葉には前代の名殘を存する點もあるが、大體に於て室町全盛期の口語である。即ち能に普通用ひる「候」に對して、「御座る」「居りまする」「おりやる」などを用ひ、應答には「なか／＼」「心得ました」「畏まつて御座る」などと言ふ。語彙には「聊爾」「稀有」「敗亡」「調儀」「方量」「笑止」「過怠」「有德」「領じる」のやうな漢語や、「ひだるい」「たんます」「すさる」「ぬかす」「いかう」「ていど」などのやうな方言を用ひ、又「賴うだ人」「酒を飲うで」「悦うで」の如き音便や、「それでこそ良けれ」「なお構ひやつそ」「なされいで」の如き語法が散見する。從つて狂言詞は言語史料としても貴重すべきものである。狂言の詞章の中には韻文の要素の勝つた語りの文句があり、經文謠曲の一節や、和歌・連歌・小歌などの引用があり、又種々の俚諺も散見する。此等の引用句の中で古典的なものは、滑稽な振りや、元來の節と異なつた節付によつて語り謠ふのであつて、是も可笑みの一要素となつて居る。

文例

太郎冠者「ハア、、。さても／＼迷惑な事ぢや。今から淀へ行て鯉を求めて來いと仰せ付けられた。最早日も暮方に及うで御座る。さりながら參らずば成るまい。先急いで參らう。イヤ誠に、此間は淀鳥羽の間が取分け物騷なと申すが、何事も無ければ良う御座るが。イヤ何かと云ふ内に、是ははや東寺ぢや。其上日もずんぶりと暮れた。ア、此東寺の藪蔭が晝通るさへ氣味の悪い處ぢや。日比入らざる腕立を申すに依つての事で御座る。人に恨は無い事で御座る。何事も無ければ良いが。ソリヤ／＼。チ、あれに大きな男が七八人

立竝んで居る。是は疑ひも無い待伏であらう。外に道は無いか。其上一筋道で御座る。何と致さう。それそれか樣な處で弱みを見られては成るまい。先の取つて詞を掛けう。ヤイそれに居るは、此間洛中洛外に沙汰の有る待伏か。某は賴うだ者の急用で淀へ廻る者ぢや。其處を退いて通すまいか。エ、なぜに物を言はぬ。通さずば眞二つにしてくれう。但しそちが退かずばこちが退くぞ。なぜに物を言はぬ。ヤイ／＼／＼。エ、腹立や、牛にくらはれ誑された。人ぢや／＼と思うたれば並木の松ぢや。イヤおのれ、人で見をれ。眞二つにしてくれう。ハ、、、。人で無いこそ仕合せなれ。人ならば某が眞二つに成るで御座らう。（「空腕」の一節、和田萬吉博士藏大藏流寫本に據る）

三　小歌

小歌

小歌は朝廷の大歌所の歌なる大歌に對して、民間に流行した歌謠を云ふのであつて、古くから用ひられた稱呼である。室町時代の小歌の源流は、平安時代に行はれた雜藝にまで溯り得るのであるが、鎌倉時代までのは殆ど散逸して後世に傳はつてゐない。室町時代の小歌は、狂言の中にも多く散見するのであつて、是を狂言小歌といふ。

狂言小歌

狂言小歌は卽ち狂言小舞謠であつて、其の主なるものは狂言の小舞に用ひられるもの、若しくは狂言の中に謠はれるものであるが、此の外に謠曲の小謠や、謠曲まがひの歌謠なども廣く含められて居る。狂言小歌を集めたものには、大藏流の小舞三十二番・和泉流の小舞三十五番などがあるが、近來三派の傳書を涉獵して、其の小歌を集めたものが次々に現れて、其

の數は次第に增加して凡そ二百首に及んで居る。(此等の中には既に述べたやうに、謠曲關係の歌謠が多く混つて居るのであるから、純粹の小歌を考察する場合には之を除外すべきである。)狂言小歌は狂言の爲に作つたものでなく、主として當時の流行小歌を取り入れたものであるから、下に述べる小歌集の中に散見するものも相當にある。

閑吟集

室町時代の小歌を集めたもので最も名高いのは、永正十五年に成つた『閑吟集』(一卷)である。現存する最古の寫本は大永八年の奧書のあるものであつて、『續群書類從』に收められて居る。卷頭には和漢兩樣の序がある。和文の序に「此所に一人の桑門あり。富士の遠望をたよりに庵を結びて、十餘歲の雪を窓に積む。」とあるのは卽ち編者である。此の隱者は果して誰であるか詳かでないが、志田義秀・同延義兩氏の考證によれば、宇津の山泉谷に庵を結んだ連歌師の宗長で、永正十五年は七十一歲の時である。『閑吟集』に收められた小歌の數は三百十一首であつて、これを大きく春・夏・秋・冬・戀の五部に分類してあるが、更に詳細に見て行くと、個々の歌謠の連鎖には連歌の趣味が認められる。所收の歌謠に就いては、序文に「あるは早歌、あるは僧侶佳句を吟ずる廊下の聲、田樂、近江大和節になり行く數々」を集錄したと言つて居る。「早歌」は宴曲の一節が小歌に攝取せられたもので、(門付の早歌うたひなどが歌つたもの)例へば『宴曲集』の「春」から出た、

強いてや手折るまじ、折らでや揷頭(かざ)さましやな、彌生の長き春日も、猶飽かなくに暮しつ。

の類を云つたのである。次に「僧侶佳句を吟ずる廊下の聲」とあるのは、吟詩調の謠物であつて、

呉軍百萬鐵金甲　不レ敵西施咲裡刀

の類であるが、吟詩調と小歌調と抱合したものには、

一夜窓前芭蕉の枕、涙や雨と降るらん。

の類がある。次に「田樂」は言ふまでもなく田樂節の謠物であつて、

夢の戯いたづらに、松風に知らせじ、槿は日にしをれ、野草の露は風に消え、かかるはかなき夢の世を、現と住むぞ迷ひなる。

の如き類である。最後の「近江大和節」は近江猿樂及び大和猿樂の謠物から出たもので、例へば謠曲の「二人靜」から出てゐる次の小歌の如きである。

木の芽春雨降るとても／＼、なほ消え難きこの野邊の、雪の下なる若菜をば、今幾日ありて摘まし、春立つと云ふばかりにや三吉野の、山も霞みて白雪の、消えし跡こそ跡となれ／＼。

此の外に序には記されてゐないが、實際には狂言小歌や放下師の謠物などから出たものが、少數ではあるが、收錄せられて居る。かくて此の集には宴曲・田樂・謠曲・狂言などから出た謠物を含んで居るのであるが、此等は全部を合せても八十首許りに過ぎないのであつて、其の他の二百二三十首は當時流行した狹義の小歌である。

室町時代小歌集

『閑吟集』は室町時代中期に成つたのであるが、其の後に編まれた小歌集で比較的新しい歌謠を見るべきものは、最近笹野堅氏が發見せられた『室町時代小歌集』である。原本は題名の無い卷子本一卷で

あるが、笹野氏が活字本として公刊するに當つて、假に斯く命名せられたのである。卷頭の序に、

ここに桑門の扉を閉ぢて、獨酒を樂み小歌を謠ひつつ、たかきにも交はり、賤しきにも睦び、老たるも友なひ、若きにもなつかしうせられたる、沙彌宗安といふあり。古き新しき小歌に節々を附けて、河竹のよよの玩びとぞなし侍る。

とあるのに據れば、『閑吟集』の編者と相似た境遇にある、宗安なる者の手に成つたのである。宗安の傳記はなほ未詳である。此の集に收められた小歌の數は二百十九首であつて、『閑吟集』にあるのと同一の歌及び類似の歌二三十首を除いた百九十首許りは、從來世に知られてゐないものである。

『閑吟集』とそれに次いで現れた『室町時代小歌集』を合せ見る時は、室町時代の歌謠の發達の跡を明かにする事が出來るのであるが、此等の小歌は、更に室町末期から江戸時代初期にかけて流行した、

隆達小歌

隆達小歌に接して居るのである。隆達小歌は、和泉堺の日蓮宗顯本寺の僧であつた高三（たかさぶ）隆達（號を自庵といふ）（慶長十六年卒八十五）が、當時流行した小歌に節付をして、生來の美音で歌つたもので、所謂隆達節の歌謠である。隆達節はもと扇拍子で歌はれたが、後に『閑吟集』の小歌などと同じく、尺八を伴奏樂器に用ひるやうになつた。其の小歌集には隆達自筆と稱して、百首乃至二百首を收めたものが數種傳はつて居るが、此の中には後人が追加したものが少くない。隆達小歌は内容形式共に近世風の歌謠であつて、江戸時代の俗謠の基となつて居る。

小歌の發達

『閑吟集』と『室町時代小歌集』は最も豐富な資料を提供するものであるが、比較的古い小歌の面目を

見るのには、狂言小歌を參考すべきであり、又江戸時代初期に流行した小歌との接觸を知るには、隆達小歌を參考しなければならぬ。此等の資料を通覽する時には、宮廷貴紳の宴席で用ひられた朗詠・今樣・雜藝の系統を引いた謠物と、貴族趣味の歌舞に伴なふ謠物の一節とが、漸次民衆的な小歌となり、更に近世の俗謠となつた經路を辿る事が出來るのである。今其の經過を詳述する遑はないから、『閑吟集』を中心として、室町時代の小歌の特質を簡單に記して置く。

室町時代の小歌の中には、既に述べたやうに、宴曲の一節や謠曲狂言などに見える小歌を切り離して、抒情的な小歌にしたものが多いのであるが、又一方には民間に發生した歌謠が、在來の貴族趣味の謠物の影響を受けて、上流階級の間に行はれるやうになつたものもある。而して當時の小歌の大部分は戀愛に關するものであるが、時代精神並に生活狀態を反映して居る點に興味がある。

ただ何事もかごとも、夢幻や水の泡、笹の葉に置く露の間に、味氣なの世や。

來ぬも可なり、夢の間の露の身の、逢ふとも宵の稻妻。

此等の無常觀を歌つたものは、時代を下るに從つて彌多くなつたのであつて、隆達小歌にも厭世隱遁の思想を歌つたものが極めて多い。

思ひ出すとは忘るるか、思ひ出さずや忘れねば。

思へど思はぬ振をして、しやつとしておりやるこそ、底は深けれ。

人買舟は沖を漕ぐ、とても賣らるる身を、ただ靜かに漕げよ船頭殿。

笠を召せ、笠も笠、濱田の宿に流行る、菅の白い尖笠を召せのう、召さねばお色の黒げに。
一夜馴れたが、名殘惜しさに出でて見たれば、沖中に舟の早さよ、霧の深さよ。

此等は純然たる民謠風であつて、表現並に情緒に小歌獨得の味ひがある。

新形式の發生

室町時代の小歌は内容よりも寧ろ曲節を重んずる傾向がある。其の形式には長短樣々のものがあるが、概して短詩形が喜ばれた。卽ち今樣や短歌の形式は殆ど廢れて、緊張味を持つ四句のものが漸く起つたのである。四句の小歌には（一）七五七五（二）七五七七（三）七七七七（四）七七七五の四種がある。（一）は今樣形式の半ばに相當するものであり、（二）は短歌の初めの一句を省いた形であり、（三）（四）は共に近世風の小歌調に多い形式であつて、此等は何れも隆達小歌に至つて益多くなり、形式も略ぼ完成せられたのである。

第八章　五山の詩文學

南北朝から室町時代を終るまでの二百數十年間は戰國亂離の世であつて、一般社會は殆ど無文無筆の狀態であつたが、此の間に風塵の外に超然として、學問文藝の研究に精進したのは五山禪林の學僧である。彼等は盛に宋元に渡つて、宗教儒學詩文美術等を學んで、之を廣く傳播したばかりでなく、武家の特別な尊信と保護とを受けて、政治の顧問となり外交にも携はつて、多大の貢獻をしたのである。此の章に於ては、主として五山を中心とする詩文の盛況を說き、併せて江戶時代の文運興隆の淵

源となつた朱子學の勃興に就いて略述しようと思ふ。

五山はもと支那の五山十刹に倣つて設けられたものであるが、其の創設年代は詳かでない。鎌倉に建長・圓覺・淨智の各禪寺が創立せられたのは、鎌倉時代の末期であるが、京都の南禪寺は鎌倉五山に準ぜられたのは、稍後れて徳治二年であつて、京都五山は此の寺に始まるのである。其の後鎌倉幕府の滅亡によつて、鎌倉と京都の五山の位置は顛倒し、京都の禪寺を以て本據とするに至つたのであるが、其の後に於ても五山の寺格には屢變革があり、其の數も時によつて相違して居る。建武元年の制定では、京都の南禪・大徳二寺を第一山として上に置き、建仁・東福・萬壽・（以上京都）建長・圓覺（以上鎌倉）を此の順位に五山に列したのであるが、其の後幾度か變革があつて、北朝の至徳三年に南禪を第一山とし、建長・圓覺・壽福・淨智・淨妙を鎌倉の五山に列し、天龍・相國・建仁・東福・萬壽を京都の五山に列して以來、東西五山の對立となつたのである。併し室町時代に於て内政外交の指導者となり、儒學詩文書畫等の大家を輩出して、文教の中心となつたのは京都の五山である。從つて以下述べる所の漢文學の隆盛も亦、主として京都の五山に關するものである。

虎關師錬

南北朝の頃禪林の碩學として最初に擧げられるのは虎關師錬（正平元年（北朝貞和二年）寂六十九）である。俗姓は藤原氏で京都に生れた。師錬は其の名で、虎關は其の號である。十歳の時禪僧となり、長ずるに從つて佛經以外に經史子集を廣く渉獵し、性理學に通じ、又詩文に長じてゐた。正安元年二十二歳の時元に遊學しようとして母に止められたので、鎌倉に下り一山一寧に就いて教を受けた。正和二年京都に歸つて

後は、後醍醐天皇に禪學を進講し、光明天皇の厚遇を蒙つて南禪寺に住し、後村上天皇から國師の號を賜はり、なほ廣く公武の尊信を受けたが、此の間述作にも從事した。其の著書は十餘種あるが、中でも名高いのは『元亨釋書』（げんかうしやくしよ）三十卷である。欽明天皇の御代から後醍醐天皇の元亨年間に至るまでの七百八十餘年間の、本朝高僧傳ともいふべき紀傳體の日本佛教史である。此の書は我が國最初の佛教史として貴重なばかりでなく、識見文章ともに卓絕して居る。虎關は詩文の大家であつて、集を『濟北集』（二十卷）（五山文學全集所收）といふのは、京の白川に營んだ濟北庵によるのである。彼は又經史詩文の評論家であつて、四六文を排斥して韓柳の風を慕つたのは、古文學復興の先驅である。

雪村友梅

虎關と同時代の詩僧として名高いのは雪村友梅（正平元年（北朝貞和二年）寂五十七）である。名を友梅といひ、號を雪村又は幻空といつた。越後の人で、幼少の頃鎌倉の一山に師事し、後に京都の建仁寺に入り、參禪の傍經史を研究し、また『莊子』に通じてゐた。德治二年十八歲の時元に渡つたが、當時元の仁宗は世宗の志を繼いで、日本の侵略を謀つてゐた時であつたから、捕へられて獄に投ぜられた。獄中に在ること三年の後蜀に放逐せられたが、十餘年の後大赦によつて長安に還る事を許され、文宗の崇敬を受けて禪師の號を授けられ、やがて元德元年四十歲の時歸朝した。其の在元中の前半十數年の苦難は、到底凡庸の堪へ得る所でなかつたが、豪邁峻嚴な氣力によつて能く之に打克つ事が出來た。在元前後二十三年の間に、各地を巡錫し高僧に接して、學德は彌磨き上げられたのであつて、歸朝の後には諸寺の開山又は住持となつて、公武の尊信を受けた。其の在元中の詩を集めたものに『岷峨集』二卷（五山文學全集所收）

がある。岷峨は成都の岷山峨眉山に因んだのである。所載の詩は古體近體とりどりに勝れて居り、又作者の性格は何れにも現れて、剛健高潔の風が充ちて居る。集中の「岷山歌」一篇は代表的作品であるが、長詩であるから之を省いて、絶句の例を擧げると、「中秋雨」と題する詩に、

西風剪剪雨潺潺　暝色愁レ人獨掩レ關　遙想碧霄雲外月　孤月氷潔照二銀灣一

其の他「秋白」と題する詩中に「商飇吹轉爛銀盤、影落澄江一疋練寒」の如き佳句がある。此等によつて其の詩風を察する事が出來よう。雪村はまた極めて孝心の厚い人であつて、元に居る頃、

澤國春風入二草根一　誰家庭院不レ生レ萱　遠懐未レ有レ忘レ憂日　白髮垂垂獨倚レ門

の如き詩を詠じた。この一首には情の人としての一面がよく現れて居る。

中巖圓月

當時宋學と文章によつて世に喧傳せられたのは中巖圓月（天授元年（北朝永和元年）寂七十六）である。姓を土屋氏といひ名を圓月と稱した。中巖は其の號であつて、別號を中正子といつた。鎌倉に生れ、八歳の時壽福寺に入り、十三歳で僧となり、顯密二教を學んで後に禪宗に入つたが、學問は入元僧約翁・元僧東明に受け、更に虎關の教をも受けた。正中二年二十六歳の時元に渡り、名山を遍歷し高僧と交り、八年の後元弘二年に歸朝して、諸國の禪寺に歷住して上下の尊信を受けた。中巖の學識は該博であつて、宋學の外に『莊子』に通じ又史學にも長じてゐた。嘗て『日本書』といふ國史を編述したが、朝議によつて公にする事を禁ぜられたと云はれて居る。中巖は思想家であり、又經綸の才があつた。建武元年に著した『中正子』（群書類從所收）は内篇四外篇六の十篇より成り、儒佛の眞諦を論じ政治道德の要を說いたもので、

思想家としての面目を最もよく示した名著である。彼の文才は『中正子』によつても窺ふ事が出來るが、詩文集には『東海一漚集』一卷（五山文學全集所收）がある。彼は文章は韓退之に私淑し、詩は杜甫を模範としたのであつて、其の古文復興の傾向は虎關のそれと共に、後の漢文學に影響する所が尠くない。

夢窗疎石

虎關・雪村・中巖に比して詩文に於ては一歩を讓るけれども、學德に於て世に重んぜられたのは夢窗國師（正平六年（北朝觀應二年）寂六十七）である。夢窗は名を疎石といひ、伊勢源氏の家に生れた。一寧一山・佛國禪師（高峰顯日）等に師事して孔孟老莊に通じてゐたが、多藝多能であつて詩歌文章を能くし、又造園にも長じてゐた。後醍醐天皇の勅を奉じて禪學を進講し、又足利尊氏を始め公武の鑽仰を受けた。當時彼に就いて得度した者は、一萬三千餘人に上つたと言はれて居る。夢窗は德望を以て當代一流の高僧と仰がれたのであるが、文學史上に特筆すべき事は、其の門下から五山文學の隆盛期を代表する、義堂・絕海以下幾多の學僧を輩出した育成の功績である。

義堂周信

義堂（元中五年（北朝嘉慶二年）寂六十四）は土佐の人で名を周信といひ、號を義堂といひ、又空華道人とも號した。夢窗國師の高弟であつて、後に鎌倉管領足利基氏に招かれて圓覺寺に居り、儒佛を講じ又政治の顧問となつた。鎌倉に居る事二十二年の後、天授五年に義滿に召されて建仁寺の住持となり、義滿の爲に儒學を講じ、又幕政にも參與して廣く公武の尊信を受けた。義堂は文教の頹廢した當時にあつて、中巖の學問を祖述して儒佛一致の說を唱へ、又詩文を鼓吹したのであつて、儒教詩文の發達に貢獻する所が多かつた。義堂は詩に長じ、又繪畫にも巧みであつたが、殊に文章に於ては詩僧絕海と並稱して五山

文學の偉觀とせられて居る。詩文集に『空華集』（二十卷）（五山文學全集所收）がある。其の詩は李杜の風格に近く、其の文章は韓柳を學んで道義を明かにすると共に、辭句の洗煉に意を用ひた。義堂の生活學問文學を知り、又廣く時代を窺ふべき資料に『日用工夫集』（略稱日工集）がある。十八歳から六十四歳に至るまでの日記であつて、もと四十八冊あつたのであるが、後世散逸して今は門人の手に成つた略抄四卷がある。

雨中對レ花

三年不レ作禁城遊　幾度東風喚二客愁一　今日暮蒼春雨裏　對レ花猶認舊風流

子陵釣臺

漢家諸將各論レ功　誰訪羊裘獨釣翁　強被三劉郎尋二舊約一　一絲吹斷暮江風

題二天津橋一

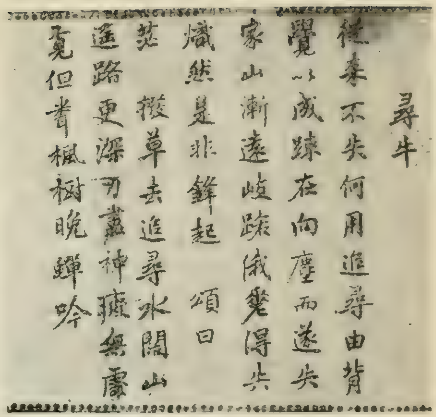
六月偶來二橋上一遊　風生二毛竅一冷颼颼　飄然便欲三從レ茲去一　一葉銀河萬里秋

秋　月

一月明明萬古圓　秋來未三必獨嬋娟一　祇緣三孝子思レ親切一　今夕傷レ心白露前　（空華集）

中津絶海

絶海（應永十二年寂七十）は義堂と同じく土佐の人で名を中津といふ。絶海は其の字で、蕉堅道人と號した。十三歳の時夢窗國師に學び、十五歳にして剃髮し、建仁寺に居る事十二年の後鎌倉に下り、基氏の優遇を受けた。正平二十三年（北朝應安元年）三十三歳で明に渡り、天授二年に歸朝した。明に居る頃太祖の詩に應酬して歎稱せられた事は名高い話である。歸朝の後義滿將軍に尊崇せられて相國寺の住持となつた。


尋牛
從來不失何用追尋由背
覺以成踈在向塵而遂失
家山漸遠岐路俄差得失
熾然是非鋒起　頌曰
撥草去追尋水闊山
遙路更深力盡神疲無處
覓但聞楓樹晩蟬吟

絶海筆蹟（相國寺藏）

絶海は詩人としての性情を豐かに持つてゐたから、學問によつて尊崇せられた他の名僧と其の趣を異にして居る。絶海は五山隨一の詩僧であつて、門弟が編輯した『蕉堅稿』一卷（五山文學全集所收）には詩と文が收められて居る。これに拾收せられた詩はさまで多くないけれども、風格の雄渾なものがあり、情緒の清婉なものがあり、また思想の高邁なものがあつて、唐宋大家の壘を摩して居る。是を義堂の詩と比較すれば、彼のは禪僧の臭味を帶びてゐるのに對して、これには純然たる詩人の風がある。

姑蘇臺

姑蘇臺上北風吹　過客登臨日暮時　麋鹿群遊華麗盡　江山千里版圖移
忠臣甘受屬鏤劍　諸將愁看姑蔑旗　回レ首長州古苑外　斷烟疎樹共凄其

畫鶴

僊質昂然胎化レ禽　乘レ軒曾感懿公心　千年留レ影松堂上　咫尺蓬萊月色深

折二枝芙蓉一

楚妃醉困倚二西風一　曾侍二君王一宴二渚宮一　鳴佩歸來秋淡涼　殘粧影落玉屛中

（蕉堅稿）

禪林の四絶

五山禪林の詩文は義堂・絶海に至つて頂點を極めたのであつて、其の後は漸く下り坂になつた。而して室町幕府時代の初頃に現れた詩文の大家には得巖・龍派・眞玄・清播等があつた。得巖（寂年未詳）は惟肖と號し、備中の人である。朱子學の大家岐陽方秀の高弟であつて、經史に通じ又詩文に長じ、特に文章家として聞えてゐた。文集に『東海瓊華集』（四卷）がある。得巖の文と並び稱せられるのは龍派の詩である。龍派（文安三年寂七十二）は江西と號し、下總守千葉師氏の子である。儒釋に通じた詩人であつて、公卿僧侶にして其の門に集まる者が極めて多かつた。詩集に『豩庵集』と『續翠詩集』（各一卷續群書類從所收）とがある。得巖・龍派と共に禪林の四絶と稱せられるのは眞玄と清播である。眞玄（應永二十二年寂歲未詳）は太白と號し、學問によつて世に知られたが、其の文章は義堂・絶海に次ぐと謂はれて居る。清播（文安四年寂七十三）は號を心田といひ、春耕聽雨叟とも號した。詩に長じ、集に『春耕集』一名『聽雨集』一卷がある。

五山文學の特質

右に擧げた詩僧に次いで現れた詩文の大家はかなり多いのであるが、永享以後は漸次衰運に向つたのであるから省略して、茲に五山の詩文の一般傾向と變遷の跡を略述して置く。平安時代の漢文學は、漢唐の詩文の影響を受けて興隆したのであつて、其の傾向は當時最も推尊せられた集が、『文選』と『白氏文集』であつたのを見て察する事が出來る。然るに五山文學は、歸化僧や留學僧等によつて新たに傳へられた、宋明の詩文の感化を受けて興隆したのであるから、王朝貴紳の詩文に比して全く特色を異にして居る。卽ち當時禪林に最も持て囃された詩文集が、宋の黄堅の編と稱せられる『古文眞寶』（前集三卷後集二卷）と、宋の周弼撰の『三體詩』（六卷）とであつたのは、五山の詩文の特色を語つて居るのである。先

漢詩

づ詩に就いて言へば、南北朝頃には詩の大家が續々現れて、新古樣々な詩形を詠じて、百花繚亂の盛況を呈したが、虎關が夙に「詩話」(『濟北集』卷十一所收)に於て李白杜甫の詩風を稱揚して以來、李杜並に蘇東坡・黃山谷等の風を慕ふ者が漸く多くなり、室町前期には一般に古詩よりも近體を喜び、近體の中では七言絕句が最も盛に行はれた。『古文眞寶』の前集は主として古體の詩を集めたものであるから、室町前期には餘り行はれずして、唐の律詩絕句を撰集した『三體詩』が廣く流行した。かくて近體殊に七言絕句が專ら流行するやうになつた結果、自ら一定の型にはまつて清新の氣を失つたのであつて、室町後期になると詩は著しく衰退した。室町前期の撰集はかなり多く傳はつて居るが、試みに義堂絕海等二十人の作を集めた『花上集』(建仁寺の僧文擧契撰)(續群書類從に收む)と、其の後の七家の詩を撰んだ『北斗集』(撰者未詳)とを通覽する時には、此の間に於ける詩風の變遷を窺ふ事が出來る。

文章

次に文章を觀ると、是も虎關が「答藤丞相書」(『濟北集』卷九所收)に、韓柳二家の文を推頌して以來、韓柳歐蘇の古文を模範とする風が盛になつた。『古文眞寶』の後集(漢以下宋までの古文を集む)が流行したのは是が爲であつて、王朝時代以來の駢儷體は殆ど衰へて、一般に古文を綴るやうになつた。而して文章の隆替は詩と並行して居るのであつて、永享以後詩が漸次沈滯すると共に、文章も亦振はなくなつた。卽ち一代の文章家と言はれた得巖に次いで、文名の高かつたのは瑞溪周鳳(文明五年寂八十三)村庵靈彥(康正五年寂八十三)翺之惠鳳(寂年未詳)等であるが、其の後には特筆する程の大家が現れなかつた。以上述べたやうに、室町後期になつて詩文共に衰へたのは、主として次に擧げる內外二つの理由に因るやうで

ある。當時支那は明の代であつて、宋元の時代にさしもに隆盛を極めた詩文は衰へ、從つて我が國に刺戟を與へる所が無くなつたのは外的原因である。當時禪林の名僧は幕府の政治外交に干與する事が彌多くなり、殊に應仁の亂以後は文教の維持と普及に多忙であつて、詩文に思を凝らす餘裕が無くなつたのは内的原因である。斯くて詩文に代つて興隆したのは宋學殊に註疏の方面である。

註疏

五山文學の中心となつてゐるものは詩文であるが、是と共に重きをなすものは註疏と語錄である。語錄は法語道頌の類を收めた禪文學であるから茲には省略して、禪寺に榮えた宋學と註疏の發達に就いて略述して置く。抑も禪學と宋學とは離るべからざる關係があつたから、五山の禪僧は多く宋學に精通し、且つ其の普及に努めた。五山の宋學の端緒を開いたのは俊芿・一山等であるが、之を承けて興隆に努めたのは虎關である。（四五八頁參照）虎關が宋學に造詣の深かつた事は、其の著『濟北集』卷十六以下五卷に收むる所の「通衡」によつて窺ふ事が出來る。虎關の後朱子の新註の講説に熱心であつたのは玄慧・雪村・圓月・疎石・義堂・絶海等であつて、後の註疏の基礎を作つたのは岐陽方秀（應永三十一年寂六十四）である。岐陽が四書の新註に和點を施して門下に授けたのは、新註訓讀の源流であつて、其の後桂庵玄樹の改訂を經て、更に文之玄昌の手によつて改訂せられたものは、上木せられて世に行はれ、後の訓讀の基礎となつた。岐陽門下の高足には一條兼良の庶兄雲章一慶や翱之惠鳳等があるが、經學で名高いのは先に擧げた得巖である。而して得巖の高弟は卽ち桂庵であつて、宋學の發達竝に普及の一大恩人である。桂庵（永正五年寂八十一）は名を玄樹といひ周防の山口の人である。幼少の頃得巖に師事して經學を承け、更に應仁

元年に明に渡つて朱子學を修め、文明五年に歸朝した。時に應仁大亂の後であつて、諸大寺は殆ど兵燹に罹り、僧侶は悉く諸國に離散した時であつたから、彼は石見に流寓し、更に九州各地を巡錫して、肥後の菊池氏や薩摩の島津氏に客遊して、各地に宋學を扶植した。かくて岐陽桂庵等によつて廣く傳播せられた宋學は、近世に於ける漢學興隆の基礎となつたのである。

抄物

室町後期の學僧は後進の指導と學問普及の爲に、盛に佛典漢籍詩文集等の講說註釋に力を注いだのであつて、此等の註疏類を抄物と呼んで居る。當時述作せられた註疏類には『史記』『漢書』などに關するものもあるが、最も多いのは『三體詩』『古文眞寶』や、杜子美・蘇東坡・黃山谷等の詩の註疏であつて、傳寫又は刊本として傳へられたものが極めて多數に上つて居る。此等の註疏類の中には漢文で記したものもあるが、國字解には文語體口語體若しくは兩様混用體などがあつて、口語で記されたものは、國語史研究上の貴重な資料とせられて居る。

足利學校

五山文學を終るに當つて附け加へて置きたいのは、足利學校の事と、各地に行はれた書籍版行の事である。足利學校の名殘は現に栃木縣足利市昌平町に存して居る。其の起原に就いては、小野篁創建說、國學遺制說、足利義兼創立說、其の他があつて確かでないが、最後の說が最も廣く行はれて居る。足利學校が中世の初頃既に存在した事は證せられて居るが、儒學の研究所として重要な使命を遂げたのは、永享年間に上杉憲實が再興して以後、慶長頃までの百七十年間である。此の間時代の傾向に左

右せられる事なく、終始漢唐以來の學風を持續したのであつて、其の藏書の如きも宋學や佛教に關するものは絶無である。足利學校は此の點に於て金澤文庫と異なつて居る。再興者上杉憲實は鎌倉の執事であつて、文を好み、久しく廢れてゐた足利學校を修營して之に領田を寄附し、又漢籍を求めて寄進し、更に庠主を置き學規を定めて、學園としての面目を始めて完備した人である。其の後憲實の子憲忠、孫の憲房（憲忠の甥）も典籍を寄附したので、文庫は益充實し、代々の庠主も熱心に儒學を講じた爲に、戰國時代を通じて遊學する者が絶えなかつた。（徳川幕府の世になつて家康が伏見に其の分校を設け、次いで各地に漢學が興隆したから、足利學校は自ら衰へて單に文庫として生命を保つに過ぎなくなつた。）要するに足利學校は戰國時代唯一の學校として長く榮え、此所に學んだ者（主として僧侶）は各地に儒學を普及したのであつて、文教の維持に貢獻する所が極めて多かつた。

室町時代以前の刊本

我が國に於ける刊本の源は、遠く孝謙天皇の御代に發して居る。即ち神護景雲四年惠美押勝の亂が平定した後、天皇の御發願によつて十大寺に寄進せしめられた、百萬小塔中に收められた陀羅尼の摺本は、我が國のみならず世界最古の印刷物である。其の後平安時代には傳教版などが現れたと言はれて居るが、刊記の明かなのは院政時代の寛治二年の木版『成唯識論』十卷である。平安朝中期以後には經供養の流行するにつれて、經文の印刷が屢行はれたのである。次いで鎌倉時代になると版行は益盛になり、開版地は京都奈良高野山を始として僻遠の地にも及んだ。所謂泉涌寺版・左山版・春日版（興福寺開版）高野版などが是である。當時の版本は未だ依然として佛書であるが、寶治元年刊行の『古文

尙書孔氏傳』などは、儒書開版の先驅と稱せられて居る。以上は室町時代以前の概況である。

室町時代の書籍刊行

室町時代になると開版地は一層擴張せられ、典籍の範圍も佛書儒書以外に及び、版式も著しく進步した。平假名交りの刻本は鎌倉末期の頃から現れてゐるが、室町時代になると挿繪を入れる事が始まつた。室町時代の版本で名高いのは、前代の末期以來行はれてゐる五山版を始として、京都嵯峨に於ける博多版（一名堺版）・臨川寺版其の他があつて、支那の版式に倣つて多くの書籍が上木せられた。其の後五山版が稍衰へた頃、地方では堺を始として、山口（大内版）、薩摩（薩摩版）其の他から私版が續出し、儒書史籍詩文集の類が盛に上梓せられて文教の普及を助長した。室町末期には、古く支那から朝鮮に傳へられ、其の地で改良せられた活字印刷術が我が國に傳來して、圖書印行に非常な刺戟を與へた。當時使用せられた活字には銅製と木製の二種があつて、是を用ひて印行したものを後世古活字本と稱して居る。朝鮮から得た木活字を用ひて印行したもので名高いのは、後陽成天皇が文祿二年十一月に開版せしめられた『古文孝經』（現存せず）であつて、慶長の初頃には引續き漢籍圖書の類を多く版行せしめられた。是を慶長勅版といふ。德川家康が活字印刷法によつて多くの書籍を開版せしめたのは、此等の刺戟によるのである。なほ序に一言して置きたいのは、西洋の活字印刷術が傳來した事である。即ち朝鮮から活字が傳來した時より三年前天正十八年に、西洋の活字印刷術が九州の一角に傳はり、肥前の有馬附近又は天草で、切利支丹關係の書籍が印行せられた。此等は平假名交りの文字で印刷せられてゐるが、廣く流布するには至らなかつた。

第六篇　江戸時代前期

第一章　時代の概觀

江戸時代

江戸時代は、德川家康が征夷大將軍に任ぜられた慶長八年（二二六二年）から、王政復古となつた慶應三年（二五二七年）に至るまでの二百六十五年間であつて、一に近世と稱せられて居る。江戸時代は江戸を中心とする、武家政治が完全に行はれたのであるが、一面には京都を中心とする尊皇精神が、時代を下るに從つて擡頭し、遂に幕府政治を倒潰するに至つたのであつて、東西二大勢力が對立した狀態は鎌倉時代に似て居る。次に此の時代を文化史上から見ると、空前の太平が續き、而もあらゆる文化的機關が完備した爲に、國民の精神生活は著しく活氣を呈して、學問文藝道德商工業等が、全國に亙つて目覺ましい發達を遂げたのであつて、舊日本文化の完成時代と稱する事が出來る。而して此の時代の文化は、主として武士と町人によつて發展したのであるが、特に文藝の發達に貢獻する所が多かつたのは平民階級であるから、文學史上に於ては平民文學時代、若しくは町人文學時代とも呼ばれて居る。

時代の區分

江戸時代の文學は初め京阪地方に起り、中頃から中心が漸次江戸に遷り、遂に江戸文學時代となつたのである。從つて文學史上に於ては、文學中心地の移動の上から見て、大きく前期即ち京阪文學時

代と、後期卽ち江戸文學時代の二期に分つ事が出來る。前期は寛永寛文の文藝復興期から、元祿享保の上方文學全盛期に至るまでの凡そ百三十年間であり、後期は明和安永の文運東遷期に始まり、文化文政の江戸文學爛熟期を經て、天保以後の頽廢期に至るまでの凡そ百三十年間である。而して此の前期と後期は左表に示すやうに、更に各二期に區分する事が出來る。

前期	文藝復興期（寛永寛文期）	自慶長至延寶	八〇年
	京阪全盛期（元祿享保期）	自天和至享保	六〇年
後期	文運東遷期（明和安永期）	自元文至天明	五〇年
	江戸隆盛期（文化文政期）	自寛政至慶應	八〇年

尤も右の文藝復興期は啓蒙時代であつて、未だ文學の振はなかつた時代であるから、之を京阪文學期と合併して前期とし、文運東遷期は時代としては短いけれども、上方文學全盛期と江戸文學隆盛期の中間に介在する過渡期であるから、之を一期として中期とし、それ以後の江戸文學期を後期とする事も一方法である。斯くて江戸時代は、三期若しくは四期に區分する事が出來るのであるが、本書に於ては平安時代と同じく、大きく前期後期に分ち、二篇に亙つて記述する事にした。以下述べるのは前期の百四五十年間に於ける時代の概觀である。

江戸時代前期の文化

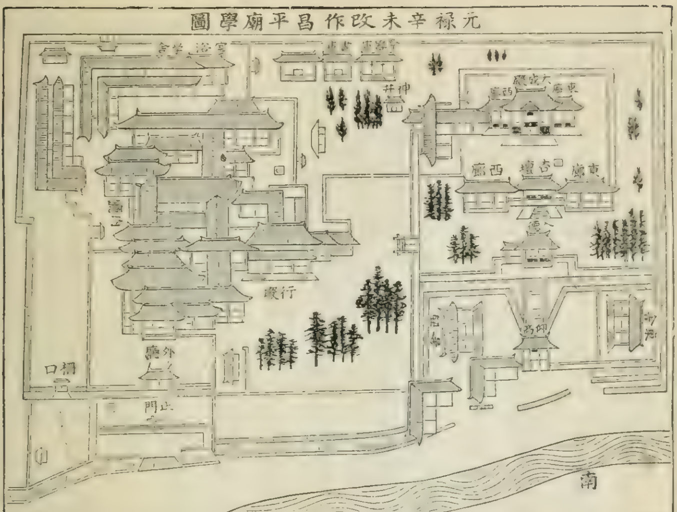
江戸時代の社會は封建制階級制世襲制によつて組織せられた。其の長所としては、國民生活を安定

にして、國史上未曾有の太平を誘致したのであるが、其の弊害としては、徒らに門閥系統を貴び、先例舊慣を重んじて、個性の伸張を妨げ、人間生活を類型化した爲に、文化の發展が局限せられ、從つて社會の停滯腐敗を招來したのである。併し江戸時代前期は、長い戰亂の後を承けた平和時代であつて、上下の國民精神は著しく活氣を呈し、且つ幕府の文治主義は、直接間接に文化の發展を促す所があつたから、各種の文化は急激に發達して、文化史上に一大偉觀を添へた。今此の時代に於ける文化の一般に就いて詳説する遑はないから、特に時代思潮に關係の多い儒學と海外文明の二項に就いて、幕府の政策と其の興隆の由來を略述しようと思ふ。

幕府の儒學奬勵

江戸時代には、從來文化の發達に關係の深かつた佛教が退嬰的であつたのに反して、儒學は幕府の奬勵の下に盛に起つて、當代文化の最も重要なものとなつた。家康は文武二道の並行によつて太平を維持しようとして、夙に江戸に封せられてゐた頃から他日の計を立てて、戰國時代に散逸した古書を普く探索して筆寫せしめ、其の中の普及すべきものは之を印刷せしめたのであつて、此等は文教興隆に貢獻する所が極めて多かつた。卽ち家康が典籍の蒐集板行に意を用ひて以來、寺院や民間にも和漢書を飜刻することが盛に行はれたのであつて、寛永年間には佛典和漢書は勿論、舞の本・淨瑠璃・假名草子などが刊行せられ、中には挿繪に筆彩色を施したものまで現れて、文藝の發達に影響する所も亦著しかつた。家康は典籍の蒐集並に普及を計ると共に、朱子學の泰斗藤原惺窩を招いて其の學說を聽き、又政道を尋ね、更に惺窩の推薦によつて、其の高足林羅山を登用して、大いに文教の興隆を圖つ

た。蓋し家康が特に朱子學を奬勵したのは、其の學説が治世方針にとつて、好都合であつた爲である が、一には當時皇室を始めとして公卿の間に、朱子學の講習が盛大に行はれてゐたのに刺戟せられた のである。



元祿辛未改作昌平廟學圖

家康の後其の志を繼いで、學問の振興に熱心であつたのは三代の家光、五代の綱吉、及び八代の吉宗であつて、前期に於ける學問の隆盛は、此等の將軍の奬勵に俟つ所が尠くないのである。家光は寛文三年に、忍岡の土地を羅山に與へて私學を設立させ、其の傍に先聖殿を建てて孔子を祀らせたのであつて、此の學舍は羅山の子春齋の時に至つて、弘文館と命名せられた。其の後綱吉は元祿三年に忍岡の弘文館を湯島の昌平坂に移して、孔子の廟を大成殿と名づけ、其の傍に宏大な學舍を營んで學問を講ぜしめ、林氏をして代々釋奠を行はしめる事とした。所謂昌平坂學問所は是であつて、爾來江戸時代の末に至るまで、官學としてのみならず天下の學府として榮えたのである。綱吉は殊に學

問を好み、自ら聖堂に於て經書を講じて、諸大名以下士庶に聽講させたのであつて、其の好學の風は下に及んで、諸藩に學校が興り、從つて知名の學者が各地に輩出するやうになつた。綱吉は又春齋の子鳳岡に束髮させて大學頭に任じ、其の子孫をして其の職を世襲させる事にしたので、爾來林家は儒學の棟梁として永く天下に重んぜられた。次に吉宗は中興の名君であつて、其の治世は前期の終の享保である。元祿享保の頃は時勢の影響を受けて、學問が實際的方面に著しく發展した時であつて、當時の學者の中には、在來の學問に滿足せずして、新たに知識を外國に求めようとする者が多かつた。此の時吉宗が蘭學の眞價を認めて洋書の禁を解き、以て西洋諸科學の講究の途を開いたのは著しい治績である。

江戸時代前期に於ける代々の將軍が、文事の振興を圖つた事は右の通りであるが、此の頃最も隆盛であつたのは、言ふまでもなく朱子學である。然し學問が發展し且つ普及すれば、自ら他の學風が起るのは當然であつて、寛文延寶頃から朱子學以外の學派が起り、又同じ朱子學を奉ずる者の間にも、官學と異なつた學風を樹てる者が現れて、學界は多方面に亙つて活氣を呈した。卽ち朱子學以外の學派には、既に寛永の頃近江の中江藤樹が陽明學を唱へたが、次いで寛文の頃には、京都の山崎闇齋が朱子學を神道に應用して垂加神道を創め、又同じく京都の木下順庵は博通を主義として、専ら人材の養成に努めた。此等の學者は、何れも支那の學問から獨立した日本儒學を樹てたのであるが、次いで元祿期になると、自由研究の精神が勃興して、新たに古學派の著しい活躍を見るに至つた。會津の山

鹿素行は、宋明の學說を排撃して幕府の忌諱に觸れたが、其の後京都に於て古學を唱へた伊藤仁齋の學風は天下を動かし、又其の影響を受けて江戸で古文辭學を提唱した荻生徂徠は、詩文學の興隆に著しい功績を遺した。以上述べたやうに、寬文延寶の頃には、朱子學以外に種々の學派が現れて、儒學は著しく活氣づき、次いで元祿享保の頃になると、更に復古學的氣運が盛に起つて、漢學は益多方面に互つて目覺しい發展を遂げた。而して文學史上最も注意すべき事は、當時の儒學が政治經濟兵學神道國史實踐道德等にまで及んで、武士並に町人に著しい感化を與へた事と、元祿享保期になつて新たに詩文が興隆して、詩客文人が輩出した事である。

西洋文物の傳來

江戸時代前期の文化に新しい要素を加へ、從つて國民生活を大いに向上させたのは、所謂南蠻人や紅毛人が傳へた西洋文明である。後奈良天皇の天文十二年に、葡萄牙人が種ケ島に漂著して鐵砲を傳へ、次いで西班牙人が肥前の平戸に來て貿易を請うて以來、南蠻貿易が開始せられて、平戸及び長崎を門戸として、盛に西洋文明が流れ込むやうになつた。秀吉並に家康は、切支丹宗の布敎には種々の弊害が伴なつたので之を禁じたが、通商貿易は國利を增進するものとして、寧ろ保護を加へたのである。從つて慶長元和の頃には、葡萄牙・西班牙・和蘭・英吉利及び支那などの商船が、頻りに九州に來航して邦人と貿易を營み、我が國民も亦支那沿岸を始めとして、マラツカ半島諸國や、呂宋・瓜哇の各地に往來して盛に商業を營み、安南・暹羅・柬埔寨・呂宋等に所謂日本町を作る程度にまで發展した。併し家光の治世になつて、切支丹宗の絕滅を圖る爲に、寬永十年に御朱印船の外邦人の海外に渡航す

る事を禁じ、次いで同十三年には全く海外への渡航を禁止し、更に島原の亂後の寛永十六年には、和蘭・支那を除く外は、一切外國人の來航を禁じて、鎖國主義を執るやうになつたから、寛永以後は海外文明の傳來は漸く下火になつた。(尤も鎖國時代になつてからも、長崎を門戶として和蘭と支那の文物は徐々に傳來した。)要するに西洋文明が盛に傳來したのは、天文十二年から寛永十六年に至るまでの凡そ一百年間である。此の間に我が國に傳來した物質文明の主なるものは、織物食料品器物の類であるが、學術の方面では醫學・本草學・天文學・數學・地理學・語學・羅馬字・活版印刷などが傳はり、又文藝の方面では西洋文學や油繪などが傳はつたのであつて、其の影響する所は意外に深く且つ廣かつたのである。試みに新村出博士が擧げられた、貞德派の句集に散見する異國趣味の物名(「琅玕記」所載「異國俳趣記」參照)を見ると、

タバコ　キセル　カルタ　サラサ　チヤウ　カツパー　シヤボン　マルメロ　ボブラ　ワカ(牛肉)　ビイドロ　イスバタ(劍)　鐵砲　石火矢　時計　遠目鏡　葡萄酒　南蠻酒　南蠻鐵　南蠻舟　南蠻菓子

などが擧げられて居る。此等を見ても、當時輸入せられた外來文化が、如何に多方面に亙つてゐたかが察せられる。

江戶時代の文化の中で、特に注意すべき二つの方面に就いて述べ終つたから、更に轉じて此等の文化を享有し、或は其の影響を受けて、社會的に最も活躍した武士と町人の生活に就いて概說しようと

武士と町人

思ふ。尤も此の兩階級の生活一般に觸れる餘裕はないから、特に文藝上の素材として重きをなす、武人社會に行はれた殺伐任俠の氣風と、町人社會に於ける金欲色欲に左右せられた享樂的生活とに就いて、略述する事にする。

殺伐の風

江戸時代初期には、長く續いた戰亂の餘風を存して、國民一般に豪壯濶達の氣風があつた。殊に武士は戰國時代以來養はれた武士的精神を承けて、平和の世になつても猶武勇を勵み、主從の義を重んじ、廉潔を尙ぶ氣風が盛であつたが、更に新たに興隆した儒敎思想の感化を受けて、所謂武士道の完全な發達を見るに至つた。武士道は武人の間に發達した特殊の道德であるが、其の感化は平民階級にも及んで、社會の秩序の維持に貢獻する所が多かつた。併し其の一面には殺伐殘忍に流れ、名譽心の奴隸となるやうな弊風があつた。殉死・切腹・仇討・はたしあひ・辻切などがそれである。此等は當時は勿論、後世長く武士道の華と誤信せられて、小說戲曲歌舞伎などに取材せられ、やがて町人社會にも多大の影響を與へたのである。

主君の恩義に感じて其の死に殉ずる風習は、古く上代にあつたが、戰國時代から盛になり、江戸時代の初期には、戰場で花々しい討死を遂げる機會が無くなつたから、せめても死出の御供をして、君恩に報いようとして追腹を切る者が多くなつた。慶長十二年三月に名古屋城主松平忠吉が卒した時、三人の家臣が殉死したのは、江戸時代に入つて最初の例であつて、爾來殉死は主從共に名譽として之を誇る風があつたから、漸く人員の增加する傾向を生じた。多數の殉死を見た例を擧げれば、慶長十

六年に鹿兒島城主島津義久が薨じた時には、十七人が追腹を切り、又寛永十三年に仙臺城主伊達政宗が卒去した時には、家臣十五人の殉死者と、更に殉死者の爲に追腹を切つた者五人を出した。其の他寛永十八年に熊本城主細川忠利が薨じた時には十九人の家臣が切腹し、又明暦元年には、前の佐賀城主鍋島勝茂の死に殉ずる者が二十一人に達した。家康秀忠等は慶長の頃、既に殉死の弊害を悟つて之を停止せしめた例があり、其の後諸侯の中にも之を禁じた者があつたのであるが、殉死の流行は容易に廢れなかつたので、遂に寛文三年に幕府から禁令が下つた。然るに寛文八年には、宇都宮城主奧平忠昌が卒去した時、殉死する者があつたので、幕府は主家の祿高を削つて封を移し、殉死者の子二人を斬罪に處した。かくて殉死は漸く跡を絶つたのであるが、當時は既に殺伐の風が薄らいで、自然に衰亡する時が來てゐたのである。

　殉死が流行した寛永慶安の頃には、仇討が盛に行はれた。君父の爲に復讐する風は鎌倉時代以來屢見る所であるが、江戸時代の初期には最も盛に行はれた。前期に行はれた仇討の中で、後世に長く喧傳せられたのは、寛永十一年に伊賀國上野の城下で、渡邊數馬が姉婿荒木又右衛門等と共に、父の仇河合又五郎及び其の徒黨を討つた事件と、元祿十五年の末に、赤穂浪士大石良雄等四十七人が主君淺野長矩の敵吉良義央を討つて、怨を晴した出來事であつて、共に後世種々に潤色せられて、文藝上の好題材となつた。此の外元祿十四年に、石井源藏同半藏兄弟が父兄の讐赤堀源左衛門を、伊勢の龜山に討つたのは、前後三十年の辛苦を積んだものとして異彩を放ち、又享保八年に江戸の濱田侯藩邸に

於て、中老瀧野の婢山路が、主人の仇澤野を討つたのは、即日の出來事であり、而も女の手によつて遂げられた點に於て著名である。殉死の風習は武家の間に限られた現象であるが、父兄の爲の仇討は平民社會にも行はれた。其の特殊な例としては、享保年間に奥州白石在の百姓の娘が父の仇を討ち、又吉原の遊女瀬川が、同じく父の敵を討ち果した事などを擧げる事が出來る。敵討は江戸時代を通じて行はれたのであるが、初期に比して著しく減じたのは、太平の餘澤を受けて人心が和やかになつた爲である。

任俠の風

殉死や仇討が流行した頃には、江戸上方などに歌舞伎者と稱する、剛勇を衒ひ俠氣を誇る遊俠の武士が横行した。京都に於ては既に戰國時代の末頃に、無賴の武士が三々五々黨を組んで、市民を惱ましたのであつて、江戸時代になつても、其の風を承けた變態的な武士の横行は止まなかつた。慶長十四年に逮捕せられた荊組や皮袴組などの徒黨は、其の代表的なものである。當時江戸にも大額大月代で、角鍔に朱鞘の長脇差を横たへて、大道を濶歩する無賴の徒が多かつたのであつて、慶長十七年に嚴罰に處せられた、大鳥居逸平・大風嵐之助・大橋摺之助・風吹塵右衞門・天狗魔右衞門などと稱する者は、其の首領であつた。江戸時代初期の歌舞伎者の遺風を繼いで、正保から貞享の頃まで、江戸上方の市中を横行したものは所謂男伊達である。男伊達には旗本奴と町奴の二種があつた。旗本奴は小身者であるけれども、將軍の御直參と稱し、奇狂な服裝をして、至る所で喧嘩を買ひ、刄傷沙汰に及んだのであつて、町奴は其の横暴に對抗し、又之を羨望して起つたのである。明暦の頃旗本奴の團體に

は、大小神祇組・六法組・白柄組などがあつて、江戸の市民を苦しめてゐたが、之に對抗して庶民の爲に萬丈の氣を吐いた町奴の徒黨には、笊籬組・鐵棒組・鶺鴒組・唐犬組などがあつた。當時旗本奴の代表的人物に、五千石を食んだ水野十郎左衞門成之の如き者があり、町奴の大立物に幡隨院長兵衞・唐犬權兵衞・放駒四郎兵衞等があつて、其の間に演じられた爭鬪は、種々に潤色せられて演劇に入り、小說講談に取り扱はれて、長く庶民に偉大なる感化を與へた。旗本奴の跋扈跳梁は、水野十郎左衞門が切腹を命ぜられて以後は大いに衰へたが、善惡美醜の兩面を兼ねた町奴の氣風は長く江戸の町人の間に殘存した。殊に弱きを助け强きを挫く仁俠の精神と、然諾義理を重んずる道義の念とは、長く町人を感化したのであつて、所謂江戸兒氣質は之を根柢として居るのである。

以上述べた殺伐仁俠の氣風以上に、當時一般民心を風靡したのは、華美豪奢を競ひ、官能的快樂を追求する享樂的思想である。江戸時代初期の武士は、社會の秩序の維持の爲に、よく勤儉尙武の氣風を維持し得たのであるが、太平が續くにつれて、上流武士は過去の貴族的文化に憧憬れて、華美贅澤を喜ぶやうになり、下級武士も亦何時しか遊惰逸樂に流れ、甚しきは財力を有する町人に阿附追從して、放縱な生活に耽るやうになつた。併し武士階級に浸潤した奢侈遊興の氣風は、寧ろ町人生活の影響を受けたのであつて、財力金權を掌握せる分限者の驕奢な生活は、食祿生活を送つた武士の到底及ぶ所ではなかつた。町人生活の著しい向上は、三都を中心に各城下町に及び、其の影響は大名武士は素より、江戸の大奥にも及んだのであつて、元祿時代は其の頂上を極めた時である。當時三都は運輸

交通の發達と、商工業の勃興に伴なつて年々繁榮に赴き、町人社會からは御用商人仲買商兩替屋の類が續出して、金力によつて武士を凌駕する者が多かつた。彼等は機敏な商略と冒險的な投機とによつて、忽ち富豪となる事が出來、而も戰國時代の遺風を傳へて、濶達豪放の氣象を抱いてゐたから、金錢には無頓著に身分不相應な生活をするものが多かつた。かくて當時の商人は一攫千金の利を得る代りに、之を散ずる事も速かであつたから、彼等の榮枯盛衰は、其の儘直ちに文藝の好題材となる事が出來たのであつて、當時の戲曲小說に其の名の喧傳せられたものが尠くない。京の中村內藏助、大阪の淀屋辰五郎、江戸の紀文・奈良茂の如きは其の代表的な者である。

僭分限者の生活

淀屋の祖三郎右衞門（常安）は豐臣氏の時代に大阪に出で、木材商を營んで富を得、更に米の仲買屋となつて鉅萬の財を積んだ。其の後三四代目の辰五郎の代には、百間四方の屋敷を構へ、大小の書院を金箔で貼りつめ、夏座敷には玻璃の障子を立て、玻璃の天井に淸水を湛へて、金魚銀魚を放つ程の奢侈を盡し、而も遊蕩に耽つた爲に破滅に陷つた。又紀伊國屋文左衞門は御用材木商によつて一躍富豪となつた人で、本八丁堀三丁目を殘らず屋敷にして宏壯な住宅を構へ、百餘人の奉公人を使ひ、來客ある每に疊を替へたと言はれて居るが、月見の興に七十兩の大饅頭を贈つたり、節分の夜豆の代りに小粒金を撒き散らすやうな、驕奢豪遊を極めた爲に一代にして破産した。又奈良茂左衞門は紀文と同じく材木商人として、一代の間に四十萬兩を積み上げたのであるが、其の子の代になつて紀文に劣らぬ奢侈豪遊を盡した爲に、忽ち沒落してしまつた。紀文や奈良茂は元祿期に於ける代表的大盡で



花見の圖（菱川師宣畫）

あるが、分限者ならぬ者も亦一般に奢侈遊蕩に耽り、一時的の快樂に大金を投ずる風習があつた。繪師英一蝶は紀文奈良茂の取卷連の一人であつたが、嘗て大名さへ手を出しかねた古名工の作に係る石燈籠を見出し、財布を傾けて買ひ求め、之に火を點じて酒を酌み、天下一の快樂と豪語したと云ふ。又一蝶と竝び稱せられた京の繪師尾形光琳は、銀座方の商人に誘はれて嵐山の花を觀た時、花鳥山水の蒔繪を施した竹の皮に握飯を包んで携へ行き、食事が終つて之を大堰川に投じて、衆目を驚かしたと言はれて居る。一蝶光琳等は富商に追從した一種の幇間であつたのであるが、當時分限者ならぬ者の間にも、豪快寬濶の風があつた事はこれ等によつても窺はれる。

元祿時代に上下擧つて衣食住に華麗を競うた

有様は、浮世草子や浮世繪などに最もよく反映して居る。今其の一例として、婦女子の衣裳が豪華の極に達した一端を述べよう。京都は公卿全盛時代の遺風を傳へて衣裳美を以て誇とし、天下の流行は西陣から始まると言はれて居る。延寶の頃江戸の富豪石川六兵衞の妻が上洛した時、京の難波屋十右衞門の内儀と衣裳競べを催したのは、時代の風潮を最もよく語るものであらう。此の時難波屋の内儀は、緋繻子に洛中の風景を刺繡にした小袖を著用したのに對して、六兵衞の妻は、黑羽二重に南天燭の立木の模樣の染小袖に、實を珊瑚で作つて縫ひ附けてゐたので、京中の耳目を驚かしたと云ふ。此の一例によつても、當時婦女が服裝に華美を盡した事が窺はれる。其の後延寶九年に綱吉將軍が寛永寺に參詣する時、六兵衞一家の者は華麗目を奪ふばかりの美服を裝うて、棧敷の簾の内に居並び、名香を焚いて御成の模樣を觀てゐたので、忽ち僭上の沙汰として咎められ、奢侈の風を根絶する爲に、彼等夫婦は追放に處せられた。由來儉約奬勵は德川幕府の施政方針の根本をなすものであるが、商工業の發達するにつれて士庶の生活程度が高まり、奢侈の風が募つたのは當然であつて、元祿享保期は其の風潮が頂上に達した時である。當時幕府は富豪の驕奢が、社會に著しく惡影響を及ぼす事を知つて、其の甚しい僭上に對しては、石川の末路に於けるが如き、嚴罰主義を以て抑制に努めたのであるが、天下の風潮は如何ともする事が出來なかつた。

士庶の生活が向上し、華美に流れるにつれて著しく繁榮したのは、三都を始め各城下町や港町に於ける花街である。遊里は煩瑣な禮儀作法や窮屈な道德によつて掣肘せられる、社會生活竝に家庭生活

から離隔せられた別天地であり、又金力によつて自由に本能を滿足させる事の出來る樂園であつた。當時の遊女には樣々な階級があつたが、最上位に置かれた太夫の如きは、才色を兼ねた上に、あらゆる遊藝と教養を積んで居り、而も金力威武に屈しない義氣俠骨を備へた者があり、且つ廓には一種の掟があつて、武士大盡と雖も之を蹂躪する事は許されなかつた。從つて遊女を繞る嫖客は單に色欲のみを目的とせず、寧ろ交際の道を學び、優美な情趣を味はんとしたのであつて、遊里は華やかにして風流を極めた社交場と心得られてゐた。當時の花街は凡そかくの如きものであつたから、此處で演じられる男女の悲喜劇や、人心の表裏や人情の機微などは、其の儘文藝の上に寫し出されて世の歡迎を受けたのであつて、西鶴や近松の不朽の傑作が、主として町人の遊里生活を描寫して居るのも當然である。



遊　女（懷月堂度繁畫）

學問文藝の傾向

江戶時代初期の寛永寛文期は、從來主として貴族僧侶によつて維持せられた學問文藝が、漸く庶民の手に移ると共に、民衆的進取的なものの建設が始まつた時代である。當時文化の中心は、千年の古

都京都にあつたので、江戸は未だ上方の文化の移植に多忙であつた。而して此の間に復興した學問文藝に見られる著しい傾向は、啓蒙的教訓的色彩の濃厚な事と、傳統因襲を打破して、自由にして潑剌とした新生命が漸く擡頭した事である。

寛永寛文期の文學

前代の末頃に中絶した文藝は、元和偃武の後漸く復興の氣運に向つたのであつて、最初に擡頭したのは貴族的保守的な二條派の和歌と、啓蒙娯樂を主とする假名草子である。和歌は初め堂上の間に復興したが、松永貞德が現れてからは民衆の間にも流布し、新味のある詠歌は主として其の門下から出た。然し勝れた歌人が輩出したのは次の元祿享保期である。假名草子は前代の御伽草子の系統を引いて現れた、啓蒙教訓を旨とする作品であつて、其の種類は純粋な小說の外に、隨筆・小話・案內記・寓話・笑話等多種多様である。此等の作品は概ね文學的價値の低いものであるが、時代を反映せるものが多く、又支那の怪異小說の飜譯物や、滑稽な旅行文學などがあつて、後世の小說に影響する所が多い。假名草子と共に平民文學の源泉として注意すべきものは俳諧である。最初に興つた貞德の俳諧は、和歌の趣味を俳諧體連歌の方式によつて表現したもので、民衆の趣味に適合した爲に忽ち流行し、其の門人によつて益盛大に行はれた。然し貞門の俳諧は未だ民衆文藝ではなかつたので、其の反動として更に西山宗因を祖とする檀林調が起つて、天下を風靡するに至つた。貞門竝に談林の俳諧は一時天下に流行したのであるが、間もなく其の流派の間から自覺が起つて、芭蕉一派の俳風の起る素地が作られた。

假名草子と俳諧の外に、平民文學として新たに興隆したものは、淨瑠璃と歌舞伎である。淨瑠璃の源は前代に發して居るが、此の時代になつてからは三味線に合せて語り、傀儡を舞はせるやうになつて、民衆の娛樂として大いに喜ばれ、忽ち三都に流行した。江戶に淨瑠璃を移したのは、上方の薩摩淨雲と杉山丹後掾であつて、淨雲の門人櫻井丹波掾が創めた勇壯活潑な金平節は、戰國時代の遺風を存する江戶人士の人氣に投じて、最も歡迎せられた。一方上方に於ては、土地柄として說教祭文などが喜ばれたのであるが、淨雲門下の虎屋源太夫等が再び上京して以來盛になり、遂に江戶を凌ぐやうになつた。歌舞伎は慶長の初頃、お國によつて演じられた佛教鼓吹の爲の舞踊から發生して、能の狂言に倣つた所作や、嫖客の物眞似などを演ずるやうになつた。初めは女歌舞伎であつたが、慶長の末頃から若衆歌舞伎となり、更に野郞歌舞伎となつて、始めて眞の演劇としての諸要素が備はつた。然し狂言作者は主として俳優が兼ねてゐたのであつて、未だ勝れた作品は現れなかつた。

元祿享保期の文學

江戶時代前期の終は元祿享保期であつて、上方中心の平民文學の黃金時代である。元祿享保期は五代將軍綱吉から、八代將軍吉宗の治世に至る間であつて、太平の餘澤を享けて、學問文藝は自由奔放の意氣を以て新生の躍進を續けた。卽ち漢學の方面では、朱子學に對する古學や古文辭學が起り、更に詩文の興隆を見たのであり、國學の方面には古典研究の復活に次いで、復古學派の自由討究が始まり、更に國學の創建を見るに至つた。學問界に現れた自由の精神は文藝にも現れて、淸新にして獨創的な各種の平民文學が勃興して、千紫萬紅一時に繚亂たる盛況を呈した。

先づ和歌の方面を見ると、戸田茂睡等の革新運動が起り、長流・契沖等の萬葉研究が起つた。尤も此等の人々の詠歌は、未だ舊派の歌風から脫却するまでには至つてゐないが、表現や着想には新しい所がある。革新の氣運は俳壇にも起つて、芭蕉が古風の俳諧から離脫して、幽玄枯淡な正風を樹立して以來、天下の俳風は一變し、更に各地に散在せる蕉門の巨匠によつて、蕉風は全國に流行するに至つた。併し元祿享保期の文學を代表するものは、和歌俳諧よりも寧ろ町人生活を讃美し、町人の爲に氣を吐いた浮世草子や淨瑠璃である。

浮世草子は假名草子から一轉して、當世の人情風俗をありのままに描寫した寫實小說であつて、西鶴が好色物から武家物を經て、町人物に推移した十年間に現れた作品には、元祿時代の世相と人間の半面が如實に描き出されて居る。西鶴の歿後には彼に追隨した作者が續出し、次いで世態人情を細かに寫した八文字屋本の流行を見るに至つた。八文字屋本の作者江島其磧は、類型的性格を描いた氣質物に成功し、西鶴に次ぐ作家となつた。淨瑠璃の作者としては上方に近松が現れて、荒唐無稽な筋を物語つた古淨瑠璃に對して、義理と人情の葛藤を主とし、結構脚色共に完備せる新淨瑠璃を創めて文豪の名を恣にした。近松の作は義太夫の美音と俟つて町人社會の喝采を博し、義太夫節は他の諸流を壓倒するに至つたのであるが、義太夫の竹本座と對峙した豐竹座に作者紀海音があつて、兩々對峙した享保頃は、淨瑠璃が頂上を極めた時である。當時歌舞伎は益發達を遂げ、上方と江戸に藝風を異にする名優が對立して人氣を集めてゐたが、脚本作者として天分を發揮したのは近松一人である。當時

の狂言は組織が複雜になり、場面の變化に富んで、從來のものに比すれば著しい進歩を見たのであるが、未だ舊歌舞伎の臭味から脱離するまでには至つてゐない。

第二章　儒學及び詩文

一　寛永寛文期

江戸時代二百六十餘年間は儒學の最盛期であり、漢詩漢文も極めて盛大に行はれて、日本漢文學史上に一大光彩を放つた時代である。而して江戸時代初期の儒學は前代に興つた宋學を中心とし、江戸幕府の奬勵によつて興隆したのである。江戸時代の初期には、朝廷には學問文藝の中興に御心を濺がせられた、後陽成後水尾兩天皇があり、公卿武家の間にも學者を聘して、講筵を開く者が多かつた。殊に徳川家康は夙に文祿二年に、藤原惺窩を招いて『貞觀政要』を講ぜしめ、慶長の初年には、伏見に足利學校の分校を建て、又同四年に『孔子家語』『六韜三略』、同五年に『貞觀政要』を開板せしめて以來、多數の典籍を書寫刊行せしめた。かくて慶長七年には蒐集書寫せしめた書籍を納める爲に金澤文庫の例に倣つて、江戸城内の富士見亭に文庫(紅葉山文庫)を建て、更に駿府に隱退の後には、其の城中にも亦文庫を設けて林羅山をして管掌せしめたのであつて、其の好學の風は儒學興隆に大なる刺戟を與へたのである。家康の後代々の將軍も亦其の志を繼いで、文事を奬勵したのであつて、家康以下代々の

儒學興隆の四

將軍が文教に意を用ひた狀況は、近藤守重の『右文故事』『好書故事』（共に近藤正齋全集所收）に詳かである。

藤原惺窩

江戸時代の初期に於ける儒學の興隆は、幕府の奬勵に負ふ所が多いのであるが、近世儒學の中興の祖と仰がれたのは藤原惺窩（元和五年歿五十九）である。惺窩は名を肅（すゝむ）といひ、定家十三世の孫なる冷泉爲純の子である。初め五山の一なる相國寺に入つて佛典を修めたが、慊らなかつたので、明國に渡つて儒學を研究しようとしたが、途中風浪の難に遭つて鹿兒島に漂泊した。偶其の地で朱子學書を得て大いに感じ、明への渡航を中止して京都に歸り、專ら程朱の學を研修した。惺窩が歌道の家に生れながら佛門に入り、更に儒學に走つたのは、當時の時勢の推移を示すものであつて、これと相似た閲歷を有する儒者は少くない。林羅山・山崎闇齋・木下順庵等の如きも、嘗ては佛門に學び後に還俗して儒家に轉じた人々である。惺窩は家康の諮詢を受け、又公卿諸侯からも聘せられたけれども、出仕する事を好まず、陶淵明の風を慕つて高逸なる隱者として一生を送つた。從つて其の學を天下に布くには至らなかつたが、朱子學の興隆に盡した功績は顯著である。惺窩は謹嚴な儒者であつたけれども、自然を樂しみ風流を好んだのであつて、詩文和歌にも長じてゐた。從つて惺窩は近世儒學の祖であるばかりでなく、詩文竝に和歌の先驅者としても注意すべき人である。其の文集に『惺窩文集』八卷『千代茂登草』一卷があり、歌集に『惺窩先生倭謌集』五卷がある。惺窩は一代に重んぜられた大儒であつて、其の教を受けた者は極めて多かつたが、就中林羅山・那波活所・堀杏庵・松永尺五等は最も名聲が高かつた。而して高足として最も活躍したのは羅山である。

林羅山

林羅山明暦三年歿七十五は京都に生れ、名を又三郎信勝といひ、羅山と號したが、後に薙髮して道春と稱した。幼少の頃から神童と稱せられ、初め建仁寺に學んだが、年十八の時に朱子集註を讀んで大いに敬服し、これより朱子學に志した。慶長十年二十二歳に惺窩を景慕して其の教を受けたが、惺窩は其の學才を愛して、家康に推薦し幕府の顧問とした。是より羅山は儒官として重んぜられ、政治に參與したのであつて、當時法制の制定外交文書の起草は、概ね其の手に成つたといふ。羅山は博學多識且つ精力絶倫の人であつて、一生の間に書いた述作は百七十餘種に上つて居る。詩文集には『羅山詩集』七十五卷『羅山文集』七十五卷がある。其の詩は惺窩に比べて一歩を進めてゐるけれども、詞藻はさまで勝れてゐなかつた。羅山の師惺窩の學風は極めて寛大であつて、程朱の一方に偏することなく、佛典を研究し神道をも明らめて、神儒一致の說を唱へたのであるが、なほ陸象山の說をも併せ取つて、朱子學と調和しようとした痕跡があると言はれてゐる。然るに羅山は純乎たる朱子學者であつて、相容れざる學說に對しては峻烈に辯駁した爲に、惺窩によつて折角發展の機運に向つた學問が、彼によつて却つて進路を障碍せられた傾があつた。後世羅山の學を非難して、偏狹固陋であるといふのもこれが爲である。蓋し當時の時勢にあつては、彼が執つた態度は止むを得なかつたのであつて、朱子學が羅山を祖として天下の學となつた事を思ふと、朱子學の發展上に於ける功績は極めて偉大である。

京學

惺窩の時代は前代を繼承した啓蒙時代であつたから、惺窩・羅山等は專ら修身治國を目的として、學問の普及に力を用ひたのであつて、未だ漢學の精彩を發揮するには至らなかつた。江戸時代の漢學

が始めて興隆に向つたのは、寛永の末頃からであつて、其の中心はやはり京都であつた。羅山が幕府の儒臣となつて江戸に下つた後に、京都にあつて惺窩の衣鉢を傳へて、盛に學問を講じたのは松永尺五（昌三）明暦三年歿六十六である。尺五は和歌並に俳諧で名高い貞徳の子である。十八歳の時豐臣秀頼の爲に大學を講じ、後前田光高侯に聘せられ、晩年には所司代板倉重宗の保護を得て、堀川に講習堂を創設して專ら子弟を教授した。羅山が偏狹であつたのに反して、宋學の外佛老其の他にも通じ、其の德行はよく諸生を感化して、其の門から木下順庵を始め、安東省庵・宇都宮遯庵の如き名儒を輩出した。順庵及び其の門人に就いては下に述べる。

南學

尺五一派の京學に對して、土佐には南學の一學統があつた。南學は周防の大内氏の遺臣南村梅軒が天文年間に土佐に來て、吉良宣義の館に賓客となつて儒學を講述したのに始まる。梅軒は僧天室に傳へ、天室は谷時中慶安二年歿五十二に授けたのであつて、時中は卽ち南學の祖と言はれる人である。時中の門に遊んだ人々の中には、藩政の改革並に南學の興隆に功績のあつた野中兼山寛文三年歿四十九小倉三省承應三年歿五十があつたが、學者として名聲の轟いたのは山崎闇齋天和二年歿六十五である。闇齋は名を嘉、字を敬義とい

山崎闇齋

ひ、京都の人である。初め妙心寺に居たが、後に土佐の吸江寺に移り、谷時中野山兼山に就いて朱子學を修め、やがて還俗して儒者となつた。時に年二十五である。其の後京都に還り、門人を集めて嚴格な教育を施してゐたが、間もなく江戸に下り、會津侯保科正之に招聘せられて、藩政の改革に功勞があつた。闇齋は朱子の學說を實行する事を主義として、所謂敬内義外の說を樹てたのであるが、晩

年に京都に歸つた後（會津侯卒去の後）には、吉川惟足の神道を學んで垂加神道を開いた。垂加神道といふも、畢竟宋學によつて神代卷を說明したものであつて、彼の學說は終始一貫してゐるのである。儒學に關する著書は極めて多いが、古典の註譯には『日本書紀註』十五卷『神代卷風葉集』八卷『中臣祓風水草』一卷等がある。此等によつて古典研究家としても、一家をなしてゐた事が分る。闇齋は頗る氣慨に富んだ人で、信仰に等しい情熱を以て學說を唱導したから、當時の士心に感化を及ぼす所が多かつた。闇齋に就いて教を受けた者は、諸侯以下布衣に至るまで數千人に達したが、門人中で最も名高いのは、淺見絅齋（正德元年歿六十）佐藤直方（享保四年歿七十）三宅尚齋（元文六年歿八十）の三人である。

山崎派の學者

闇齋門下で師の學問を最もよく傳へたのは直方・尚齋の二人であつて、絅齋は寧ろ精神を繼承した人である。絅齋は闇齋の敬義內外說や神道說に反對の意見を抱いて、後に師弟の關係を斷つたのであるが、直方は師の敬義內外說を忠實に承けて、大いに朱子學の唱導に努め、又尚齋は哲學的倫理學的研究に業績を遺した學者である。而して絅齋は闇齋の思想を繼ぎ、朱子學を基にして大義名分を明かにする事を主義とした人で、其の學說の餘波は水戶學に及び、又其の著『靖獻遺言』二卷は後の勤王の志士に偉大な感化を與へた。かの尊王論を唱へて追放せられた竹內式部や、幕府の專橫を罵つて死刑に處せられた山縣大貳・藤井右門等は、皆闇齋並に絅齋の學說思想に感奮した人々である。

中江藤樹

寬永の頃朱子學に對抗して、王陽明の學を唱へたのは中江藤樹（慶安元年歿四十一）である。藤樹は近江國高島郡小川村の農家に生れ、名は原、字は惟命、通稱を與右衞門といつた。幼少の頃祖父吉長の家に養は

れてゐたが、祖父の主家米子侯が伊豫の大洲に移封されたので、彼も亦其の地に赴いて朱子學を學んだ。其の後近江に歸つて專ら程朱學を講じてゐたが、三十七歲の時に『王陽明全書』を得て大いに悟る所があつて、始めて陽明學を唱へるやうになつた。藤樹は朱子學派の儒者が談論講學を主としたのに反して、專ら實踐躬行を旨とし、其の學德は四周を感化したので、近江聖人と稱せられた。藤樹の高弟は熊澤蕃山（元祿四年歿七十三）であつて、備前藩主池田光政に仕へて治政に功績があつたが、明曆三年に辭去して京都に歸つた。其の後も公卿諸侯で其の門に學ぶ者が極めて多かつた。蓋し蕃山は師の學問を實社會に應用した人であつて、土佐の兼山と好一對の學者である。陽明學派は蕃山の後、三輪執齋・中根東里などを輩出して益普及した。

石川丈山

江戸時代の初期の漢學者は、惺窩羅山を始め大抵詩を詠じたのであるが、當時は未だ思を辭藻に潛める餘裕がなかつたから、其の作は和習を帶びて、見るべきものが乏しかつたが、石川丈山（寛文十二年歿九十）の如きは始めて詩人として知られた人である。丈山は名を重之、通稱を嘉右衞門といひ、三河の人で父祖以來德川家に仕へて武功があつた。丈山は十六歲の時から家康に仕へて、知行五百石を受けてゐた。元和元年大阪の役に、獨り陣營を出で敵中に討ち入つて殊勳を奏したが、軍令を犯した爲に黜けられたので、京都の妙心寺に入つて薙髮した。時に年三十三であつた。それより惺窩に就いて學び、羅山・杏庵・菅原得庵等と交はり、やがて淺野長晟侯に仕へた。其の後寛永十八年には仕官を辭して、比叡山の麓一乘寺村に詩仙堂を營んで隱棲した。其の四壁には、狩野探幽の描いた漢魏より唐宋に至

るまでの詩家三十六人の像に、丈山自ら一々に詩を題したのを掲げて六六山人と號し、煙霞風月に吟詠して晩年を送つた。詩集には正續「覆醬集」各一冊がある。其の詩風は概ね和習を帶び、動もすれば卑俗に陷つてゐるが、未だ詩文を好くする者の乏しかつた當時としては一異彩であつた。

富士山

仙客來遊雲外巓　神龍棲老洞中淵　雪如二紈素一煙如レ柄　白扇倒懸東海天

幽居卽事

山氣殊二人世一　常含太古情　四時雲樹色　一曲澗泉聲　雨濕鶯衣重　風晴蝶袖輕
爲レ詩雖レ至レ老　未レ使二鬼神驚一

此等によつて丈山の詩風を察する事が出來る。

元政上人

丈山の詩文の友に野間三竹があり、又丈山より稍後に現れた詩人に元政上人（寛文八年寂四十六）があつた。元政は俗名を石井源八郎元政といひ、京都の人である。十三歳の時から彥根侯の井伊直孝に仕へてゐたが、偶人生の無常を悟り、二十六歳の時妙顯寺の日豐上人に就いて得度し、俗名を其の儘音讀して法號とした。初め深草村に草庵を結んで稱心庵と名づけたが、後に寺を營んで草山瑞光寺と稱した。元政上人は學問が博く、精力絕倫の人であつて、國書に通じ和歌に長じてゐたが、又詩人としてもよく知られてゐる。明の亡命者陳元贇（ちんげんぴん）と親しく交り、互に詩を唱和した事は有名である。其の唱和した詩を集めたものに「元々唱和集」二卷がある。元政は親に仕へて至孝であつた事も世に知られて居る。晚

年には母を寺側に迎へて孝養を盡した。嘗て詠じて、

逐レ月乘レ風出ニ竹扉一　故山有レ母涙沾レ衣　松間一路明如レ晝　遙識倚レ門望ニ我歸一

と言つて居る。平明で眞情の流露して居るのが彼の特色である。又伏見途中の吟に、

杖レ藜緩歩思悠悠　望ニ盡青山一傍ニ水流一　來往風塵多少客　桃花夾レ道不レ回レ頭

といふのがある。高僧の風を見るべき作である。

二　元祿享保期

元祿以前には幕府に登用せられた林家を始め、朱子學派の大儒が前後して現れ、一方には林家の學風と異なれる闇齋一派や、中江藤樹の陽明學派などが起つて、儒學は時代を下るに從つて盛況を呈した。元祿から享保前後に至る頃は、前代の此の趨勢を承けて、朱子學派からは新たに木下順庵・貝原益軒等の如き時勢に適した學者が現れ、又朱子學に胚胎せる水戸學や新井白石の史學などが起り、一方には朱子學に對抗して、伊藤仁齋の堀河學派や荻生徂徠の蘐園（けんゑん）學派の如き古學派が起つて、互に勢力を爭ひ、更に各派の間から文人を輩出して、詩文の勃興を見るに至つたのであつて、學界は年を逐うて益隆昌に赴いた。是より朱子學派古學派詩文學の順序によつて、其の發達の概況を記す事にする。

林春齋

當時林家に於ては羅山の子春齋、其の子信篤が相踵いで名聲が高かつた。春齋（延寶八年歿六十三）は名を恕一、號を鵞峰といつた。專ら著述に耽つた人であつて、父の志を繼いで『本朝通鑑』三百十卷、（神武

天皇から宇多天皇までの四十卷は父道春の撰）また之を要約した『國史實錄』七十九卷（信篤の手にて完成）を述作し、更に太田資宗監修の下に『寛永諸家系圖傳』三百餘卷の如き浩瀚な史書を完成した。春齋の子信篤（享保十七年歿八十九）は卽ち鳳岡であつて、父祖の學を承け、博學多識の大儒として五代の將軍に歷事して信任を受け、湯島に聖堂を經營し、大學頭となり、又樞機に參與した。羅山・春齋・鳳岡を世に

林鳳岡

林家三代といつて居るが、林家の聲望が大いに高まつたのは鳳岡の時代である。是より林家は代々儒官として帷幕に參し、且つ官學の棟梁となつたので、朱子學はいよ〳〵興隆して天下の學問の基準となつた。

木下順庵

寛文延寶の頃京都の朱子學者として最も名聲の轟いたのは、松永尺五の門から出た木下順庵（元祿十一年歿七十八）である。順庵は京都の人で、名を貞幹といひ、別號を錦里といつた。京都の東山に塾を開いて、二十餘年間學生を教授した後、前田松雲公に聘せられて藩臣の教育に當り、更に晩年には綱吉將軍に召されて其の侍講となり、江戸に於ても幾多の英才を育成した。かくて順庵は教育家として、多くの人材を出したのであつて、當時木門の盛大は林家を凌駕してゐた。順庵は朱子學を尊崇したのであるけれども、博通不偏を主義とし、自由討究の先驅者となつた。彼はまた詞藻にも長じたのであつて、後世文運の嚆矢と稱せられた。其の集に『錦里文集』十九卷がある。嘗て講習堂の詩を賦して、

先生何爲者　諄諄說二典常一　董帷春晝靜　韓檠秋夜長　白鹿近二仙洞一　三鱣落二講堂一
遊戲或詩賦　餘波溢二文章一　豈只諸生福　眞是大明祥　大哉賢哲志　百世可二流芳一

室鳩巣

と言つて居る。其の詩は必ずしも巧みとは言へないが、荻生徂徠が「錦里先生出、而扶桑之詩皆唐矣」と言つたやうに、唐詩を鼓吹して門下に向ふ所を示した功績は顯著である。順庵は一派の說に偏する事なく、而も門人をして自由に好む所に向はしめたから、其の門から多方面の學者を輩出した。中でも朱子學の泰斗室鳩巣、博識で政治に敏腕を揮つた新井白石、詩と畫に名高い祇園南海、外交家として知られた雨森芳洲、折衷學の祖といはれる榊原篁洲などは錚々たる者である。今此等の門弟中で、特に注意すべき鳩巣と白石とに就いて略述し、南海の事は下に說く事にする。

室鳩巣（享保十九年歿七十七）は名を直清といひ、別號を滄浪又は駿臺といつた。江戸の市醫玄樸の子である。寛文十二年十四歳の時、始めて前田松雲公の小坊主となつたが、一日公は其の大學を講ずるのを聽いて歎稱し、順庵を師として學ばしめた。修學の後四十年間前田侯に仕へ、正徳元年には新井白石の推薦によつて、將軍家繼及び吉宗に仕へて侍講となり、又幕政の顧問となつた。鳩巣は經學にかけては木門第一の人であつて、道義を學問の第一義とし、山崎闇齋・伊藤仁齋・荻生徂徠等の異學が盛に起つた時に當つて、獨り程朱の學を鼓吹して、大いに風敎の振興に盡す所があつた。赤穗義士の復讐は、當時學者の論爭の中心問題となつてゐたのであるが、鳩巣は之を前代未聞の忠節として讚美し、直ちに『赤穗義人錄』二卷を公にしたのは有名な事績である。鳩巣は詩を能くし、古風近體何れにも長じ、詩風は雄渾典雅である。左に揭げるのは琵琶湖上の作である。

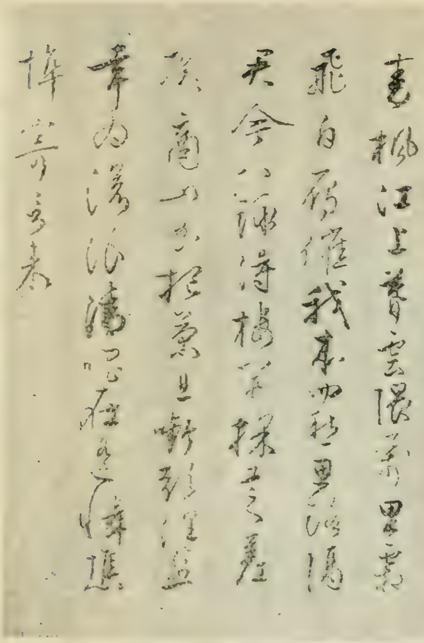
　琵琶湖上水連レ空　萬里虛無目擊中　疊浪涵レ天迭高下　群山分レ地各西東

孤村遠樹迷二圖畫一　百尺長橋飛二彩虹一　獨覺芳洲生二逸興一　不レ知此意幾人同

鳩巣は又文才があつて多くの著述を遺して居る。吉宗將軍の命を奉じて書いた『六諭衍義大意』『五常名義』『五倫名義』各一巻の如きは、世道人心を益する所が多かつた。なほ詩文及び倫理思想を窺ふべきものには『鳩巣先生文集』三十八巻がある。又實踐道德を通俗に説いた『駿臺雜話』五巻の如きは、暢達なる和漢混淆文で記され、今もなほ世に行はれて居る。

新井白石

室鳩巣と共に順庵門下の偉才と云はれたのは新井白石（享保十年歿六十九）である。江戸の人で、名は君美、字は在中といつた。六代家宣七代家繼に仕へて信任を受け、内政外交に干與して權柄を振ひ、林鳳岡をして顔色なからしめたが、吉宗が將軍となるに及んで相容れずして斥けられ、晩年は專ら著述に從事した。博學多才であつて國史・地理・政治・有職故實・語學・西洋事情などに通達し、著書は百六十種に達して居る。中でも國史に於ける『古史通』五巻『讀史餘論』三巻『藩翰譜』三十巻、有職故實に於ける『本朝軍器考』十二



新井白石筆蹟
（古文書時代鑑に據る）

卷、語學に於ける『東雅』二十卷『東音譜』一卷などは最も著名である。白石はまた當時の詩人の第一人者であつた。其の詩風は詩想堂々として、詞藻が豐麗であり咳唾珠を成す觀がある。嘗て「自題肖像」の詩に

蒼顏如レ鐵鬢如レ銀　紫石稜稜電射レ人　五尺小身渾是膽　明時何用畫二麒麟一

と詠じて文事報國の意氣を示したが、又容奇（ゆき）と題する詩に、

曾下二瓊鉾一初試レ雪　紛紛五節舞容閑　一痕明月茅渟里　幾片落花滋賀山
提レ劍膳臣尋二虎跡一　捲レ簾清氏對二龍顏一　盆梅剪盡能留レ客　濟得隆冬無限艱

と賦して史家としての面目を發揮して居る。白石は又一代の文章家であつた。殊に『藩翰譜』十三卷と『折り焚く柴の記』三卷は暢達流麗な和漢混淆文で綴られ、敍事文學としても傑出して居る。前者は諸侯伯の系譜及び英傑の閱歷逸事を記したものであり、後者は白石の自敍傳である。

德川光圀

白石の史學に關聯して想起するのは、水戸學の創始者德川光圀（元祿十三年薨七十三）である。賴房の子で、號を常山人又は西山隱士といひ、諡を義公といふ。光圀は偉大な政治家であつて、學問は素より本領とする所でなかつたけれども、極めて學事に熱心であつて、江戸の藩邸に彰考館を設けて史局とし、學派に拘泥する事なく廣く人材を集めて、『大日本史』の編纂に從事せしめた。此の大事業を企てた目的は、皇統の正閏を說き尊王思想を鼓吹するにあつたから、後の勤王思想の發達には甚大な影響を與へて居る。（『大日本史』の編纂は其の後代々の藩主によつて繼續せられ、明治三十九年に至つて始めて

完成した。前後二百五十年を費したもので、卷數は合計三百九十七卷に達して居る。）光圀はなほ修史事業の傍、浩瀚な『禮儀類典』五百餘卷を始めとして、『扶桑拾葉集』三十五卷『續扶桑拾葉集』十三卷『釋萬葉集』五十餘冊、其の他『保元物語』『平治物語』『源平盛衰記』『太平記』の各參考本等を編纂せしめたのである。朱舜水が光圀に聘せられて、水戶學に大なる感化を與へた事は既に述べた所であるが、殊に光圀は其の學說を聽いて自ら儒學を講究し、常に實學を重んじて、世道人心に裨益する所が多かつた。其の學識思想を窺ふべきものに『常山文集』二十卷『西山隨筆』二卷などがあり、また家集には『常山詠草』五卷がある。

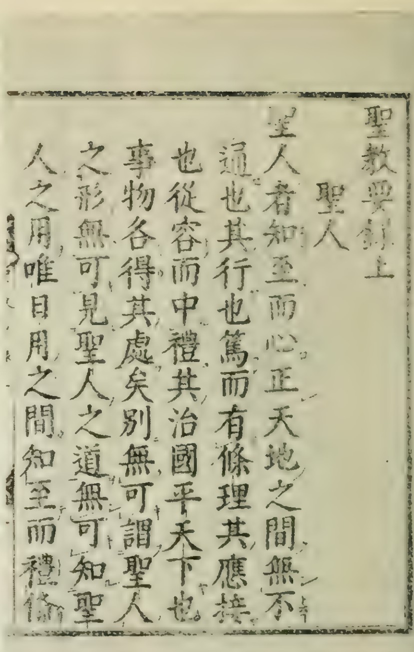
義公と略ぼ時代を同じうして、鎭西にあつて社會教化に不朽の名を傳へたのは貝原益軒（正德四年歿八十五）である。福岡の黑田侯の侍醫利貞（號は寛齋）の子で、名を篤信といつた。明曆三年に京都に上つて、闇齋・尺五・順庵等の教を受けた。初め陸象山・王陽明の學を併せて朱陸合一を主義としたが、中頃專ら程朱の學を尊崇し、更に晩年には別に一家の學を立てた。益軒は人格者であつて、博識を旨とし、實學を重んじ、實踐的教訓を說いて社會を益した功績は、其の學說よりも更に偉大であつた。其の思想を見るべき著書には『大疑錄』二卷・『愼思錄』六卷・『自娛集』七卷などがあるが、最も廣く讀まれたのは童蒙の教訓を說いた所謂益軒十訓の書である。十訓とは貞享四年から享保三年に至る間に刊行せられた『家訓』一卷・『君子訓』三卷・『大和俗訓』八卷・『樂訓』三卷・『和俗童子訓』五卷・『五常訓』五卷・『家道訓』六卷・『養生訓』四卷・『文武訓』（文訓一卷武訓二卷）・『初學訓』五卷の十種をいふのであつて、明治になつてから

の稱である。益軒は詩文を輕んじて和歌を詠み、又巧みに平明な和漢折衷文を綴つた。殊に教訓の文章は漢學者中の第一と言はれてゐる。十訓の中で文章の最も勝れて居るのは、『樂訓』と『大和俗訓』とである。

以上述べた順庵・益軒等は、何れも林家の學風と異なつた學說を提唱して、精神文化の發達に多大の貢獻をしたのであるが、畢竟宋明の儒學の範圍を出てゐないのであつて、言はば前代の漢學を繼承したのである。元祿享保の漢學を代表するものは、自由研究の精神によつて新たに起つた古學派であつて、其の先達となつたのは山鹿素行である。

山鹿素行

山鹿素行（貞享二年歿六十四）は名を高祐、字を子敬といひ、會津の人であるが、幼少の頃父（玄庵）に從つて江戸に出て、林羅山の門に學び、後に北條氏長に從つて兵學を修め、又神道を究め、なほ老莊諸子百家の說にも通じてゐた。播州赤穗の藩主淺野侯に聘せられて一千石を知行したが、間もなく辭して專ら門人の敎育と著述に從事した。素行は儒者としてよりも、寧ろ兵學家として名聲が高く、其の門に集まる者は大名旗本以下門人二千餘人に達したと言はれて居る。此の盛況に對しては、かねて幕府も注意を拂つてゐたのであるが、偶寬文六年に『聖教要錄』（三卷）を著して、官學即ち朱子學を攻擊したので、忽ち幕府の忌諱に觸れ、赤穗に預けられて謫居の憂目を見るに至つた。素行は其の後延寶三年に罪を赦されたけれども、歿するまで再び門戸を張らなかつた。『聖教要錄』は小册子であるけれども、素行の復古的精神は極めて明瞭に現れて居る。其の序文に「予者師周公孔子、不師漢唐宋明之諸儒。


聖教要録上
聖人
聖人者知至而心正、天地之間無不通也。其行也篤而有條理、其應接也從容而中禮、其治國平天下也、事物各得其處矣。別無可謂聖人之形、無可見聖人之道、無可知聖人之用。唯日用之間、知至而禮條

聖教要録

學志聖教、而不志異端。行事日用不事洒落。知之至也欲無不通。行之篤也欲無不力。然猶敏於口而訥於行、是吾憂也。聖人之道者非一人之所私。」と記して居るのを見ても、朱子學に反對して古學を提唱した事が明白である。當時は儒學に限らず、江戸には戸田茂睡の和歌革新の叫があり、大阪には下河邊長流、次いで僧契沖等の古典研究が起り、其の他學界一般に自由討究の新精神が動いてゐたのであつて、素行の復古的精神も畢竟時代の産物に過ぎないのである。然るに素行が特に幕府から忌憚されたのは、偏狹な林春齋に敵視せられた爲であり、又當時綱吉將軍を輔佐してゐた保科正之が、山崎闇齋の教を受けた人であつて、到底素行の說を容れるほどの雅量がなかつた爲であると云はれて居る。素行の復古的精神は不幸にして挫折したけれども、『中朝事實』(二卷)を著して我が國體の尊嚴なる所以を力說し、又士道論を唱導し、山鹿流の兵法を教へて、武士道の發達に一大感化を與へたのであつて（赤穗義士の忠節が素行の薰陶に負ふ所の多い事は周知の事である。）近世儒學史上に於ける一偉才であつた。素行の著述は極めて多い。右に擧げた以外の著名な著

書は『山鹿語類』四十三卷・『武家事紀』五十卷・『武敎全書』八卷・『武類全書』四卷・『武敎小學』一卷・『配所殘筆』一卷等である。

伊藤仁齋

素行は宋明の學說を排斥して、直接周公孔子に接すべき事を主張して、古學の先鞭を著けながら未だ世に行はれなかつたが、伊藤仁齋の古學に至つて、始めて天下に認められた。仁齋は素行の生れた年より五年後の寬永四年に呱々の聲を擧げ、寶永二年に年七十九で歿した。京都の人で、名を維楨、字を源佐といひ、古義堂と號した。父は材木商を營んでゐたが、仁齋は幼少の頃から學問に志し、家業を弟に讓つて專ら讀書に耽つた。初め性理學を修めたのであるが、三十七八歲の頃宋儒の學が孔孟の眞面目から遠ざかつてゐる事を悟つて、大いに攷究した結果自得する所があつて、遂に古學の一派（所謂堀河學派）を開くに至つた。仁齋は宋明諸儒の學說は、悉く孔子の眞意を沒却するものとして之を排斥し、儒敎の要諦は畢竟仁義の道であるとして、『論語』を宇宙第一の書とし、『孟子』はこれに次ぐものとして、特に此の二典に就いて古意を研究すべき事を主張したのである。仁齋は卓絕した識見を備へてゐた上に、高潔な人格者であつて、生涯出て仕へる事なく、前後四十年の間堀河の塾（古義堂）にあつて、知德合一主義のもとに子弟の敎



仁齋筆蹟

育に從事し、其の名望は全國に高く、門下三千餘人と稱せられた。仁齋は實に近世に於ける偉大な教育家であつたと言ふべきである。資性誠實篤行の人であつた事は、其の子東涯が記した『古學先生行狀』によつて窺はれる。古學先生といふのは門人が捧げた諡である。仁齋の述作の中で『論語古義』十卷『孟子古義』七卷『中庸發揮』一卷は、始めて古學の態度を表明した時の著述であり、(何れも寛文二年に成つたものであるが、出版されたのは正德二年から四年に至る間である。)『童子問』三卷『語孟字義』二卷は彼の學說を窺ふのに最も便利な書である。仁齋の本領は古學であつたから、詞藻には餘り意を用ひなかつたけれども、なほ詩文並に和歌に長じてゐた。家集には『古學先生和歌集』一卷があり、詩文集には『古學先生詩集』二卷『古學先生文集』六卷がある。

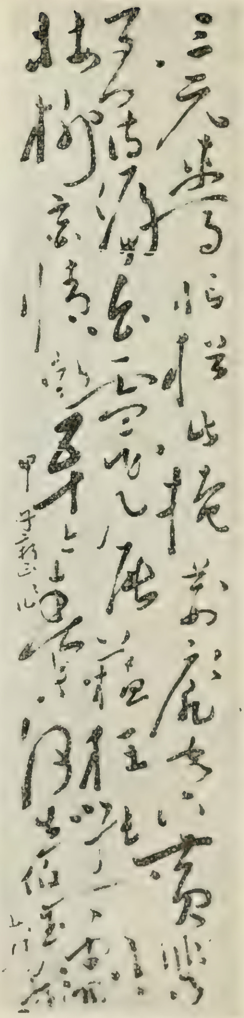
伊藤東涯

仁齋の長子東涯(元文元年歿六十七)も亦謹厚の人であつて、よく父の古學を傳へ、且つ博覽多識の聞えが高かつたので、堀河塾は益盛大になり、徂徠の蘐園學派と對峙して當時一偉觀を呈した。東涯は獨創の見はなかつたけれども、實學を唱へ又詩文にも長じてゐた。甘藷先生と呼ばれた青木昆陽は東涯の門人である。

荻生徂徠

仁齋の古學に刺戟せられて更に古文辭學を唱へたのは、江戸の荻生徂徠(享保十三年歿六十三歲)である。幕府の侍醫方庵(名は雋字は宗甫)の子である。名を雙松、字を茂卿といひ、別號を蘐園(江戸茅場町に居を構へたのに因る。)と稱した。(其の遠祖は物部氏であるので、支那風に物徂徠と稱したが、是より人名官名地名等を支那風に記す事が流行した。)徂徠は十四歲の時、父が罪に坐して上總國長生郡本納村に竄黜せられた爲に、青年時代を其の地に過し、殆ど獨學によつて研鑽を積んだ。二十五歲の年父が赦されて江戸に還つた時、彼も江

戸に出で、芝の増上寺の門前に始めて塾を開き、程朱の學を講じて名を知られた。偶柳澤吉保に認められて、經學竝に兵學を講じ、漸次重く用ひられたが、寶永六年に綱吉將軍が薨じて、吉保が失脚するに及んで、徂徠も市中に退き、門戸を張つて門人の教育に從事した。



徂徠筆蹟
（三浦子傳家藏）

徂徠は儒學詩文兵學竝に史學に通じた人であつて、其の博識宏才は白石と相似てゐる。其の性格は豪邁寛宏であつて、如何なる性質の門人をも抱擁して、盛に門戸を張ると共に、一方では異學に對しては固より、嘗ては敬服してゐた仁齋に對しても、頻りに辯難攻擊を加へて、自己の主張の宣傳に努めた。彼の學說を最もよく示した著述は『辨道』一卷『辨名』二卷であるが、史學に關する卓見は『經子史要覽』二卷『南留別志』五卷などによつて窺はれる。然し徂徠の名聲が大いに揚つたのは、晚年に唱へた古文辭學の爲である。徂徠は初め專ら朱子學を講究したのであるが、仁齋の古學に刺戟せられ、次いで明の李攀龍及び王世貞の文集を見て悟る所があり、遂に五十歲の時、古文辭學を提唱するに至つ

古文辭學

た。古文辭はもと明の李夢陽・何景明に始まり、李攀龍・王世貞等に至つて盛になつたのであつて、唐宋八大家の文を排斥して、先秦及び漢代の文を模範として、頻りに擬古文を綴つたのである。徂徠の古文辭學は李王の說を承けてこれを詩に及ぼし、更に古文古語の考證を階梯として、先王孔子の眞髓を究明すべしと主張したのである。かくて徂徠は詩文の研究並に創作を重んじ、門弟に其の模範を示すために、文の方面には『四家雋』（しかせん）六卷（韓退之・柳子厚・李攀龍・王世貞四家の文を選す）を作り、又詩の方面には『明詩絶句解』三卷を著した。さて徂徠が古文古語の研究を經學の基礎としたのは古學の一種であつて、確かに卓見であるが、經學と直接關係のない古文辭の說を奉じて、其の唱導に努めたのは明かに齟齬して居る。然し彼が古文辭學を唱へた結果、從來殆ど顧みられなかつた秦漢の古文學に對する研究が興り、又詩文の創作を獎勵して以來、文藝の方面が急激に發達したのであつて、漢文學の範圍を擴張した功績は顯著である。かくて古文辭學は凡そ六七十年間盛に行はれ、殆ど當時の漢文學を風靡したのであるが、蘐園學派の人々は徒らに古語成句の模擬剽竊を事としたから、其の弊害に對する攻擊は徂徠の歿後漸く起つた。要するに徂徠の人物學說に對しては毀譽褒貶樣々であるが、彼が唱へた古文辭學は詩文の興隆に多大の刺戟を與へ、又史學研究の提唱は斯學に影響する所が多かつたのであつて、學問文藝の發展に遺した功績を沒却する事は出來ない。

最後に徂徠の詩に就いて一言して置く。彼は元來詩文に長じてゐた。詩文集に『徂徠集』三十卷がある。嘗て柳澤侯が甲斐に封ぜられた後、其の命によつて封土を視察して江戶に還つた時の作

還レ館口號

甲陽美酒綠葡萄　霜露三更濕二客袍一　須レ識良宵天下少　芙蓉峰上一輪高

は人口に膾炙して居る。なほ左に佳作を掲げて置く。

送三菅童子遊二西京一

五十三驛莫レ言レ難　處處山川秋好看　明日先從二函嶺一望　如レ絲大道達二長安一

東都四時樂　四首錄一

兩國橋邊動二櫂歌一　江風涼月水微波　怪來岸上人聲寂　恰是扁舟仙女過

太宰春臺

徂徠の門下には俊才が尠くなかつたが儒學に秀でたのは、太宰春臺と山縣周南である。春臺（延享四年歿六十八）は名を純、字を德久といひ、別號を紫芝園と稱した。信州飯田の人で、父に隨つて江戸に出で、朱子學派の中野撝謙（ぎけん）に學んだが、後に徂徠の門に學び、經學の高足と稱せられた。然し徂徠とは性格を異にし、晩年には學說に於ても背叛するに至つた。春臺は寧ろ闇齋仁齋等に私淑し、又蕃山の影響をも受けたのであつて、李王の古文辭に對しては『文論』一卷を著して排斥した。なほ彼が徂徠の學風に慊らなかつた事は、『紫芝園漫筆』八冊を見ても明瞭である。其の學說を窺ふべき著述には、『辨道書』一卷『聖學問答』二卷『六經略說』一卷などがある。春臺は詩文に長じてゐた。詩文集には門人が編した『春臺先生文集』十五卷がある。

稻叢懷古

沙汀南望浩二煙波一　聞説三軍自レ此過　潮水歸來人事改　空山迢遞夕陽多

寧樂懷古

南土茫茫古帝城　三條九陌自縱横　藉田麥秀農人度　馳道蓬生賈客行
細柳低垂常惹レ恨　閑花歷亂竟無レ情　千年陳迹唯蘭若　日暮呦呦野鹿鳴

此等は世に名吟と稱せられて居る。春臺は和漢の學に通じた人で、和漢混淆文に長じてゐた。當時の柔弱な風潮を慷慨して筆を執つた隨筆『春臺獨語』一卷は、漢詩和歌俳諧淨瑠璃歌舞や風俗などの變遷を敍べたもので、文章も勝れて居る。書中に堂上家の歌風を斥けて、和歌の復古を提唱して居るのは注意すべき事である。

山縣周南

山縣周南（寶暦二年歿六十六）は名を孝孺、字を次公と云ひ、長門藩の儒臣長伯の子である。幼年の頃父に就いて經史を學び、十九の年父に隨つて江戸に出で、徂徠の門に入つた。周南は師の古文辭學を祖述して、同門の安藤東野と共に高弟と稱せられた。後に藩侯の信任を得て明倫館の教授となり、育英に功績があつた。詩文を能くし、集に『周南詩文集』十卷がある。

送三賀共昌之二東都一

灞水橋頭山上山　送レ君悵望月如レ環　樽前擊レ筑歌將レ別　袖裏贈レ詩心不レ閑
蘭槳潮平宵度レ海　銀鞍星落曉過レ關　東方一路三千里　飛雁欲レ迷縹緲間

玉江秋月

一碧瑠璃凝不ㇾ流　波光始白月盈ㇾ樓　笙歌忽入西風起　人住二廣寒宮裏秋一

此等が周南の佳作である。

詩文の興隆

元祿以前は儒學の興隆期であつて、詩文は未だ振はなかつたが、徂徠が古文辭學を唱へて詩文を獎勵し、又順庵門下の白石等が屢詩會を催すやうになつて以來、文人が續々現れて詩文はやがて儒學を離れて一の專門の學となつた。享保から後期の初頃にかけて、詩人として名聲の轟いたのは、徂徠門下の服部南郭・高野蘭亭、木門の祇園南海、鳳岡門下の秋山玉山、人見鶴山の門に學んだ梁田蛻巖等である。

服部南郭

徂徠の古文辭學を承け、詩文の流行に功績のあつたのは服部南郭（寶曆九年歿七十七）である。京都の人元矩の子で、名は元喬、字は子遷、別號を芙蕖館と云つた。幼少の頃から大和郡山の柳澤侯に仕へ、壯年の頃徂徠の門に入り、三十四歳の時致仕して後は專ら詩文を修め、多くの門人を集めて教授した。南郭は雪舟の畫風を慕つて水墨畫を能くし、又和歌も詠んだが、最も長じたのは詩文であつて、詩に於ては徂徠門下の隨一と稱せられた。詩文集に『南郭詩文集』二十四卷がある。長篇の小督詞などは彼の傑作であるが、今は絶句と七律各一首を揭げて置く。

夜下二墨水一

金龍山畔江月浮　江搖月湧金龍流　扁舟不ㇾ住天如ㇾ水　兩岸秋風下二二州一

鎌倉懷古　七首中錄一首

百年挾レ主據二鎌臺一　大盜幷存仁義才　後苑宴酣犬狗舞　前庭鬪罷旅獒來
一朝青血沾二青草一　九世城池委二赤灰一　寶戒寺邊松柏裏　風含二鐘聲一弔二今哀一

後の一首は北條高時の史實を詠じたもので、彼の最も代表的な作である。南郭は嘗て李攀龍が撰んだ『唐詩選』を推賞して校刊し、又『唐詩選句解』を著して盛唐の詩風を鼓吹したのであつて、是より『唐詩選』は『三體詩』に代つて流行するやうになつた。

高野蘭亭

高野蘭亭（寶曆七年歿五十四）は江戸の人で、名を惟馨、別號を東里と稱した。蕉門の俳人高野百里（名は勝春）の子である。幼少の頃から徂徠の門に入つたが、年十七の時失明したので、師の勸告に從つて日々詩賦に專念し、遂に南郭と竝び稱せられるやうになつた。詩三百篇を始め漢魏六朝唐明諸大家の作は大抵諳誦し、巧みに近體を作り、終生の詩篇は一萬首に達したが、病が重くなつた時悉く燒き棄てさせたと云はれて居る。現存する『蘭亭詩集遺稿』（十卷目錄一卷全六册）は詩友が相圖つて私錄に存した詩文を輯めて上梓したものである。

明妃曲

邊關萬里白楡秋　氈穹雲鬟獨自愁　一曲琵琶猶未レ畢　風沙吹上玉搔頭

月夜三叉口汎レ舟

三叉中斷大江秋　明月新懸萬里流　欲下向二碧天一吹中玉笛上　浮雲一片落二扁舟一

これ等によつて蘭亭の詩風は察せられる。後の一篇は南郭の金龍山畔の詩、（六四二頁參照）及び同門の詩人平野金華の早發二深川一の詩「月落人煙曙色分、長橋一半限二星文一、連レ天忽下深川水、直向二總州一爲二白雲一」と共に、徂徠が三絶と稱して壁上に貼り、常に吟誦したと傳へられて居る。徂徠門下の文人は尠くなかつたが、詩名の最も顯れたのは南郭及び蘭亭であつて、此の二家の門に入つて學ぶ者が多く、詩文は大いに盛況を呈した。

祇園南海

翻つて順庵門下を見ると、學者にして詩人を兼ねた者が多く輩出してゐるが、就中詩名の最も高かつたのは祇園南海（寶暦元年歿七十五）である。南海は名を瑜（又の名は正卿）字を伯玉と云ひ、紀伊の人である。幼少の頃父に隨つて江戸に出て順庵に學び、特に詩に長じてゐた。十四歳の時雨森芳洲の寓居に白石以下同門の人々と相會して、邊馬有二歸思一の詩を作つて一座の先輩を驚歎させ、更に十七歳の頃には自ら詩才を試みる爲に、二度まで一夜百首を賦して、大いに名聲を轟かしたと云はれて居る。壯年の頃紀伊侯に仕へ、頻りに詩學の興隆に努めた。其の詩風は李白に近く、豪放雄渾であつて聊かも俗氣を帶びてゐない。嘗て徂徠門下の詩風を諷して、詩盜判と題する戲文を綴つた事は有名である。家集に『南海詩集』五卷がある。詞藻の豐麗な作には、

玉島澄暉

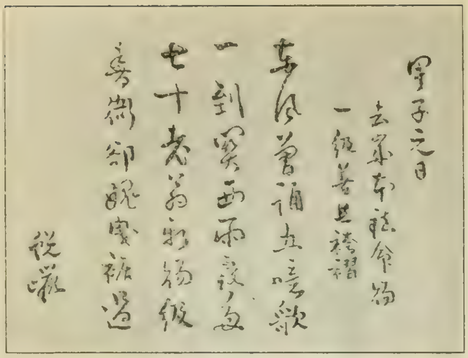
風鳴二江葦一夜漫漫　神女不レ還秋月團　二十五絃空二雁影一　霜花如レ夢水雲寒

の如きがあり、慷慨の氣を吐いた作には次の如き詩がある。

金龍臺

忽傾三百杯一　直上金龍臺　不レ窮二千里目一　何消萬古哀　下視天下士　賢愚渾塵埃　名利良徽物　韁羈非二我才一　匹夫抱レ璧良其罪　禍福徇レ人因二自媒一　朝取二封侯一夕葅醢　驪珠之寄爲レ誰來　半邪石邪何纍纍　土山漸臺作二死灰一　況復我生非二松喬一　白日西飛難二再囘一　百年開レ口一大笑　身後鴻名何在哉　當レ歌意氣乍奔逸　傍人莫レ怪玉山頽　唯願手弄二雲間月一　萬古千秋照二金罍一

南海はまた南宋の畫風を學んで、氣韻に富んだ畫を能くし、殊に山水と墨竹を得意とした。南郭が畫事に長じた事は既に述べたが、南海は近畿に於ける文人畫の祖と稱せられ、是より詩文と畫事を兼ねる者が續々現れた。



蛻巖筆蹟（高野辰之博士藏）

梁田蛻巖

白石・南海と併せて當時の三大家と稱せられたのは梁田蛻巖（寶曆七年歿八十六）である。蛻巖は江戸の人で、名は邦美、字は景鸞と云つた。十一歳の時朱子學派の人見鶴山に師事したが、後に山崎闇齋の學說に敬服し、又神道佛典にも通じてゐた。二十六歳の頃鶴山の紹介で、白石と相識り親交があつたが、白石が仕官して時めいたのに反して、蛻巖は一時赤石侯に仕へた外は、處士として居り、一生淸貧に甘んじて詩を樂しんだ。正德年中江戸にあつて不レ能レ買レ書の詩を賦して、

奎壁無レ光接二少微一　茅齋徒下讀書幃　十年夜雪背レ牕坐　一聲風花閱レ市歸
何處擬人江二久借一　吾家宿蠧耐二長饑一　惠車鄴架滿二天地一　誰信空拳猶突レ圍

と云ひ、又九日の詩に

琪樹連雲秋色飛　獨憐二細菊近二荊扉一　登レ高能賦今誰是　海内文章落二布衣一

と詠じて萬丈の氣焔を吐いた。此等によつて其の性格を察することが出來る。其の詩風は屢變遷したが、中年の頃には李杜に私淑し、後に明の詩風を學び、晩年には專ら唐詩を標準として淡麗な作を遺した。集を『蛻巖詩文集』（十六卷）といふ。左に得意の敍景詩三首を抄錄して置く。

須磨漁火

鐵枴峰頭纎月低　故關雲黑水禽啼　漁舟一去無二消息一　夜半火來二蘆竹西一

秋日江村

竹浦暮寒鵁鶄飛　炊煙一帶隔レ林微　龍王祠上大星見　浣婦獨穿二蘆荻一歸

秋夕泛二琵琶湖一

湖北湖南暮色濃　停レ篙回レ首問二孤松一　滄波兩岸秋風起　吹送叡山雲裏鐘

三首ともに淡墨畫を見るやうである。

以上擧げた詩人の外に、なほ秋山玉山（寶暦十三年歿六十三歲）がある。名を儀（通稱儀右衞門）字を子羽と云つた。肥後藩の儒臣で、藩主に隨從して江戸に出で、林鳳岡に師事する事十餘年に及んだ。歸藩の後侍讀となり、

藩學時習館の創立並に學政に盡瘁し、又該博な學識を傾けて教授の任に當つた。江戸に居る頃南郭と詩文の交を結んだが、玉山が嘗て富士山に登つて其の記を草した時、南郭は激賞して「天地有ニ富嶽一乃始有ニ此記一、苟神而不レ文則已、群玉之圃一題ニ名山一、萬古愈增ニ顏色一、若夫木華之神一、則固當ニ粲然啓ニ玉齎一」と評した。玉山の詩の名聲は文章以上であつて、賴山陽は白石・南海・蜺巖と共に正德四家と稱して居る。其の詩は特に古詩と五言絶句に長じて居る。家集に『玉山詩集』六卷と、歿後に成つた詩文集の『玉山遺稿』十一卷がある。今は共に『肥後文獻叢書』に收められて居る。

吹レ角

吹レ角黃河北　一聲萬馬秋　孤城寒欲レ裂　片月向レ人愁

暁發ニ岡部驛一

靑山開曙色　新樹自依依　寺在ニ浮雲外一　磬聲下ニ翠微一

深江夜泊得ニ山字一

扁舟夜泊ニ水雲間一　孤夢分明萬里還　殘月蒼茫滄海闊　不レ知何處是家山

古意

秋風蟋蟀響ニ蘭房一　夢後沈沈玉漏長　壯士邊城看ニ太白一　美人遙夜織ニ流黃一
金籠鸚鵡難レ傳レ語　碧瓦鴛鴦空斷腸　纖指不レ禁刀尺冷　綺牕殘月有ニ飛霜一

此等によつて玉山の詩才を窺ふ事が出來よう。

第三章　古學復興と和歌

一　二條派の末流

二條派の中興

江戸時代初期の和歌は、主として堂上と武家の間に維持せられたのであつて、其の歌風は鎌倉時代以來約五百年の歌壇を支配した二條家の末流である。此の歌風は室町時代の末期に、宗祇から三條西家に傳はり、次いで武人の手に移つて、細川幽齋に至つて中興した。幽齋（慶長十五年歿七十七歳）は名を藤孝と云ひ、法號を玄旨と云つた。足利義昭に仕へ、其の薨後には織田信長に從ひ、更に秀吉家康にも仕へた武將であるが、歌道並に有職の方面で最も其の名を知られた。慶長五年に丹後の田邊城に據つて、石田三成の軍に圍まれた時、後陽成天皇が彼の討死によつて、歌道の秘事の絶滅する事を憂ひ給うて、勅使を下して其の圍を解かしめられた事は名高い話である。幽齋は歌學を三條西實枝に承け、二條家の正統を傳へた歌人として一世に重んぜられた。幽齋の歌論に關する意見は、門人の佐方宗佐が記し留めた『幽齋翁聞書』二卷や、烏丸光廣の記した『耳底記』一卷などによつて窺はれる。家集には『衆妙集』（五卷の中三卷歌集）がある。（全集には松岡元義氏編『幽齋公歌集』三卷（明治四十三年刊行）がある。）其の歌風はありふれた趣向を、温雅な格調で歌つたものであるが、中には次に示すやうな清新な作がある。

細川幽齋

誰すみて八重の潮路に眺むらむ沖の小島のあきの夜の月

朝日さす方より霜のかつ消えて村濃に見ゆる庭のもみぢ葉
風わたる洲崎のよもぎ冬がれて夕霜しろきをちの川波
風そよぐ入江の蘆のほのぼのと月になり行くうす霧の空
仙人(やまびと)のすみかとやいはんみだれ碁の音してふくる燈火の影　（衆妙集）

堂上歌人

幽齋は戰國時代の末から江戸時代初期へかけての代表的歌人であつて、其の教を受けた人は、堂上にも地下にも多かつた。堂上歌人として名高いのは、三條西實條・中院通勝・其の子通村・烏丸光廣等である。三條西家は代々二條派の歌人として聞えたのであつて、實條は幽齋の師なる三條西實枝の孫である。中院通勝（慶長十五年薨五十三歳）は幽齋から古今傳授を受けた人であり、又『源氏物語』の古註を大成した『泯江入楚』五十五卷の著者として知られて居る。其の子の通村（承應二年薨六十六）は後陽成天皇以後四朝に歷仕した人で、和歌に於ては光廣と共に堂上の名家として知られて居た。烏丸光廣（寛永十五年薨六十）も亦幽齋から古今傳授を受けた一人である。光廣は漢學の素養があり、又禪を學んだので、其の歌には超俗的な風がある。家集を『黄葉和歌集』（九卷）と云ふ。其の孫の資慶も歌に長じてゐた。光廣は又後章に述べるやうに、多くの假名草子を書いて、近世小説の興隆に功績があつた。

後水尾院

幽齋の歌風は宮中にも行はれた。即ち後陽成天皇の皇弟八條宮智仁親王は彼に歌を學び給うて、古今傳授と共に之を後水尾院に傳へ奉られた。親王は歌に秀でて居られたが、殊に後水尾院（延寶八年崩御寶算八十五）は傑出した叡才を抱かせられ、宸作中には堂上歌人に見出し難い御特色がある。御集を『鷗巣集』（四

卷)と云ふ。特に叡慮歌に勝れさせられた。

くれなゐも緣も見えぬ春の色を千里につぐるうぐひすの聲

かすみ行く春は夜ふかき山の端にあけぼの急ぐ花の色かな

水の面に吹くあと見えて山もとの川風しろき波のうき霧

山めぐる時雨も見えて晴れくもる雲にいさよふ朝づく日かな

此等によつて御製の一般を拜することが出來よう。後水尾院は古典研究にも御心を濺がせられたが、和歌の方面では、寬文五年に近世の歌人三十六人の作中から『集外三十六歌仙』を撰び給ひ、又諸臣に勅して『類題和歌集』三十一卷を編纂せしめられた。『類題和歌集』は二十一代集を始め私撰集歌集歌合などから、一萬二千餘首の類歌を集めしめられたもので世に名高い。皇子の後西院と靈元院も亦父帝の風を受けて、和歌に堪能であらせられた。

松永貞德

江戸時代初期の堂上歌人は殆ど幽齋の歌風を學んだのであるが、一方に於て其の歌風はまた地下の門人松永貞德(承應二年歿八十三)に傳はり、更に其の門人を經て武士や庶民の間に普及した。貞德の曾祖父は攝津高槻城主入江九郞盛重であつて、祖父重政を經て、父永種に至つて姓を松永と改めた。貞德は幼少の頃から父の敎を受けてゐたが、父が堂上家に出入してゐた關係から、十二歲の時から關白九條稙通に就いて物語及び和歌を學び、其の薨後には更に細川幽齋の敎を受け、また里村紹巴に就いて連歌を學んだ。彼は長頭丸・道遙軒などと號し、俳諧を本領としたのであるが、それは四十歲以後であつて、

初めは專ら和歌並に連歌によつて名聲を揚げたのである。歌學の著書には『戴恩記』二卷（續群書類從に收む）がある。其の歌はさまで價値あるものではないが、和歌を民衆の間に普及せしめた功績を多としなければならぬ。左に二三の例を擧げて置く。

いく里の人の心にかかるらん遠山の端のはなのしらくも
朝霜のあづまぢかけて一筋に置きわたしぬる瀨多の長橋
雨ぐもを科戶（しなど）の風に拂はせてとよさかのぼる朝日子の影　（新題林和歌集より）

貞德は『徒然草』『堀川百首』『百人一首』などの註釋書を書き、又『歌林樸樕（ぼくそく）』二十八卷を著して、記紀萬葉以下の難解な歌詞に就いて、古人の諸說を擧げた後自說を加へて居る。此等の註釋の試みは、やがて其の門下から古典の研究家を出し、古學勃興の氣運を促したのである。要するに貞德は堂上の學問文藝を民衆に傳へ、平民文藝の開拓に著しい功績があつた人である。其の俳諧の事は後章に讓つて、以下和歌の門人に就いて述べよう。

宮川松堅

貞德の和歌の門人で名を知られたのは、宮川松堅・望月長好・北村季吟・加藤盤齋・元政上人の五人である。宮川松堅（享保十一年歿九十六歲）は京都の人で、貞德晩年の門人である。俳諧を能くしたが、歌人としては幽齋の歌道を繼承して貞德二世と稱した。

望月長好

望月長好（延寶九年歿六十三）は信濃の人であつて、京都に出て貞德に和歌を學び、廣澤池のほとりに閑居したので、廣澤長好とも稱した。松堅並に長好の歌風は、平淡溫雅であつて特色はなかつた。松堅と長好は歌人として名を成したのであるが、季吟と盤齋は寧ろ貞德

北村季吟

の古典註釋の方面を承けた學者である。北村季吟（寛永二年歿八十二）は通稱を久助と云ひ、別號を拾穗軒又は湖月亭と稱した。近江國栗太郡北村に生れ、十九歳の時貞徳の門人となつた。承應二年（三十歳）師の貞徳が歿した年、『大和物語抄』六卷を著して以後、續々古典の註釋書を公にした。かくて元祿二年（六十六歳）には烏丸光廣の推薦によつて、其の子湖春と共に幕府に出仕し、やがて法眼を經て法印に敍せられ、晩年には歌學所に仕へた。季吟は俳人であり又歌人でもあつたので、其の歌風には自ら連俳の趣味が加はつてゐる。

難波江や枯れゆく蘆の秋の霜にそぞろ寒くも月ぞうつろふ

飛びわたる影さへ見えて澤水のあさけ靜けき鴫のはねおと

此等によつて其の歌風を推すことが出來る。季吟の和歌は貞徳よりも却つて優つて居るのであるが、彼の業績として特筆すべきは古典の註釋事業である。其の註釋書類は十數種に達してゐるが、就中『源氏物語湖月抄』六十卷『枕草子春曙抄』十二卷『徒然草文段抄』八卷『八代集抄』百八卷『萬葉集拾穗抄』三十卷の如きは、今もなほ學者の座右に備へられてゐる。

加藤盤齋

盤齋（延寶二年歿四十九）は佛道を修め、歌道を幽齋に學んだが、主として貞徳の學統を承けた。彼は專ら京都に住み、歌人としてよりも古典の註釋家として知られてゐた。其の述作に『枕草子抄』十五卷『伊勢物語抄』六卷『新古今増抄』二十一卷『徒然草抄』十二卷『方丈記抄』一卷等があるが、名聲は季吟に及ばなかつた。要するに季吟・盤齋等の註釋は古來の諸説を集成したのであつて、創見は乏しかつたけれども、從來高閣に束ねられてゐた難解な古典を、

廣く讀ましめるやうにした功績は顯著である。これより國文學の研究が盛に起り、引いては國學の勃興を見るに至つた事を思へば、其の功績は偉大と云はねばならぬ。

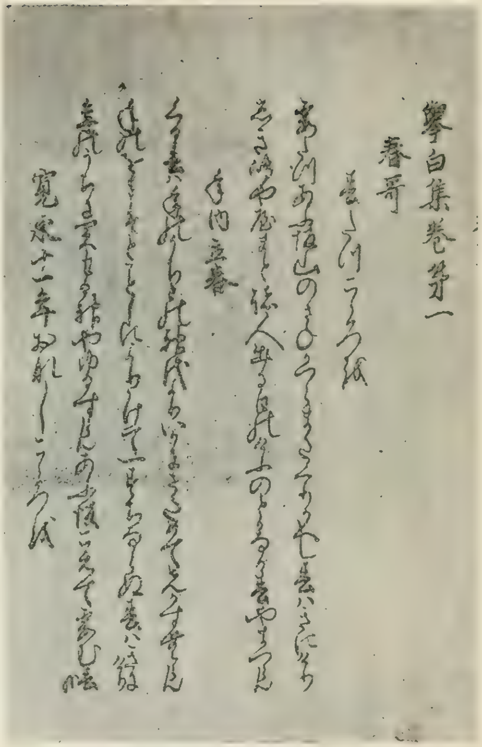
元政上人

貞德に和歌を學んだ人で最も勝れてゐたのは、前章に詩人として記した元政上人である。元政は漢詩俳諧を嗜んだが、殊に和歌に於ては當時の一異彩であつた。家集に「草山和歌集」一卷がある。彼は學德を兼ねた高僧であつたから、獨自の詩境を自由に歌つた。左に掲げる例歌によつて、其の歌風を窺ふことが出來よう。

人は來でむなしき谷に水ながれ花咲く山の春ぞしづけき
池の面は夜半の嵐にとぢはてて松にのこれる波の音かな
吹きそめてうき秋風の聲よりも立つ白雲の色ぞ身にしむ
稀に見し人目もかれて冬枯の草の戸ざしは月ぞくまなき　（草山和歌集）

木下長嘯子

幽齋若しくは貞德に歌を學んだ人々のことは大體以上で終つたのである。當時一方には堂上家の歌風に慊らずして、革新の志を抱いて、獨自の歌風を創めた人がある。木下長嘯子（慶安二年歿八十一）は其の最も著しい歌人である。長嘯子は名を勝俊（字は大藏）と云ひ、豐太閤の母の異母兄、肥後守木下家定の嗣子である。幼時から秀吉に仕へ、文祿の役後には小濱の城主となり、左近衞權少將に任ぜられたが、關ヶ原戰役の後には德川氏の爲に其の封土を奪はれたので、三十二歲の時東山の麓に隱栖した。是より學問に耽り、和歌を嗜み、また學者文人と風雅の交を結んで晩年を送つた。家集の「擧白集」は門人の山本


擧白集巻第一
春哥

擧白集（慶安二年刊）

春正が刊行したもので、十巻八冊の中後の五冊は文集である。其の文章は流麗輕妙であつて、傑出した文才を示して居るが、最も注意すべきは其の作歌である。彼の歌風の特色は主として清新な趣向、自由な用語、勁健な格調などにある。而して斯かる歌風を詠んだのは彼が愛誦した『萬葉集』や爲兼・正徹等の影響によるのである。

うぐひすの聲のひびきに散る花のしづかに落つる春の夕暮
靜かなる庭の木の間に影おちて夜ふかき花に月わたる見ゆ
忘らるる妹が夜床になきぬらすその黑髮の靑柳のいと
今朝よりは物あぢきなく心細し人わびさする秋や來ぬらむ
神無月しぐれは雨に思はせて今日降るものは木の葉なりけり

難波江や月影さえてみだれ蘆の末越す風に千鳥なくなり

はるばると鳥羽田のすゑをながむれば穂なみに浮ぶ淀の河舟　（擧白集）

此等によつて、著想竝に表現が極めて自由であり清新であつて、傳統を打破したものである事が窺はれる。其の新味に富んだ作歌の中には、次に示す例のやうに、語の反復や字餘りや破格な調を屢見出すのである。

高砂の尾上の霞たたぬ日はあれども鶴の鳴かぬ日はなし

はかなくて衰れことしもかきくれて雪さへ身さへ涙さへ降る

すべて人をいかなる時に偲ばざらんあはれ日又日あはれ夜又夜

名に立てし恨もはるる今宵かな月といへば雨花といへば風　（同　前）

此等の表現格調に對しては、傳統的歌風を學んだ人々からは、異端として非難せられた。要するに長嘯子は傳統的な型に拘泥せず、頗る新味に富んだ歌を詠んだのであつて、其の歌人としての價値は當時最も傑出してゐた。

江戸時代初期の堂上派以外の歌人として注意すべき人には、なほ藤原惺窩・吉川惟足・伊藤仁齋の如きがある。此等の人々は歌を餘技として嗜んだのであつて、自由な格調を用ひて、平明で比較的清新な作を遺して居る。惺窩には『惺窩先生倭謌集』五卷があり、惟足には『吉川惟足歌集』一卷があり、仁齋には『古學先生和歌集』一卷がある。

二　古學復興期の和歌

江戸時代前期の終は上方文藝の爛熟期たる元祿期である。此の時代には國民の自覺が勃興するにつれて、學問文藝に革新の機運が盛に起つた。卽ち古典研究の方面には、從來の陋習から蟬蛻した新しい研究態度が起り、歌學の方面には、中世以來の堂上の歌道に痛烈な非難を加へて、歌人の惰眠を醒ますと共に、古歌集の研究と相俟つて、平民文學としての和歌の興隆を促したのである。元祿期に於ける古典研究は後に述べる事として、先づ和歌革新の運動に就いて述べよう。

木瀨三之

寬文の頃和歌革新の意見を抱いて、近世歌學の魁となつたのは、木瀨三之(このせさんし)と山名玉山である。木瀨三之(歿年未詳)は通稱を作兵衞と云ひ、里村紹巴に學び、又貞德を師友とした人で、和歌竝に俳諧に長じてゐた。初め山科に住んでゐたが、後に近江の湖畔に移つた。彼は和歌改新の意見を抱いて、歌道の祕事傳授の無意義な事を說き、又萬葉にも通じてゐたのであるが、著述を公にしなかつたので、一般の注意を惹かなかつた。

山名玉山

山名玉山(元祿七年歿七十二)は名を義豐と云ひ、下に述べる和歌革新の唱導者戶田茂睡の從兄弟である。三之が京都に於て二條派の歌風に反對したのに對して、玉山は江戶にあつて同じ意見の下に、新しい歌風を提唱した。彼は極めて達吟の人であつて、終生の詠は二萬五千七百餘首あつたと云はれて居るが、今は纔かに茂睡の撰んだ『鳥の迹』中の二百六十餘首、及び其の續篇の『さされ石』中の三十首許りを見るのみである。玉山は茂睡に「つつ」に就いて傳授したと傳へられて居り、又茂睡

が『鳥の迹』を撰んだのも、玉山がかねて抱いてゐた撰集の志を繼いだものであると言はれて居る。蓋し玉山が學問並に歌風に於て、茂睡に與へた感化は少くなかつたであらう。其の歌風は概ね清新であつて、歌才に於ては寧ろ茂睡を凌駕して居た。

雨かすみ吹くとしもなき風の夕花しめやかに香りみちつつ
夜船こぐ袖のしたより出でにけり波をはなれて見ゆる月影
このゆふべ雪ふりぬべしうすぐもり日の影弱み風さむき空

此等は何れも時流を挺いてゐる。

三之・玉山に次いで、堂上の歌風に反對の氣勢を揚げたのは下河邊長流であつて、庶民の詠歌のみを集めて『林葉累塵集』及び『萍水和歌集』を撰んだ。長流の事は下に述べるとして、玉山の感化を受けて從來の歌學に對して、偶像破壞の新聲を放つた茂睡に就いて述べよう。

戸田茂睡

戸田茂睡（寶永三年歿七十八）は名を恭光、通稱八兵衛（後に茂右衛門と改む）と云ひ、古學復興の先驅者下河邊長流に後れる事數年後の寛永六年に生れた。父は幕府旗本の士で渡邊監物忠（ただ）と云ひ、駿河大納言忠良に仕へてゐたが、寛永九年に忠良が流謫の身となつた爲に、下野國那須郡の黒羽に蟄居した。かくて茂睡は幼少の頃、黒羽に於て不遇の中に成人したのである。其の後江戸に出て伯父の戸田政次に養はれ、戸田恭光（やすみつ）と名乘つて本多侯に仕へたが、延寶の末藩政改革の時に浪人して淺草金龍山の邊に隱栖し、其の後は學問と和歌の研究に從事した。茂睡は入道してからの名である。彼は新氣運の漲つてゐる

る江戸に成長し、獨學によつて一家の見を立てた人であつて、其の主張が激越であつたのは、一は自己の境遇に對する不平に因るものであると言はれて居る。

和歌革新の提唱

茂睡は早くから歌道革新の意見を抱いてゐたのであつて、寛文五年三十七歳に書いたものの中にも、既に其の主張を見るのであるが、晩年の著述に至つていよ／\熱烈になつた。即ち元祿五年には『百人一首雜談』一卷を書いて、堂上の歌人が尊重する百人一首に嚴正な批判を加へると共に、自己の歌學思想を披瀝し、又元祿十年には『僻言調』一卷を公にして、古今傳授の價値のない事を喝破し、且つ制の詞の如き無意義な拘束から脱却すべき事を叫んだ。次いで元祿十三年七十二歳には彼が從來提唱した革新の意見を取纏めた『梨本集』三卷を著した。『梨本集』は古歌を例證として、制禁の詞や主ある詞の謂はれの無い事を説いて、歌詞の自由を主張し、又祕事傳授の不合理なことを論じて、中世以來の歌學に一大攻撃を加へると共に、和歌の爲に自由の天地を開かうとしたものであつて、茂睡の著述中最も注意すべきものである。

茂睡の和歌

茂睡の家集はあつたかも知れないが傳はつてゐない。其の作歌は道中記風の戲書『紫の一本』二卷、自作及び同流歌人の歌を選集した『隱家百首』一卷、『鳥の迹』六卷、又其の續篇として了壽といふ人が編んだ『さゞれ石』六卷、及び『渚の松』一卷などに散見して居る。此等によつて茂睡の歌を見ると一種輕妙な所があり、又多少新しみもあるが、彼の歌論に見る程の革新的態度は實現せられてゐない。其の革新の聲が當時の歌壇に大なる反響を與へなかつたのは、後繼者が無かつた爲であるとも考へられ

るが、一には伎倆が勝れてゐなかつた爲である。試みに左に數首を掲げて見よう。

熊にあらず虎にもあらず淺草に起き臥すわれを誰か知るべき

暮れかけて山路の花に誰か來むいり日をつなげささがにの絲

ぬれて鳴く山ほととぎす五月雨のふる巣や思ふ親やこひしき

ゆふ霧に谷中の寺は見えずして日暮のさとにひびくいりあひ

旅衣たちへだてても去らざるはさらばといひし人のおもかげ

下河邊長流

茂睡が江戸に於て和歌の革新を提唱する以前、大阪にあつて古典の新研究に志し、古學復興の魁となつたのは下河邊長流である。長流は大和の宇田の武士小崎氏の子であるが、母方の姓下河邊氏を名乘つた。初の名を共平（一に具平）通稱を彦六と云つたが、後に長流又は長龍と稱した。父は片桐氏の臣で、長流も幼時武士の教養を積み、長じて主家に仕へたが故あつて辭任し、江戸に出て出仕を求めて成らず、空しく大阪に歸つた。次いで京都に上り三條西家に仕へたが、數年の後致仕して大阪に隱栖し、後半生を獨身の隱士として過した。其の學統は詳かでないが、木下長嘯子に就いて和歌を學び、なほ西山宗因に連歌を學んだと云はれて居る。長流は博覽多識の人で、特に萬葉に精通してゐたので、大阪に隱栖して後は其の教を受ける者が多かつた。併し性狷介の人で、富家の招聘にも應ずることなく、來訪の人に對しても無愛想であつて、常に氣儘な振舞をしてゐたと傳へられて居る。僧契沖とは十六七歳の年長者であつたが、特に親しく交り絶えず往來してゐた。當時德川光圀は學者を集めて「大日

本史」の編纂に從事せしめる傍古典の研究にも志し、長流が特に萬葉に造詣の深い事を傳へ聞いて、其の註釋を委囑した。然し長流は氣の向かない時には執筆しなかつたから、容易に捗らず遂に業を終へずして歿した。時に貞享三年六月で年六十一（一說に六十三）であつた。

長流の編著

長流の著述には『萬葉集管見』二十卷を始として、『萬葉集名寄』四卷『枕詞燭明抄』三卷『續歌林良材集』二卷などがあり、撰集には『林葉累塵集』二十卷『萍水和歌集』二十卷『長嘯歌選』一卷などがある。『萬葉集管見』は壯年の頃の著作で、（橋本進吉博士の考證によれば、萬治二年から寛文十年に至る十一年間に成つた。）契沖の『萬葉代匠記』の基礎となつた書として注意すべきものである。『萬葉集名寄』は一名を「萬葉集名所部類抄」と云ひ、集中の名所に關する和歌を國分として、所々に傍註を加へたもの、『枕詞燭明抄』は枕詞に註釋を施したもの、また『續歌林良材集』は一條兼良撰の『歌林良材集』の補遺として著したものである。次に『林葉累塵集』と『萍水和歌集』とは、共に過去の勅撰集に對して庶民の撰集たらしめる爲に撰んだもので、堂上の和歌に對して、平民の和歌の價値を認めしめようとした點に於て注意すべき集である。卽ち『林葉累塵集』は長流の自作及び交友や知人（武士農夫商賈僧侶等）の作歌千三百六十首を集めたものであり、『萍水和歌集』は其の後集として、同じ主義方針のもとに一千餘首の作品を選んだもので、共に春夏秋冬戀雜の六部門に分類してある。最後の『長嘯歌選』は木下長嘯子の家集『擧白集』の中から、秀歌を選出し之を四季戀雜に分類したもので、下に述べる『長流延寶集』『契沖延寶集』と併せて世に「三家和歌集」と稱せられてゐる。

長流は學者であると共に歌人であつた。家集には長流が延寶九年五十八歳の時自撰した『長龍和歌延寶集』一卷（一名自撰晩花集）と、彼の歿後に契沖が撰んだ『晩花和歌集』二卷とがある。長流は萬葉研究に精進してゐたけれども、其の歌風は古今・新古今の間を行くもので、未だ舊套を脱してゐない。併し反二條派の傾向は明かに認められる。

梅が香を佐保路はるかに送りすてて柳にかへる春の川風
あまつ星落ちて石ともならぬ間やしばし川邊の螢なるらむ
關越えて打出の濱にけさ見れば近江は霧の海にぞありける
小山田に冬の夕日のさし柳枯れてみじかきかげぞ殘れる
里中に夕あさりせし庭鳥のとぐらに入れば日は山の端に
つひにわが著てもかへらぬ唐錦龍田や何のふるさとの山
（長龍延寶集）

此等は趣向若しくは表現に於て、それぞれ特色を持つて居る。

釋契沖

長流に刺戟されて古典の研究に志したのは契沖である。攝津の尼崎城主青山幸利の臣下川善兵衛元全の子で、早くから出家の志を抱き、十一歳の時今里の妙法寺の住職丰定に就いて佛學を修め、次いで十三歳の年薙髪し、高野山に登つて修行し、二十三四歳で阿闍梨の位を授けられた。山を下つて一時難波生玉の曼荼羅院の住職となつたが、間もなく放浪の旅に出で、たまたま長流と相識つて莫逆の友となつた。嘗て長流に「我を知る人は君のみ君を知る人もあまたはあらじとぞ思ふ」といふ歌を贈つ



養壽庵に於ける契沖（伏屋家舊藏）
（百代草に據る）

た事がある。其の交際は長流の歿するまで變らなかつたのであつて、其の間に長流の學說から多大の感化を受けたやうである。其の後契沖は和泉の久井村に居り、更に五年の後延寶二年（三十五歳）には泉州池田萬町の豪家伏屋長左衞門重賢の邸内なる養壽庵に寄寓し、其の家藏の書籍を涉獵して古典研究の基礎を作つた。次いで延寶六年には、丰定の跡を繼いで妙法寺の住職となつたが、此の頃水戸侯光圀から長流に代つて萬葉の訓釋を完成すべき委囑を受け、前後八九年の歳月を費して脫稿したのが『萬葉代匠記』五十四卷である。『萬葉代匠記』を書き終へた元祿三年（五十一歳）の頃には、妙法寺を弟子の如海に讓つて、大阪高津の餌差町なる圓珠庵（伏屋邸内の舊庵を移築したもの）に隱栖して、專心著述に從事する傍、門人今井似閑・海北若沖・野田忠肅等の爲に萬葉を講じてゐたが、元祿十四年正月に享年六十二で寂した。

契沖は新しい科學的研究法によつて、古典研究と國語學の上に不朽の業績を遺した。中にも『萬葉集』の本文批判と訓釋に於ては、仙覺の研究以來の一時期を劃したのであつて、『萬葉代匠記』は本居宣長の大著『古事記傳』と並んで、江戸時代の古典研究の二大著述と稱せられてゐる。此の書は從來の古典に對する僻說を排斥して、直接本文に據つて新しい學術的考察を下したものであつて、國學の基礎となつて居る。『代匠記』には初稿本と精撰本の二種がある。初稿本は長流の『萬葉集管見』を基礎として私見を加へたもので、著手したのは天和三年頃である。而して精撰本は初稿本を水戸家に獻じた後、更に修正を加へて面目を一新したもので、元祿三年頃に完成した。契沖はなほ此の間に『萬葉集校本』二十卷を作り、又圓珠庵に隱棲した後には、古典に關する幾多の有益な著述を完成した。其の主要なものを擧げれば『厚顏抄』三卷『百人一首改觀抄』三卷『古今餘材抄』二十卷『勢語臆斷』四卷『源注拾遺』八卷などである。此等の諸著は校異・考證・語釋・評論等に亙つて完備して居るばかりでなく、極めて獨創に富んで居る。契沖はなほ悉曇の知識により、定家假名遣に反對して、歷史的假名遣の基礎を確立して、國語學史上に一大功績を遺して居る。『和字正濫鈔』五卷『和字正濫通妨抄』五卷『和字正濫要略』一卷などの著述がそれである。契沖の著書にはなほ考證的隨筆に『河社』（かはやしろ）五卷があり、語原研究を主とする隨筆に『圓珠庵雜記』及び『圓珠庵雜々記』各一卷などがある。要するに契沖は長流の自由討究の精神を承け、更に歸納考證の研究法によつて、我が國語國文學の研究に新生面を開いたのであつて、その功績は不朽である。

契沖の和歌

契沖にはなほ歌人としての一面がある。古歌に就いての豐富な知識によつて、自由に歌を詠んだのであつて、其の歌才は長流よりも寧ろ勝れてゐたのであるが、なほ萬葉調を詠むまでには至らなかつた。其の作歌が動もすれば詩人的情熱に缺けて居るのは、學者であつた爲である。家集には長流と共に延寶九年に自撰した『契沖和歌延寶集』一卷（一名自撰漫吟集）と、後に刊行せられた全集とも云ふべき『漫吟集類題』二十卷がある。

霞とも雨ともそらはわかぬまに玉ぬきそむる青柳のいと
濁江にやどる影よりかすめばやぬるる顔なる春の夜の月
雨まじり風うち吹きてふる里に散る花さむし春の夕ぐれ
山里の小笹まじりの道芝に花散りしきてきぎす鳴くなり
吹く風にまよひし塵もうちしめり土の香すずし夕立の雨
村雨のはるる夕日に立つ虹のなかば消え行く秋の山もと
久方の都を遠みおもふことありても見ばやしほがまの浦　（漫吟集類題）

此等は諷誦するに足る佳作である。

徳川光圀

偉大な復古學者契沖に保護を加へた水戸侯徳川光圀（元祿十三年薨七十三）は、國文和歌の研究にも志し、また巧みに和歌を詠んだ。家集には『常山詠草』二卷がある。其の歌風は親交のあつた中院通茂（通村の孫）の影響を受けたのであつて、堂上舊派の風を傳へて流麗清楚な作が多い。

あら磯の岩に碎けて散る月を一つになしてかへる浪かな

水底に影をうつしてもみぢ葉のにしきを洗ふ池のささ波

今はただ書よりほかの友も見ず昔をかたる人しなければ　（常山詠草）

安藤爲實
安藤爲章

光圀に召された儒者の中には、國文和歌に通じた人が少くない。其の中でも注意すべきは安藤爲實（享保二年歿六十四）同爲章（ためあきら）（享保元年歿五十八）の兄弟である。其の父定爲は丹波の人で朴翁と號し、木下長嘯子に和歌を學び、伏見宮家に仕へてゐたが、致仕の後千年山の麓尾口村に隱棲した。爲實と爲章は和歌を中院通茂に學び、初め伏見宮家に仕へてゐたが、爲實は有職故實に通じ、爲章は儒學と國文學に造詣が深かつたので、共に水戸侯に召されて彰考館の寄人となり、編纂事業に干與して功勞が多かつた。殊に爲章は光圀が萬葉の註釋を企てるに際して、屢大阪の契沖の許を訪れ、其の學説を聽いて多大の感化を受け、後に『釋萬葉集』の完成に與つて功績があつた。其の著書の中で最も世に知られて居るのは、紫式部並に『源氏物語』を評論した『紫女七論』一卷（一名紫家七論）であるが、此の外に『榮華物語考』一卷、『年山紀聞』六卷などがあり、家集に『千年山集』一卷がある。なほ隨筆の『年山紀聞』中には多くの歌話を含んで居る。年山は爲章の號である。

今井似閑

繼つて京阪地方を見ると、契沖の門人に今井似閑・海北若沖・野田忠肅があり、更に國學の創始者荷田春滿（あづままろ）が出て、復古學の新機運は益興隆した。春滿に就いては後に述べるとして、爰には似閑・若沖・忠肅三人の業績を略述して置く。今井似閑（享保八年歿六十七）は京都の富裕な商家に生れ、初め三之及び長流に

就いて學び、其の後契沖に師事した。其の著述には萬葉研究の旁證となるべき古文獻を蒐集した『萬葉緯』二十卷があり、又和歌にも長じてゐた。

海北若沖

海北若沖（寶暦六年歿七十七）は大阪の人で、十五六歳の頃から契沖の門に入り、其の萬葉講義を筆記して『萬葉集師說』（五十三冊寫本）を編み、又萬葉辭書『萬葉集類林』十五卷（契沖全集所收）や『萬葉作者履歷』九卷などを著作した。若沖も亦和歌を詠んだのであつて、家集には『若沖歌集』一卷がある。

野田忠粛

野田忠粛（享保四年歿七十一）は攝津國武庫郡入江の富家に生れた。初め長流に學び、後に契沖に師事し、萬葉及び勅撰集の索引の編纂に一生を捧げた。即ち萬葉の索引としては『萬葉集類句』（十二冊寫本）『萬葉集類礎』（三冊寫本）『萬葉集歌林類聚』（七冊寫本）を編成し、勅撰集の索引としては『古今五句類礎』『後撰類礎』『拾遺類礎』『新古今類礎』『新勅撰類礎』『續後撰類礎』（以上各五冊寫本）を編纂した。家集を『夜夢想』（一卷）と云ふ。以上擧げた三人は、何れも長流及び契沖の萬葉研究を承けて、それぞれ萬葉學の基礎的研究に沒頭したのであつて、當時難波を中心として古典研究熱が勃興した事は、國文學研究史上注意すべき事である。

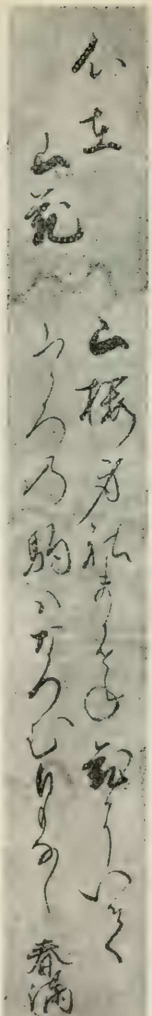
三　荷田春滿と國學

荷田春滿

難波を中心に長流契沖以下の古典研究家が輩出して、『萬葉集』を主とする復古學が興隆した時、京都に於ては荷田春滿（元文元年歿六十八）が現れて國學が建設せられた。春滿の家は氏を荷田又は羽倉と云ひ、伏見の稻荷神社の鎮座當初から代々祠官として仕へた由緒ある舊家であつて、春滿は父信詮（のぶあき）の後妻の二

男に生れた。幼名を鶴丸と云つたが、後に信盛と名乘り、更に東丸と改め、又東丸の字を改めて春滿とした。幼少の頃から家學を承けて神道に通じてゐたが、やがて復古學の研究に志し、家職を弟の信名に讓つて、專ら其の討究に沒頭した。當時京都には師とすべき人が無かつたから、彼は專ら獨學によつて律令・有職・故實・古文學などを研究し、なほ漢學をも修めたのであつて、其の志す所は我が國の古道を闡明し且つ復興しようとするにあつた。元祿十年二十九歲に、靈元天皇の皇子妙法院宮の御學問所に歌道の師として仕へたが、元祿十二年三十一歲には辭して始めて江戶に遊學した。其の後再三江戶に下つたが、享保七年三度目に下つた時には、八代將軍吉宗の知遇を得て、有職故實に就いて幕府の下問に應へ、又舊記和書の吟味並に校訂を命じられたが、翌年養嗣子在滿を代りに仕官せしめて鄕里に歸つた。かくて春滿は度々江戶に下つた間に、其の學說を多くの人々にも傳へ、又師事する者も多かつたのであるが、更に晚年には、諸藩の學校が悉く漢學を講習して居るのに慊らずして、國學校を建て國學を教授しようと志した。即ち享保十年六十歲に在滿をして其の聽許を請はしめ、且つ京の東山に敷地を定めたのであるが、遂に實現するに至らずして病歿したのである。而して國學の名は幕府に上申したと傳へられる「創學校啓」（春滿が自ら立案し、門人で漢學に長じた山名武內の推敲を經て成つたものであると云ふ。）に見えて居る。國學とは漢學に對する和學の義であるが、春滿は我が上代史・法制・有職故實・古典文藝及び國語を討究して古道を探究し、國體のよつて起る所を究明する事を目的としたのである。併し春滿の國學はなほ創建時代に屬するのであつて、後の國學者が推頌する程に完

成したものではなかつた。春滿の國學は晩年の門人賀茂眞淵に至つて、一大進歩を見たのである。春滿の國學に關する識見並に研究態度は、右の國學校創立の啓文、及び彼の著述によつて略之を推考することが出來る。春滿の研究は極めて多方面に亙つて居るが、其の主要なるものは記紀及び萬葉の註釋方面である。卽ち記紀に關する著書には『日本書紀訓釋』『日本書紀問答鈔』『日本書紀童子問』『日本紀神代卷箚記』『古事記箚記』（以上各一卷）等があり、萬葉の註釋には『萬葉集僻案抄』二卷『萬葉集和假名訓』五卷『萬葉集訓釋』八卷『萬葉集問答』八卷『萬葉集童子問』四卷『萬葉集改訓抄』三卷等がある。此等の註釋書の中には、門人に講義した所を周圍の者が筆記したのが多く、而も大抵は未完成のものである。



春滿筆蹟
（難波津に據る）

『萬葉集童蒙抄』八十卷（現存四十六冊）を春滿の著とするのは誤であつて、實は春滿の學說を基礎として、其の弟信名が撰述したものである。

春滿の和歌

春滿は萬葉を尊重し、萬葉調の復活を主張したのであるが、其の歌風は新古今の流を汲んだものであり、而も殆ど題詠ばかりであつて、歌人としての伎倆にも不十分な所があつた。併し春滿の性格思想は自ら詠歌の上にも現はれ、殊に終生戀の歌を詠まなかつたのは、其の性格の一端を示すものであ

る。家集に『春葉集』二卷があつて、其の中の一卷には文章が收めてある。

水上は夕立すらし見るがうちにひとすぢ濁る里のなかがは
嵐吹く音もおよばぬ雲の上はいかに靜けく月のすむらむ
ほのかにも明けゆく星の林まで秋の光と見れば身にしむ
時雨にはもみぢぬ庭の常磐木に霜の花さく時は來にけり
ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは
ますらをや折にふれては猛り猪のたけき心のなどなかるらむ　（春葉集）

春滿の和歌には右に示した例のやうな沈靜な風格があり、又自己の所信を披瀝したものが多い。春滿の學問は其の弟信名、養嗣子の在滿、在滿の妹蒼生子、在滿の子御風等によつて部分的に繼承せられて、それぞれの方面に貢獻する所があつた。在滿・蒼生子等の事は、國學の繼承者眞淵の業績と共に後期に於て述べるつもりである。

第四章　俳諧の勃興

一　貞門と談林

室町時代の末期に、山崎宗鑑・荒木田守武の二人が前後して、俳諧の獨立を企てた事は、既に述べた

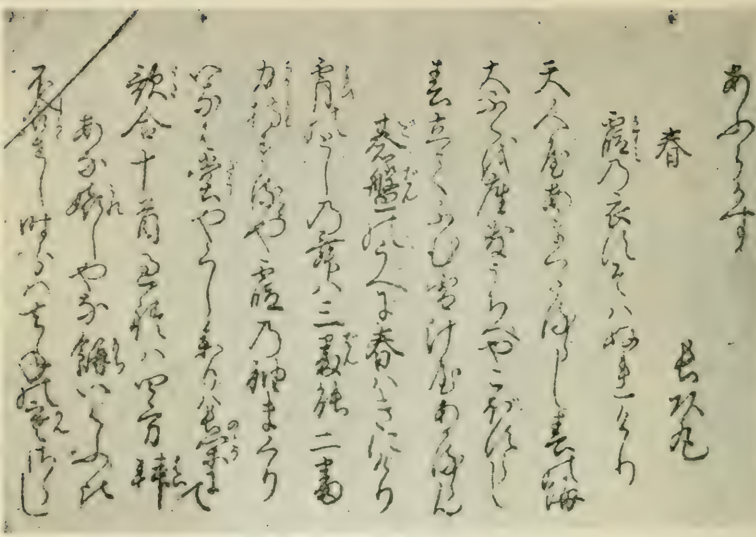
のであるが、其の後凡そ百年間は連歌に壓倒せられて、殆ど中絶の姿であつた。江戸時代の初期になつて俳諧を復興したのは松永貞徳である。當時は幕府の奬勵によつて學問が普及すると共に、文藝復興の機運が漸く起つた時であつたから、民衆的な俳諧は貞徳及び其の一派の人々の鼓吹によつて忽ち興隆し、是より江戸時代を通じて、平民文藝の重要な位置を占めるやうになつた。

貞徳の俳諧

貞徳は和歌竝に連歌を修め、又狂歌にも長じてゐたが、殊に俳諧によつて最も名を成したのである。貞徳は夙に和歌連歌の傳統的趣味を、俳諧の上に表現しようとした人であつて、慶長三年二十七歳の頃、既に俳諧の宗匠と稱せられ、爾來其の俳風は年と共に隆盛になつた。併し貞門が文壇に重きをなすに至つたのは、同門の集や俳書が續々刊行せられた寛永十年以後の二十年間、即ち貞徳の晩年である。かくて貞門の俳諧が全國的に發展するにつれて、門弟の間に意見を異にする者があつて論爭が起り、動もすれば統一を失ふ狀態になつた。是に於て貞徳は俳諧の式目を制定すると共に、自ら軌範を示す必要を感じて、寛永二十年には『新增犬筑波集』二卷を刊行し、更に八年の後慶安四年には、二條良基の『連歌新式』に倣つて、『俳諧御傘（ごさん）』十卷三冊を公にした。尤も貞徳が設けた式目は、是より先寛永十八年に、門人齋藤徳元が公にした『俳諧初學抄』や、正保二年に門人松江重頼が著した『毛吹草』にも散見する。

貞徳三部書

『新增犬筑波集』は貞徳が私淑した山崎宗鑑の『犬筑波集』の附合に自分の附句を試みたものである。其の上篇は『油糟』と題し、下篇は『淀河』と名づけられて居るのであつて、『御傘』と合せて貞徳三部書



寛永二十年刊「油糟」（江戸文學圖録に據る）

として重んぜられた。『油糟』は『犬筑波集』の附合の前句を選んで、これに自ら一句乃至數句の附句を試みたものであるが、なほ其の終には俳諧式目十箇條を和歌に詠んだものを添付して居る。又『淀河』は『犬筑波集』の中から附合二句を選出して、これに第三句を附け、且つ犬筑波の附合に批評を試みると共に、自分の附句には簡單な説明を加へて居る。例へば『油糟』に於ては、宗鑑が「霞の衣裾は濡れけり」の句に「佐保姫の春立ちながらしとをして」と附けたのに對して、貞徳は新たに「天人や天降るらし春の海」と附けて居るが如き類である。又『淀河』に於ては宗鑑が「口なしにきばのあるこそふしぎなれ」の句に、「菊の花とて耳はあらばや」と附けたのに對して、貞徳は更に第三句として「重陽に醉うて何いふ獨言」と附けて居るが如きである。

「天人」「重陽」の如き漢語は卽ち彼の所謂俳言である。次に『御傘』は俳諧の式目及び心得を說き、次いで俳言(從來の和歌連歌などに使用せられなかつた漢語俗語の類を指す。)を伊呂波順に配列して、連俳上の制約を註記した辭書である。要するに『油糟』と『淀河』とは俳諧の附方を實例によつて示したものであり、『御傘』は貞德の主張を明かにした辭典風の式目であつて、彼の俳諧の本領は此の三部書に最もよく現れて居る。

貞德の俳風

貞德は俳諧連歌の式目を重んじたのであり、又彼が鼓吹した俳諧は、自ら「俳諧は俳言にて賦する連歌なり」(增山の井)と言つて居るのを見ても明かであるやうに、其の趣味に於ては在來の和歌連歌に近いものであつて、只異なる點は、句每に彼の所謂俳言を讀み込む事を本體とした事である。從つて彼の俳諧は大體に於て宗鑑を摸倣して、是を一の法式によつて束縛したのであつて、其の滑稽は概ね卑俗であり、又緣語懸詞の如き言語上の技巧を重んじたのであるから、未だ文藝的要素に乏しいものであつた。試みに發句を見ても、

霞さへまだらに立つやとらの年
うぐひすのほころばす音や歌袋
ねぶらせて養ひ立てよ花のあめ
花よりも團子やありて歸る雁
皆人のひるねの種や秋の月

の類で其の滑稽趣味は陳腐であり幼稚である。要するに貞徳が文學史上に遺した功績は、俳諧を復興し且つ其の式目を定めて據るべき所を明示した事と、門下から後の俳風の先驅となつた人物を輩出した事とである。

貞徳の門流

貞徳の俳諧は初め京都に行はれ、次いで大阪に流行し、更に江戸を始めとして各地に普及したのであつて、名高い門人は京都と江戸にあつた。中でも野々口立圃(りふほ)・松江重頼(しげより)・山本西武(さいむ)・鷄冠井令徳(かへでゐりやうとく)・安原貞室・北村季吟・高瀨梅盛は貞門の七俳仙と稱せられて最も盛名があつた。七俳仙は何れも京都の人であるが、彼等とは別に江戸には、齋藤徳元・石田未得・高島玄札・荒木加友・半井卜養等の所謂五哲があつた。此等の門人中で種々の點から特に注意すべき者に就いて簡單に述べて置く。

安原貞室

貞門の高足で貞徳から最も重んぜられ、且つ伎倆も勝れてゐたのは安原貞室（延寶元年歿六十四）である。京都の人で名を正章(まさあきら)といつた。十六歳の時から貞徳に從つて才能を認められ、師の歿後には其の正統を嗣いで花の本二世となり、其の爲に同門の嫉視を受けた。其の著作には句集に『正章千句』一冊があり、また同門の撰集には、貞徳が撰んだ『崑山集』に對する後集としての『玉海集』七册及び其の追加の『玉海集追加』七册等がある。貞室の俳風には氣品があつて、後の芭蕉から推重せられた。

早蕨や深山の雪のふところ手
これは〳〵とばかり花の芳野山
涼しさのかたまりなれや夜半の月

いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥

此等の發句を見ても伎倆の卓絶してゐた事が窺はれる。次に識見に於て勝れてゐたのは野々口立圃（寛文九年歿七十一）である。京都の人で、雛屋を業としてゐたが、若年の頃から和歌連歌を學び、又書畫に巧みであつた。初めは貞徳風を忠實に守つてゐたが、師の晩年に重頼と不和になると共に、貞徳からも離れるやうになつた。立圃の編著は三十種を超えてゐるが、『俳諧發句帳』四冊『花火草』一冊などは最も著名である。なほ『源氏物語』の梗概を記した『十帖源氏』十卷、及び『おさな源氏』十卷などの著がある。

野々口立圃

立圃の俳風は弱々しく雅麗である。立圃に對抗した松江重頼（延寶八年歿七十四）は京都の絲商で、剃髮して維舟と號した。貞門中では比較的清新な句を詠んだのであるが、殊に「心の俳諧」を主張し、其の門流から池西言水・上島鬼貫の如き人才を輩出したのは注意すべき事である。其の自撰句集に『藤枝集』一冊があり、其の編著には『犬子集』五冊『毛吹草』七冊『毛吹草追加』三冊等がある。

松江重頼

すそみする霞は山の羽織かな

順禮の棒ばかりゆく夏野かな

秋やけさ一足に知る拭ひ緣

此等によつて彼の俳風を知る事が出來よう。北村季吟は既に前章に述べたやうに、古典の註釋家であつて、俳諧は寧ろ餘技に過ぎなかつた。其の俳風には一種の和歌風の雅味がある。其の門下から松尾芭蕉や山口素堂の如き俳人を輩出した事も、季吟の名聲を高からしめた所以である。

北村季吟

年の内に踏みこむ春の日脚かな

一僕とぼく〳〵ありく花見かな

まざ〳〵といますが如し魂祭

女郎花たとへばあはの内侍かな

此等が季吟の代表的な句である。季吟の俳書には『山の井』五冊『增山の井』二冊『誹諧埋木』一冊等があり、撰集には『新續犬筑波集』二十冊『續山の井』七冊等がある。

貞門の撰集

貞德一派の事を終るに當つて、貞門の撰集の著しいものに就いて解說して置く。最初に擧ぐべきは重賴が撰した『犬子集』（狗猧集とも記す）五冊であつて、寛永十年に上梓せられた。此の集は『犬筑波集』及び『守武千句』以後の發句と附句の勝れたものを集めたのであつて、貞門最初の而も當時の代表的句集である。作者は二百人に上り、附句千許り發句千五百三十餘を收めて居るが、最も多いのは貞德を始め七俳仙五哲の作である。『犬子集』に對立して撰ばれたのは立圃の手に成つた『俳諧發句帳』（四冊寛永十年刊行）である。貞德及び其の門下二百五十餘人の發句を類別したもので、『犬子集』と共通した句が尠くない。右に擧げた二集に次いで成つたのは、貞德の意志によつて撰集した西武の『鷹筑波』（五冊寛永十九年刊）令德の『崑山集』（十三冊慶安四年刊）貞室の『玉海集』（七冊明曆二年刊行）の三部である。殊に後の二集は貞門の二大句集と稱せられて居る。貞德晩年に於ける同門の連句の作風を見るべき貴重な資料は、貞室が公刊した『貞德紅梅千句』（一冊明曆元年板行）である。友仙の主催の下に、貞德・友仙・貞室・季吟・安靜・可賴・政信・長久等八人が催した俳諧百韻十

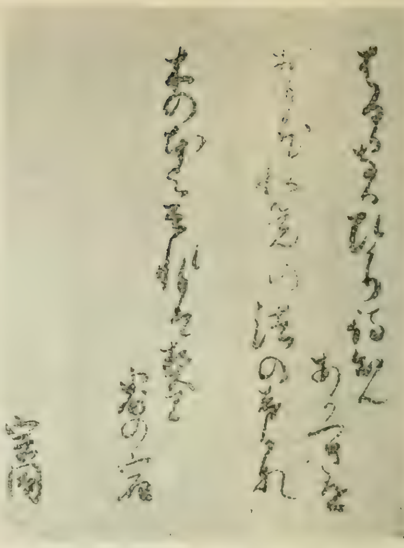
卷と追加表八句であつて、題號は卷頭の長頭丸（貞徳）の發句「紅梅やかの銀公の唐衣」に據つたのである。次いで季吟の手に成つた稍大きな撰集に『新續犬筑波集』（二十冊萬治三年刊）と『續山の井』（七冊寛文七年刊行）がある。前者は『犬筑波集』に倣つて、守武から當時の人々に至るまでの、七百二十七人の附句と發句を類別して集めた一大撰集であり、後者は貞門諸俳人九百六十七人の發句竝に附句を集めたもので、芭蕉（當時宗房と號した）の初期の句もかなり多く採られて居る。

俳諧革新の先達

貞徳一派の俳諧は、當時一般民衆の文藝的欲求を滿足させた爲に、一時盛に行はれたのであるが、其の千篇一律の俳風はやがて飽かれ、又其の煩瑣な法式に對しては、漸く反對の聲が起つた。貞徳の晩年に一派を樹てた立圃や重頼の俳風の如きは其の急先鋒であるが、それにも増して自由奔放の精神によつて、新風を鼓吹したのは西山宗因（天和二年歿七十八）である。

西山宗因

宗因は別に西翁・梅翁・梅花翁などとも號した。本名を西山次郎作豐一といひ、肥後國八代の城代加藤正方に仕へた武士であるが、寛永九年主家沒落の後浪人して京に上つた。初め加藤家に仕へてゐる頃、正方と共に連歌を嗜んでゐたが、上洛の後里村昌琢に就いて更に深く連歌を究め、又里村家に出入してゐた重頼と交るに及んで、專ら俳諧に遊ぶやうになつた。正保の初頃大阪に移り、連歌の宗匠をしてゐたが、やがて其の地位を我が子宗春に讓つて、自らは專ら俳諧の宗匠として活躍した。是より宗因は貞門の俳諧の法式を排斥して、奇警放逸な著想を自由且つ清新な形式で吟ずる事を主義として漸く世に認められ、寛文延寶の頃には、貞門の古調に飽いた人々が相携へて其の門に集り、やがて俳諧の革新を起すに至つた。宗因の派を談林



宗因筆蹟（藤井乙男博士藏）

（一に檀林とも記す）といつたのは、俳談の叢林の義に因るのであると云ふ。宗因一派の人々は貞門の俳諧を古風の俳諧と呼んだ。

宗因の俳諧にはなほ縁語懸詞などに囚はれた所もあるが、雅言漢語俗語などを自由に用ひ、又屢奇抜な句形を試みて居るのであつて、其の俳風は極めて自由であり、且つ覇氣に富んでゐた爲に、忽ち人氣に投じて一世を風靡したのである。宗因が延寶三年の春に江戸に下つた時、江戸の談林を率ゐてゐた田代松意一派の俳人九人と共に興行した『談林十百韻』二卷は、新調鼓吹の意氣を示した著名な作品である。左に掲げるのは其の初の六句である。

されば爰に談林の木あり梅の花　宗因
世俗眠をさますうぐひす　雪柴
朝霞たばこの煙横折れて　在色
駕籠舁き過ぐるあとの山風　一鐵
眺むれば供鑓つづく峰の松　正友

追手に近きかけはしの月　　志計

宗因は連句よりも寧ろ發句に長じてゐたのであつて、彼の特色も發句の上に最も鮮明に現れて居る。左に揭げる句には奇才が縱橫に發揮せられて居り、又古調の破壞に努めた跡が明瞭に窺はれる。

世の中や蝶々とまれかくもあれ
やがて見よ棒くらはせん蕎麥の花
頭巾寒うして北に峨々たる靑山なし
時鳥いかに鬼神もたしかに聞け
里人のわたり候か橋の霜
鴨の足は流れもあへぬ紅葉かな

右の句の中で、初三句は故意に異風を樹てて詩趣を缺いて居り、後の三句は彼が好んでよんだ謠曲趣味若しくは古典趣味の句であつて、理智的に流れて居る。此等は宗因が得意とする所であつたであらうけれども、文學的價値の高いのは、宗祇の幽玄閑寂を承けた次の如き句である。

富士は雪三里裾野や春の景
菜の花や一本咲きし松のもと
有明の油ぞ殘るほととぎす
月出でて一燈空し谷の庵

風にのる川霧輕し高瀬舟
秋はこの法師すがたの夕かな

此等はやがて起るべき芭蕉一派の俳風に近いものである。宗因の連句の集は『宗因千句』二冊以下數種傳はつて居り、又發句の集には一陽井素外が編んだ『梅翁宗因發句集』一冊、及び之を素外が増訂した『梅翁發句集』二冊がある。

宗因の門下

宗因は俳諧革新の先達であつたが、新風の宣傳に與つて力のあつたのは其の門下である。中にも大阪の井原西鶴・岡西惟中、京都の菅野谷高政、江戸の田代松意等は最も著名であつて、延寶の末頃の俳壇は殆ど談林調によつて獨占せられた觀がある。

岡西惟中

岡西惟中（正德元年歿七十三）は因幡の人で、後に岡山に住んだが、延寶年中大阪に出て醫を業とする傍、宗因に就いて俳諧を學んだ。幼少の頃から和歌連歌を修め、且つ學識があつたから、其の俳論には注意すべき識見がある。

菅野谷高政

次に菅野谷高政（歿年未詳）は京都の人で、談林中では最も新奇な俳風を喜び、自ら伴天連社と名乘り、西鶴の阿蘭陀流と並び稱せられた。

田代松意

又田代松意（歿年未詳）は大和の人で大阪に住んだが、寛文の末頃に江戸に下り、江戸に於ける談林の開拓に努め、且つ中心となつて活動した。

井原西鶴

以上述べた人々にも増して、談林俳壇の宗となつて、偉大なる足跡を印したのは井原西鶴（元祿六年歿五十二）である。初め鶴永と號したが、後に宗因の俳號西翁の一字を得て西鶴と改めた。(別號を松壽軒・二萬翁・二萬堂と稱した)十五六歲の頃から宗因に師事して以來四十歲の頃までは、專ら俳諧生活を續け

てゐたが、四十一歳からは主として浮世草子の作家となつた。其の詳しい傳記は後に述べるとして、俳諧時代に就いて概略を記して見よう。西鶴は元來自由奔放の奇才を抱いてゐたが、宗因が新風を創めて以來は、其の急先鋒となつて世人の非難を意とせず、頻りに新調の鼓吹に努めた。殊に寛文十三年（延寶元年）六月に大阪生玉神社の神前で、一派の人々と共に萬句（延寶元年『生玉萬句』一冊として刊行）を興行してより後の數年間に於ける活動は、實に目覺ましいものであつた。即ち延寶五年には、當時京阪の競技的興味を牽いた三十三間堂の大矢數に刺戟せられて、生玉の本覺寺に於て一日に獨吟千六百句（延寶五年に『俳諧大句數』二冊として刊行した）を作つて、俳諧大矢數の先例を開いた。此の千六百句に對抗して、同年の秋奈良の紀子は奈良の元興寺極樂院で一日に千八百句を卷き上げ、翌延寶七年には大淀三千風が仙臺の梅睡庵で、獨吟二千八百句を成就し



西鶴自筆自畫刻本〔俳諧高名集〕
（近世文藝名著標本集に據る）

た。そこで西鶴は此等に競うて更に絶倫の精力を揮つて、延寶八年に生玉の本覺寺で一日一夜に獨吟四千句を作り、更に貞享元年六月には住吉神社の社頭に於て、一日一夜に獨吟二萬三千五百句といふ空前絶後の記録を作つて一世を驚かした。（それ以來大矢數の興行は全く跡を絶つに至つた。貞享元年の大矢數の刊本は今傳はつてゐないが、延寶八年の『大矢數』（五冊延寶九年刊行）は現存して居る。）是より先天和二年十月に西鶴は『好色一代男』を刊行し、爾來專ら小說作者として立つたのであるから、貞享元年の大矢數は彼が俳壇を去るに當つて、一生の思出となるべき一大記錄を作らうとする意圖によつて成されたものであらうと云はれて居る。天和二年以後も俳諧を全く棄てたのではないが、俳壇からは自然遠ざかつたのであり、其の晚年の句に閑寂味を帶びたものがあるのは、心境の變化を來した事を示すのである。要するに俳人としての西鶴は、奇才を恃んで異風を樹て、且つ濫りに多作速吟を事としたから、文藝として價値のあるものは稀である。其の句に市井から取材したものが多く、又連句に物語的の趣味が漂つて居るのは、浮世草子への進展を豫告するものとして注意せられる。彼の連句はかなり多く傳はつて居るが、發句は餘り多く傳はつてゐない。左に示すのは世に廣く知られてゐる發句である。

辻駕籠や雲に乘り行く花の山

長持に春ぞ暮れゆく更衣

鯛は花は見ぬ里もあり今日の月

玉笹や不斷しぐるゝ元箱根

世に住まば聞けと師走の礁哉

俳壇刷新の先驅

宗因及び其の門下が、傳統的な俳諧に對して革新を唱へた功績は著しいのであるが、其の俳風はなほ未だ貞門と何程の距離も無いものであつた。殊に談林の一部の者は、徒らに破格な奇調を吟じて極端に走り、其の弊は却つて俳壇を毒するものがあつた。かくて一時天下を風靡した談林派も、宗因の晩年には既に行詰つたのである。此の時從來の遊戲的俳諧を、高尙な文藝の域に引上げようとする自覺は、談林貞門雙方の間から、期せずして殆ど同時に起つたのである。而して宗因一派の傳統破壞の後を承けて、眞の俳諧を完成したのは芭蕉であるが、それと前後して彼と殆ど同じ自覺のもとに、刷新を企てた者は尠くなかつた。伊藤信德・小西來山・池西言水・椎本才麿(さいまろ)・山口素堂・上島鬼貫(かみじまおにつら)等は其の著しい者である。今芭蕉に就いて述べるに先立つて、過渡期に現れた此等の俳人の略傳と其の俳風を略述して置く。

伊藤信德

伊藤信德(元祿十一年歿六十六歲)は京都の人で、初め貞門の高瀨梅盛に師事したが、後に家業の爲江戶に往來して、其の地の談林派の人々と交つて以來、俳風も自ら一變した。延寶五年から六年にかけて、松尾桃靑(後の芭蕉)山口素堂と共に三吟三百韻を作り、同六年京都では政定・仙庵と三吟三百韻を催して、『江戶三吟』及び『京三吟』(各一冊)を刊行した。此等は何れも貞門から離脫せんとする過渡期の作品として注意す

べきものである。次いで延寶九年には正長・如風・政定・春澄・仙庵・常之・如泉と『七百五十韻』（百韻七卷と五十韻一卷）を催して、大いに革新の氣勢を揚げた。かくて信徳は京都並に江戸に於て、俳壇の先覺者として新運動を起したのであるが、未だ眞髓を得るまでには至らなかつた。

雨の日や門提げて行く杜若

名月や今宵生るる子もあらむ

などは世に知られて居る。

小西來山

小西來山（享保元年歿六十三）は幼少の時から俳諧に志して宗因門下の前川由平（よしひら）に學んだ。大阪の人で、正徳の初頃今宮村に隱棲し、鬼貫と親交があつた。其の作風には洒落な性格が反映して、諧謔に富んでゐるが、中には平淡にして靜寂な詩境を吟じたものもあつて、蕉風に近い趣がある。尤も芭蕉とは直接の交渉はなかつた。句と文を集めて刊行したものに『今宮草』一册と『續今宮草』二册がある。

ほのかなる鶯聞きつ羅生門

春風や堤ごしなる牛の聲

見かへれば寒し日暮の山櫻

雨戸越す秋の姿や燈の狂ひ

我が寢たを首上げて見る寒さ哉　（十萬堂來山句集）

池西言水

池西言水（享保七年歿七十三）は奈良の人で、幼少の頃俳諧に志し重頼に師事した。彼は江戸に住み後に京都に

移つたので、兩都の俳壇に影響を與へた。殊に江戸では談林派の俳人と交り、又蕉門の人々からも影響を受けた。其の初めの俳風は貞門と談林の中間を行く趣があつたが、天和の頃から漸く新傾向を示し、貞享四年に成つた『京日記』の連句並に發句は、談林風から全く脱離した事を示して居る。『京日記』一冊は、延寶九年に刊行した言水編輯の『東日記』(二卷)に對する撰集である。自撰句集に『初心もと柏』一冊がある。

霞みけり比叡は近江のものならず
菜の花や淀も桂も忘れ水
牛部屋に晝見る草の螢かな
碁は妾に崩されて聞く千鳥哉
凩のはてはありけり海の音

此等が言水の代表的な句である。最後の句によつて「木枯の言水」と呼ばれた。

椎本才麿

椎本才麿（元文二年歿八十二）は大和宇陀郡の人で、夙に大阪に出て宗因や西鶴の門に學んだ。壯年の頃江戸に下つて言水・松意等と交り、又芭蕉・其角等と接したが、晩年には再び大阪に移つた。其の俳風には芭蕉の俳風の先驅と認むべきものがある。其の發句を集めたものには、一陽井素外が撰した『狂六堂才麿發句拔萃』一冊がある。才麿の句には次に示すやうな纖細な感覺的描寫を試みたものがある。（信德以下は潁原退藏氏の「俳諧史の研究」（岩波日本文學所收）を參考した。）

笹折つて白魚のたえ〴〵靑し
五月雨や桃の葉寒き風の色
美しい皺を見せけり芥子の花
夕暮のものうき雲やいかのぼり　（狂六堂才麿發句拔萃）

山口素堂

言水・才麿等にも増して蕉風に刺戟を與へたのは山口素堂（享保元年歿七十五）である。名を信章、字を子晋といひ、別號を素仙堂。其日庵といつた。山口氏は代々甲斐國巨摩郡山口に住んでゐたが、父の時に甲府に移つて酒造業を營んだ。素堂は家を弟に讓つて江戸に出で、林春齋に就いて經學を修め、又茶道連俳諧道を學んだ。延寶七年頃不忍池の畔に隱栖したが、貞享三年には葛飾郡阿武に移つたので、素堂一派の俳風を葛飾風と稱した。俳諧は初め季吟の俳風を學んだが、後に談林に移り、更に葛飾に移つた頃から漢詩調の新風を創め、芭蕉等と往來して屢同座し互に影響を受けた。素堂の漢詩直譯風の生硬な句は言ふに足りないものであるが、詩の趣味を取入れて飄逸閑雅な句を詠んだのは、正風の先驅の一員として注意すべきである。

目には靑葉山郭公初鰹
浮葉卷葉此蓮風情過ぎたらむ
花芙蓉美女湯あがりて立てりけり
我舞て我に見せけり月夜影

回廊に潮滿ちくれば鹿ぞ啼く

南瓜(とうなす)やずつしり落ちて暮淋し　（山口素堂句集）

句集には子光編の『素堂句集』一册の外に、『俳諧五子稿』所收の『山口素堂句集』がある。素堂は俳文にも長じてゐた。文集には坎窩久臧編『素堂家集』一册がある。

上島鬼貫

蕉風確立以前の先覺者の中で最も注意すべきは上島鬼貫（元文三年歿七十八）である。鬼貫は寛文元年に攝津國伊丹の酒造家に生れた。（此の時芭蕉は十八歳である）伊丹は古くから古風並に談林の俳諧が盛に行はれた處であるから、彼も夙に其の風に化せられて、既に八歳の時に「來い〳〵といへど螢が飛んで行く」と吟じた。十三歳の時重頼に師事して古風の俳諧を學び、十六歳の頃から更に談林調を學んだが、共に彼の理想に合はなかつたので、延寶九年（元和元年）から五箇年の間焦慮深省した結果、遂に貞享二年（二十五歳）（芭蕉四十二歳の時）に至つて「誠の外に俳諧なし」と悟り、茲に始めて獨自の詩境に入る事が出來た。貞享二年に故郷を去つて大阪に出で、元祿五年には郡山侯に仕へたが、同八年に母の病によつて致仕し、元祿十五六年の頃には京都に住み、晩年は再び大阪に住んだ。（鈴木重雅氏著『俳人鬼貫の研究』に據る。）鬼貫は公卿武士商賈桑門とも交つたが、俳友は古風・談林・蕉門の何れにもかなり多くあつた。殊に親交があつたのは言水・來山・才麿であるが、又屢芭蕉に面接し、蕉門の嵐雪と兩吟歌仙を試みて居る。鬼貫が眞の藝術的境地を開拓したのは、芭蕉が正風の眼を開いたのと殆ど同時であるが、多くの門人を擁する事を欲せず、又自己の俳風を天下に弘めようともしなかつたから、彼の俳風は其の死と共に凋落したのであ

り、而も其の眞價が廣く認められたのは近年の事である。尤も鬼貫の俳風の影響は天明期の炭太祇や與謝蕪村等に及んで居るのであつて、此の事は更に後期になつて述べるつもりである。鬼貫の俳風は技巧を排斥し、平淡な語を用ひて飄逸淡泊の中に、沈靜な詩境を創造する妙がある。率直平淡の弊としては、屡無味乾燥に陥つて居るのであつて、天分に於ては芭蕉に及ばなかつた。然し其の俳論には文藝の根本精神を捉へた「誠」の説の如きものがあつて、俳諧史上に不朽の功績を遺して居る。「誠」に基づく俳諧觀は其の著『獨言(ひとりごと)』二冊に記されて居る。此の書の上卷には俳諧の心得を説き、下卷には四時の景物旅戀祝などに對する隨筆を收めて居る。彼の句文集には自著『七車』(五卷二冊)があり、又明和年間に太祇が編んだ『鬼貫句選』二冊がある。

風が吹く梅の蕾はしつかりと
打晴れて障子も白し春日影
軒うらに去年の蚊うごく桃の花
それは又それは囀る鳥の聲
行く水や竹に蟬鳴く相國寺
涼風や虚空に滿ちて松の聲
やれ壺に澤瀉細く咲きにけり
によつぽりと秋の空なる富士の山

何の木と見えて雨降る今宵かな

油さし油さしつつ寝ぬ夜かな　（鬼貫句選）

以上略述した信德以下の數人は、何れも在來の遊戲的閑文字に滿足せずして、それぞれ高尙な詩境を求めたのであるが、未だ天下を動かすまでには至らなかつた。併し彼等によつて起された刷新の機運はやがて芭蕉を奮起させて、茲に始めて俳諧史上に一時期を劃する革新が行はれたのである。芭蕉に就いては節を新たにして記述する。

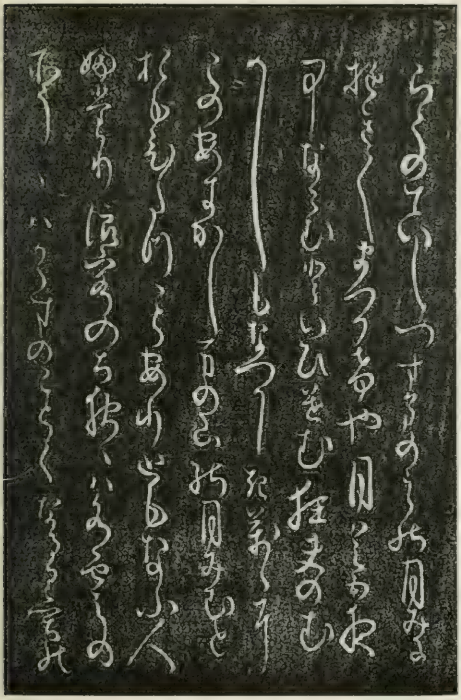
貞門
松永貞德
- 野々口立圃
- 松江重頼
  - 池西言水
  - 伊丹風 上島鬼貫
- 山本西武
- 鷄冠井令德
- 安原貞室
- 北村季吟
  - 蕉風 松尾芭蕉
  - 葛飾風 山口素堂
- 高瀨梅盛 — 伊藤信德
- 石田未得 — 岡村不卜 — 化鳥風 立羽不角（七〇八頁參照）

談林
西山宗因
- 井原西鶴 — 椎本才麿
- 岡西惟中
- 菅野谷高政
- 田代松意
- 前川由平 — 小西來山
- 内藤露沾（磐城平の城主）— 水間沾德（七〇八頁參照）

二　松尾芭蕉

天和貞享の頃期せずして東西の俳壇に、新俳風を鼓吹する者が續出した頃、江戸に於て貞門談林から蟬脫して眞の俳諧を完成し、遂に天下の俳風を刷新したのは松尾芭蕉である。芭蕉は正保元年に伊賀國柘植（一說に上野）の松尾與左衞門の二男に生れた。幼名金作又は甚七郞といひ、元服して忠右衞門宗房と名乘り、十九歲の時上野の城代藤堂家に仕へ、良精の嗣子良忠の侍臣となつた。良忠は蟬吟と號し、俳諧を北村季吟に學んでゐたので、芭蕉も其の感化を受けて同じ道を嗜んでゐた。然るに芭蕉が二十三歲の時、寛文六年に良忠は早世したので、亡君の遺髮を携へて高野山に上り、供養を營んで一旦歸國して後に、京都に出て季吟の門に入り、數年を經て上野に歸つた。寛文十二年二十九歲の時、鄕里で天滿宮奉納の三十番句合を編み、自ら判詞を加へたものは『貝おほひ』であつて、現存する彼の最初の著作である。併し當時の句は貞德の流を汲んで、未だ遊戲氣分に滿ちたものであつた。此の年芭蕉は志を立て、知人をたよつて江戸に下り、小石川關口の水道工事の監督を勤めたが、間もなく辭して流浪生活に入つた。これより延寶八年に至るまでの七八年間は、生活に窮すると共に俳諧に於ては貞德風から談林調に移り、更に新生面を拓かうとして、絕えず苦悶焦燥を續けてゐた。此の間に榎本其角・服部嵐雪等を始め入門する者があつて、延寶八年には門人二十人の歌仙『延寶二十歌仙』を公にし、次いで同年には伊藤信德等の『七百五十韻』を承けて之を千句とする爲に、其角・才麿・揚水

と共に四吟二百五十韻を催して、劃期的の『俳諧次韻』を作つた。此等の俳風はなほ談林調に屬するものであるが、漸く獨自の境地を求めて、從來の作風と趣を異にしてゐる所がある。此の頃の發句で人口に膾炙して居るのは、「枯枝に烏のとまりたるや秋の暮」（東日記所載）であつて、後年の蕉風の面目は既に此の一句の上に現れてゐる。下つて天和三年には其角が撰んだ『虛栗』（二冊）が刊行せられたが、此の集には『俳諧次韻』よりも更に一歩を進めて、既に幽玄閑寂の詩境に入らうとする過渡期にあつた事を示して居る。



芭蕉眞蹟（鹿島紀行）

是より先天和元年三十八歳の時市中の雜鬧を避けて、門人杉山杉風の深川六間堀の別墅に移り、庭に一株の芭蕉を植ゑて芭蕉庵と號した。（延寶三年以來桃青と號してゐたが、此の草庵に住んで以來芭蕉を號とするやうになつた。）彼は芭蕉庵に安住の境地を得て以來、環境が一變すると共に、人生觀並に藝術觀の上にも漸く解決の路を

見出したのであつて、此の頃からの作品には、著しく內面的に深みを加へるやうになつた。芭蕉は西行・宗祇の集に親しみ、蘇東坡・杜甫の詩を愛誦し、又老莊の學にも通じてゐたが、なほ深川大工町に留錫中の、鹿島根本寺の僧佛頂和尙に參禪したのであつて、古風の俳諧を脫却して正風を興すに至つたのは、此等の修養に負ふ所が極めて多いのである。さて芭蕉庵は天和二年の急火に類燒し、芭蕉は纔かに身を以て逃れ、一時甲斐國に漂泊の生活をしてゐたが、此の間に門人の寄進によつて草庵の再興を見たのである。併し芭蕉は災厄に遭つて大いに悟る所があり、一所に安住することなく、貞享元年四十一歲から世を去るまでの十一年間は、主として雲水行脚を續けたのであつて、彼の人格と藝術は、また此の旅行の體驗によつて磨き上げられたのである。芭蕉は元來自然詩人の西行・宗祇に私淑すると共に、名勝舊蹟に對する憧憬の心を抱いてゐたから、旅行は彼の最も好む所であつた。今晚年に於ける漂泊の生活と、其の病歿に至るまでの略歷とを記して置く。

芭蕉は『虛栗』の成つた翌年、卽ち貞享元年八月には門人千里を携へて、東海道を行脚して故鄕を訪れた後、近畿地方を遍歷し、歸途木曾路を經て翌年四月に草庵に歸つた。此の旅行は前後九箇月に亙るのであつて、『野ざらし紀行』一名『甲子吟行』は此の時の紀行である。次に貞享四年八月には、門人河合曾良・僧宗波を伴つて常陸の鹿島に月を眺め、潮來を經て歸途に就いたのであつて、此の時『鹿島紀行』が成つた。其の後十月下旬には「旅人と我が名呼ばれん初しぐれ」の首途の句をよんで、再び東海道を旅行して伊賀に歸省し、翌元祿元年の春から夏にかけての間には、伊勢吉野高野などを巡行し

て須磨明石をさすらひ、初秋の頃名古屋に著いた。此の時の紀行を『笈の小文』（一名『芳野紀行』又は『卯辰紀行』）といふ。次いで八月には門人佐分利越人と共に、更科の月を眺め善光寺に詣でて、九月



蕪村筆「奥の細道」繪卷（長尾欽彌氏藏）

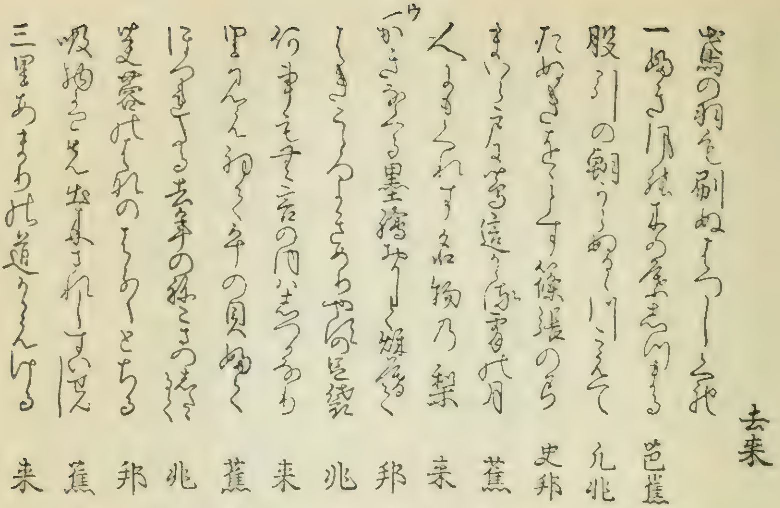
に江戸に歸つた。『更科紀行』は此の旅の記念である。（前年江戸を出立して以來十箇月を要した）翌元祿二年三月には更に一大決心を以て、奥羽北陸の大行脚を思ひ立つた。卽ち門人曾良を伴つて日光に詣で、那須野を横ぎり、白河の關を越えて磐城岩代の歌枕を探り、かねて憧れてゐた松島に遊び、道を踏み違へて石卷に出た。それより北二十里を旅して平泉の史蹟を弔ひ、陸前出羽の國境を越えて新庄に出で、立石寺其の他の名所を訪れて最上川を下り、羽黑山を順拜して象潟の好風景に接したのは六月の末である。その後越後路を行脚し、幾多の苦難を嘗めて金澤に至り、山中の溫泉に浴して後、腹を病んだ曾良と袂を別ち、獨り越前若狹の浦傳ひをして、九月に美濃の大垣に到著した。此の大旅行に費した日數は百五十餘日、行程六

百里であつて、其の紀行の『奥の細道』は彼の俳文中の白眉であるばかりでなく、國文學史上最も勝れた紀行文であり、文中に載せられた五十一句は、彼の文藝の完成期を代表して居る。

貞享元年から元祿三年に至る間に、三度の大行脚を行つたが、奥羽北陸の旅を終へた後は、行脚と閑居と相半ばした生活を送つたのである。即ち大垣に著いて三日の後には、伊勢神宮の正遷宮を拜むために伊勢に旅し、次いで郷里を訪れた後、畿内を遍歷して近江の膳所で越年した。次の年元祿三年の四月から九月までは、近江の石山の奥なる幻住庵に閑居し、翌元祿四年四月には、洛外嵯峨なる門人去來の別莊落柿舍に十數日を送つた外、諸所に留錫し、なほ近畿地方を周遊して、十一月の初頃に江戸に歸つた。是より先深川の芭蕉庵は、奥羽の大旅行に出立するとき人に讓つたのであるが、芭蕉が江戸に歸つたとき門人相謀つて、舊庵の近くに草庵を營んで師を住ませた。此の頃芭蕉は既に旅行に飽き、健康もすぐれなかつたので、元祿七年の春頃までは草扉を閉ぢて閑居してゐた。併し同年五月にはまた旅情が動いて最後の旅に出た。先づ伊賀に歸つて父母の墓を拜し、近江奈良を漂泊して大阪に行つたが、たまたま門人園女の家の饗應に招かれ、菌毒に中てられて花屋仁左衛門の家で客死した。時に元祿七年十月十二日で享年五十一であつた。遺骸は遺言によつて近江の義仲寺境内に埋葬した。其の終焉記には其角の記したものが『枯尾花』に收めてあり、また支考の記した『笈日記』がある。別に門人が看護の傍代る代る執筆したと云ふ『花屋日記』があるが、これは後人の手に成つた假託の書である。

芭蕉の文藝觀

芭蕉の一生涯には以上述べたやうに、幾多の難關があり樣々な苦悶があつたのであるが、此等は悉く彼の人生觀を確立し、文藝觀を完成する上に多大の效果があつた。かくて晩年になつて到達したのは、人生と自然の融合渾一の境地であつて、それから生れた文藝は芭蕉の全人格の反映に外ならなかつた。芭蕉は門人に俳諧の道を問はれた事は屢あつたが、却つて後學の惑となることを恐れて之を示さなかつた。卽ち芭蕉は不言實行によつて門人を導いたのである。併し門人が祖翁の訓言として、俳書中に屢述べた「千歳不易」「一時流行」や「さび」「しをり」の如きは、芭蕉の文藝觀の要諦として最も注意すべきものである。千歳不易と一時流行とは、俳諧の風體に此の二種があることを示したものであるけれども、自然竝に人生の觀照に、流轉と不變の二相の存する事を指示したものとも見られるのである。而して芭蕉が此の二者を一に歸するとしたのは、彼の文藝が風雅の誠を根本とするが故である。次に「さび」と「しをり」も、元來は句作の實際に就いての敎であつて、「さび」は句の內容に幽玄閑寂の詩境と、其の餘韻の必要なることを示し、「しをり」は其の內容にふさはしい姿詞を肝要とすることを敎へたものであつて、これも畢竟合致して一に歸するのである。要するに芭蕉は「誠」を以て文藝の根本としたのであつて、幽玄閑寂なる境地は其の理想であつたのである。卽ち芭蕉の文藝觀は、平安朝以來の歌學や、室町時代中葉以後の連歌道の精髓を承けたものである。併し彼は纏まつた自己の藝術論を遺してゐないのであるから、其の眞相を窺ふのには、直接其の作品を見るより外はないのである。



芭蕉が正風の眼を開いてより後の彼及び同門の作品は、大體『俳諧七部集』（安永三年刊行）に網羅せられて居る。七部集は貞享元年に芭蕉が名古屋を訪れた時、其の地方の蕉門の人々と共に作つた歌仙を集めた『冬の日』一册（荷兮撰か）、貞享三年に尾張地方の門人の歌仙及び句を集めた『春の日』一册（荷兮撰か）、元祿二年に尾張の門人山本荷兮（かけい）が撰した『曠野（あらの）』三册、（此の集には宗鑑を始め季吟素堂其の他の句をも廣く收めてゐる）同三年に芭蕉が琵琶湖畔に流寓してゐる間に、膳所の濱田珍碩等が撰んだ『ひさご』一册、同四年に去來凡兆が師の命を受けて撰んだ『猿蓑集』二册、同七年に芭蕉が深川の草庵に居る頃、門人志田野坡・小泉孤屋・池田利牛の三人が編んだ『炭俵集』二册、及び芭蕉の歿後元祿十一年に成つた『續猿蓑集』二册、以上の七部をいふ。『冬の日』には未だ多少談林の臭味が殘つて居るが、『春の日』は正風の心眼を開いた頃の劃期的の撰集である。次に『猿蓑集』は芭蕉が奥羽行脚の後俳風の一變した頃

の集であつて、蕉風完成期の代表的撰集として永く龜鑑とせられたものであり、『炭俵集』は芭蕉が更に轉じて輕みを重んじ、人事の上にも詩趣を見出すやうになつた晩年の傾向を見るべき集である。而して此の二集は共に後の俳壇に大きな影響を及ぼした點に於て、俳諧史上重要な位置を占めて居る。圖版に示したのは元祿四年版『猿蓑集』卷之五の冒頭である。

芭蕉の俳論集及び句集

芭蕉の俳論を傳へた門人の著書は極めて多いが、信頼するに足るものは服部土芳の『三冊子(さんざうし)』三冊、其角去來の『花實集』二冊、（其の乾卷（俳論の部）は後に『芭蕉問答』と題する單行本として刊行）去來の『去來抄』三冊及び『湖東問答』一冊等である。芭蕉の發句の撰集の著名なものには、華雀編『芭蕉句選』二冊、素綾編『芭蕉袖日記』二冊、蝶夢編『芭蕉翁發句集』二冊、松仲編『芭蕉翁句集』一冊等があり、また芭蕉の發句連句紀行日記句評消息文章遺語等一切を廣く輯めたものには、佛兮・湖中共編の『俳諧一葉集』十册がある。其の他文集には蝶夢編『芭蕉翁文集』二冊、小林風德編『芭蕉文集』二冊などがある。

芭蕉の俳風

芭蕉の俳風は時代と共に變遷してゐる事は既に述べた通りであつて、晩年になるほど圓熟完成の域に達してゐる。從つて彼の發句を見るにも、時代順に配列することが肝要である。左に掲げる句例は、成立年代の明かなもののみであつて、時代順に序列したのである。

古池や蛙飛びこむ水の音　（春の日）

名月や池をめぐりて夜もすがら　（續虛栗）

故郷や臍(ほぞ)の緒に泣く年の暮　（千鳥掛）

冬の日や馬上に氷る影法師　（笈の小文）
雲雀より上にやすらふ峠哉　（同　右）
閑さや岩にしみ入る蟬の聲　（奥の細道）
暑き日を海に入れたり最上川　（同　右）
荒海や佐渡によこたふ天の川　（同　右）
病雁の夜寒に落ちて旅寢かな　（猿　蓑）
梅が香にのつと日の出る山路哉　（炭　俵）
此の道や行く人なしに秋の暮　（其　便）
旅に病で夢は枯野をかけ廻る　（笈　日　記）

芭蕉の文藝觀が旅行によつて完成した事は既に述べた。從つて紀行は芭蕉の作品として、極めて重要なものである事は言ふまでもない。紀行の著しいものは前記の『野ざらし紀行』『鹿島紀行』『笈の小文』『更科紀行』『奥の細道』などであつて、何れも單行本がある。中にも『奥の細道』は最も長い紀行であつて、芭蕉の人格と文藝とが紙上に躍動して居り、文章は簡約を極めて詩趣に富み、至る所でよんだ發句は特に傑出して居る。紀行に次いで注意すべきは小品文である。就中元祿三年に近江の幻住庵に閑居した時に記した『幻住庵記』（猿蓑所收）と、其の翌年洛外嵯峨の落柿舍に滯留中に記した『嵯峨日記』とは、彼の生活と趣味とを窺ふべき好資料である。『幻住庵記』は簡素な生活にあつて、幽玄閑寂な心

境にひたつた芭蕉の面目が最もよく現れた名文であつて、『方丈記』の影響が認められる。又『嵯峨日記』には清閑を愛好する趣味の外に、師弟親睦交情のゆかしさを見る事が出來る。右の外に時々執筆した小品文は、『俳諧一葉集』『芭蕉翁文集』に收められ、又許六の『風俗文選』支考の『本朝文鑑』『和漢文操』などの中にも採錄せられて居る。所謂俳文は芭蕉に端緒を開いてゐると云はれて居るが、(許六は『風俗文選』の自序中に「先師芭蕉翁始めて一格を立て云々」と記して居る)俳諧趣味の文章は、是より先に山岡元隣の『寶藏』（五卷寛文十一年刊）や西鶴の浮世草子などにも見られるのである。併し雅俗和漢を巧みに混淆して、閑寂味の豐かな文を綴つたのは芭蕉であつて、其の筆に成つた紀行・日記・小品文の類はとりどりに勝れてゐて、確かに俳文の鼻祖となつてゐる。蕉門中にも其角・去來・丈草・許六・支考・北枝等はそれぞれ俳文に長じてゐたが、俗中に雅を失はず、文品の高雅な點に於て師を凌ぐものはなかつた。かくて芭蕉は日本文章史上に於ても著しい功績を遺したのである。

三　蕉門の俳人

貞享元祿の頃天下の俳壇は蕉風によつて風靡せられたのであつて、芭蕉の門下となる者は殆ど全國にあつて、其の數千有餘に達する盛況を呈した。而して芭蕉の生存中は其の人格の力によつて、よく全國の門弟を統率してゐたのであるが、一朝死を傳へられた後は、僅かに師風の一局部を繼承した宗匠が、各地に割據して異風を樹て、流派を爭つて忽ち統一を失ひ、四分五裂の狀態に陷つた。芭蕉の

歿後に江戸を中心として廣く勢力を布いたのは、榎本其角と服部嵐雪とであつて、其角が開いた江戸座と、嵐雪が基を興した雪門は、芭蕉の俳友山口素堂の創めた葛飾風と共に互に黨を爭つた。此等の江戸派に對峙して專ら上方地方に優勢であつたのは、美濃の各務支考の率ゐる美濃風と、伊勢の岩田涼菟（りやうと）が開いた伊勢風とである。其の他金澤の立花北枝、彥根の森川許六、名古屋の澤露川なども派を唱へ傳燈を挑げて、互に門戶を張る事に餘念がなかつた。併し彼等の多くは、或は俗耳に入り易い平淡卑俗な俳風を鼓吹し、或は祖翁の遺鉢を承けたと自稱して、偏狹な俳論を立てて、黨派的才略を弄する事に孜々としてゐたのであつて、眞に伎倆の勝れてゐる者は稀であつた。後世何時の頃からか蕉門の十哲と稱して、其角・嵐雪・去來・丈草・野坡・杉風・越人・北枝・支考・許六を擧げて居るが、此等のすべてが必ずしも俊秀ではない。蕉門の俳人中で眞に勝れた天分があつたのは、江戸の其角・嵐雪、上方の去來・丈草の四人である。

榎本其角

其角（寛文四年 歿四十七）の父は近江堅田の農士竹下東順といひ、江戸に下つて本多下野守に仕へ、醫を業とする傍和歌連歌俳諧を嗜んでゐた。其角は東順の長子で、幼名を源藏又は源助といひ、後に母方の姓を冒して榎本氏を名乘り、號を晋子・晋其角・寶晋齋などと稱した。儒を服部寬齋に、醫を草刈三越に、禪並に詩を大巓和尚に受けたが、なほ書を佐々木玄龍に、畫を英一蝶に學んで、孰れの藝道にも通達してゐたと言はれて居る。芭蕉の門人となつたのは延寶二三年（十四五歲）の頃であつて、天和三年に『虛栗』を撰んだ頃から世に名を知られ、芭蕉にも重んじられて、遂に嵐雪と相竝んで蕉門の雙璧と稱

せられた。其の性質が豪放磊落であり、才氣煥發の人であつたので、種々の逸話が傳はつて居る。其の句には性格が反映して、自由奔放且つ洒脱な所があるが、殊に奇警な著想と技巧に至つては、他の追從を許さぬものがある。從つて其角の人格並に作品に對する世評は、毀譽褒貶さまざまであつた。併し芭蕉は其の天分を認めて屢推稱し、又嘗て門下に其角嵐雪を得た事を喜んで、「雨の手に桃と櫻や草の餅」といひ、其角が基を開いた江戸座は長く俳壇に雄飛したのであるから、蕉門中の鬼才であつたに相違ない。其角の俳風には幾度か變遷があつた。初め奇警な漢詩調をよんでゐたが、後に閑雅な詩境に移り、更に芭蕉の歿後には、都會情調の豐かな句を吟じて、元祿時代の世相をさながら寫し出してゐる。併し彼が晩年に至つて正風から離れて、謎に等しい晦澁難解な所謂洒落風を興したのは、やがて江戸座の墮落の端を開いたのである。

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春
御祕藏に墨をすらせて梅見哉
越後屋に絹さく音や更衣
切られたる夢は誠か蚤の跡
雨蛙芭蕉に乘りてそよぎけり
澄む月や髭を立てたるきりぐ\す
名月や疊のうへに松のかげ

岡釣のうしろ姿や秋の暮

此の木戸や鎖のさされて冬の月（其角發句集）

此等が其角の代表的發句である。其角が撰んだ俳書は二十餘部に達して居る。句集には自撰の『五元集』四冊、及びそれを類題に編成した坎窩久臧編の『其角發句集』二冊があり、また附合集には小栗旨原が編した『續五元集』三冊があり、文集には遺稿を嵐雪等が集めた『類柑子』三冊がある。なほ其角の門人で名を知られたのは、其角の正統を承けた深川湖十（老鼠又は鼠肝と號した）を筆頭に、松木淡々・早野巴人、女流の秋色女等であつて、江戸座は三都に榮え、其角堂の正系は傳はつて現在に及んで居る。

服部嵐雪

其角と竝び稱せられた服部嵐雪（寶永四年歿五十四）は江戸の人であるが、其の父祖は淡路國三原郡小榎並村の出身である。通稱を彦兵衛といひ、幼少の頃志を立てて江戸に出た。初め新庄隱岐守に仕へ、次いで井上相模守に仕へたが、後に致仕して芭蕉の門に入り專ら俳諧を事とした。號は嵐雪の外に雪中庵・玄峯堂などと稱した。其の俳風は穩健を旨とし、時に纖細平弱であつて、一時の流行を求めなかつたのは、奇拔放逸な其角と正に對照をなして居る。

濡縁や薺こぼるる土ながら

梅一輪一輪ほどの暖かさ

出がはりや幼心に物あはれ

竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき

常燈や壁あたゝかにきり〴〵す
名月や烟這ひゆく水のうへ
沙魚釣るや水村山廓酒旗風
黄菊白菊其外の名はなくもがな
蒲團著て寢たる姿や東山　（玄峰集）

嵐雪を祖とする雪中庵の一派は、江戸座に次いで江戸の俳壇に覇を唱へ、其の系統は長く後世に傳はつて今日に及んでゐる。門人中で最も著しいのは、二世雪中庵の櫻井吏登である。嵐雪の句集には旨原が輯錄した『玄峰集』二冊があり、又文集には蓼太編『雪中庵嵐雪文集』一冊がある。

向井去來

其角・嵐雪が江戸にあつて、自己の俳風を弘めることに專念してゐたのに對して、上方に於て名利の境を超脱して、ひたすら師の教を守り、高雅な句を詠んだのは去來と丈草である。去來（寶永元年歿五十四）は向井兼時で、通稱を平次郎と云ひ、肥前長崎の儒醫元升の次男である。幼少の頃父に從つて京都に出で、父や兄元端が朝廷の御用を勤めてゐた關係から、彼も公家の御用向を勤めてゐたが、二十四五歳の頃武を棄てて俳諧の道に入り、貞享の頃芭蕉の門人となり、關西に於ける蕉門の高足として聲望を一身に集めた。去來の兄弟は何れも蕉門の俳人であり、妹の千子（ちね）は若くして世を去つたが、女流俳人として傑出してゐた。去來は貞享の頃嵯峨小倉山の麓に落柿舍を營んで隱棲し、更に晩年には賀茂川の東聖護院の邊に住んだ。去來は蕉風の眞髓を忠實に守つた人であつて、其の句は幽寂高雅で、其の性

格を偲ばしめるものがある。其の著『去來抄』（安永四年曉臺上梓）は、芭蕉から聞き取つた俳論批評などを集めたもので、芭蕉の俳諧に對する精神を窺ふべき貴重な資料である。句集には蝶夢が編んだ『去來發句集』一冊がある。

元日や家に讓りの太刀佩かん
上り帆の淡路はなれぬ潮干哉
一昨日はあの山越えつ花盛り
涼しくも野山にみつる念佛かな
岩はなや爰にもひとり月の客
秋風や白木の弓に弦張らん
應々といへどたたくや雪の門　（去來發句集）

內藤丈草

丈草（元祿十七年歿四十三歲）は尾張國犬山の城主成瀨正虎の重臣內藤源左衞門本守の長子で、幼名を林之助といひ、元服して林右衞門本常といつた。十一歲で母に死別し、十四歲の時に尾州德川家の重臣寺尾直龍（犬山侯正虎の次子）が、故あつて犬山に蟄居の身となつたが、丈草は其の從兄弟の間柄であつたので、直龍に仕へる事になつた。二十歲の頃其の地の黃檗先聖寺の住持玉堂和尙に就いて參禪し、又名古屋の穗積武平を師として詩文を學んだので、『驢鳴草』と名づける詩集がある。俳諧の友としては始め季吟門下で後に蕉門に移つた澤露川、及び犬山侯に仕へてゐた蕉門の中村史邦（ふみくに）と交つてゐた。丈草は玉堂和尙の

威化を受けて、夙に俗界を脱離する志を抱いてゐたが、遂に元祿元年二十七歳の時に、家督を異母弟に讓つて遁世した。出家の後は京に出て、史邦(當時史邦は仙洞御所に出仕してゐた)や去來と往來してゐたが、それらの關係から翌元祿二年に、芭蕉に師事するやうになつた。三十三歳の時師翁が歿した後は、粟津の近くの龍ヶ岡に佛幻庵を結び、三年幽居して師の冥福を祈り、其の後は多少行脚にも出たが、主として草庵に籠つて、獨り清閑を樂しみ、興が起れば俳句を詠んでゐた。丈草の人物並に閱歷は以上の如くであるから、其の句には自ら高潔な隱者の風があり、又高尙な詩人の風がある。靜寂を愛する心に於ては芭蕉と相似てゐるので、其の俳風も亦極めて師に近いのであるが、異なる所は丈草の句は主として自己の生活をよんでゐる事である。丈草は又一面に溫情があり同情の篤い人であつて、其の句集中には後の一茶の句に見るやうな、生物に對する深い同情の現れを見出すのである。句集には蝶夢が輯錄した『丈草發句集』一册がある。(以上市橋鐸氏著『俳人丈艸』に據つた所が多い。)

うぐひすや茶の木畑の朝月夜
春雨やぬけ出たままの夜著の穴
時鳥啼くや湖水のささ濁り
稻妻のわれて落つるや山の上
つれのある所へ掃くぞきりぎりす
松の葉の地に立ち竝ぶ秋の雨

幾人か時雨かけぬく瀬田の橋

狐なく岡の晝間や雪ぐもり　（丈草發句集）

其嵐去丈の四俳仙に次いで注意すべき蕉門の高足は、許六・支考・凡兆・惟然などである。森川許六 正德五年歿六十歳 は名を百仲、號を五老井・風狂堂などと云ひ、近江の彦根藩主井伊侯の家臣で、三百石を知行してゐた。蕉門に入つたのは元祿五年 三十七歲 であると言はれて居るから、芭蕉晚年の門人である。

清水の上から出たり春の月

菜の花の中に城あり郡山

卯の花に葦毛の馬の夜明哉

十團子も小粒になりぬ秋の風　（五老井發句集）

此等が許六の佳句である。許六は俳諧の伎倆に於ては、さほど秀でてゐなかつたが、俳論と俳文に長じ、師の歿後には頻りに蕉風の精髓を論じ、又多くの俳書を述作した。俳論の著書で名高いのは『青根が峰俳諧問答抄』 五冊、略稱俳諧問答又は青根が峰 であり、俳文の撰集で世に廣く行はれたのは『風俗文選』 十卷五冊 である。『風俗文選』は芭蕉の遺志を承けて編纂したもので、蕉門二十八人の俳文百十四篇を集め、之を『古文眞寶』や『文選』などに倣つて、辭・賦・譜・說・解・記・紀行等二十一類に分類し、卷首には漢文の作者傳を掲げてゐる。集中で最も光彩を放つて居るのは、芭蕉と許六の文章である。『風俗文選』は俳文集の嚆矢であつて、永く模範と仰がれ、後世に多大の影響を與へて居る。

各務支考

許六と共に俳論家として名高いのは、美濃風を興した各務支考（享保十六年歿六十七）である。美濃國山縣郡北野の人で、幼少の頃郷里の大智寺の雛僧となつたが、十九歳の時還俗して後は、殆ど雲水生活を續けてゐた。芭蕉に始めて見えたのは元祿四年である。

船頭の耳の遠さよ桃の花
水澄て籾の芽青し苗代田
牛叱る聲に鳴立つ夕かな
食堂に雀なくなり夕時雨

此等が代表的な句である。支考の發句は概ね平板であつて、誦するに足るものが乏しいが、俳論の著は極めて多い。就中著名なのは『俳諧十論』二冊である。支考も亦俳文集の編纂に志し、『風俗文選』に對抗して『本朝文鑑』五冊を編み、更に其の後集として『和漢文操』五冊を撰んでゐる。

野澤凡兆

俳諧の伎倆に於て許六・支考の上にあるのは野澤凡兆（正徳四年歿）である。金澤の人で京都で醫を業としてゐた。蕉門の逸才として師に重んぜられたが、元祿六七年頃罪に坐して獄に投せられて後は師友と絶縁になつた。彼は客觀的態度で印象の鮮明な句を作つたが、晩年のものは平弱であつて價値が乏しい。其の妻羽紅尼（名はとめ）も女流俳人として聞えてゐる。

鶯や下駄の齒につく小田の土
市中は物のにほひや夏の月

上行くと下來る雲や秋の空
禪寺の松の落葉や神無月
下京や雪積む上の夜の雨

此等によつて凡兆の俳風を推す事が出來る。

廣瀨惟然

凡兆に次いで注意すべきは惟然である。惟然（寬永八年歿六十餘）は本名を廣瀨源之丞と云ひ、美濃の關の人である。元祿元年芭蕉の門に入り、其の歿後には諸國を行脚し頗る奇行に富んでゐた。其の子二人も亦やがて佛門に入つた。惟然は初め蕉風に忠實であつたが、師の歿後には專ら飄逸洒落な句を詠み、又口語調を試みたのであつて、後の大江丸。一茶などの俳風の先驅となつてゐる。

風呂敷へ落ちよ包まん舞雲雀
梅咲くや赤土壁の小雪隱
しぐれけり走り入りけり晴れにけり
水鳥やむかふの岸へつういつい（惟然坊句集）

以上述べた外になほ平淡な寫生句をよんだ僧浪化や、多くの門弟を有した金澤の立花北枝、並に江戸大阪に勢力のあつた志田野坡等も注意すべき俳人であるが、今はすべて省略する。

俳壇の衰微

芭蕉門下の著名な俳人に就いては大略述べ終つた。さて蕉風は寶永から享保の頃までに、驍將が相前後して世を去つたので忽ち凋落し、天下の俳風は全く暗黑の狀態となつた。此の時江戸の俳壇に飛

松尾芭蕉
- 榎本其角（江戸座（酒落風））
  - 早野巴人
  - 松木淡々
  - 深川湖十
- 服部嵐雪（雪門）
  - 櫻井吏登
- 向井去來
- 内藤丈草
- 各務支考（美濃風）
- 野澤凡兆
- 立花北枝
  - 和田希因
- 森川許六
- 廣瀬惟然
- 岩田涼菟（伊勢風）
  - 中川乙由

躍したのは、其角晩年の酒落風を追ふ水間沾徳（享保十一年歿六十五）等の浮世風、立羽不角（寶暦三年歿九十二）一派の化鳥風などである。此等の派に屬する者は徒らに奇矯に流れ、或は酒落を弄して俗耳を驚かしたのであつて、蕉風は全く江戸の地を掃つてしまつた。當時此等に對して、俳風を正風に復さうとする五色墨の徒、即ち佐久間長水・長谷川素丸。大場咫尺・松木蓮之・中川宗端の五人が現れたけれども、大勢は如何ともする事が出來ずして、江戸の俳風は年々俗了するばかりであつた。一方上方に於ては涼菟・乙由等の伊勢風、支考の美濃風、其角の門から出た松木淡々一派などが各覇を唱へてゐたが、此等は徒らに俗耳に入り易い平淡卑俗な調を詠んだのであつて、俳壇が墮落した事は江戸と同樣である。かくて享保以後の天下の俳壇は、日に月に墮落したのであつて、其角門下の深川湖十（元文三年歿六十三）等が、前句附の點者として名を揚げて以來、從來主として上方に盛であつた雜俳が江戸にも流行し、遂に俳諧を壓倒する勢を示した。要するに元祿に

大成せられて天下を風靡した蕉風は、祖翁の歿後は統率者を失つた爲に、各自流派を唱へ且つ世俗に媚びて、益墮落したのであつて、天明期に於ける俳諧復興の曙光を見るまでは、かなり長い暗黒時代が續いたのである。

俳書連句發句俳文などを集めた活版本は、近年次々に刊行せられてゐる。其の主要なものは博文館發行『俳諧文庫』二十四卷、佐々政一氏校訂解説『俳諧叢書』七卷、勝峰晋風氏校訂解説『俳諧大系』十七卷、天青堂發行『古俳書文庫』十九卷、伊藤松宇氏校訂『俳書集覽』六卷、安井知之氏校訂野田別天樓氏解題『蕉門珍書百種』、巖谷小波伊藤松宇橋本小河三氏校訂『俳文學大系』十二卷などである。此の外に『國民文庫』『有朋堂文庫』『日本名著全集』などにも、俳句俳文集を收錄してゐる。

第五章　前期の狂歌

狂歌の源流

狂歌は狂體の和歌の義であつて、著想素材用語格調などが卑俗で、諧謔を旨とする和歌の一體である。狂歌の名目は古く『喜撰式』や『和歌肝要』（傳藤原俊成撰）などに見えて居る。滑稽な著想若しくは言語上の諧謔を主とする短歌は、上代以來あるのであつて、『萬葉集』卷十六の戲咲歌や、『古今集』以下の俳諧歌や、藤原輔相の諧謔の歌（一五三頁參照）などは、狂歌の濫觴と見られるのである。下つて鎌倉時代になると、俳諧體の連歌は狂歌とも呼ばれ、（井蛙抄卷六）又此の頃落首を狂歌と言つた事は、『平治物語』の「忠致尾州に逃げ下る事」の條に、「其の朝宿に狂歌を詠んで捨ててけり」と記して、

落ち行けば命ばかりは壹岐守みのをはりこそ聞かまほしけれ

の落首を掲げて居るのを見て知られる。思ふに狂歌を意識的に作るやうになつたのは、鎌倉時代からであつて、落首や歌會の餘興に作つた諧謔歌の如きは、近世狂歌の源と見るべきであらう。鎌倉時代には定家・雅經等が、當座の慰に狂歌を詠んで合せた事があり、（本朝通鑑卷四十五）又冷泉爲家の子爲守は、出家

曉月房

の後曉月房と號し、好んで狂歌を詠んで、後世狂歌師の祖と稱せられた。曉月房は嘗て戯れに、

曉月に毛のむく〳〵とはえよかしさるものの子と人に呼ばれむ

と詠んだと傳へられて居る。（北窓瑣談第二篇四）其の狂歌集としては後人の編んだ『曉月房酒百首』（一冊明和八年刊行）が傳はつて居る。所收の狂歌のすべてが果して曉月房の作か否かは疑問であるが、左に其の中の二首を掲げて置く。

色香をも知る人かたきむめ酒はすきものならで誰かのむべき

さかづきはめぐりて行くをきりぎりす誰にさせとか鳴きあかすらむ

室町時代になると、歌人連歌師の間に狂歌を詠む事が流行したのであつて、當時の狂歌合には『七十一番職人歌合』（一名職人盡歌合）『十二類歌合』『調度歌合』『永正狂歌合』などが傳はつて居る。また一休禪師（文明十三年寂）は其の狂歌と共に多くの逸話を傳へられて居る。以上は近世の狂歌が起るまでの概要である。要するに是までの狂歌は、主として言語上の諧謔洒落に止まり、只僅かに落首に諷刺の妙を示すのみであつて、未だ眞の狂歌とは言ひ難いのである。

室町時代の末天文年間に、山崎宗鑑や荒木田守武が俳諧體連歌の傍狂歌を作つたのは、近世狂歌の直接の源となつたのである。守武には『世の中百首』一冊寛政十年刊行がある。其の後安土桃山時代に、曾呂利新左衞門や京都の建仁寺の雄長老などが、好んで狂歌を詠んで以來、忽ち流行するやうになつた。曾呂利新左衞門慶長八年歿は本姓を中川氏一説に杉本氏と云ひ、得齋と號した。和泉の堺に住み鞘師を業としたが、香道茶事に通じ、生來滑稽諧謔に長じて狂歌は口を衝いて出たと云ふ。秀吉に仕へてお伽衆となり、多くの奇行や逸話を遺した事は今更記すまでも無からう。雄長老は永雄長老の略である。雄長老慶長七年寂は建仁寺の塔中如是院に住し、名を永雄字を英甫と云つた。其の狂歌集に『雄長老詠百首狂歌』刊行年月未詳がある。雄長老が撰した『新撰狂歌集』二巻一冊元和頃成は狂歌撰集の嚆矢であつて、古今の作と自作とを收めて居る。此の集は春・夏・秋・冬・戀・羇旅・述懷・釋教・哀傷・神祇・雜に分類してあつて、後の狂歌集の準據となつた。其の雜の部に俳諧連歌や、大阪落城當時の落首などを收めて居るのは、其の頃の狂歌の範圍を示すものである。

春の來るしるしを見せて神がきや三輪の杉はり立ちかすむかな
五月雨にかびてなりともところ〴〵禿がひたひに毛が生えよかし
人は皆萩を秋といふいなわれは米の出たるを秋とはいはむ
草枕飯をばもたで椎の葉をすくひ物にぞしたる麥の粉
世を離れかかる淋しきめにもあふを山入へたとや人のいふらん　（雄長老詠百首）

此等によつて雄長老の狂歌の風格を窺ふ事が出來る。當時は堂上歌人の間にも狂歌を嗜んだ人が尠くない。細川幽齋は雄長老の母宮川尼の弟で、狂歌にも長じ、烏丸光廣・木下長嘯子等も好んで狂歌を詠んだ。當時雲上では後水尾天皇が和歌の傍狂歌を詠じ給うたのであつて、御集に『後水尾天皇御狂歌』がある。

松永貞德

宗鑑・守武の後俳諧と狂歌で名を知られたのは、江戸時代の狂歌の祖と仰がれた松永貞德である。其の狂歌集に菱川師宣の畫を入れた『貞德狂歌集』（三冊天和二年刊行）及び寛永十三年所詠の『貞德狂歌百首』（一冊安永五年刊行）がある。

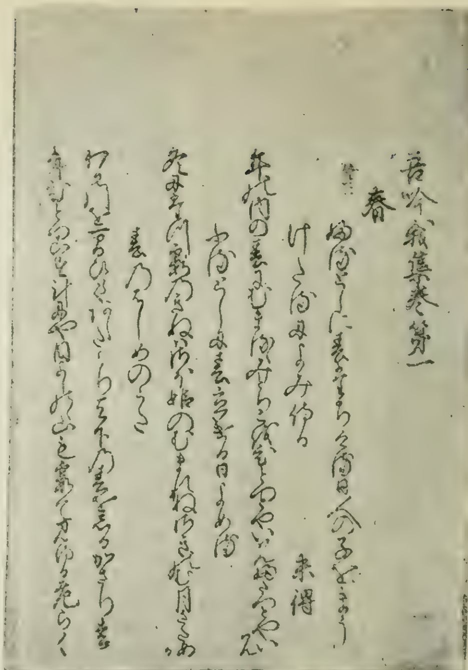
とゝ〳〵とけふたたかるる七種やおひし野原のままになるらん
涼しさを卷きこめて來る文月はひと葉の風のちらしがきなり
月ゆゑにいとど此の世にゐたきかな土の中では見えじと思へば
たぎらする茶の湯のろぢの下草にりん〳〵と鳴く松蟲の聲
生きながら鹽したやうに水鳥の翅もはしも霜ぞ降りける　（貞德百首狂歌）

などが傑出した作である。貞德の門下には俳諧の片手間に狂歌を作る者が多く、それらの唱導によつて狂歌は東西に流行するやうになつた。江戸の狂歌の魁となつたのは、石田未得と半井卜養である。

江戸狂歌の魁

石田未得（寛文九年歿八十三）は通稱を又左衞門、號を乾堂と云ひ、江戸の人である。京に上つて俳諧を貞德に學び傍狂歌に長じてゐた。家集に『吾吟我集（ごぎんわがしふ）』十卷がある。題名は『古今和歌集』を捩つたのであつて、序

上方狂歌の興隆



吾吟我集

文には狂文を掲げ、形式内容共にかの集に擬して居る。(圖版參照)半井卜養(延寶六年歿七十二)は牡丹花肖柏の孫で、名を慶友、號を牧養軒と云つた。寛文六年に江戸に出て、幕府の奥御番醫師となり、法眼に敍せられた。家集に『卜養狂歌集』一册がある。未得・卜養と略ぼ同時代に上方の狂歌の興隆に關係のあつたのは、生白堂行風と豐藏坊信海とである。行風(延寶の末年迄生存)は貞德門下の松江重頼に就いて俳諧を學び、また狂歌を詠んだ。其の狂歌はさまで勝れたものでないが、『古今夷曲集』竝に『後撰夷曲集』を撰集した功績は顯著である。『古今夷曲集』(十卷四册)は寛文六年に成つたもので、古今の作者二百四十人許りの狂歌千五百餘首を收め、『後撰夷曲集』(十卷六册)は寛文十二年の撰で、古今の作者三百九十人許りの作一千六百七十餘首を收めたものである。『後撰夷曲集』の跋文によれば、此の二集は後陽成院の八の宮智恩院門跡良純法親王の御手を經て、後西天皇の叡覽に供したものである。次に信海(元祿元年寂五十四)は男山八幡宮豐藏坊の社僧であつて、茶事を小堀遠州に學び、又貞德

に就いて狂歌を學んだ。門人が撰した家集に『狂歌鳩杖集』一册がある。信海と時代を同じうして堂上に風水軒白玉翁がある。白玉翁は從一位大納言正親町公通（享保八年薨八十一）の號である。經史に通じ、俳諧繪畫に巧みであつたが、最も得意とする所は狂歌であつた。家集に『雅筵酔狂集』七册がある。

鯛屋貞柳

元祿享保の頃狂歌は京阪を中心として關西を風靡したが、其の興隆に與つて力のあつたのは、信海門下の鯛屋貞柳（享保十九年歿八十一歳）である。貞柳の父長閑堂貞因（通稱榎並善右衞門）は大阪に住み、家號を鯛屋と云つて、禁裏御用の菓子司であつた。安原貞室に就いて俳諧を學び、又狂歌を能くした。其の子貞柳は通稱永田善八と云ひ、由縁齋（油煙齋とも）と號し、俳諧を父に學び、又信海の衣鉢を傳へて浪花ぶり狂歌の宗匠となり、晩年には殆ど天下の狂歌壇を獨占するに至つた。貞柳の弟鳥路觀貞峨（通稱榎並喜右衞門）も亦狂歌に長じてゐたが、殊に淨瑠璃作者として有名である。貞峨は即ち紀海音である。貞柳は嘗て奈良の製墨舗古梅園松井和泉掾が、大形の墨を宮中に奉る由を聞いて、

　月ならで雲の上まですみのぼるこれはいかなるゆゑんなるらん

と詠んだが、偶この事が叡聞に達して、油煙齋の號を賜はつたと傳へられて居る。貞柳の家集には、『家土産（いへづと）』『續家土産』『狂歌机の塵』（各一册）等があり、また生涯の狂歌を類別したものに、無心亭有耳撰の『貞柳翁狂歌全集類題』一册がある。貞柳の狂歌は輕快自在であるが、稍卑俗に流れて居る。

　散ればこそいとど櫻はめでたけれけれども〳〵さうじやけれども

　行春を只千金にかへじとはあまりにやすうねをばつくる詩

心なき身にもあはれや立鴫をやにはに射たる秋のゆふぐれ

富士の山夢に見るこそ果報なれ路銀もいらずくたびれもせず

祖父(ぢぢ)は山へしばしが程に身は老いてむかし〱の咄こひしき

世わたりに春の野に出て若菜摘むわが衣手の雪も恥かし

是則に見せ申したや清水の坂の上に今朝ふれるしら雪　（貞柳翁狂歌全集類題）

上方狂歌の衰退

貞柳の時代には江戸に信海門下の黒田月洞軒（通稱玄蕃名は直常　享保九年歿六十四）があり、大阪に貞因の從弟花實庵貞富（通稱榎並淸左衛門　正德三年歿七十二）があつたが、殊に盛なのは貞柳の流派であつて、其の門流は京阪は素より、江戸名古屋及び關西各地にあつて、鯛屋風の狂歌は一時極めて隆盛であつた。併し貞柳の歿後には名人が無く、浪花ぶり狂歌は漸次衰へ、其の中心は他の文藝と共に江戸に遷つた。要するに江戸時代前期の狂歌は、主として歌人連歌師俳諧師等が片手間に弄んだのであり、從つて其の作風は古典に根據を置いたのであるが、享保の頃貞柳及び其の門流に至つて、始めて之を專業とする狂歌師を生じ、其の作は和歌俳諧から漸く獨立して、一個の文學となつたのである。而して貞柳によつて代表せられる浪花ぶりの狂歌から、更に進んで機智頓才によつて當意卽妙の諧謔を詠み、時に社會の矛盾や半面を諷刺するやうになつたのは、後期の天明期である。

本章中に擧げた『曉月坊酒百首』以下『貞柳翁狂歌全集類題』に至るまでの狂歌集は大抵『日本名著全集』第九卷『狂文狂歌集』に收められて居る。

第六章　假名草子

一　假名草子と其の種類

假名草子

江戸時代初期の凡そ六十年間は、庶民階級の擡頭期であるが、一般民衆の知識は未だ概ね低級であつたから、啓蒙教訓又は娯樂の爲に書かれた種々の通俗文學が流行した。これを總稱して假名草子といふ。此の名稱は明治以後の文學史家が新たに設けたものでなく、既に寛文元祿頃の書籍目錄や當時の諸書に散見するのであつて、もと佛書漢籍其の他學問的な著述に對して、主として假名で綴られた通俗卑近な文藝的雜著を指すのである。

本質

假名草子は室町時代に續出した御伽草子（舞の本を含めて云ふ。以下之に同じ）の系統を引いて居るのであつて、創作の動機や表現の樣式などに類似する所があり、且つ前代の御伽草子で、此の時代に假名草子と同一の形で刊行せられたものが多いのであるから、此の二者の間に嚴格な區別を設ける事の困難な場合が尠くない。併し御伽草子は啓蒙教訓的要素を含んでは居るが、主として民衆の娯樂の爲に創作せられた、單純幼稚な小說であるのに對して、假名草子は娯樂的な少數の作品を除く外は、すべて民衆の知識道德の向上發達に資せんとする、時代的要求に應じて述作せられた文藝的雜書であるから、兩者の間には本質的に明白な區別がある。卽ち假名草子の中には、御伽草子の系統を引いた純粹の小說や、小說の

樣式を具へた假託物語があるが、其の內容は儒佛の本旨大要、若しくは實生活の心得を說く事を目的として居る。又小說以外の形式に據るものには、自己の見聞閱歷、又は和漢の故事や寓話などを記した隨筆や小話集があり、又小說的に記した名所案內記や、古典文藝に擬した戲作などがあつて、素材內容形式共に御伽草子に比して極めて廣汎である。又假名草子の作者の多くは、當時世に用ひられなかつた學者浪人僧侶であるから、其の著作には自ら時代に對する抑へ難い不平を洩して居り、然らざるものにも、世相や民衆の思想を反映するものが多いのであつて、其の內容は御伽草子に比して著しく複雜である。

御伽草子の文章は平易通俗を旨とした擬古文であつて、生氣を缺いて居るが、假名草子のは雅俗を折衷した新文體であり、文中には屢民衆的な漢詩和歌狂歌發句俚諺などを引用して、極めて淸新な趣がある。更に書物の體裁を見ると、江戸時代の初期には、幼稚ながらも民間に印刷事業が始まつたから、假名草子も亦活字本又は整版本として刊行せられ、勝れた作品は數回改版又は重版せられて、廣く世に持て囃された。又其の形は多くは美濃紙大であり、而も十冊を超えるものがあり、表紙の模樣色彩意匠などは概ね高雅であるから、形態も亦御伽草子に比して一大進步を遂げて居る。御伽草子は寫本で行はれた頃、奈良繪を挿入したものが多かつたが、假名草子にも木版の挿繪を入れたものが多く、而も寬永頃から丹綠黃などで筆彩色を施した所謂ゑどり本が行はれたのは、やがて後の彩色摺版畫の濫觴となつたのである。かくて假名草子は其の文學的價値は別として、素材內容は固より形態な

ども、悉く浮世草子以後の小說類に多大の影響を與へたのであつて、近世小說史上に於て極めて重要な位置を占めて居る。

流行の時代

假名草子は慶長の頃から現れて居るが、最初の流行期は寛永年間である。其の後正保慶安の頃には一時衰へたが、明曆萬治の頃から再び隆盛に向ひ、寛文延寶の頃には頂點に達した。而して天和二年に、井原西鶴の『好色一代男』が現れて以後、形勢は一變して寫實小說の流行を見るに至つたので、此の作以後其の系統に屬するものを、別に浮世草子と稱するのである。併し假名草子は天和二年以後にもなほ引續き現れたのであつて、これが小說界から姿を沒したのは寶曆頃である。尤も假名草子の勝れた作品が現れたのは元祿頃までであつて、それ以後には浮世草子に壓倒せられて、殆ど見るべきものが無かつた。

種類

假名草子の種類は極めて多いが、素材や內容などは類型的であるから、幾種かに分類する事が出來る。從來一般に行はれて居る所に從へば、(一)戀愛物(二)軍記物(三)教訓物(四)飜譯物(五)怪談物(六)名所記物(七)笑話物(八)擬古的戲文物(九)梗概物の九種に分類せられる。是より各種の作品の例を擧げて、其の特質を說明しようと思ふ。

(一)戀愛物

(一)戀愛物　假名草子の中で、最も文學的性質を帶びたものであるが、前代の御伽草子の延長とも云ふべきものであるから、假名草子の特徵は極めて稀薄である。是に屬する作品の例としては『角田川物語』(三冊明曆二年刊行)『是樂(ぜらく)物語』(三冊明曆萬治頃刊)『浮雲物語』(三冊寛文元年刊行)『小倉物語』(三冊寛文元年刊行)『ねごと草』(二冊寛文二年刊行)など

を擧げ得るのであるが、其の代表作は『恨の介』二册刊行年月未詳と『薄雪物語』二册寛永九年刊行とである。（以上何れも作者未詳）『恨の介』の梗概は次の通りである。慶長九年の夏の末に、葛の恨の介といふ男が、京都の清水寺の萬燈會に詣でた時、年十六許りの美人を見そめて思ひ焦れ、清水の觀音に七七日の間祈願を籠めると示現があつて、「女の乳母（服部莊司の後室）で今は尼になつて居るのを尋ねて賴め」と教へられた。恨の介は喜んで尼を訪れ、心中を打明けると、尼は、かの姫君は豐臣秀次の臣木村常陸介の遺子雪の前で、今は近衞殿に養はれて居る事を告げ、且つ恨の介を憐んで、姫と親交のある菊亭殿の息女あやめの前を介して文通させた。かくて恨の介は姫と一夜の契を交したが、人目に堰かれて儘ならぬ戀を歎く餘りに病み臥し、遂に雪の前に遺書を送つて他界した。文を受け取つた姫は、心も亂れて歎き悲しんで自害すると、あやめの前を始め二人の侍女や尼も、亦姫の後を追つて自殺したと云ふのである。著作年代及び最初の板行年代は未詳であるが、柳亭種彦の『好色本目錄』には、文祿四年に豐臣秀次等が死んだ時二歳であつた雪の前が十六歳で自害した事や、尼の年齡の關係などから見て、慶長十四年以後成つたものであるとして居る。最初の版本を別にして、寛永から寛文七年までの間に四度の版本が現れたのは、此の作品がかなり讀まれた事を示すのである。此の物語の筋は極めてありふれたものであるが、豐臣氏衰亡の悲劇に關聯した素材を取扱ひ、且つ殉死を始めとして、お國歌舞伎・三味線・小歌などの事が見えて居るのは、時代の反映である。次に『薄雪物語』作者未詳は『恨の介』を粉本として、園部左衞門と薄雪姫との戀愛物語を書いた小說で、筋は大同小異である。只異なる所は筋

の發展を男女間の往復文で知らせたのと、女が先立つて歿し、殘つた男が佛門に入つて女の菩提を弔ふのと此の二點である。此の草子も亦相當行はれたらしく、是に傚つた『新薄雪物語』や、艶書だけを集めた『錦木』を始めとして類書が續出した。

(二)戰記物

(二)戰記物　戰記物は古くは『平家物語』以降の戰記物語、近くは舞の本の流を承けて現れたのである。當時は戰亂の世を去る事日猶淺く、一般民衆が戰爭談や武功談に耳を傾けた時代であるから、戰記物が歡迎せられたのである。其の著名なものは、豐臣秀次等の末路を物語つた『聚樂物語』（三冊作者未詳寛永年間刊行）、大阪夏冬兩陣の事を記した『大坂物語』（一冊作者未詳寛永年中刊行）、天草島原の亂の顚末を記した『吉利支丹退治物語』（三冊作者未詳寛文五年刊行）などである。此等は作者の見聞を記したものであるが、多少想像を交へて誇張して居る。當時は又戰記物語の體裁に傚つた茨木春朔の作『水鳥記』（二冊寛文二年刊行）の如き滑稽文學が現れた。此の作は江戸大塚の地黄坊樽次と、武州大師河原の大蛇丸底深の二人の酒豪が、多勢の配下を從へて酒戰を開いた顚末を、軍書に擬して書いた戯書であつて、題名は酒の偏と旁を取つて名附けたのである。

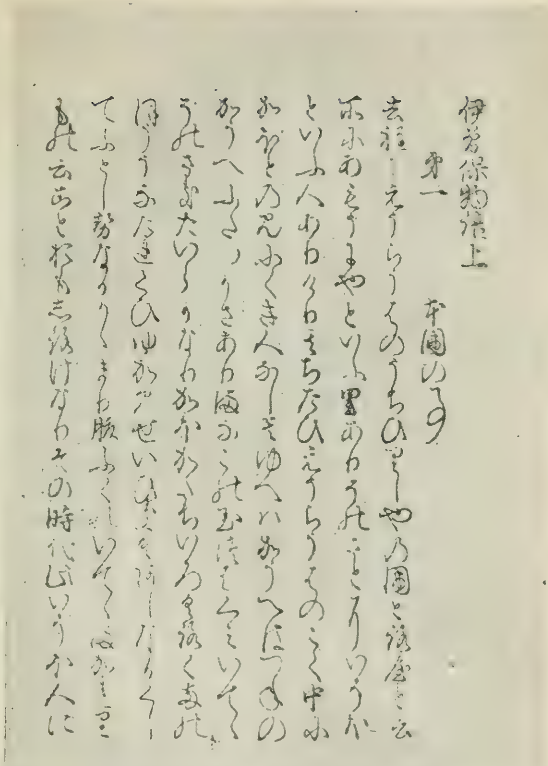
(三)教訓物

(三)教訓物　日常生活の心得や儒佛の本旨大要を平易に說いた通俗教訓書は、假名草子の重要なものであつて、作品の數も多く從つて組織内容も亦多種多樣である。試みに體裁によつて分類すれば次の四種となる。第一は當時廣く讀まれた『徒然草』を摸倣した隨筆體であつて、著名な作品は如儡子（じよらいし）の『可笑記（かせうき）』と、山岡元隣の『他我身之上（たがみのうへ）』（共に下に述べる）である。第二は『大鏡』に傚つて、假設人物の問答に託

して儒佛の要旨を說き示したもので、朝山意林庵の『清水物語』二冊寛永十五年刊、作者未詳の『祇園物語』二冊寛永年間刊行、作者未詳の『大佛物語』一冊寛永十九年刊、日心の『糺物語』二冊明曆三年刊行などが代表的作品である。第三は實話寓話若しくは和漢の故事を引いて教訓を說いたもので、山岡元隣の『小巵』、淺井了意の『堪忍記』、鈴木正三の『因果物語』以上三部は下に述べる、曾我休自の『爲愚痴物語』八冊寛文二年刊行等は其の中の著しい作品である。第四は小說又は小說に近い形式を借りて教訓の意を寓したもので、教訓物の中では比較的文學的價値のある作品である。其の例としては、三浦爲春の『あだ物語』二冊寛永十七年刊、鈴木正三の『二人比丘尼』下に詳述する、釋惠中の『海上物語』二冊寛文六年刊行等を擧げる事が出來る。教訓草子の中には、武士道や日常生活の卑近な教訓を說いたものも少くないが、最も注意すべきは、儒佛二教若しくは儒佛道或は神儒佛三教に亙つて、通俗的教訓を說いた作品である。儒佛は素より衝突を免れないものであるが、當時民衆の思想上に於ては、却つてよく調和融合せられてゐたから、假名草子に說く所も多くは二教若しくは三教に觸れて居る。尤も作者の立場の異なるに從つて、其の說く所が何れか一方に偏して居るのは當然である。其の二教を兼ねた作品の適例としては、『草萊物語』二冊作者未詳慶安元年刊行『爲愚痴物語』などを擧げ得るのであるが、三教に亙つて居る作品には、『清水物語』『大佛物語』『海上物語』などがあり、更に三教一致を唱へた作品には、如儡子の『百八町記』後に解說する の如きものがある。斯くて二教又は三教に亙つて通俗教訓を說いたものが流行したのは、やがて後の心學の根源となつて居るのである。

(四)飜譯飜案物　教訓物の『小巵』や『爲愚痴物語』などの寓話には、『伊曾保物語』の影響があると言

はれて居る。イソップの譬喩話の和譯は、既に文祿二年に天草の耶蘇教學林から出版せられた、羅馬字綴の口語譯（新村出博士著『文祿舊譯伊曾保物語』がある）があつたが、假名草子の『伊曾保物語』（三巻譯者未詳）は、それとは關係なしに慶長の末か元和の初頃に刊行せられた。其の初にはイソップの逸話二十九條を載せ、次に動物譬喩譚六十五條の抄譯を收めたもので、其の文章は平明な雅文體である。元和版二種、其の後のもの二種、次いで寛永版二種（以上活字本）、更に萬治二年の整版繪入本一種、都合七種が現れたのを見ても、此の物語が廣く行はれた事が明かである。是より先室町時代の末頃から、安土桃山時代にかけての頃、泰西文學が傳來してゐた事は、坪内逍遙博士が舞の本の百合若傳說と、ホーマーのオデッシイの類似


伊曾保物語上
第一

元和活字版伊曾保物語

を指示せられ、「逍遙選集」第十一巻所收「百合若傳說の本源」參照 又最近島津久基氏が、御伽草子の「天狗の內裏」の素材が、イニードの巫女の洞と關係のある事を指摘せられたのを見ても察せられるが、島津久基氏編著「近古小說新纂」初輯參照 西洋文學の飜譯の嚆矢として知られて居るのは『伊曾保物語』である。

江戶時代初期に漢文學が隆盛に赴くに從つて、新たに舶載せられた支那小說の數は夥しいのであるが、我が近世小說に著しい影響を與へたのは、『棠陰比事』『剪燈新話』『剪燈餘話』などである。後の二部に就いては、別に怪談物の條に述べるとして、此處では支那小說全譯の最初と云はれる『棠陰比事』に就いて記して置く。本書は支那の疑獄裁判の說話百四十四を集めたもので、宋の桂萬榮の編著である。我が國に始めて舶載せられた年代は明かでないが、之を和譯した同じ名の『棠陰比事』內題に「棠陰比事物語」とあり は慶安二年に刊行せられた。五巻より成り、作者未詳である。此の書は單に原作を假名文に飜譯したものであるが、其の說話は當時一般の興味を惹いたらしく、其の後寛文版や延寶元年版などの異版が現れ、なほ之に刺戟せられて、裁判小說若しくは犯罪小說の流行を見るに至つた。即ち本書に刺戟せられて現れた作品の著しいものには、西鶴の作と云はれる『本朝櫻陰比事』五冊元祿二年刊行、月尋堂作の『鎌倉比事』六冊寶永五年刊行、作者未詳の『日本桃陰比事』七冊寶永六年刊、後に「本朝藤陰比事」と改題 等がある。此等は浮世草子であるが、其の影響を受けて現れた安永頃の『大岡板倉二君政要錄』や『板倉政要』などの實錄は、大岡政談の流行の源泉となつた。要するに『棠陰比事』は支那小說全譯の嚆矢であり、又後の小說實錄に多くの素材を供給した點に於て注意すべき作品である。

（五）怪談物　假名草子の中には、因果應報や勸善懲惡の趣旨を說く爲に述作せられた奇談異聞集があり、又啓蒙的教訓的な作品より一歩を進めた娯樂の爲の怪談集がある。此等は後の浮世草子や讀本の怪談物の濫觴であり、又草雙紙戲曲脚本講談などの怪談物に、多大の影響を與へたのであつて、文學史上かなり重要な位置を占めて居る。假名草子の怪談物の祖と云はれるのは淺井了意の作『伽婢子』であつて、其の中には支那の怪異說話集の『剪燈新話』及び『剪燈餘話』の說話を日本的に飜案したものが二十話許りある。『剪燈新話』四卷は明の瞿佑の撰であり、其の續篇とも云ふべき『剪燈餘話』七卷は李昌祺の撰であつて、室町時代の末頃に渡來し、慶長年間には活字印本となつて行はれた。其の後前者は慶安元年に、後者は元祿五年に重刊せられていよ／＼流布した。さて『剪燈新話』の一部分の飜譯は、既に天文年間に試みられて居る。『奇異雜談集』五卷がそれである。此の書は江州三雲の庄妙感寺に居た六角氏の臣、中村豐前守の子某が、入道して後諸國を遍歷した時、見聞した異聞奇事を書き集めたものであつて、其の卷五に、當時渡來した『剪燈新話』の中の三條を和譯したものを載せて居る。（藤井乙男博士著『江戸文學研究』一〇六—七參照）此の書が刊行せられたのは遙かに後であるから、小說界に影響する所は殆ど無かつたのであるが、『棠陰比事』の和譯が成つてから十五年後の寬文六年に、了意が『伽婢子』を公にして以來、忽ち怪談小說の流行を見るに至つた。卽ち天和二年に洛下寓居作の『新御伽婢子』六冊が現れ、貞享二年に『宗祇諸國物語』（作者不明五冊）及び西鶴の『諸國咄』五冊が刊行せられた。次いで元祿四年には、主として『剪燈餘話』中の怪談を飜案した了意の『狗張子』が公にせられ、其の後元祿十一年には、林羅山

の『怪談全書』五冊が上梓せられた。『怪談全書』は『太平廣記』『古今説海』『説淵』を始めとして、史書や異聞集などから廣く奇異怪談を抄出して、簡潔な漢文直譯體で記したものである。其の原據が廣汎に亙つて居る點や、説話の終に一々其の出典を示して居る點などに、學者らしい所がある。以上擧げたのは元祿期までの假名草子であるが、其の後支那の怪談小説を飜案又は飜譯した小説は益流行したのであつて、此等の作品は後の讀本草雙紙歌舞伎淨瑠璃などの怪談の素材となつて、怪談物の一系統を成すに至つた。了意の『伽婢子』と『狗張子』の解題は便宜上、了意の他の作品と共に下に述べることにする。

（六）名所記物

（六）名所記物　江戸時代になつて、京阪と江戸の間の交通が著しく發展した結果、地理上の知識を與へ、又旅行の心得を知らせる爲に著された小説風の地理紀行、卽ち名所記が次々に刊行せられた。其の最も古く且つ後の類書の模範となつたのは、烏丸光廣の作と言はれる『竹齋』（二冊一名竹齋物語寛永年間刊行）である。山城國の藪醫者の竹齋と云ふ者が、にらみの介と云ふ下僕を從へて京都に上り、神社佛閣を巡拜して江戸へ下る道中、到る處で主從共に狂歌を詠み、種々の滑稽や失敗を演ずると云ふ趣向の物語である。此の草子は廣く歡迎せられたので、其の後これを摸倣した假名草子に『上り竹齋』『竹齋療治物語』（共に二冊作者出版年代未詳）などが現れ、更に浮世草子には『新竹齋』（五冊作者未詳貞享四年刊行）や『竹齋狂歌物語』（三冊作者不明正德三年刊行）などが續刊せられた。『竹齋』に次いで現れた類書中で名高い作品は、作者未詳の『色音論』（しきおんろん）（一名『あづまめぐり』）（一冊寛永二十年刊）と中川喜雲の『京童』（きやうわらべ）（六卷明曆四年刊行）であるが、『竹齋』と共に後の滑稽紀行、殊に十返

舍一九の『東海道中膝栗毛』に大なる影響を與へたのは、了意の『東海道名所記』である。本書に就いては更に下に述べる。

(七)笑話物

(七)笑話物　右に擧げた名所記類は一種の滑稽文學であるが、一方に於ては元和の頃から輕口噺が持て囃された。輕口噺の集は江戸時代を通じて流行し、其の數は四百七八十種の多きに達したが、其の最も古いのは『醒睡笑』（せいすゐせう）（三冊寛永年間版行）である。此の書は京都の誓願寺の塔中竹林院の僧、安樂庵策傳（寛永十九年入寂八十九）の作であつて、序文によれば、元和九年七十歳の時、小僧の頃から聞いた話を集めたものである。作者は安土桃山時代から寛永頃にかけての人で、茶事の傍訪客に輕口噺を語つて快樂に日を送つたと云はれて居る。『醒睡笑』は噺本の最初で、度々版を重ねたが、之に次いで現れたのは輕口頓作の小話を集めた『昨日は今日の物語』（二冊作者未詳寛永年間刊行）である。抑も輕口噺は、もと室町時代に公方のお相手をしたお伽衆の語つたものや、其の後安土桃山時代に陣中で武將を慰める爲に語られたものなどが傳はつて、江戸時代初期に筆錄されたのである。從つて右の二書に收められた笑話は、單に言葉の洒落を弄んだ後世のものと比較すると、文章も古雅であり、内容も滑稽味が豐かである。其の後萬治寛文の頃に現れたものには、中川喜雲の『私可多咄』（しかたばなし）や、作者未詳の『一休咄』『一休諸國物語』『秋の夜の友』や、了意の『曾呂利狂歌咄』（初は『狂歌咄』と題す）などの刊行を見たが、多くは自作の輕口噺、若しくは和歌俳諧狂歌に就いての逸話を集めたもので、初期のものに比べると遙かに劣つて居る。下つて天和貞享の頃になると、辻噺の元祖と云はれる露ノ五郎兵衞や米澤彥八が出で、江戸では元祿の頃に鹿野武左衞

門があつて、其の流は後世に傳はつて、落噺の流行を見るに至つた。左郎兵衛の『露が噺』五冊元祿四年刊行、彦八の『輕口男』五冊貞享元年刊行、武左衛門の『鹿の卷筆』五冊貞享三年出版等は當時の噺本の中で殊に著名である。

（八）擬古的戲文物

（八）擬古的戲文物　江戸時代の初期に學者の間に『伊勢物語』『源氏物語』『枕草子』『徒然草』などの註釋が盛に現れたのに對して、此等の古典文學を摸した擬古的戲文が流行した。其の古いものは『枕草子』を當世風に茶化した『尤草子』二冊作者不明寛永九年出版や、『伊勢物語』を摸つた『仁勢物語』二冊傳烏丸光廣作寛永年間刊行等である。前者は『枕草子』の物盡しを摸つた八十條を收めたもので、序文によれば、慶長の頃に現れた『犬枕』に洩れた所を集め、題名は枕の木偏を削つたのであると云ふ。後者は『伊勢物語』の百二十五條を狂文化したもので、寛文二年に出版せられた作者未詳の『新町をかし男』は、更にこれに倣つたものである。其の後承應二年には『徒然草』を摸した『犬つれ〴〵』二冊作者未詳が現れ、天和二年には『方丈記』を摸倣した今長明の『犬方丈記』一冊などが出て、後の狂文の流行を導いた。

（九）梗概物

（九）梗概物　古典文學の知識が普及するにつれて、『源氏物語』の梗概を記したものが現れた。源氏の梗概を書いたものには、既に室町時代に著者未詳の『源氏小鏡』があるが、之に倣つたのは『源氏鬢鏡』一卷小島宗賢著萬治三年刊鈴村信賢著天和三年刊である。此の書は卷々の筋を略述した外に、卷の初毎に一枚の繪を挿み、終には其の卷の名を讀み込んだ發句を一つづつ添へて居る。次いで現れたのは作者未詳の『十二源氏袖鏡』（一名『十二帖源氏』）十二卷明暦二年刊であるが、殊に名高いのは野々口立圃が書いた『十帖源氏』十卷寛文元年刊行と『おさな源氏』十卷寛文十年刊行である。後者は前著を更に平易に且つ簡約したもので、共に著者の筆に成つ

た挿繪を入れて居る。

二　假名草子の作者

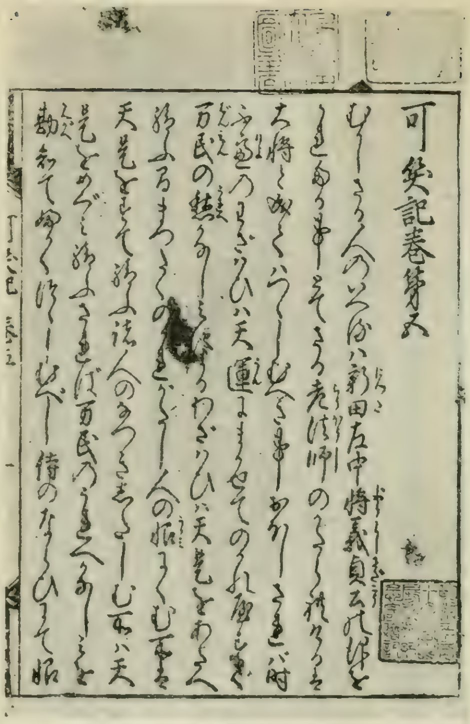
作者

假名草子の種類並に其の著名な作品は以上說いた通りである。要するに假名草子は、前代の御伽草子と後の浮世草子とを繫ぐ、過渡期の啓蒙的若しくは娛樂的な雜駁な作品であつて、純粹の小說は極めて乏しいのである。併し後の浮世草子・讀本・滑稽本・狂文・落噺等の、發生並に發達に多大の影響を及ぼしたものであるから、國文學史上重要な位置を占めて居る。而して其の作者名は記されてゐないのが多いが、寛永期の作者として知られて居るのは、烏丸光廣・朝山意林庵・三浦爲春・如儡子等であり、萬治寛文頃の主なる作者は鈴木正三・山岡元隣・淺井了意等である。今此等の作者の中で最も注意すべき、如儡子以下の四人の閱歷と作品に就いて略述しようと思ふ。

如儡子

如儡子は何人の號であるか詳かでない。水谷不倒氏は、饗庭篁村氏所藏の『可笑記』の卷尾に或人が記した書入に、「予瑞龍軒恕翁（○宮川尙古か）が撰せし關ヶ原軍記大全を讀みしに、恕翁が親族湯村式部が著すところの可笑記に云々」とあるのを引いて、如儡子は湯村式部なる者の戲號であるらしく思はれるが、猶疑問であるとして居られる。（「列傳體小說史」前篇參照）又最近森銑三氏は、帝國圖書館所藏の『梅花軒隨筆』（三休子上坂平次郎著作）に、松平新太郎光仲（森氏は池田新太郎少將光政の誤かと云ふ）に仕へた儒者齋藤意傳が、浪人して後に『可笑記』『百八町記』などを書いた事が記されて居るのを發見して、意傳とする說に荷擔

せられた。（『日本文學』二巻一號所載論文「可笑記の著者如儡子は何人か」）從來如儡子に就いて考證せられたのは右の二説であるが、猶未だ確定説を見ないのである。併し『可笑記』の記述によつて、如儡子が東北地方の或武士の家に生れた學問文才のある侍であつた事や、志す所意の如くならずして浪人生活に入り、轗軻不遇を歎じてゐたが、佛法に歸依して後僅かに安住の地を得た事、などを窺ふことが出來る。其の著作として世に行はれたのは『可笑記』と『百八町記』とである。尤も如儡子の署名があるのは後者だけであつて、前者には署名がない。併し前者が彼の作である事は、寛文以後の書籍目錄其の他諸書によつて知られるのである。



可笑記

『可笑記』（五巻寛永十九年刊）は巻尾に「予時寛永十三孟陽中澣江城之旅泊身筆作之」とあるから、刊行以前寛永十三年の作である。毎條「昔さる人の云へるは云々」と書き起して、作者の見聞閲歴や、古人の言行や、和漢の故事格言などを引いて、主として儒教主義の教訓を說いた隨筆であつて、當時廣く行はれた『徒然草』を摸倣したものである。尤

も其の冒頭には、文武の正道が廢れて、人心が一般に輕佻浮華に流れて行くのを慷慨して筆を執つた事を述べ、書中には屢武士の心得を說き、時代の通弊に對して慨歎し、又作者自身が世に用ひられなかつた不平を洩して居るのであつて、此等の方面から見れば、抒情的隨筆の性質を帶びて居ると言へるのである。此の書には諸處に和歌落首發句などを挿み、文章は『徒然草』に倣つて簡潔明快であり、內容には輕妙な滑稽味を帶びたものがあるので、忽ち時代の好尙に投じて數版を重ねた。從つて後の文學殊に文體に多大の影響を及ぼしたのであつて、此の書を批評したものには、了意の『可笑記評判』が現れ、又西鶴は『新可笑記』を書いた。左に一二の文例を掲げて置く。

〇むかしさる人の云るは、人の心は萬えんにひかれて移りやすき物なり。盃をとれば酒のまん事を思ひ、箸をとれば物くはん事を思ひ、きせるをとればたばこのまん事を思ひ、さいをとればすぐろくうたん事を思ふ。萬事みなかくのごとし。さあらばかりそめにも筆をとり、物の本をとるべきなれ。（卷一）

〇むかしさる人の云るは、冬の夜のつれ〴〵と寒けきに燒火にあたり、とほんと明しかねたるに、其燒火のもゆるに隨ていな事を思ひあはせり。薪盡ればもゆる火消ゆるかと思へば、又くぶる薪にもゆ。げに〳〵海中にあつて年久しき石も、うちわりみるに火いづるなり。さあらば元來の火は消ゆる事なきにや。誠に乾坤充滿の火はいつ消えはてん。（卷一）

百八町記

『可笑記』を書いてから二十二年の後、承應四年に『百八町記』（五册寛文四年刊行）を述作した。本書は寛永以來の假名草子に、儒を重んじて佛を貶したものの多いのに對して、當時佛教を信じてゐた如儡子が、寧

ろ佛教を揚げて、儒佛道三教にはそれぞれ一理があつて、結局同一に歸著する旨を說いたもので、題名は三理を三里に捩つて百八町と洒落れたのである。此の書の內容は斯くの如くであるから、文學的要素は乏しいのであるが、三教一致を說いた作品が流行した當時であるから、相當行はれたらしいのであつて、寬文年間に再版を出し、萬治二年には繪入本が刊行せられた。

鈴木正三

鈴木正三は三河の武士鈴木重次の子で、名を重光（一に重三）通稱を正三と云つた。壯年の頃家康に仕へて祿二百石を食み、關ヶ原の役や大阪の陣などに從軍して武功を樹てた。家康が薨じた後は、秀忠に仕へて大番に列せられたが、四十二歲の時致仕し薙髮して、俗名の正三を音讀して法號とした。佛門に入つて後は主として曹洞禪を修し、十餘年間諸國を遍歷して、寬永九年（五十四歲）に鄕國三河國西加茂郡石野村の石平山恩眞寺に住し、山號に因んで石平道人と號した。五十九歲の時島原の亂には、弟三郎九郎重成と共に彼の地に赴き、戰後其の地に寺を建てて、吉利支丹宗の絕滅に努めた。『破吉利支丹』は其の頃の著である。其の後慶安元年に江戶に下り、牛込の天德院（一に淺草と云ひ又湯島とも云ふ）の傍に了心庵を結んで、專ら禪道を說いてゐたが、明曆元年に七十七歲で遷化した。正三は三河武士の血を享けた、氣骨稜々たる武士である上に、禪宗の妙諦に參した人であつて、晚年に武士的禪法を鼓吹して、人々に安心立命を說いた功績は極めて著しい。從つて其の著作十二三種ある中には、敎化傳道の爲に書いたものが多いのであつて、假名草子の作には『因果物語』と『二人比丘尼』とがある。此の二書は『萬民德用』『麓草分』『盲安杖』『念佛草紙』『破吉利支丹』と併せて、正三の七部書と稱せられたものであつて、其

の弟子惠中は師語を錄した『驢鞍橋』に、「以上の七部は三寶の光を以て國土を照し、普く群生を度せんと欲す、師大願の至要也」と述べて居る。（正三の閲歷及び著書の事は、藤井乙男博士著『江戸文學研究』、及び石田元季氏著『江戸時代文學考說』の中に詳述せられて居る。）

因果物語

『因果物語』は正三が諸國遍歷の間に見聞した異聞奇談を素材とし、佛教の因果應報の理を示して、敎化の資とする目的で書いた小話集であつて、門人等によつて出版せられたものである。これに最初に出版せられた片假名本（三冊寛文元年刊行）と、其の抄錄補足から成る平假名本（六冊無刊記本）とがある。兩書を比較すると、片假名本は凡そ百三十條から成つて居るが、平假名本は八十六條を含んで居る。而して平假名本の初め三卷の六十二條の中五十五條の物語は、片假名本にあるものであるが、其の他の七條と卷四以下三卷二十四條の物語は、片假名本に無いものである。なほ平假名本は片假名本に比して、一體に物語的要素を多分に有つて居る。卽ち平假名本は片假名本から抄錄し、更に原本によつて增補したものに、物語的脚色を加へて成つたのである。此の物語は、此の頃から流行した怪異小說の魁として持て囃されたのであつて、後には其の名を襲うた西鶴の『新因果物語』（『本朝二十不孝』の一名）や、鷺水の『近代因果物語』の如き浮世草子が現れた。

文例

人を咀ふ僧忽ち報いを受くる事

寛永十八年十月、木秀長老三州より濃州池田の近處、中の郷と云ふ處へ行き給ふ。彼處（かのところ）に文秀と云ふ僧、十二三年偏參して後引籠居（ひきこもり）たり。彼文秀大作（おほづく）りなどし、利錢賣買のわざを爲し世を渡るなり。去程に庄屋の女

の爲に女難を受けたり。是を知りたる者一人あり。此者の方へ、女の方より金子二兩、亦坊主の方より金子二兩出して、是を能々隱してくれよと賴むなり。彼の者尤もと云うて金子を取り、頓て人に語るなり。此時文秀腹を立て、人形を作り、ふし〳〵に刀を作りさして、彼者を強く呪ふ程に、頓てのろひ殺すなり。然るに彼の文秀七日も過ぎざるに狂氣して、赤裸になりてかけ回ること鳥獸の如し。少しも立留まれば、地より劍出でて足をつらぬくと云うて走るなり。取り付く草木も皆劍なり。あらおそろし〳〵と云うて、飛びありくこと二日三夜なり。處の代官是を聞いて、捨置くこともいかがと云うて、追ひ回したたき伏せてとらへ、馬へ乘せて鄕中へ來る。馬の上にても劍に貫拔るとて悲むなり。牢を拵へ入れて、處の者に番をさせ置きたるを見たりと、本秀慥に語り給ふ。劍樹刀山と云ふこと明かなることなり。（因果物語 上卷）

二人比丘尼

正三は既に述べたやうに、主として禪學を修養した人であるが、一方では「南無阿彌陀佛と唱ふるも、念根を截斷する劍にして、菩提の正因と成るなり」（石平反故集）と言つて念佛を勸めたのである。嘗て念佛捨身の功德によつて、安心立命を得べき事を說く爲に『念佛草紙』二卷を述作したが、假名草子の作で名高い『二人比丘尼』（二卷寛文三年刊行）も亦同じく念佛信仰の宣傳の爲に書いたのである。其の內容は下の通りである。下野國の住人須田彌兵衛は、年二十五で戰死を遂げ、殘された妻は年僅かに十七歲であつたが、一周忌を營んだ後に、夫の戰死した跡を弔ふ爲に旅に出た。偶草堂に宿つた夜の夢に、多くの骸骨が世の無常を示した歌を謠ひながら踊るのを見て、始めて憂世のはかなさを悟り、更に年二十許りの不幸な女の家に泊つて、互に身の上を語り合ひ、一年許り寄寓する中に、主の女房はふとした病の

爲に世を去つた。悲歎の中に野邊の送を營み、一七日に墓場に行つて見ると、村人は埋葬もせずに捨てて置いたらしく、屍體はあさましい姿で横たはつてゐた。其の後二七日三七日と弔ふ中に、尸肉は靡爛して行き、遂に白骨となつたのを見て彌無常を悟り、やがて發心して尼になり、或る貴い比丘尼を訪ねて法を問ひ、大悟して往生の素懷を遂げたと云ふのである。此の物語は、正三が慈母の爲に書いたものであると傳へられて居る。此の物語の構想は、一休の作と傳へられる『一休骸骨』や、東坡の「九相詩」から得た所が多いが、又作者が平素嗜んでゐた謠曲からも多くの影響を受けて居る。文章はなだらかで、屢謠曲の成句成語を引用して、聲調の美を備へて居る。要するに正三の代表作であり、



「二人比丘尼」插繪

且つ假名草子中の出色の作品である。次に掲げるのは、女主人がはかなく死んだ時の歎きを敍した一節である。

かくてけふよあすよとすぎゆけども、しだい〳〵におとろへ、よのつねのかんばせはかはり、花のかたちも

やつれはてあはれなりける有様なり。なげくにかなはぬいのちなれば、いまをかぎりとなりはて、ねぶれるがごとくにしてうせ給ひぬ。うゐてんぺんの世のならひ、きのふ見し人もけふはなく、なき人はかさなり、あしたにかうがんあれども、ゆふべにはつこつとなり、あだしうきよのことわり、のがるべきにあらねども、かかるうきめを見る事、そもなにのゐんぐわぞや。時しもころはやよひのすゑ、花もちり春もくれゆくそらなるに、月も入あひのかねなりて、こととふ人もあらざれば、いとどあはれはまさりつつ、天にあふぎ地にふし、歎き給へどかひぞなき。（二人比丘尼　下）

山岡元隣

鈴木正三が専ら佛教的教訓書を遺したのに對して、山岡元隣（寛文十二年歿四十二歳）は主として儒教主義の教訓物を書いた。元隣の傳は其の俳文を集めた『寶藏』の跋（元隣の子元恕の筆）及び元隣の作『百物語評判』の末尾に據つて窺ふ事が出來る。元隣は而慍齋と號し、又洛陽散人・抱甕齋とも號した。伊勢山田の商家に生れたが、病弱であつた爲に家業を棄てて京に上り、北村季吟に就いて古典と俳諧を學び、専ら風雅の道を樂しんだ。（是より先醫術を學んだと云はれて居る。）元隣は國書の外に、老莊並に禪學をも兼ねてゐた人であるから、其の著書は多方面に亙つて居る。即ち季吟の著述に倣つて、『徒然草鐵槌増補』、『方丈記頭書』『百人一首新抄』等の如き註釋書を書き、『隨葉集大全』『寶藏』『諸國獨吟』等の俳書を著したが、假名草子の作には『多我身之上』『小巵』『百物語評判』の三部がある。

他我身之上

『他我身之上』（六卷明暦三年刊行）は、元隣の假名草子の最初の作であつて、明暦二年（二十六歳）に成つた。本書は『可笑記』に倣つて實話や寓話を借り、又格言や俚諺などを引いて、主として儒教主義の教訓を述べた隨

筆である。其の序文に、

孔なき笛に太平のうたを吹けば、耳よりほかに其音遠く、指ならざるを以て無何有の月を指せば、ひかりかげを忘れたり。山を山といふとも、そもまたせしむるものはたぞ。

と記して居るのは、老莊の思想に基づいた言であつて、書中にも老莊儒釋の教を說いて極めて衒學的である。其の文章は俗語を混用して平明であつて、後の浮世草子の文章に影響する所が多い。

文例

鄕に入て鄕にしたがへといふ事は、いまだ文にては見侍らねども、是に能く相似たる事は、禮記等にいと多し。しかれどもまことの佞人は、おのれが利口をもととして、賢人の言葉をかり、人は人たり我は我たり、もし我はつるときに、たれかは身にかはるものあるべきとて、人のそしりをもかへりみず、人の事のみあしきさまにいひなすものあれども、かやうの口こはき人くらひ馬のたぐひには、じきに云聞かせる人もまれなれば、一生我身ほどよろしきはなしと思ひて、あやまりを重る者あり。佛四つの恩をとき給ふうちには、衆生の恩あり。もし我は我人は人たるといふことならば、さまでの恩といへるまでは有まじき事なれども、たとへばあみを大空にはり鳥を求めんに、鳥のかかれるあみの目は、わづかにひとつかふたつに過ぎねども、目ひとつふたつないし十二十あるあみにて、鳥をとらん事を求めんには、いつまで求むるとも鳥かかるまじきごとく、我一人にて世をわたるといへる事は、有まじき事なり。（他我身之上　第一）

小巵と百物語評判

『小巵』（五卷萬治年間刊行）も亦例話や譬喩譚を素材として書いた教訓的小話集であるが、『他我身之上』に較べると戲作の體裁に一步を進めて居る。最後の『百物語評判』（五卷貞享五年刊行）は當時流行した怪談物に對して、

儒教主義の立場から、其の迷信を破らうと試みたものであつて、彼の歿後に其の門弟の手によつて集められた遺稿である。要するに元隣の作品は、悉く道義を說き諭す事を主眼としたものであつて、小說的色彩の乏しいものであるが、後の小說に影響する所の多かつた點に於て、假名草子の代表的作家の一人に數へられて居る。

淺井了意

假名草子の作者中で最も多くの著作を遺し、又最も勝れた伎倆を有つてゐたのは淺井了意である。了意の傳は未だ詳かでない。其の作『武藏鐙』の序及び『可笑記評判』の奧書に據れば、江戶の人で、長く浪人生活を送つた後に薙髮し、何れの年にか京都に上つたのである。更に其の遺稿の『狗張子』の序了意の門人林義端の筆に據れば、晚年京都の本性寺に住し、老練の筆を揮つて多方面の著作を書き、元祿四年元日にかなりの老齡で卒したのである。本性寺は其の後湮滅して所在も不明とせられてゐたが、最近北條秀雄氏は、大谷大學圖書館藏粟津文庫文書に據つて、京都二條に在つた大谷派の末寺である事と、此の寺は了意が再興したもので、寛文の中頃には其の住職了意の名聲は、相當に聞えてゐた事などを明かにせられた。『國語國文』一卷三號所載「淺井了意の生涯」參照

了意の著作の中で署名のあるものには、瓢水子松雲處士又は松雲子了意と記したものと、本性寺昭儀坊了意と署名したものとある。前者は主として戲作に用ひ、後者は專ら佛書に用ひて居る。了意の著書として認められて居るものは、凡そ四種に分つ事が出來る。第一は佛書法語の類であつて、淨土門に關する著書が多數を占めて居る。第二は史書軍記の類であつて、其の著しいものは『將軍記』十九

卷『北條九代記』十二卷『鎌倉九代記』十三卷等である。第三は古文學の註釋書であつて、『源氏雲隱抄』三卷『伊勢物語抒海』十卷『百人一首頭書』二卷等を擧げる事が出來る。第四は假名草子であつて、『可笑記評判』十卷『東海道名所記』六卷『孝行物語』五卷『堪忍記』八卷『武藏鐙』三卷『浮世物語（うきよばなし）』五卷『本朝女鑑』十二卷『江戸名所記』七卷『京雀』七卷『日本（やまと）二十四孝』（二十四卷十二冊）『伽婢子』十三卷『狗張子』七卷等が著名な作である。

右に述べたやうに了意には、多方面に亙る多數の著述が傳はつて居るので、戲作を遺した本性寺住職の松雲了意と、註釋軍記地理書などを著した淺井了意とを同名異人と見る說がある。喜多村信節の『嬉遊笑覽』や、柳亭種彥の『好色本目錄』等の說がそれである。併し古く寛文十一年の書籍目錄や、元祿五年の『廣益書籍目錄』などに據つても、二人とすべき證左はないのであるから、水谷不倒氏の『列傳體小說史』、藤岡作太郎博士の『近代小說史』、藤井乙男博士の『江戸文學叢說』等に從つて、同一の人と見るべきであらう。

了意が假名草子最初の作と思はれる『可笑記評判』（萬治以前に成る）を述作して以來、元祿四年正月に歿するまでの、凡そ四十年間に書いた假名草子は、かなり多數に達して居るから、今其の一々に就いて述べる遑はない。姑く其の中の注意すべき作品、即ち小說的地理書の『東海道名所記』『江戸名所記』、教訓物の『堪忍記』『浮世物語』、怪談物の『伽婢子』『狗張子』以上六種に就いて簡單に解說して置かう。

東海道名所記

『東海道名所記』六冊には刊記が無いので出版年月は不明であるが、書中に『九年以前庚寅のとし』とあるから、庚寅の年（慶安九年）から九年後の、萬治元年の著作であるとせられて居る。此の書は樂阿

彌といふ世捨人が、四國遍路や伊勢熊野廻りをして、更に江戸見物を終へた後に、芝口から或商家の手代を道づれにして、京に上る道中記である。一人の男を供にして旅立ち、途中神社佛閣や名所舊跡を見物しながら其の由來を說き、卽興の狂歌や發句を口吟んで居るのは、『竹齋』の趣向を摸倣して居るのであるが、旅馴れぬ伴の男に道々旅の心得を說き聞かせたり、驛々の里程宿々の駄賃などを記し、又各地の人情風俗言語などを精細に寫して居るのは、東海道を旅行する者の手引としようとしたもので、此の點は『竹齋』と異なつて居る。到る處に諧謔を挿み、文章も輕妙であつて、類書中では最も勝れて居る。左に揭げるのは樂阿彌が道づれの男に、旅の心得を說き聞かせる一節である。

そなたのやうなる旅なれぬ人は、追はぎにあひてころさるゝ歟、かたりにあふて一跡をとらるゝ歟、旅籠や渡しぶね所々で損をする事おほし。旅には第一藥をたしなみ、煩ひをふせぐを肝要とす。草冷水むさとしたる食物をつつしむべし。夏旅の霍亂は多くは食傷よりおこるなり。あやしき人に道づれして、ひとつ宿にとまりて荷物をすり替られ、寢たるあひだにとりにげにあふ事あり。夜ふかく宿を出ぬれば、山だち辻切の氣づかひあり。宿につきては、家の勝手閑道の要害見をくべし。座敷の壁に荷物をよせかけてをくべからず。疊のおちこみてやはらかなる所あらば、疊をあげて是をみよ。蚊帳の內ならば、かたわきに立より、壁にそふて臥すべし。夜盜人てつり手をきり、をしつつむ時の用心なり。宵にねたる所をば、わきへ替て寢なをれ。太刀かたなは柄口をわが身にそへてをくべし。遊女にたはれて金銀をぬすまるゝな。たとひ呼ぶとも心ゆるすな。さて道中第一の用心には、堪忍にまさる事なし。船頭馬かた牛遣などは、口がましくこと葉いや

しう、わがまゝなる者なれば、是にまけじとする時はかならず大事のもとひとなる。今錢二三文をたかくつかへば、萬事はやくとゝのふなり。扇笠きんちやくもたかき所にをくべからず、わすれやすきものなり。旅飯錢は宵に渡すべからず、朝たつ時にわたすべし。錢をかふには金銀を手ばなし、人をたのみてつかはしぬれば、あしき銀にすりかへらるゝ事あり。しるしをみせて錢をとりよせ、其後にわたすべし。道の右左に神や佛の堂社あらば、手をあはせ心に念じてとをるべし。まもりの神となり給ふ也。まだ此外に色々の事どもあり。後々は合點ゆくべし。

了意の名所道中記には、なほ『東海道名所記』と同じ趣向の『江戸名所記』（七冊寛文二年刊行）があり、また中川喜雲の『京童』に倣つた作に『京雀』（七冊寛文五年刊行）があるが、共に文學的價値は乏しい。

堪忍記

了意の教訓物の中で著名なものは、『堪忍記』と『浮世物語』とである。『堪忍記』（八冊萬治年間刊行）は古人の逸話や寓話を引いて、堪忍の德を說いたもので、初版以來重版若しくは複刻版が現れたのを見ると、かなり讀まれた事が判る。併し彼の教訓物の白眉は『浮世物語』（五冊寛文四年刊行）である。其の序文には、浮世と

浮世物語

は現世の享樂に耽ける事であるとして、當時の人生觀を示して居るが、更に物語を見ると、著しく現實的色彩を帶びて居るのが注意を惹く。さて本書の內容は、放蕩に身を持ち崩した擧句に、博奕の仲間に入り、喧嘩をして牢人となり、遂に剃髮して浮世房と名乘つた飄逸洒脫な法師が、或大名に仕へて諧謔の中に君を諷諫し、最後に蛻仙となつて行方を晦ましたと云ふ筋である。主人公の浮世房が諸處を流浪し、種々な境遇を經歴して、滑稽な失敗を重ねるのは、同じ作者の『東海道名所記』の趣向と

共通して居るのであるが、其の寓話には『伊曾保物語』の影響が認められる。

了意の作中で最も著名なのは怪談小説流行の魁となつた『伽婢子』（十三冊寛文六年刊）である。題號は表紙に御伽婢子とあるが、内題には伽婢子とある。序に「學識ある人の目を喜ばしめ、耳をすすぐ爲にせず、只兒女の聞を驚かし、自ら心を改め、正道に赴く一つの補とせんと也」とあるのを見ると、幼童の爲の御伽話の意を寓したもののやうである。即ち本書も亦從來の假名草子と同じく、啓蒙教訓を目的として述作したものであるが、内容を見ると教訓から脱却して、寧ろ娛樂の爲の怪談奇事を集めて居るのであつて、文藝として、歩を進めた觀がある。



浮世物語一卷挿繪

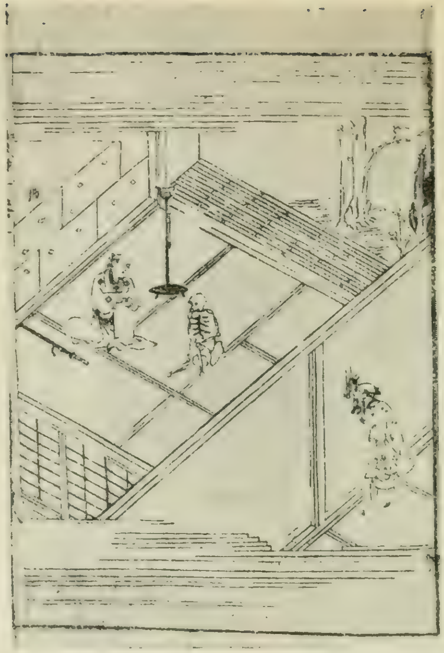
所收の說話に就いて、作者は序文に「此伽婢子は遠く古へを取るにあらず、近く聞傳へし事を載せ集

めて記しあらはすもの也」と記して居るけれども、說話の總數六十八話の中二十一話(『剪燈新話』から十八話『剪燈餘話』から二話『怪異奇談』から一話)は、支那の怪異小說を飜案したものである。此の二十一話は他の俗間傳承の怪談奇事四十七話に比して、數量に於ては約三分の一に過ぎないけれども、其の說話は比較的長篇であり、而も時代人名地名は勿論、すべての點を我が國風に合ふやうに飜案して居るのであつて、原作の痕を留めず、換骨脫胎の妙を示して居るのであつて、本書の價値は寧ろ此等の飜案物にあるのである。『剪燈餘話』や『怪異奇談』から取つたものが少いのは、飜案に困難な點があつた爲である。試みに『剪燈新話』を飜案した說話の中で、殊に興味のあるものを擧げれば、眞紅の繫帶(金鳳釵記)、牡丹燈籠(牡丹燈記)、遊女宮木野(愛卿傳)、隱里(申陽洞記)、易生契(綠衣人傳)等である。(括弧内は原作の題名) 今此等の中で、後の小說や講談などに取材せられて、最も有名になつた牡丹燈籠の梗概を記して見よう。(牡丹燈記は既に奇異雜談集の中にも飜譯せられてゐる)

牡丹燈籠の梗概

天文年間に京都の五條京極邊に荻原新之丞といふ者が住んでゐた。妻に後れて獨り淋しく暮してゐたが、或年聖靈祭の夜更け頃に門前に佇んで居ると、二十許りの世にも稀な美人が、十四五の女童に牡丹花の燈籠を持たせて通り過ぎた。荻原は其の美貌に心を動かし、我が家に連れ歸つて契を籠めたが、女は二階堂政行の後裔政宣の娘で、父は戰死を遂げ、兄弟も皆世を去つて、今は萬壽寺の邊に獨り淋しく日を送つて居る事を告げた。其の後女は每夜のやうに荻原の許に通つて來たが、二十日許り經た後、隣の老翁が荻原の家の樣子を不思議に思つて、壁の隙間から覗いて見ると、燈火の下に荻原

と白骨が差向ひになつて、睦まじく話をして居るのを見た。よく見ると、荻原が物を言ふ毎に白骨の手足が動き、髑髏が首肯き、口と思はれる所から聲が響いて來る。翁は大いに驚いて、夜の明けるのを待つて、見た儘を荻原に語り、且つ斯かる妖魅と馴染になつて居ると、身を滅ぼすであらうと戒めた。荻原はかくと聞いて始めて驚き、萬壽寺の近くに住む者と聞き及んでゐたので、寺に行つて見ると、古い魂屋の棺の表に、二階堂左衛門尉政宣が息女彌子吟松院冷月禪尼と記してあつて、其の傍に古い伽婢子があり、又棺の前には牡丹花の古燈籠が懸つてゐた。荻原は身の毛のよだつ思をして走り歸り、隣の翁に教へられる儘に、東寺の卿公といふ驗者を訪ねて護符を乞ひ請けて歸り、之を門に張り付けて置くと、女は再び姿を見せなくなつた。かくて五十日許り經て或日の事、荻原はさすがに美しかつた面影を思ひ出して、ふら〳〵かの寺の境内に入つて行くと、忽ち女が現れて來て日頃の薄情を恨み、手を執つて奧へ連れて行つた。是を見た供の男は肝を消して逃げ歸り、此の事を人々に語ると、皆々驚いて早速寺に行つて見ると、荻原は墓に引込まれ、



伽婢子挿繪

白骨と打重なつて死んでゐた。その後雨の降る夜毎に、荻原と女と手を取組み、女童に牡丹花の燈籠を持たせて出て歩き、それに出逢ふ者は悉く重い病に惱まされた。そこで荻原の一族は一千部の法華經を讀誦し、一日頓寫の經を墓に納めて、懇に跡を弔ふと再び現はれなかつたと云ふ。

特色

以上は牡丹燈籠の筋書であるが、『伽婢子』の怪談にはこれと同じく、現世の男が幽界の女と契を結ぶ筋のものが極めて多い。而して現れて來る幽靈は、後世のやうに恐ろしい形相のものでなく、大抵現實的な美人の姿である。斯かる傾向は假名草子に限らず、西鶴の浮世草子中の怪異說話にも見られるのであつて、畢竟現世の歡樂を謳歌した時代の、空想的欲求の然らしむる所である。『伽婢子』の說話は從來の因果話と趣を異にして奇想に富み、且つ其の文章も勝れてゐる爲に、忽ち讀者の喝采を博して盛に持て囃された。左に揭げるのは卷一の龍宮の上棟の冒頭である。

文例

江州勢多の橋は、東國第一の大橋にして、西東にかゝれり。橋より西の方、北には滋賀辛崎もまのあたりにて、山田矢橋の渡し舟、鹽津海津の上り舟に帆かけて走るも得ならず見ゆ。南の方は石山寺、夕暮つぐる鐘の音に、山づたひ行く岩間寺も程近く續きたり。橋より東の方、北には任那(しな)の里、ここは名におふ蓮の名所にて、六月の中比より咲きみだるる蓮花、匂ひは四方に薫じて、見に來る人の心さへ自ら濁りに浸まぬ樂しみあり。橋の南には田上山の夕日影、鳴送る蟬の聲に夏は涼しさ勝りけり。後ろは伊勢路に續き、前には湖水の流れながく、鹿飛(ししとび)の瀧より宇治の川瀨に出るといふ。其の北には螢谷とて洞あり。四月の初つかたより五月の半に至るまで、數百萬斛の螢湧出て、湖水の面に集り、或は鞠の大さ、或は車の輪のごとくかたまり

園がりて、雲路遙かに舞ひあがり、俄に水の上にはたと落ち、はら〳〵と碎けて水に流るる有樣、照々たる柘榴花の五月雨に咲くが如くにて、光さやかに亂れたるは、叉捨がたき眺め也。されば世の好事の輩、僧俗ともに遊び來て、歌よみ詩つくる其言葉多く口につたへ書に記せり。

了意の怪談物にはなほ晩年に書いた『狗張子』（七册元祿五年刊行）がある。此の作も『伽婢子』と同類の怪異說話集であつて、四十五話から成つて居る。其の中には『剪燈新話』を飜案したものもあるが、寧ろ『剪燈餘話』の飜案の方が多きを占めて居る。此の書は了意の歿後其の門人で書肆であつた林義端（文會堂主人九兵衞）が、未完成の儘を上木したのである。

以上で了意の假名草子の著名な作品の解說を終つた。要するに彼は創意を缺く憾はあつたが、博く內外の典籍を涉獵し、且つ和歌連歌を心得、文章にも長じてゐた爲に、從來の假名草子に比して一段と勝れたものを書き、而も多種多樣の作を一人で書いて、何れの方面にも成功したのである。從つて假名草子は了意に至つて行き詰つたのであつて、彼以後は一轉して、現實生活殊に樂天的逸樂的な生活を描寫した浮世草子となつたのである。

第七章　浮世草子と八文字屋本

一　浮世草子と井原西鶴

狗張子

浮世草子

假名草子の中には世態人情を描いたものもあつたが、此の方面を承けて更に一歩を進めたものは浮世草子である。浮世草子は假名草子の延長であるが、新時代の自覺に基づいて、當時の世態人情の描寫を主とした點に於て、假名草子と區別せられるのである。浮世は宗教的な意義から轉じて、當世の義に用ひられたのであるが、一面には好色卽ち官能的な遊蕩生活をも指すのである。例へば「浮世繪」「浮世姿」「浮世話」などは寧ろ當世を意味して居るが、「浮世町」「浮世狂」などは好色の義に用ひられて居るのである。卽ち浮世は狹義に於ては花街の情趣生活を指し、廣義に於ては現代の人生を指すのである。從つて浮世草子の範圍には廣狹二樣の見方があつて、狹い意味では主として西鶴一派の好色本を指すのであるが、廣い意味では西鶴の『好色一代男』以後、八文字屋本及び其の系統に屬する氣質物に至るまでを指すのである。而して國文學史上に普通謂ふ所の浮世草子は廣義のものであつて、天和から安永頃に至るまでの五六十年間に、主として上方に現れた現代生活を寫した小說を云ふのである。尤も書物の體裁其の他から、特に八文字屋本を別にして取扱ふ事がある。浮世草子は素材の上から見て、幾つかに分類する事が出來る。一般には好色物・町人物・武家物・奇談物・裁判物・犯罪物・氣質物などに分類せられてゐる。此等の特質は以下述べる所によつて明かになるであらう。

井原西鶴

浮世草子の創始者は井原西鶴である。西鶴は近世小說界の大立物であるが、其の詳細な傳記は傳つてゐない。從來は彼の作品により、又其の遺稿追善句集などに記された門人の序や、都の錦の『元

祿太平記』其の他に散見する閱歷の片鱗、若しくは逸事によつて、想像せられるに過ぎなかつた。然るに近頃藤村作博士によつて紹介せられた『見聞談叢』（日本藝林叢書八卷所收）の一節は、稍纏まつた傳記資料として學界の注意を惹いて居る。（「國語と國文學」第六卷一號參照）是によれば、西鶴は本名を平山藤五と云ひ大阪の富裕な町人である。早く妻に先立たれ、盲目の一女があつたがこれも早世したので、名跡を手代に讓つて諸國を旅行し、又俳諧や浮世草子などを作つて、專ら自由な生活を送つたと云ふのである。『見聞談叢』は仁齋の第二子伊藤梅宇通稱重藏（天和三年生延享二年歿）の記したもので、西鶴の時代を去る事遠からぬ頃に書かれたのであるから、多少の誤傳はあるとしても、大體は信じて差支ないであらう。殊に裕福な町人であつた事や、旅行を好んで諸國を行脚した事などは、彼の作品の特徴と併せ考へて首肯せられるのである。さて西鶴は寛永十九年に生れ、元祿六年八月十日に五十二歲で世を去つた。其の遺稿を上梓した『西鶴置土產』の卷頭には、彼の肖像に辭世の句「浮世の月見過しにけり末二年」を揭げて居る。墓は大阪寺町誓願寺にあつて、墓碑には「仙皓西鶴」の四字が刻してある。

作者生活

西鶴の文學的生活は俳諧時代と浮世草子時代とに分れて居る。即ち幼少の頃から天和二年（四十一歲）まては俳諧時代であり、それから歿年の元祿六年までの十年間は浮世草子の時代である。而して西鶴が男盛の頃まで俳諧生活を續けた事は、後年浮世草子の作家となるべき、素地を作る爲に費されたと見る事が出來る。即ち西鶴が浮世草子の作に巧みに世相を寫し、人情の機微を穿つたのは、既に彼の俳諧にも特色として見出されるのであり、又其の文章が從來の假名草子の型を破つて、簡勁奇警輕妙であ

つて、全く獨得の新文體であるのも、俳諧の修養に負ふ所が多いのである。思ふに西鶴は、元來自由奔放才氣縱橫の人であつた爲に、窮屈な短詩形を以て滿足する事が出來なかつたのであつて、其の旺盛な創作慾は、遂に彼を驅つて小説作家たらしめたのである。

西鶴が晩年の十年間に書いた浮世草子は十六篇（推定される作品を加へると二十篇となる）ある。此等の中には假名草子の系統を引いた雜話集があるが、主要なものは好色物・武家物・町人物の三種である。

（一）好色物

好色一代男

而して彼の處女作は『好色一代男』八冊であつて、師の宗因が歿した天和二年の十月に刊行せられた。此の作は京の或富豪の子に生まれた、變態的に早熟な世之介（浮世之介の意）を主人公として、其の一生の好色生活の發展を五十四話に書き綴つたものであつて、言はば短篇小説の集合體である。



江戸版好色一代男挿繪

世之介は七歳の時早くも情を知りそめて以來、あらゆる種類の女に戲れ、諸處の遊里に出入し、十九歳の時には親の勘當を受けて寺に入つたが、二日の後再び浮世に遁れ出で、諸國を放浪して樣々な人生の行路を辿る間に、遊蕩生活の限りを經驗し、種々な戀路の冒險をも試みた。偶世之介三十四

歳の時、親が巨萬の富を遺して世を去つたので、忽ち、世の大盡となり、今を時めく幾多の名妓を相手に、諸處の花街で通人生活の蘊奥を極め、果ては長崎の丸山で最後の豪遊を試みたが、齢既に六十に達し、今は浮世に思ひ殘す事もなくなつたので、殘の金六千兩を東山の奥に埋め、同心の友七人を誘つて好色丸といふ船を仕立て、天和二年十月の末に、伊豆國から女護島を指して行方を晦ましたといふのである。

内容の特色

此の草子に寫し出された世之介の生涯は、放縱な元祿町人の遊蕩生活の種々相である。尤も作者は世之介を借りて、單に當時の好色生活を斷片的に描寫したのでなく、本能的な性慾生活に始まつて、花街の情趣を享樂せんとする大盡生活に至るまでの徑路には、理想的遊蕩兒としての發展を示して居るのであり、又主人公が遍歷した三都を始め諸處の花柳社會や、其の名妓太夫の描寫には、表面の華美風流を讃美すると共に、裏面の醜惡をも暴露して居るのである。かくて此の作品は、從來の假名草子と全く異なつた態度を以て、現代町人の好色生活の姿を活き〳〵と寫し出したばかりでなく、歡樂世界の明暗表裏を冷靜に觀察した點などに、作者の獨創の才を認めるのであつて、是より小說の作風が一變したのも當然である。

素材と構想

『好色一代男』の素材が、當時の町人社會の實際生活から取られて居る事は勿論であるが、其の構想には『源氏物語』や『伊勢物語』などから多くの影響を受けて居る。卽ち主人公の世之介は光源氏と昔男に擬したのであり、其の生涯を五十四の小話に書き分けたのは、源氏五十四帖と伊勢の斷片的小話集

の形式に傚つたのであり、又各卷の目錄に主人公の年齢を掲げたのも、刊本源氏の體裁を摸倣したのである。更に細部に就いて言へば、世之介の生立から晩年の大盡生活に至るまでの發展や部分的描寫には、帚木・空蟬・夕顏・若紫・須磨・明石を始めとして、源氏の卷々の筋を取り入れた所が多く、又伊勢の說話や謠曲の趣味の影響と見られる點も尠くないのである。（日本文學講座所收山口剛氏「西鶴好色本研究」參照）かくて西鶴は古典文藝の趣向を多く取つて居るのであるが、一方では假名草子の構想をも學んで居る。其の著しい點を擧げれば、世之介が諸國を遍歷して居るのは、『竹齋』『東海道名所記』『浮世物語』などに傚つたのであり、諸處の花街遊女の生活や廓の作法などを詳細に描寫して居るのは、當時流行した遊女評判記の影響である。併し西鶴は單に先行文學にのみ縋つたのではない。其の素材は彼の實地の見聞によつて得たものが多いのであり、其の鋭敏な觀察や皮肉な批判や、清新にして奇警な表現などは、彼獨得のものであつて、俳諧の修養に負ふ所が極めて多いのである。一代男は以上述べたやうな特色を發揮した爲に、近世小說史上の劃期的作品となつたのであるが、當時に於ても亦極めて驚異の眼を以て迎へられた。卽ち此の作品の初版が天和二年十一月に大阪思案橋の書肆荒砥屋から、西鶴自筆の挿繪を入れて出版せられると、忽ち一般民衆の歡迎を受けて三版を重ね、更に江戸では初版刊行の翌々年の貞享元年三月に、菱川師宣の挿繪を入れた別版（大阪版に對して江戸版と呼ぶ。）が開版せられて以來、前後三回版を重ねた。當時如何に持て囃されたかが想像せられる。

さて西鶴は『好色一代男』が意外にも好評を以て迎へられたので、貞享元年四月には『好色二代男』

好色二代男

諸艶大鑑を出し、更に貞享三年二月に『好色五人女』を、次いで同年六月に『好色一代女』を矢繼早に刊行した。『好色二代男』八冊の題名は本來「諸艶大鑑」であるが、一代男が成功した爲に、題名の肩書に「好色二代男」と記したので、却つて此の名が一般に通用するやうになつた。此の作は世之介の遺子世傳を主人公として、三都の花街に於ける情趣生活を批評的に細敍したものである。即ち一代男が一面に於て、諸國遊女評判記の形式になつてゐるのを承けて、三都の遊女評判記を書かうとしたものである。尤も廓の實狀や遊女の實話を基にして、其の裏面よりも寧ろ美點を擧げる事を主眼としてゐる所に、一代男と異なつた態度が見られる。此の作品は一代男ほどに歡迎せられなかつたらしく、從つて版を重ねる事もなかつたが、次の『好色五人女』は大いに好評を博した。

好色五人女

『好色五人女』五冊は西鶴の好色物の傑作と稱せられて居る。此の作は當時喧傳せられた巷談街說の中で、若く美しい女性の悲戀、即ちお夏清十郎（寛文元年の出來事）、樽屋おせん（貞享二年正月の出來事）、おさん茂右衞門（天和三年の事か）、八百屋お七（天和二三年に亙る事件）、おまん源五兵衞（寛文三年の事）の五つの戀愛事件を主題とする五篇の短篇小說から成つて居る。其の各卷の內題は「姿姫路清十郎物語」（卷一）「情を入れし樽屋物語」（卷二）「中段に見る暦屋物語」（卷三）「戀草からげし八百屋物語」（卷四）「戀の山源五兵衞物語」（卷五）となつて居る。而して此の五篇は、斷片的說話集の形式をとつた『好色一代男』や『好色二代男』と異なつて、それぞれ統制された短篇小說となつて居る點に、進歩を認めるのであるが、更に注意すべきは內容の特色である。即ち五篇の主人公は何れも家庭の年若い女性であつて、人情に生き境遇に支配されながら、一面には反省から起る深刻な

苦悶があり、從つて悲哀の情調が漂つて居るのは、同じ作者の從來の作に比して遙かに自然的であり、文藝としての價値も亦高い所以である。五篇の說話の中最後の一篇を除く外は、何れも悲劇に終つてゐて、とりどりに興味があるが、中でも勝れて居るのは、第三卷の「中段に見る暦屋物語」と第四卷の「戀草からげし八百屋物語」とである。前者は京の烏丸通四條下ル町の大經師意俊の妻のおさんが、手代の茂兵衛と姦通して、丹波國に駈落した所を捕へられて、磔に處せられた事件（京都所司代の判決書留に據る）に脚色を加へたもので、奇しき運命に弄ばれて知らず識らず罪惡の淵に落ちて行く、苦悶に滿ちた複雜な悲戀を巧みに描き出して居る。後者は元和二年十二月の江戸の大火に類燒した、森川宿の八百屋市左衛門の一家が、正仙院に立退いた間に、娘お七（當時十六歲）が寺小姓生田庄之介と契を結び、翌年新築が出來て歸つた後、お七は乙女心のあさはかにも、再び火事があれば男に逢へるかと思つて、我が家に放火した爲に捕へられて火刑に處せられ、庄之介は高野に上つて出家をしたと云ふ最近の事實（天和笑委集に據る）を骨子として、純情の少女の悽艷な悲劇を美しく且つ哀れに寫し出したものである。五人女に取扱はれた巷談の中の三つは、近松の淨瑠璃にも仕組まれてゐるので、從來二大文豪の手腕の比較に屢引かれてゐる。（同一題材を取扱つた近松の作は『お夏清十郎五十年忌歌念佛』『大經師昔暦』（おさん茂右衛門の巷談を仕組む）『おまん源五兵衛薩摩歌』の三篇である。）なほ『好色五人女』中の說話は其の後の小說戲曲脚本歌曲などに屢取られて、益世間に流布したのであつて、西鶴の此の作品はそれ等の中の先鞭を著けたものであり、而も種々の影響を及ぼした點に於て、近世文學史上かなり重要な地位を占めて居る。

好色一代女

次に『好色一代女』六冊は、洛西嵯峨の好色庵に隱棲する一老女が、ゆくりなく訪れて來た二人の當世男に對して、自分の經歷を物語るといふ結構から成つて居る。此の作品は『好色一代男』と對立するものであるが、彼が男子の花やかな遊蕩生活の描寫であるのと異なつて、是は堂上家の末流に生まれた美貌の息女が、十一歲の時初戀に懊惱して以來、六十五歲の老を見るまでに、愛慾の惱みと生活苦の爲に、一歩一歩と底知れぬ墮落の淵に落ちて行つた陰慘な好色生活を寫して居る。而して其の結末には、其の老女が大雲寺に參詣して五百羅漢を見た時、其の一つ一つが一生の間に馴染んだ男の顏に似て居る事に氣附いて、始めて過去の淺ましさを悟つて菩提心を起し、今の草庵に引籠つて念佛三昧に日を送る身となつた事を語つて居る。此の作は是までの斷片的描寫や短篇集と異なつて、長篇小說としての形態を具へてゐるのであるが、更に注意すべきは、作者の人生觀の進展を示して居る事である。卽ち此の作品は、環境に支配せられて淪落して行く女性一代の物語であつて、受動的な好色生活の諸相を描寫した外に、自省による懊惱から解脫への内部生活を寫し、又主人公を繞る社會環境の暗黑面をも細敍して居る。是は作者の思想の轉換を語るものであつて、西鶴の人生觀照は此の作に至つて一段の進步を示して居る。

（二）武家物

西鶴の好色物は貞享三年（四十五歲）で終り、翌年四月に刊行した『武道傳來記』から、武家物に轉じて居るのであるが、其の過渡期の作として、貞享四年正月に『男色大鑑』（八冊一名本朝若風俗）を刊行した。西鶴は是までに、女色生活の諸相を殆ど寫し終つたので、新たに男色の方面に轉じて、此の作を綴つたのである

が、注意すべきは、衆道を中心とする武士の義理を寫して居る事である。卽ち此の作は、好色物にして武家物の特質を兼ねて居るのであつて、武家物への推移を豫告して居る點に於て、注意すべき作品である。嚴密な意味に於ける武家物は、貞享四年四月に上梓した『武道傳來記』と、翌年二月に刊行した『武家義理物語』とである。『武道傳來記』八冊は作者の四十六歳の時の作品であつて、獨立した三十二の敵討物語を收めて居る。此等の說話の中には、仇を討つ事を中止するの已むなきに至つたものや、返討に遭つたものや、女の手で討ち遂げたものなど、多種多樣のものがあつて、後の仇討小說に多くの素材を供給して居る。尤も西鶴は復讐事件其のものよりも、寧ろ仇討に至るまでの動機と徑路を主として描寫して居るのであるが、概ね輕擧妄動の感があるのは缺點である。なほ其の動機を男女の愛慾や衆道の義理に置いたものが多いのは、好色物や『男色大鑑』等と相通ずる點があると言へるのである。次に『武家義理物語』六冊は二十七條の說話集から成つて居る。西鶴は前作に剛强な武士氣質を描寫したから、此の作品には更に之を擴張して、武士階級の節義を重んずる精神の諸相を寫し出さうとしたのであるが、實際には同類の仇討物語を多く取り入れて居る。其の題材の多くを、戰國時代若しくは江戸初期から取つて居るのは、元祿時代には既に典型的武士の面目を見る事が出來なかつた爲である。併し作者は到底武士的精神の眞髓を理解する者で無かつたから、其の描寫する所は、とかく形式に囚はれた當世風の武士となつてゐるのである。西鶴の武家物にはなほ如儡子の『可笑記』に傚つた『新可笑記』五冊元祿元年十一月刊がある。此の作は『武家義理物語』に見られる雜話集の性質と、敎訓的傾向とを

武道傳來記

武家義理物語

新可笑記

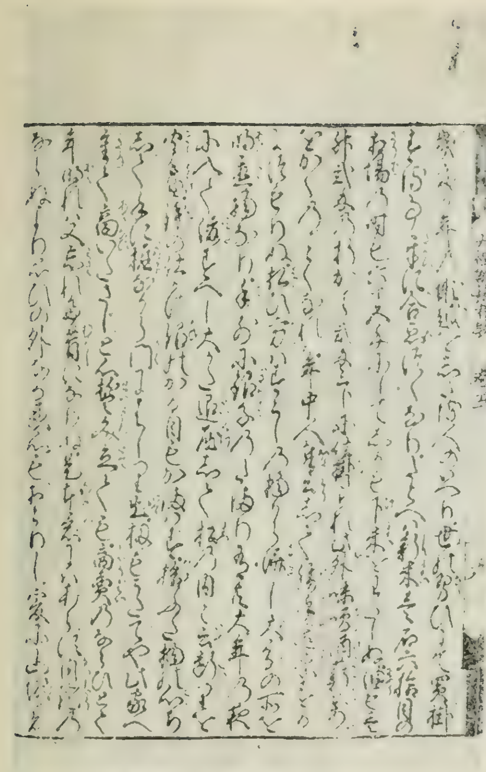
承けたものであつて、其の寫す所は前の二書のやうな武士氣質を中心とするものでなく、寧ろ一般の處世訓を主眼として居るのであるから、『懐硯』などと共に雜話集の部類に入れるのが妥當であらう。

西鶴の武家物を通覽すると、其の中心とする所は固より武士階級の武勇や節義であるけれども、其の間には意志と感情の葛藤があり、或は人情の機微を穿つて居るのであつて、此等の點に人情を解した作者の面目が現れて居る。尤も西鶴は、既に述べたやうに町人であるから、武家物は決して得意とする所で無かつたのであつて、好色物や町人物に較べると、一段と見劣りがする。かくて武家物に於て、さしたる成功を收め得なかつた彼は、間もなく筆を轉じて町人の經濟生活の實相を寫すやうになつた。西鶴四十七歳の春に上梓せられた『日本永代藏』は所謂町人物の初作である。

（三）町人物 日本永代藏

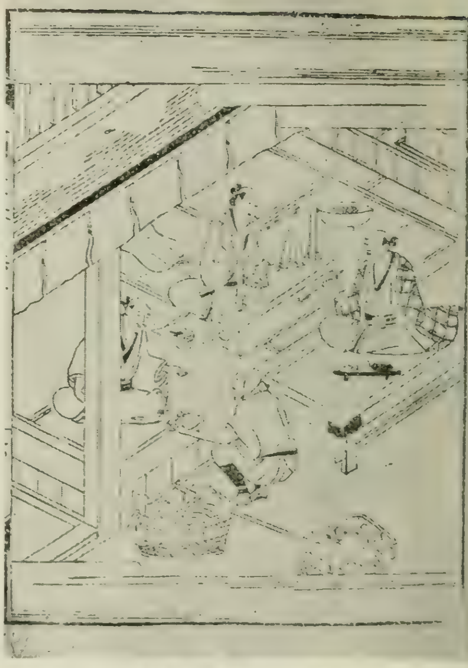
『日本永代藏』六册一名大福新長者教は『武家義理物語』の刊行せられた前月、即ち貞享五年正月に出版せられたが、成立は彼よりも後であらうと言はれて居る。初版の大阪版以外に再版本の京版江戸版がある。江戸版は各章の順序を變へて居り、又文章も假名を多くして平易にして居るが、内容は初版と同じである。なほ挿繪は吉田半兵衞の筆であると言はれて居る。此の作の題簽の下に「大福新長者教」と細書してあり、又毎丁の柱にも此の六字を表して居るのは一名であつて、寛永四年に刊行せられた作者未詳の『長者教』に對する名である。『長者教』は三人の長者が、童幼に致富の要を說き聞かせるといふ仕組から成つて居る假名草子であつて、『日本永代藏』には是から材料を得たと思はれる點もあるが、素材組織内容等はすべて西鶴獨得のものである。さて『日本永代藏』は六卷三十章から成り、町人立志傳の

形式の下に、長者分限者となる要訣を說いたものである。其の說話の筋は様々であるが、大別すれば成功談と失敗談とに分たれ、成功談は其の三分の二を占めて居る。即ち作者は此等の實例によつて、黄金の集散する實相を寫し出して、致富の心得を表と裏から教へて居るのである。而して作者が蓄財の要諦として示して居るのは、勤勉質素儉約などの如き消極的方針と、智慧才覺による積極的方針とであり、破産沒落の原因として擧げて居るのは、奢侈遊興に耽る事である。かくて此の作に示された町人成功の要旨は、概ね常識的であつて平凡な感があるが、作者の鋭敏周到な觀察力は、黄金萬能主義を奉じた元祿町人の生活と世相を遺憾なく描寫して居り、殊に才覺による成功談には、作者の非凡な經濟思想を窺ふ事が出來るのである。此の作品に取扱はれた說話は、三都を始めとして各地の事實、若しくは巷談を材料として、之に作者の脚色を加へたものであつて、土地によつて異なれる經濟生活や商人氣



大阪版日本永代藏

世間胸算用



同挿繪

質を鮮明に寫し、又說話の筋には興味ある曲折があり、各素材の配列には連鎖の妙があつて、變化に富んで居る。

次いで成つた町人物で晩年の傑作と言はれるのは、『世間胸算用』五冊元祿五年正月刊行である。自序の板下は西鶴の自筆であるが、挿繪の筆者は詳かでない。水谷不倒氏は或は蒔繪師源三郎の筆かと言つて居られる。此の作品は題號の左下に「大晦は一日千金」と記されて居るやうに、大晦日といふ特殊な日に於ける町人の經濟生活の斷面を、二十章に書き上げたものである。作者は『日本永代藏』では、主として金を支配する道を主題として取扱つたのであるが、此の作では金に左右せられる人々の悲喜劇を書いて居る。而して前作には成功談を主とし、之に失敗談を配したのであるが、此の作には貧しい者が年の瀬を越す爲の遣繰算段や、惡辣な術策などを主として寫し、其の間に金の有り餘る大福長者の有樣を挿んで、貧富の懸隔を示して居る。此の作は時を大晦日に限定してゐるから、取材の

範圍は前作に比して著しく狹くなつて居るが、其の背景は細民の家庭、質屋の店先、夜の乘合船、古道具の夜市など次々に移動して居り、現れて來る人物の素性職業なども樣々であるから、演じられる悲喜劇も亦千差萬別である。西鶴の社會觀察は此の作に至つて精細透徹を加へ、描寫は極めて鮮明で印象的であり、文章は老熟して著しく平易になつて居るのであつて、町人物中の壓卷と稱せられるのも當然である。

文例

其の隣はむつかしき紙子浪人、武具馬具年久しく賣喰にして、小刀細工に馬の尾にて仕懸けたる鯛釣も流行やめば、今といふ今小尻さしつまりて、一夜を越すべき才覺なく、似せ梨地の長刀の鞘を一つ、質屋へ持たして遣はしけるに、「こんなものが何の役に立つべし」と、手に少時も持たず投げ戻しければ、浪人の女房そのまま氣色を變へ、「人の大事の道具を何とて投げて損ひけるぞ。質にいやなら否ですむ事なり、其の上何の役に立たぬとは爰が聞所ぢや。それは我等が親石田治部少輔、亂に竝びなき手柄あそばしたる長刀なれども、男子なき故に私に讓り給はり、世にある時の嫁入に、對の挾箱の先へ持たせたるに、役に立たぬものとは先祖の恥、女にこそ生れたれ、命は惜まぬ、相手は亭主」と取付きて泣き出せば、主迷惑してさまざま詫びても肯かず。その中に近所の者集りて、「あの連合浪人はねだり者なれば、聞きつけ來ぬ中にこれをあつかへ」と何れも亭主に囁き、錢三百と玄米三升にてやうやうに濟しける。扨も時世かな、此の女も昔は千二百石取りたる人の息女、萬を花車にて暮せし身なれども、今の貧につれて無理なる事に人をねだるとは、身に覺えて口惜し。是を見るにも、貧にては死なれぬものぞかし。既に曖ひ濟みて三百三升請取り、「此玄米取りて歸りて明日の用に立たぬ」といへば、「幸これに碓あり」とて貸して踏まして歸しける。こ

れぞ世にいふさはり三百なるべし。（世間胸算用巻一）

町人物の代表作は以上述べた二部であるが、歿後に門人北條團水の手で編纂刊行せられた『西鶴織留』（六冊元祿七年三月刊行）も亦町人物中に加ふべき作品である。團水の序によれば、西鶴は町人の處世訓とする爲に、『日本永代藏』の外に『本朝町人鑑』と『世の人心』の二作を綴つて、三部書とする豫定であつたが、後の二部を完成せずして世を去つたのである。卽ち本書は其の未定稿の二部を合せて一部としたもので、卷一と卷二は『本朝町人鑑』であり、卷三以下は『世の人心』となつて居る。『本朝町人鑑』は『日本永代藏』に近い作品であつて、才覺によつて富を得た說話を集めたものであるが、『世の人心』はこれと稍趣を異にして居る。『世の人心』は其の名の示すやうに、廣く人生を見渡して、複雜多樣な世相人心を描寫したものであつて、西鶴の創作の最後の到達を示す作品である。要するに『西鶴織留』に收められた二部は未完成ではあるが、晚年の作として注意すべきものである。

其の他の作品

西鶴の浮世草子の主なるものは、以上述べた好色物・武家物・町人物の三種であるが、此の外になは說話集又は雜話集の類がある。此等は彼の作品としては重要なものでないから、今簡單に解說して置く。西鶴は『好色一代男』や『好色二代男』などに、超自然描寫を挿入して居るが、百物語の系統を引いて奇談異聞を集めたものに、『西鶴諸國咄』（五冊貞享二年刊行）『懷硯』（五冊貞享四年刊行）などがある。『西鶴諸國咄』の本名は「大下馬」と云ひ、別名を「近年諸國咄」と云つた。假名草子の怪異談に倣つて、諸國の奇談異聞を集めたものである。『懷硯』も亦これと同類の書で、旅で見聞した奇聞雜話を集めたもので、西鶴の雜話

集中最も見るべきものである。右のほかに不孝者の說話二十條を集めた敎訓物に『本朝二十不孝』（五冊一名新因果物語貞享三年刊）があり、『可笑記』の名を襲うて種々の雜話を集めたものに『新可笑記』（五冊元祿元年刊行）があり、『棠陰比事』に倣つて裁判事件の說話を集めたものに『本朝櫻陰比事』（五冊元祿二年刊行）などがある。以上は西鶴の生前に刊行せられた作品であるが、歿後に遺稿を上梓したものには、前記の『西鶴織留』の外に『西鶴置土産』（五冊元祿六年刊行）『俗つれづれ』（五冊元祿八年刊行）『萬の文反古』（五冊元祿九年刊行）『西鶴名殘の友』（五冊元祿十二年刊行）等がある。此等の中で『置土產』は大盡が遊女狂ひの爲に零落した說話を集めたものであり、『名殘の友』は俳人の逸話を集めた隨筆風のものであり、其の他は皆雜話集である。尤も『萬の文反古』は書翰文體に記した雜話集である。此の外になほ數種の作品があるが、眞僞未詳のものや、明かに後人が改作したものなどであるからすべて省略して置く。

最後に西鶴の浮世草子に共通する特徴を擧げるならば、（一）同類の題材を長く取扱ふ事なく、次々に目先の變つたものに移動した事、（二）すべての作品が人生の斷面描寫、若しくは斷片的小話の集錄から成つて居る事、（三）其の素材は主として自己の經驗又は見聞に基づくものであつて、それぞれの材料は聯想によつて連鎖せられ、一篇の結構に重きを置いてゐない事、（四）銳利な觀察と、印象的な描寫と、冷靜深刻な態度とによつて、人生の諸相を表裏に亙つて鮮明に寫し出し、人心の機微を穿つて居る事、（五）其の文章には用字假名遣文法などの過誤、若しくは不統一があり、又主格の轉換、述語の省略、特殊語の使用などがあつて、難解の弊はあるが、法格に拘らず聯想作用によつて、次々に

進展する輕妙奇抜な文體は、上記の如き形態と內容に極めて適切である事などである。而して西鶴の作品が斯かる特色を具へたのは、天賦の才による事は素よりであるが、彼の俳諧生活に負ふ所も多いのであつて、俳諧の趣味や手法の應用は、前記の各項に亙つて認められるのである。

二　西鶴以後の浮世草子

西鶴以後の作家

西鶴の歿後上方には享保の初頃まで、西鶴に私淑した作者が續々輩出して、浮世草子は極めて盛に行はれた。當時現れた浮世草子の種類は、大體西鶴の範圍を出てゐないけれども、形態に於ては斷片的說話集から、統一せられた長篇に向つて展開し、內容上には傳奇的若しくは戲曲的色調を帶びて、結構の複雜なものが多くなつた。かくて西鶴以後の作者は、新境地の開拓に努めたのであるが、才氣に乏しく、創作的伎倆を缺いてゐたから、多くは西鶴の一面を摸倣して、而も遠く及ばなかつた。此等の作家の中で注意すべきは、西澤一風・錦文流・北條團水・月尋堂・都の錦の五人である。此の時代にはなほ八文字屋本系統に屬する二三の作家があるが、此は別に述べる。

西澤一風

西澤一風（享保十六年歿六十七歲）は大阪の書肆西澤太兵衛の子で、通稱を九左衛門と云ひ、作者としては初め與志又は朝義と稱し、後に一風と改めた。父の家業を繼いで正本屋を營んでゐたが、元祿の末頃から西鶴や近松門左衛門に刺戟せられて、浮世草子並に淨瑠璃の作者を兼ねるやうになつた。浮世草子の作者としては、好色物と敵討物を書いた。好色物の著名な作は『風流御前義經記』（八册元祿十三年刊）、『女大名丹前能』（八册元祿

十五年刊『風流今平家』六冊元祿十六年刊『色縮緬百人後家』五冊一名後室色縮緬享保三年刊等であり、敵討物の作には『傾城武道櫻』五冊寶永二年刊行と『亂脛三本槍』六冊享保三年刊行の二部がある。初めの二部は西鶴の好色物を摸倣した作であるが、構想上に戰記物語を應用し、且つ能狂言・歌舞伎・淨瑠璃などの趣向を交へたものである。次の『色縮緬百人後家』は、十人の後家の樣々な戀を寫した斷片的說話集であつて、彼の好色物中の代表的作品である。又『傾城武道櫻』は赤穗義士の事件を好色物に應用して、遊女の復讐を物語つた作であり、『亂脛三本槍』は當時巷談として有名な、三つの妻敵討を脚色した作である。(『亂脛三本槍』の第一話は享保二年七月に大阪の高麗橋で起つた著名な事件を取扱つたもので、作者未詳の浮世草子の『女敵高麗茶碗』『雲州松江の鱸』や近松の作『槍權三重帷子』の題材も是と同じである。)要するに一風は主として西鶴の好色物を基にして、趣向を奇拔にし、筋を複雜にして、專ら變化を圖つたのであるが、其の弊としては技巧の末に走つて、實質の墮落を招いたのである。尤も小說に歌舞伎や淨瑠璃の趣向を取入れる事は、一風などから始まつたのであつて、是より劇と小說が接近した事は注意すべき現象である。

錦文流

錦文流生歿未詳は大阪の人で、俳諧を西鶴に學んで號を錦頂子と云ひ、著作には難波誹諧僧文流と署名して居る。彼は後に淨瑠璃と浮世草子に筆を染めたのであつて、淨璃瑠は九篇許り傳はつて居り、草子は五六篇遺つて居る。浮世草子の著名な作は『棠大門屋敷』五冊寶永二年刊行『當世乙女織』七冊寶永三年刊行『熊谷女編笠』五冊寶永三年刊行の三部である。『棠大門屋敷』は大阪の有名な富豪淀屋辰五郎が驕奢を極めた結果、公儀の咎を蒙つて闕所追放に處せられた當時の事件を借りて、江戸屋與茂九郎初五郎父子の好色生活を寫

したものである。（同じ題材を取扱つた浮世草子に福富言粋（匿名）の『長者機嫌袋』、江島其磧の『風流曲三味線』があり、又淨瑠璃には近松の『淀鯉出世瀧徳』等がある。）從つて此の作品は好色物に屬するのであるが、實話を骨子とし、其の間に金鷄の精を主謀者とする寶物の詮議や、珍齋の靈の祟などの如き怪異的分子を交へて、興味本位の讀物とした結果不調和になり、從つて全篇の統一が破れて居る。次の『當世乙女織』は西鶴の好色物に倣つた斷片的說話の集合である。只異なる點は、假設人物の問答に託して、遊女と地女の比較論難を中心として居る事であるが、是も假名草子や西鶴の作品に先例があるのであり、連ねられた說話にも特色とすべき點がないのであつて、勝れた作とは言ひ難い。最後の『熊谷女編笠』は『棠大門屋敷』と相並んで彼の代表的作品である。此は殆ど同時に刊行せられた森本東鳥の『京縫鎖帷子』と共に、妻敵討を取扱つた最初の作として知られて居る。此の二作は共に刊行に先立つ僅か二三箇月前、卽ち寶永三年六月に、京の堀河で行はれた妻敵討を題材としたのであるが、鎖帷子が實說の通りに進行して居るのに對して、女編笠は空想から成る說話に多くの筆を費して、中心の事件から離れて居り、且つ筋の運び方に不自然な所があつて一段と劣つて居る。（是と同じ題材を取つた淨瑠璃には、翌年に成つた近松の『堀河波の鼓』があるが、是はさすがに右の二作に比して遙かに勝れて居る。）以上述べた所によつて明かであるやうに、錦文流も亦一風と同じく、主として實說を骨子として、虛實相半ばした娛樂本位の讀物を書いたのである。併し創作の才に於ても、文章に於ても、一風には及ばなかつた。

北條團水

北條團水（正徳元年歿四十九）は京都の人で、もと談林派の俳人である。西鶴を師として俳諧を學び、三十歳の頃までに數種の俳書を刊行した。西鶴の歿後には大阪に移つて、師の門弟の世話をする傍師の遺稿を整理して、『西鶴置土産』以下數種を上梓し、又此の間に師の作風を學んで、浮世草子の作家に轉じた。西鶴に追隨した作者の中で、最も多く其の感化を受けたのは團水であつて、其の閱歷も亦相似て居る。浮世草子の作で署名のある最初のものは、寶永三年に成つた『晝夜用心記』であつて、爾來主として教訓物・怪談物・犯罪物などを刊行した。其の著名な作を年代順に擧げれば、『晝夜用心記』（六册寶永四年刊行）、『武道張合大鑑』（五册寶永年間刊行）、『一夜船』（五册正徳二年刊行）、『日本新永代藏』（六册正徳三年刊行）等である。『晝夜用心記』は西鶴の『本朝櫻陰比事』に倣つて、詐欺事件に關する說話を類聚したもので、題名は民衆に對する警告の意味から出て居る。『武道張合大鑑』は師の武家物の感化を受けた作で、浪人俠客などの鞘當詞咎などから喧嘩や刄傷を引起した說話を集めたものであり、『一夜船』（後に怪談諸國物語と改題す）は『西鶴諸國咄』の例に倣つて、京都から大阪に下る一夜舟で、六十六部が語る諸國の異聞奇事を書き附けるといふ趣向のもとに、主として怪奇談を集めて居る。最後の『日本新永代藏』（一名今世長者鑑）は其の名が示すやうに、體裁內容筆致等すべて『日本永代藏』を摸倣した作であるが、教訓的色彩を帶びて居る所に特色がある。要するに團水は西鶴の作風を忠實に蹈襲した人である。好色物を書かなかつたのと、教訓的傾向が著しいのは、共に質實な性格を反映して居るのである。

月尋堂

月尋堂は本名も閱歷も明かでない。水谷不倒氏は『在岡逸士傳』といふ書に據つて、姓を藤岡、號を

月尋と云つた大阪の俳人で、國學を契沖門下の野田忠粛に學び、俳諧を乾貞恕の門人青木貞悟(春澄)に受けた事を發表せられた。(新撰列傳體小說史前篇)併し此の月尋が、果して浮世草子作者の月尋堂と同じ人であるか否かはなほ疑問である。月尋堂は其の作品に北京散人と記し、又別號を看花齋と稱してゐる。作者として活躍した時代や、其の作品の種類傾向などは、大體團水と同じである。其の注意すべき作は『鎌倉比事(けんさうひじ)』(六册寶永五年刊行)『子孫大黒柱』(六册寶永六年刊行)『今様二十四孝』(六册寶永六年刊行)『儻偶用心記(てれんようじんき)』(五册正德三年刊行)である。『鎌倉比事』は『棠陰比事』や『本朝櫻陰比事』に倣つた作で、鎌倉の執權北條時頼・義時・泰時等が善政を布き、公事訴訟を公明に裁斷した說話を集めて居る。『子孫大黒柱』と『今様二十四孝』は、共に西鶴を摸倣した教訓物である。卽ち前者は『日本永代藏』に倣つて、町人の立身成功談を集めたものであり、後者は『本朝二十不孝』の逆を試みたもので、支那の二十四孝に對して、我が國の孝行談二十四條を收めて居る。最後の『儻偶用心記』は詐欺に關する說話を集めたもので、「てれん」は手練手管の義であり、用心記は團水の『晝夜用心記』の名を蹈襲したのである。月尋堂は西鶴の作風に私淑すると共に、團水の影響をも受けたのであつて、形式內容には特色とする程のものは認められない。併し文章は巧みであつて、其の平明暢達の筆致は八文字屋本に近い。

西鶴以後に現れた作者が、悉く西鶴の後塵を拜した頃、獨り異彩を放つたのは都の錦である。其の本名並に略傳が明かになつたのは、饗庭篁村氏が明治二十九年に、『早稲田文學』に揭げられた「小說家の人物一(篁村著『雀躍』に收む)」と題する論文中に、都の錦が寶永元年十一月に獄中から差出した訴狀を引いて、

閲歴を述べられて以來の事である。此の訴狀によれば、彼はもと播磨國佐用郡の鎭守佐用姫神社の神主を勤めた八田（上宮内少輔從五位下）光風といふ者である。二十一歳の時上京して、伊藤仁齋の門に入つて儒學を修め、又北村季吟に就いて歌道を學んだが、偶惡友に誘はれて島原に通つた爲に、貯へ置いた金銀を遣ひ果し、遂に惡心を起して、母方の祖父廣幡家（母は廣幡大納言豐忠の女であると云ふ。）の所持する町屋敷を密かに賣り拂つた爲に、親族縁者の勘當を受けた。かくて元祿十四年二十七歳の春には佛道修行を志し、山科の大宅寺の月波和尙に參禪して、宍戸鐵舟（其の祖が常陸宍戸郡宇都宮八田の流であるのに據る。）と稱した。彼が著作に從事したのは此の頃であつて、生活の資を得る爲であつた。其の後志を立て、知人を賴つて江戸に下つたが、知人は類火の厄に遭つて行方不明であつたので、町々を徘徊する中無宿改に捕はれて、薩摩の山ケ野金山に流された。然るに彼は學問の外に弓術にも長じてゐた爲に同囚の憎みを受け、遂に迫害に堪へずして脱獄したが、再び捕へられて獄に投ぜられ、餓鬼道の辛苦を嘗めた。訴狀を差出したのは此の時であつて、時に年三十であつた。其の後同國鹿籠（かご）の金山に移され、寶永七年の頃まで生存してゐた事は、饗庭氏の考證によつて知られるが、晩年の事は一切不明である。彼は其の作品中に、頻りに自家宣傳を試みた程の人であるから、此の訴狀を其の儘信用する事は如何かと思はれるが、奇しき運命に弄ばれた事は事實であらう。

都の錦の浮世草子

都の錦は其の作品から察すると、相當學殖があつたやうであり、又彼の著作と認められてゐる『元祿太平記』を見ると、西鶴を貶して自ら高くとまつた人であるから、作風は他の西鶴の亞流に比して、

大いに面目を異にして居る。彼の著作は元祿十四年から十六年の春までに上梓せられたもので、作者としての生活は短日月で終つて居る。此の間に刊行せられた浮世草子は『元祿曾我物語』（六冊元祿十五年刊）『御前伽婢子』（六冊元祿十四年刊）『沖津白波』（五冊元祿十五年刊）の三部であるが、此の外になほ注意すべき著作が四種ある。即ち『風流日本莊子』（五冊元祿十五年刊）『風流神代卷』（六冊元祿十五年刊）『元祿太平記』（八冊一名讀賣太平記元祿十五年刊行）『風流源氏物語』（六冊元祿十六年刊）の四部である。先づ浮世草子系統の作に就いて解說しよう。『元祿曾我物語』は青山因幡守の家來、石井宇右衞門政春の子源藏半藏の兄弟が、元祿十四年五月に伊勢の龜山城外で、父兄の仇赤堀源左右衞門を討つた事件を脚色した作で、長篇敵討物の流行の魁となつたものである。次に『御前伽婢子』は了意の『伽婢子』に傚つて、奇聞の外に巷談をも集めたもので、中には當時の事實談をも傳へて居る。又『沖津白浪』は盜賊に關する古今の長短樣々な說話を集錄した作である。此等は假名草子と浮世草子との中間を行つた作であつて、教訓草子の特徵を具へ、作者の衒學的態度は隨所に認められるのであつて、到底西鶴に對抗し得るものではない。尤も文章は七五調を交へ故事詩歌を引用し、平易流暢であつて巧みである。

都の錦の雜著

都の錦の浮世草子は右に述べたやうに、新味を缺いて居るのであるが、隨筆や古典の俗譯を試みた作には、却つて注意すべきものがある。即ち『風流日本莊子』は『莊子』の寓言に傚ひ、神道や儒教の立場から世相人情の批評を試みたものであり、『元祿太平記』は元祿時代の學者・作家・書肆・役者・遊女などを品評した作であつて、共に作者の學識閱歷性格などを反映せる點に興味がある。又『風流神代卷』

は神代紀を假名文に譯し、且つ卑俗化したものであり、『風流源氏物語』は桐壺・帚木二帖を浮世草子風に俗譯したものであつて、共に古典俗譯の嚆矢である。其の後延寶年間に梅翁なる者が、奥村政信の挿繪を入れて『若草源氏』『雛鶴源氏』『紅白源氏』（各六冊以上桐壺から花宴までを譯して居る。）等を刊行したのは、此の『風流源氏物語』に倣つたものである。而して此等は後の柳亭種彦作『偐紫田舍源氏』に、多大の刺戟を與へたであらうと思はれる。要するに都の錦は、大阪趣味の浮世草子に對して、京都風の浮世草子を書いたと言ひ得るのであるが、創作的才能を缺いてゐたから、其の作風には殆ど獨得の長所と言ふべきものは無かつた。

三　八文字屋本

前に記した西澤一風以下の作家は、斬新な趣向と複雜な脚色とによつて、主として興味本位の草子を作つたのであるが、文學的價値は時を經るに從つて愈低下したのである。此の間にあつて浮世草子に新生面を開いたのは八文字屋本であつて、其の代表的作者江島其磧が始めた所謂氣質物に至つて、西鶴に次ぐべき作品を見たのである。八文字屋本は内容から云へば、浮世草子に屬するのであるが、其の體裁は從來行はれた美濃形大本と異なつて、初めは二ツ切横本であり、其の出版書肆は最初八文字屋であつた爲に、特に此の名稱で呼ばれたのである。八文字屋は京都麩屋町誓願寺下ルにあつた古い書肆であつて、貞享の頃には正本や淨瑠璃本などの出版元として、山本九兵衛・鶴屋喜右衛門と肩を

並べるに至つた。而して八文字屋本を出版したのは、二代目安藤八左衛門（延享二年歿年八十）であつて、號を自笑と云つた。彼は初め近松の狂言本を發行して名聲を高めたが、元祿十二年に體裁內容共に完備せる役者評判記『役者口三味線』を出版して好評を博し、更に元祿十四年十月に、浮世草子『傾城色三味線』（作者江島其磧）を刊行していよ〳〵知られたのであつて、是より八文字屋は役者評判記と浮世草子（即ち八文字屋本）の一大版元として三都に喧傳せられた。

役者口三味線と傾城色三味線

役者評判記はもと明曆頃から流行した遊里細見、即ち遊女評判記に源を發して居るのであつて、野郎歌舞伎の頃は主として名優の容姿態度などの品評を載せてゐたが、元祿期になつて歌舞伎が發達するにつれて、更に技藝上の批評を加へるやうになつた。此の評判記が作者（江島其磧）畫工（西川祐信）版式の三拍子揃つて完備したものになつたのは、前記の『役者口三味線』が最初であつて、其の形式を更に浮世草子に應用したのが、即ち『傾城色三味線』である。『傾城色三味線』（五冊元祿十五年刊）は遊里細見及び役者評判記の形式に倣つて、各卷頭に三都を始め各地の遊里に於ける名妓の名寄を揭げ、其の次に遊里遊女に關する種々の小話を載せたものである。其の記述は大體西鶴の好色物を摸倣して居るのであるが、特に人情の描寫に努め文章は流麗であり、なほ趣向の方面には、歌舞伎や淨瑠璃の影響を受けて居るのである。かくて此の作品は形式內容共に時代の趣味に適合した爲に、忽ち人氣を集めたのであつて、是より「傾城」又は「三味線」の名を附した作品が續々刊行せられた。

江島其磧

さて『傾城色三味線』には作者の名を記してゐないが、江島其磧が作つた正德二年刊行の『野傾旅葛(やけいたびつゞら)』

籠』や、同年板行の『役者目利講』などに、自作である事を記して居るから其磧の作である。江島其磧（元文元年歿年七十）は本名を江島茂知、通稱市郎左衛門と云つた。先祖は京都京極通り誓願寺門前で大佛餅を鬻ぎ、巨萬の富を積んだ江島屋である。其磧は若い頃から遊里劇場に出入して蓄財を蕩盡した後に、從來の通人生活の體驗に基づいて淨瑠璃本を書き、次いで役者評判記や浮世草子の作者になつたのである。彼が八文字屋の爲に書くやうになつたのは、初め松本治太夫の爲に作つた淨瑠璃本を、かの店から出版せしめた因緣によると云はれて居る。

好色物

『傾城色三味線』を出版して成功した八文字屋自笑は、引續いて同類の浮世草子を刊行した。其の主なるものは『風流曲三味線』（六冊寶永三年刊行）『野白內證鑑（やはくないしようかがみ）』（五冊寶永七年刊行）『寛濶平家物語』（六冊寶永七年刊行）『傾城傳授紙子』（五冊寶永七年刊）『傾城禁短氣（けいせいきんたんき）』（六冊正德元年刊行）等である。此等の中には署名の無いものもあるが、多くは八文字屋自笑の名を記して居る。併し實際は其磧の作品である事が略確實にされて居る。『風流曲三味線』は老翁と老婆の物語に託して、男色女色に關する種々の話を記したもの、『野白內證鑑』は野郞と白人の情話を三十二卦に配したもの、『寛濶平家物語』は『好色一代男』の世之介の遺子の好色生活を『平家物語』によつて脚色したもの、『傾城傳授紙子』は赤穗義士の事件を好色物風に脚色したもの、『傾城禁短氣』は野郞遊女白人等の優劣や生活を、樣々の例話で示したもので、以上は總べて好色物である。而して此等の作が斷片的小話集から漸次長篇物語に發展して居る事は、同時代に現れた他の西鶴摸倣者の作品と同樣である。

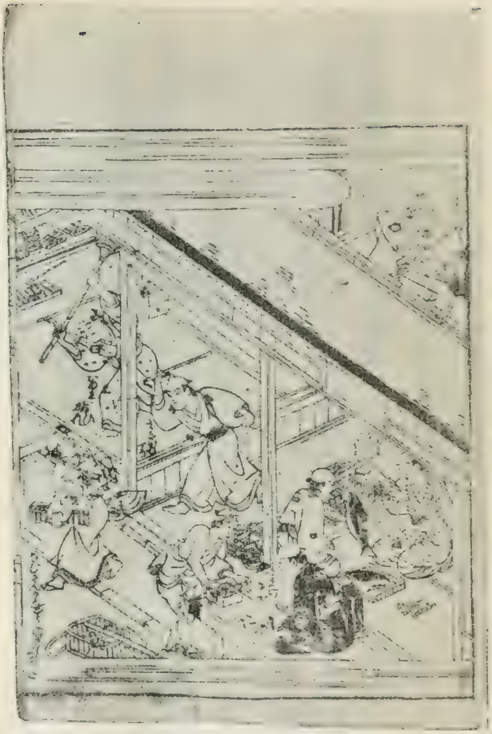
其磧と自笑の離合

其磧は初め其の作品に署名する事を避けてゐたから、眞の作者は世に知られずして、一般には八文字屋自笑の作とのみ考へられてゐた。併し八文字屋本が世の歡迎を受け、自笑の名が喧傳せられるにつけて、其磧と自笑の間に不和を生じた。かくて其磧は正德二年頃から八文字屋から離れて、家督を其の子に讓つて、江島屋市郎左衛門と名乘らせ、其の書店から自作の評判記と浮世草子を出版させた。江島屋本は初めは八文字屋本の名聲に壓せられて、却つて不況であつたが、漸く眞價が世に認められるやうになつた頃、偶享保三年に八文字屋との和解が成つた。爾來其磧の作は其磧自笑兩人連署で、再び八文字屋から出版せられて、其磧の歿するまで三十年に及んだ。自笑も元來多少文筆の才があつたので、其磧と分離してゐた頃には多くの自作を發行したのであるが、世評の高かつたのは、やはり其磧の筆に成つたものであつた。

其磧の氣質物

其磧は元來文才に長じてゐた上に、放蕩の爲資產を盡した人であるから、よく世態人情に通じてゐた。從つて彼は斷えず新機軸を出したのであつて、其の作品の種類の如きも極めて多方面に亙つて居る。卽ち前に述べた好色物以後の作品には『商人軍配團』五冊享保十八年刊『商人家職訓』五冊享保七年刊行等の町人物があり、『風流軍配團』五冊享保九年刊行『御伽平家』五冊享保十四年刊『兼好一代記』五冊元文二年刊行等の時代物があり、其の他御家騷動物や、當時好評を博した歌舞伎・淨瑠璃を題材とした作などがある。併し最も見るべき作は彼が創めた所謂氣質物である。其磧の氣質物の數はかなり多いのであるが、其の中でも勝れて居るのは、『世間子息氣質』五冊正德五年刊行『世間娘容氣』五冊享保元年刊行『浮世親仁形氣』五冊享保五年刊行『世間手代氣質』五冊享保十五年刊の四種である。

尤も最後の作品は長篇物になつて居り、內容も稍劣つて居るから、代表的作品としては其の前の三部を擧ぐべきである。「氣質」を標題とした其磧最初の作品には、正德二三年頃に出版した『寬濶役者片氣』があるが、評判記風の好色物であるから、眞實の氣質物は『世間子息氣質』を濫觴とする



世間息子氣質插繪
（江戸文學圖錄による）

のである。此の作は其磧が八文字屋に對抗してゐた頃に苦心して作つたものであつて、始めて其磧の名を署名して居る。其の內容は當時の放蕩子息の樣々な型を、一卷に三つづつ合計十五話に寫し出したものであるが、單に若者の墮落の徑路や不都合な料簡を寫したばかりでなく、其の原因を親の教育の缺陷に歸して、人の親たる者を誡めて居る。次の『世間娘容氣』は每卷の目錄に「子息氣質追加」とあるやうに、前作の續篇として、我儘に育つた娘の樣々な性癖缺點を誇張して示したもので、是にも世の親たる者に警告を與へる態度がある。又『浮世親仁形氣』は前記の作品の趣向を更に其の親に應用し

た作であつて、是には十人十色の老人の惡癖（酒色・金錢・殺生・信心・相撲・兵法等に凝る事）が原因となつて、様々な家庭悲劇を生む話を書き連ねて居る。此の作は前の二種から凡そ二十年後に成つたものであるから、其磧の筆も著しく圓熟して居り、人情も細かに寫されて居る。今文例として卷頭の一節を抄出して置く。

善遊者は溺れ、善騎者は墮つ。おのおの其好する所を以て、反て自禍をなすといへり。誠に川だちは川ではつるといふ世話のごとく、己が好る道によつて身を果すは、人間のならひぞかし。出所は江州守山の物作りの纔なる草の屋にそだち、後家親をあなどり我儘にくらし、小力あるにまかせて農業の透には隣郷の若いものと度々の喧嘩、所のさわぎとひとりある母に疎まれて、都の姥をたのみに夜ぬけにして京へのほり、荒働きの奉公をのぞむも、生れつき堅くして、岩神通りの米屋にありつき、年をかさねて奉公にわたくしなく、年來の給銀のばし溜た八百目を望姓に宿ばいり、色氣の爲にはあらで、挊の便りに我にたよとしき深山木のやう成、身にかまはぬ手達者なる女房を、仲人なしにつれて來て、夫婦もろかせぎに身體を踏かためたるからうすの拍子よく、商ひ事に幸有て、米は夜の中にあがり、夢みたやうな成分限に成て、次第に吹つける仕合の風、相場物に利を得て六十八の年、今長者といはるるほどの身上、一子久左郎利發者なれば世帶をわたし、その身は法體して是休と改め、布の十德は著れども、むかしぬき入し額、角大師をみるが如く、今に角の跡すさまじく、眉間尺の法師になれる體相、心も此ごとく、世の人に金持とあがめられて、都のよい衆と參會すれ共、若い時からの男伊達形氣はやまず、折ふしは端手成物いひ、むす子の久左郎はよい時に生れ出で、

若旦那ともてはやされ、世間ひろく公儀をつとむるにしたがひ、年に似合ぬ親父が力自慢うたてく、内證で異見すれどいかな〳〵聞入ず。久五郎が大鼓稽古して、指の先を打破りて血の出るを見て、親父大きに腹立し、同じ疵を蒙るならば、いさぎよい口論をしてこそなれ、役にもたたぬ鼓に打負て、親のまんぞくに産付し身に、疵を付るは無分別の第一、鼓の皮を買手間で、筋鐵の入た樫木の杖か、鼻捻を求ておけば、町所の喧嘩の爲にもよいにと、七十にあまつて子供への教訓。（浮世親仁形氣　卷一）

要するに其磧の氣質物は、滑稽諷刺の中に教訓を寓した所に其の特色があるのである。併し彼は惡習惡癖の一面を誇張して、興味本位の說話を書いたのであるから、其の趣向脚色はとかく單調に流れ、世態人情の描寫は概ね不自然になつて居る。氣質物は同じ態度にあつて、只觀察の方面を變へさへすれば、幾らでも書き繼いで行かれる性質の作品であるから、其磧の後にも之に倣つて、母親・姑・大盡・傾城・妾・旗本・俳人・醫者等の氣質を寫したものが續出したのであつて、浮世草子の末期は氣質物によつて代表せられた。

八文字屋本の衰退

多田南嶺

八文字屋本は後期の初頃までなほ引續いて相當に行はれた。今便宜上寶曆頃までの八文字屋本の事を記して置く。其磧の後を承けて執筆した作者は多田南嶺（寛延三年歿五十三）である。彼は名を義俊（一に義寛）と云ひ、桂秋齋南嶺と號した。元來神道有職故實などに通じた學者であるが、又俳諧を嗜み、戲作をも試みた。元文元年に其磧が歿して後、八文字屋の委囑を受けて八文字屋本を書いたが、自ら名を記す事を好ま

ずして、自笑又は其の子の其笑の名で出版した。従つて確かに南嶺の作と決し難いものもあるが、『武遊雙級巴（ふたつ）』（五冊自笑作元文四年刊）『女非人綴錦（つづれにしき）』（五冊自笑其笑作寛保二年刊）『鎌倉諸藝袖日記』（五冊自笑其笑作寛保三年刊）などは南嶺の作であらうと言はれて居り、又『世間母親容氣』（五冊南圭梅嶺作寶暦二年刊）は匿名で刊行したものである。此等を見ると其磧の流を汲んだ氣質物、若しくは歌舞伎・浄瑠璃の改作や、其の影響を受けたものであつて、何れも創意を缺いて居る。併し文章に於ては、さすがに學殖があつただけに、其磧を凌駕して居る。かくて八文字屋本は其磧の歿後衰運に向つたのであるが、注意すべきは漸次讀本風になつた事と、滑稽趣味を含むものが多くなつた事である。延享二年に自笑が歿し、寛延三年に南嶺が世を去つて後、八文字屋本は愈衰亡に近づき、更に明和三年に八文字屋三代目の瑞笑が卒した翌年に、版權は大阪の書肆に移つた。明和四年以後は上方に二三の作者があり、江戸の書肆からも八文字屋本系統の作を出版したが特色がなく、見るべきものは無かつた。明和の頃棹尾の作者として異彩を添へたのは上田秋成であるが、秋成に就いては別に後期第六章に述べる。（一〇五九頁參照）

第八章　浄瑠璃の發達

一　古浄瑠璃

操芝居の起原

操芝居（人形）は歌舞伎と共に、武家階級の能狂言に對する平民社會の娯樂劇として、文祿慶長の頃に起り、

互に影響しながら發達して、元祿享保の頃に大成せられたのである。操は淨瑠璃・三味線・人形の三要素から成る樂劇であつて、人形は遠く平安時代の傀儡子に源を發して居る。傀儡子は『和名抄』『新猿樂記』『雲州往來』『今昔物語集』等に見えて居るが、稍詳細な事は大江匡衡の『傀儡子記』(群書類從所收)に記されて居る。其の記事によれば、傀儡子は當時諸國を漂泊した異俗の旅藝人であつて、男子は弄劍弄丸其の他樣々な手品を演じ、又木人桃梗(木偶土偶)を舞はし、女子は顏に脂粉を施して種々の俚謠を歌ひ、時に行人の枕席に侍する風があつたのである。傀儡子は元來遊牧の民であるが、其の後宿驛や社寺の附近に定住したのであつて、宿場に定著した女子はやがて遊君の群に投じ、社寺の賤役に從事した男子は淨土宗の行者と手を携へて、專ら佛法宣傳の用を勸めるやうになつた。傀儡子の間に一種の祭神の風があつた事は、『傀儡子記』に見えて居るが、其の因緣によつて攝津の西宮の夷宮に定住した一部の者は、卽ち夷昇(夷舞しとも云ふ)となつたのであつて、西宮の操はこれから起つたのである。夷昇は戰國時代から桃山時代にかけての頃、一種の大道藝として著しい發達を遂げたが、當時は笛太鼓で囃し、俚謠を歌つたのである。これが淨瑠璃三味線と提携して、樂劇の成立を見るに至つたのは文祿慶長の頃である。

淨瑠璃の起原

淨瑠璃の起原に就いては、小野お通(傳記未詳)が織田信長の病を慰める爲に、牛若丸と淨瑠璃姫との戀物語を綴つた『淨瑠璃物語』卽ち『十二段草子』に節をつけて語つたのが最初であつて、淨瑠璃の名もこれから起つたと傳へられて居る。併し柳亭種彥の『還魂紙料』及び『足薪翁記』に引いて居るやうに、『宗

長日記」享祿四年の條に、駿河の宇津山で小座頭を招いて淨瑠璃を語らせた事が見えて居り、又天文九年十月に成つた「守武千句」(一名飛梅千句)の中に、

いとどだに座頭まがひの杖つきの
　淨瑠璃かたれともし火のもと
こよひはや時は丑わかふけはてて

の如き句がある。此等によれば、淨瑠璃は信長の頃より更に古く、後奈良天皇の享祿天文の頃既に僻地にまで行はれてゐたのであり、又其の物語の中に、牛若丸の說話を題材とした作品があつた事を知るのである。なほ近來の研究によれば、淨瑠璃は室町時代の中頃に發生したもので、淨瑠璃の名は當時特に信仰せられた藥師如來、卽ち淨瑠璃光如來の本緣を語つた語物から起つたのであつて、現存する「淨瑠璃物語」の如きは其の代表的な作として、後世に傳はつたのであらうと言はれて居る。(日本風俗史講座所收黑木勘藏氏「淨瑠璃史要」參照) 淨瑠璃は初め琵琶に合せて語られ、或は扇拍子で素語りにせられたのであつて、是が急激な發達を遂げたのは、伴奏樂器に三味線を用ひるやうになつてからである。三味線は永祿年間に始めて和泉の堺港に渡來したものであつて、初めは琵琶法師の間に研究せられた。而して之を淨瑠璃に用ひた最初の人は澤住撿校であり、更に平曲を取入れて淨瑠璃節の基礎を造つたのは、瀧野勾當で文祿三年の事であると傳へられて居る。

淨瑠璃は以上述べたやうな徑路を經て發達したのであるが、其の後文祿慶長の頃になつて、澤住瀧

野兩人の手を離れ、西宮の夷舁と提携して、始めて操芝居の完全な成立を見たのである。操芝居の興行が始まつたのは、澤住撿校の門人目貫屋長三郎（後に淡路掾を受領した）が、西宮の夷舁引田某と提携して以來の事であると云はれて居るが、一方には瀧野勾當の門人監物某（後に河内目を受領した）及び京の次郎兵衛も亦引田某を語らひ、人形芝居を始めて興行したと傳へられて居る。

説經淨瑠璃

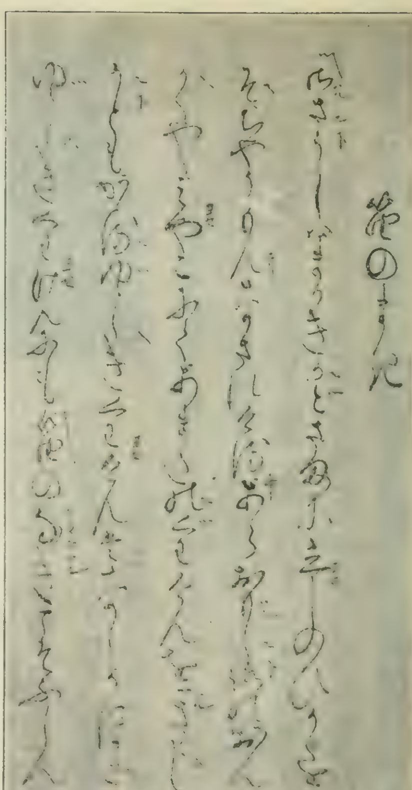
淨瑠璃と共に室町時代から民衆娛樂として流行した語物に説經淨瑠璃がある。もと簓（ささら）を摺つて調子をとつてゐたが、三味線の渡來以後は淨瑠璃と同じやうに、之に合せて語るやうになり、慶長の末頃には説經座の創立を見るまでになつた。説經節が三都に流行したのは、寛永から寛文に至る間であつて、寶永正德の頃には義太夫節の爲に壓倒せられ、其の後は地方に於て餘命を繋ぐに過ぎなかつた。其の語物は主として佛菩薩の緣起由來を説いたもので、淨瑠璃の創始期には説經の正本を借りたものが少くない。現存する『苅萱』『三莊太夫』『小栗判官』『しんとく丸』等は、當時の説經節の正本の著名なものである。

創始期の作品

操芝居が興つた慶長頃は天下が漸く太平に向つた時であるから、新時代の平民劇として忽ち歡迎せられ、天和の頃には其の發祥地京都を中心として、江戸大阪は素より遠く金澤長崎鹿兒島にまで流行するやうになつた。慶長から天和に至るまでの三十年間は、操劇の創始期と呼ばれて居る。此の頃上演せられた淨瑠璃で文獻に見えて居るのは、『十二段草子』『牛王姬（ごわうのひめ）』『阿彌陀胸割（あみだのむねわり）』『鎌田政清』等である。『鎌田政清』は後世傳はつてゐないが、其の他は現存して居る。尤も『十二段草子』は享祿天文頃のものであるか、後世改作せられたものであるか詳かでない。

十二段草子

『十二段草子』は牛若丸が金賣吉次に隨つて奥州に下る途中、三河の矢矧の宿の長者の女淨瑠璃姬と契つた後、駿河の吹上の濱で病に罹り、吉次に見捨てられて瀕死の狀態に陷つてゐた時、源氏の氏神正八幡の靈夢によつて、之を知つた姬に看



節附「淨瑠璃姫」(山岸徳平氏藏)

護せられて恢復し、やがて別を惜しんで下向する事を物語つて居る。題名は十二條から成つて居るのに據る。『牛王姫』も亦判官の若い頃の物語であるが、これには鎌田政清の妹牛王姫の牛若丸に對する戀が遂げられないばかりでなく、牛若丸の危難を救つた爲に責め殺される節義を物語つて居る。以上述べた作品よりも更に勝れて居るのは『阿彌陀胸割』である。其の梗概は左の通りである。

阿彌陀胸割

天竺の毘舍利國にかんじ兵衞と云ふ長者があつて、榮華に驕り惡行が積つて魔道に墮ちた。其の遺子の天壽姫(七歳)とていれい(五歳)は、釋迦の慈悲によつて命を助けられ、阿彌陀佛の夢のお告によつて、淨土の大滿長者の許に身を賣つた。時に長者は一子松若の不治の病を癒す爲に、同じ相性の女の生膽を求めてゐたが、偶天壽姫が選ばれた。姫は父母の罪障消滅を祈る爲に、阿彌陀如來を安置すべき金色堂の建立を代償として犧牲になる事を約し、やがて成つた御堂に入つてうと〳〵としてゐる



阿彌陀胸割挿繪

中に、長者が差向けた武士が來たので、自ら脇腹を割き生膽を取り出して捧げた。松若は之を呑んで難病から救はれたので、長者は姫を葬らうとして御堂に行つて見ると、阿彌陀佛の胸から膝にかけて血潮が流れてゐた。長者は佛が姫の身代りに立たれた有難さに感激して伏し拜み、やがて姫を松若に嫁がせ、弟のていれいは出家して佛に仕へたと云ふのである。

卽ち此の淨瑠璃は、佛教の因果應報と佛の無限の慈悲とを示す爲に作られたもので、阿彌陀佛の身代りが作意の中心となつてゐる事は勿論であるが、なほ是に長者說話や難病平癒の犧牲說話などを取入れて、筋を複雜にしたものである。かくて此の作は趣向の變化に富み、文章も極めて流麗であるので、古淨瑠璃中の傑作の一に數へられて居る。

操劇の創始期に用ひられた淨瑠璃には、舞の本から採つた物が少くなかつたであらうと想像せられるが、『阿彌陀胸割』の如きはもと說敎の爲に作られた物を轉用したのであらうと云はれて居る。當時淨瑠璃は、右に擧げた代表作を見ても察せられるやうに、荒唐無稽な說話を扱つた物で、誇張に過ぎ不自然な所が多いのであり、其の詞章も亦御伽草子や舞の本に近い低級蕪雜な物語風の物である。併

しやがて起るべき古淨瑠璃の武勇物靈驗物戀愛物などの源流として注意すべき點が多い。

流派勃興期

操芝居の創始期に次ぐ寛永から天和に至るまでの六七十年間は、淨瑠璃史上に於ける流派勃興期である。(元祿の義太夫節發生以後を新淨瑠璃時代とすれば、古淨瑠璃時代と呼ぶ事が出來る) 此の時代は創始期に比すれば、操の進歩は遲々たるものであつたが、淨瑠璃の方には東西に名人が輩出して、それぞれ曲節の工夫に腐心して、極めて著しい進歩を遂げたのである。而して其の初めに於ては、上方よりも江戸の方が盛であつた。

杉山丹後掾

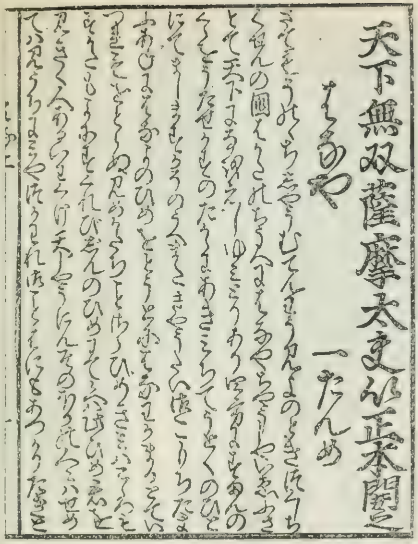
江戸淨瑠璃の元祖と稱せられるのは、上方から下つた杉山丹後掾と薩摩淨雲である。杉山丹後掾(生歿未詳)は名を七郎左衛門と云ひ、京都の人で、瀧野勾當の門に入つて本節の直傳を承けた。元和二年に江戸に下つて操芝居を興行し、承應元年には上京して受領し、丹後掾藤原清澄と名乗つた。彼の語物として傳はつてゐるのは『生贄』『六孫王魔退治』等である。丹後掾は將軍家に召されて語り、一時大いに名聲を揚げたが、やがて淨雲一派の爲に壓倒せられた。其の後丹後掾の子伊之助は江戸肥前掾と云ひ、寛文の頃一派を開いて肥前節と稱し、父の芝居を繼いで世に流行した。又丹後掾の門人近江大掾(語齋)は承應明曆の頃近江節を創め、江戸に於ける軟派淨瑠璃の先驅となつた。

薩摩淨雲

丹後掾を凌駕して江戸淨瑠璃の基礎を作つたのは、丹後掾よりも少し遲れて江戸に下つた薩摩淨雲(薩摩太夫)(寛文十二年歿七十八) である。本名を虎屋次郎右衛門(一説に熊野小平太)と云ひ、入道して淨雲と云つた。和泉の堺の人で、澤住撿校の門人である。(竹豐故事に據る。)(其の他紀州の浪人で澤住の門下であると云ひ、又京都の產

で次郎兵衛の門人であるとも云ふ)江戸に下つて後、島津侯の藩邸に召されて妙技を揮ひ、其の贔負を受けて薩摩太夫と稱した。淨雲は舞臺裝置や人形の操法衣裳などによつて人氣を集め、江戸一流の操芝居と稱せられた。當時江戸は戰國時代の遺風を存して、殺伐剛健の氣風が盛であつたが、淨雲は其の好尚に適する武勇譚を語つて滿都の好評を博し、其の一門は廣く榮えた。淨雲の正本で現存するものは『はなや』(寛永十一年刊)と『小袖曾我』(寛永十九年刊)の二篇であるが、此の外になほ多くの正本があつたであらうと思はれる。『小袖曾我』は舞の本の詞章と殆ど同じであるから省いて、『はなや』に就いて簡單に述べて置く。此の作は、聖武天皇の御代に筑前博多の住人花屋長者家房の二子、花よの姫と花若丸が、父の寃を訴へる爲に都に上り、皇后の御惱を法華經の功德で癒し奉つた恩賞として、危き父の命を助け國に歸つた後、萩原國司を討つて父の怨を晴らしたと云ふのであつて、復讐譚に靈驗譚を交へたものである。此の頃の正本

はなや


天下無双薩摩太夫正本
はなや
一たんめ

はなや(繪入淨瑠璃史に據る)

は六段を上下二冊に分つたもので、繪入刊本である。

和泉太夫

薩摩淨雲の子に次郎右衛門(二代目薩摩太夫)があり、門人に和泉太夫(櫻井丹波掾)虎屋源太夫(源太夫の師匠に就いては異說がある)

（が今通説に從つた）があつた。此の中で最も名高いのは和泉太夫である。和泉太夫（生歿未詳）は明暦萬治の頃殺伐豪壯な金平節を創めて喝采を博し、寛文年間に受領して櫻井丹波少掾正信と名乘つた。彼は生來武勇を好み、且つ人に勝れた力量があつたので、金平節を語る時には、二尺許の鐵の棒を振つて拍子をとり、人形の首を引拔いたり、張拔きの岩石等を打碎いたりして、壯快を極めたと傳へられて居る。其の子の二代目和泉太夫も父と同じ藝風を語つた。是まで江戸で行はれた淨瑠璃は、京都で發達したものを移したに過ぎなかつたが、金平節に至つて始めて江戸の特色を發揮した。金平節が最も榮えたのは寛文年中であつて、薩摩節や永閑節（下に云ふ）等にも語られて、江戸の淨瑠璃界を風靡したばかりでなく、其の影響は初代市川團十郎の荒事藝にも及んだのである。金平節は萬治の頃から京都大阪にも流行し、寛文年間には井上播磨掾によつて代表せられたが、其の後新興淨瑠璃に壓倒せられ、江戸の金平節も亦同樣の運命に遭遇して漸次衰へて行つた。

金平淨瑠璃

金平節は大江山鬼退治の後日譚として、渡邊綱の子竹綱の智謀と、坂田金時の子金平の武勇とを中心とする、架空的な武勇譚を語つた爲に起つたのである。金平節の正本には、金平を主人公とする種種の作の外に、なほ鎌倉權五郎や朝夷三郎などの武功を物語つた類型的な多くの作品があるのであるが、當時此等を一括して金平本と云ひ、和泉太夫及び其の流を汲んだ各派の淨瑠璃を、金平節と稱したのである。金平節の發生期に於ける代表作には『金平誕生記』『酒呑童子若壯（わかざかり）』等があり、寛文年間の全盛期のものでは『金平法問諍』『賴光跡目論』などが最も名高い。現存する金平本は三四十種あるが、

作者の名の記されてゐるものは四五種に過ぎない。

其の作者として従來名高いのは岡清兵衛であるが、此の外に岡五郎兵衛・四宮彌四郎等の名が見える。金平本の江戸版は美濃紙半截の小本であるが、上方版は半紙本である。其の各に正本と筋書風の讀本とがあつて、何れにも挿繪がある。正本の畫風には當時の假名草子の挿繪や浮世繪に近い趣があるが、一體に誇張されて居るのは金平節の特徴の反映である。

圖版に示したのは櫻井丹波少掾の正本の挿繪であるが、外題を逸して居る。水谷不倒氏は柱に「せき」の文字があり、且つ内容に關所破りの事があるから、「四天王關所破」とでも云ふ外題のものであらうと言つて居られる。



金平節正本の挿繪（繪入淨瑠璃史に據る）

江戸淨瑠璃の諸流

江戸の金平節が衰へかかつた頃、新たに一派を開いたのは源太夫の門人虎屋永閑、二代目薩摩太夫の門人土佐少掾、及び薩摩外記（薩摩太夫直政）等である。虎屋永閑は寛文の頃に永閑節を開き、土佐少掾は同じ頃に土佐節を創めた。又薩摩外記が其の後元祿頃に開いた外記節は歌舞伎劇へも進出して、劇場音曲としての大薩摩節の基を作つた。かくて江戸に於ける淨雲の門流は、時代を下る

につれて多方面に展開したのである。此等の諸流の中で土佐節が謠曲幸若舞曲諸淨瑠璃を參酌して、從來の武勇譚の外に世話物をも語つたのは注意すべき事である。

上方淨瑠璃の諸流

翻つて操芝居の發祥地である京都を見ると、寛永の頃京の次郎兵衞・河内掾・山城左内・若狹掾等があり、又女太夫に南無右衞門等があつたが、當時は淨瑠璃よりも寧ろ說教祭文などが一般に歡迎せられてゐた。然るに明暦三年に江戸の大火に燒け出された、虎屋源太夫及び其の門下の虎屋喜太夫が上京して以來、上方淨瑠璃は俄かに活氣を呈した。是より先寛永の末頃、伊勢島宮内（伊勢島節の創始者）が江戸から上京して一時名聲を揚げたが、源太夫等が上京した頃は漸く衰へてゐた。源太夫は江戸の金平節と上方の柔婉な藝風とを巧みに調和した曲節を語つて、忽ち人氣を集め、更に其の門人井上播磨掾（貞享三年歿五十四）が開いた播磨節は、山本角太夫（生歿未詳）が創めた角太夫節、宇治加賀掾が語り出した嘉太夫節と共に、大いに持て囃されて、天和貞享頃上方淨瑠璃は遂に江戸を凌駕するに至つた。同じ上方風といつても、播磨節は金平系統を多分に承けた硬派であり、角太夫節と嘉太夫節は上方趣味に迎合した軟派であつて、各獨自の技を揮つたのである。而して角太夫節の座に機巧人形（からくりにんぎやう）を用ひたのと、播磨掾が大阪道頓堀に操芝居を設立して、其の地の操劇勃興の基礎を作つたのは、共に著しい功績である。元來操人形は京都に於て發達し、江戸に於て操劇としての發達を遂げ、更に京都に逆輸入せられて長足の進歩を見たのであるが、播磨太夫は更に之を大阪に移して、やがて起るべき新淨瑠璃の基を開いたのである。さて角太夫は大阪の人で、延寶年中に受領して土佐掾藤原正房と稱し、京都に上つて嘉太夫節と並び

稱せられた。其の正本は『外題年鑑』に三十餘篇揭げられて居る。大部分は說教物又は人情物であり、詞章は流麗典雅であつて上方趣味に適してゐた。彼の正本中には近松の初期の作と稱せられる『瀧口横笛』『門出八島』『源氏烏帽子折』などがある。角太夫の門下の都太夫一中は元祿の頃一中節を創め、松本治太夫は貞享の頃治太夫節を開き、又角太夫に學んだと云はれる岡本文彌は、哀婉を特色とする文彌節（當時泣節と呼ばれた）を語つて特に大阪で歡迎せられた。次に播磨太夫（井上播磨掾）は京都の人で、源太夫の門に學び、後に一派を樹てて播磨節と稱し、寛文の頃大阪に操芝居を興行して以來名聲を揚げた。播磨太夫の正本は六十餘篇の名が傳はつて居る。其の中の『天鼓』『花山院后諍』『賴朝七騎落』等は、近松の青年期の作と云はれて居るが確證はない。要するに角太夫播磨太夫等は、古淨瑠璃末期に現れた天才であつて、義太夫の先驅となつて新淨瑠璃の基を築いた功勞者である。

宇治加賀掾

近松の作を語つた京都の名高い太夫は宇治嘉太夫（正德元年歿七十七）である。延寶五年に受領して宇治加賀掾藤原好澄と名乘つた。彼は播磨節と宮內の長所を調和し、更に謠曲を始め各種の謠物や音曲の粹を集めて、嘉太夫節なる一派を開き、作者に近松を得て一時滿都の人氣を集めた。併し播磨太夫の門流から出た竹本義太夫が、貞享二年に近松と提携して以後は、義太夫節の壓迫を受けて漸次振はなくなつた。義太夫節以後は卽ち淨瑠璃史上の新淨瑠璃時代であるから、宇治加賀掾は古淨瑠璃掉尾の太夫である。其の正本は『外題年鑑』所載のものだけでも百十五六篇に達して居る。其の中には加賀掾の作もあるが、西鶴の作『暦』があり、殊に好評を博した近松の作が多くを占めて居る。加賀掾は謠曲に通じ

加賀掾の業績

てゐた爲に、其の淨瑠璃の題材結構脚色詞章などには、謠曲の影響が著しく認められるのであるが、殊に注意すべきは、一篇の組織が全部五段になつてゐる事である。從來の古淨瑠璃の組織は殆ど六段であつたが、播磨掾や角太夫などの語物には、能の番組に倣つて五段組織のものが漸く多くなり、更に加賀掾に至つて全部が五段物となつたのは、物語風の古淨瑠璃が、漸次劇詩風の新淨瑠璃に向つて進展した事を示すのである。かくて加賀掾の語物は形式內容共に著しく進步したのであつて、彼の正本は古淨瑠璃中で最も文學的價値が高い。加賀掾はなほ正本の樣式にも改良を加へてゐる。卽ち從來の淨瑠璃本はすべて繪入細字本（俗に風本と稱した）で、節付の無い娯樂的の讀物であつたが、加賀掾が延寶七年五月に『牛若千人切』を刊行する時大字八行本とし、之に細密な節付をしたのは、所謂丸本（節付の稽古本を云ふ）の嚆矢であつて、此の樣式はやがて他の諸流にも行はれて、新淨瑠璃時代の正本の一般形式となつた。(尤も其の後版式には變化があつて、七行十行十一行十二行などのものが現れた。)要するに加賀掾は古淨瑠璃の集成者であり、又淨瑠璃革新の先驅者であつて、義太夫節の基礎は大體彼によつて築かれたのである。

二　義太夫節と近松

新淨瑠璃時代

竹本義太夫が貞享二年二月に大阪の道頓堀に竹本座を設立し、在來各派の粹を集めた義太夫節を語つて以後は、卽ち新淨瑠璃時代である。義太夫節が成立した後の操劇は、演技音曲文學の三拍子揃つ

た樂劇となつたのであつて、是より淨瑠璃といへば義太夫節の事になり、人形芝居といへば義太夫劇と思はれるやうになつた。國文學史上に一大光彩を添へた淨瑠璃の名篇は、貞享以後の凡そ九十年間に現れたのであるが、殊に其の初めの元祿享保期には、太夫に義太夫・政太夫に對する豐竹若太夫があり、作者に近松に對抗する紀海音があり、人形遣の名人に辰松八郎兵衞・吉田三郎兵衞・吉田文三郎・若竹東九郎等があり、又操座に竹本座と豐竹座の對立があつて、操劇は空前の盛況を呈し、從つて淨瑠璃にも不朽の作品が續出したのである。

竹本義太夫

新淨瑠璃の創始者竹本義太夫は、大阪郊外天王寺村の農家に生れ、名を五郎兵衞と云つた。初め井上播磨掾の高弟清水理兵衞に就いて淨瑠璃を習つたが、延寶年間に京都に出て清水理太夫と名乘り、後に宇治加賀掾の芝居に出座して、其のワキを語つて居る間に工夫を凝らし、やがて竹本義太夫と改めて獨得の藝風を創めた。義太夫節が是である。貞享二年（一説元年）三十五歲の時、加賀掾の門人で興行主であつた竹屋庄兵衞（當時藝道の事から加賀掾と不和であつた）の勸めによつて、道頓堀に操座を起して竹本座と稱して以來、忽ち名聲を揚げて空前の成功を收めた。義太夫は剛健な播磨風と婉麗な加賀風とを折衷調和して、之に哀調を帶びた文彌節を加味し、なほ諸流の長所をも取入れて、新しい藝風を案出したのである。其の後元祿十四年五十一歲の時受領して竹本筑後掾藤原博敎と稱へ、正德四年に六十四歲で歿するまでに百餘曲を語つたが、其の大部分は近松の作品であるから、彼の成功の一半は、實に作者近松の靈筆に負うてゐるのである。

近松門左衛門（承應二年生享保九年歿七十二歳）は本名を杉森信盛、通稱を平馬と云ひ、號を近松門左衛門と云つた。外に平安堂・巣林子・不移山人等とも號した。其の生國に就いては、長門國の萩とする說や、京都附近とする說などがあり、又幼時に就いては、肥前國唐津の近松寺（きんしようじ）に遊學した事があると云ひ、又近江の高觀音の近松寺（ごんしようじ）に居り、後に出家を厭うて上京したとも傳へられて居る。かくて近松の父祖生國閲歷などに關しては、從來諸說があつて明かで無かつたが、先年田邊密藏氏が「國語と國文學」（第二卷第八號）に掲載せられた淀藩士杉森氏の系譜によつて、父祖及び彼の經歷の一端を明かにする事が出來た。此の系譜に據れば、門左衛門より六代前は三條三位中將實次であつて、京都地方の動亂を避けて自領近江國神崎郡本庄大門村に移り、其の子實常の時に始めて武士となつて姓佃氏を名乘り、實常の子信次は淺井氏に仕へ、姓を杉森と改めた。信次の子信親は淺井氏沒落の後浪人となり、其の子信重は秀吉秀賴に仕へたが、大阪城沒落後京都に住み、片桐出雲守の客分となり其の歿後には稻葉美濃守正則に仕へ、祿千石を食んだ。其の次男信義は越前宰相忠昌に仕へ、後に浪人して京都で歿したが、信義の次男信盛は即ち近松門左衛門であり、三男は儒醫岡本一抱である。「翁草」によれば、近松は正親町從一位公通（風水軒白玉翁）（七一四頁參照）に仕へたと云ふのであるが、右の系圖に從へば、一條惠觀公にも仕へたのである。惠觀公は後陽成天皇の第九皇子で、一條家を嗣いだ攝政關白一條昭良公（寛文十二年薨）

實次――實常――信次――信親
　└信重┬信幸
　　　　└信義┬智義　織田侍從長賴ニ仕ヘ江戸ニ卒ス年三十七歳
　　　　　　　├信盛　近松門左衛門仕一條禪閤惠觀公於洛卒
　　　　　　　└伊恒　岡本爲竹織田長賴ノ侍醫平井自安ノ養子

六十八歳である。昭貞公が薨じた寛文十二年は、近松が二十歳の時であるから、正親町公通に仕へたと云ふのは其の後の事であらう。なほ『翁草』の傳ふる所によれば、公通は若い頃宇治加賀掾の爲に淨瑠璃を作り、近松は其の使となつて加賀掾との間を往來し、後には近松自身も淨瑠璃に筆を染めるやうになつたと云ふ。近松は又幼時に父信義や兄弟と共に、山岡元隣の俳壇に遊んだのであつて、元隣の『寶藏』（寛文十一年刊近松十九歳の時）の卷末に添へられた追加發句の中に、杉森一家の信義・信親（近松の兄弟か）信盛・信秀（十一歳）・喜里（信盛の妹の錦江か）等の句が收錄せられて居る。而して信盛の句は「しら雲や花なき山の恥かくし」と云ふのである。近松の父祖兄弟や彼の二十歳前後の頃までに就いて、今日吾々の知り得る所は大體以上の通りである。

近松の前期

近松の作者生活は、元祿十六年に大阪に移つた時を境として、前後の二期に區分する事が出來る。前期は延寶頃から元祿の末頃に至るまでの三十年間であつて、淨瑠璃竝に歌舞伎脚本の作家として活躍した時代である。狂言作者としての近松に就いては別に下に述べる。前期の初頃には播磨掾・土佐掾・加賀掾等の爲に淨瑠璃を作つたのであるが、其の處女作は明かでない。從來は『外題年鑑』や『聲曲類纂』などの記載に從つて、播磨掾の正本『花山院后諍』（寛文十三年刊近松二十一歳）加賀掾の正本『源氏供養』（延寶四年刊行近松二十四歳）土佐掾の正本『瀧口横笛』（延寶四年刊行）などを近松の青年期の作として擧げて居る。併し此等の正本は勿論、其の後貞享二三年頃までの推定作十數篇には、當時の習慣として作者の署名が無いのであるから、確實な傍證のない限り、其の全部を彼の作と斷定する事は出來ない。又假に全部が近松の作品で

あるとしても、金平淨瑠璃に近いもの、若しくは古淨瑠璃の改作が多いのであつて、未だ彼の特色は認め難いのである。從つて近松の作風を論ずるには、姑く青年期の作を除いて、義太夫の爲に執筆するやうになつた貞享三年（三十四歳）以後のものを對象とするのが妥當である。さて近松が義太夫と相識つたのは、義太夫がまだ京都に於て、加賀掾の許で修業してゐた頃からであるが、新作を書いて與へたのは、竹本座設立の翌年の貞享三年二月に上演した『出世景清』を以て最初とするのである。「出世」の二字を冠したのは義太夫の前途を祝する爲である。其の後は專ら義太夫の爲に筆を染め、元祿十四年に義太夫が受領して筑後掾を名乘つた時には、祝賀の爲に音曲に緣の深い蟬丸を題材にした新曲『蟬丸』を書いた。

義太夫が竹本座を創設した時の初興行には、近松の新作を上演する事が出來なかつたので、舊作『世繼曾我』（前年に加賀掾の爲に書いた作）を語つて好評を博した。偶此の年加賀掾は、後輩たる義太夫の成功を羨んで大阪に下り、京四郎芝居で西鶴の作『曆』を語つたので、義太夫は近松作の『賢女手習並新曆』（播磨掾の正本に加筆したもの）を演じて對抗し、ここに偶然にも元祿期に於ける二大文豪の腕競を演出したが、加賀掾は遂に失敗に終つて歸京したと傳へられて居る。

近松の後期

近松が元祿十六年四月に、彼の世話淨瑠璃の初作で劃期的に名高い『曾根崎心中』を發表した時から、歿年に至るまでの二十年間を後期とする。後期の初め元祿十六年七月に、義太夫の門人豐竹若太夫が、同じ道頓堀の東側に豐竹座を創立し、西の竹本座と對峙して以來、近松は豐竹座の作者紀海音と對立して、互に手腕を爭ふ事になつた。然るに義太夫は激烈な競爭の半ば、即ち正德四年九月に歿したの

で、近松は長年の知己を失つたのであるが、其の後繼者政太夫（二代目義太夫）は近松を師父と仰ぎ、近松もよく彼を庇護して、其の藝風に適した名作を引續き書いたから、不朽の名篇は主として後期に屬して居る。政太夫は本名を水原長右衛門喜教（よしのり）と云ひ、元祿四年大阪島内三津寺町の相當な資産家に生れた。幼少の頃から淨瑠璃を好み、後に義太夫の門弟となり、二十歳の時若竹政太夫と名乘つて初めて豐竹座に出演し、又京都の操座にも勤めた。正徳二年に義太夫に招かれて竹本座に入つて以來、師の熱心な指導訓練を受けて彌上達し、義太夫が世を去つた時には其の遺言と近松の斡旋とによつて、多數の先輩を超えて後繼者となつた。時に年二十四であつた。（早稻田文學二五〇號所載木谷蓬吟氏「大近松と竹本政太夫」に據る。）是より近松は年若い政太夫を援助する爲に、益精勵して毎年一二篇多きは三四篇づつを作り、其の世評は政太夫の技藝の進歩と相俟つて益喧傳せられ、享保九年十一月に七十二歳で他界した。大近松の淨瑠璃作者としての生活は、前後通じて五十年に亙り、其の作品は百十數篇に達して居る。而して其の伎倆は年と共に彌圓熟し、後期に入つてからの作、殊に六十三歳の時政太夫に與へた初作『國姓爺合戰』（こくせんやがつせん）は、第二の劃期的名作であつて、それ以後の十年間に成つたものに、不朽の傑作が多いのは驚歎すべき事である。

時代物の世界

　近松が五十歳以後卽ち後期に書いた淨瑠璃は、古淨瑠璃から全く脱却したものであつて、所謂新淨瑠璃と呼ばれるものであるが、是を大別して時代物と世話物とする事が出來る。世話物は二十四篇であつて、其の他はすべて時代物である。時代物の世界は古淨瑠璃に比して極めて廣汎に亙つて居る。卽ち最も古い所では、素盞嗚尊の神話に基づいて作つた『日本振袖始』を始めとして、『日本武尊吾妻

鏡」『浦島年代記』『用明天皇職人鑑』の如き、上代の史話傳說から取材したものがあり、下つて平安朝時代の文學說話を取扱つたものは十數曲あるが、更に源平時代以降の戰記物語類から素材を取つて潤色した、源平の英雄・義經主從・曾我兄弟などに關する各種の作品は、時代物の殆ど半數を占めて居る。其の他『國姓爺合戰』や『島原蛙合戰』のやうに、當代の史實から題材を取つたものがあり、支那や印度の史傳說話などから材料を仰いだものもあつて、取材の範圍の廣い事は他に例を見ない程である。

時代物の組織内容

近松の淨瑠璃の時代物は總べて五段組織、即ち發端・葛藤の誘因・葛藤の頂點・轉換・解決から成つて居る。五段組織はもと能の五番の配列に倣つて起つたものであつて、井上播磨掾の正本にも其の例があるのであるが、山本土佐掾及び宇治加賀掾の正本では殆ど常例となり、更に近松の作品に至つて、彌形式内容共に完成を告げたのである。近松の時代物の五段組織は、先づ第一段に於ては全篇の發端を語つて、やがて展開すべき事件の伏線を示し、第二段では次の段に起るべき葛藤の原因を見せるのであつて、多くの場合は主人公たる善人が、惡黨の爲に虐げられる悲壯な場面を描くのである。第三段は前段を承けて、義理と人情の葛藤の頂點に達した悲劇的場面を示すのであつて、やがて來るべき解決への前提となつて居る。作者が最も力を注ぐのは此の段であり、觀衆が興奮の高潮に達するのも此の場面である。第四段は全體の上から見れば側面描寫であつて、或不可抗力の事變又は超現實的の事件を點出して、これまでの善人惡人の境遇を忽ち逆轉して、事件の結末へ導くのである。而して第五段は前段を承けて、いよ／＼惡人が亡び善人が最後の勝利を得て、めでたく榮えるのであつて、こ

こに全篇の事件に解決を與へてゐるのである。かくて近松の時代物は、戲曲としての完全な樣式を具へる事になつたのであつて、此の組織によつて內容は極めて複雜になり、且つ變化に富み、人物の性格はとかく明瞭を缺いてゐるけれども、巧みに義理と人情の葛藤を寫して、觀客を熱狂せしめるのである。これを從來の古淨瑠璃が單純な筋のもとに、超自然的な事變や不自然な人情を寫して、專ら目先の變化によつて觀客の低級な趣味に迎合したのに比すれば、一大進步である事は言ふまでもない。併し近松の時代物にはなほ古淨瑠璃の名殘を存して、一篇の內容が事件本位になつて居り、人物は善惡の型にはまつてゐて不自然であり、境遇の變化の如きも、局面轉換の爲の必要から起る事が多いのである。又近松の時代物は歷史的事件を取扱つたとは云つても、其の素材を史上の著名な人物の名と國民的傳說の一部分とから借り來つて、之を町人社會に引下ろして現代化して居るのである。從つて人物を見ても、義經は遊里の一大盡として寫されて居り、曾我兄弟の如きも虎や少將に憂身をやつす遊蕩兒となつて居る。又其の背景を見ても『日本武尊吾妻鏡』に振袖投島田の嫁入姿を描き、其の輿入の行列に臺笠・立笠・挾箱の類を臚列したり、『大職冠』に奈良の藤花滿開の花見時の雜沓を描いて、飴賣・煙草賣。燒豆腐賣・酒賣・茶店などを列擧してゐるが如き時代錯誤が多いのであつて、時代物とは言ひながら、畢竟元祿時代の社會的解釋を加へてゐるのである。かくの如く近松の時代物には、觀衆の趣味に迎合しつつ虛實の間を面白く行く低級な作意があるのであつて、後世の批評眼で見れば不自然であり幼稚な感がある。併し當時の觀客は却つて此等の趣向を喜んだのであつて、後世傑作と稱せ

られる世話物は、寧ろ時代物の次に、間の狂言のやうにして演じられたのである。

時代物の傑作

近松の時代物の傑作を作の成つた年代順に擧げ、其の題材の出所特徵等に就いて、簡單な說明を試みるならば、先づ最初に注意すべきは『雪女五枚羽子板』（寶永二年七月初演）である。此の作は赤松滿祐が義教將軍を私邸に招き、能見物の半ばに弑逆した史實を題材として、藤內兄弟五人の事を綴つたものであつて、構想が奇拔であり、目先の變化があつて、當時好評を博した作である。『碁盤太平記』（寶永三年六月初演）は赤穗義士の仇討を取扱つた最初の作で、後の義士物に多大の影響を與へて居る。『國姓爺合戰』（正德五年十一月初演）は、明國の遺臣で日本に亡命した鄭芝龍の子成功が、祖國回復の爲に清朝に反抗を續けた悲壯な節義と、其の母田川氏が泉州城で清軍に圍まれ、自害して川に身を投げた事實に基づいて作つたものであつて、和唐內(鄭成功)が祖國を救ふ爲に其の母を伴なつて支那に渡り、異腹の妹錦祥女の夫五常將軍甘輝と韃靼を討つて、共に明朝の再興を圖つた事を綴つて居る。此の曲は近松が政太夫の爲に書いた最初の作であつて、三年越十七箇月間興行を續けて、古今の大當りを取つたので著名である。蓋し唐土と日本の兩國に亙る場面の變化があり、人物や情景の對照の妙があり、又和唐內母子が我が武士的精神を發揮した壯快な



國姓爺合戰挿繪

筋などが、觀客の滿足を買つたのである。次に『曾我會稽山』(享保三年七月初演)は、曾我兄弟の復讎事件を僅かに晝夜十二時間に縮約して、作者の手腕を示した名作として知られ、先の『雪女五枚羽子板』『國姓爺合戰』と共に從來時代物の三代傑作と言はれて居る。其の他『傾城島原蛙合戰』(享保四年十一月初演)は、世界を鎌倉時代に取つて、天草四郎の島原騷動を仕組んだ注意すべき作品であり、『津國女夫池』(つのくにめおといけ)(享保六年二月初演)は、義輝將軍の爲に三好長慶一味を滅した淺川左京太夫藤孝の忠節を本筋とし、是に兄妹とは知らずして相契つた家臣造酒(みき)之進と侍女清瀧の苦悶や、父文次兵衞夫婦の入水の事などの深刻な人情を織り交せた作であつて、此の二篇は共に目先の變つた題材を取扱つた作として異彩を放つて居る。最後の『關八州繫馬』(享保九年正月初演)は賴光と其の四天王等が、朝敵平將門の遺子將軍太郎良門を討つた事を仕組んだもので、近松作中の最長篇であり而も絕筆である。此の曲は結構が雄大であり變化に富み、而もよく統一が保たれてゐて、大劇詩人の最後を飾る傑作と言はれて居る。

世話物の題材組織內容

次に近松の世話物を見ると、其の題材は現代社會に起つた男女の情事を主とし、稀に過去の巷談街說から素材を取つたものであつて、義理と人情の葛藤を寫す事は時代物と同じである。併し同じく義理人情の葛藤を主題としても、時代物には義理を立てる事を表にして、これに人情を配してゐるのであるが、世話物は反對に人情を主題として之に義理を配して、而も其の末路は多くは悲劇に終つて居る。更に形式の上から比較するならば、時代物は旣に述べた通り五段組織であるが、世話物はこれを縮約して發端・葛藤・解決の三段に仕組み、殊に葛藤の部を一層擴張してゐるのである。卽ち世話物に

現れる主人公は、最初から悲劇的境遇に置かれてゐるのであつて、其の原因動機の如きは、人物の臺詞によつて說明せられるやうに仕組まれて居る。從つて世話物の內容は簡單であるけれども、筋の運び方が直線的であつて無駄がなく、各場面は終始緊張してゐて而も不自然な所がない。又其の人物は現代の町人社會の匹夫匹婦であり、演ずる所は當時の市井を背景とする社會劇であるから、一篇の內容には時代物に見るやうな不自然がなく、矛盾破綻がない。更に其の脚色の方面を見る時は、世話物を代表する心中物に就いて言へば、其の主題は當時の不健全な社會が生んだ不祥事であつて、其の行爲は社會的の批判を以てすれば、醜惡なる不義不德である。然るにこれが一たび近松の筆に上る時は、主人公は本能の欲求に抵抗する事の出來ない主情的の人間であるけれども、周圍に對する義理の爲に苦悶の頂點に達するのであり、最後に擇んだ死は痴情の結果でなくして義理への申譯であると共に、未來世に於ける永遠の愛に生きるものとなつて居るのであつて、ここに一篇の內容は美しい人生悲劇となつてゐるのである。心中物以外の世話物に現れて來る男女も、亦實話に於けるが如き薄志弱行の徒でなくして、恰も時代物の忠臣節婦にも比すべき殊勝な人物となつて居り、其の不行跡が世間への義理立ての爲に、悉く美化せられて居る事は心中物と同樣である。かくて近松の世話物に取扱はれた男女が、悉く作者の溫い愛に抱かれて美化せられ、其の行爲が悉く理想化せられてゐるのは、畢竟近松の人格が反映して居るのであつて、同時代に現れた西鶴が、同じ愛慾生活を寫しながら、極めて冷靜な態度で臨んでゐるのと、正に對照をなすものと言ふべきである。後世近松を評して愛の藝術家と

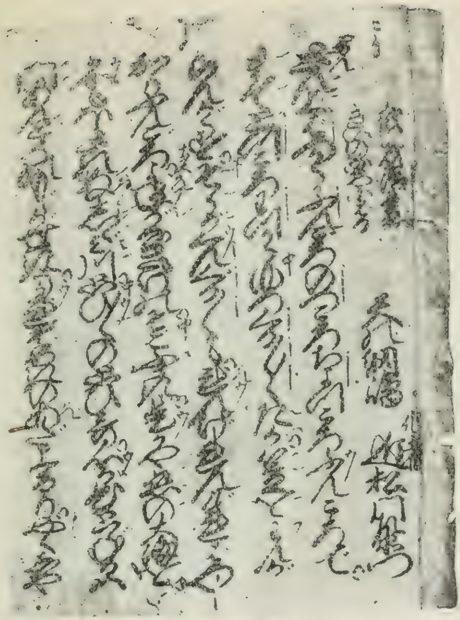
するのは至當の言である。以上述べた外に、なほ近松の世話物の特長としては、人物の個性が書き分けられて居る事や、其の背景が當代の町人生活の情景を、其の儘に寫出してゐる事などを擧げる事が出來るのであつて、彼が不朽の名を成したのは、此等の長所を具へた世話物を書いた爲である。尤も彼の世話物にもなほ多少の瑕瑾のある事は免れ難い。例へば人物の性格描寫は、主要人物に於ては鮮明であるけれども、敵役たる副人物の多くは一定の型にはまつて居り、其の葛藤の起因や結末に屢類似點を見出すが如きである。併し此等は決して作品の價値を低下する程の缺點とはなつてゐない。

世話物の傑作

近松の世話物の初作に就いては、『外題年鑑』に『長町女腹切』を元祿十三年正月の作としてゐるのに據つて、從來之を世話物の嚆矢としてゐたのであるが、此の作は高野辰之博士や水谷不倒氏等の研究によつて、正德二年秋の上演である事が明かになつたから、元祿十六年作者が五十一歳の時に執筆した『曾根崎心中』を以て最初とすべきである。『曾根崎心中』は元祿十六年四月七日に、大阪内本町の醤油商平野屋の手代德兵衞が、北の新地天滿屋のお初と曾根崎天神の森で情死を遂げた事件を素材として、僅かに一箇月後にはこれに脚色を施して上演し、觀衆をして驚歎せしめた劃期的の名曲である。其の題材は町人社會に有りがちな男女の情話であるが、作者は之に脚色を加へて、お初に身請の相談が纒まつてゐた事を表さずして、これを美しい殉情者として描き、なほ實在の人物以外に惡黨の油屋九平次や、思遣りのない伯父などを加へて、葛藤を增大したのである。此の作は世話物といふ破天荒の試みであつたばかりでなく、之を上場したのは事件發生の直後であり、而も人形遣の名人辰松八郎

兵衞が特にお初の人形を出遣ひにしたので忽ち評判になつた。かくて此の新作が好評を以て迎へられたのを見て、豐竹座に於て間もなく『心中涙の玉の井』（紀海音の作と傳へて居るが實は未詳）を上演し、其の後兩座に次々に世話物が上場せられ、やがて心中物は歌舞伎や浮世草子にも流行するやうになつた。『曾根崎心中』の筋は最も自然であつて、近松の心中物の典型的作品と言はれるのであるが、其の後に現れた傑作を列擧するならば、『待夜の小室節』（寶永五年作か）は後に外題替をして『丹波與作』と云つた作であつて、筋に變化があり人情の描寫も巧みであり、且つ文章も傑出して居る。次に『おなつ清十郎五十年忌歌念佛』（寶永六年正月初演）はお夏清十郎の話を脚色したものであり、『夕霧阿波鳴渡』（正德元年又は二年の作と推定）は名妓夕霧に關する街説を題材とした作であつて、共に寬文年間に起つた著名な出來事を取扱つたものである。お夏清十郎の事は西鶴の『好色五人女』に取扱はれ、夕霧の話は『好色一代男』及び『好色二代男』にも取扱はれて居るのであつて、兩文豪の想化の妙を比較する時殊に興味が深い。『忠兵衞梅川冥途の飛脚』（寶永八年三月（四月正德と改元）初演）に取扱はれた梅川忠兵衞の實話については諸說があるが、此の作は近松の傑作の一であつて、新口村の段に寫した親子の眞情は其の名文と相俟つて世評が高い。『長町女腹切』（正德二年の作）は、刀屋の手代半七が愛人お花を救ふ爲の金策に窮して、伯母から細工を頼まれた藏屋敷の刀に目を付け、其の中身をすり替へて賣代を融通したが、後に其の事情を聞いた伯母が切腹して、甥の一命に代つたと云ふ物語であつて、武家氣質であり且つ情深い伯母の性情が、觀客を感激させた作である。これと共に異彩のある題材を取扱つたのは『鑓の權三重帷子』（享保二年八月初演）『山崎與次兵衞壽の門松』（享保三年正月初演）『博多小女郎浪枕』（享保三年十一月初演）

の三篇である。第一は當時大阪の高麗橋で起つた妻敵討を題材とした作であり、第二は友人の刀傷罪を身に引受けた男氣を寫した作であり、第三は海賊船に乗合せて虎口を逃れた京の商人小町屋惣七が、前の海賊に再會して其の群に投じ、遊女小女郎と同棲した後逮捕せられて自殺するまでの、數奇な運命を寫した作である。次に『紙屋治兵衛紀伊國屋小春　心中天の網島』（享保五年十二月初演）は晩年の傑作であつて、享保五年十月中旬に行はれた情死を題材とし、其の年十二月上旬には早くも上演して、世人を驚歎させた評判の作である。此の曲には天滿の紙屋治兵衛と曾根崎の紀國屋小春の情事の外に、小春と治兵衛の妻おさんの間の義理人情の苦悶があり、又兄の孫右衛門が弟治兵衛を思ふ眞情があつて、極めて波瀾に富み人情の美があり、前後の照應並に終局に至るまでの徑路が巧妙に描かれて居て、世話物の傑作と言はれて居る。又『女殺油地獄』（享保六年七月初演）は、番頭上りの繼父に育てられた放逸無頼の河内屋與兵衛が、金策に窮して油屋の女房お吉を殺して金を奪つた事を仕組んだ作であつて、家庭の缺陷や與兵衛の性格が深刻に寫されて居り、其の結末の


天の網島（七行本）

女殺の凄愴慘絕な場面の描寫は、我が國文學中稀に見る名文である。而して巢林子最後の世話物「心中宵庚申」（享保七年四月初演）は、八百屋の養子半兵衛と其の妻の千代が姑の虐待に苦しみ、最後に放逐せられたのを悲しんで、夫婦心中を遂げた事を綴つた作である。此の作は同一材料を取扱つた豐竹座の海音作「心中二つ腹帶」と對峙して演じられ、兩劇作家の脚色の妙技を競うた作として世に知られて居る。

近松が文藝史上に遺した功績は、在來の時代物を大成した事と、始めて世話物の新生面を開いた事であるが、更に形式方面に於ては、韻文の要素を多分に取入れて、戲曲に適合した艶麗巧緻な文章を創始した功勞を見逃す事は出來ない。近松は其の題材を廣く古今の文學歷史傳說などから捉へ來つたばかりでなく、其の構想詞章などの上にもまた廣くそれ等のものから資料を取り、なほ語句は古典文學は素より、漢籍佛典和歌俳句俚諺俗謠などからも引用して、巧みに和漢を折衷し雅俗を混和して、自由奔放且つ古今獨步の韻文を創めたのである。又修辭の方面に於ては譬喩・懸詞・緣語・頭韻・疊韻など、苟も古來の韻文に用ひられた技巧は殆ど殘す所なく利用して、其の詞章に聲調の美を賦與したのである。かくの如くにして成つた彼獨得の文體は、極めて自在であり且つ變化に富んでゐるのであつて、地の文には七五調を主とした絢爛な擬古的韻文を用ひ、對話には雅俗を折衷し、又大阪方言を巧みに混用して、言葉の上に人物の面目を活躍させてゐるのであり、なほ其の聲調は人形の所作や太夫の聲調や三絃の節調と關聯して、それぞれの妙味を發揮するやうに工夫せられて居る。彼の名文として世に喧傳せられてゐるのは、主として作品中の物盡しや道行（例一）であるけれども、情景融合の妙

を得た名文や、(例二)簡單な語句の上に複雜な心情や動作などを表現した名句は(例三)至る所に見出される。當時其の內容に對しては非難を加へる者があつたけれども、其の詞章は堂上にも愛讀せられ、又士君子をして讃嘆せしめたのであつて、近松は古今を通じて稀に見る才藻豐かな文章家であつたのである。

(例一)

五月(さつき)の雨の何時の間に、涙の時雨染手綱、絞れど乾くひまぞなき。出で行く人におくれじと、笠取りあへず杖とらず、常の姿を其の儘に、今來て見れば旅衣、裾野も近くなりにけり。星さへ見せぬ松林、下は野澤のちり〳〵水、裾は茨(いばら)が綻ばし、足は草履が杭(くひ)や切株小石原、一寸先は暗のうたてや小提燈、細蠟燭もほの暗く、駒の躓(つまづ)き氣遣はし。(曾我會稽山)

(例二)

さすが數寄者の庭の面(おも)、若葉の木立物ふりて、路次ほの暗き燈籠の、火影宿かる熊笹の、露は螢か蛙の聲のかまびすく、萱屋(かやや)が軒に音つれて、しよろ〳〵流れ水の音、夜もしん〳〵と更けにけり。(鑓の權三重帷子)

(例三)

表(おもて)に馬の鈴の音、こりや〳〵駄荷が著いたぞ、中戸々々と聲高に、手んでに葛籠(つづら)かたげ込む。忠兵衞親子機嫌よく、サア拍子が直つた來年も仕合馬。馬子衆に酒よ煙草よと、硯控へつ帳付けて、家內どんどと賑へば、手代の伊兵衞けうとげに、なう堂島のお屋敷から、金三百兩九日に來る筈、前狀(さき)が上(のぼ)つた、何とて遲いと、お侍の甚內殿が睨め付けて歸られた、何と〳〵云ひければ、宰領が打飼より其の三百兩合點、是急々の

御用、今夜中にお屆け、方々の爲替金高八百兩ぐはらり〳〵と取り出す。忠兵衛いよ〳〵勢よく、白銀は内藏へ、金子は戸棚へ、母者人、わしは直に此の小判お屋敷へ持參する、人の金を預れば表も氣を付け早う締め、火の用心が一大事、戻りはちつと遲うても駕籠で行けば氣遣ない。夜食しまうて早寢よと、金懐中に羽織の紐も結ぶ霜夜の門の口、出なれし足の癖になり、心は北へ行く〳〵と思ひながらも身は南、西横堀をうかうかと氣に沁みつきし妓が事、米屋町まで歩み來て、ヤア是は堂島のお屋敷へ行くはず、狐がばかすか南無三寶と引かへせしが、ム、我知らずここまで來たは、梅川が用有つて氏神のお誘ひ、ちよつと寄つて顏見てからと立返つては、いや大事、此の金持つては遣ひたからう、おいてくれうか行つてのけうか、行きもせいと一度は思案、二度は無思案、三度飛脚、戻れば合せて六道の冥途の飛脚と、（冥途の飛脚）

三　紀海音

近松と義太夫の提携によつて淨瑠璃劇が大成せられた頃、一方には紀海音が豐竹若太夫と協力して之と對抗し、竹本豐竹兩座は元祿の末から享保の頃にかけて、互に其の作品と技藝を競ひ、觀客も亦各自其の一方を贔屓して、淨瑠璃史上の黄金時代を現出した。豐竹座の作者紀海音（寛保二年歿八十歳）は榎並喜右衛門と云ひ、後に善八と改めた。其の家は大阪御堂前雛屋町にあつて、代々菓子製造業を營む老舗で、屋號を鯛屋と云つた。其の父は善右衛門と云ひ、家業の傍和歌連歌俳諧を貞徳及び貞室に學んで、貞因・長閑堂などと號した。海音の兄は狂歌中興の祖と云はれる油煙齋貞柳である。（七一四頁參照）而して海音

は初め大和の柿本寺(黄檗宗)の悦山和尚の門に入つて高節と號したが、後に還俗して醫學を修め、又國學和歌を契沖に學び、俳諧を貞室に受け、狂歌を兄貞柳に學んで貞峨と號した。此等の素養が後年淨瑠璃作者として起つべき基礎となつた事は言ふまでもない。其の淨瑠璃作者となつた動機や年代などは詳かでないが、當時の文藝興隆の風潮に促され、殊に近松に刺戟せられたであらうと思はれる。なほ豐竹座上演の新作の大部分が彼の筆に成つたものである點から考へると、若太夫の慫慂もあつたであらうと察せられる。

時代物

海音の初作に就いては異説があるが、其の作者生活は元祿の末頃から(四十歳の時に成つた『傾城懐子』を彼の初作とする説があるが確かでない。)享保八年(六十二歳の時)に至るまでの二十年許りであつて、其の作として確かなものは四十八篇である。此等の作品は近松と同じく時代物が主となつて居るが、後世に名聲を遺したのは世話物によるのである。其の時代物は題材を王朝時代に求めて、それにお家騷動を加味したのが多いのであつて、近松の時代物の主位を占める判官物曾我物の如き、英雄傳説を取扱つた作は甚だ稀である。かくて其の取材の範圍は狹く、其の内容は謠曲祭文や在來の淨瑠璃などを改作し又は飜案したものが多く、而も脚色の手腕に於ても筆力に於ても、近松ほどの伎倆を發揮してゐない。海音の時代物三十餘篇の中で傑出して居るのは、『富仁親王嵯峨錦』『鬼鹿毛無佐志鐙』『鎌倉三代記』『東山殿室町合戰』『傾城無間鐘』などである。『富仁親王嵯峨錦』(寶永六年作か)は、女繪師狩野雪姫と名匠左甚五郎とが、高雄の蟠海僧都の爲に人質となつた夫と母を救ふ苦心を骨子とした作であり、『鬼鹿

毛無佐志鐙』(正徳三年二月初演)十は、赤穗義士の仇討を仕組んだ著名な作である。『鎌倉三代記』(享保三年正月初演)は、賴家の外舅比企能員が京六條の遊女二人を囮として謀叛する事を中心とする、夢幻的詩趣に富んだ作であり、『東山殿室町合戰』(享保七年一月初演)十は山名細川の兵亂の史實から取材したものであり、『傾城無間鐘』(享保八年七月初演)は無間の鐘の說話を御家騷動に取入れた作で。海音の時代物中の傑作である。

世話物

次に世話物は十篇程ある。主として巷談俗謠祭文歌舞伎などによつて喧傳せられたものから取材して居るのであつて、中には近松の世話物と同一題材を取扱つた作がある。其の中で傑作と稱せられるのは、『椀久末松山(わんきうすゑのまつやま)』『お染久松袂の白しぼり』『笠屋三勝二十五年忌』『心中二つ腹帶』『八百屋お七』などである。『椀久末松山』(寶永五年三月初演)は、大阪の豪商椀屋久右衞門が新町の遊女松山と馴染んで產を破り、親族緣者の爲に一室に押籠められて、遂に發狂した巷談に脚色を加へた作である。此の作は海音の署名のあるものの中で、現存する最古のもの(四十六歲の時の作)であり、又數ある椀久物の中で重要な位置を占めて居る。『袂の白しぼり』(正德元年四月初演)は、大阪の油屋太郎兵衞の一人娘お染と丁稚の久松が密かに契り交したのを、娘の父はお染を親類山家屋に緣付け、久松の親は彼を實家に引取らうとした時、二人が情死したといふ筋の作であつて、當時有名な街說を素材としたものである。又『笠屋三勝二十五年忌』(享保四年八月初演)は、元祿八年に大阪の下難波村なる千日墓所の邊で、赤根屋半七と遊女三勝とが情死した事件を、其の二十五回忌を當込んで作つたもので、場面の變化があり人物もよく活躍して居る。又『心中二つ腹帶』(享保七年四月初演)は近松の『心中宵庚申』と同一題材を捉へ、而もそれより十六日早く上演して却つて好評

を得た傑作である。最後の『八百屋お七』初演年月未詳は、西鶴の『好色五人女』卷四の「戀草からげし八百屋物語」の作意を借り、義理と人情の葛藤を中心に書き上げたものであつて、是亦海音の作中の名高い一篇である。以上擧げた諸篇の題材の多くは、小歌に謠はれ、歌舞伎に演じられ、或は浮世草子に綴られて、名高くなつてゐたものであるが、海音の作品に取扱はれて彌名高くなり、又後の小說・戲曲・脚本に多大の影響を及ぼしたのである。海音の世話物の脚色は、近松と同じく義理と人情の衝突を眼目としてゐるのであるが、人情を犧牲として義理を尊重して居るのは、近松が義理を重んじながら、抑壓し難い愛の力を强調してゐるのと比較して、態度の相違を見るのである。從つて海音の世話物は主知的であつて情熱を缺き、其の文章も散文的であつて詩趣に乏しい憾がある。要するに海音は近松に比して遙かに伎倆は劣るのであるけれども、豐竹座が竹本座に對抗して、時に之を凌駕する程の人氣を集め得たのは、作者海音の作品の力にも據るのであり、又其の作品には後の文學に多大の影響を與へた史的價値を有するものが多いのであるから、彼も亦勝れた作家であつたと言ふべきである。

錦文流

近松・海音と同時代の淨瑠璃作者には、西鶴の門人錦文流がある。其の浮世草子の作に就いては既に第七章に述べて置いたが、七六二頁參照　淨瑠璃作者として、元祿十二年から享保四年までの間に書いたものが九篇傳はつて居る。初めは主として竹本座の爲に書き、正德以後の作は主として豐竹座に上演せられた。試みに其の最初の作『本海道虎石（とらがいし）』元祿十二年五月竹本座にて初演を見ると、曾我兄弟と虎少將との情事に、平家

の侍伊賀平内左衛門の遺子豐姫が、父の仇三浦與一を討つ事を絡ませてゐる。彼は時代物の作者であつて、荒唐無稽な筋のものが多く、伎倆に於ては到底海音に及ばなかつた。

錦文流より後に現れて、近松・海音の後を繼いで名作を書いたのは、松田和吉（文耕堂）竹田出雲・並木宗輔・長谷川千四等である。此等の作者は、享保元文頃若しくはそれ以後に活躍したのであるから、江戸時代後期になつて述べる事にする。但し此の中で長谷川千四は享保十八年に享年四十五で歿してゐるから、茲に略傳を記して置く。

長谷川千四

彼は大和の人で、初め長谷寺の僧侶であつたが、還俗して後椎本才麿に俳諧を學び、更に淨瑠璃作者となつた。淨瑠璃作者としては、享保十二年以後の五年間に毎年數篇を書いたが、大部分は竹田出雲又は松田和吉との合作である。其の手腕は當時相當に認められてゐたが、比較的早く世を去つて人々に惜しまれた。

義太夫節淨瑠璃の名作は『國民文庫』『新群書類從』『有朋堂文庫』『徳川文藝類聚』『近代日本文學大系』『日本名著全集』『世話淨瑠璃大全』などに收められて居る。又近松の全集又は選集には、水谷不倒氏校註『近松傑作全集』五卷、三木竹二水口薇陽兩氏校訂『近松全集』三卷、木谷蓬吟氏校註『大近松全集』十六卷、高野辰之黑木勘藏兩氏校訂『近松門左衛門全集』十卷、藤井乙男氏校註『近松全集』十二卷等がある。なほ金平本三十種を複製したものには、大阪毎日新聞社刊行の『金平本全集』がある。

四　歌舞伎淨瑠璃

歌舞伎淨瑠璃

是までに述べた古淨瑠璃や義太夫節は、操人形に合せて語られる舞臺用のものであるが、此の外に

主として歌舞伎芝居の出端(丹前姿の侠客や立役若衆方などが、舞臺に現れる時に用ひる)道行や所作事(舞踊劇)などの地に語り、若しくは酒宴に興を添へる爲の座敷藝として演じられるものがある。劇場用のものは歌舞伎淨瑠璃又は所作事淨瑠璃などと云ひ、座敷用のものは唄淨瑠璃又は脊淨瑠璃と呼ばれて居る。尤も劇場用のものは座敷藝としても語られ、座敷用のものも劇場で用ひられる事が多いのであるから、此の二つを區分する事は困難である。

歌舞伎芝居に於て、役者の所作に合せる爲の音曲が必要である事は言ふまでもないが、一方淨瑠璃には、流麗な曲節で語られる美辭麗句から成る妙所、即ち節事があるので、茲に兩者は自ら提携することになり、又座敷藝としても演じられるやうになつたのである。さて淨瑠璃の太夫が歌舞伎芝居の地方を勤め、又座敷藝として宴席に出る事は、かなり古くから行はれてゐるが、寛文前後から漸く盛になり、元祿享保期(歌舞伎發達期の初頃)には主として此の方面に適した素質を有する諸流を派生して、劇場音曲の著しい發達を見るに至つた。江戸時代前期に歌舞伎芝居や座敷に於て演奏せられた淨瑠璃は、殆ど各流に亙つて居るのであるが、元祿前後に主として劇場に進出したのは、外記節・大薩摩節・半太夫節・河東節・一中節等であつて、最後のものを除く外はすべて江戸のものである。此等の淨瑠璃の大部分は、後期に入つて長く劇場音曲として生命を保つたのであるが、今は其の創始期によつて茲に略說することにした。

外記節と大薩摩節

外記節は二代目薩摩太夫(薩摩次郎右衞門)の門人、薩摩外記直政が創始したものである。外記太夫

は元祿寶永頃の名人で、操座でも興業したが、歌舞伎芝居にも出て、淨瑠璃の劇場進出の方面に功績があつた。其の曲風は江戸一流の豪壯なものであつたから、專ら勇者の出端や荒事の地に用ひられた。享保頃流派としては絶えたが、曲風は語り傳へられて文政九年に至つて、三味線方の杵屋の手に移り、江戸長唄と合併せられた。大薩摩節は外記太夫の門人大薩摩主膳太夫（寶曆九年歿六十五）が享保の頃開いた流派で、外記節と同じく勇壯豪快な曲風を得意としたから、主として荒事に用ひられた。此の流派も三代で絶え、文政九年に長唄の四代杵屋三郎助が其の家元を預つて以來、江戸長唄に包含せられた。

一中節

一中節は山本角太夫の門人都太夫一中（享保九年歿）が創めた流派である。都太夫の前身は、京都の本願寺派明福寺の第三代周意の子惠俊であつて、二十一歳の時還俗し、角太夫に就いて淨瑠璃を學び、後に一流を創めたのである。一中節は元祿寶永の頃上方の歌舞伎芝居と座敷を勤めたが、正德五年以後再三江戸に下つて扶殖に努力した結果、享保の頃には江戸に於て盛に行はれた。其の後上方に於ては新たに起つた豐後節に壓倒せられて、寶曆の終頃には殆ど衰亡したが、江戸では寬政の頃まで歌舞伎芝居に用ひられた。一中節は上方古淨瑠璃中の軟派を代表する角太夫節と治太夫節を融合して成つた、典雅艶麗を特色とするものであるから、世話物に適して居た。其の語物は主として一段物であつて、殊に敍景と道行を得意とした。初代の語物で名高いのは『助六心中』・『椀久末の松山』・『八百屋お七』等である。此等は丸本として現存するものであるが、景事（所作事）道行などの端物は數十曲傳はつて居る。此等の端物の中には近松が義太夫節の爲に書いた淨瑠璃中の一節を、其の儘轉用したもの若しくは之

を改作したものが尠くない。

半太夫節

上方の一中節と對立して、江戸で流行したのは半太夫節(江戸節)と河東節とである。半太夫節の創始者江戸半太夫（生歿未詳）は實名を坂本半之丞と云ひ、江戸在下戸塚の修驗者の子である。初め歌說教と歌祭文の名人であつたが、後に江戸肥前掾（杉山丹後掾の男）に就いて淨瑠璃を學び、貞享の頃に一派を開いて操座を興した。其の後主として歌舞伎と座敷藝とを勤め、元祿の末頃には上方に於て最も歡迎せられた。『松の葉』『若緑』『松の落葉』などに收められた所謂吾妻淨瑠璃の大部分が半太夫物であるのを見て、當時上方で盛に持て囃された事が察せられる。半太夫節は語るよりも寧ろ謠ふに近く、其の曲節は極めて流麗であつたから、江戸よりも却つて上方に喜ばれたのである。其の淨瑠璃は主として時代物であつて、初代の代表的語物は『髮梳曾我』『式例和曾我』『信田妻道行』などである。(半太夫の正本の傳はつたものは極めて稀である。)半太夫節は初代の門人河東が、享保元年に獨立して以後は漸次衰運に向つたが、其の家元は七代まで續き、天保の頃まで江戸の歌舞伎芝居に出勤した。

河東節

河東節は半太夫の高弟十寸見河東（享保十年歿四十二）が創めた流派である。河東は本姓を伊藤、通稱を天滿屋藤十郎と云ひ、江戸日本橋品川町の魚商（一說江戸小田原町の御納屋）の子である。資産を失つたので半太夫に就いて淨瑠璃を學び、後に式部節・手品節などを加味して新たに一派を創め、享保元年に獨立して江戸太夫河東と名乘つた。河東節は當時の淨瑠璃諸流中で、最も歌謠的傾向を帶びたものであり、又雅味と澁味とを特色として眞の江戸前と稱せられた。從つて上方の趣味には合はなかつたから、かの地では殆ど

行はれなかつた。河東節は連綿として今日に傳はつて居るが、其の隆盛期は享保以後五十年間であつて、明和以後は是から分れた常磐津節・富本節などに壓倒せられて漸次振はなくなつた。河東節は主として歌舞伎と座敷とで行はれたのであるから、其の語物は殆ど端物一段である。其の純粹の語物で現存するものは五十餘曲である。作者としては俳人俳優通人學者などの名が多數傳はつて居るが、竹婦人(俳人岩本乾什 寶暦九年歿八十歳)の筆に成つたものが尠くない。初代の代表的名曲は、獨立した時の最初の語物として有名な『松の内』、一中節との掛合物として名高い『隅田川舟の内』、中萬字屋玉菊三回忌追善の爲に語つた『傾城水調子』などである。『松の内』は新吉原三浦屋の或名妓が仲の町へ年始に出掛ける途中で、氣前を見せて名高くなつた逸事に基づいて、竹婦人が作つた名曲である。其の冒頭は

　新玉の、空青みたる曙は、常聞く鷄も若々と、若水早き車井のめぐる、くる／＼年の朝、去年のままなる亂髪、、こぼれかかれる差櫛は、誰結べとかしどけなや。しどけなりふり、品定め、しつけぞ殘る戀衣、どの袖引かん移香の、峯に一刷毛夕霞。

に始まり、以下次々に正月の情景を歌つて七日に及び、

　歌 大磯の鐘は、七つ七戻り、虎に逢をとて裾は露、小褄は嵐松風。淨瑠璃 實に君が代の繁榮は、虎も住みなん千本の竹、梅恥かしき襟の香にまだ、本節 青陽の暮寒く、錯著の袂千早振る、神も思のあればにや、何時しか今日は、一重きぬ／＼の、沅湘日夜東は、雨戸も早く明くる日の、閉め寢ななん七草は、御形田平子佛の座、菘蘿蔔芹薺、君が爲とて若菜摘む、千種の色こそ久しけれ。(松の内)

に終つて居る。此の淨瑠璃は初代河東の獨立記念の語物であり、其の詞章は蜀山人が「北里初春の景を盡せり」と激賞した名作である。歌舞伎淨瑠璃又は座敷淨瑠璃の詞章は、雅俗混淆の美辭から成つて居るが、蕪雜を極めたものが多く、内容は動もすれば卑俗淫靡に墮して居るのであつて、近松の作品に見るやうな、藝術的香氣に滿ちたものはない。尤も之を三味線に合せて語る時には、音曲として眞の價値を發揮するのである。

第九章　歌舞伎と狂言本

一　創始期

歌舞伎

歌舞伎は舞踊劇・科白劇・樂劇の三要素の調和せられた、民衆的娯樂劇の一である。歌舞伎といふ語は、「かぶき者」（異様な振舞をする惡徒の事）の「かぶき」と同じく、もと動詞の「傾(かぶ)く」の名詞形である。古くは「かぶき女」「かぶく歌」「かぶきの座」の如く假名書にしてゐたが、後に歌舞妓又は歌舞戯の字を當てるやうになり、明治になつて一般に歌舞伎と記すやうになつた。

お國歌舞伎

歌舞伎は上古の舞踊と、それに伴なふ歌謠に源を發して居るのであるが、直接の起原となつたのはお國歌舞伎である。お國（慶長十二年歿一説に慶長十八年歿享年六十七又は八十七）の傳には諸説があるが、出雲國杵築の中村に住んだ大社の鍛冶中村三右衛門の女で、大社の巫女であつたと云ふのは、稍信ずべき説のやうである。お

國は初め大社の修繕費を集める爲に、諸國を勸進して京都に來た時には、菅笠を持ち、黑色の絹の法衣を著け、眞紅の紐の附いた鉦を襟に懸け、それを鳴らしながら稱名混りの小歌を謠ひ、且つ踊つたと傳へられて居る。當時これを念佛踊又はやゝ子踊と呼んだ。念佛踊は慶長八年の頃、滿都の人氣を集めてゐたが、當時は既に女の舞踊の外に、男子に扮した女優と女裝した男優とが、單純な所作を演じてゐた。お國歌舞伎が是である。お國の後には二代目お國があつて、元和の頃には男裝した女優と女裝した男優が登場して、嫖客の物眞似や、能の狂言に傚つた滑稽な所作を演ずるやうになつた。是より先慶長の末頃から、お國歌舞伎が歡迎せられるにつれて、遊女などの間からも摸倣する者が續出して、女歌舞伎は三都を始め、各地に流行したのであるが、彼等は技藝よりも寧ろ容色や媚を賣る事によつて、民衆に持て囃されるやうになつた。かくて芝居と遊廓とが交渉の度を增すに連れて、女歌舞伎の流行は風教上に多くの弊害を與へたので、幕府は遂に寬永六年に、全國的に女歌舞伎を始めとして女舞女淨瑠璃などの興行を禁止した。

女歌舞伎禁制以前慶長の末頃に、容貌の勝れた少年を集めて歌舞を演じたのは、若衆歌舞伎の起原である。若衆歌舞伎は元和の頃には、少年の踊子と年長の男優とによつて組織せられてゐたが、女歌舞伎禁止の後にはいよ〳〵勢力を得て、遂に三都の劇界を獨占するやうになつた。若衆歌舞伎といふも、畢竟女歌舞伎の女優に代へるに、前髮の美少年を以てしたまでの事であつて、大振袖に太刀を佩いた若衆は小歌につれて舞ひ、男優は主として世態を寫した簡單な筋の狂言を演じた。かくて女歌舞



若衆立姿
（歌舞伎圖說に據る）

伎及び若衆歌舞伎に演じられた歌舞は、やがて發達して後の歌舞伎の所作事となり、男優の狂言は即ち後の科白劇の源流となつたのである。さて若衆歌舞伎は、もと衆道を背景として發生したものであるから、社會に惡影響を及ぼす事は、女歌舞伎と異なる所がなかつた。よつて幕府は承應元年に至つて、若衆歌舞伎御法度の令を發して之を禁じた。

野郎歌舞伎

若衆歌舞伎の禁制があつて後に現れたのは、前髪を剃り落した野郎頭（野郎は遊冶郎の略）の男優によつて演じられた野郎歌舞伎である。女歌舞伎並に若衆歌舞伎が法度に遭つた事は、歌舞伎の發達上一大打撃であつたけれども、實際は是によつて、却つて劇的諸要素の急激なる發達を見るに至つた。即ち若衆歌舞伎までは、歌舞伎史上所謂好色期であつて、俳優の容色を第一としたのであるが、野郎歌舞伎になつてからは、女方の發達や假鬘の工夫が起り、殊に容姿の美を失つた償として、專ら技藝によつて觀客の歡迎を受けようとする傾向を生じた。かくて天和の頃から俳優に立役敵役女方道化方などの如き分業を生じ、各自其の役柄に應じて技藝の發達に努めると共に、劇場音樂や、衣裳扮裝や、舞臺裝置

などの方面も長足の進歩を遂げ、又演技の上には、從來の一幕物の離狂言から、首尾一貫した續狂言への發展を見るに至つた。要するに歌舞本位の歌舞伎が、眞に演劇としての發達の途に就いたのは、野郎歌舞伎發生以後であつて、寛文延寶の頃には、やがて來るべき元祿時代の發達期に對する、諸準備が略備はつたのである。

今三都に於ける劇場の設立に就いて簡單に記して置く。歌舞伎の發祥地の京都に於ては、古く元和年間に四條に七箇所の櫓が公許せられて居たが、寛文年中には更に都萬太夫座・早雲長吉座・亀屋粂之丞座・布袋屋梅之丞座などが設立せられて、此の四座は後世まで存續した。大阪では寛永頃道頓堀に三座があり、正保の頃には八座となつたが、承應以後名代となつたのは其の中の六座であつた。(其の後享保頃には三座となつた)江戸に於ては寛永元年に、猿若勘三郎が始めて猿若座(後の中村座)を設立し、寛永十一年には村山又三郎が村山座(後に市村座と改稱)を建てて、兩座の競爭となり、更に寛永十九年に山村座、萬治元年に森田座が設立せられて、合せて四座となつた。尤も山村座は其の後正德四年に斷絕して三座となつた。

發生期の狂言

以上は元祿以前の歌舞伎發生期の概觀である。續いて此の間に於ける狂言の發達を略述しよう。先づ女歌舞伎及び若衆歌舞伎の時代には、『小舞十六番』などの小歌に振を附けた歌舞を演ずると共に、一方では中年の俳優によつて、能狂言を通俗化した幼稚な狂言、若しくは嫖客の物眞似や、闊達な俠客の風俗を寫した簡單な筋の狂言を演じたのである。此等の要素はやがて發達して、元祿時代の寫實風の傾城事や、鞘當丹前物などの如き舞踊を加味した型物となるのであるが、當時は未だ幕帳の如き

ものはなく、俳優は各自役柄に應じた臺詞の大要を記憶してゐたのであるから、其の俤を窺ふべき資料に乏しいのである。只現存するものとしては、江戸歌舞伎芝居の草分けである猿若座を中心に發生した、江戸獨得の猿若狂言を擧げ得るのみである。即ち江戸大芝居三座の家の狂言として名高くなつた猿若座の『猿若』及び『新發意太鼓』、市村座の『海道下り』、森田座の『佛舍利』などであつて、其の臺帳は『三座家狂言竝由緒書』に載せられて居る。此等は能狂言の樣式に倣つて仕組んだ一幕物で、流行歌を取り入れ、小舞を混へたものであるが、多少時代の風俗をも寫して、觀客を喜ばしたのである。

一方上方に於ては、主として傾城事若しくは衆道事を演じたのであるが、其の狂言は殆ど傳はらず、只其の二三の梗概を記したものがあるばかりである。例へば富永平兵衞の著『藝鑑』に、若衆歌舞伎の代表作としての石川五右衞門の狂言『浪人盃』や、衆道の事を取扱つた『氏神詣』などの梗概を傳へて居るが如きである。要するに寛文以前に於ける狂言は、江戸上方共に簡單な筋の一段物であつて、未だ地方的に著しい特色を示すに至らなかつたのであるが、時代を下るに從つて、寫實風を增したのは注意すべき事である。而して上方江戸共に傾城事が歡迎せられたのは、太平の餘澤を享けて、漸く遊里の繁榮を來した時代の反映である。

續狂言の發生

其の後俳優の技藝が進歩すると共に、筋の複雜な狂言を要求するやうになつたのは當然であつて、寛文四年には江戸の市村宇左衞門が作者都傳內と協力して、始めて續狂言を工夫して、二番續きの『今川忍び車』『竹生島』などを演じ、同じ年に大阪では、役者福井彌五左衞門作の『非人敵討』といふ二番

續きの狂言を演じた。東西時を同じうして續狂言を工夫したのは、時代が然らしめたのであつて、是より他の座に於ても引續き續狂言を演ずるやうになつて、狂言は玆に始めて發達の途に就いた。かくて歌舞伎が長足の發展を遂げるにつれて、延寶頃狂言作者と名乘つた富永平兵衞が現れて以來、狂言作者が次々に輩出し、又同じ頃から繪入狂言本や歌舞伎繪が行はれ、明曆二年以來時々刊行せられた役者評判記も、此の頃から盛に出版せられるやうになつた。

二　發　達　期

歌舞伎發達期

元祿から享保に至るまでの四五十年間は、歌舞伎劇の發達期であつて、此の時代に發達した藝風脚本などは、長く後世の準據となつた。歌舞伎劇發達期の初めの二十年間は、殊に俳優並に作者に空前の天才が輩出して、歌舞伎劇は百花繚亂の盛觀を呈した。狂言作者は後に述べるとして、先づ俳優に就いて云へば、江戶には初代市川團十郞・初代中村七三郞・中村傳九郞等の名優があり、上方には坂田藤十郞・山下京右衞門（以上京都）嵐三右衞門・竹島幸左衞門（以上大阪）及び女方に水木辰之助・芳澤あやめ・荻野澤之丞の所謂女方三幅對があつて、各其の妙技を發揮して、東西劇壇は對立して、日本演劇史上空前の盛況を呈した。

上方と江戶の藝風の相違

元祿以前の歌舞伎劇には、未だ上方と江戶の間に著しい藝風の相違を見なかつたが、此の時代には天才的名優が各自自覺的に特質を發揮すると共に、土地に適合した藝風を創めたから、東西の劇風は

對照的に特色を示すやうになつた。元來江戸と上方は歴史を異にし、人情風俗を異にして居るから、其の地に成長した文化もそれぞれ特色を發揮して居るのであつて、元祿期の歌舞伎に於ても亦これを認め得るのである。即ち代表的名優に就いて云へば、江戸の團十郎は金平淨瑠璃から脱化した豪壯雄大な荒事（判官物曾我物の類）を演じて喝采を博したのに對して、上方の藤十郎は寫實風の傾城買の狂言、即ち和事（夕霧物の如き）を得意として人氣を集めたのであつて、東の夢幻的象徴的な荒事藝と、西の優艷な寫實風の和事藝とは、長く歌舞伎劇の二大要素として流れて行くのである。次に注意すべき事は、當時の名優がそれぞれ役柄に應ずる技藝の創造に苦心した事である。一二の例を擧げれば、江戸の七三郎は武道物にも長じてゐたが、殊に上方の藤十郎の藝風に近い和事濡事などを演じて、江戸の荒事に寫實風を加へたのは特筆すべき事である。又上方に於て辰之助以下三人の女方俳優が、歌舞伎劇の重要な位置を占める女形を創始したのは著しい事績であり、殊におやめが終生を女形の練達に捧げた功績を見逃してはならぬ。

享保期の狀態

元祿時代の代表的名優初代團十郎は、寶永元年に舞臺で横死を遂げ、同五年には藤十郎の引退があり、同じ年に七三郎も他界して、歌舞伎劇は俄かに寂寥を來したのであるが、享保の頃には二代目團十郎・元祖澤村宗十郎・元祖瀨川菊之丞の少壯有爲の俳優が現れて、やがて續くべき寶曆以後の全盛期に對する準備をなしたのである。江戸と上方の俳優が互に去來して、其の地の藝風に影響を及ぼしたのは、元祿以來の事であるが、正徳享保の頃には、相互の關係がいよ〳〵密接になつた結果、東西兩

劇壇の藝風が融合せられる傾向を生じた。當時上方に於ては傾城事が漸く飽かれて、江戸で流行した武道物が歡迎せられたのであつて、東西兩劇壇に立ち、而も和事と武道物に兼ね秀でた宗十郎の如きは、從來輩出した諸名優の長所を集成し、時代の要求に適合した藝風を創めて成功したのである。

元祿享保の頃は、劇場の構造・舞臺の裝置・役者の扮裝竝に化粧法・劇場音樂・脚本なども、長足の進歩を遂げた時代であり、又歌舞伎劇が一般民衆に喜ばれるにつれて、繪入狂言本・芝居淨瑠璃の正本・臺詞盡（役者の名高い臺詞を抜き集めたもの）歌舞伎繪・役者評判記などの刊行物が盛に現れた時代である。併し此等は主として日本演劇史上に取扱はるべき問題であるからそれに讓つて、當時の著名な狂言作者と、其の代表作の概要に就いて述べて置く。

元祿享保期の狂言は、上方では三番續、江戸では四番續又は五番續が多かつた。かくて續狂言が流行した結果として、俳優が作者を兼ねる從來の慣習を破つて、始めて專門の作者が現れた。後に專ら狂言作者として立つた富永平兵衛や、最初から作者として活躍した近松門左衛門などが是である。尤も當時の狂言の多くは、一座の中心となつた役者又は座元が、自ら筋を立てたのであつて、大半は作者未詳であり、又俳優が作者を兼ねる事は今後も長く續いたのである。俳優兼作者は舞臺上の知識に通じて居る爲に、脚色竝に演出上の工夫には種々の便宜があるが、彼等は一般に創作的伎倆を缺いてゐたから、勝れた作品を得る事は困難である。從つて當時の狂言の傑出したものは、主として專門作者の手に成つたのである。序に一言して置きたいのは、當時刊行せられた狂言本の事である。此の頃

の狂言本はすべて繪入の筋書であるから、繪入狂言本と呼ばれた。文章は臺詞ト書き・舞臺書きの區別も明瞭でなく、記述の樣式や挿繪などが、すべて當時の浮世草子に類似して居る。繪は菱川師宣・古山師重・鳥居清元・同清信等の筆で、一册十丁乃至十五丁のものを普通とするが、稀に二册物もある。隆盛期は元祿寶永年間であつて、享保になつて衰へ繪が主體となつて繪本番附となつた。なほ當時刊行せられた狂言本は、主として三都の當り狂言であつて、すべてが刊行せられたのではない。

江戸の作者
三升屋兵庫

元祿享保期の狂言作者はかなり多かつたが、就中東西の代表的作者は三升屋兵庫と近松門左衛門である。（當時狂言作者は役者が兼ねたのであつて近松の如きは例外である。）三升屋兵庫（寶永元年歿四十五）は本姓堀越、名は海老藏、後に段十郎と云つた。家號を成田屋、俳號を才牛といひ、作者としては三升屋兵庫の名を用ひた。先祖は甲斐の武士堀越十郎より出で、武田氏滅亡後天正の末頃下總に移住して農となり、父重藏に至つて江戸に出て和泉町に住み、地子總代を勤めてゐた。段十郎は寛文十一年十二歳で始めて劇界に入り、十四歳の時藝名を市川段十郎と改めて、始めて中村座の舞臺に現れ、『四天王稚立』（をさなだち）に坂田公時に扮したのは、所謂荒事藝の初であると言はれて居る。元祿六年段十郎の字を改めて團十郎とし、京都に上つて村山平右衛門座に出演して喝采を博した。俳人椎本才麿の教を受けて才牛の號を贈られたのは此の頃であつて、役者が藝名の外に俳號を持つ事は才牛に始まるのである。其の後大阪の芝居に出演し、元祿十年江戸に歸り、江戸第一流の役者として、中村座及び森田座に出演して名聲を轟かし、寶永元年二月十三日俳優生島半六の兇刄に斃れた。團十郎は荒事の創始者であつて

俳優としては豪快悲壮な忠臣武将や、超人間的な鬼神妖怪などに扮する事を得意とした。彼は又文才があつて劇作者としても重要な位置を占めて居る。

兵庫の最初の作と言はれるのは、貞享元年（二十五歳）の作『門松四天王』であつて、終生の作品は少くも三四十篇程ある。其の著名な作は、『參會名護屋』（元祿十年一月中村座興行）『兵根元曾我』（元祿十年五月中村座興行）『源平雷傳記』（元祿十一年九月中村座興行）『當世小國歌舞伎』（元祿十二年十一月森田座興行）『景政雷問答』（元祿十三年正月森田座興行）『星合十二段』（元祿十五年二月中村座興行）『成田山分身不動』（元祿十六年四月森田座興行）『小栗十二段』（元祿十六年七月森田座興行）等である。兵庫の作は荒唐無稽な筋のものが多いのであるが、抒情的な場面もあり、素材の配置や美化に巧みであつて、勝れた天分を示して居る。なほ彼の自作狂言中には、市川宗家の藝として代々傳統的に尊重せられた種々の型（七代目海老藏が選んだ歌舞伎十八番は其の代表的なもの）の根源を含んで居るものが多い。一二の例を擧げれば、『參會名護屋』の北野社頭の場で、悪徒太宰之丞が名劒の雷を奉納しようとする時、不破伴左衞門（團十郎役）が現れて「暫く」と聲を懸けて繪馬の大福帳の威光を述べる臺詞があるのは、「暫」狂言の根源であり、又『星合十二段』の安宅關山伏問答の場は、有名な『勸進帳』の起原である。其の他團十郎が創めた



團十郎の暫（鳥居清重畫）

藝風や作品が、後世の歌舞伎劇の發達に及ぼした影響は極めて著しいのである。

其の他の作者

元祿享保頃の江戸の注意すべき狂言作者には、兵庫の外になほ有名な『傾城淺間嶽』（元祿十一年正月京都山下半左衛門座興行）を作つたと云はれる和事の名優中村七三郎（寶永五年歿享年四十四、一說四十七）があり、又團十郎歿後に勝れた世話物を書いた津打治兵衛（寶曆十年歿七十八）がある。治兵衛は寧ろ享保以後に活躍した作者であるが、寶永から享保頃の著名な作には、中將姬說話をお家騷動に取り入れた『傾城顚本尊』（寶永四年三月山村座興行）や、始めて累殺しの說話を取つて盛綱藤戸の先陣の世界に組み入れた『大角力藤戸源氏』（享保十六年秋村山座興行）などがある。此等の作は團十郎の作風と異なつて、時代物と世話物の折衷から成るもので、江戸歌舞伎の脚色の變遷を代表して居る。

上方の作者

轉じて上方を見ると、狂言作者の祖と云はれる福井彌五左衛門に次いで、作者として立つた富永平兵衛（傳記未詳）がある。延寶天和の頃は大阪の劇壇に活躍してゐたが、晩年の元祿年代には京都にあつて近松と對抗して奮鬪した。尤も彼が人氣を集めたのは延寶天和頃であつて、京都に於ては新進の近松を凌ぐ事が出來なかつた。元祿以前の作品に就いては記錄がないので明かでないが、元祿前半期には『丹波與作手綱帶』（元祿三年京都村山平右衛門座）『娘孝行記』（元祿五年か都萬太夫座）『武道達者』（元祿六年か都萬太夫座）『日本月蓋長者』（元祿七年都萬太夫座）『業平河內通』（元祿七年か都萬太夫座）などを書いた。此等はすべてお家騷動物であつて、時代物の發達に貢獻する所が多い。平兵衛の他になほ白石彥兵衛・小島彥十郎其の他群小作者があつたが、上方の代表作者であり、而も元祿歌舞伎劇第一流の作者は近松門左衛門である。近松の狂言は當時の作者中で最も多く傳

はつて居るから、其の作風の變遷を辿る事も比較的に容易である。

近松門左衛門が狂言作者として活躍したのは、主として壯年期の元祿年間であつて、元祿の末年には專ら淨瑠璃作家となつたのである。尤もそれ以後にも脚本を書いたけれども、淨瑠璃の飜案や書替が多いのであつて、特色のある作品は見出し難い。近松の脚本を考察するに當つて注意すべき事は、これを演じた俳優に立役者藤十郎があり、女方に辰之助等があつて、俳優と作者が互に影響し合つた事である。殊に藤十郎は近松にとつては淨瑠璃に於ける義太夫以前の知己であつて、近松は主として彼の藝風に適合する世話狂言を書いたのである。近松が始めて脚本を書いたのは、延寶五年二十五歳の時であつて、都萬太夫座に上演せられて好評のあつた『藤壺の怨靈』(藤壺の后の怨靈が藤の花から大蛇になるといふ趣向を立てた作)が最初であると言ひ傳へられて居る。次いで延寶六年正月に大阪新町の名妓夕霧が病歿した時、直ちに追善劇『夕霧名殘の正月』を書き上げ、二月には大阪の荒木座に於て藤十郎の伊左衛門で上演せられたと言はれて居る。併し此等の狂言本は現存しないのであり、其の説の根據にも疑問があるのであつて、明確な事は知り難い。近松の狂言本にして現存するものは二十數篇であるが、實際にはなほ多くの脚本を書いたであらうと思はれる。現存する作品中で初期に屬する著名なものは、嘉太夫の爲に書いた『世繼曾我』を世話に書き換へた『大名なぐさみ曾我』(天和三年か都萬太夫座興行)藤十郎がやつし事の名聲を揚げた『百夜小町』(貞享元年座本坂田藤十郎)及び其の切狂言として上演せられた『夕霧七年忌』などである。次いで名高いのは、水木辰之助が猫の所作を演じて、始めて所作事師としての名

近松の狂言

優と云はれた『今源氏六十帖』（元祿元年都萬太夫座上演）同じく辰之助が江戸に下る時の名殘狂言として演じた『水木辰之助餞振舞』（元祿三年十一月都萬太夫座上演）などである。

近松の狂言には當時の他の狂言と同樣に、未だ時代物と世話物の間に明瞭な區別がない。又取扱つた題材には王代物・曾我判官物などもあるが、此等は彼が一方に於て、盛に淨瑠璃に仕組んだのであるから、狂言には之を避けて、主として上方趣味に適し。而も藤十郎の藝風に適した傾城事を取扱つて、其の大部分をお家騷動に結び付けて居る。從つて近松の狂言の傑作は、世話狂言殊にお家騷動物に多いのである。お家騷動物の傑作は『一心二河白道』（元祿十一年）『傾城佛の原』（元祿十二年）及び『傾城佛の原』を書き替へた『傾城壬生大念佛』（元祿十五年）（以上何れも都萬太夫座上演）の三篇であつて、殊に最後の狂言が代表作である。『一心二河白道』は、清水寺の若僧清玄の櫻姬に對する執拗な戀が、生靈となつて度々櫻姬を惱ます事を骨子とした狂言で、後の清玄櫻姬物の粉本となつてゐる。此の脚本は戀愛と怪談の交錯から成り、近松の作中稀に見る凄慘な場面が多いのであつて、濡事に長じた藤十郎の技藝を見せる爲に作られた事は言ふまでもない。『傾城佛の原』は、越前國主梅永刑部の子文藏（藤十郎役）の傾城買をお家騷動に結び付けた作であつて、月窓寺參詣や同寺開帳の場などがあるのは、當時其の寺の開帳があつた爲である。此の狂言は、其の前年（元祿十一年）に布袋屋座で、中村七三郎の『傾城淺間嶽』が百十餘日に亙る興行を續けたのに對抗して、近松が藤十郎と協議して工夫した苦心の作であり、而も上演の結果は見事に七三郎を壓倒する事が出來たので、一層名高い作である。此の狂言は當時極めて好評を以て迎へ

られたので、引續き其の「後日」や「三の後日」が演じられ、又改作が次々に現れた。『傾城壬生大念佛』は前作を一層複雜な筋に書き替へて、更に成功を收めた傑作である。此の狂言の中に、京都壬生寺の壬生狂言の興行や、地藏菩薩の身代りや、開帳の場などを取入れて居るのは、其の開帳を當て込んだのである。なほ此の狂言も一般の歡迎を受けたので、「後日」や「三の後日」が引續き興行せられた。

元祿享保期の狂言本は、既に述べたやうに、繪を挿入した稍委しい筋書に過ぎなかつた。併し當時の狂言は一般に三番續であつて、（近松は淨瑠璃を改作した五番續の狂言も試みて居る。）其の各は更に二場（時として三場）に區分せられて居るから、少くも三幕六場から成つて居る。其の内容は、善人榮えて惡人滅ぶといふ、定型にはまつたものが多いけれども、組織が複雜になつた結果として、斬合・身代り・狂亂・愁歎・口說・道行・怨靈・妖怪・靈驗等、あらゆる趣向を見せるやうに仕組む事が出來て、極めて場面の變化に富んだものになつたのは著しい進歩である。尤も當時の俳優は、觀衆の趣味に迎合すると共に、自己の得意の演技を見せる事を主眼としたから、作者は常に俳優の束縛を受けて、思ふままに自己の天分を發揮する事が出來なかつた。從つて近松の如き天才と雖も、なほ自由に才能を揮ふ事が出來なかつたのであつて、彼が後に比較的自由な操劇の作者に轉じたのも、此の桎梏を逃れる爲であつたであらうと想像せられる。併し近松は、とにかく元祿歌舞伎發達期に於ける作者の隨一であつて、其の作には當時の歌舞伎劇に於て發達した、あらゆる趣向が集成せられたのであつて、後に鶴屋南北・古河默阿彌等の如き大才が現れるまでは、大體近松等によつて定まつた型を反復するに過ぎなかつた。

歌舞伎と淨瑠璃との接觸

近松が其の狂言本に、豐富な脚色上の伎倆と、稀に見る才筆とを揮つた事は言ふまでもないが、更に注意すべき事は、彼が歌舞伎と淨瑠璃の作者を兼ねた關係から、後年世話淨瑠璃を書く前に、既に藤十郎の爲に世話狂言の傑作を書いた事と、淨瑠璃と歌舞伎の間に題材脚色趣向などの交換を計つて、相互の發達に多大の貢獻をした事とである。かくて近松以後の淨瑠璃は著しく歌舞伎に接近し、又歌舞伎は淨瑠璃から多大の影響を受けたのであつて、近松及び彼以後の淨瑠璃の名作は、盛に歌舞伎芝居にも演じられて、兩者は殆ど共通の狀態となつた。

元祿期の歌舞伎狂言の著名なものは高野辰之・黑木勘藏兩氏編纂の『元祿歌舞伎傑作集』二卷に收められて居る。其の上卷は江戸の部下卷は上方の部である。又近松の脚本は『演劇叢書』の『近松脚本集』高野辰之氏校『近松歌舞伎狂言集』高野辰之黑木勘藏兩氏編『近松門左衞門全集』等に收められて居る。

第十章　流行歌曲

近世歌謠の特質

江戸時代前期は太平の餘澤を享けて、一般民衆の間に遊樂氣分が漲つた時代であるから、流行歌・三味線歌・箏歌・踊歌・歌舞伎歌・門附歌などの類が著しい發達を遂げた。此の時代の歌謠並に音曲の著しい特徴として擧ぐべき事は、(一)民衆の娛樂として上下都鄙に亙つて流行した事、(二)種々の歌謠並に音曲が互に接觸し混淆して、複雜多樣の發達を遂げた事、(三)歌詞の內容が平民社會の享樂的生活を反映して居る事、(四)歌曲に從來の七五調七七調を基礎とするものもあるが、最も優勢なのは七七七

五(二四・四三・三四・五)の調であつて、是が近世歌謠の基本となつて居る事、(五)伴奏樂器の主要なものは尺八・三味線・箏の三種であるが、最も盛に用ひられたのは三味線であつて、是が近世樂曲を支配した事、以上の五項である。

隆達節と弄齋節

近世歌謠並に樂曲の源は室町時代に發して居る。先づ流行小歌に就いて云へば、室町時代の末期から江戸時代初期にかけて流行したものは隆達小歌である。隆達小歌の事は既に述べて置いた。(五八八頁參照)隆達節は初め扇拍子で謠はれ、後に一節切(ひとよぎり)の尺八に合せて謠はれたのであるが、是に次いで起つた弄齋節は、三味線を伴奏に用ひ、歌詞も近世風の七七七五調が大部分を占めてゐるのであつて、其の後に流行した小歌は之を祖として起つた。弄齋節の創始者弄齋は桑門であると云はれて居るが、其の傳は詳かでない。弄齋節は元和の頃上方に起り、寛永年間に京都の遊里に流行し、其の後江戸に傳はつて江戸弄齋と呼ばれた。其の歌詞は種々の歌謠集に六十首許り傳はつて居る。今二三首を引いて置く。

文はやりたし、我が身は書かず、物をいへかし、白紙が。

花は散りても、又春咲くが、君と我とは、一さかり。

よしや今宵は、曇らばくもれ、とても涙で、見る月を。

三都の流行小歌

弄齋節に次いで現れて寛永頃から流行した上方歌に半九節・片撥節などがあつて、主として遊女の間に行はれた。當時江戸ではほそり節・小六節などが起り、次いで明暦前後には丹前節・土手節・小室節などが流行した。此等はすべて遊里の流行歌であつて、頽廢的氣分の漲つたものが多い。其の後上方を

中心に廣く流行したのは投節である。明暦年中京の島原の遊女、大坂屋河内が創めたものであると云はれて居る。其の後島原の廓から加賀節が起つたが、寛文から元祿正德の頃にかけて最も流行したのは、京の投節とこれに對して大阪新町に起つた籬節(まがき)であつて、之に江戸吉原の繼節(土手節の一名)を併せて、三都の代表的流行歌と稱へられた。籬節の歌詞は全く傳はつてゐないが、投節・繼節の歌は諸書に多く散見する。殊に『松の葉』第五卷には古今百首投節を收めて居る。左に其の中から二三を抄錄して置く。

我は菖蒲(あやめ)の、ねにこそ泣かめ、引くな袂の、露けきに。
廓はなれて、罪なき月を、いつか都の、空に見ん。
もはや命も、絶えなば絶えよ、住めば恨めし、同じ世に。
あふさきるさに、亂れて今朝も、尾花がくれに、立ちとまる。

流行歌にはなほ三都を始め各地に行はれた民謠(田舍歌)や、各種の踊歌があり、又歌舞伎踊の歌などがある。此等の歌詞の內容形式などには、前記の遊里流行歌と異なつた特徵があるのであるが、今は省略して、當時の歌曲の重要な位置を占める三味線歌と、箏歌の變遷に就いて略述しよう。

三味線歌

三味線の傳來に關しては、文祿年中石村撿校が之を傳へたとする說もあるが、更に古く永祿の頃に泉州堺の琵琶法師中小路といふ者が琉球から之を傳へ、次いで石村撿校の時代になつて、漸く流布したとする說に從ふべきである。左に『糸竹初心集』や『松の葉』の序によつて、三味線歌の祖流の系圖を

掲げて置く。柳川八橋兩撿校の師匠に就いては異說がある。

永祿頃 中小路 琵琶法師 ― 文祿頃 石村撿校 ― 同上 虎澤撿校 ― 慶長頃 澤住撿校 淨瑠璃諸流の祖
― 寛永頃 柳川撿校（加賀都） 三味線歌の組
―（山野井撿校）― 八橋撿校（城秀） 箏曲の組

三味線に合せて謠つた最初の歌は、在來の小歌を結集して成つた組歌であつて、其の制定に與つて最も功のあつたのは柳川撿校傳記未詳である。組歌の最も古いのは本手組であつて、石村撿校が定めた琉球組を最初とする。次いで虎澤撿校の時に端手組破手とも書くが形成せられ、更に柳川撿校の時に裏組が定められた。（本手・端手・裏は三味線の曲名である）柳川撿校は本手組竝に端手組に改良を加へ、更に裏組を作つた人で、後世上方歌（江戸歌に對する稱で、上方では地歌と呼んだ）の祖と稱せられて居る。寛文四年刊行の『糸竹初心集』には、柳川流の組歌を表七組・裏七組此の表裏は本手端手に當るかとして居るが、貞享二年刊行の『大幣』大怒佐とも書くには、本手七組・端手十三組歌詞は合せて三十四首を載せて居る。次いで元祿十六年に上梓せられた『松の葉』には、『大幣』の端手十三組の外に新曲を加へて、之を七組に分ち、別に裏組七種を加へて、本手・端手・裏各七組歌詞の總數百三十三首として居る。而して『松の葉』の編者は右の本手七組を本曲として、石村・虎澤が制定したものであると云ひ、端手七組を新曲として、裏組七種と共に柳川撿校の作

曲であるとして居る。左に比較的短い歌の例を擧げて見よう。

比翼連理よの、天に照る月は十五夜が盛り、あの君さまはいつも盛りよの。（琉球組の中）

とても緣なき仲ならば、などや初のつらからん、いとど烈しき吹上濱に、鷄を限りにかの樣待てば、寒き嵐も身にしまぬ。（端手組の中）

筆で書くとも、繪に寫すとも、さらに盡きせじ松島の、波にうつろふ月の影、島の數しん知らぬ。（裏組の中）

長歌

組歌は室町時代の末期から江戸時代の初期に至る頃の流行小歌や、其の替歌などを結集し、或は新作小歌を取入れなどして成つた雜然たる集合體であつて、天和貞享の頃には既に古風のものとして飽かれた。是に代つて行はれたのは、撿校勾當等によつて作曲せられた長歌である。長歌といふ名稱は『糸竹初心集』にも『大幣』にも未だ見えてゐない。尤も『大幣』には、江戸の淺利・佐山兩撿校、京の朝妻勾當等が始めた新作二十二曲を「新曲歌之唱歌」と題して揭げ、其の中の長篇十數曲は『松の葉』の長歌の部に採られて居る。次いで『松の葉』には、始めて長歌と題して五十首を載せて居るのであつて、長歌といふ名稱は『松の葉』が成立した元祿の頃から用ひられたのであり、長篇の長歌が作られたのも、其の頃からであらうと思はれる。長歌も亦古今の流行歌、歌舞伎歌、謠曲の小謠などを取入れたものが多いのであるが、組歌と異なつて、稍纏まつた內容を現す長篇となつて居る。而して元祿前後の新曲作者には、俳人戲作者などの名が見える。其の著しい者を擧げれば、山岡元隣・北條團水・英一蝶・井原西鶴・近松門左衞門・紀海音・松田文耕堂・池西言水・榎本其角・深川湖十等である。かくて長歌は組歌よ

りも一歩を進めたのであるが、其の歌詞は縁語懸詞を用ひ、古歌や故事に據つたもので、優美典雅ではあるが、時代の趣味からは極めて遠いものであつた。物盡しの多いのを見ても、其の一般を推す事が出來る。そこで元祿の頃から、新たに當代の流行歌を多く取入れた、卑俗な端歌と稱するものが流行するやうになつた。

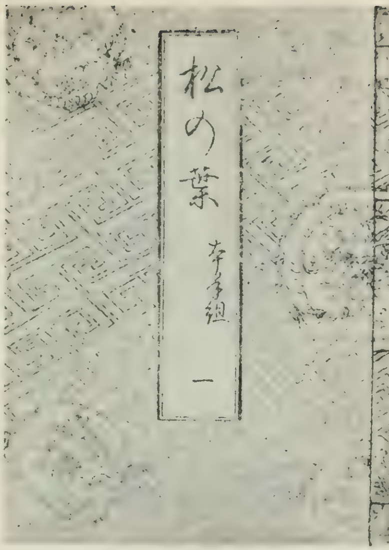
端歌は本手に對する端手と同じく、當世風の花やかな曲節で謠ふ歌の義であつて、多くは短い歌であるが、中には稍長いのもある。其の調子には本調子・二上り・三下り・騒ぎの四種の別があり、歌詞には長短樣々なものがあり、其の內容も多種多樣である。而して長歌と異なる特徴は、歌舞伎や淨瑠璃などの影響を受けて、戲曲的若しくは說話的傾向が見える事と、遊樂氣分の横溢した當時の社會、殊に花街の情趣生活の反面としての寂しみを謠つたものが多い事とである。元祿年間の端歌は『松の葉』に七十三首『若緑』に七十九首收められて居る。左に『松の葉』から二三を抄錄して置く。

夏は垣根の、ほんほの〲あやなしや、卯の花白々明けても、いかに訪ひ來ぬ郭公、かたひ夕立つあと、凉しき小村雨、梢に蜩の音、いづれ夕はただならぬ。

籬ながらの御見はつらや、人目忍べば思惑ばかり、袖は涙の淵瀨となりて、憂きは流れの、身は捨小舟、せめて暫しは止まれかし。

幾夜重ねて降り積む雪の、佐野の渡りに駒引きとめて、拂ひかねたる吹雪の、霙まじりに降り來るを、徒歩人もえ、それは戀の夕暮、色に凍えて死のとも、せめて思ひを語りなば、はてそれまで。

以上述べた流行歌や三味線歌を集めた書は、かなり多く上梓せられた。此等の中で『吉原流行小歌惣まくり』萬治三年刊行『淋敷座之慰』延寶四年成る『長歌古今集』天和二年刊行を除く外は、すべて上方で刊行せられた。上方歌の本として著名なのは、『糸竹初心集』中村宗三編寛文四年刊『大幣』貞享二年刊行『松の葉』秀松軒編元祿十六年刊『落葉集』（一名『松の落葉』）大木扇徳編元祿十七年刊行『若緑』蒂雲閣主人編寶永三年刊行等である。此等の中で上方歌を集成した代表書は『松の葉』五冊である。編者の秀松軒は何人であるか詳かでない。第一巻には三味線の組歌、第二巻には同じく長歌、第三巻には同じく端歌、第四巻には吾妻淨瑠璃、第五巻には古今百首投節を收めてゐる。此の書は前の『大幣』を整理し増補して成つた整然たる歌謠集である。所收の歌謠中には古い時代のものもあるが、大部分は元祿期のものであつて、當時の民衆的敍景詩抒情詩として見るべきものが多い。又此等の歌曲は當代の各種の文學にも多く引かれて居るのであつて、國文學史上注意すべものである。次いで刊行せられた『落葉集』即ち『松の落葉』は七冊より成り、題號が示すやうに、『松の葉』の遺漏を補つたもので重出もかなりある繪入本がある。此の書には歌舞伎歌や踊歌などを多く採つて居る。次の『若緑』は五冊あつて、前二集に倣ひ更に之を增補したもので、特に短篇を多く入れ、『松の葉』や



松の葉

『落葉集』に見るやうな歌舞伎歌を省いて居る。以上で三味線歌を終つたから、次いで箏歌に就いて述べよう。

箏曲

「こと」は絃樂器の汎稱であるから、古くは「琵琶のこと」「琴のこと」「箏のこと」と云つて區別したのである。我が國固有の「こと」は倭琴(一名東琴)で、これに次いで行はれたのは七絃の「琴のこと」である。琴は『源氏物語』や『枕草子』などによると、當時既に古めかしいものとなつて、當世風の箏が持て囃されたやうである。箏は今日一般に行はれてゐる十三絃の琴であつて、元來支那の樂器である。是が我が國に傳來したのは、仁明天皇の御代で、平安時代には支那樂高麗樂などに用ひられ、又催馬樂・朗詠・今樣等の伴奏樂器として用ひられた。其の後長く戰亂の世が續いて、一般音樂が衰微するに及んで、箏も亦忘れられ、僅かに縉紳家や寺院などに傳へられてゐた。これが江戸時代の初めに再興せられた徑路に就いては種々の說があるが、九州の一部に遺存してゐた筑紫箏(箏曲を筑紫樂とも云ふ)に源を發したとするのは、諸說の一致する所である。傳ふる所によれば、後奈良天皇の御代の人で肥前國の住人賢順が、筑後の善導寺の僧侶から傳へた箏曲を、肥前國諫早の慶岩寺の玄恕・法水の二僧に傳へたのが、やがて三都に流布したのであると云ふ。此の法水に學んだ八橋檢校(貞享二年歿七十二)(初め姓を山住と云ひ、後上永と改めた)は卽ち近世に於ける箏曲の祖と云はれる人で、寛永の末頃惣檢校に任せられた。

組歌

八橋檢校は元來三味線の名手であるが、後には專ら箏を專門にした人であつて、三味線の組歌に倣

つて、始めて箏の組歌十三曲を制定した。箏の組歌の源流は、既に室町時代以前の寺院の音曲にあるのであるが、三味線の例に傚つて、俗耳に入り易いものを作つたのは、八橋撿校の功績である。八橋流組歌の名は『糸竹初心集』に見えて居るが、歌を掲げたのは延寶四年刊行の『淋敷座之慰』が最初である。八橋撿校によつて制定せられた十三曲は、元祿享保期以後次々に現れた新曲に對して、古曲と呼ばれて居る。左に古曲の最初に置かれて居る菜蕗組を掲げて置く。

菜蕗といふも草の名、茗荷といふも草の名、富貴自在德ありて、冥加あらせ給へや。
春の花の琴曲、花風樂に柳花苑、柳花苑の鶯は、同じ曲を囀る。
月の前の調は、夜寒を告ぐる秋風、雲井の雁が音は、琴柱に落つる聲々。
長生殿の裡には、春秋をとめり、不老門の前には、月の影おそし。
弘徽殿の細殿に、たたずむは誰々、朧月夜の內侍の督、光源氏の大將。
誰ぞや此の夜中に、鎖いたる門を敲くは、敲くともよも開けじ、宵の約束なければ。
七尺の屛風も、躍らばなどか超えざらん、羅綾の袂も、引かばなどかきらざらん。

箏の組歌は右の例のやうに、前後に關係のない歌を雜然と連ねたものであつて、其の原歌は朗詠・今樣・延年唱歌・謠曲などの中から取つたものであり、内容は主として『源氏物語』『伊勢物語』や、古歌や故事に因んだ戀愛を歌つたものである。又其の歌體は七(六)五(四)の句を四つ連ねた今樣式のものであつて、近世風の歌曲から見れば極めて古めかしい感がある。蓋し箏は初め上流社會に行はれたもの

で、保守的傾向があるから、其の歌も三味線と異なつて、古雅にして高尚なものを用ひたのである。併し箏曲は寛文の頃から漸く民衆化すると共に、稍統一された新しい組歌が現れ、更に三味線の長歌端歌なども盛に用ひるやうになつた。八橋撿校の後に現れた北島・生田・倉橋・三橋等の撿校は、古曲を改め新曲をも制定した人々である。此の中生田撿校（正徳五年歿）が創めた生田流では、盛に三味線歌を取入れた。（後期の寛政以後關西の生田流と對立して、江戸を中心に流行した山田流は、生田流から分れたのである。）

箏歌の組歌を載せ且つ註釋を加へたものは、貞享以後次々に刊行せられた。其の最も古いのは松風軒の『知音の媒』（一冊貞享三年刊行）である。松風軒は何人であるか詳かでない。此の書には八橋撿校の十三組の歌を載せ、新曲は加へてない。前に擧げた『大幣』及び一節切の本『紙鳶』と合せて、『當流糸竹大全』（貞享四年刊元祿十二年再版）と題し、繪入本として刊行せられた。次いで現れたのは、元祿七年刊行の『松月抄』と『琴曲鈔』（各二冊）である。此の二書には始めて表組と裏組の別を設け、『琴曲鈔』には古曲の外に新組二曲を載せて居る。以上は何れも八橋流に屬するものである。生田流のは後期の寶暦期に上梓せられ、次いで其の他の流派のものも續々刊行せられた。

近世流行歌曲の集は高野辰之博士編『日本歌謠集成』の近世篇に收められて居る。

第七篇　江戸時代後期

第一章　時代の概觀

江戸時代後期

江戸時代後期は、櫻町天皇の御代の元文元年から、王政復古の大令が發せられた明治天皇の慶應三年に至るまでの、凡そ百三十年間である。此の時代は既に述べたやうに二分して、其の前半の五十年間を文運東遷期とし、後半の八十年間を江戸文學期とする。文運東遷期の主なる時代は、寶暦の十三年間と明和安永天明の二十五年間であるから、一に寶暦前後又は明和安永期と言ひ、江戸文學期は寛政の十二年間、文化文政の二十六年間、天保の十四年間、弘化嘉永安政の十六年間の三期に細分せられるが、此の中で文學の最盛期は文化文政期であるから、全體を此の名で呼ぶ事が出來る。文運東遷期は享保期に於ける吉宗將軍の治績に胚胎する新機運が盛に起ると共に、文化の中心が上方から江戸に遷つた時代であるが、其の後半期の田沼時代には幕政紊亂の極に達し、士民の氣風も甚しく頽廢した。次に江戸文學期の前半の四十五年間は江戸文化の爛熟期であるが、風俗の頽敗は彌甚しく、寛政期に於ける松平定信の質素儉約の奬勵、天保期に於ける水野忠邦の風俗矯正も、殆ど之を救ふ事が出來ずして、幕政は一張一弛の中に漸く威信を失ひ、次いで幕末期になると、幕府は内外多事の間に衰

亡の一路を辿ると共に、一般文化も亦頽廢期に入つた。かくて江戸時代の後期は波瀾重疊の時代であり、其の間に發達した文化には、善惡明暗の二面が並び存して、極めて複雜な世相を呈してゐる。今は先づ此の時代に於ける暗澹たる世相に就いて述べ、次いで文化の發達を記す事にする。

天災地變

寶暦年間は將軍家重の治世で、吉宗がなほ政治に與つてゐたから、天下は善く治まつたが、家治將軍の時代（明和安永年間）には田沼意次（おきつぐ）父子を始め、勘定奉行大奥の女中其他要職に在る者が賄賂を貪り、請託が公然と行はれて、幕府の政治は甚しく紊亂し、國民の非難怨嗟の聲が高かつた。のみならず此の頃江戸には大火竝に疫病流行があつて慘状を呈し、諸國には洪水旱魃が續いて、野山に餓死するものが無數にあり、又伊豆の大島薩摩の櫻島信州の淺間山等が次々に爆發して、數萬の人畜が斃れた。かくて國民は大いに疲弊したのであるが、幕府諸侯は財政困難の爲に救民の策を講ぜず、奸商は米價の騰貴を見越して買占をした爲に、農民は殊に困窮して諸國に百姓一揆が起り、天明七年には大阪次いで江戸にも市民の暴動が起つて、世相は極めて險惡であつた。其の後家齊（いへなり）將軍の治世の文化文政年間は、天災も無く天下太平であつたから、大御所樣時代と言はれたが、天保三年以後再び大飢饉が續いて、米價は次第に騰貴し、窮民の暴動が各地に起り、天保五年には江戸にも餓死する者が多かつた。殊に天保七年には大風雨が襲來して、全國的の凶作となつたが、幕府は相變らず財政窮乏の爲救濟の道を盡さなかつた爲に、大阪には町奉行與力で陽明學者として名高い大鹽平八郎（中齋）が、義憤の餘り與黨と共に燒討騷動を起し、次いで越後の柏崎には平田篤胤門下の生田萬等も、同樣の暴動を起して幕

府を驚かした。文化文政期の前後には、右に述べたやうな天災地異が頻りに續いて、事毎に幕政の荒廢弛緩を暴露したのであるが、幸にして寛政には松平定信があり、天保には水野忠邦が現れて、共に吉宗將軍の治世方針を模範として改革を行ひ人心を一新して、暫時幕府の威信を保つ事が出來た。

奢侈遊興の氣風

江戸時代後期は前代以來文化の著しい進歩に伴うて、奢侈淫蕩の風が上下を風靡した時代である。殊に江戸は文化東漸の結果、遊里劇場の繁榮、歌舞音曲の發達、料理の進歩などがあつて、一般市民の生活は年を逐うて華美贅澤に流れた。江戸の町人の中で、武家の及ばぬ驕奢遊興に耽つたのは、藏前の札差業者や大問屋の主人等である。札差は旗本御家人等の俸祿米の受取並に賣却を請負ひ、また旗本其の他一般の金融に從事して、多額の利益を得た富裕な商人であ



安永天明期の江戸風俗
（清長筆みめぐり）

る。彼等は幕府の嚴重な風俗矯正の令を超えて、金銀蒔繪の簞笥長持小道具などを並べ、金襴モールの賁入を懷中にし、妻子には絢爛な金絲銀絲の縫小袖を著せ、金の櫛笄を挿させ、子女の雛道具破魔弓菖蒲刀羽子板にも金銀箔を濫用した。彼等は又消閑の餘技として、常磐津富本清元などに耽り、殊に足繁く花街に出入して通人生活に憂身を窶し、儚い名聞沙汰の爲に金銀を湯水のやうに撒き散らした。かくの如き豪奢な生活は如何なる富豪と雖も到底永續するものでないから、其の零落の速かな事は元祿時代の町人と同樣であつた。都會を風靡した奢侈逸樂の氣風はやがて農村にも及んで、豪農の田地財產を蕩盡して出奔する者が極めて多く、小作農夫は三笠附博奕などに耽つて、田園は年々荒廢するのみであつた。

士風の頽廢

更に注意すべきは武士階級の腐敗墮落である。武士は既に前代の末頃に、武家の風俗作法を忘れて奢侈に流れ、遊蕩に耽る者が多かつたが、此の時代に入つて益甚しくなつた。殊に江戸の旗本御家人御留守居役等の墮落は最も甚しく、天明五年には四千石の旗本藤枝外記が、遊女綾衣に馴染んで心中を遂げた事件があり、其の頃遊女狂ひや竊盜などの爲に、士籍を除かれたり遠流に處せられた者は極めて多かつた。其の他安永天明期以來一般武士は太平に馴れ、町人社會の氣風に化せられて、佩刀を預けて芝居や遊里に出入し、女藝者を招いて三味線を稽古し、衆人の前で藝人の眞似をし、町人に伍して賭博に耽る事が殆ど日課のやうになつた。斯くて底止する所を知らぬ士風の頽廢は、松平定信の改革を以ても遂に救はれなかつたのであつて、文化文政期に至つて武士の町人化女性化は益增長して

行つた。武士町人を風靡した奢侈淫蕩の風潮は大名に及び、更に幕府の大奥にも浸潤し、文化文政期には其の頂點に達した。當時の將軍家齊は、家康以來前例のない從一位太政大臣に昇り、大奥には一千人に近い女中が居り、生母の異なつた子女五十餘人に達したと云ふから、當時の千代田城内の榮華は、正に藤原氏の極盛期と異なる所がなかつた。柳亭種彦の「田舍源氏」が、此の頃の大奥を寫し出したものである事は周知の事であらう。上に立つ將軍が既に斯くの如くであるから、諸大名が競うて豪奢な生活を送つた事は勿論である。此の頃幕府は外國船來航以來、國費多端に苦しんでゐた上に、將軍が斯かる榮華の夢を見た爲に財政は全く逼迫し、纔かに貨幣の改鑄や大名の獻金によつて、一時を彌縫する有樣であつた。大名の窮乏は殊に甚しく、小藩主の中には窮に窮して、家財封祿家士一切を金子に替へて、隱居した者さへあつたと云ふ事である。

安永天明から文化文政の頃、江戸に於て最も繁昌したのは、民衆の娛樂場兼社交場としての芝居と遊里である。此の二つは四民があらゆる階級的束縛から脫して、平等に享樂を恣にする事の出來る別世界であり、而も四季を通じて自由に遊び得る樂天地であつたから、江戸が繁榮するにつれて相竝んで隆盛に向つた。歌舞伎は既に元祿期に、上方で一先づ完成を告げたのであるが、明和安永の頃から江戸に於て新たに著しい發達を遂げ、寬政から文化文政に至る間は其の極盛期であつた。此の頃江戸の芝居には、古今を通じての名優が相踵いで輩出して、それぞれ獨得の妙技を揮ひ、狂言竝に音曲の進步、舞臺裝置道具俳優の扮裝衣裳等の著しい發達と相俟つて滿都の人氣を集め、市民は四季ここに

押し寄せて一日を夢幻的世界に遊んだ。かくて歌舞伎と民衆の交渉が密接の度を増すに從つて、男優の衣裳の好み髪の結ひ樣は、直ちに通人の間に流行し、若女方の妖艶な扮裝は其の儘子女に摸倣せられ、又名優の聲色や名狂言の臺詞の一節は物眞似藝人に演じられて寄席を賑はし、役者の似顔は草雙紙の挿繪や浮世繪に描かれて盛に持て囃された。

花街の繁昌

遊里は前代の末頃三都を始め各都市に繁榮したのであるが、文化東遷の結果京都は大いに衰へて、江戸と大阪が東西對立して年と共に繁昌した。殊に平民文藝と關係の深いのは江戸の花街であつた。江戸の遊里は吉原の外に、安永天明頃から深川の女藝者、即ち辰巳藝者が盛に持て囃されるやうになつた結果、茶屋料理屋の數は年々激增し、種々の名稱によつて呼ばれた下級の賣女は、禁を犯して至る處に出沒した。又辰巳藝者が時代の寵兒となるにつれて、町藝者が町々に現れ、武士町人の家庭にも出入して、盛に風儀を濫すやうになつた。かくて江戸が繁昌するに從つて遊女藝者賣女が盛に橫行し、市民の風紀は大いに紊亂したのであるが、江戸の文藝の基調となつた江戸趣味は、通人生活の間に發達し、時代を經るにつれて洗煉せられて行つた。抑も江戸趣味なるものが始めて明かになつたのは安永天明頃であつて、當時現れた十八大通は典型的通人と云はれてゐる。十八大通は藏前の札差を中心に、豪商文士等から成る一種の遊蕩兒であつて、札差の大口屋治兵衞曉雨（曉翁とも號す）、材木問屋の大和屋文魚等は其の代表的人物である。曉雨が二代目團十郎の助六の扮裝を眞似て、黑羽二重の小袖に大黑を加賀紋に染めさせ、緋博多の帶を締め鮫鞘の一腰、一つ印籠、桐の下駄穿きで大門を悠々と入

ると、仲の町兩側の茶屋の女房が總出で、福の神の御出と騷ぎ立て、やがて今助六と呼ばれたのは名高い話である。曉雨文魚を始め其の連中の豪遊俠氣に關しては、種々の逸話が傳はつてゐるが、要するに彼等は元祿期の大盡町奴などの遺風を存すると共に、江戸の通人粹士の魁となつたのである。其の後通人は元祿期の濶達豪放な氣風から漸く離れて、江戸人特有の氣質性格を基にして、洗煉された江戸趣味を發達させたのである。即ち文化文政期の通人は、衣裳結髮は固より持物の末に至るまで、滋味のある事を要件とし、其の遊興振りも形式的打算的となり、言葉の端々にも江戸人獨得の洒脫輕妙な機智頓才を發揮するやうになつた。

文化の發達

江戸時代後期の天保頃までは、以上述べたやうに、頽廢的風潮が上下都鄙を風靡したのであるが、此の間に漢學國學蘭學が目覺ましい發達を遂げると共に、此等の刺戟を受けて、明治維新の原動力となつた勤王思想及び開國思想が起り、又文藝の方面には、新たに江戸を中心に各種の平民文學が勃興し、美術の方面には浮世繪・南畫・寫生畫・西洋畫などが發達し、日本文化史上の偉觀を呈したのである。是より其の概略を述べよう。

教育の普及

江戸時代初期に幕府の儒學奬勵に刺戟せられて江戸の昌平坂學問所を始めとして、諸藩に藩學校が次々に設立せられ、更に其の末頃に吉宗將軍が學問を奬勵して以來、諸大名は競うて學校を創立し、教育は年々隆盛になつた。試みに後期に新設せられた藩學校の數を見ると、江戸時代を通じて創立せ

られた總數二百有餘の中、寶暦以後に設立せられたものが、其の八九割を占めて居る。更に設立數の多い年代に就いて言へば、寶暦年間には熊本の時習館以下十二校、明和安永天明期には鹿兒島の造士館佐賀の弘道館以下三十五校、寛政年間には金澤の明倫堂以下二十四校、文化文政頃には山口の明倫館以下三十三校、天保年間には水戸の弘道館以下二十三校の創立を見た。是を以ても當時の教育の隆盛を察する事が出來る。又此の間に三都を始め各國に儒者の私塾が頻りに開かれて、其の中には大阪の懷徳堂や、豐後の日田に於ける廣瀬淡窓の咸宜園のやうに、昌平黌の遠く及ばざる盛大なものがあつて、藩學と相並んで幾多の大儒人才を輩出し、漢學は年を逐うて隆盛になつた。

寶暦から明和安永頃までは大體に於て徂徠の學風の盛な時代であるが、此の間に仁齋•徂徠等の學風に慊らずして、其の反動が盛に起つた。其の著しいものは井上金峨•片山兼山等によつて代表せられる折衷學派、及び皆川淇園。吉田篁墩等の提唱した考證學派であるが、此の外に條理學を創めた三浦梅園、批評學を開いた富永仲基、博通を主義とし儒佛老莊に通じた服部蘇門等の獨立學派が續々起つて互に論爭し、漢學は空前の盛況を呈した。此の頃林家には名儒がなく江戸の朱子學は大いに衰へて、寧ろ大阪の懷徳堂を中心として關西に榮えたのであつて、松平定信が寛政の改革に當つて登用した儒官は殆ど關西の朱子學者である。定信は當時漢學者が互に門戸を張つて論爭し、爲に官學たる朱子學の衰運を招く事を憂へて、寛政二年に柴野栗山の建議に基づいて所謂異學の禁を行つた。是より昌平黌は盛大に赴き、朱子學は再び興隆したが、前代以來學界に漲つた自由研究の精神は、幕府の威信を

以ても抑壓する事は出來なかつたのであつて、前記の諸學派は一般學者に多大の刺戟を與へ、やがて朱子學派にも感化を及ぼした。陽明學は前期の頃から隱然朱子學と對峙してゐたが、寶暦頃には中根東里等があつて林家と對抗し、下つて文化文政期になると、昌平黌の大儒佐藤一齋は表面朱子學を講じてゐたが、寧ろ陽明學を根本精神として門人を教へ、其の門下から多くの陽明學者を輩出した。一齋の頃陽明學者には、大阪に大鹽平八郎中齋があり、幕末期には備中に山田方谷等があつて、共に朱子學の長所を取つて、專ら實踐躬行の教を布いた。かくて幕末期の儒學は、朱子學と陽明學によつて代表せられるのであつて、其の學說は勤王の志士に多大の感化を與へた。

國學は荷田春滿の門人賀茂眞淵に至つて、學問としての基礎が成つた。眞淵は春滿の國學精神を承けて、學問的の體系を立てたのであるが、生涯を萬葉研究に捧げて、未だ國學の主要目的とする「古事記」の研究に及ばなかつた。眞淵の門人は東西各地から集り、それぞれの部門に分れて廣く研究したが、國學の完成者として、不朽の業績を遺したのは本居宣長である。宣長の研究は古典を始めとして、物語歌學語學音韻等に及んでゐるが、主力を注いだのは古事記研究であつて、其の著「古事記傳」によつて國家的精神は始めて明瞭にせられた。宣長の門人も亦全國に散在し、其の研究法は益科學的になり、研究の對象も彌廣くなつたが、宣長によつて宣揚せられた國家的精神を繼承して復古神道を唱道し、更に國學の復古的精神を實際運動にまで導いたのは平田篤胤である。篤胤の門人は時勢の影響を受けて、國學その物を學問として進展させる事は出來なかつた代りに、敬神尊王の精神を鼓吹し

て、經世家若しくは勤王家に多大の刺戟を與へ、明治維新の大業に直接間接に影響する所が多かつたのである。

洋學

國學が復古精神に基づいて、古代の歴史制度思想等を明かにし、やがて尊王思想を喚起したのに對して、洋學は專ら應用の學として研究せられ、天文・暦數・醫學・藥物學・理化學・地理學・測量學・兵學等の發達を促し、引いては開國進取の思想を助長するに至つた。洋學の基礎を置いたのは蘭學者であり、蘭學發達の端を開いたのは八代將軍吉宗である。吉宗が西洋の天文暦法を取入れた關係から、享保五年に禁書の一部を解き、靑木昆陽に命じて長崎に於て和蘭語を學ばしめたのは蘭學の始である。其の後明和安永期に意次が和蘭傳來の珍器、例へば寒暖計・晴雨計・震雷驗器・水液輕重清濁驗器・暗室寫眞鏡・現妖鏡・覩日玉・呼遠筒等を蒐集愛翫して以來、和蘭物を骨董品として愛翫する事が流行したのは、蘭學の興隆に大なる刺戟を與へた。此の頃昆陽の門人前野良澤は、長崎に遊學して蘭學を修め、人體解剖書『ターフル・アナトミヤ』を手に入れ、同學の友杉田玄白等と協力して、四年の苦心を積んで之を飜譯し、安永三年に『解體新書』と題して出版したのは、洋書飜譯の嚆矢である。次いで玄白の門人大槻玄澤(磐水)は長崎に下つて蘭學を學び、天明三年に『蘭學楷梯』を著して綴方發音文法等を說明し、又稻村三伯は更に『蘭學楷梯』に刺戟せられて、寛政八年にフランソア・ハルマの蘭佛及び佛蘭對譯辭書に基づいて、蘭和對譯辭書『波爾麻和解(はるまわけ)』を著した。此の二書は蘭語學習者に多大の便益を與へ、是より蘭學に志す者が年々多くなつた。蘭學者は創始期以來、主として醫者と天文暦數家であつたから、自

然此の二つの方面の研究が特に年々進歩したが、寛政四年以來露西亞人が頻りに蝦夷地を窺ふやうになつた爲、文化文政期には西洋の事情を知ると共に、國防の策を講ずる必要を生じ、新たに地理測量學・海防學・兵學などの研究に從事する者が多くなつた。即ち玄澤の門人山村才助は、蘭學によつて西洋事情に精通し、幕府の命によつて露西亞の地誌を飜譯し、同門の橋本宗吉は和蘭の地理書を抄譯して『新譯地球全圖』を著した。又西洋の天文曆法に通じた高橋東岡の門人伊能忠敬(いのうただたか)は、推步測量によつて全國の海岸を測量し、前後十七年を費して『宇內輿地全圖』を完成した。其の後英國船が長崎に來て暴行を恣にして以來、國防兵學の研究は益急務となり、高島秋帆・江川英龍・佐久間象山等の如き、大砲の製造竝に洋式兵法の研究家が現れた。是より先蘭學によつて學んだ自然科學又は自然科學的研究法は、各般の學問の發達竝に發明を促し、其の影響は意外に廣く及んでゐる。例へば寶曆期に於ける平賀源內の物產學・理化學の如き、明和安永期に於ける三浦梅園の條理學の如き、寛政期に於ける本多利明の數學・天文學・航海學の如き、文政天保頃に於ける佐藤信淵の農政學・山相學・海防學・兵學の如きであつて、此等の學者の發明發見には驚くべきものがある。

繪畫

轉じて美術を見ると、是も亦他の文化と同樣に、主として庶民階級から新機運が起り、民衆の趣味に應ずるものが新たに興隆した。當時の美術の重要なものは繪畫と工藝であるが、今は特に文藝と交涉の多い繪畫の發達に就いて略述する。此の時代に興隆した繪畫は多種多樣であるが、其の代表的なものは、主として教養ある人士の間に流行した南宗文人畫及び寫生畫と、江戶を中心に町人社會に持

て囃された浮世繪とである。

支那畫風の影響

前代に幕府諸大名の保護の下に復興した、貴族的裝飾的の狩野派土佐派等角派などは、此の時代の初頃既に沈滯固定して殆ど生命を失ひ、一般民衆は新しい畫風を要求して止まなかつた。當時支那は南宗文人畫の隆盛時代であつて、職業的畫工の手を離れて、趣味本位の作風が流行し、一方には西洋畫の影響を受けた寫生主義の花鳥畫や人物畫が盛に行はれた。支那の畫風は既に前期の承應から寬文にかけての頃、支那から歸化した陳賢・陳元輿・陳清齋等によつて傳へられたが、享保の頃には長崎に南宗山水畫家の伊孚九、花鳥畫の大家沈南蘋等が渡來して、我が畫界に甚大の影響を與へた。當時詩人墨客の中には、既に舶載の畫譜畫論などによつて、支那の畫風に接する者が多かつたが、殊に長崎に於ては其の地に來航した畫工に就いて、直接畫法を學ぶ者が多く、やがて南宗山水畫及び花鳥畫は、近畿地方に傳はつて畫界に新機運が起つた。

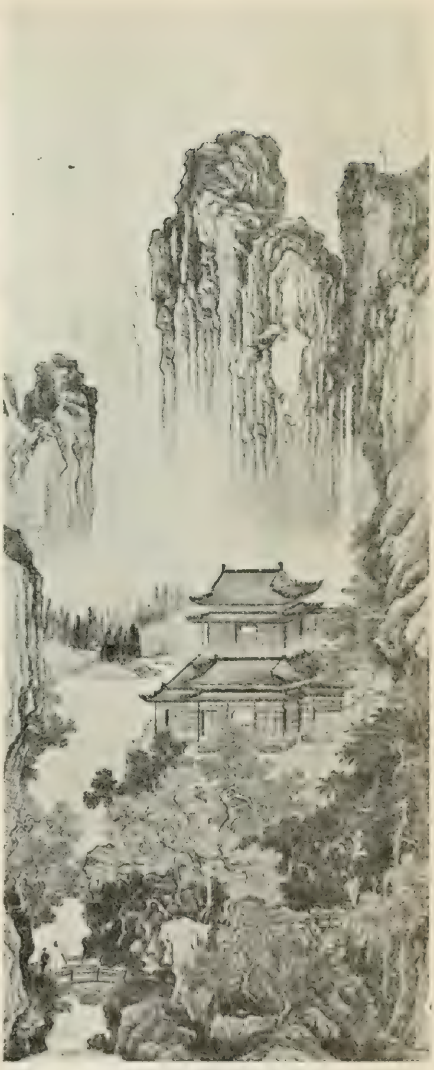
明和安永期の南畫と寫生畫

我が國に於ける南宗文人畫の先覺者は、享保頃の詩人祇園南海・服部南郭等であるが、安永天明頃近畿に於ける文人畫の雙璧は、池大雅と與謝蕪村である。大雅は南海に刺戟せられて伊孚九の筆致を慕ひ、其の他元明諸家の風格をも取入れて、飄逸にして氣韻に富んだ獨自の畫風を創め、又蕪村は元明諸名家の遺墨を模範として、日本趣味の畫風を起し、緻密な山水畫と洒脫な俳畫の二方面に妙技を揮つた。蕪村の畫風は當時未だ一般に認められなかつたが、大雅の畫は文人學者の趣味に投じ、而も門人に福原五岳・青木夙夜等の俊秀を輩出して忽ち京畿に流行した。次に寫生畫の大家には大雅・蕪村と

同じ頃に伊藤若沖があり、稍後れて圓山應擧が現れて、忽ち上方の畫界を風靡するに至つた。若沖は始め狩野風を學んだが、後に元明の畫風を慕ひ、これに尾形光琳の筆趣を加へて、特に花卉鳥獸魚貝の寫生に特異の彩筆を揮つた。又應擧は狩野派から出て、明清諸名家の筆法に西洋畫法を合せて、渾然たる畫風を大成し、寫生主義の圓山派を開いた。若沖には後繼者がなかつたが、圓山派からは駒井源琦（岸駒）長澤蘆雪・山口素絢・松村月溪（呉春）等の大家を輩出した。源琦は南宗畫に寫生畫を加味して一派を起したが、更に注意すべきは月溪である。月溪は蕪村の門に入つて畫事と俳諧を學び、更に應擧を師友として其の畫風を學んだ後、此の二派を融合して京洛の好尚に適した四條派を創めた。月溪・源琦の頃（明和寛政期）は浮世繪の黄金時代であり、近世繪畫の全盛期である。當時京都には月溪を始め、其の高足岡本豐彦、弟の松村景文等があつて、四條派は京畿の畫界を風靡し、圓山派は寧ろ大阪に行はれ、南畫は漸く關東に興隆しようとしてゐた。

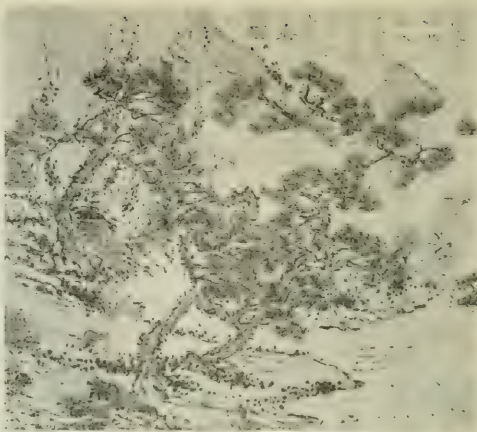
文化文政期の南畫

文化文政以後は南畫が江戸を中心として全國に興隆した。江戸の南畫に就いて述べる前に、當時の上方に於ける南畫に就いて一言して置く。大阪に文人畫を興したのは、大雅に學んだ木村巽齋であると言はれて居るが、略同じ時代に岡田米山人・濱田杏堂等があり、文政の頃には有名な岡田半江があつて、南畫はかなり盛に行はれた。京都の南畫は四條岸二派の爲に長く壓倒せられてゐたが、文化の頃浦上玉堂があつて漸く活氣を呈し、天保から幕末にかけては玉堂の子春琴、山本梅逸・中林竹洞・日根對山・中西耕石等が次々に輩出して極めて盛況を呈した。文化文政期には江戸の學者文士の間に書畫が



文晁筆樓閣山水圖
（伯爵德川達孝氏藏）

流行し、やがて各地に影響して南畫全盛時代となつた。此の頃江戸の書畫會の牛耳を執つたのは、谷文晁と酒井抱一である。文晁は南宗に北宗を加へて、渾一した畫風を創め、抱一は浮世繪南蘋派圓山派等を學んだ後、尾形光琳の畫風を復興した。文晁及び抱一の門下には名手が多いが、天保弘化の頃文人畫家として名聲の轟いたのは文晁門下の渡邊華山・高久靄厓・田能村竹田、華山の門人椿椿山・福田半香等である。華山は儒學蘭學の傍畫を文晁に學び、司馬江漢の洋畫の法を加へて、氣韻の高い畫を描いた。關東に純粹の南畫が興隆したのは、華山の鼓吹によるのである。次に田能村竹田は豐後の岡藩の學者詩人にして、畫家兼美術鑑賞家である。竹田は文晁の風に慊らずして、元明清諸家を始め士



竹田筆松下對座圖
（本山豐實氏藏）

佐狩野の筆致をも採つて、渾然たる畫風を大成し、文人畫の第一位を占めるに至つた。江戸時代の繪畫は華山・竹田・椿山等によつて最後の一大光彩を放つたのであつて、幕末期には畫家の數は最も多かつたけれども概して振はなかつた。ただ幕末期の畫壇に於て注意すべきは、時勢の影響を受けて京都を中心に復古的機運が起つた事である。古土佐の復興は文化文政期の田中訥言を先驅とするのであつて、其の門から宇喜多一蕙を出し、更に岡田爲恭に至つて、大和繪は燦爛たる光彩を放つた。一蕙・爲恭は共に勤王家であるが、同じく勤王精神によつて歴史畫に專念したのは江戸の菊池容齋である。

是までに述べた山水畫や花鳥畫の類は、文人學者の餘技として流行したのであるが、浮世繪は平民文化を代表し、而も江戸文學と直接手を携へて、廣く流行したものであるから、文學史上特に注意を要する。浮世繪は慶長前後に土佐狩野兩派の畫師が遺した風俗繪に源を發してゐるが、當時は未だ之を專門とする畫工もなく、又廣く流行したのではなかつた。嚴格な意味の浮世繪は、浮世繪なる語が現れた天和以後のものを云ふのであつて、始めて劃然たる一派を樹てたのは菱川師宣である。天和貞

享の頃は西鶴の浮世草子が流行し、「好色一代男」の江戸版には、既に師宣の挿繪を加へて居るのであつて、等しく享樂的生活を描寫する小説と浮世繪は、是より提携して長く民衆の歡迎を受けるやうになつた。浮世繪は浮世草子以後の江戸小説と共に、當世の享樂的遊蕩的生活を寫す事を宗とするものであるから、浮世繪師の描く所は歌舞遊宴であり、劇場花街の風俗であつて、美人と役者が好題材となつたのは當然である。尤も浮世繪が發展するに連れて、花鳥畫風景畫なども現れたが、其の畫風は狩野土佐や南畫や圓山四條派などとは全く異なり、何處までも町人繪としての特徴を具へてゐる。浮世繪は肉筆に始まり、版畫が起つて以來忽ち普及し、更に色刷版畫の發明によつて長足の發達を遂げた。從つて浮世繪の發達を記述するには、一般に色刷の始まつた明和二年以前を創始期とし、それ以後を三期に區分してゐる。卽ち浮世繪の流派が續々現れ、畫家板木師摺師の三者が提携して、版畫の著しい發達を遂げた明和から寬政までを全盛期とし、描寫に理想的傾向若しくは近代的傾向の著しくなつた文化文政期を爛熟期とし、畫風板式共に墮落した幕末から明治初期に至るまでを衰頽期とするのである。

創始期の浮世繪

創始期の畫家として名聲の高いのは、江戸の菱川師宣・鳥居清信・懷月堂安慶・奧村政信、及び京都の唯一の浮世繪師西川祐信等であつて、何れも其の流派の祖となつて居る。師宣は肉筆の外に挿繪繪本次いで一枚摺の版畫にまで及んで、後の版畫發達の基礎を作り、浮世繪の創始者と稱せられた。（六一五頁圖版參照）師宣は遊宴の樣や美人畫を多く遺し、清信は芝居繪を専門として鳥居派の祖となつた。懷月堂には

明和安永期の浮世繪

安慶・安度・度繁など一派の人々があつて、何れも主として肉筆の美人畫を描き、度繁は特に名手であつた。（六一七頁圖版參照）鳥居派の芝居繪や懷月堂派の美人畫が、共に太い描線を用ひて雄渾の趣を示し、初期浮世繪の特徴を具へてゐるのに對して、祐信は寫實的美人畫を得意とし、政信は洋畫の手法を取入れて風景畫の基をなした。政信は又色刷版畫の發明に功があつたとも傳へられて居るのであつて、祐信と共に浮世繪史上重要な人物である。師宣・清信の時代の版畫は未だ墨摺であつたが、元祿の初頃から筆彩色の丹繪が行はれ、更に漆繪紅繪を經て、政信の時代には三四色刷の紅摺繪となつた。紅摺繪から更に版刻に工夫を凝らしたものは錦繪であつて、是が發明せられたのは次の時期の初である。丹繪漆繪などの行はれた頃、江戶に流行した草雙紙は赤本・黑本・青本であつて、其の繪を描いたのは主として鳥居派の清倍・清滿・清重・清經等である。



春章筆美人讀書圖
（東京帝室博物館藏）

明和から寬政に至る全盛期には、各派から名手が輩出して其の技を競ひ、錦繪の進歩と相俟つて浮世繪の發達は其の頂上に達した。此の時代の初に活躍した鈴木春信は、西川祐信の寫實風に理想的表現を加へて、清艷にして氣品のある美人畫を描き、又色刷法に工夫を凝らして、

錦繪創始者としての偉大な功績を遺した。西洋畫を興し銅版を創めた春重、即ち司馬江漢は春信の門人である。次に勝川春章（勝川派の始祖）は美人畫の外に、従來鳥居派の獨占であつた芝居繪に筆を染めて役者の似顔を描き、（是より役者繪は勝川派の獨占となつた）又相撲畫を描いて名聲を揚げ、其の門から葛飾北齋を始めとして、春英・春好・春潮等の名匠を輩出した。春章の後特に妙技を揮つたのは鳥居清長・東洲齋寫樂等である。清長の温雅にして健實な美人畫及び役者畫は、當時盛に持て囃され、（八三九頁圖版參照）寫樂の個性的な人物畫には表情の描寫があつて、浮世繪史上に異彩を添へた。又清長の頃北尾重政（北尾派の始祖）は、青本の挿繪や繪本に其の技を揮つて版刻畫一流の名を得、其の門下から同じく草紙繪を多く描いた北尾政演（山東京傳）を出した。更に特筆すべきは風景畫の大家葛飾北齋と、美人畫の大成者喜多川歌麿である。是より先奥村政信は西洋畫の遠近法を取入れ、次いで鈴木春重（江漢）は



歌麿筆兩國橋納涼圖
（東京帝室博物館藏）

異國趣味を追求し、歌川豐春（歌川派の始祖）は銅版畫の表現を採つて、それぞれ浮世繪に新しい要素を加へたが、北齋は洋畫の描法の外に漢畫の筆致を加へて、品位の高い獨自の印象的畫風を創めた。又歌麿は豐春等の影響を受けて、官能的刺戟に富んだ理想的美人畫を描き、又精巧な版畫を工夫して好評を博した。尤も彼が好んで描いた病的肢體美は、後に弊風を遺したのであつて、やがて頽廢期に入る前兆である。寛政から文化にかけての名家には、なほ歌川豐春の門人豐國・豐廣、勝川春章の門人春英・春好、及び細田榮之等があつて、美人畫の全盛時代を現出した。

文化文政期の浮世繪

文化文政の爛熟期から幕末の頽廢期までは、同じ傾向を追つたのであるから今一括して述べる。文化文政期には型にはまつて清新の氣を失ひ、殊に人物畫は官能的刺戟を強調して益墮落したのであるが、版畫の技術は益進步して數十度の色刷を重ね、空押や金銀粉を用ひて精巧艷麗の極に達した。當時は草雙紙讀本の流行期であつて、殊に合卷は表紙繪口繪挿繪の美觀に重きを置くものであるから、一流の畫工が彩筆を揮ふやうになり、其の美觀は錦繪に劣らなかつた。錦繪は又此の時代になつて團扇・納札・配り物・文身などに應用せられて、江戶町人の趣味を風靡し、浮世繪は益爛熟した。文化文政期の初頃には、前期末以來の大家に清長・歌麿・豐國・豐廣・春英・春好・榮之等があり、北齋は殊に長命して嘉永二年まで生存した。此等の中で歌麿・北齋・豐國・豐廣・春英等は、合卷讀本の挿繪の畫工としても盛に活躍した。其の後天保以後も版畫並に草紙繪は引續き盛に行はれ、其の間に多少の新機運は起つたけれども、畫風は大體に於て年々頽廢し、それと共に版畫も漸次凋落した。さて爛熟期から頽廢期

にかけての浮世繪は、歌川派と北齋派の二大勢力によつて風靡せられた。歌川豐春の門人豐廣は、土佐狩野の筆致と漢畫の風格とを採つて獨得の畫風を樹て、又多くの合巻と讀本の挿繪を描いた。又同門の豐國は師の畫風を承けて、更に濃艶な人物畫と合巻讀本の挿繪を描いて名聲を揚げ、其の畫風は門人に至つていよ〳〵妖艶巧緻になつた。豐國の門下で最も名高いのは國貞と國芳である。國貞は美人畫並に役者畫を得意とし、柳亭種彦の「正本製」「田舍源氏」を始め、多くの長篇合巻に彩筆を揮つて民衆を魅了した。國芳は奇拔豪健な風景畫を描き、又美人畫にも長じてゐたが、豐國・國貞の名聲に壓倒せられて流行しなかつた。浮世繪史最後の美人畫家月岡芳年は國芳の門人である。次に北齋は文化文政期になつて益圓熟し、風景人物の版畫や「北齋漫筆」(天保の末までに十三編を重ねた)は好評を以て迎へられ、馬琴の讀本の挿繪もかなり多く描いた。北齋の門人には魚屋北溪・昇亭北壽・柳々亭辰齋等があり、北齋を慕つて別に一家を樹てた者に柳川重信・菊川英山・溪齋英泉等がある。北壽・辰齋は洋畫趣味の風景畫を描き、英山は美人畫に長じ、英泉は美人と風景を兼ね草紙繪も多く描いた。又重信は北齋と國貞の筆致の影響を受けて、英泉・英山と共に錦繪の外に合巻讀本の畫工として名を揚げた。北壽・辰齋等は北齋と異なつた風景畫を描いて伎倆は遠く及ばなかつたが、豐廣門下の一立齋安藤廣重は、漢畫と洋畫の風格を交へて、風景畫に傑出した手腕を揮ひ、北齋と共に風景畫の雙璧と稱せられた。廣重は浮世繪に清新味を加へた最後の畫工であつて、爾來見るべき畫風は再び現れずして凋落したのである。

最後に江戸時代後期に於ける文藝發達の概況を、文運東遷期と江戸隆盛期とに分けて略述して置く。文運東遷期は從來上方の文化の移植に忙しかつた江戸が、漸く獨自の文化を發達させた時代であつて、學問文藝の中心が東へ東へと移動した時代である。先づ和歌に就いて言へば、萬葉の精神に復古して、新しい歌を詠まうとした元祿期以來の機運は、寶曆期の賀茂眞淵に至つて始めて作歌の上に實現せられた。眞淵の高古な萬葉調は、田安宗武・楫取魚彥等によつて益盛になつたが、加藤千蔭及び村田春海は別に古今調に近い優雅な歌風を創め、本居宣長は新古今風を好んで鈴屋派を開いた。此の三方面の歌風は是より後長く勢力があつたが、此の間に天明寬政頃京都の小澤蘆庵が、古今調を標準として平淡なただ言歌を唱へたのは、文化文政期に關西の歌壇を風靡する、香川景樹の桂園派の先驅となつた。俳諧は享保以來の頽廢期の後に、期せずして東西各地に各種の新しい俳風が起り、やがて俳壇の革新が行はれて、天明の中興を見るに至つた。其の代表的俳人は與謝蕪村であるが、他に東には大島蓼太・加舍(かや)白雄(しらを)があり、西には加藤曉臺・三浦樗良・高桑闌更があつて、それぞれ革新運動に參與し俳諧は極めて盛況を呈した。是より先寬延寶曆の頃炭太祇は京都に於て高尙な俳風を起し、特に人事美を得意に吟じて蕪村等に影響を及ぼし、又名古屋の横井也有は、蕉門の俳文と異なつた輕妙酒脫な新俳文を創めて、狂文の興隆に刺戟を與へた。明和安永期には又太平謳歌の風潮の影響を受けて、狂歌狂文狂詩雜俳等が江戸を中心に盛に流行した。就中民衆文藝として最も廣く行はれたのは狂歌と前句附、及び前句附から獨立した川柳である。元祿享保期の狂歌は上方を中心に興隆したが、明和安

永期には江戸に唐衣橘洲・四方赤良以下著名な狂歌師が輩出し、江戸人特有の機智諧謔を歌つて全盛時代を現出した。前句附は元祿以來都鄙に流行した遊戯文學であるが、是も中心が江戸に移つた寶曆の頃から、江戸獨得の發達を遂げ、殊に其の附句のみを獨立させた所謂川柳は、人情の機微を穿ち、人間の弱點を抉つて、狂歌師の窺ひ得ざる方面を開拓した。川柳の隆盛期は明和から寛政の初年までである。

（二）小　説

明和から天明に至る頃、上方には八文字屋本に代つて、初期の讀本が現れた。是より先元祿享保の頃詩文の流行に促されて、漢學者の間に支那の演義小説や白話小説などを研究する者が現れ、初めは訓讀又は飜譯を試みてゐたが、寶曆前後に都賀庭鐘の『英草紙（はなぶささうし）』や『繁野話（しげしげやわ）』の如き飜案小説が現れた。此の系統を引いて現れたのは、支那及び日本の説話から脱化した國文學者の小説であつて、建部綾足の『西山物語』『本朝水滸傳』、及び上田秋成の『雨月物語』などが是である。綾足の作は擬古物語の體裁であるが、『雨月物語』は『英草紙』と共に雅俗折衷體で綴られてゐて、後の讀本の文體の基となつてゐる。又綾足・秋成の作品は、後の讀本の大家曲亭馬琴に多くの影響を與へて居るから、此等を初期の讀本と呼んで居る。飜つて江戸の小説を見ると、上方に初期の讀本が現れた明和安永の頃、江戸には滑稽洒落を宗とする片々たる黄表紙や洒落本が流行した。黄表紙は元祿享保以來行はれてゐた幼稚な繪解の赤本・黒本・青本の系統を引いて、寶曆頃から流行し、安永四年戀川春町の作『金々先生榮花夢』に至つて始めて大人の見るものとなつた。其の後名ある作者が次々に現れて世に持て囃され、代表的

作者山東京傳が活躍した天明年間は其の最盛期であつた。黄表紙は滑稽洒落の中に諷刺を交へる事を特色とするものであるが、偶時政を諷刺した作が幕府の忌諱に觸れて、取締が嚴重になつた結果忽ち衰へた。其の後黄表紙の作風は一變して教訓的となり、敵討や怪談の流行するにつれて、長篇の必要を生じて合卷の樣式に變つた。諷刺と滑稽を宗とする遊戲文學には別に洒落本があつて、寶曆の中頃から江戸と大阪から相並んで刊行せられた。洒落本は明和の頃に『遊子方言』が出てからは、江戸中心となると共に、内容も變つて滑稽と通を特色とする遊里寫實の小說となつた。其の代表的作者はやはり京傳であるが、寬政三年に幕府の洒落本禁止の令を犯した爲に罰を蒙つて以後、洒落本の筆を絕つた。其の後洒落本は文政の頃まで行はれたが、既に特色を失つて平凡になり、やがて人情本に展開して行つた。

（三）劇文學

劇文學の方面では近松海音が歿して後、上方の淨瑠璃作者には竹田出雲があり、次いで近松半二があつて名曲を遺し、江戸には明和の頃平賀源內が出て、淨瑠璃史上に最後の光を放つた。出雲及び半二の作が、從來の抒情的敍事的なものから、筋の複雜な劇的なものに展開したのは注意すべき事であるが、合作が行はれた結果、一篇の統一を缺く弊に陷つた。かくて劇的要素に富んだ作は、盛に歌舞伎芝居に演じられて繁榮を奪はれ、淨瑠璃は益衰頹して新たに歌淨瑠璃が著しい發達を遂げた。歌淨瑠璃の主なるものは、河東節・一中節・豐後節、及び豐後節から出た常磐津・富本などであつて、此等は劇場音樂となり、又家庭の慰みとして流行した。淨瑠璃が年を逐うて衰へたのに反して、歌舞伎はい

よいよ隆盛に赴き、脚本は漸く劇文學の中心となる傾向を示した。寶暦から寛政にかけての頃、歌舞伎の中心は漸次江戸に移つたのであつて、狂言作者も東西に輩出した。即ち大阪の作者には並木正三稍後れて並木五瓶・奈河龜輔等があり、江戸には津打治兵衛・堀越菜陽、少し後れて金井三笑・櫻田治助等が現れた。此等の中で最も秀でた作者は並木五瓶である。彼は東西兩劇界に活躍したが、殊に江戸に於ては多くの世話物の名作を書いたのであつて、是より江戸の歌舞伎劇は時代物と世話物とに分れて、各其の特徴に向つて發達するやうになつた。文化文政期に於ける大劇作家鶴屋南北は五瓶の弟子である。

江戸隆盛期の文學　一和歌俳諧

江戸隆盛期(文化文政期)は、文學の中心がいよ〳〵江戸に遷ると共に、太平陶醉の風潮は文學の何れの方面にも漲つて爛熟期に入り、次いで頽廢期となつたのである。前代に於て復古的精神を根柢として興隆した萬葉派・江戸派・鈴屋派の流を汲む歌人は、此の時代に於ても相當優勢であるが、蘆庵の影響を受けて新たに起つた香川景樹の清新平淡な歌風は忽ちに流行し、其の流を汲む者は幕末から明治初期に至るまで輩出した。尤も當時は新機運が頻りに起つた時代であるから、何れの流派にも屬しない優秀な歌人が各地から現れ、それぞれ個性の鮮明な歌風を創めて歌壇は空前の活氣を呈した。即ち萬葉調によつて個性的な歌を詠んだ歌人に、僧良寛・平賀元義(もとよし)・安藤野雁(のかり)等があり、萬葉に入つて萬葉を出て、自由な歌風を詠んだ歌人に橘曙覽(あけみ)があり、古今調に近く而も自由に個性を表現した歌人に大隈言道(ことみち)があつた。流派に關係のない此等の歌人の作には現實生活を歌つたものが多いのであつて、

同じ傾向は小林一茶の俳諧にも認められる。天明期の俳諧中興の後は、俗調が一世を風靡したのであるが、此の間に一家の風格を具へた大伴大江丸・夏目成美・小林一茶等があつて、俳諧史の最後に光彩を添へた。就中文化文政期の代表的俳人は一茶であつて、其の薄倖な生活環境から湧き出た句には、從來曾て見られなかつた人間愛を詠んだものが多い。なほ一茶の俳風には川柳の影響が認められる。

(二)小　說

寛政三年に京傳が洒落本の爲に罰せられて以後、洒落本は特色を失つて新しい展開を示さなかつたが、京傳が新たに讀本作者に轉じて以來、上方に起つた讀本は江戸に於て急激に發達した。京傳の讀本は歌舞伎淨瑠璃の趣向を取つて變化を求めた爲に、全篇の統一を失つて居るが、馬琴のは武士道と儒教の教を基調とする勸善懲惡主義の作品であつて、組織が整然として居り、筋が複雜で變化に富んでゐた爲に、大いに世の歡迎を受けた。馬琴が讀本作者として最も活躍したのは、其の傑作『里見八犬傳』の長篇が續刊せられた文化から天保にかけての二十餘年間であつて、讀本は此の頃を最盛期として漸次衰運に向つた。讀本と竝んで流行した稍低級な小說に、合卷・滑稽本・人情本などがある。合卷は既に述べたやうに黄表紙の延長であつて、繪を主とする婦幼の讀物であるが、歌舞伎や讀本の影響を受けて、漸次內容の複雜な長篇の讀物となつた。其の代表作は柳亭種彥の『田舍源氏』であつて、文政十二年から天保十三年に至るまで續刊せられた。其の後次々に作者が現れ時代を下るにつれていよいよ長篇となり、明治の初期まで行はれた。次に滑稽本は人情本と共に、洒落本から脫化した一樣式であつて、形によつて中本と呼ばれた。其の源は寶曆頃の滑稽諷刺を主とする、風來山人の談義物な

どにまで溯り得るのであるが、近くは野暮な田舍者を滑稽に寫した洒落本に胚胎して居る。而して滑稽本の内容形式共に具はつたのは、十返舍一九の『東海道中膝栗毛』であつて、其の影響を受けて現れた式亭三馬の『浮世風呂』及び『浮世床』と併せて代表作となつてゐる。最盛期は此等が刊行せられた享和から文政の初頃まででであつて、其の後の作者の作品は、滑稽を强ひる不自然な作意があつて文學的價値がない。人情本は安永の頃、洒落本の中に趣向を複雜にし、人情の描寫を精細にした作品が行はれたのに始まる。人情本の初作は天保二年の曲山人作『假名文章娘節用』であるが、代表作者は爲永春水であつて、天保三年の『春色梅曆』が好評を以て迎へられて以來次々に著作した。人情を寫すとは言つても、男女の淫蕩的生活を外面的に描寫したものであつて、幕末の墮落した社會の氣風を反映して居る。

（三）劇文學

最後に劇文學を見ると、淨瑠璃は既に衰へ、獨り江戸の歌舞伎狂言が全盛を極めた。當時の名高い狂言作者には、文化文政頃に鶴屋南北があり、幕末から明治にかけて古河默阿彌があつて、共に多くの傑作を遺した。南北は江戸歌舞伎の特色とする夢幻的氣分を、寫實的な世話物に漂はせる事を得意としたのであつて、怪談物の傑作『東海道四谷怪談』は彼の特色を最もよく表して居る。默阿彌は從來發達した歌舞伎の諸要素を綜合して、抒情的にして寫實的な狂言を得意に書いた。彼の代表作は『鼠小僧』『三人吉三』『白浪五人男』の類の白浪物であつて、惡の半面に美を認めた點に作者の特徵が現れて居る。江戸時代を通じて眞に勝れた狂言作者は南北と默阿彌とであつて、此の二人の作に至つて

始めて個性が認められる。

第二章　漢學と詩文

一　寶暦前後

寶暦前後の漢學

江戸時代後期の漢文學は、寛政二年の異學の禁を境として二期に區分せられる。其の前半期は寶暦を中心とする五十餘年間である。此の時代は元祿享保の儒學全盛期を承けて、前代とは異なつた新學派が續々起ると共に、儒教が益民衆化して社會を教化した時であり、又漢學者が一般に詩文を尊重した爲に、詩文がいよ／＼盛況を呈した時である。以下其の概況を述べよう。

折衷學派

徂徠が古文辭學を提唱して以來六七十年間は、蘐園學派の隆盛期であるが、仁齋・徂徠が首唱した自由研究の精神を承けて、新たに種々の學派が起つて、儒學史上空前の論難攻撃が演じられた。其の最も著しいものは、仁齋・徂徠等の學風に對する反動として起つた折衷學派と考證學派とである。折衷學派は固陋偏狹であつた在來の學風を排撃して、漢唐宋明の諸學説を併せ採ることを主義とするのである。此の學説は夙に木門の榊原篁洲（寶永三年歿五十一）が唱へたのであり、又尾張の儒者中西淡淵（寶暦二年歿四十四）及び其の門人細井平洲（享和元年歿七十四）の如きも、經義を講ずるに當つては、或は漢唐の傳疏を用ひ、或は宋明の註解を採つて、新古の別を立てなかつたのである。併し之を一家の學として首唱したのは、片山兼山

及び井上金峨である。

片山兼山

片山兼山（天明二年歿五十三）は名を世璠、通稱を東造と云ひ、上野の農家に生れた。十七歳の時江戸に出て服部南郭の門人鵜殿士寧に學び、次いで其の推薦によつて南郭に師事した。肥後の秋山玉山と親しく交り、其の薦めによつて熊本の時習館の生員となり、大いに研究を積んで六年の後江戸に歸つた。兼山は徂徠の學説に對して疑を懷き、經學に於ては博く漢唐宋諸家の説を折衷する事を主義とし、之を折衷學と稱した。兼山の學説を見るべき著書に『山子垂統』（前篇三卷後篇三卷）がある。兼山と竝んで折衷學の先驅

井上金峨

者となつたのは井上金峨（天明四年歿五十三）である。金峨は江戸の人で、名を立元、通稱を文平と云ひ、徂徠歿後の四年卽ち享保十七年に生れた。初め仁齋の學問の系統に屬する川熊峰に學び、後に井上蘭臺に就いて徂徠の學説を窺つたのであるが、何れにも服する事が出來ずして、遂に一家の學を創めた。彼は當時の諸學者が仁齋・藤樹・闇齋・徂徠等の學説に囚はれて、互に論爭して居るのを非難し、學問の道は自得の外はないと主張した。かくて訓詁に於ては漢唐の註疏を取捨し、經義に於ては宋明諸家の説を折衷し、詩は中唐晩唐を取り、文は韓柳歐蘇等を推重したのであつて、折衷學はここに始めて成立した。金峨の學風を窺ふべき著書に『匡正錄』・『經義折衷』（各一卷）がある。

山本北山

兼山及び金峨が新説を標榜して以來、江戸の學者の中に多くの共鳴者が出て、蘐園學派は次第に衰へた。天明寛政の頃折衷學を唱道したのは、金峨の門人山本北山と龜田鵬齋である。（北山鵬齋及び下に記す錦城等の活躍は次の寛政期に續いて居る。）山本北山（文化九年歿六十一）は江戸の人で、名を信有、通稱を

嘉六と云ひ、家は代々幕府に仕へた。北山は金峨の折衷學を承け、更に研鑽を積んで遂に一家の見を樹てた。其の家は元來裕福であつたから、盛に古書珍籍を蒐集して博覽の聞えが高かつた。北山は特に『孝經』を重んじ、二十二歳の時『孝經集說』を著して孝經樓主人と稱した。其の學說の要領を見るべき書に『經學掫說』一卷があり、又反徂徠派の意見は『作詩志彀』『作文志彀』（各二卷）によつて窺はれる。北山は經學のみならず詞藻にも長じ、詩は宋詩を摸範とし、文は韓柳を標準としたのであつて、其の

龜田鵬齋

門下からは天明寛政期の詩の大家市河寛齋・大窪天民等を輩出した。次に龜田鵬齋（文政九年歿七十五）は江戸の人で、名を長興、通稱を文左衞門と云つた。金峨の門に入り、北山と親交を結び、共に博學の名が高かつた。鵬齋は蘐園學派の弊風を排擊して大いに折衷學を唱道し、又詩文及び書に長じてゐた。鵬齋の經學に關する學說を見るべき著書に『論語撮解』『中庸辨義』『大學私衡』（以上一卷）『善身堂一家言』（二卷）等がある。北山並に鵬齋は性豪邁であり、且つ慷慨家であつて、寛政二年に異學の禁があつた後も、其の主張を持して動かなかつた。かくて金峨が首唱した折衷學は、此の兩人の唱道によつていよ〳〵興隆したのであつて、是より江戸の學風並に詩文は一變するに至つた。併し其の學は稍廣汎に流れて、旗幟の鮮明を缺く憾があつたが、之を矯正して折衷學を大成したのは太田錦城（文政八年歿六十一）である。錦城の折衷學は考證學的であるから、轉じて考證學派を一瞥しよう。

考證學派

皆川淇園

井上金峨が折衷學を唱へて、江戸の學界に雄飛してゐる頃、京都には皆川淇園があつて考證學を創めた。淇園（文化四年歿七十四）は京都の人で、名は愿、號を淇園又は筇齋と稱した。博識の學者であり、又書畫

に長じ、圓山應擧の妙所を學んで畫名が高かつた。洪園は朱子學派や陽明學派の人々が、何れも思辨に全力を注いで、文字の研究を蔑視してゐる弊風に鑑みて、字義の究明を基礎として、聖教の眞意を明かにしようとした。初めは字書訓詁の研究に沒頭してゐたが、後には文字は末で名物は本であるとの見地から、彼獨得の開物學を提唱するに至つた。當時其の名聲を傳へ聞いて、門に集まる者三千に達したといふ一事を見ても、其の盛大を推し量る事が出來る。洪園の考證は畢竟支那に於ける清朝の考證學の系統を引いたものであつて、折衷學とは極めて緊密な關係がある。洪園の著書には『詩經』『書經』『周易』及び四書の各釋解や、『詩經』『左傳』『史記』等の助字の解説などがあるが、特に注意すべきは開物學の要旨を說いた『名疇』六卷、易に對する一家の見解を示した『易原』二卷『周易釋解』十卷等である。洪園は又詩文書畫に長じ、畫は圓山應擧に學んで畫名が高かつた。洪園の後考證學を完成

吉田篁墩

に近づかしめたのは、金峨の門人吉田篁墩（くわうとん）（寛政十年歿五十四）である。篁墩は江戸の儒者で、初めの名は坦、後に漢官と云つた。初め父祖の業を繼いで水戸侯の侍醫となつたが、故あつて祿を奪はれ、江戸に出て金峨に就いて儒學を修めた。彼は專ら漢唐の古註を尊

井上蘭臺―井上金峨―┬―山本北山―太田錦城
　　　　　　　　　　├―吉田篁墩
　　　　　　　　　　└―龜田鵬齋

重し、又古鈔本を廣く勘校して文字の異同を考察し、大いに考證學の發達に力めた。折衷學は其の批判を下すに際して、當然考證を主とするものであつて、太田錦城は折衷考證學の大成者と言はれて居る。

太田錦城

錦城（文政八年歿六十一）は加賀大聖寺の人で、名を元貞と云つた。初め京都に上つて洪園の門に入り、後に

江戸に出て北山に學んだが、更に自ら深く究めて一家の見識を樹てた。彼は古今の經義に關する書籍を悉く涉獵し該博な蘊蓄によつて、博引旁證よく異同是非を辨じて、折衷考證學派の第一人者と稱せられた。錦城の著書は極めて多いが、學說を見るべきものは『仁說三書』三卷・疑問錄』二卷・九經談』十卷等である。

獨立學派 三浦梅園

以上述べた折衷並に考證の學は、從來の學派に對する反動として起つたものであつて、各派互に論爭して當時の學界に於ける一偉觀であつたが、此の間にあつて獨り超然として神儒佛老の眞髓を探究し、遂に一家の哲學を組織するに至つたのは三浦梅園（寬政元年歿六十七）である。是を獨立學派と云ふ。梅園は名を晋と云ひ、享保八年豐後杵築に生れ、杵築藩の學者綾部綱齋及び中津藩の學者藤田敬所に學んだが、少年の頃から宇宙造化の理に疑惑を懷いて思索に耽り、二十餘歲の頃には更に西洋の學術、殊に天文學の書を讀んで、大いに發明する所があつた。其の後研鑽を積み、三十歲の頃に至つて始めて宇宙を貫く一條の妙理のある事を悟つて、遂に條理學（今日の自然哲學）を創始した。其の著『玄語』八卷は宇宙の原理を說明したものであり、『贅語』十四卷は更に之を補說したものであり、又『敢語』一卷は獨自の道德說を述べたものであつて、何れも多年の心血を注いで成つた苦心の結晶である。此の三部を梅園の三語と呼んで居る。かくて梅園は我が國最初の哲學者として不朽の名を遺したのである。梅園は詩を能くし集に『梅園詩集』二卷がある。梅園の著述はすべて藤井專隨氏編纂『梅園全集』（大正元年刊洋本二卷）に收められて居る。梅園の學は固より獨自のものであつて繼承者は無かつたが、彼が始めて着手した西洋學

術の研究は、其の門人脇屋愚山（肥後藩の儒員、中井竹山にも學んだ）によつて奬勵せられ、愚山の門からは蘭學者として名高い帆足萬里を出した。

富永仲基

梅園と共に注意すべきは批評學派の富永仲基（寛延年間の人）である。大阪の醬油屋道明寺屋吉左衛門（懷徳堂を起した五同志の一人）の子で、幼少の頃三宅石庵に師事した。獨創的識見に富んだ一大天才であつて、青年の頃『説蔽』（今傳はらず）を著して、儒及び諸子に攻撃を加へ、其の後更に『翁の文』一卷を公にして、儒教竝に神道に對して批判を下し、且つ其の研究法を發表した。彼の述作中特に注意すべきは『出定後語』二卷である。此の書は從來の一切の傳統に囚はれる事なく、彼獨得の論理的研究法を基礎として、佛教の原理を進化的に批評考察したものである。仲基が前人未開の論理的批評學を創始したのは、梅園の哲學倫理と共に近世文化史上の異彩である。仲基はなほ晩年に日本歷史を書き改めようとして業半ばに歿した。其の後を承けて日初（大東）が完成したのは『日本春秋』五十卷である。

懷徳堂

右に述べた折衷學派以下の諸學説が一時に現れて、學界の一大盛況を呈した頃、大阪には懷徳書院（懷徳堂）を中心とする朱子學が盛に行はれて、町家の間から學者が續々現れ、又京都に誕生した心學が時代を下るに從つて漸く上下都鄙に流行し、社會の教化に多大の貢獻をした。かくて倫理道徳の學が民衆化した事も、亦此の時代に於ける注意すべき現象である。大阪に儒學を傳へた最初の恩人は五井持軒（享保六年歿八十一）である。持軒は朱子學を修めたのであるが、『日本書紀』にも通じ、又下河邊長流に就いて萬葉古今の講義を聽いたのであつて、和漢の學を兼ねてゐた。持軒が他の朱子學者と趣を異にし

て主として四書を講じ、而も辯駁を避けて專ら日本主義の實踐道德を說いたのも偶然でない。其の後大阪の町人で學問を好む者が激增したのは、主として持軒の感化によると言はれて居る。持軒の後大阪の儒者で名を知られたのは三宅石庵（享保十五年歿六十六）であつて、其の門人の中井甃庵（寶曆八年歿六十六）は享保九年に同門の學友の所謂五同志（其の一人は富永仲基の父道明寺屋吉左衛門即ち富永芳春である）と相謀つて懷德書院を創立し、享保十一年に官許を得た。書院の建設に奔走した五人は、何れも富家の子弟であり、且つ好學の精神に富んでゐたので、學堂は年々盛大に向ひ、江戸の昌平黌に對する大阪町人の學問所として天下に知られた。書院第一代の學主に推された石庵は、朱子學の外に王陽明や陸象山の學をも講じた人であつて、極めて自由な學風を主義としてゐた。懷德書院の代々の學主及び學者が、一學派に偏する事なく、諸學派の長所を併せ取つたのは、持軒や石庵の感化を受けたのである。此の書院の特色として更に注意すべきは、其の學生が主として町家の子弟である關係から、特に實業教育に重きを置いた事と、京都に於ける學風の影響を受けて、尊王思想が旺盛であつた事とである。懷德堂の學者として最も名聲の高かつたのは、甃庵の子中井竹山（文化元年歿七十五）と、其の弟履軒（文化十四年歿八十六）である。共に五井持軒の子蘭洲の門下で、竹山は第四代の學主となり、履軒は第五代の學主となつた。なほ文政天保頃の陽明學者佐藤一齋は竹山の門人である。

心學

元祿以來社會一般に太平を享樂して浮華輕佻の風を生じたが、殊に享保の頃は財政難に襲はれ、農民は苛斂誅求に惱み、町人も自ら不況に陷つて、國民生活の秩序は大いに亂れた。此の時從來主とし

て武家の間に發達して來た儒教本位の道德とは別に、民衆の思想を安定にする爲の平民道德を說く心學が生れたのは、極めて當然の事である。心學は知心見性の修行を宗とし、而も之を日常生活に實行する事を目的とする社會教化運動である。其の思想の基調となつたものは朱子學と陽明學であるが、なほ神道佛教の長所をも巧みに攝取して、神儒佛三教の混融による、士農工商一般の道德を說くのである。而して心學はもと、右に述べたやうな險難な社會狀態が生んだ時代の要求であるから、一面には經濟本位の時代思想を取入れて、金銀財寶の重んずべき事を說いて居る。

石田梅巖

心學の開祖と言はれるのは享保頃の石田梅巖（延享元年歿六十歲）である。梅巖名は興長、字は勘平と云ひ、丹波の桑田郡の人である。父の嚴格な教育の下に生長して、二十三歲の時京都に出て或老舖の下男となつたが、業務の傍神道に心を潛め、次いで儒佛の研究に入り、三十五歲の頃主家を辭した。其の後儒佛老に通じた了雲禪師に學んだが、四十五歲の頃から京都に講席を開き、男女の別なく市民を招いて三教歸一の平易な道德を說いた。心學の基礎を作つた手島堵庵や、女流心學者として名を知られた慈音尼兼葭などは其の門人である。梅巖は心を以て性を養ふことを標榜し、これを本性の學卽ち性學と稱したのであるが、後の人は之を石門心學と呼んで斯道の祖と仰いだ。心學の講話卽ち道話が發達したのは後の事であるが、其の源はやはり梅巖に始まつて居る。其の講話を見るべき著書に「都鄙問答」四卷「齊家論」二卷などがある。

手島堵庵

梅巖に學んで心學を大成したのは手島堵庵（天明六年歿六十九）である。堵庵は京都の商人近江屋源右衛門の號

である。幼少の頃から梅巖に師事して心學を修め、師の歿後は五樂舍を建てて寢食を忘れて講談し、なほ門弟を四方に巡遣して其の傳播に努めた。心學の名は堵庵に始まるのであつて、當時手島心學の名は天下に聞えてゐた。其の著書が主として假名書きであるのは、梅巖の著書に倣つたのである。其の道話を集錄した『ありべかゝり』二卷は著名である。堵庵に次いで專ら心學の普及に努力したのは、

中澤道二

其の高足中澤道二（享和三年歿七十九）である。道二は京都の商人龜屋久兵衞が剃髮した後の號である。初め石門に學び次いで堵庵に就いて修業し、關西地方に遊說した後、安永八年に堵庵の命を承けて植村嘉兵衞と共に江戶に下り、幕府の後援を請うて盛に關東地方に講說した。是より先石門の俊彥が既に江戶に下つて講席を開いたのであるが、道二に至つて更に盛大に赴き、天明の頃には諸大名旗本にして心學を修業するものが多く、寬政年間には千代田城にも入つて、奧女中の間にも流行するやうになつた。道二は江戶で講じた後、更に近畿を始め東海北陸にも遍く之を傳播したのであつて、心學普及の功勞者である。其の道話を集めて上梓した『道二翁道話』十五卷は、巧妙な譬喩を以て教義を通俗平明に說いて居る。道二と同じ頃に心學の大家として知られたのは、堵庵門下の布施松翁（天明四年歿六十二歲）であつて、『松翁道話』十五卷の著がある。寬政以後に於ける心學の發展に就いては更に後に述べる。

詩社の勃興

寶曆前後の漢學の發展は以上述べた通りであるが、轉じて此の時代の詩文に就いて略述しよう。享保以來詩文が漸く盛になつた事は既に前に述べたが、此の時代になると清新な詩風が都鄙に行はれ、

詩社を結んで詩會を催すことが各地に流行した。詩社の著しいものを擧げれば、江戸には服部南郭の芙蕖社及び其の門人安達淸河の市隱詩社があり、京都には江村北海の賜杖堂、龍草廬の幽蘭社、服部蘇門の長嘯社があり、又大阪には片山北海の混沌社があつて、東西呼應してゐた。なほ長崎の詩人で屢京都と長崎の間を往來した高階暘谷は、かの地に瓊浦芙蓉詩社を設けてゐた。此等の詩社の中で最も名の著れたのは幽蘭社と混沌社である。幽蘭社には近畿の詩人として知られた大江玄圃・岡崎盧門等謂はゆる十才子があり、又混沌社には片山北海・葛飾子琴・尾藤二洲等の七才子があつて、其の名は遠近に聞えてゐた。此等の社中の同人には傑出した詩客もあつたが、多くは風流韻事を事として輕佻浮薄に流れ、或は賣名に汲々たるものであつた。一例を擧げれば、伏見の龍草廬（寛政四年歿七十九）は詩文に長じ和歌和文を能くした人であつて、其の文名は高かつたが、嘗て酒舗の主人の爲に「釀成春夏秋冬酒。醉倒東西南北人」の一聯を書いて與へて以來、妓樓や茶店の店頭に柱聯を懸ける事が流行したと言はれて居る。又彼が率ゐる幽蘭社中には遊蕩無頼の徒が少くなかつたので、時の人が戯れて遊亂社と呼んだと云ふ。此等によつて當時一部の文人の生活を推す事が出來よう。

安永天明期の詩風

享保期の詩人の多くは寶暦頃まで元老としてなほ生存してゐたが、寶暦から天明にかけて新たに現れた詩家の大部分は、徂徠の遺風を傳へて李王詩中の語句を剽竊し、鄙俗淺近を宗としたのであつて實質は益低下したのである。加之彼等は既に述べた通り、それぞれ詩社を結び、多くの門弟を擁して賣名に努めたのであつて、詩壇は大いに墮落した。然るに天明期になると、古文辭の餘弊を痛歎して

其の一掃を企てる者が次々に現れ、詩文刷新の機運は漸く興つて來た。天明期の詩人中で特に注意すべきは、時流を超脱して專ら高雅な詩風を詠じ、且つ詩學に貢獻した江村北海と、詩風革新の先驅となつた山本北山・葛飾子琴・釋六如等である。以下其の略傳と業績とを略述して置く。

江村北海

江村北海（天明八年歿七十六）名は綬、通稱傳左衛門と云ひ、越前福井の儒者伊藤龍洲の第二子で、兄の錦里弟の君錦と共に其の名が著れた。初め俳諧を嗜んだが、蛻巖の言に感じて儒學に轉じた。其の後宮津の青山侯の儒臣江村家を嗣いで江村氏を冒したが、致仕の後は專ら詩文を修めた。性謹厚の人であつたから、輕薄な詩風に染む事なく氣品のある詩を作り、當時大阪の片山北海江戸の入江北海と合せて三北海と呼ばれたが、彼は其の中で最も勝れてゐた。其の詩社では曾祖父專齋の時から北海に至るまで、四代引續いて毎月十三日に詩會を開く例になつてゐたので、當時賜杖堂の詩盟會と稱せられた。其の著作には彼の詩文集の外に、詩學に貢獻した『日本詩選』（正篇十卷續篇八卷）及び『日本詩史』五卷などがある。

山本北山

山本北山（八六四頁參照）は既に述べたやうに徂徠學派に反對した人で、詩に於ては宋詩の清新を慕ひ、文に於ては韓柳の風を推したのであつて、當時の古文辭の餘弊を指示した功は顯著であるが、未だ自ら清新な詩文を作つて世を指導するまでには至らなかつた。北山は未だ革新の實を擧げ得なかつたが、葛飾子琴と釋六如は共に宋詩を宗として新しい詩風を詠じた。

葛飾子琴

子琴（天明四年歿四十六）は大阪の人で、本名を橋本貞元と云ひ、子琴は其の字である。博學多藝の人で、儒學の外に筆翰を能くし、又篆刻に長じてゐたが殊に詩を以て聞えた。初め祇園南海の詩風を詠じたが、後に片山北海の混沌社に入つて詩名を揚げ、

釋六如

更に晩年には宋詩を尊崇して詩文刷新の魁となつた。次に六如(寂六十五)(享和元年)は名を慈周と云ひ近江の人である。江戸に出て劉龍門に就いて修辭を學び、後に京都の智恩院の僧となり、修道の傍名流と詩社を結んで、盛に清新の調を鼓吹した。六如は特に陸放翁の詩風を範としたのであつて、子琴と共に京阪地方に於ける詩風の革新に先鞭を著けた。左に各の詩一首を掲げて置く。

冬日遊二野寺一　子琴

寒郊古刹樹蒼黄　幽徑無レ人午有レ霜　一局手談何處熟　山茶花下小禪房

丙戌晩春赴二東都一旅中作　慈周

浦口春陰十里松　停レ驂幾望赤城峰　青燈殘雨湖南驛　今夜猶聞華頂鐘

子琴六如の詩風は未だ廣く行はれなかつたが、寛政以後になると、此等の詩家に刺戟せられて續々革新の運動が起り、やがて文化文政期の盛況を見るに至つた。

二　寛政以後

寛政の改革

寶暦から天明に至る三四十年間は、國史上の所謂田沼時代であつて、社會一般の風俗が頽廢し、且つ天變地異が頻りに起つて、國民の生活は窮乏の極に達した時である。此の時代に將軍職にあつた家治は天明六年に薨じて、家齊が後を嗣いだのであるが、時に老中の上座となつて幕政を改革し時弊を矯正したのは、曩の白河城主松平定信である。定信は田沼時代の失政の跡を承けて、儉約を奬勵し、

尙武の風を起し、風紀を振肅するなど、治績は大いに擧つたのであつて、學問の方面では有名な異學の禁を命じた。異學の禁は幕府の儒官柴野栗山等の建議に出たものであつて、寛政二年五月に林大學頭（林家第七代錦峰の時）に下した次の達に基づくのである。

朱子學の儀は慶長以來御代々御信用の事にて、已に其方（林大學頭を指す）代々右學風維持之事被二仰付一候儀に候へば、無二油斷一正學相勵、門人共取立可レ申筈に候。然處近頃種々新規の說をなし、異學流行、風俗を破り候類有レ之、全く正學衰微の故に候や、甚以不二相濟一事に候。殊に其方門人共の內にも右體學術純正ならざるもの折節有レ之樣に相聞如何に候。此度聖堂御取締嚴重被二仰付一柴野彥助岡田清助儀、右御用被二仰付一事に候得ば能々此旨申談、急度門人共異學相禁、猶又不レ限二自門他門一、申合正學講究致、人材取立候樣相心掛可レ申候。

即ち林家の朱子學を正學と認め、其の他の學問を異學とするのであつて、異學を禁じたのは官學たる朱子學の振興によつて、學派紛爭の餘弊を一掃し、思想の統一を圖ると共に、是によつて風俗を矯正しようとしたのである。蓋し當時學界に於ては既に述べたやうに、種々の學派が次々に起ると共に國學蘭學が興隆し、勤王思想も漸く盛になつて、國民の思想は大いに活氣を呈した時であるから、幕府としては學問の取締を嚴重にして、民心の歸する所を明かに示す必要があつたのである。然るに從來官學たる朱子學の覇王であつた林家には、鳳岡以後學問に秀でた人材がなく、江戶の儒敎は古學派によつて支配せられ、朱子學の中心は既に京阪の地に遷つてゐた。從つて幕府が寛政の改革に伴なふ敎育政策を樹てるに當つても、其の局に當るべき人材は、之を關西に求めなければならなかつた。

異學の禁と京阪の朱子學者

繼つて京阪に於ける朱子學を見ると、先づ大阪には先に述べた懷德書院に中井竹山及び弟履軒があり、又片山北海の率ゐる混沌社の社友には、安藝の賴春水、伊豫の尾藤二洲、佐賀の古賀精里などがあつて、儒學竝に詩文に名望が高く、又竹山兄弟と往來して互に切嗟してゐた。又京都にはもと林家に學んだ柴野栗山を始めとして、那波魯堂の門下に備中の西山拙齋、備後の菅茶山など知名の學者があつて、何れも大阪の朱子學者と親交を結び、共に提携して斯學の研鑽と鼓吹に力めてゐた。而して此等の諸學者は直接若しくは間接に、それぞれ寛政の朱子學中興に功績があつたのである。今著しい者に就いて云へば、中井竹山は天明八年に老中松平定信が上洛した時其の諮問に答へ、更に寛政元年には『草茅危言』五卷を書いて、政治經濟に關する改革の意見を上申した。又柴野栗山は才學を兼ね詩文に秀でてゐた上に、嘗て林家に學んだ關係もあつて、天明八年に拔擢せられて幕府の儒官となつて學政の改革に盡したのであり、西山拙齋は栗山に書を送つて異學の禁を進言したのである。其の他尾藤二洲と古賀精里は異學禁止の令が下つた後、幕府に召されて栗山と共に昌平黌の教官となり、學政の改革竝に朱子學の振興に與つて著しい功績があつた。栗山・二洲・精里は世に寛政の三博士と稱せられた。要するに異學の禁は拙齋の進言に基づき、栗山の建議によつて遂に松平定信を動かしたのであつて、昌平黌を中心として朱子學が再び天下に行はれるやうになつたのは、全く其の源を京阪の朱子學者に發してゐるのである。

異學の禁の影響

寛政二年に異學の禁が下つた時、學界は忽ち喧騒を極め、憤然奮ひ起つて其の非を論駁する者が多

く、大學頭林錦峰（信敬）の如き朱子學者さへも、上書して反省を促したのであるが、幕府は斷然之を斥け、朱子學の出でない者は仕官する事を許さなかつたので、斯學は一時に興隆した。是より昌平黌は天下の學問の中心となり、諸藩の學校も年々新設せられ、講學の風は村落にも及んで、至る所に私塾寺子屋を設けて、平民の子女にも教育を施すやうになつた。かくて異學の禁は從來學界に釀成せられた弊風を一掃して、學問を統一し、文教を都鄙に普及して、教育史上に一新紀元を作つたのであるが、其の弊害も亦少くなかつた。其の著しい點を擧げれば、（一）折角勃興して來た自由研究の精神が忽ち萎縮した事、（二）從來辯難攻擊の間に自他共に向上進步した諸學派が、忽ち活氣を失ひ學界の不振を來した事、（三）一般學者が經術の研究を捨てて寧ろ訓詁の學に向ひ、動もすれば偏狹固陋に陷つた事などである。

寛政期の朱子學者

寛政の學政改革以來の儒學が、朱子學派によつて風靡せられたのは勿論である。是より學政改革を斷行した松平定信の事を述べ、次いで寛政期の代表的朱子學者に就いて略述しようと思ふ。

松平定信

松平定信（文政十二年歿七十二）は田安宗武の第三子で、八代將軍吉宗の孫である。十七歲の時奧州白河城主松平定邦の養嗣子となり、やがて家督を相續して越中守に拜せられ、大いに治績を擧げた。天明六年に將軍家治が薨じて、家齊が將軍職を嗣いだが、定信は其の翌年に三十歲で老中の筆頭に据ゑられた。それより將軍家齊を輔佐し、六年間弊政の改革に盡瘁して幾多の功績を擧げた後、致仕して樂翁と號し、專ら風月を友として晚年を送つた。定信は幼少の頃から才學に秀で、和歌書畫に長じ、老中の職にある頃は學

藝を奬勵し、且つ其の保護者となつた。自ら編述した書籍は六十餘種に達して居るが、其の中で文學として見るべきものは、見聞感想を記した『花月草紙』六卷『退閑雜記』（前篇十三卷 後篇四卷）家集の『三草集』三卷等である。

林述齋

定信に拔擢せられた林述齋（天保十二年 歿七十四）は名を衡と云ひ、美濃岩村の城主松平乘薀の次子である。寛政五年に林錦峰が歿して嗣子がなかつたので、定信の命によつて林家を嗣ぎ、家學の衰運を挽囘して中興の祖と稱せられた。述齋は寛政九年に、從來半私半公の姿であつた昌平坂學問所竝に聖廟を、幕府の直轄に移すと共に、學制を改革し規模を擴張して、文教の振興に多大の功績を遺した。彼は幼少の頃から和漢古今の書を通覽し、又詩文に長じてゐた。十八歲の時一夜に百律を作つた事があるが、晩年には益圓熟して一家の風を成すに至つた。

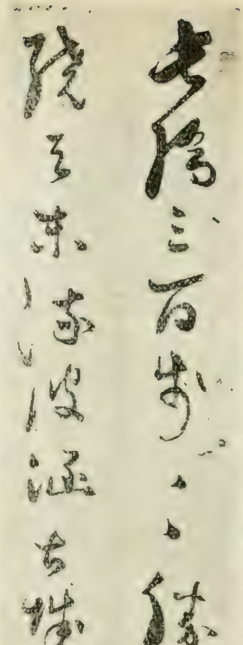
柴野栗山

柴野栗山（文化四年 歿七十二）は名を邦彥、字を彥助と云ひ、讚岐の高松の人である。八栗山の下に生れたので栗山と號した。幼少の頃江戸に出て、鳩巢門下の中村蘭林に學び、次いで林榴岡の門に入つて朱子學を修め、傍詩文を學んだ。學成つて阿波侯に仕へて四百石を知行したが、後に京都に住んで皆川淇園・西依成齋・赤松滄洲等と親交を結んだ。天明三年五十三歲の時幕府に召されて昌平黌の教官となり、林述齋・岡田寒泉等と共に學政の改革竝に儒學の振興に功績があつた。是より先都下の儒者の多くは、徂徠・仁齋の流れを汲んでゐたが、栗山の努力によつて朱子學を奉ずる者が多くなり、學風が一新するに至つた。栗山は朱子學を唱へた人であるが、他の學派の長所をも認めて、比較的公平な態度を執り、又從來の朱子學者が詞藻を輕んじたのに反して、詩文を重んじ自らも詩文に長じてゐた。栗山は教育

行政に全力を注ぎ、著述に重きを置かなかつたから著書は極めて少い。詩文集に『栗山堂詩集』四巻と『栗山堂文集』三巻がある。

尾藤二洲

尾藤二洲（文化十年歿六十九）は名を孝肇、字を志尹と云ひ、伊豫の川江村の人である。大阪に出て片山北海の混沌社に入り、頼春水等と共に經學と詩文を修め、又中井竹山並に履軒兄弟と親しく交つた。寛政三年に擢んでられて昌平黌の教官となり、學生の教育に專念した。二洲は徂徠並に仁齋の學風を駁し、又陽明學を排したのであつて、其



尾藤二洲筆蹟
（今村三葉氏藏）

の批評を見るべき著書に『素餐錄』『正學指掌』各一巻等がある。二洲も亦詩文を能くし、且つ之を鼓勵したのであつて、詩は特に陶柳二家を推重した。二洲は殊に文章に長じ、文品の高潔を以て知られてゐる。文集に『靜寄軒文集』十二卷がある。

古賀精里

古賀精里（文化十四年歿六十八）は名を樸、字を淳風と云ひ、佐賀の人である。佐賀の精町（しらけ）に住んだので精里と號した。初め京都に出て福井小車に學び、更に西依成齋の門に入り、後大阪に寓して二洲・春水等と往來した。其の後郷里に歸つて鍋島侯に仕へ、藩學弘道館の創建に干與し、且つ教授となつて育英に功が

あつた。寛政七年に拔擢せられて昌平黌の儒員となり、次いで教官となつて、述齋・栗山・二洲等と共に學政を振興した。精里は博學であり又詩文に長じてゐた。著述には『大學』・『中庸』の解義の外に『精里初集』二卷・『精里二集』三卷・『精里三集』五卷等がある。

文化文政期以後の儒學

異學の禁があつた寛政の儒學界には、既に述べたやうに種々の學派があつて互に論爭してゐたが、文化文政期には、折衷考證學や批評學等は既に行詰つて振はなくなり、只其の流を汲む學者が現れたに過ぎない。それらの學者の中で注意すべきは、我が古典の考證に專念した狩谷棭齋（天保六年歿六十一）や、神儒の融合を論じ又蘭學を修めて、窮理學を唱道した帆足萬里（嘉永五年歿七十五）の如き學者が現れて、時勢の推移に伴なふ新學風が起つた事である。學風の變遷は朱子學派を始め陽明學派などにも見られるのであつて、天保から幕末期にかけての頃には、一學派を墨守する者は殆どなく、寧ろ進んで他の學派の長所を採つたのであり、殊に幕末期には時勢の影響を受けて、經學や訓詁に跼蹐する事なく、盛に思想界に活躍するやうになつた。而して文化文政期以後の儒學の主要なものは、朱子學派陽明學派及び水戸學派である。以下此の三つの學派の狀況を概說しよう。

(一)朱子學派

懷德堂の史學

寛政以後の朱子學は江戸の昌平黌を中心として諸國に興隆した。今それ等の諸學者の事を述べるに先立つて、關西に起つた懷德堂一派の史學と、賴山陽の史學に就いて述べて置く。懷德堂の學風は創立以來極めて自由であつて、朱子學の外に陸王の學を兼修した學者が多いのであるが、殊に竹山及び履軒が史學を重んじ、尊王精神に基づいて史論を鼓吹したのは、最も注意すべき事である。竹山の尊

王思想は『草茅危言』の中に見えて居り、史學に長じた事は『逸史』十三卷（徳川家康一代の事蹟を論述したもの）の著述のあるのに徵して明瞭である。其の弟履軒は、學風に於ては竹山と異なつて居るが、尊王家であり又史學を重んじた點に於ては共通して居る。卽ち履軒は皇室の現狀を慷慨し、壯年の頃『通語』三卷を著して、保元以後南北朝に至るまでの治亂興亡の跡を論じて、大いに大義名分の顯揚に努めた。竹山・履軒等によつて唱へられた尊王精神を中心とする史論は、栗山・二洲等に影響し、やがて山陽の史學となつて後世に偉大な感化を及ぼしたのである。

賴山陽の史學

賴山陽（天保三年歿五十三）は通稱を久太郎、名を襄（のぼる）と云つた。春水の長子で、春風・杏坪二大家の甥である。かくて朱子學の家に生れたのであるが、經學よりも寧ろ史學と詩文に主力を注いだ。山陽が史學に志したのは幼少の頃からであつて、十六歲の時には備中の地理學者古川古松軒に接して、史學の研究に肝要な地理學の知識を受け、更に十八歲の年江戶に遊學して、叔母婿の尾藤二洲に就いて史論を聽き、又其の間柴野栗山の史學をも學んで、史學研究の基礎を作つた。由來朱子學派には史學の一派があるのであつて、水戶の義公を始めとして、新井白石・中井竹山・同履軒等は此の方面を承けたのであるが、山陽は其の流を汲んだ最後の巨擘である。山陽の史學に關する主著は『日本外史』二十二卷であつて、之に次ぐものは『日本政記』十五卷である。『日本外史』は前後二十二年の心血を注いで成つた著述であつて、文政十二年に松平樂翁の贊詞を掲げて上梓した。此の書は史書としては創見に乏しく、記述にも公平を缺いてゐる點があるが、卓絕した史論と情熱の籠つた文章とは、尋常の史家の到底企て難い

所であつて、本書の特長である。其の史論は『大日本史』や白石の『讀史餘論』に負ふ所が多いのであつて、大義名分の高唱を眼目として居り、其の記述の體裁は履軒の『通語』から得て居る。次に其の敍事文は司馬遷を學び、議論文は蘇東坡を模範としたものであると言はれて居るが、文體は日本的漢文を用ひて、縱横自在の才筆を揮つて居る。次に『日本政記』は古今の政變を論じたもので、晩年血を吐きながら心根を盡して書いたのであるが、全部完成しない中に卒去した。『日本外史』と『日本政記』は其の後廣く學徒に愛讀せられて、彼等に國史の知識を與へたばかりでなく、尊王の思想を喚起し、士氣を鼓舞し、引いては明治維新の大業を翼讃した功績の極めて大であることは、今更言ふまでもない。山陽の詩文に就いては更に後に述べる。

佐藤一齋

朱子學は寛政の三博士等によつて再興せられたが、述齋の功も亦顯著である。而して述齋の林家中興の業を輔けたのは佐藤一齋（安政六年歿八十八）である。一齋は江戸の人で名は坦、字は大道、別號を愛日樓又は老吾軒と云つた。寛政二年十九歳の時美濃岩村侯の藩邸に出仕し、述齋と親交を結んでゐたが、寛政三年に故あつて藩を辭し、大阪に下つて中井竹山の門に入つた。寛政五年に江戸に歸つて、林簡順の家に寄寓し、專心儒學を攷究してゐたが、其の年簡順が歿し述齋が其の後を嗣いだので、是より述齋と師弟の緣を結んだ。次いで文化二年には林家の塾長となつて、多くの門生を監督指導し、天保十二年述齋が世を去つた時には、拔擢せられて昌平黌の儒官となつた。一齋の名聲は林氏の塾長となつた頃から彌高くなり、晩年には其の門下三千人と稱せられた。其の著書の中で語錄の『言志錄』同後錄・

同晩錄・同耋錄〔各一卷總括して言志四錄と云ふ〕は、實踐的教訓に富んでゐるので廣く讀まれてゐる。一齋は經學の大家であると共に一大文章家であつた。〔文章の事は下に述べる〕一齋は表面朱子學者であつたけれども、寧ろ陽明學に傾いた人であるから、其の門人は自ら兩方面に分れてゐる。一齋の陽明學及び其の方面の門下に就いては下に述べる。

安積艮齋

述齋の門人中で最も名高いのは安積艮齋（あさかごんさい）と松崎慊堂（かうだう）である。艮齋〔萬延元年歿七十六〕は名を信、字を思順と云ひ、奥州安積（あさか）郡郡山の神官の家に生れた。十七歳の時志を立てて江戸に出で、一齋の學僕となり、二十一歳から述齋の門に入り、刻苦勉勵して學業が大いに進んだ。二十四歳の時から神田駿河臺に私塾見山樓を開いて門人を教へたが、後に郷里の二本松侯〔丹羽氏〕に擢用せられて藩學の教授となり、更に晩年には昌平黌の教授となつて、一齋と共に育英に盡瘁した。以上述べた略傳によつて、艮齋が主として教育家として活躍した人である事が略明かになつたと思ふが、更に經學に就いて一言して置く。艮齋は朱子學に拘泥せず、陸王の學は固より、老莊佛に至るまで其の長所を採るべき事を唱へ、孔子の教義は忠信の二字に歸するものであるとした。是は朱王の融合を主義とした一齋と共に、近世儒學の傾向を代表するものである。其の隨筆『艮齋閒話』〔正續各二卷〕は彼の學說を窺ふ事が出來、又處世上の教訓を多く含んで居るので廣く讀まれた。文章家としての艮齋の事は下に述べる。

松崎慊堂

次に松崎慊堂〔弘化元年歿七十四〕は名を復、字を明復、別號を益城と云ひ、肥後國益城郡木倉村の農家に生れた。幼時父の意に從つて僧となつたが、十五歳の時儒學に志して江戸に出で、稱念寺の玄門の許に身

を寄せ、其の援助を受けて昌平黌に學んだ。數年の後林信敬が歿し述齋が林家を繼いだので、其の私塾に入つて一齋と共に研鑽を積んだ。享和二年遠江の掛川藩の教授となり、藩政にも與つて功があつた。其の後肥後の細川侯が其の學才を傳聞して招いたが、主恩を重んじて赴かず、やがて府西羽澤村に石經山房を設けて隱退し、經學と文章に耽つた。天保十三年に將軍家慶に謁する光榮を得、幕府が諸侯に命じて古典の善本を印刻せしめた時には、擬刻書目を作製して獻じた。慊堂は詩文に長じてゐたが、特に經義の究明を重んじた。初めは朱子の註を尊重したが、後に訓詁の攷究には漢唐の註疏は固より、三史『文選』の類をも參酌すべしとし、晩年には特に説文を好んだ。彼が狩谷棭齋と相識つて互に推重したのも、學風に於て共鳴する所があつた爲である。著書には『周禮札記』二卷『四書札記』二卷以下數種があり、又詩文集には『慊堂詩文集』五卷『慊堂文集』五卷等がある。門人中で最も名を知られたのは、鹽谷宕陰と安井息軒の二人である。

鹽谷宕陰

鹽谷宕陰（慶應三年歿五十九）は名を世弘、字を毅侯と云ひ、江戸愛宕山の下に生れたので宕陰と號した。幼少の頃父桃蹊に學び、十六歳で昌平黌に入つて慊堂に師事した。其の後慊堂の薦めによつて濱松侯水野越前守に仕へ、藩侯が老中となるに及んで天保の改革の顧問となり、更に儒官に擧げられた。宕陰は夙に國家の將來を豫想して海防を論じたが、いよ〳〵米艦が浦賀に來航した時には、慷慨して種々の論策を上つた。經學に於ては朱註を墨守せず、漢唐の註疏を參酌して長所を採つたが、最も得意とする所は史學と文章であつた。其の著述には『丙丁烱戒錄』二卷『籌海私議』一卷『大統歌』一卷以下數種が

あり、文集には『宕陰存稿』十三卷がある。次に安井息軒（明治九年歿七十八）は名を衡、字を仲平と云ひ、日向の人で、昌平黌に入つて慊堂に學んだ。文政九年二十八歳の時飫肥侯の侍讀となり、次いで藩校の助教となつたが、天保六年（三十七歳）に職を辭して再び昌平黌に入り、やがて門人を集めて教へ、名聲が大いに揚つた。嘉永六年米艦が來て互市を請うた時、國防を憂へて『海防私議』一卷を著し、水戸烈公に認められて時務の諮詢を受けた。やがて幕府に擢用せられて昌平黌の教官となつたが、晩年には致仕して專ら著述に從事した。息軒は朱子學派の人であるけれども、經史の古學を好んだのであつて、漢唐諸家の註疏を用ひ、文章は唐宋を模範とし、秦漢の古文を參酌した。古學を奉じて昌平黌の教授に擧げられたのは異例であると言はれて居る。息軒は天文地理算數等の知識は洋學に求めたのであつて、學問に對しては極めて公正な態度を執つた。其の著述は『管子纂詁』十二卷『左傳輯釋』二十一卷『論語集說』六卷以下多數ある。文集には『息軒遺稿』四卷等がある。

宕陰・息軒と共に安政の三博士と稱せられ、昌平黌の最後を飾つたのは芳野金陵（明治十一年歿七十七歳）である。下總國葛飾郡松崎村の儒醫彝倫の子で、名を世育と云つた。初め父に就いて經書を學び、二十二歳の時龜田鵬齋の子綾瀨に師事した。弘化四年四十六歳で、駿河田中藩主本多侯に仕へて儒官となり、藩政に與つて功があつた。其の後文久二年六十一歳の時昌平黌の儒員に擧げられ、次いで教授となつて學生を指導し、又幕府に種々獻策する所があつた。晩年の明治二年には、大學少博士を經て中博士となつたが、大學廢止と共に職を免ぜられたので、大塚に閑居し專ら著述に耽つた。金陵はかねて海外

の狀勢に注意を拂ひ、海防兵制などに心を潛めてゐたが、米艦が浦賀に來た時には意見書を久世侯に獻じ、又勤王の志士と肝膽相照してゐた。其の著書の草稿は晩年火災の爲に燒失したが、遺稿には『金陵文鈔』二卷『金陵遺稿』十卷がある。

（二）陽明學派

幕末期に朱子學と共に思想界竝に實社會に貢獻する所の多かつたのは陽明學である。陽明學は熊澤蕃山の歿後振はなかつたが、享保の頃大阪の三宅石庵は程朱學の傍陸王の學を講じ、又京都の三輪執齋（寛保四年歿七十六）が江戶に出て陽明學を鼓吹して以來再び興隆した。殊に執齋が校刻した『傳習錄』は標註を施した最初であつて、斯學の普及に貢獻する所が多かつた。其の後江戶の中根東里（明和二年歿七十二）は晩年に陽明學を唱へ、大阪の中井竹山も陸王の學を尊信したのであるが、幕末期に於ける振興に最も關係の深いのは、竹山の門に學んだ佐藤一齋である。一齋は表面宋學を講じてゐたが、寧ろ陽明學を重んじたのであつて、朱王融合主義の學者であつた。かくて一齋の學風は其の門下から陽明學者を輩出し、門人以外の學者にも直接間接に影響する所が多かつた。

大鹽中齋

文化文政期の陽明學者として名高いのは、一齋の感化を受けた大鹽中齋（天保八年歿四十四）である。中齋は通稱平八郎と云ひ、阿波の人で、大阪に出て大鹽氏の養子となつた。幼少の頃から學問を好み、特に王陽明の人物及び學說を慕つて研鑽を積み、傍武道を修め、槍術では關西第一と稱せられた。二十六歲で大阪の町與力となり、町奉行高井山城守を輔佐して名聲を揚げたが、三十七歲で職を辭し、專ら子弟を敎授し又著述に從事した。其の後天保の大飢饉の慘狀を坐視するに忍びずして、時の町奉行跡部

山城守定興に窮民の救助を請うたが、要領を得なかつたので、一切の藏書を金子に替へて窮民に施した。然るに山城守は之を賣名の行爲として罵つたので、憤激して天保八年二月に遠近に檄を飛ばして同志を集め、富商の倉庫を破つて金穀を貧民に頒ち、義俠の亂を起して遂に火中に焚死した。時に年四十四であつた。中齋は賴山陽・近藤重藏（擇捉島探險家）等と親交を結び、其の門人は宇津木矩之允以下前後殆ど一千人に達したと云ふ。中齋は陽明學派の學者であるけれども、程朱の長所をも採つたのであつて、學說に於ては道德の根本を太虛に歸してゐるが、努めて空論を避けて實踐躬行を重んじ、門下に對しては嚴格な教育家であつた。彼の學說思想を見るべき著書には、晩年に成つた「洗心洞劄記」三卷がある。

幕末の陽明學者

幕末の陽明學は中齋の唱導によつて振興したのであるが、注意すべき學者は一齋の門から輩出した。山田方谷・池田草庵・吉村秋陽・佐久間象山等がそれである。尤も此等の人々は、當時の朱子學派と共に時勢の影響を受けて、主として經世家若しくは勤王家として盛に活躍した。例へば方谷は宋學並に禪學をも兼ねた人であつて、熊澤蕃山を崇拜して藩政の改革に盡瘁し、又砲術兵制をも研究した。又象山は和漢洋の學を兼ねて、銃砲兵制築城造船等の技術に通じ、開國論を唱へて攘夷黨の爲に殺害せられ、其の門下からは吉田松陰の如き勤王の志士を出した。要するに幕末期の儒學は、朱子學派といひ陽明學派といひ、何れも一學派に偏する事なく、和漢の學に通じ、又蘭學の影響をも受けて、實社會に貢獻する所が多かつた。

（三）水戶學派

　幕末期の勤王思想に多大の刺戟を與へたものにはなほ水戶學がある。水戶學は光圀を中心とする創

始時代以來、大義名分の尊重と國體の顯揚を根本精神としてゐるのであるが、時代を經る間に多少の消長變遷があつた。卽ち創始時代には一學派に偏する事なく、漢學者と言はず、國學者と言はず、苟も史局の事業に關係ある碩學を偏く集めたのであつて、『大日本史』の編纂が其の主要なる事業であつた。併し光圀の薨じた後修史事業ははかばかしく進捗せず、水戸學の不振時代が續いたのであつて、是を復興したのは第六代治保(文公)で、此の明主を輔けて修史事業の完成に努めたのは、立原翠軒及び其の門人藤田幽谷等である。

立原翠軒

翠軒(文政六年歿七十)は名を萬、字を伯時、別號を東里と云ひ、水戸の人である。徂徠の學統に屬する人であるが、學派に拘泥する事なく、光圀の精神に基づいて彰考館の總裁となつて修史事業に盡瘁し、水戸學の復興に大なる功績があつた。其の著は主として史學に關するもので、凡そ五十餘種に達してゐる。

藤田幽谷

次に幽谷(文政九年歿五十三)は名を一正、字を子定と云ひ、其の先祖は參議小野篁から出てゐる。水戸の人で翠軒の門に學び、又蒼山に私淑し高潔な人格を以て水戸精神の鼓吹に努めた。幽谷は翠軒と共に治保を輔佐して、『大日本史』の校訂並に志表の編修に從事し、次いで七代治紀(武公)の時擢んでられて編輯を總裁した。

水戸學は治保の時代に翠軒・幽谷の努力によつて中興したのであるが、更に九代の齊昭(烈公)の時代になつて大成せられた。此の大成時代を代表する碩學は、幽谷の門人會澤正志齋と幽谷の子東湖である。

會澤正志齋

正志齋(文久三年歿八十二)は名を安、字を伯民と云ひ、水戸の人である。幽谷に師事し、其の歿後には彰考館の總裁となり、又烈公の顧問となつて種々獻策して藩政に功績があつた。正志齋は當時の水戸學の

代表者と見るべき人で、（當時水戸學を會澤學とまで稱した。）其の著書には『新論』二卷・『迪彝編』一卷・『下學邇言』七卷等三十餘種あるが、最も注意すべきは『新論』である。此の書は文政七年英船が常陸に來り、翌年幕府が攘夷令を下した時、尊王攘夷の說を高唱する爲に執筆したもので、國體・形勢・虜情・守禦・長計の五篇から成り、當時の經世家に多大の刺戟を與へた。

藤田東湖

次に東湖（安政二年歿五十歳）は名を彪、字を斌卿と云ひ、幽谷の第二子である。正志齋と共に烈公に仕へて文武の諮詢に答へ、弘道館の設立に奔走し、やがて正志齋の後を承けて彰考館の總裁となつた。烈公が幕府の嫌疑を受けて隱居し東湖も亦幽閉の身となつた時、宋の文天祥に倣つて正氣歌を賦した事は最も有名である。東湖は父の感化を受けて、水戸精神の宣揚普及に努めた人で、其の著『弘道館記述義』二卷・『回天詩史』二卷は志士を感化する所が極めて大であつた。殊に『弘道館記述義』は齊昭の『弘道館記』（弘道館建學の精神及び教學の綱領を記したもの）の意義並に精神を解說敷衍したもので、大義名分を正す事を第一とする。水戸學の精神を明かにしたばかりでなく、筆者の學識文才を遺憾なく發揮して居る。要するに水戸學は義公及び烈公を中心とし、翠軒以下の四大人の努力によつて大いに振興したのであつて、幕末に於ける勤王思想に偉大な感化を及ぼした。

民衆教化運動

（一）心學

文化文政以後の儒學の概要を終つたから、最後に此の時代に於ける民衆教化運動に就いて略述して置く。幕末の民衆教化事業として特に注意すべきは、心學と報德教である。心學の發生並に發達に就いては既に前節に述べたが、天明から寛政の頃にかけて其の教義は益發達し、講舍は各國に續々設立

せられて彌隆盛に赴いた。當時心學の普及に努めたのは、道二の高弟の關口保宣を始め、植松自謙・北條玄養等であつて、北は奧州西は中國西國に亙つて廣く傳播せられた。次いで文化文政期には統師者を失つて、江戸と上方を中心とする二大勢力の對立となつたが、幾多の鼓吹者が輩出して益盛大になり、文政の末頃には公許を受けた講舍の總數百三十餘舍に達し、其の分布は三十餘箇國に及んだ。

柴田鳩翁

當時心學の鼓吹者として最も名の著れたのは柴田鳩翁（天保十年歿五十七）である。鳩翁は本名柴田亨、通稱謙藏と云ひ、京都の人である。年少の頃商家に奉公してゐたが、父の歿後志を立てて江戸に遊學し、二十五歳の時歸京した。文政四年三十九歳で薩埵徳軒に就いて心學を修め、それより諸國を巡つて社會教化に盡瘁し、文政十年に眼疾の爲失明した。鳩翁は公卿や諸侯に招かれて講說し、文政十一年には仁和寺一品法親王の御前で進講する光榮を得た。其の著『鳩翁道話』（正續續々合せて九卷）は其の子武修が筆記したものである。譬喩が巧妙であり、實例が適切であり、教訓的な和歌俳句川柳などの引用が豐富であり、而も滑稽諧謔を混へて居るのであつて、數多く刊行せられた道話中の白眉と稱せられて居る。

（二）二宮尊徳と報徳教

次に報徳教は獨立學派の二宮尊徳（安政三年歿七十歳）が唱道した社會教化運動である。尊徳は通稱を金次郎と云ひ、相模國柏山村の人である。幼時父を喪ひ、十六歳の時母に別れて貧困の間に苦學した。十四歳の頃から濟世の志を立ててゐたが、後に神儒佛三教を融合して實踐躬行主義を力說し、廣く徳化を及ぼした。是を報徳教と云ひ、人々は尊徳を呼んで報徳先生と云つた。其の濟世の爲に盡した幾多の事績は、世に知られて居るから是には省略する。尊徳は自ら得た金錢を悉く報徳義金としたのであ

つて、之を基金として宣傳せられた報徳教は、其の歿後益盛況を呈し、今日もなほ唱道せられて居る。其の終世の著述は二千五百册に達し、昭和七年靜岡縣小笠郡掛川町二宮尊德偉業宣揚會から刊行せられた『二宮尊德全集』は、洋本三十六卷（内一卷門人集）四萬六千頁から成つて居る。

文化文政期の詩文

寛政以後幕末までの儒學の概說は以上で終つた。繼つて此の間の詩文の發展に就いて述べよう。文化文政期には、詩は唐詩より更に下つて宋詩を模範とし、文章は唐宋八大家文を範とする傾向が起つた。宋詩を推重する風は、既に述べたやうに、子琴六如等に始まるのであるが、是を盛に鼓吹して詩風の刷新に先鞭を著けたのは、市河寛齋・菅茶山等である。

市河寛齋

市河寛齋（文政三年歿七十二）は名は世寧、字は子靜、別號を半江・西野又は江湖詩老と云ひ、上野國甘樂郡に生れた。幼少の頃志を立てて江戶に出で、林祭酒正良の門に學び、後に幕府に仕へて昌平黌の學員長に補せられたが、五年の後病の爲に辭した。寛齋は經學よりも詩によつて名を知られた。初めは李王七子の風を學んだが、後に其の非を悟つて唐の詩風を慕ひ、更に陸放翁を模範とした。其の著書には『日本詩紀』五十卷（圖書刊行會印行）の如き名著がある。此の書は上代から平治頃に至るまでの、本邦の漢詩を普く集めたもので、王朝時代の詩は殆ど網羅せられて居る。なほ寛齋の詩文集には『寛齋摘草』四卷と、其の補遺の『寛齋遺稿』五卷がある。

晩秋舟行

晴江秋淨碧涵レ天　夾レ岸霜楓燒ニ晩煙一　漁唱商歌都去盡　思レ詩人在ニ夕陽船一

東坡赤壁圖

孤舟月上水雲長　崖樹秋寒古戰場　一自風流屬坡老　功名不復畫周郎

此等が得意の詩である。

寛齋が率ゐた江湖詩社中で傑出したのは、大窪詩佛・菊池五山・柏木如亭等であつて、寛齋と併せて江戸の四家と稱せられた。**大窪詩佛** 大窪詩佛（天保八年歿七十一）は常陸の人で、名を行、字を天民と云つた。山本北山・市河寛齋に就いて詩學を修め、江戸神田のお玉が池の畔に居を卜して江山詩屋と稱した。彼は宋元の新しい詩風を提唱した人で、諸國を巡遊して多くの文人と交はり、京都では賴山陽に接見した。洒落な人で多くの逸事を遺して居る。**菊池五山** 菊池五山（安政六年歿八十四）は名を桐孫、字を無絃と云ひ、讃岐の人である。江戸に出て寛齋の門に學び、本郷一丁目に住み家を五山堂と稱し、門人に詩を教へてゐたが、後に高松侯に聘せられた。詩は詩佛と同じく宋の詩風を宗としたが、甚しく纖細巧緻の弊を帶びてゐる。又柏**柏木如亭** 木如亭（文政二年歿五十七）は名を昶、字を永日と云ひ、江戸の人で、幕府の用命を受けた木匠の家に生れた。初めは宋詩を喜んだが、唐の詩風を慕つて一家を成した。詩佛・五山・如亭は何れも書を能くし、殊に文人畫に長じ、谷文晁の如き畫家と共に屢書畫會を開き、得る所は多く宴飲に投じてゐた。當時の江戸の文人墨客の多くは、太平を謳歌し風流三昧に耽り、酒色に溺れる風があつたのである。左に詩佛以下三子の詩の例を掲げて置く。

夏晝　　　　　大窪詩佛

食レ餵烏雛猶待レ母　學レ飛燕子已離レ巢　閒黄牛挽閙窗午　試見微風度二竹梢一

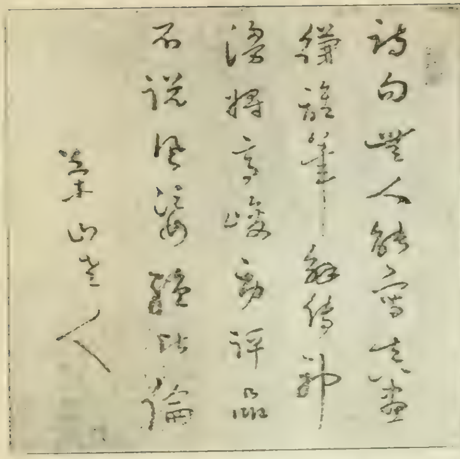
春　曉　　　　　　　　　　　　　　菊池五山

黄紬眠足暖初レ攲　先覺蒲膝和氣匝　枕上鐘傳寛永寺　此聲二一度レ花來

大刀魚　　　　　　　　　　　　　　柏木如亭

吶喊聲銷天日麗　波濤海靜太平初　折刀百萬沈レ沙去　一夜東風盡作レ魚

寛政以後の詩人は從來の弊風を排除して、詩壇の刷新に努めたのであるが、詩佛以下の江戸の詩人の間には、宋詩を摸倣して纖巧に流れ、卑俗淺近を宗とするやうな餘弊に陷つた。併し關西には、不朽の名を傳へた文人が次々に現れて一大盛況を呈した。



菅茶山筆蹟（伊藤小三郎氏藏）

中國に於ける菅茶山・賴杏坪・賴山陽、稍後れて九州に現れた廣瀬淡窓及び其の弟の旭莊などは、何れも錚々たる詩客である。菅茶山（文政十年歿八十歳）は名を晉帥、字を禮卿と云ひ、備後の神邊の人である。十九歳の時京都に出て那波魯堂の門に學び、同門の西山拙齋や大阪の中井竹山などと親交を結んだ。歸郷の後家の近くに私塾黄葉夕陽村舍を營み、盛に門人を集めて教授した。其の門人には山陽南海の各地から集まる者が多く、文名は東西に聞え、殊

に詩に於ては當時一流と言はれた。茶山は韓退之・蘇東坡に近い詩風を詠じ、風格の高邁と縱横の才とによつて推賞せられた。詩集に『黄葉夕陽村舍詩』十卷がある。

冬夜讀書

雪擁㆓山堂㆒樹影深　檐鈴不㆑動夜沈沈　閑收㆓亂帙㆒思㆓疑義㆒　一穗青燈萬古心

伏見道中

巨椋湖邊感㆓昔遊㆒　回㆑頭二十五年秋　汀前依㆑舊多㆓楊柳㆒　何樹曾維㆑月舟

赤馬關懷古

蜑雨茫茫海上村　水濱何處問㆓英魂㆒　祇聞波底皇居在　誰信人間老佛存
鷁首不㆑還悲㆓楚澤㆒　鵬程無㆑際接㆓庄門㆒　腥風吹斷篷窗夢　島樹汀雲鬼氣昏

賴杏坪

此等によつて茶山の詩風を見る事が出來る。次に賴杏坪（天保五年歿七十九）は名は惟柔、字は千祺と云ひ、安藝藩の儒者である。青年の頃に京阪に遊學し、二洲・精里等と共に程朱學を研鑽し、竹山兄弟・拙齋・茶山等と互に往來してゐた。三十歲の時藩主淺野重晟に擢んでられて藩校の儒員となり、後に民政にも與つて治績を擧げた。杏坪は經學よりも詩人として聞え特に古詩を得意とし、近體は宋詩を宗とした。詩集に『春草堂詩鈔』四卷がある。

賴山陽

山陽は幼少の頃から詩人の才があつた。十三歲の時「十有三春秋、逝者已如㆑水、天地無㆓始終㆒、人生有㆓生死㆒、安得㆑類㆓古人㆒、千載列㆓青史㆒」と詠じて柴野栗山を驚歎させた。山陽は清朝の詩を賞愛したのであるが、徒らに漢人の詩風を模範とせずして日本的詩風を創め、殊に

好んで史實を詠じた。山陽は七言古詩を得意とし、七律は之に次ぐ。彼はまた不出世の文才を有し、文章家としては佐藤一齋と竝び稱せられた。詩集には『山陽詩鈔』七卷『山陽遺稿』七卷『日本樂府』一卷などがあり、文集には『山陽文稿』二卷等がある。門人はさまで多くなかつたが、詩では村井竹外、文章では森田節齋の名が最も著れて居る。

蒙古來　　　　　　　　　　　　　賴　山陽

筑海颶氣連ㇾ天黑　蔽ㇾ海而來者何賊　蒙古來　來ㇾ自ㇾ北　東西次第期ニ呑食一　嚇ニ得趙家老寡婦一　持ㇾ此來擬男兒國　相模太郎膽如ㇾ甕　防海將士人各力　蒙古來　吾不ㇾ怖　吾怖關東令如ㇾ山　直前斫ㇾ賊不ㇾ許ㇾ顧　倒ニ吾檣一　登ニ虜艦一　擒ニ虜將一　吾軍喊　可ㇾ恨東風一驅附ニ大濤一　不ㇾ使ニ羶血盡膏ニ日本刀一

以上述べたのは文化文政期に於ける詩壇の概況である。次いで天保安政期になると、東西に詩文の大家が輩出して、江戸時代の漢文學に最後の光彩を添へた。先づ詩壇の巨擘としての九州の廣瀨淡窗旭莊兄弟と、江戸の梁川星巖に就いて述べ、次いで其の他の詩客文人の事を略述して、此の章を終らうと思ふ。

廣瀨淡窗

廣瀨淡窗（安政二年歿七十四）は名を建、字を子基と云ひ、豐後の日田の人である。寬政五年十二歲の時一日に詩百首を作り、當時來遊中の高山彥九郎をして三歎させた。十六の年筑前の儒醫龜井昭陽（徂徠學派）の門に學んだ後郷里に歸り、私塾咸宜園を開いて經史詩文を講じ、門生四千を超え其の盛大は海內無比と言はれた。幼少の頃から唐宋の詩を愛誦し、後に一家の詩風を樹て、門人を導くにも詩賦によつて性情

を薫化したのであつて、詩人として最もよく知られてゐる。其の門から知名の士が多く出たのは、天分に隨つて其の材器を達成せしめた爲であると言はれて居る。詩集に『遠思樓詩鈔』四卷がある。

隈川雜詠　四首錄二

觀音閣上晚雲歸　忽有ニ鐘聲出ニ翠微一　沙際爭レ舟人未レ渡　雙雙白鷺映レ江飛

彥山

彥山高處望氤氳　木末樓臺晴始分　日暮天壇人去盡　香煙散作ニ數峯雲一

江村

數家籬落水西東　蘆荻花飄雨後風　日暮釣レ魚人已去　長竿插在ニ石磯中一

此等によつて淡窓の詩才を窺ふ事が出來よう。淡窓は又老莊道教の研究家として名高く、其の方面の著述には『析玄』『約言』『義府』（一名『放言』以上各一卷）『老子摘解』二卷等がある。

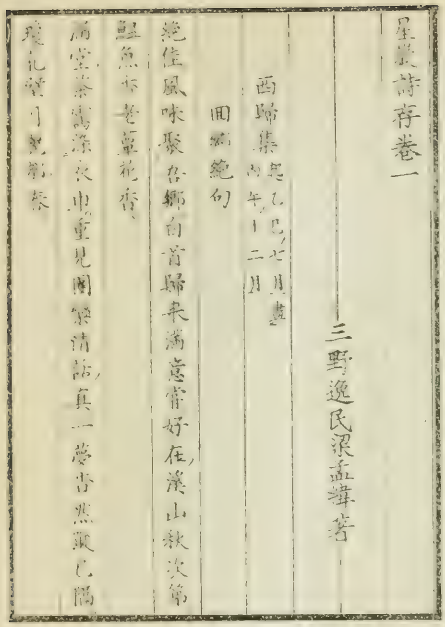
廣瀨旭莊

次に淡窓の弟旭莊（文久三年歿五十七）は名を謙。字を吉甫と云ひ、十七歲の時昭陽の門に入つた。其の後兄の歿後には家塾を率ゐたが、晚年には大阪に出て門人を敎へた。旭莊も詩に長じ特に古詩を得意として縱橫の才を揮つた。詩集に『梅墩詩鈔』十五卷がある。

梁川星巖

淡窓と同じ時代の詩人梁川星巖は寬政以後の第一流の詩人と言はれてゐる。星巖（安政五年歿七十歲）は名を孟緯、字を公圖又は無象と云ひ、美濃國安八郡曾根村に生れた。十九歲の時江戶に出て山本北山の門に遊び、更に寬齋の江湖詩社に入つて、詩佛・五山・如亭等と詩人の交を結んだ。文化十四年鄉里に歸つ

て詩學を研修し、傍門人に教授し、やがて門下生の紅蘭と結婚した。文政五年紅蘭を伴なつて西遊して以來、約二十年の間四方を歴遊して、天保五年に再び江戸に歸り、神田柳原のお玉が池の畔（もと江湖詩社の在つた所。）に玉池吟社を設け、千餘人の門下を率ゐてゐた。其の後間もなく京都に移り、晩年には賀茂川のほとりに居を卜して鴨沂小隱と名づけ、香を燒き書を讀んで、優遊自適して獨り詩賦を樂しんでゐた。時の人は日本の李白と稱した。星巖は山陽と親交を結んでゐたが、山陽も詩に於ては星巖を推賞してゐた。星巖は元來尊王の志の篤い人であつたが、偶安政五年に幕吏が頼三樹三郎（山陽の子）等三十人の勤王論者を捕へた時、星巖は其の巨魁と見做されて、亦捕縛せられようとしたが三日前に病歿した。


星巖詩存巻一

三野逸民梁孟緯著

西歸集 起乙巳七月盡丙午十二月

田園絶句

絶佳風味聚吾郷白首歸來滿意嘗好在溪山秋次第

鰛魚亦老菊花香

滿堂茶熟深夜中重見圍爐清話真一夢昔然覺已隔

星巖詩存

星巖は北山の感化を受けて、初め宋詩を範としたが、葛西因是の影響を受けて以來專ら唐詩を宗奉し、又清人の詩集を愛誦して清新の調を詠じた。詩集に『星巖詩存』九卷及び『星巖先生遺稿』五卷（二部を合せて星巖先生遺稿として刊行す）があり、又全集に『星巖集』十卷（門生及び紅蘭の集を添ふ。）がある。其の詩中には各地の史蹟名所で吟詠した作が極めて多く、特に七律を得意とした。左に星巖の得意の作を二三首掲げて

置かう。

天龍河口號　時年二十三

一道奔流劈レ地開　灘聲捲レ雨鬪ニ風雷一　蹇予無ニ翼供ニ飛翀一　兩度天龍河上來

四月十七日發ニ大垣一至ニ長嶋一舟中作

一篙水碧茫茫　舟踏東連百八郷　好是南風菰米熟　家家午甑爨レ珠香

夜下ニ刀禰河一

水枕瞢騰度ニ短宵一　煙波蘸レ月白迢迢　一聲艫板天方曉　已到潮來十二橋

星巖は前にも一言したやうに、尊王攘夷論者であり憂國詩人である。嘉永安政の頃幕府の方針が開港に傾いた時には、頻りに勤王の志士と往來して國事に奔走した。殊に安政四年に開港條約が成つた時には、憂憤の餘り漫吟六十一首を作り、翌年九月間部詮勝が井伊直弼の內命を受け、勤王の浪士一掃の目的を以て入洛した時には、血涙を以て綴つた紀事二十五篇と絶句二首を賦して詮勝に示した。此等の詩には憂國の至誠と熱情が迸つてゐる。星巖の妻紅蘭も勤王の女丈夫で、詩に秀で又書に長じてゐた。星巖の門下で詩に秀でた人には、大沼枕山・森春濤・小野湖山・江馬天江等があり、星巖と肝膽相照らした勤王家の梅田雲濱・佐久間象山・吉田松陰・賴三樹三郎等も詩を能くした。

幕末の文章家

山陽の後幕末の文章家として名聲の轟いたのは、佐藤一齋・安積艮齋・齋藤拙堂等である。一齋は既に述べたやうに、幕末期の一大儒者であるが、詩に秀で文章に於ては殊に名聲が高かつた。一齋は唐

齋藤拙堂

宋八大家の文を模範としたが、殊に韓歐を宗奉し、又明の王陽明の文を慕つて推敲精錬して一字一句も忽諸にしなかつた。詩文集に「愛日樓文詩」四卷がある。次に安積艮齋も經學の大家であるが、特に文章家として尊重せられた。艮齋は在來の文章家が秦漢の古文を剽竊し、韓柳歐蘇の摸倣に終つてゐるのを非難して、古今の名家の文體を融化渾成して、一家の言を立つべき事を主張し、且つ自ら之を實行した。其の文章は著想が秀拔であり、詞藻が富贍であつて、一家の風格を備へてゐる。其の文才を見るべきものに「艮齋文略」（正續各三卷附詩略一卷）がある。江戸の一齋・艮齋に對する關西の一大文章家は齋藤拙堂である。拙堂（慶應元年歿六十九）は名を正謙、字を有終と云ひ、伊勢の津藩の儒臣正修（號は如山）の子である。江戸の藩邸に生れ長じて昌平黌に入り、古賀精里を師として專ら古文を學び、やがて一流の文章家となつた。二十四歲の時、藩主藤堂高兌が學校を創立するに當つて、教職に擢用せられたので津に移つた。其の後高兌が逝いて高猷の世に侍讀を兼ね、ついで郡宰を經て再び藩校の督學となり、文武の學政に與つて功績があつた。拙堂は壯年の頃京都に賴山陽を訪れて、夙に文才を推賞せられたが、晩年には茶磨山の下に茶磨山莊を營み、文人と相會して詩文を樂しんだ。「月瀨記勝」二卷は名文として最も名高く、文集には「拙堂文集」六卷があり、又文論には「拙堂文話」（正續各八卷）がある。「拙堂文話」は我が國に於ける漢文の變遷を記し、支那に於ける秦漢唐宋諸家の文體を評論し、且つ文範を示したもので最も廣く讀まれ、後の文章家に多大の影響を與へた。

以上述べた詩文の大家の外に、なほ幕末期には幾多の名士が輩出した。前に述べた松崎慊堂・安井息

軒・鹽谷宕陰・芳野金陵等は、學者にして文章家を兼ねた人々である。此の外詩人に田能村竹田・草場佩川・藤田東湖・村上佛山・藤井竹外・菊池溪琴等があり、文章家に篠崎小竹・大槻磐溪・齋藤竹堂・林鶴梁・寺門靜軒等がある。竹田が文人畫の大家である事は既に述べたが、佩川も亦畫に長じて巧みに花鳥を描いた。靜軒の『江戸繁昌記』六卷は、俗體の漢文を以て江戸市中の情景を記した一種の戯文であるが、和文で書いた石川雅望の『都の手ぶり』『吉原十二時』等と共に、江戸風俗誌として廣く行はれた。

第三章　國學と和歌

一　寶暦期の國學者

寶暦前後は元祿享保の頃に興つた古典研究や和歌革新論の跡を承けて、眞淵を中心に近世の和歌が始めて發達の途に就いた時であり、又春滿が築いた國學の基礎の上に、眞淵が眞の國學を建設した時である。今此の時代の國學並に和歌の發達を述べるに先立つて、春滿の國學の一面を承け、又歌論で名を知られた荷田在滿の事を記して置く。

荷田在滿

荷田在滿（寶暦元年歿四十六）は春滿の甥で、其の養嗣子となつた人である。在滿は寶永三年に京都に生れ、享保十三年に妹の蒼生子（たみこ）を伴なつて江戸に下り家學を唱道した。在滿は特に律令有職故實に精通し、『貞觀儀式』や『延喜式』を校訂し、又『大嘗會具釋』九卷『大嘗會便蒙』二卷『本朝度制略考』二卷等を著作し

て學界を益し、又歌學の名著『國歌八論』一卷を書いて歌論に大なる刺戟を與へた。在滿は江戸に出て間もなく、田安宗武に仕へて信任を得たが、延享三年に賀茂眞淵を後任に推薦して辭任した。辭任の動機に關しては、『大嘗會便蒙』を刊行した爲に公卿の抗議があり、やがて幕府の咎を蒙つた爲であるとも云ひ、又『國歌八論』が宗武の意見と相容れなかつた爲であるとも云はれて居る。在滿の家學は長男御風(のりかぜ)が繼承した。

國歌八論

『國歌八論』は寛保二年(三十七歳)に田安侯の問に答へたもので、新歌學を提唱して歌壇に大なる反響を與へた。此の書は歌源論・翫歌論・擇詞論・避詞論・正過論・官家論・古學論・準則論の八章から成つて居る。其の內容は和歌の起原に始まり、效用を說き本質を論じて、定家以來の堂上歌學の餘弊を攻擊したものである。其の和歌の史的發達を說いて本質に及び、又從來の堂上歌學の弊を矯めようとしたのは、本書の價値の存する所であるが、新古今風を理想とすべき事を主張しながら、定家を捨てて特に後京極良經の歌風を推賞し、又詞花言葉を翫ぶ事を以て和歌の本領としたのは、論旨の不徹底を來したものと言はねばならぬ。此の著述に對して、宗武は『國歌八論餘言』を書いて批評を下したが、在滿はそれに對して更に『國歌八論再論』を草して上つた。其の他賀茂眞淵・本居宣長・清水濱臣・伴蒿蹊等も、此の書に對する評論駁說を書いたのであつて、前期の終に現れた戸田茂睡の新歌論が、さまでの反響を見なかつたのに反して、此の書は各方面に多大の影響を及ぼした。尤も在滿は歌人としてさまで天分を持つてゐなかつた爲、其の作歌は概ね平凡である。其の家集には村田春海が撰んだ『荷田在滿歌集』がある外に、作歌は雜筆中にも散見する。

はるかなる山のわづかに殘る日のかげもしぐるる雲の一むら

村蘆の枯れ立つもとによる浪もこほるばかりの志賀の濱風

などによつて其の歌風を知る事が出來る。

賀茂眞淵

在滿と同時代に現れ、春滿の學問を承けて眞の國學を組織すると共に、萬葉調の長短歌を詠み、擬古文を綴り、又多くの門人を養成して一世を風靡したのは賀茂眞淵（明和六年歿七十三）である。眞淵は遠江國敷智郡濱松庄岡部鄕（後の淺場村賀茂）の新宮の禰宜定信の二男で、元祿十年に生れた。本姓は賀茂氏であるが、岡部鄕に因んで岡部氏を名乘つた。眞淵は初め從兄政長の婿養子となつたが、享保九年二十八歲の時妻が病歿したので家に歸り、更に享保十年に濱松驛の本陣梅谷甚三郎の婿養子となつて、一子市左衞門を擧げた。是より先、太宰春臺の門人で古文辭學派の渡邊蒙庵に就いて漢學を修めたが、梅谷氏の養子となつて後、其の地の諏訪神社の大祝信濃守杉浦國頭、及び五社明神の神主森民部少輔暉昌と交るに及んで、始めて國學の知識を得た。偶國頭の妻は春滿の姪であつた關係から、春滿は江戸への往還に屢其の家に立寄つたのであつて、眞淵が後に春滿の門人となつた緣は、ここに結ばれたのである。かくて享保十八年三十七歲の時、賢妻の勸めもあつていよ〳〵志を立て、一子を妻に託して京都に上り、春滿の門に入つた。春滿に師事する事四年にして、元文元年に師が歿した後は、師の弟信名に學んだが、元文二年には一旦鄕里に歸り、更に翌年に意を決して江戸に出で、是より盛に國學を唱道した。江戸に出て後數年を經て延享三年九月（五十歲）には、在滿の後任として田安宗武侯に

仕へ、寶暦十年(六十四歳)に致仕するまで十四年間は、宗武並に其の家臣の爲に古學を講じ、和歌の師となり、又傍門人を指導し、著述にも從事した。眞淵は江戸に出た當初は、春滿・在滿などと交際のあつた村田春道(春海春郷兄弟の父小舟町の問屋)の家に寄寓してゐたが、與力加藤枝直(千蔭の父)に招かれて北八町堀の枝直の家の近くに住み、晩年には日本橋濱町に居宅を構へ、田舍風の庭を造つて縣居と號した。江戸に出て後間もなく門人となつたのは、春道・枝直・小野古道・楫取魚彦等であるが、其の後服部南郭とも親しく交つて、名聲は年を逐うて聞え、晩年には諸國から來て入門する者が多く、門人の總數は三百に達した。眞淵の國學並に復古的歌文は、晩年に至つていよ〳〵圓熟したのであつて、不朽の著述は主として晩年の十二三年間に成つた。

眞淵は春滿によつて確立せられた國學の精神を繼ぎ、長流・契沖等に始まつた古典研究法を承けて、國學を組織立つた學問にした一大功勞者である。其の國學史上に於ける業績を知るには、先づ左に掲げる學問上の著述書目(主要なもののみを掲ぐ)を見る必要がある。

(イ)萬葉に關するもの。萬葉集遠江歌考一卷　萬葉解通釋並釋例一卷　萬葉集新採百首三卷　冠辭考十卷　萬葉考二十卷(別記三卷)　柿本朝臣人麻呂歌集之歌一卷　萬葉集竹取翁歌解一卷(以上成立年代順)

(ロ)記紀祝詞に關するもの。古事記考一卷　頭書古事記(寫本三卷)　古事記上卷眞淵訓(寫本一卷)　日本紀訓考二卷　古事記和歌略註一卷　日本紀和歌略註二卷　延喜式祝詞解五卷　祝詞考三卷

(ハ)中古文學に關するもの。源氏物語新釋(五十四卷別記總考各一卷)　伊勢物語大意六卷　大和物語直解三卷　宇

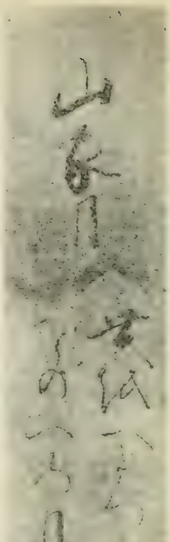
比眞奈備（三卷百人一首の解）　續萬葉論二十卷　古今集打聽（二十卷野村ともひ子筆記）　古今六帖考一卷　神樂歌考　催馬樂考　神樂考　風俗歌考（以上各一卷）

(ニ)國學歌文語學に關するもの。國意考　歌意考　文意考　書意考　語意考　にひまなび　國歌論臆說　國歌八論餘言拾遺（以上各一卷）

(ホ)故實に關するもの。古冠考　古器考　かさねのいろあひ　上古男女髮辨（以上各一卷）

右の書目によつて、眞淵が上古文學殊に萬葉を主とし、其の傍中古文學を研究した事が明かである。眞淵が中古の歌文の註釋を多く書いたのは、元來歌文の愛好者であり、且つ周圍の求めもあつた爲であるが、一には上古文學との比較や、其の發展を明かにする爲でもあつた。さて眞淵の國學の要旨は古語古文を階梯として古道を究明しようとする事であつて、古語を研究するには先づ『萬葉集』に據るべきであるとした。（にひまなび參照）然るに眞淵は萬葉研究の爲に殆ど生涯を捧げた爲に、本來目的とした記紀の研究は、只一部分に著手したばかりで完成しなかつた。此の事は老境に及んで甚だ遺憾としたらしく、六十八歲の時に入門した宣長に對しても、其の事を述べて『古事記』の研究を奬め、且つ自ら假名書にした古事記上卷と、改訓書入を施した中卷下卷とを貸與して居る。（宣長著『玉かつま』卷二參照）要するに春滿の國學の精神は先づ眞淵の萬葉研究の上に實現し、未完成に終つた古事記研究は、やがて宣長を待つて完成されるのである。なほ眞淵が行つた中古文學の研究は、萬葉や祝詞の研究に比して一段劣つて居るが、是も語學的研究と批評的考察とを兼ねた宣長を待つて、一大進歩を遂げるのである。

眞淵の功績として更に注意すべきは、歌人文章家としての方面である。眞淵は元來冷靜な學者ではなく、古代文學の愛好者であり、又文學者としての才能を豐かに持つてゐた人であるから、「萬葉集」を標準として所謂丈夫ぶりの歌を詠み、又古語を巧みに用ひて、技巧に富んだ擬古文を綴つたのである。



眞淵筆蹟
（難波津に據る）

其の歌文を集めたものに、春海が撰んだ「賀茂翁家集」（春海の序に十卷とあるが現存するものは五卷）の外に、楫取魚彦の手に成つた「縣居歌文」二卷があり、又歌集に加藤美樹（うまき）が編輯し上田秋成が補つた「縣居歌集」一卷等がある。眞淵の和歌には、千蔭が言つたやうに三期の變遷がある。（賀茂翁家集序）即ち初め春滿に學んだ頃のは、古今と新古今の調和から成る優麗な歌風であつたが、中頃には「みやびにして調べ高く、しかも雄々しき萬葉風」となり、更に晩年に至つて萬葉風に滿足せずして、記紀の歌謠を理想とした傾向が認められる。此の三期の中で年月が最も長く、從つて最も多くの作が遺つて居るのは中期である。眞淵の古今風又は新古今風に近い作歌には、

つくば山しづくのつらら今日とけて枯生（かれふ）のすすき春風ぞ吹く
うら〳〵とのどけき春の心よりにほひ出でたる山ざくら花

宮城野や秋なほあつき木のもとの露なき草に風をまつかな
松のひびき荻のさやぎのさまざまに聞えて絶えぬよはの秋風（賀茂翁家集）

の如き優美な歌が多い。門人の千蔭・春海等は此の歌風を慕つたのである。次に萬葉調の歌を見ると、

みよし野をわが見に來れば落ちたぎつ瀧のみやこに花散り亂る
秋の夜のほがら〳〵と天の原照る月影に雁なきわたる
にほどりの葛飾早稻のにひしぼりくみつつをれば月かたぶきぬ（同上）

などは純萬葉調に近い作であるが、其の數は比較的少く、而も動もすれば萬葉の摸倣に陷つて居る。眞淵の特色は寧ろ次に示すやうな、蒼古遒勁な萬葉調によつて中世風の趣味を歌つたもの、若しくは古今調乃至新古今調によつて、萬葉風の雄大な情景を歌つたものにある。

をつくばもとほつ足尾も霞むなり嶺こし山こし春や來ぬらむ
おほひえやをひえの雲のめぐり來て夕立すなり粟津野の原
遠つあふみ濱名の橋の秋風に月すむ浦をむかし見しかな
播磨路やゆふ霧はれて久方の月おし照れりいなみ野の原
信濃なるすがのあら野をとぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな（同上）

此等は萬葉を巧みに復活させ、而も一種の近代的な趣味を含んで居るのであつて、單調な當時の歌壇に大なる刺戟を與へた。

眞淵が和歌史上に遺した功績としては、なほ萬葉調の長歌を復興した事を擧げなければならぬ。是より先長流・契沖等も長歌を詠んで居るが、其の歌風は其の短歌と同じやうに萬葉調ではなかつた。然るに眞淵は萬葉の長歌の眞髄を捉へて、巧みに古調を歌つたのであつて、萬葉以來はじめて諷誦するに足るものを得たと言つてよい。

詠筥根山歌 四首の中

あづま路の　はこねの山の　やまのへに　たたふる海は
くろき海に　白き波たち　青雲の　ゐる空ちかみ
月讀の　水かたたふる　天の河　ながれかがよふ
ひさかたの　あめ尾羽張の　みことかも　せきたたへけむ
神代より　かれせぬ海に　わたつみの　宮べにありとふ
ゆつかつら　それならなくに　ちひろ杉　生ひたちながら
みなそこに　うづもれにつつ　八百世にも　千世にもうせず
くちもせず　今のをつつに　見るがあやしさ

右の例の如きは萬葉主義を遺憾なく發揮したものである。かくて眞淵が古調の長歌を作つて以來、近世の長歌は縣居門下を中心として復興し、爾來大抵の歌人が之を試みるやうになつた。

擬古文の興隆

眞淵が擬古文に長じた事は前に一言述べたが、其の文體は古語を縱横自在に驅使し、巧みに對句を

用ひて極めて流麗である。家集卷四の卷頭に載つてゐる「隅田川に舟を泛べて月をもてあそぶ序」の如きは、其の代表的なものであらう。和文は鎌倉時代以來殆ど衰へてゐたのであるが、眞淵に至つて始めて見るべきものを得たのは、文章史上特筆すべき事である。蓋し當時漢文學の方面には、荻生徂徠が古文辭學を提唱して、自由に純漢文を綴つたのであつて、眞淵は恐らくそれに對抗する爲に擬古文を書き、且つ門人にも之を奬勵したのであらう。

眞淵の門人

眞淵は政權の所在地にして文化の中心地たる江戸に住み、而も田安侯の師として優遇を受けた爲に其の國學並に復古的歌文は、江戸は勿論諸國に普及して一大勢力となつた。國學の方面を承け傍和歌に秀でた學者には、本居宣長・荒木田久老・內山眞龍・栗田土滿（ひぢまろ）等があり、中古物語の研究家で詠歌に長じた人には加藤美樹があつた。其の他該博な學識を有して「群書類從」（正篇五百三十卷）を校訂刊行した塙保己一や、「類聚名物考」（三百三十九卷附錄七卷）を編纂した山岡俊明（よつあき）（明阿彌）の如き精力絕倫の學者がある。更に歌文の方面を見ると、前記の諸學者の外に、眞淵の萬葉主義の感化を受けた歌人に田安宗武・楫取魚彥等があり、初期の中世風の歌風を慕つて優雅な趣味を歌つた所謂江戸派の歌人に加藤千蔭・村田春海等があつた。（以上四人を縣門の四天王と呼ぶ）女流歌人の輩出は近世和歌の一特徵であるが、其の源を作つたのは眞淵であつて、其の門人には縣門の三才女と稱せられた油谷倭文子（ゆやしづこ）・鵜殿餘野子（よのこ）・進藤筑波子以下多くの才女があつた。其の他戲曲滑稽文學の作者として知られた平賀源內や、初期の讀本を書いた建部綾足なども、其の門に學んだ人である。かくて縣居門下から多方面に亙つて學者文人が輩出したのは、一は時勢が然らし

めたのであるが、眞淵の感化による所も多いのである。

眞淵門下の學者歌人の多くは、師の歿後の寛政前後に活躍したのであるから下に述べるとして、玆に眞淵の晩年に最も名聲を揚げた二三の人々に就いて記して置く。眞淵に就いて國學並に和歌の指導を受けた田安宗武（明和八年薨五十七）は八代將軍吉宗の第二子で、松平定信の父である。家重將軍の時に四十萬石を知行し、明和五年（五十四歲）に權中納言に陞つた。宗武は夙に古學に志し、在滿・眞淵を優遇して其の研究に保護を與へると共に、自ら有職律令及び古樂の研鑽に從事し、又詠歌に秀でてゐた。其の著述には『古事記詳說』五卷『服飾管見』十四卷『樂曲考』十卷『玉函叢說』四卷『國歌八論餘言』一卷『歌體約言』一卷其の他數種がある。宗武は廢れた舞樂の復興を企て、能樂の詞章を訂正し、又自ら新作を試みたのであつて、廣く藝術に趣味を有つてゐたが、特に意を用ひたのは詠歌である。初め在滿を聘した頃には、古今風又は新古今風の和歌を詠んだが、後に眞淵の感化を受けて高古な萬葉調に移つた。家集の『天降言（あもりごと）』一卷は薨後に歌稿を取纏めて成つたもので、文化四年に藤原直臣の寫したものが傳はつた。將軍家に生れて萬葉風の歌を詠んだ點に於ては、源實朝に似て居るが、歌風は餘程異なつて居る。宗武の歌風は勁健蒼古の純萬葉調に、漢文學の趣味を取入れたもので、犯すべからざる氣品が具はり、素材表現内容等何れも自由且つ清新であつて、豐かな藝術的天分が發揮せられて居る。

眞帆ひきて寄せくる舟に月照れり樂しくぞあらむその舟人は

霞わけて雁歸る見ゆ行先の遙けき思へばあはれむわれは

み吉野のとつ宮所とめぐればそことも知らに薄生ひにけり
荻はそもいかなる氣よりなり出でしそよげる音の悲しくあるは
降る雪にきそひ狩する狩人の熊のむかばき眞白になりぬ
わが宿のそがひに立てるかしの木にかし鳥來鳴く頃は早きぬ　（天降言）

楫取魚彥

眞淵の門下で萬葉派の歌人と言はれる寶曆頃の歌人には、楫取魚彥・加藤美樹・小野古道などがある。此の中で最も傑出してゐるのは魚彥である。魚彥（天明二年歿六十歲）は下總國香取郡佐原の人で、本姓は伊能名は景良であるが、生地に因んで楫取魚彥と名乘つた。明和二年江戶に出て、濱町の眞淵の家の近くに居を構へて茅生庵（ちふのいほり）といひ、朝夕師に接して古學を研究し、又和歌を詠じた。眞淵の歿後には師事する者二百人に達し、諸侯の中にも彼に就いて歌を學ぶ者があつた。其の著述には古語の假名遣を研究した『古言梯』一卷、枕詞を研究して師の『冠辭考』を繼いだ『續冠辭考』一卷、上代語の辭典『楢（なら）の嬬手（つまで）』四卷其の他の編著がある。彼の歌集は濱町の家が火災に罹つた時燒失した。現存するものは、僅かに安永五六年二箇年の詠草を淸水濱臣が集めて『縣門遺稿』の中に收めた『楫取魚彥家集』と、其の他の零本が二種あるばかりである。魚彥は古代の思想竝に趣味をよく體得して、古語や故事を自由に使つて高古雄大な想を詠み、其の歌體は旋頭歌長歌にも及んでゐる。

天雲のむかぶすをちのわたつみの霞める方ゆ舟ぞ見え來る
土はさけ水はかわける夏すぎてけさの朝けの風の寒しも

わたつみのかざしの玉やみだるらむ八重をる浪に月の照りたる

天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり

冬されば千草がうれをおしなびけ宇智の大野を風ふきわたる

丈夫やしたには人を戀ふれどもますらをさびてあらはさずけり

此等は純萬葉調であつて、而も何處かに近代的趣味が籠つて居る。魚彥は又

一九二八、千萬四四八、十四三九二、八萬十九二二四、四九九二八七四（ひと國は千萬よしや豐みくにやまと國にししく國はなし）

の如き戲書を試み、又

我がつめる戀の重荷を市中のあきじこる人にゆきて賣らばや

の如き諧謔の歌も詠んで居る。魚彥の長短樣々な長歌はとりどりに勝れて居るが、今は割愛して旋頭歌の例一首を掲げよう。

鳰鳥のかつしか川に朝菜あらふ子あさ菜にもなりにてしがも朝菜あらふ子

要するに魚彥は、眞淵よりも更に萬葉主義に徹した人であつて、縣門中第一位を占むべき歌人であつた。ただ後に傳はつた歌數が少いのは、かへすがへすも遺憾である。

加藤美樹

加藤美樹（安永六年歿五十七）は通稱を大助と云ひ、號を靜廼舍と云つた。延享三年に眞淵の門人となつた時の入門の誓詞には、藤原河津宇萬伎と署名してゐる。美濃渥美藩主戶田氏の家臣で、幕府の大番騎士と

して三百俵を食み、淺草三筋町に住んでゐた。屢大阪城の勤番として其の地に下つたので、彼の地に多くの門人があつたが、就中上田秋成は最も有名である。[秋成の事は下に述べる]美樹は古典の註釋に心を用ひた人で、其の著述には『土佐日記解』二卷や、『源氏物語』の帚木卷の註釋『雨夜物語だみことば』二卷等がある。美樹の歌は萬葉調に古今風を加味したもの、又は中世風のものであつて、伎倆は宗武・魚彦などより稍劣つて居る。家集に門人上田秋成が撰んだ『しづのや歌集』一卷がある。

ゆふづつのか行きかく行き見れどあかぬ吉野の山の山櫻花
今もかも咲きにほふらむ大和なる巨勢の春野のつらつら椿
もののふの草むすかばね年ふりて秋風さむし桔梗のはら
いぶき山いぶく朝風吹きたえてあふみは霧の海となりぬる　（しづのや歌集）

小野古道

小野古道（ふるみち）（生歿年未詳）も美樹と略同じ歌風を詠んだ人である。本名を長谷川謙益と云つて、盲目の鍼醫であるが、古學に志して眞淵の門人中では最も早く入門した。國學に關する造詣はあつたが、著書は傳はつてゐない。師の眞淵は長歌や擬神樂催馬樂歌などを歌つたので、古道も亦それに倣つて長歌や旋頭歌も詠んで居る。古道の家集には濱臣が編纂した『小野古道家集』一卷があつて、『縣門遺稿』に收められて居る。

花鳥の色をも音をも立こめて春日かすめるをはつせのやま
花はまだ咲きこそあへね夕月のかげにあやある庭の萩はら

月夜よし夜よしとこよひ語りつぎいひつぎ渡る雁やいくつら

色かはる秋の下葉をながめつつ獨ある身となりにけるかな　（小野古道家集）

古道の短歌には萬葉調は少いが、長歌には萬葉主義がよく現れて居る。倭文子を悼んだ長歌の如きは殊に名高い。

寶暦期の古今又は新古今調の歌を詠んだ歌人には、加藤枝直（えなほ）や縣門三才女等がある。枝直（天明五年歿九十四）は橘諸兄の後裔であつて、本姓を橘と云つた。伊勢國松坂の人倘之（號は春雪）の四男で、享和三年に江戸に出で、家を芳宜（はぎ）園と云つた。母方の從弟中村三右衛門が、大岡越前守忠相配下の組與力であつた關係から、其の歿後に組與力となり、後に町奉行稻生下野守の組與力に轉じ、寶暦七年まで吟味役を勤めた。此の間享保中御定書百箇條の起草に當り、又青木昆陽を大岡越前守へ推擧して政務に功があつた。枝直の父倘之は歌人であつたので、彼も幼時父に就いて歌を學び、其の後も堂上風を詠んでゐたが、四十一二歳の頃（眞淵が萬葉主義を唱へる以前）一時的ではあるが萬葉風を詠んだ。元文二年四十六歳の時、眞淵が江戸に出て以來は友人として厚遇し、又其の講義を聽いたが、歌は『古今集』を標準として一家の風を樹てた。枝直の自撰家集に『あづま歌』六卷がある。家集には萬葉調の作もあるが、大部分は古今調に新古今調を加味した流麗なものである。

加藤枝直

むさし野をふりさけ見れば秩父嶺に春日かげろひ霞たなびく

堅田浦いざ漕ぎ出せいさなとりあふみの海の波の月みむ

此のごろの秋風寒みさを鹿のつまとふなべに雁鳴きわたる　（あづま歌）

此等は萬葉調である。

あびきするわざこそ見えね朝ぼらけ霞をもるる海人のさへづり
村雨をすぐして名のみ一聲に松の露ちる山ほととぎす
山の井のつるべの繩のみじかよに月の影くむ杉のした庵
秋の夜の月かげしろし白樫の枝にも葉にも霜と見るまで
こよひしも降りくる雨はひさかたの月の桂の花の雫か
たまのうら離れ小島の友ちどり聲きくばかり波ぞ靜けき
焚きすてし禰宜が庭火の跡のみぞ雪のくまなる神の廣前　（同　前）

此等が枝直の得意な歌風である。小澤蘆庵や香川景樹が眞淵の萬葉主義に反對して、古今集の現代化を唱へる前に、枝直が古今調によつて、近代的趣味を歌つたのは注意すべき事である。

女流歌人
油谷倭文子

寶暦期には又縣門の三才女や荷田蒼生子等があつて、近世女流歌人の魁となつた。先づ縣門の三才女に就いて略述する。油谷倭文子は江戸京橋弓町の伊勢屋と云ふ富裕な商家の女である。眞淵に和歌を學び、歌文の才に秀でて、師から我が子のやうに愛せられたが、寶暦二年に僅か二十歳で他界して、同門の人々から惜しまれた。家集の『文布』は歌文集で、其の中の歌集の部を「散のこり」と云ふ。歌風は古今調に新古今調を加味したものである。倭文子は文にも秀で、十八歳の時母に伴なはれて、伊香

保へ旅した時の「道ゆきぶり」は名文と稱せられて居る。

秋の野はあはれなりけり夕風に尾花みだれて散れる白露

袖の上におぼえず落つる涙にもすずろに月はやどりぬるかな

風早み浮きたつ雲に誘はれて雁はやどりもせでや來つらむ　（散のこり）

土岐筑波子

土岐筑波子 歿年未詳 は進藤正幹の養女で、幕臣土岐頼意の妻となつた。「筑波子家集」を見ると、古今調の平淡な歌風であるが、純情が流れて居る。小野小町のやうに夢の歌を多く詠んで居る。

花もやゝ匂はむと思ふ山里におぼつかなくも殘る雪かな

ながめつつすずろに物を思ふかな雁鳴きわたる夕ぐれの空

うたゝねに見えつる夢ははかなくてつれなく殘る人の面影　（筑波子家集）

鵜殿餘野子

鵜殿餘野子 天明八年歿六十餘 は服部南郭の門下の鵜殿士寧の妹で、兄に就いて漢學を修め、詩にも長じてゐた。其の後紀州侯に仕へて瀨川と呼ばれ、晩年には涼月院と云つた。家集に「佐保川」一卷の外に「涼月遺草」がある。前記の二人に比して遙かに多くの歌を遺して居る。其の歌風は天暦の調と言はれてゐるが、師眞淵の影響を受けて萬葉調も詠み、又多くの長歌を作つて居る。

橫雲もかすみに消えて山の端の花よりしらむ空の長閑けさ

夏引の手びきの絲の長き日もよりて語らふことは絕えせじ

影やどす露のけぢめも思ほえすきのふに似たるいさよひの月

いつの世に忘れむものか二月のすゑの五日のありあけの月

つれなさに泣く／＼歸るうしろでをいかに見るらむ有明の月

門ちかきいさゝ群竹な刈りそねせこが手馴れの駒なづくがに　（佐保川）

荷田蒼生子

次に荷田蒼生子（天明六年歿六十五）は荷田在滿の妹で、兄と共に江戸に下り、後に兄の門人西湖學に嫁したが幾程もなく先立たれた。蒼生子は歌に巧みで、其の指導を受けた人の中には、諸侯の夫人姫君などが多かつた。其の歌風は古今風と新古今風の中間に位するものであるが、稀に萬葉調を加味した作もある。家集には門人菱田縫子が編纂した『杉のしづ枝』一卷がある。

草も木も萠ゆる春べと足びきの山は霞にうちけぶるなり

浦遠く潮路かすめるあけぼのは波もみどりに立つと見ゆめり

玉ぼこのゆききの道の青柳はかづらにすべく早なりにけり

望月のくまなき空に三つ二つみだれてわたる雁もめづらし　（杉のしづ枝）

此等によつて知られるやうに、縣門三才女に比して特色がなく、稍見劣りがするやうである。

縣門以外の國學者
谷川士淸

寶曆期の國學者には眞淵の外に、別の學風を樹てた谷川士淸・伊勢貞丈・富士谷成章等がある。士淸（安永五年歿六十八）は伊勢國安濃郡洞津の人で淡齋と號し、代々醫を業とした。青年の頃京都に遊學して和漢の學を修め、又堂上家の和歌を學んで一代の碩學となつた。其の著書には『日本書紀通證』三十五卷『和訓栞』九十三卷の如き大部のものがある。前者は詳密な書紀研究書として名高く、後者は組織的な國語

辭書の嚆矢であつて、共に後の學者に多大の影響を與へた。（宣長の『古事記傳』や國語の研究なども士清の影響を多く受けてゐる。）

伊勢貞丈

伊勢貞丈（天明四年歿六十八）の先祖は平貞盛から出て居り、十一代伊勢守貞繼の時に初めて伊勢氏を稱した。貞丈から四代前の貞衡が家光將軍に仕へて以來、代々禮法家として幕府に仕へ、貞丈は父貞益の歿後三百石を知行してゐた。貞丈は號を安齋と云ひ、公武の故實に廣く通じてゐたが、殊に武家故實に精しく其の方面では右に出る者が無かつた。其の研究は考證學的であつて、『貞丈雜記』十六卷『安齋隨筆』三十二卷『安齋雜攷』二卷以下多くの著述がある。

富士谷成章

次に成章（安永八年歿四十二）は號を北邊と云ひ、東福門院の御殿醫皆川春洞の第二子で淇園の弟である。十九歳の時富士谷家の養子となつた。國史歌學を修め、又諸藝に通じてゐたが、殊に文法學者として『挿頭（かざし）抄』三卷『脚結（あゆひ）抄』五卷などを著して、國語學史上劃期的の業績を遺した。成章は漢詩を作り、又二條派の和歌を學んで詠歌に長じ、歌學上にも識見を抱いてゐた。歌集に『北邊成章家集』二卷と、別に『北邊七體七百首』がある。後者は上古以來の歌風の變遷を研究して六期に分ち、是に自己の歌風を加へて、七體七百首に詠み分けたものである。此の時代的區分は國語の研究にも說いて居るのであつて、彼の獨創である。成章は多作家であつたと言はれて居るが、歌風は陳腐平弱である。

二　寛政期の和歌

近世和歌勃興期

眞淵の歿後の天明寛政頃は漢學國學の隆盛期であり、又文學の方面では天明調の俳諧並に狂歌が起

り、黄表紙・洒落本・初期の讀本等が流行して、學問文藝が極めて活氣を帶びた時代である。當時和歌も亦時勢の影響を受けて、縣門の諸歌人を中心として極めて盛に行はれ、いよ／＼近世和歌の勃興期に入つた。卽ち此の時代の歌壇には、同じ縣居派の間にも久老・士淸の萬葉派の外に、眞淵と異なつた歌風を唱へた千蔭・春海の江戸派や、新古今主義を標榜した宣長の鈴屋派があり、又一方には尙古趣味を奉ずる縣居派に反對して、新しい歌學說を唱道した小澤蘆庵の一派が起つて、和歌は極めて盛況を呈した。而して天明寛政期の歌壇に於て最も優勢であつたのは江戸派である。

江戸派の歌人

江戸派は眞淵初期の歌風を承けて、古今又は新古今を標準として、專ら優雅な歌を詠んだのであつて、其の源は前に記した加藤枝直から始まつて居る。枝直の歌風を受けて更に勝れた歌を詠んだのは其の子加藤千蔭（文化五年歿七十四）である。號を芳宜園・花園などと稱した。十歲の時眞淵の門人となり、十五歲で與力勤方見習となり、二十九歲で父の職を繼いで町與力となつた。天明八年に致仕して後多くの門人を教へ、歌文を樂しんで文人生活を送つた。千蔭の著述には後世廣く行はれた『萬葉集略解』三十八卷の如き名著があるが、學者といふよりも寧ろ文人であつて、歌文に長じ又書畫に秀でてゐた。書は幼少の頃から好んだのであつて、佐理・行成の筆致を學んで遂に一家を成した。特に假名に巧みであつて、世に千蔭流と呼ばれた。和歌は師の初期の歌風の影響を受けて、古今又は新古今風の流麗優雅な歌風を詠んだ。家集の『うけらが花』（七卷四冊）は自撰の歌文集であつて、享和二年に刊行せられた。其の文章は雅致のある擬古文であつて、春海の文と並べ稱せられて居る。

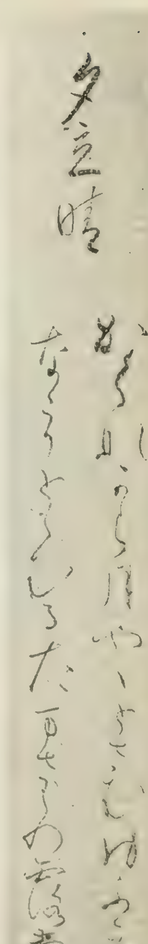
加藤千蔭

隅田川みの著てくだす筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ
すみだ川堤に立ちて舟待てば水上とほく鳴くほととぎす
みづ枝さす葉廣くま櫨露ちりて月おもしろき夜半にもあるかな
木の間よりほのめくと見し月影をやがて寄せくる秋の川水
うちひさす宮路の雪にあさまさの車しづけきあさぼらけかな　（うけらが花）

此等によつて知られるやうに、千蔭の和歌は中世風の優雅な趣味を流麗な調子で歌つたもので、抒情よりも敍景に長じてゐた。家集には長歌二十五首を收めてゐるが、清水濱臣編の「近葉菅根集」（下に言ふ）には四十三首收錄してある。彼の長歌は萬葉調であつて流麗ではあるが氣力に乏しい。千蔭の門人中には、一柳千古・賀茂季鷹・大石千引・清原雄風等の歌人や國學者がある。

村田春海

千蔭と共に江戸派の代表的歌人と言はれるのは村田春海（文化八年歿六十六）である。本姓は平氏で通稱を平四郎、號を琴後翁（ことじりのおきな）又は錦織齋（にしごりのや）と云つた。江戸小舟町の富裕な干鰯問屋の家に生れ、初め服部仲英・鵜殿士寧・皆川淇園等に就いて漢學を修めたが、眞淵が江戸に出た時父の春道兄の春郷（はるさと）と共に其の門人となつた。祖父以來歌文の才があつたが、春郷・春海兄弟は殊に秀でてゐた。春郷は古學と詠歌に專念したが三十歳で世を去つた。其の歌風は「村田春郷家集」（縣門遺稿所收）を見ると、長短歌共によく師の歌風を學んで古雅である。春海は少年の頃縣門に入り博識多才を以て聞え、千蔭よりは十一年の年少であつたが、歿するまで五十年間最も親しく交はつた。當時十八大通の一人に村田屋帆船とあるのは春海の事であ



春海筆蹟
（大島[illegible]雅氏藏）

る。元來性質豪放の人で、壯年の頃通人生活の爲に家財を失ひ、晩年には父から傳へられた一面の東琴を座右に置いて琴後翁と稱した。春海は學殖の豐かな人であつて、著書には歌に關する意見を窺ふべきものに『歌がたり』一卷があり、國文學の考證に關するものに『錦織舍隨筆』二卷があり、其の他國文國語に關する研究が甚だ多い。其の歌は千蔭と同じく、中世を理想として優美典雅である。彼は又擬古文に長じ縣門第一の文章家と言はれた。自撰の歌文集に『琴後集』十五卷七冊がある。

衞士のたく光かすみてほのほのとあくる御門に春立ちにけり
夕鴉かへるつばさはかつ消えて霞にのこるをちかたの山
明けぬとて鳴くやきぎすの聲のうちにほのぼのしらむ春の山畑
入日さす片山林おく見えて散るやあふちの花の夕かげ
澄む月に漕ぎゆくかいのしづくをば桂の花の散るかとぞ見る　（琴後集）

春海は長歌にも巧みであつて、『琴後集』の中に三十首許り收めてある。萬葉調を標準とした流麗な歌風であつて、「詠王昭君歌」の如きは當時世評の高かつた作である。春海の門人には清水濱臣・岸本由豆

流・小山田與清等の如き學者があつて、國學の發達に貢獻する所が多かつた。右に述べた江戸派に對して、宗武・魚彦等より少し後れて現れた縣門の萬葉派の歌人には、荒木田久老・栗田土滿以下二三の歌人がある。

荒木田久老

荒木田久老（文化元年歿五十九）は伊勢外宮の祠官度會正身（わたらひまさのぶ）の子で、號を五十槻園（いつきその）と云つた。明和二年眞淵の門に入つて以來、古典を研究して一家の識見を備へてゐた。「日本紀歌廼解」三卷・「萬葉考槻落葉」三卷は久老の主著であつて、師說や同門の宣長と見解を異にし、且つ卓見に富んでゐる。家集には『槻の落葉』一卷がある。其の歌は純萬葉調であつて、一種の氣慨に滿ちた作品の多いのが目立つ。

　うらうらに日は照らせれど足引のとかげの櫻いまだふふめり

天の原そくへのきはみますらをはたけき心をみてでありこそ

天地の神もうづのへわれなくば誰か說かむとあたら古語（こと）（槻の落葉）

栗田土滿

次に栗田土滿（文化八年歿七十五）は遠江國平尾村の廣幡八幡宮の神官であつて、眞淵の歿後には更に宣長に師事した。家集に「岡屋（をかのや）歌集」一卷がある。其の歌風は萬葉の摸倣に陷つてあまり特色がなかつた。

久老・土滿の外になほ僧海量・清原雄風・日下部高豐等も縣門の萬葉派の歌人であるが、特に言ふべき特色はない。只茲に特筆すべきは、美樹に就いて和歌を學んだ上田秋成（文化六年歿七十六）である。

上田秋成

秋成は小說家であるから、其の閱歷は後章の讀本の所で述べるとして、此所では國學者及び歌人としての一面に就いて記して置く。秋成は多方面に奇才を發揮した人であるが、明和の頃加藤美樹に就いて國學と和歌を修めて以來は、創作と研究を兼ね、而も何れにも立派な業績を遺して居る。卽ち四十歲以後の著

作には小說の外に日記紀行隨筆があり、古典や國語學に關する研究もかなり多い。古典の中では特に萬葉の研究に熱心であつて、此の方面の學書には『萬葉集楢の杣』五卷『金砂』十卷『萬葉集會說』『金砂剩言』『古葉剩言』以上各一卷等があり、又枕詞の研究には眞淵の『冠辭考』の續篇としての『冠辭考續貂』七卷がある。秋成の作歌は歌文集『藤簍冊子』六卷の中二卷に收められて居る。是を見ると大體に於て萬葉調と古今又は新古今調とに分けられる。古今又は新古今風の歌を詠んだのは、晚年に京都に住んだ頃往來した小澤蘆庵の影響を受けたのであらう。

高圓の野邊兒に來ればにひ草にふる草まじりうぐひす鳴くも
かぐ山の尾の上に立ちて見渡せば大和國原さなへとるなり
みぞれ降り夜のふけ行けば有馬山出湯の室に人の音もせぬ
ありあけの月の光はうづもれて峰しろたへの雪のふりはも　（藤簍冊子）

此等は萬葉調であるが、更に古今乃至新古今調の例を擧げれば、

かげろふのもゆる春日の小松原うぐひす遊ぶ枝うつりして
みかは水花ぞながるる大宮のうちにも春はとまらざりけり
紀の國の南のはての空見ればしほけにくもる秋の夜の月
弓箭おひ君がみゆきのみさきおふわく子うつくし我が聟にせむ　（同上）

の如きである。かくて秋成の歌は用語格調が自由であり、內容も淸新であつて、當時の歌壇に異彩を

放つたのである。

縣門の歌人には萬葉派江戸派以外に、なほ新古今風を唱道し、又卓絶した歌論を發表した本居宣長（享和元年歿七十二）がある。宣長は歌人といふよりも、眞淵の國學の正統を承けて、之を大成した偉大な國學者であるから、先づ國學の事を主として述べようと思ふ。宣長は號を鈴屋と云ひ、伊勢國松坂の木綿問屋小津定利（本姓は本居）の子であつて、享保十五年五月七日に生れた。寶暦二年（二十三歳）の春、母の意志に從つて醫を志して京都に上り、堀景山に就いて漢學を修め、又典藥武川幸順に就いて醫術を學んだ。景山は堀杏庵の曾孫で、代々儒者であるが國文學にも通じ、殊に契沖を尊敬して其の著書を讀んでゐたのであつて、宣長が後年國學に志したのは、其の感化による所が多いのである。宣長はかねて和歌を嗜んでゐたが、上京の年には新玉津島の社司森河章尹（冷泉爲村門人）に就いて和歌を學び、更に寶暦六年には有賀長川（長伯の子）に添削を乞うたが、此の頃頓阿の『草庵集』を評釋した『草庵集玉箒』五卷を著してゐる。かくて寶暦七年（二十八歳）の夏には郷里に歸つて小兒科醫を開業し、其の傍『源氏物語』を始め中古の文學を講じ、又『萬葉集』の會讀を始め、なほ絶えず古學の研究を續けてゐた。是より先宣長は景山の許で、契沖の著書を讀んで國學の研究に志してゐたが、更に眞淵の『冠辭考』を見て敬慕してゐた。たま〳〵寶暦十三年（三十四歳）に、眞淵（今年眞淵六十五歳）が田安侯の命を帶びて西に下つた時松坂に立寄つたので、旅宿に訪ねて其の門人となつた。宣長はかねて『古事記』が學者の間に等閑に附せられてゐるのを慨いて、其の研究に志してゐたが、眞淵と松坂で會見した時激勵せられたので、いよいよ

決心を固め、翌年即ち明和元年(三十五歳)に『古事記傳』の稿を起した。『古事記傳』は其の後安永七年に上卷を終り、寛政四年に中卷が成り、更に寛政十年六十九歳の時に下卷が成つたのであつて、前後三十五年の心血を濺いで成つた全部四十八卷の大著述である。かくて宣長は其の後半生を『古事記』の研究に捧げたのであるが、其の間になほ餘力を以つて、上古から中古に至るまでの各種の古典を研究し、一



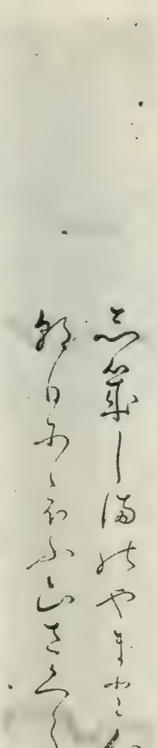
本居宣長肖像

生涯の著書は『古事記傳』を加へて九十餘種二百數十卷に達して居る。其の著述の主要なものを脱稿の年代順に擧げれば、『萬葉集玉の小琴』一卷(安永八年五十歳)『詞の玉緒』七卷(同前)『美濃の家苞(いへつと)』八卷(寛政三年六十二歳)『出雲國造神壽詞後釋』二卷(寛政四年六十三歳)『古今集遠鏡』六卷(寛政六年既成)『大祓詞後釋』二卷(寛政七年六十六歳)『源氏物語玉の小櫛』九卷(寛政八年六十七歳)『古事記傳』四十八卷(寛政十年六十九歳)『歷朝詔詞解』六卷(寛政十二年七十一)等である。此等の外になほ、寛政五年から歿年までの間に書いた雜筆の『玉勝間』(十四卷)も重要な著書の一である。宣長は此等の著書を作つて、國學の上に不朽の業績を遺したばかりでなく、二十八歳の時から門弟を集めて古典を講じたのであつて、爾來入門する者は年々に增加し、教を受けた者の總數は四百九十餘人に達し、其の地域は四十四箇國に亙つたのである。此等の數字を見ても、宣長の學問並に思想が、殆ど全國に普及した事を想像する事が出來るであらう。

宣長は眞淵の古學と其の研究法とを承けて、更に研究の範圍を擴張し且つ一層深く探究して、遂に國學を完成したのである。即ち宣長の學問の部門は國史・國文・國語・歌學・有職故實等に亙つて居るのであつて、其の目的とする所は上代の文獻を通して古語古意を明かにし、それに據つてあらゆる方面から、古代を闡明しようとしたのである。從つて宣長が最も力を注いだのは訓詁註釋である。註釋といつても、單に周密な解釋や精細な考證だけに滿足せずして、常に古道の究明を第一義としたのであつて、『古事記傳』は其の代表的著述である。『古事記傳』は宣長が他の古典に對する文獻學的研究によつて得た該博な知識と、彼獨得の歷史批評學とによつて討究したものであるから、宣長學は此の一書に綜合せられて居ると見てよい。宣長は愛國的熱情に驅られて、外來思想を極端に排斥した爲に、其の古道說の如きは動もすれば偏狹に陷つて、折角研究の主義とした眞理の追求に累を及ぼしたのであるが、宗敎的熱情によつて說かれた愛國精神は、幕末の尊王攘夷の思想に甚深の影響を與へた。宣長は古道の研究の外になほ、音韻假名遣及び語法に關する九種許りの著書を著して、國語學に大なる貢獻をして居り、又國文學の方面には、物のあはれを基調とする文學論を發表して、文藝評論史上に劃期的の業績を遺して居る。宣長の文學論は既に壯年の頃に書いた『石上私淑言』(三卷)に見えて居るが、更に『源氏物語玉の小櫛』にも述べて居る。宣長は此の二書に於て、文學は宗敎の敎義を說く爲でもなく、又勸善懲惡を目的とするものでもなく、畢竟物のあはれを本質とするのであつて、道德的批判を超越した、別箇の價値を有するものであると論じたのであつて、在來の文學評論の標準は宣長に至つ

て一變したのである。

宣長は更に歌文の上にも勝れた才能を發揮して居る。其の家集には『自撰歌』一卷と『鈴屋集』九卷とがある。前者は明和四年から寛政七年までの歌を自撰したものであり、後者は歌文集であつて、其の前篇は實子の春庭が輯め、續篇は養子の大平(おほひら)が編んだのである。先づ和歌を見ると、宣長は古體と近體との別を立て、詠んで居る。古體といふのは、用語格調等に於て萬葉風を標準としたものであり、


宣長筆蹟

近體は古今又は新古今の歌風に近いものであつて、宣長の本領は後者にあるのである。宣長は『石上私淑言』に於て、和歌は人の自然の感情の發露したものであるから、感情に伴なふ自らなる韻律の美を備へなければならぬと言つて居るが、彼が詠んだ新古今風の和歌は、其の主張と一致して居る。併し宣長は學者であつたから、其の歌も亦多くは知識的に詠まれてゐて、さほど勝れてゐない。

さし出づる此の日の本の光よりこまもろこしも春を知るらむ
風かよふさ枝にすがる影見えて螢もなびく庭のくれ竹
鐘の音も雲井にすみてをはつせの山風ふくる秋の夜の月
大君の御狩たたすと冬の野を雪ふみならすますらをのとも　（鈴屋集）

此等によつて宣長の謂はゆる近體の一班を知る事が出來よう。『鈴屋集』には櫻を詠んだ歌が多く、又古道の精神を鼓吹した作が多いのであるが、家集以外にも櫻の歌三百首を詠んだ『枕の山』一卷や、古道の主意を詠じた『玉鉾百首』一卷などがある。宣長も長歌を詠んだのであつて、『近葉菅根集』に五十三首收めてある。其の歌風に古調と新古今調とある事は短歌と同樣である。宣長は又雅文に長じてゐる。隨筆『玉勝間』の中にも文章として勝れたものが多いが、家集中には『源氏物語』の六條御息所の初めの記事の省略されてゐる部分を書いた『手枕』一卷の如きがある。其の他家集以外の紀行には『菅笠日記』二卷以下二種があり、又輕妙な雅文で喫煙の趣味を書いた『おもひ草』一卷の如き雜筆などがある。要するに宣長は國學史上最大の碩學であるばかりでなく、多方面に文才を揮つた人である。

京都の歌人

天明寛政期の歌壇に活躍した縣居派の歌人に就いては、大體述べ終つたが、當時堂上家の歌風の行はれた京都には、平安の四天王と稱せられた小澤蘆庵・伴蒿蹊・僧慈延・僧澄月があつた。此の四人の中で注意すべきは蒿蹊と蘆庵である。

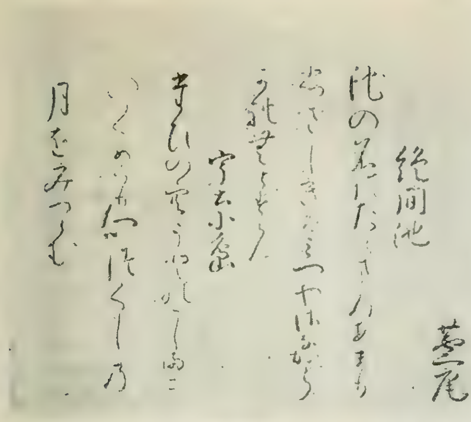
伴蒿蹊

伴蒿蹊（文化三年歿七十四）は名を資芳、號を閑田子と云ひ、剃髪して蒿蹊と云つた。近江國八幡村の富裕な商家に生れ、幼少の頃から和歌を嗜んだ。京都に出て初め有賀長伯に學び、次いで武者小路實岳（さねをか）の門に入り、後には堂上の歌風に滿足する事が出來ずして、實情を重んじ『古今集』を準據として自由に歌つた。其の歌風は

霧わたる空をあふげば初雁も鳴きて來にけり秋のゆふぐれ

舟人のみなと漕ぎ出づるあけぼのに先だつ雁は島がくれ行く

のやうに古今調に近く平淡である。蒿蹊は國學國史を始めとして漢學佛教にも精通し、又歌學にも一家の見識を備へてゐた。從つて著書は比較的廣汎に亙つて居る。文章の變遷を述べた『國文世々の跡』一卷は、國文學史の鼻祖とも言ふべきものであり、『國歌或問』一卷は彼の歌論を見るべき書である。又隨筆の『閑田耕筆』『閑田次筆』各四卷は學識と文才とを窺ふ事が出來る。又『近世畸人傳』五卷は、近世の儒者國學者歌人俳人孝子烈婦などの傳を記したもので、廣く持て囃された。家集は和歌と文章とを別々に集めて『閑田詠草』三卷と『閑田文草』五卷としてある。



蘆庵筆蹟（福井久藏氏藏）

小澤蘆庵

小澤蘆庵（享和元年歿七十九）は名を玄中、通稱を帶刀と云つた。尾張犬山侯の藩士で、京都の留守居役であつたが、致仕した後も歿するまで京都に住んでゐた。初め冷泉爲村に就いて學んだが、後に堂上の歌風から脱却して一家の歌學を唱へ、且つそれを作歌の上に實行した。蘆庵の歌學思想は其の著書の『塵ひぢ』『蘆かび』『或問』各一卷（此の三書は後に合せて『古の中道』と名づけて刊行した）に見えて居る。

ただ言歌

蘆庵は眞淵一派の歌人が感情を重んじながら、用語格調等に於ては耳遠い『萬葉集』を標準としたのに反對して、所謂たゞこと歌を提唱した。

ただごと歌は人間自然の感情を、日常の平易通俗な言葉で、技巧を求めずして發表する事を主義とするものである。實感實情を重んずる事は、從來眞淵等が唱へた所であるが、用語格調の自由を主張し且つ自ら其の主義によつて、清新な調を歌つたのは蘆庵の功績である。近世に於ける和歌革新の運動は元祿以來次々に現れたに拘らず、何れも不徹底に終つたのであるが、蘆庵の新聲に對しては、香川景樹の如き有力な後繼者が現れて、始めて革新の實を擧げることが出來たのである。蘆庵の家集には『六帖詠草』六卷と同拾遺一卷とがある。集中には平板無味な作も少くないが、次に擧げる例歌などは平淡にして清新であつて、彼の歌風の長所を示すものである。

大井川月と花との朧夜にひとりかすまぬ波のおとかな
松の色は雨にくれそふ木の間よりなほほの見ゆる山櫻かな
夕月のほのめく野べを見わたせば尾花なびきて秋風ぞ吹く
月ひとり天にかかりて荒金の土もとほれと照るひかりかな
月清み小簾の內外のへだてなくふたへに松の影ぞうつろふ
山遠く夜霧のこりて白む野のむしのね高きあきのあけぼの　（以上六帖詠草）
見るが中に秋風高くなりにけり松はなびかで雲のみぞ飛ぶ　（六帖詠草拾遺）

佳作が叙景に多く抒情に少いのは近世歌人の一般的傾向である。蘆庵は古歌を標範とする事を排斥したが、和歌の修業の方便としては『古今集』を讀めと言つたのであり、又彼の歌風も大體から見て古今

風に最も近い。從つて蘆庵一派の歌風は、眞淵等の萬葉派や在滿宣長等の新古今派に對して、古今派と呼ぶ事が出來る。

三　宣長以後の國學

文化文政以後の國學と和歌

寶暦から寛政頃までの和歌の興隆は、主として國學者によつて誘導せられたのであるが、文化文政以後の歌壇を代表する者は、必ずしも國學者ではなく、寧ろ多くの專門歌人が活躍した時代である。從つて此の間の國學と和歌は、別々に記述するのが便利であるから、今は先づ宣長歿後に於ける國學の發展を略述し、次いで近世和歌の發達を節を更めて述べる事にする。江戸時代の末期の六十餘年間は、宣長門下の國學者を中心として、國史・國文・和歌・語學・有職故實等の諸部門に亙つて新しい研究が遂げられ、學界の偉觀を呈した時代である。宣長の門人は四百九十餘人に達し、其の地域は四十餘國に及ぶ程の盛況であつたから、其の概觀を記す事は容易でない。今は姑く宣長學の著しい部門に就いて、其の代表的學者の注意すべき業績を略述する事にする。

田中道麿

宣長門下の萬葉學者の中で注意すべきは、田中道麿と小國重年である。田中道麿（天明四年歿六十一）は美濃の人で、宣長より六歳の年長者である。初め彥根の大菅中養父に學び、更に其の師なる眞淵の門に入つて、萬葉の古風を唱へ且つ其の研究に從事してゐたが、安永九年に宣長の門人となり、尾張地方に於ける國學興隆に功があつた。道麿は終生萬葉研究に耽つた人であつて、其の編著『撰集萬葉徵』三卷『萬

葉集問聞抄』二卷『萬葉集問答』一卷『萬葉集東語栞』一卷『萬葉集抄』十卷などは萬葉學に貢獻する所が多い。

小國重年

次に小國重年（文政二年歿五十四）は遠江國周智郡宮代村の小國神社の社司の家に生れた。天明の初め十五六歳の頃、同鄕の內山眞龍（眞淵門下）に就いて古學を學び、寛政元年（二十四歲）に宣長の門人となつた。重年は眞淵及び宣長の歌格研究を承けて、記紀及び萬葉の歌格を組織的に研究し、『長歌詞之珠衣』六卷を完成した。此の研究には多少の缺點はあるが、長歌の對句の研究の基礎を造つた功績は顯著である。

本居春庭

次に宣長の語學を繼承した學者は、本居春庭・石塚龍麿・鈴木朖（あきら）等である、春庭（文政十一年歿六十六歲）は宣長の長子である。中年の頃眼病の爲失明して、不幸な半生を送つたのであるが、父の語學の一面を繼いで特に文法の研究に從事し、國語研究史上重要な位置を占める『詞の八衢』二卷『詞の通路』三卷を著した。春庭は和歌も詠んだが、多くは題詠であり、歌風には殆ど特色がなかつた。家集に『後鈴舍集』六卷がある。

石塚龍麿

石塚龍麿（天保六年歿享年未詳）は遠江の人で、寛政元年に宣長の門に入り、專ら語學の研究に從事した。其の著述に『古言淸濁考』（三卷享和元年刊行）と『假名遣奧山路』（三卷日本古典全集所收）とがある。此の二書は宣長の『古事記』に於ける眞假名の用法研究を承けて、更に書紀萬葉等の上古の諸文獻に亙つて、精密な研究を遂げたもので、極めて創見に富み、後の國語研究竝に古典の訓釋に一大光明を與へた。

鈴木朖

鈴木朖（天保八年歿七十四）は名古屋の人で、號を離屋と云つた。其の功績は漢學の知識を應用して、國語學の研究に新生面を拓いた事であつて、其の注意すべき著書に、品詞論として有名な『言語四種論』一卷、語原を研究した『雅言（がげん）音聲考（おんじやうかう）』一卷（卷末に希雅一卷を添ふ）活用研究を表示した『活語斷續譜』一卷、中古語の辭書『雅語譯解』二卷等がある

脈は中古文學の訓釋にも手を著けて、『玉の小櫛補遺』一卷『少女卷抄註』一卷（以上二部源氏の註釋書）などを述作した。なほ歌文集に『離屋歌稿』六卷『離屋文稿』七卷『離屋文草』一卷等がある。

本居大平

次に中古文藝の研究に從事した學者は極めて多かつたが、最も注意すべきは本居大平・田中大秀・藤井高倚の三人である。大平（天保四年歿七十八）は宣長の同郷の門人稻懸棟隆の子で、藤垣内と號した。十三歲の時宣長の門に入り、師の學風を忠實に守り、四十七歲で本居家を相續し、養父に代つて和歌山藩に仕へ、傍各地の門人を指導して、宣長學の普及に功があつた。其の著書の中で最も名高いのは、『神樂歌新釋』五卷と古學の精神を說いた『古學要』一卷とである。大平は歌文に長じ、和歌は宣長に倣つて古風と近體とを區別して詠んだ。長歌集に『藤垣内集』二卷、短歌集に『稻葉集』二卷、文集に『藤垣内文集』一卷がある。大平は宣長の歿後鈴屋の門人を率ゐて、家學を普及した功勞者であるが、大秀と高倚は鈴屋門下に於ける古典研究家の雙璧である。

田中大秀

田中大秀（弘化四年歿七十一）は飛驒國高山の藥種商の家に生れた。十一歲の時尾張の熱田に出で、栗田知周に國學と和歌を學び、次いで伴蒿蹊に師事し、更に享和四年（二十八歲）に鈴屋の門に入つたが、宣長は其の年に歿したので大平に教を受けた。大秀は飛驒地方唯一の碩學として聞え、其の名を傳へ聞いて門人となる者が多かつた。『紫式部日記解』（五卷）を著した足立稻直や、歌人橘曙覽などは其の門弟である。大秀は萬葉研究にも著手したが、主として中古文學に志したのであつて、『竹取物語解』六卷は最も名高い。此の外になほ『土佐日記解』八卷『落窪物語解』六卷等がある。彼は歌文にも長じ、自選歌集に

『佐野集』六巻があり、歌文集に『桂葉集』二巻がある。

藤井高尙

藤井高尙（天保十一年歿七十七歳）は備中國賀陽郡宮内の吉備津神社の社家頭高久の子で、號を松の屋と云つた。初め同國の先輩小寺清先に就いて國學と和歌を學び、後に宣長の門人となつた。寛政十一年從五位に敍せられ、長門守に任ぜられたが、天保六年社家頭を養孫に讓つて隱居した。其の著書は極めて多いが、就中註釋書として勝れた『古今和歌集新釋』十三巻『伊勢物語新釋』六巻『大祓後々釋』一巻、學說を見るべき『道のしるべ』『歌のしるべ』『文のしるべ』（後に合せて「みちのしるべ」三巻とす）及び隨筆の『松の落葉』四巻等は最も名高い。高尙は雅文に長じ、鈴屋門下第一流の文章家と稱せられた。文集には『松屋文集』三巻『松屋文後集』三巻等があり、歌集に『松屋自撰歌集』一巻がある。和歌は新古今調に近く平淡であつて、さほど勝れてゐない。『紫式部日記釋』（四巻）の著者清水宣昭は高尙の門人である。

石原正明
細井貞雄

大秀・高尙の外に尾張の石原正明（文政四年歿六十二）江戸の細井貞雄（昌阿）（文政六年歿五十二）等もまた注意すべき學者である。此の二人は有職故實に精通してゐたが、正明には新古今の註釋書『尾張廼家苞』九巻の著書があり、貞雄には『宇津保物語』の本文批判と註釋を加へた『宇津保物語玉松』五巻『宇津保物語玉琴』二巻の如き注意すべき研究があり、又山岡明阿との合著に『宇津保物語二阿抄』（目錄一巻本文四巻）がある。斯くて鈴屋の門下から中古文學の研究家が續出した事は、國文學研究史上注意すべき事である。

伴信友

鈴屋門下の國學者で最も卓絶したのは、歿後の門人伴信友と平田篤胤とである。伴信友（弘化三年歿七十四）は若狹國小濱の人山岸惟智の第四子で、伴信當の養子となり、藩主酒井忠實忠進二代に仕へて厚遇を受

けた。文政四年に病の爲に致仕して後、寢食を忘れて國史古典を攷究し、遂に稀世の考證學者となつた。嘗て宣長の『古事記傳』竝に『詞の玉緒』を讀んで、其の學風を敬慕してゐたが、漸く村田春門（鈴屋門人）を介して名簿を送つた時、宣長は既に危篤に陷つてゐたので、歿後に至つて門人に加へられた。信友は敬神尊王の志が篤く、且つ博覽强記の人であつて、能く宣長の學風を承けて、廣く神祇古史古典古俗故實などに亙つて考證し幾多の創見を發表した。其の著書は百餘種に達し、校訂輯錄した國史古書は五十餘部に及んでゐる。著述の主要なものは國書刊行會編纂の『伴信友全集』（洋本五卷）に收錄せられて居る。其の中の重要な書目を擧げれば、神祇に關するものに『神名帳考證』十四卷『神名式考證土代附考』一卷『神社私考』六卷『瀨見小河』四卷『驗の杉』一卷『八幡考』一卷『蕃神考』一卷『正卜考』三卷『鎭魂傳』一卷等がある。次に國史に關する研究には『竹叢祕抄』『宇知都志麻』『松の藤靡』（以上各一卷）『長等の山風』（二卷附錄四卷）『殘櫻記』二卷『中外經緯傳』六卷などがある。又古典の考證註釋には『中臣祓要解』『高橋氏文考注』『倭姬命世記考』（以上各一卷）があり、國語學の研究には『假字本末（かなのもとすゑ）』四卷『應聲考』一卷等があり、國史國文の雜考には『比古婆衣』二十卷がある。何れの著述を見ても考證が精密であり、至る所に創見があつて、後の學者を裨益する所が多い。信友は歌文に長じ寫本の『信友歌集』と『信友文集』が傳存してゐる。最近彌富破摩雄・橫山重兩氏校訂の『伴信友家集』一卷が刊行せられた。其の詠歌には

ともし火の花もちりぬる小夜中に歸るか雁の聲のかなしさ

・小倉山ふもとの里は霧こめて夕日をのこす峯のもみぢ葉

の如き勝れた敍景歌もあるが、寧ろ

いにしへの野中ふる道たどる身は花に心のつかぬ頃かな

事しあらば君が御楯となりぬべき身をいたづらにくたし果てめや

の如き性格思想を窺ふべき作に心が惹かれる。信友の名聲を傳聞して教を受けた貴紳學者僧侶は極めて多く、又鈴屋の門下とは廣く交つたが、就中本居大平・同春庭・村田春門・加納諸平・伴林光平・谷森善臣等とは親しく交際した。篤胤も其の學德を畏敬してゐたが、篤胤が其の著書『古史徵』に信友の說を名を現さずして引用した爲に不和となり、遂に絶交するに至つた。

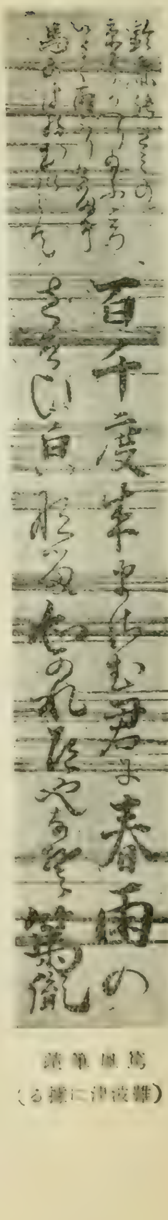
平田篤胤

平田篤胤（天保十四年歿六十八歳）は號を氣吹屋（いぶきのや）と云ひ、秋田藩士大和田祚胤の四男であつて、安永五年（眞淵歿後七年宣長四十七歳）に生れた。八歳の時から漢學を修め、寛政七年二十歳の時奮起して江戸に出た。意氣壯烈精力絶倫の人であつて、あらゆる生活苦を嘗めながら讀書に耽つてゐたが、寛政十二年（二十五歳）に備中松山（板倉侯）の藩士平田藤兵衛篤穩（あつやす）に見込まれて其の養子となつた。其の前年享和元年に、篤胤は宣長の學說に接して大いに敬服し、松坂に名簿を送つたが、生前に入門する事が出來なかつた。享和三年（二十八歳）の頃から國學神道に關する著述を續々著し、門人も漸く多くなり、文化五年（三十三歳）には神祇伯の白川家から、諸國の神職を教導する事を依囑せられた。其の後文政六年（四十八歳）には京都に上つて、著書數部を禁裡竝に仙洞に獻上するの光榮を得、又此の年本居大平及び春庭に面接して、宣長歿後の門人に加へられた。此の頃から篤胤の學說は廣く諸國に行はれ、其の名聲はいよ〳〵揚り、天保九年（六十三歳）には秋田

藩主佐竹侯の恩命によつて、板倉藩を脱して秋田藩士に復せしめられた。然るに天保十二年（六十六歳）には其の學說が幕府の忌諱に觸れて、其の身は國許に追放せられ、著書は刊行を差留められた。かくて晩年に故鄕に歸り、天保十四年に享年六十四で他界し、其の家學は養子鐵胤其の子延胤によつて繼承せられた。（明治十四年に至り古道宣揚の功績によつて正四位を贈られた。）

篤胤の國學

篤胤が一生の間に書いた著述は百餘部、卷數は一千卷に達し、其の研究範圍は史學・神道・儒教・道教佛教・醫學・易・天文等頗る廣汎に亙つてゐるが、最も精力を注いだのは上古史の研究と古道の闡明とである。上古史に關する著書には『古史成文』（現存神代卷三卷）『古史傳』三十七卷（二十八卷までは篤胤の自著でそれ以下は門人矢野玄道等が補足した）『古史徵』四卷がある。『古史成文』は自己の意見によつて、記紀・風土記・祝詞・古語拾遺などを取捨して撰述した上古史であり、『古史傳』はそれに詳密な註釋を施したものであり、又『古史徵』は其の考證並に古史研究法を述べたものである。篤胤の特色は上古史の研究よりも、寧ろに古道を闡明にし復古神道を力說した點にあるのであつて、此の方面に於ては宣長の說と大いに異なつた所がある。篤胤は古典は固より、儒釋道三教を始め泰西の典籍までも廣く涉獵して、國外のあらゆる思想を排撃して、只管古道の宣揚に力めたのであつて、其の博識宏辯は驚くの外はない。國學神道に關する著述として最も注意すべきものは、國學の發展を系統的に記述した『玉襷』一卷、古道闡明の根本的概念を說いた『靈能眞柱』二卷、古道と時代思潮との關係を明かにした『古道大意』二卷、後世發達した諸流神道を排して、復古神道を提唱した『俗神道大意』四卷、古學神道の精神を概說した『大道或問』一卷等である。此等の



篤胤筆蹟
(難波津に據る)

著書に於て儒佛を罵倒した筆端には、當るべからざる氣魄が迸つて居り、古道の唱道には强烈なる愛國的熱情が横溢して居る。かくて篤胤は忠實な學者と云ふよりも、寧ろ古神道の宣傳者であつて、其の教を受けた者の殆ど全部が、幕末期の尊王攘夷論者であつたのは、其の學風を最も雄辯に語るものである。

篤胤の和歌

篤胤の學風は右の通りであるから、文學や和歌の研究にはさほど重きを置かなかつた。併し歌道に就いては『歌道大意』二卷を著して居る。此の書は宣長の歌學説を根據としたもので、創見はないが、歌を古道に入る方便であるとして居るのが特色である。篤胤の歌集には『氣吹舍歌集』二卷があり、又文集には『氣吹舍文集』四卷がある。

よらずとも引かではおかじ大船の八十綱かけてもそろもそろに
言はまくも忌々しかしこし挂けまくもあやに尊きこれの皇神
今し世にはばかる加羅の學び草吹きなびけ見む神の息吹に
花鳥をわれもあはれと見てあれどあはれと歌ふいと無かりけり　(氣吹舍歌集)

此等によつて其の歌風を推して知る事が出來る。全集には明治四十四年から大正七年に亙つて刊行せられた『平田篤胤全集』(洋本十五卷)及び最近之を増訂して刊行せられた同名の全集(洋本十五卷)がある。

大平及び春庭の門人

轉じて大平並に春庭の門下を見ると、大平の門人に本居内遠・中山美石(うまし)・加納諸平等があり、又春庭の門には足代弘訓・東條義門・富樫廣蔭等があつて、それぞれ國學の發展に力を盡してゐる。本居内遠(安政二年歿六十四)は名古屋の人で、本姓濱田氏であるが、大平に嗣子が無かつたので其の養子となつた。内遠は學問が該博で考證に長じてゐた。中山美石(天保十四年歿六十五歳)は三河の吉田藩士で、『後撰和歌集新抄』(二十卷(其の中十七・十八卷を缺く))の著者として名高い。而して加納諸平(安政四年歿五十二)は和歌山の人で、寧ろ歌人として名を知られた。(九六三頁參照)次に春庭には、宣長の歿後鈴屋門下が引續いて師事した者が多いので、門人は夥しい數に上

足代弘訓

つてゐるが、足代弘訓(安政四年歿七十三)は最も勝れた學者である。弘訓は伊勢神宮の權禰宜の家に生れ、早く父を喪ひ、十八歳で荒木田久老に學び、後に春庭の門に入つた。尊王敬神の念が篤く、學問は神道國史國文和歌國語等に廣く通じ、殊に考證を得意とした。其の著書は極めて多い。試みに萬葉に關するものを見ても、『萬葉類語』九十五冊『萬葉音訓』五冊『萬葉名所部類』十冊『萬葉集頭字部類』四冊(以上何れも寫本)以下三四種がある。其の他古史國文和歌國語に關する夥しい編著があり、一生の詠歌は數萬首に達したと言はれて居る。(九六五頁參照)春庭の語學の一面を承けて業績のあつたのは、富樫廣蔭と東條義門である。

富樫廣蔭

廣蔭(明治六年歿八十一)は一に鬼島(きじま)氏と云ひ、和歌山の人で特に國語の研究に沒頭し、四十餘部の著述があるが大部分は未刊書である。其の注意すべき著書には『詞の玉橋』二卷『語格全圖解』一卷等がある。廣蔭は

東條義門

音義説を唱へた人であつて、之を繼承した門人は堀秀成である。次に義門（天保十四年寂五十八歳）は若狹小濱の玄妙寺の僧で、初め宣長門下の藤井高尚に學んだが、後に宣長及び春庭の語學研究を繼いで、國語學の諸部門に亙つて廣く攷究した。其の著述には用言研究として知られてゐる、『山口栞』三卷『活語指南』二卷『活語雜話』三卷『玉の緒繰分』五卷其の他數部がある。

鈴屋派以外の國學者

以上述べたのは大體宣長學派の人々であるが、此等と前後して現れた國學者にはなほ、春海・千蔭・保己一等の門人があり、又獨學若しくは漢學出身で、國學史を飾つた人々が尠くない。此等の學者の業績として特に目立つのは、（一）古典の校合考證に努め、或は各種の索引語類辭書などを編纂して、後の研究家に多大の便益を與へた事と、（二）從來顧みられなかつた古典を攷究し、或は從來と異なつた態度方法を執つて、國學の新生面を開いた事とである。

先づ春海の門下で注意すべき學者には、小山田與清・岸本由豆流・清水濱臣等があり、千蔭の門人には大石千引がある。

小山田與清

小山田與清（弘化四年歿六十五）は號を松屋と云ひ、武藏國多摩郡上小山田村の舊家小山田氏の家に生れ、二十四歳の時江戸の富裕な商家高田氏の養子となつた。初め漢學を修めたが、後に春海に學び、家業の傍財力にまかせて五萬卷の書を蒐集して考證的研究に沒頭し、遂に信友・篤胤と共に三大家と稱せられるに至つた。文政八年家業を孫の清常に讓つて、本姓小山田氏に復して後、華頂宮尊超法親王に進講し、又水戸烈公に聘せられて彰考館に出仕し、水戸學に多大の感化を與へた。（彰考

館に於ては『八洲文藻』の編纂や『扶桑拾葉集註釋』の著述などに從事した）與清は有名な考證學者であるから、其の業績も主として其の方面にある。其の主要な著述は『松屋筆記』百二十卷『松屋叢考』三卷『松屋叢話』二卷『擁書漫筆』五卷『十六夜日記殘月抄』五卷『更級日記考證』四卷『宇津保物語階梯』三卷『宇津保物語類語』一卷等である。與清は又文政の末頃から群書の索引の作製に志して『色葉類函』を編み、更に之を基にして『群書捜索目錄』二千餘卷（彰考館所藏本は八十餘部四百二十餘冊である）を編纂した。此の編纂法は岸本由豆流・山崎美成等に傳へられ、由豆流は更に村田了阿に影響を與へた。與清の門人には考證に長じた伊能穎則・山崎美成等がある。

岸本由豆流

岸本由豆流（弘化三年歿五十八）は通稱大隅、號を椎園と云ひ、家を攷證閣と稱した。伊勢の人朝田某の子であるが、幕府の弓弦師岸本讃岐の養子となつた。國學を春海に學び、家を長子に讓つて、三萬卷の藏書を擁して專ら考證註釋に努めた。其の校合註釋は數十部に及んでゐるが、世に流布してゐるのは『萬葉集攷證』六卷『土佐日記考證』一卷『鳴門中將物語考證』一卷『濱松中納言物語考證』四卷等である。此等の中で『萬葉集攷證』（萬葉集叢書に收む）は考證精密であり創見に富んでゐて最も勝れてゐる。由豆流は和歌も詠んだが、學者らしい歌風であつて特色がない。其の門下の井上文雄は歌人として名高い。

清水濱臣

清水濱臣（文政七年歿四十九）は江戸の人で、其の家は代々町醫者であつた。濱臣は不忍池の畔に住み、醫を業とし、號を泊洦舍又は月齋と稱した。春海の感化を受けて歌文に長じてゐたが、（九五五頁參照）此所には國學の方面だけに就いて記して置く。濱臣は萬葉・伊勢・大和・宇津保・唐物語等の校合又は考證に從事して、後の研究家

に多大の便益を與へてゐるが、纏つた著述は少い。彼の古典文學に關する學識は隨筆の『泊泊筆話』二巻、『答問雜錄』三巻、『清石問答』一巻、『月齋雜考』一巻等、其の他手澤本の書入や他の學者の著書の引用によつて窺はれる。濱臣は又雅言辭書の編纂に著手し、稿本の『語林類葉』（寫本二十巻附錄二巻）を遺して居る。群書索引や語類又は辭書の編纂は、當時盛に行はれたのであつて、國學の興隆を示すものである。

大石千引

千蔭の門人の多くは歌文を學んだのであるが、大石千引（天保五年歿六十五）は學者として注意すべき人である。江戸の人で、初め堂上の歌道を學んだが、千蔭の門人となつて國史國文を研究し、又詠歌に長じた。千引は從來顧みられなかつた歷史物語の校勘考證竝に註釋に從事して、『大鏡短觀抄』六巻、『水鏡觀短抄』六巻、『榮華物語抄』四十巻を著して學界に貢獻をした。彼は故實にも通じ、『日中行事略解』一巻を書き、又語原の研究にも著手して『言元梯（げんげんてい）』一巻を著した。

屋代弘賢

次に塙門下を見ると、師風に感化せられて、考證や類書の編纂に長じた學者が多い。就中屋代弘賢（ひろかた）は最も注意すべき業績を遺して居る。屋代弘賢（天保十二年歿八十四歲）は幕府の御家人忠太夫詮房の子である。七歲の頃から幕府の右筆森尹祥に就いて書道を學び、後に山本北山に漢學を受け、保己一の門に入つて國學を修め、父の歿後には幕府に仕へやがて右筆となつた。學識該博の人で、不忍池畔の家には三棟の書庫（不忍文庫と云つた）に五六萬巻の書籍を藏し、特に考證竝に類書の編纂を得意とした。即ち保己一を輔佐して『群書類從』の編纂竝に刊行に盡力し、又幕府の命によつて厖大な類書『古今要覽稿』五百六十巻（國書刊行本洋本六冊がある）を編纂したが、未完成で他界した。

轉じて主として獨學によつて名を成した學者を見ると、やはり時代の傾向に動かされて、考證や索引・書目・辭書等の編纂に主力を注いだやうである。就中注意すべきは尾崎雅嘉(まさよし)・石川雅望(まさもち)・村田了阿、漢學者で我が古文獻の研究に從事した狩谷棭齋、及び其の門人岡本保孝(やすたか)等である。

獨立學派

尾崎雅嘉

尾崎雅嘉（文政十年歿七十三）は大阪の人で、初め醫を業としてゐたが、後に專ら學問に從事し幾多の著書を完成した。『群書一覽』六卷『百人一首一夕話』九卷は廣く世に行はれてゐるが、此の外に未刊書に『續日本異稱傳』（寫本百三十六卷）・『舶來書目』（寫本二十卷）などの如き注意すべき著述がある。

石川雅望

江戸の石川雅望（文政十三年歿七十八歲）も獨學によつて國學に精通した人で、雅言辭書として名高い『雅言集覽』五十卷を編纂し、又源氏の註釋書『源注餘滴』二十卷の如き有益な著述を遺して居る。（其の傳は下の狂歌の條下に述べる。）『雅言集覽』に關聯して思ひ出されるのは『俚言集覽』の編纂者と言はれてゐる村田了阿（天保十四年歿七十二歲）である。

村田了阿

了阿は江戸淺草黑船町の煙管商の家に生れ、十四歲の時寺に入り、中年の頃剃髮した。和漢梵に通じた學者で、特に考證を得意とし、『考證千典』十卷『異域同事錄』（前集後集續集各二卷）『事物類字』七卷等の如き辭書を編纂した。『俚言集覽』二十六卷は谷川士清の『和訓栞』、雅望の『雅言集覽』と共に、江戸時代の三大辭典と稱せられ、又越谷吾山の『物類稱呼(ぶつるゐしょうこ)』（五卷安永四年成る）と共に、江戸時代の二大口語研究書として注意すべきものであるが、其の編者を了阿とする說には疑問がある。（尤も了阿の書入のある事は事實である）一說には音韻學者大田全齋（文政十二年歿七十一歲）の編纂であるとも云ふ。

狩谷棭齋

狩谷棭齋（天保六年歿六十一）は名を望之と云ひ、江戸の人で、幼少の頃から漢學を修め、殊に唐律疏に漢代の

考古學に通じ、後に此等の學殖を以て、我が金石文古典制度等に精密周到な考證を施した。其の國典に關する著述には、『日本靈異記攷證』三卷『日本靈異記校譌』二卷『扶桑略記校譌』『法王帝説證註』『日本國見在書目證注稿』（以上各一卷）『諸國採集風土記』二卷『古京遺文』二卷（以上日本古典全集所收）『箋注倭名類聚抄』二十卷等があつて、何れも學界に便益を與へてゐる。岡本保孝は其の門人である。岡本保孝（明治十一年歿八十二歳）は本姓若林氏であるが、幕臣岡本氏を嗣ぎ、號を況齋と云つた。國學を清水濱臣に學び、漢學を狩谷棭齋に受け、清貧の中にあつて古典を渉獵し、遂に一大考證家となつた。（萬葉學者木村正辭博士は其の門人である。）保孝の研究範圍は極めて廣く、而も前人未到の野を開拓してゐる。其の著書は殆ど未刊本であつて、現在自筆稿本は靜嘉堂文庫所藏の『岡本況齋雜著』二百二十六冊（其の一部は帝國圖書館藏本と重複して居る。）がある。此等の著述は國文和歌に關するもの、國語學に關するもの、漢籍に關するものの三部に分たれる。試みに國文學關係の書目を擧げれば、『源氏物語攷』『枕草紙存疑』『濱松中納言物語系譜』『とりかへばや物語考』『同年立系譜』『秋乃夜長物語釋文』『大鏡系譜』『榮華物語抄附錄』『增鏡考』『平家物語考附補遺』『今昔物語出典攷』『十訓抄典故攷』『鴨長明發心集攷』『古事談攷證』『七部集打聞』等がある。此の外勅撰集私撰集百首家集等の考又は存疑と名づけたものが十種許りある。次に國語學に關するものには、『磨光韻鏡攷』『撥韻假字攷存疑』『詞の玉緒攷』『古言梯補遺』以下、音韻や國語に關する考説が十數種ある。以上の書目を見ても、其の師棭齋の學風を承けて、更に新しい方面に廣く研究を遂げた事が察せられる。蓋し此等の著述が當時上梓せられて世に流布したならば、國學の發達に多大の影響を

與へたであらう。

反宣長學派

右に述べた獨立學派とも言ふべき諸學者は、眞淵・宣長一派の國學派とは別の方面から學界に貢獻したのであるが、此の外になほ宣長學の反動として起つた人々がある。今其の中で學風若しくは學説上特に注意すべき、富士谷御杖と橘守部とに就いて述べて置く。

富士谷御杖

富士谷御杖（文政六年歿五十六）は前に述べた成章の子で、父に就いて國學竝に和歌を學び、特に言靈説を樹てて、古典歌學語學に對して獨得の考察を下した。其の著述には古典研究に、『古事記燈（あかし）』二卷『古事記燈神典』（現存零本一冊）『萬葉集燈』五卷『土佐日記燈』二十四卷『百人一首燈』二卷等があり、國語に關するものに、『俳諧天爾波抄』六卷『脚結抄翼』（稿本二冊）『詞葉新雅』一卷等があり、其の他歌論書や『北邊隨筆』四卷以下雑著が十二三種ある。此等の中で最も注意すべきは『古事記燈』である。此の書は彼獨得の言靈説竝に神道人道説を根柢として、『古事記神代卷』に獨自の見解を下したものである。其の所説には非科學的な點も尠くないが、宣長が神代卷に對して執つた神祕主義の反動として注意すべく、また其の所説中には幾多の創見又は暗示に富んだ意見を含んで居る。

橘守部

次に橘守部（嘉永二年歿六十九）はもと宣長と同じ伊勢國の人であるが、十七歳の時江戸に出で、二十九歳から約二十年間を武藏國幸手に送り、四十八歳（文政十一年）から歿するまで江戸に住んだ。二十五歳の頃葛西因是の許で、經書の講義を聽いた外は、殆ど獨學によつて一家を成した人で、其の研究は古史・萬葉・物語・謠物・歌學・語學等に亙り、何れの方面にも創見がある。其の著述六十餘部は橘純一氏編『橘守部全

集」（十三卷國書刊行會出版）に收められてゐる。其の主なものを擧げれば、古代史の研究註釋に「稜威道別」十二卷「舊事紀直日」六卷「難古事記傳」五卷「神代直語」三卷其の他があり、記紀歌謠の註釋に「稜威言別」十卷があり、萬葉の註釋に「萬葉集檜嬬手」七卷「萬葉集墨繩」八卷があり、神樂催馬樂の註釋に「神樂歌入文」「催馬樂入文」（各三卷）がある。また歌論・歌格・修辭に關するものに「長歌撰格」「短歌撰格」「文章撰格」「萬葉集緊要」（以上各二卷）があり、國語學關係の著に「山彥冊子」（三卷一名雅語考）「鐘の響」三卷「俗語考」二十二卷「雅言考」十二卷「助辭本義一覽」二卷「てにをは童訓」二卷等がある。かくて守部は國學の多方面に亙つて研究を遂げ、而も大膽にして創見に富んだ學說を發表して、所謂國學の四大人に次ぐべき偉大な功績を遺したのである。而して其の著書に敬神尊王の精神が流れて居り、又其の研究法が古語の攷究を基礎としてゐる事などは、宣長と同じであるが、守部には別に獨得の見解があつた。卽ち守部は宣長の學問に對しては敬意を表して居るが、其の學說には慊らなかつたのであつて、宣長が「古事記」を第一の古典としたのに對して「日本書紀」を尊重し、是に次いで「舊事本紀」の價値を認め、又宣長が神代史に對して神秘主義を執つたのに反對して、國民的古傳承の本質を論じて、宣長の見解の缺陷を補はうとしたのは、古典研究に一歩を進めたものである。從つて守部の著述中で最も注意すべきは「稜威道別」「稜威言別」等であるが、「難古事記傳」中にも宣長の失考を訂正すべき新說がある。其の他萬葉神樂催馬樂・歌格の研究などにもそれぞれ創見があつて、後の學者に多大の便益を與へてゐる。守部は萬葉及び記紀歌謠に深い造詣があつたにも拘らず、作歌は新古今風を標準とし、而も概ね平明の弊に

陷つて居る。家集には長男冬照選の『橘守部家集』三卷（全集首卷所收）がある。

幕末期の國學
平田學派の人々

最後に天保以後の幕末期に於ける國學の概觀を記して置く。當時の國學は殆ど篤胤の門人によつて代表せられる。篤胤の門下は其の生前に於て五百五十餘名に達し、歿後の門人は一千三百三十名あつたと言はれて居る。以て平田學派の盛況を察すべきである。元來篤胤は時勢の影響を受けて、極端な國家主義の學說を唱へ、又空論を避けて實社會に活眼を開いた人であるから、門人も亦師風に感化せられて、思想家若しくは志士の風格を具へた者が多かつた。殊に門下の時代は開港攘夷の國論が沸騰して、時局は愈多端であつたから、或は敬神尊王の精神を鼓吹して勤王の志士を勵まし、或は時勢に必要な實際的施設を提唱して、經世家を刺戟したのであつて、彼等が直接間接に明治維新の大業を翼贊した功は極めて顯著である。試みに二三の門人に就いて言へば、石見國津和野藩士大國隆正（明治四年歿八十歲）は京都に於ける私塾報本學舍に據つて、自己の學說思想を門人に鼓吹したばかりでなく、關西各地を遊說して公卿や諸藩主に多大の感化を與へた。隆正と共に篤胤門下の異才と言はれる出羽の佐藤信淵（のぶひろ）（嘉永三年歿八十二）は農政學者の家に生れ、父季信と共に江戸に出て蘭學を修め、篤胤の門に入つて神道を學んだ後、盛に西洋の學問を應用して、殖產興業に關する學說を樹てて、『天地鎔造化育論』三卷『經濟要錄』十五卷『草木六部耕種法』十六卷『農政本論』十卷以下多くの著述を公にし、なほ海防砲術などに關する書を著して、（此等の著書は瀧本誠一氏編『佐藤信淵家學全集』（洋本三卷）に收められて居る）大いに爲

政者を刺戟した。其の他武藏國入間郡の人權田直助（明治二十年歿七十九歳）は、國學の外に漢學を修めて、頻りに皇國醫道の復興を提唱し、隆正と同藩の岡熊臣（嘉永四年歿六十八）は古道鼓吹の傍兵法を攷究して『兵制新書』二十卷（現存四卷）を著した。

右に擧げた數名の學者によつても察せられるやうに、篤胤門下に至つて國學界は時勢の影響をいよいよ多く受けて、著しく其の面目を更めたのである。而して當時の國學者は思索に耽り、或は實社會に活躍する事が多かつた爲に、從來の學者の如く學問に沒頭する餘裕がなかつたから、國學の實質から云へば、既に衰頽期に入つたのである。併し此の間に於ても、なほ學問上注意すべき業績はかなりある。例へば淡路の國學者鈴木重胤（文久三年歿五十二）は、神道の講究並に鼓吹の傍『日本書紀傳』（未完成三十卷）、『祝詞講義』十五卷、『中臣壽詞講義』二卷の如き名著を述作し、隆正も多くの著述を書いたが、殊に祝詞研究には『天津祝詞太詔詞考』五卷の如き思想的に注意すべき書を公にした。其の外六人部是香は長歌の格調の研究として有名な『長歌玉琴』一卷や、大祓に獨得の考察を下した『大祓詞天津菅麻』三卷を著し、又權田直助は國文法に關する種々の書を公にし、殊後の門人飯田武郷（明治三十三年歿七十四）は、嘉永五年から明治三十二年に至るまでの歳月を費して、『日本書紀通釋』七十卷の大著述を完成した。

篤胤門下以外の學者

幕末の國學は以上述べた篤胤門下によつて代表せられるが、他にもなほ注意すべき學者がある。今其の中の二三に就いて簡單に記して置く。土佐の鹿持雅澄（安政五年歿六十八）は同國の國學者宮地仲枝の門人で契沖の『萬葉代匠記』と對立する『萬葉集古義』百五十二卷の外に、音韻國語に關する種々の著述を遺し

た。（九七二頁參照）又萩原廣道（文久三年歿四十九）は岡山に生れ、獨學によつて國學を修め、大阪にあつて門人を教授した。有名な『源氏物語評釋』十四卷の著者として知られて居るが、此の外に歌文語學に關する著述がある。廣道に就いて國學を修めた阿波の池邊眞榛（まはり）（文久三年歿三十四）は、近年始めて廣く知られた學者である。廣道の門人であるが、更に本居内遠にも學び、三十歳の時から德島藩主蜂須賀侯に仕へたが、憂國の志士と國事を談じて忌諱に觸れ、獄中で早く他界した。短い生涯ではあつたが、萬葉・源氏・榮華・新古今などの考證註釋を書き、又姓氏・官職・語學に就いても著作した。其の遺稿は二十七部二百十餘卷あつたが大部分散逸して、今は『古語拾遺新註』八卷『校正榮華物語略註』（八十卷中現存七卷）以下數種があるのみである。（以上坂本章三氏の記による）『古語拾遺新註』は眞榛が心血を濺いで成つた極めて精細な註釋であつて、昭和三年に明治聖德記念學會によつて、始めて印刷に附して世に流布せられた。以上擧げた人々の外に、幕末から明治にかけての頃の國學者には、狩谷棭齋の學風を承けた黑川眞賴（春村養子）佐藤誠實（春村門人）木村正辭（保孝門人）等があり、本居内遠の門人に久米幹文・小中村淸矩・村上忠順・本居豐頴等がある。又富樫廣蔭の門下には堀秀成・落合直澄（直文叔父）があり、本間遊淸（春海門人）の門からは横山由淸が出た。此の外獨學によつて多くの古典の註釋書を書いた河内の敷田年治や、水戸の彰考館の學者で古典研究に著しい功績のあつた栗田寬博士なども、注意すべき學者である。此等の人々は國學史上最後の學者であつて、明治初期に於ける古典研究復興の恩人である。

要するに國學の發達は、宣長の業績を以て殆ど完成したのであつて、篤胤及び其の門下に至つて、

國學は寧ろ實際運動に移つた爲に、學問としては漸次低下したのである。併し彼等の熱烈な敬神尊王の精神は、偉大なる社會的勢力と相俟つて、明治維新の原動力となつたのであつて、國學本來の精神は茲に實現せられて一段落を告げたのである。

四　文化文政期の和歌

近世和歌の興隆期

宣長及び蘆庵の歿後の文化文政天保の四十年間は、江戸文藝の爛熟期であつて、讀本・合卷・滑稽本・人情本・歌舞伎などの隆盛時代であるが、和歌も亦極めて盛であつた。此の時代の歌壇には、萬葉派・鈴屋派・堂上派等に屬する勝れた歌人が尠くなかつたが、流派として最も優勢であつたのは香川景樹の桂園派である。是より先寶暦から寬政に至るまでの五十年間の和歌は、國學者が古典趣味に立脚して唱道したのであつて、未だ近代的民衆的のものでなかつた。然るに蘆庵の平淡な歌風に刺戟せられ、眞淵の古典的歌風に反對して起つた景樹の新歌風は、時代の要求に適し、而も其の門下から傑出した歌人を輩出した爲に、忽ち歌壇を風靡するに至つた。

香川景樹

香川景樹（天保十四年歿七十六歳）は鳥取池田の藩士村善太兵衛の二男であつて、通稱を銀之助と云ひ、桂園と號した。天明七年二十歳の時京都に出て、二條派の歌人香川景柄（かげもと）の門人となり、又蘆庵にも學んで其の感化を受けた。其の後寬政九年三十歳の時、景柄の養子となつた頃から入門する者が多かつたが、養父と意見が合はなかつたので、文化元年（三十七歳）に離緣した。併し其の後もなほ香川氏を名乘つてゐた。

景樹の歌學説

養家を出て後は周圍の攻撃にも屈せず、盛に新しい歌風を唱道して、遂に近世和歌の祖と仰がれるに至つた。其の流派を桂園派と云ふ。景樹は元來情熱的な歌人であり、且つ自負心の強い人であつて、眞淵の歌學説に對しては特に反抗の態度を執つた。其の歌學に關する意見は、文化八年（四十四歳）に眞淵の『新學（にひまなび）』の説を反駁する爲に書いた『新學異見』一卷を始めとして、其の後に書いた『歌學提要』一卷『古今和歌集正義』（二十卷）の總論、及び門人の集錄した聞書遺文等によつて窺はれる。景樹の歌論は蘆庵のただこと歌の影響を受けて、歌の根柢を「まごころ」（自然の儘の感情を指してゐる。）と其の發動に伴なふ「しらべ」にありとした。眞情を重んじ調を宗とする事は既に眞淵の唱へた所であるが、眞淵が眞情を高く直き心としたのに對して、景樹は人間本來の心に具はれる純眞感情であるとし、又眞淵が萬葉の素朴な調を慕つたのに對して、景樹は調は眞情の發露に伴なふ自らなる響であつて、時代と共に進化するものであるとしてゐる。要するに景樹の歌論の中心をなすものは調の説であつて、理窟に渉らず、技巧を弄せず、自然の感情を其の流れの儘に表現する事を力説したのである。かくて景樹は古歌集の中では『古今集』を尊重し、用語の上には俗言平語を認めたのであつて、其の作歌には内容と表現の調和せる流



香川景樹肖像（百代草に據る）

麗溫雅なものが多い。家集には『桂園一枝』（三巻文政十一年刊）とこれに洩れた歌を集めた『桂園一枝拾遺』（一巻嘉永二年刊行）とがある。大部分は題詠であるが、「事につき時にふれたる」と標記した作もかなりある。敍景抒情共に勝れて居るが、中には懸詞などの技巧を用ひたものがあり、又蘆庵と同じやうに、平淡に過ぎて無味乾燥な歌も少くない。

鶯のこゑする野邊にたつものは我とあしたの霞なりけり
さしのぼる月の光と思ひしはやがても空のあくるなりけり
ももしきの大宮人もいとまなき年のをはりになりにけるかな　（桂園一枝）

此等を見ると、彼の歌論を作歌の上に實現する事は容易でなかつたと思はれる。併し左に揭げる作の如きは、調が流麗であり着想が清新であつて、よく景樹の本領を發揮して居る。

大堰川かへらぬ水に影見えてことしも咲ける山ざくらかな
照る月のかげにて見れば山ざくら枝うごくなり今か散るらむ
行く水の末はさやかにあらはれて川上くらき月の影かな
霞みつつ暮るると思ひし春の日は朧月夜になりにけるかな
行けど行けど限なきまでおもしろし小松が原の朧月夜は
野の宮の櫻の下道けふ來れば古葉とともに散るさくらかな
富士の嶺を木の間木のまにかへり見て松の影ふむ浮島が原

なかなかに絶えば絶えねと思ひしは恨みしときの心なりけり

子はなくてあるがやすしと思ひけりありて後になきが悲しさ　（桂園一枝）

雄渾莊重な趣はないが、實感眞情を詠み、殊に聲調が流麗であるのは景樹の長所である。尤も結尾句に「かな」「なりけり」「けるかな」を頻りに用ひてゐるのは單調の誘を免れないであらう。景樹は和歌に專念した人であるが、傍古典研究にも從事したのであつて、其の著述に前記の『古今集正義』の外に『萬葉集捃解』一卷『土佐日記創見』五卷『百首異見』五卷等がある。殊に勝れて居るのは『古今集正義』であつて、自家の歌論の上から詳細な評解を下してゐる。尤も雜以下は門人熊谷直好の聞書である。

桂園派の歌人

景樹の門人は一千餘人に達したが、其の中で名聲の高かつたのは木下幸文・熊谷直好・菅沼斐雄・釋誠拙・兒山紀成・高橋殘夢・穗井田忠友・八田知紀・渡忠秋、女流の柳原安子・秋園古香（神方升子）高畠式部等である。此等の中で初めの六人は文化文政期の歌人であり、知紀以下は嘉永安政期の人々である。玆には文化文政期の桂園派代表歌人として幸文及び直好の事を述べて置く。

木下幸文

木下幸文（文政四年歿四十三）は桂園第一流の歌人である。備中國淺口郡長尾村の人、木下八郎右衞門義錦の二男に生れ、幼年の頃から歌を嗜んだ。和歌は初め澄月に學び、其の歿後には慈延の門人となつたが、景樹の歌風に敬服し、文化元年に赤尾可官（景樹門下）の紹介で其の門に入つた。幸文は同門の誠拙和尚に就いて禪を學び、又詩と書に長じてゐた。其の歌は景樹の長所を最もよく發揮し、而も題材用語格調等が清新且つ自由であり、時に萬葉調をも詠んで居る。同時代の他の歌人と同じく、優麗な敍景歌を多く詠んでゐるが、特色は寧ろ

純眞感情を歌つた抒情歌にある。家集には淺野譲が編纂した『亮々遺稿』三卷があり、又學識を見るべき隨筆に『亮々草紙』三卷がある。「亮々」は幸文が晩年に大阪に移つて庭に竹を植ゑ、家を亮々舍と號したのによる。『亮々遺稿』の歌は春・夏・秋・冬・戀・雜・畫讃・長歌の八部に分ち、畫讃之部の次には組題百首と貧窮百首とが收めてある。畫讃之部のあるのも特色であるが、殊に貧窮百首は最も異彩を放つてゐる。先づ敍景の作を見よう。

舟もがな渡りて聞かむ遠方のくぬぎが原のうぐひすのこゑ
かはほりの飛びかふかげも靜まりて月になりゆく花の上かな
夕月夜粟田の山は霧こめて鹿の音とほしをかざきのさと
立ちならぶ松より外のかげもなし濱のしらすのあきの夜の月
いづこぞや鳴く山鳩の聲はして夜はまだ深しありあけの月
限なきあはれを知れと小夜中に人しづめても降るしぐれかな
さざなみの比良山おろし吹きあれてあられ横ぎる瀨田の長橋　（亮々遺稿）

此等は何れも清新にして印象的繪畫的な敍景歌である。次に萬葉に近い歌風の例を擧げれば、

春霞たちぬと見しを比良のねの雪は眞白にまたなりにけり
月影は霜にしらけし明方の雲居とよみてたづ鳴きわたる
夕さればたづがね高し大伴の御津の浦風さむく吹くらし　（同上）

に倣つて、文化四年の大晦日から正月三日にかけて、自己の淸貧を詠んだものである。今其の中から數首を抄出しよう。

等がある。次に彼の抒情歌で最も見るべきものは貧窮百首である。これは山上憶良の貧窮問答の歌

大丈夫のをのこさびすとうちあけて泣かぬ心ぞまこと悲しき

から衣妻だにあらばかかるとき語り合ひてもなぐさめてまし

天地にあふるばかりの黄金もが世の人皆をあきたらはさむ

古の人の飲みけむかすゆ酒われもすすらむこの夜寒しも

終にはと思ふ心のなかりせばけふの悔しさいきてあらめや　（同上）

とにかく幸文は、動もすれば平弱な缺點に陷つた桂園派の歌人中にあつて、特異の地位を占める歌人である。

熊谷直好

幸文と共に桂園の雙璧と稱せられるのは熊谷直好（文久二年歿八十一）である。直好は周防國岩國の藩士で、少年の頃から歌を好み、十六歲の時景樹に添削を請ひ、やがて十九歲の年に京都に出て、約一年間直接指導を受け、傍相國寺の誠拙禪師に就いて參禪した。文政八年（四十四歲）に故鄕を去つて大阪江戸堀に住んだが、三年の後天王寺畔の百濟野に家を構へ、花園三位に就いて管絃を學び、大曲の傳授を受けた。彼の著述に『梁塵後抄』四卷（神樂催馬樂の註釋）があるのも、斯道に通じてゐた爲である。直好は文章にも巧みで二三の航海日記を遺してゐる。歌は達吟を以て聞え、歌風は景樹を踏襲して平淡流麗であるが、多く

は平淡の弊に陷つて居る。家集には門人の編んだ『浦のしほ貝』三巻と其の拾遺四巻がある。

河口の澪のしるしにともす火の光も見えずかすむ夜半かな

池水に見えてのみ降る春雨は音きくよりもさびしかりけり

夏の日の長き盛りのねぶの花ゆめかとばかりにほふ色かな

露ふかき若葉がくれに飛びくれば螢のかげもみどりなりけり

はるばると蓮の立葉ぞさわぐなる風わたるらしおほくらの池

濱とほき和田のみさきの波の上に羽打ちふれて鶴なきわたる

關の戸は今あけぬらしほのぼのと菅の小笠のかずぞ見えゆく　（浦のしほ貝）

此等が佳作である。集中には「濱とほき」の歌のやうな萬葉の影響を見るべき作が散見する。

江戸派の歌人

文化文政期の歌壇には桂園派以外にも注意すべき歌人がある。江戸派は眞淵の歿後一時江戸の歌壇を風靡したのであるが、千蔭春海の門人にはさほど傑出した歌人が無かつた。先づ春海の門人には小山田與清・岸本由豆流・清水濱臣の如き學者で歌を詠んだ人や、歌人として知られた本間游清・片岡寛光・小林歌城等がある。此等の中で最も注意すべき歌人は濱臣である。

清水濱臣

清水濱臣（文政七年歿四十九）の國學に關する業績は既に述べて置いたが、（九四〇頁參照）和歌の方面では縣居門下の歌集『縣門遺稿』五巻を編み、又古今の長歌を集めて『菅根集』を編纂した。『菅根集』は其の例言によると、古葉中葉近葉の三篇から成り、古葉には記紀萬葉集の長歌を收め、中葉には代々の勅撰集私撰集諸家集等のものを集め、近葉には近世

のものを收錄した大部の私撰集である。併し刊行せられたのは『近葉菅根集』十巻（文化十一年刊續歌學全書に收む）だけであつて、其の他は散逸したらしい。『近葉菅根集』は長流・契沖以下、縣門諸歌人四十八人の長歌三百四首を選集してゐる。此の集は近世の長歌撰集として便利であるばかりでなく、長歌の興隆に貢獻する所が多かつた。さて濱臣は和歌雅文に長じてゐた。家集の『泊洦舍集（ささなみのやしふ）』八巻は歿後に其の養子光房等が撰んだものである。其の歌風は春海を繼承したものであるから、古今調に新古今調を加味して優雅である。左に數首を抄出して置く。

梅が枝にふる春雨はおとせねど散る露かをる窓のあけぼの
さくら咲くかた山畑のあけぼのに二聲なきてたつ雉子かな
みそぎせしあと川柳一葉ちり二葉流れて秋かぜぞ吹く
釣の糸吹くゆふかぜのすゑ見えて入日さびしき秋の河づら
たま河の瀨浪ひかると見しほどに月おし照れりむさし野の原　（泊洦舍集）

一柳千古
木村定良

千蔭の門下には秀でた歌人がなかつたが、一柳千古（天保三年歿享年未詳）・木村定良（弘化三年歿七十一）及び前に述べた大石千引などは、稍注意すべき歌人である。千古と定良は千蔭の歌風を繼承し、千引は寧ろ萬葉に憧憬れた歌人である。又定良は『類題草野集』十二巻の撰者として知られて居る。此の集は長流・契沖以下縣門の千蔭・春海に至るまでの作歌、一萬三千首許りを類題別に撰んだもので、千蔭の友人清原雄風の編纂した『類題怜野集』（十二巻萬葉八代集中の歌を類集したもの）と共に、近世の二大撰集として廣く行はれた。

次に此の時代の鈴屋派には、前記の本居春庭・同大平・平田篤胤等があり、堂上派に賀茂季鷹・富士谷御杖、稍後れて千種有功・橘守部等があり、又小澤蘆庵の系統に屬する人に海野遊翁等がある。此等の中で既に述べた人々を除いて、季鷹・有功・遊翁の三人に就いて略述して置く。

賀茂季鷹

賀茂季鷹（天保十三年歿九十一歳）は京都の上賀茂神社の神官で、本姓山本氏、雲錦亭と號した。初め有栖川宮職仁親王に仕へて和歌を學び、後に千蔭と交つて其の感化を受けた。和歌の外に狂歌にも長じて、當時文名が高かつた。家集に門人の編纂した『雲錦翁家集』四巻がある。

あしびきの山畑そばのくぬぎ原それも春にはもれぬ色かな
片岡のもりのこさめに鳴きすてて神山とほく行くほととぎす
緑そふ籬の竹のしげみより風の見せたる月のすずしさ　（雲錦翁家集）

などは清新な作であつて、堂上派の歌風も時勢の影響を受けて、著しく新味を取入れた事が察せられる。

千種有功

正三位千種有功（嘉永七年歿五十八）は有條の子で、號を千々廼舍と云つた。飛鳥井家の門人であるが、景樹・季鷹・千蔭等と交つて其の影響を受け、新しい歌を詠んだ。家集『千々廼屋集』二巻の外に、久我建通が有功の草稿を寫したといふ『有功卿集』一巻や『和漢草』『日枝の百枝』『ふる鏡』（各一巻）などがある。

寂寞のいはの室戸にたれ見よと高野のおくの花は咲くらむ
夏川のこなぎおもだか花さきて涼しき暮に水鷄なくなり
月清みたがくにぶりか歌ふらむ室津にかけて朱のそほぶね

月清み野べの萩原ふみわけて伏猪の牀もおどろかさばや

漁舟ふなですらしも伊豆の海や富士のたかねに横雲わたる　（千々廼屋集）

此等は題材用語着想などに新しみがある。有功は屢神話傳説を詠み、又萬葉の語句を取入れ、時には右の「漁舟」の歌のやうに、萬葉調をも詠んだのであつて、廣く古典に親しんだ人のやうである。

海野幸典

海野幸典（ゆきのり）（嘉永元年歿六十歳）は號を柳園と云ひ、薙髪して遊翁と云つた。蘆庵のただ言（こと）歌を慕つて、其の門人前場黙軒に學び、平淡な調で自然の感情を歌つた。家集の『柳園家集』二巻を見ると、多くの旋頭歌今様及び長歌を作つてゐるのが目立つ。旋頭歌の中には、

笥飯（けひ）の海にはよしとてやあまの出でけむほの〴〵と霞む月夜に楫の音する

おきつ波立ちはなれてや月の出でぬる濱まつの松の木のまに影のさしくる

明石がた瀬戸むらがりて渡る千鳥の見るまゝに舟よりをちに聲のなりぬる　（柳園家集）

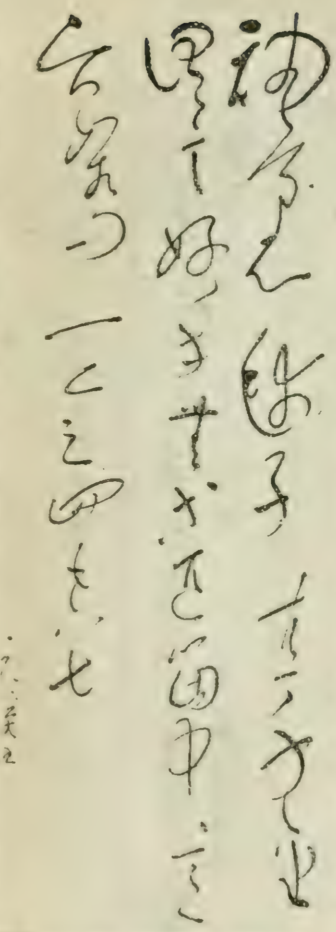
の如き勝れた敍景歌がある。

萬葉派の歌人

僧良寛

文化から天保にかけての頃には、單獨に萬葉調の歌を詠んだ二三の歌人がある。第一に擧ぐべきは僧良寛である。良寛（天保二年寂七十五）は越後國三島郡出雲崎の名主兼神職を勤めてゐた、橘屋次郎左衛門山本泰雄（剃髪して以南といつた）の長子で、俗名を榮藏と云つた。十八歳の時弟由之を相續人として尼瀬町光照寺に入り、出家して良寛と云ひ大愚と號した。出家の後四年を經て安永七年に、備中國玉島の圓通寺の名僧國仙和尚が越後に巡錫した時、始めて接して其の學德を慕ひ、和尚に隨つて玉島に赴いた。良寛は圓

通寺で禪を修し、又西國を行脚して修業を積み、十七年の後寛政七年三十八歲の時に鄕里に歸つた。其の後諸所に庵を結び捨て、文化元年以後は國上山の五合庵（萬元阿闍梨の舊庵）に落著いたが、十二年後の文化十三年（五十九歲）には、薪水の勞に堪へられなくなつて山を下り、山麓の乙子社の傍に草庵を結び、更に晚年には島崎村の能登屋木村元右衞門の別舍に移り、天保元年十一月痢病に罹り、翌年正月六日に示寂した。良寛は天性恬澹寡慾であつたが、禪門の修業を積み、又淨土門の他力の法悅にも浸つて、一點の曇のない純情の人となつた。良寛は又五合庵に隱棲して後は、清貧と孤獨を沁み／＼味はつて、いよいよ自然と人間に對して深い愛著を感ずるやうになつた。彼は小兒の如く淳眞であり、又極めて洒



良寛筆自詠漢詩（永原梓青氏藏）

袖裏毬子
直千金見
言好手無
等匹箇中
意旨如相
問一二三
四五六七

脫な人であつたから、多くの逸話が傳はつて居る。良寛は漢詩を詠じ、和歌に長じ、又書に巧みであり、時に發句狂歌俗謠なども作つて居るが、何れも一切の流派から孤立して、彼獨自の風格を具へて

居る。漢詩は玉島に居る頃から、和歌に先立つて嗜んだらしく、詩風は寒山の風格を傳へてゐる。書に於ては殊に草書に長じ、飄逸の妙を極め、良寛の友人鈴木文臺は懐素の遺風があると言ひ、龜田鵬齋も激賞して止まなかつた。和歌は短歌の外に長歌旋頭歌も詠んで居るが、其の歌風は大體に於て萬葉風である。併し萬葉に囚はれる事なく、自由に自己の生活や感情を歌つて居る。

良寛の歌を輯めた最初の集は、彼の唯一の弟子貞心尼の手記した『蓮の露』である。貞心尼は長岡藩士奥村某の女で、結婚後間もなく夫に先立たれて尼になつた。文政九年良寛が七十歳の時貞心二十九歳始めて師事して以來老病を勞はり、臨終の床にも侍したのであつて、『蓮の露』には二人の贈答を添へ、なほ良寛及び其の一家の人々の傳記を載せて居る。良寛の詩歌は其の後得るに隨つて輯めたものが數種あるが、近年集大成せられたものには相馬御風氏編『良寛和尚詩歌集』や、大島花東氏編『良寛全集』などがある。

草のいほに足さしのべて小山田の山田の蛙聞くがたのしさ
歌やよまむ手鞠やつかむ野にや出でむ心一つを定めかねつつ
霞立つながき春日を子供らと手まりつきつつ今日もくらしつ
里べには笛や太鼓の音すなりみ山はさはに松の音しつ
山かげの岩間をつたふ苔水のかすかに吾は住みわたるかも
飯乞ふと我が來しかども春の野に菫つみつつ時をへにけり　（良寛全集）

此等は生活をありの儘に歌つた作である。

佐渡が島山は霞のまゆ引きて夕日まばゆき春のうな原

むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば

あしびきの片山かげの夕月夜ほのかに見ゆる山梨の花

秋もややうら淋しくぞなりにける小笹に雨のそそぐを聞けば　（同上）

此等は特色ある敍景歌である。なほ人を懷しんだ抒情歌には次の如きものがある。

いづこより夜のいめぢをたどり來しみ山はいまだ雪の深きに

またも來よ柴の庵をいとはずば薄尾花の露をわけわけ

あづさ弓春になりなば草の庵をとく出て來ませ逢ひたきものを　（同上）

良寛の長歌の大部分は抒情的である。傳説歌の「月の兎」は長篇で極めて興味がある。

良寛の如き勝れた歌人ではないが、義人生田萬は其の劇的な閲歴によつて、近來注意せられるやうになつた。萬は諱を國秀と云ひ、上野國館林の藩士で、二十四歳の時江戸に出て篤胤の門人となり、國學を修める傍詩歌を詠んだ。元來敬神尊王の念に富み、且つ熱情と義俠心があつた爲に、極めて波瀾の多い短生涯を送つた。即ち二十七歳の時時弊に對して不平を抱き、藩政改革の意見書を提出して當路の怒に觸れ、遂に郷里を追はれた。其の後江戸や各地を流浪し、天保の飢饉が打續いた頃は、越後の柏崎に住んでゐたが、窮民の慘状に心痛し、偶天保八年に大阪に起つた大鹽平八郎一味の騷動に刺

生田萬

載せられて、遂に同年五月義擧を企て、三十七を一期として自殺した。歌は二十歳頃から詠み、自撰家集『加賀美能牟呂乃於毛迦宜』一卷を遺してゐる。其の歌は大部分中世の歌風に近いもので、さほど特色はないが、萬葉の影響を受けて長篇の長歌や旋頭歌を作り、又時に萬葉調の短歌を詠んでゐる。

こよひしも我が身の秋と見つつ居れば昔ながらの月さしのぼる

須磨のうらに寄せくる潮の浪のほに碎けて群れて千鳥なくなり

人皆のめづるをみなと生るとも猶しかめやも醜のますらを

鶯の聲聞くなべにほととぎすをちかへり鳴く箱根路の山

伊豆の海のありそは浪のはげしきを沖行く船はゆたにかも行く（加賀美能牟呂乃於毛迦宜）

此等は萬葉風の作歌である。彼の傳記と詩歌を見るべき書に、相馬御風氏編著『義人生田萬の生涯と詩歌』がある。

五　嘉永安政期の和歌

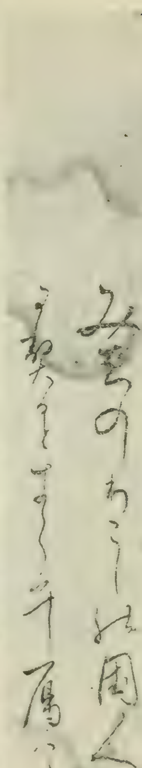
幕末期の和歌

嘉永安政から明治にかけての和歌は、從來の堂上派・鈴屋派・江戸派・桂園派・萬葉派等の諸流派が互に影響し交錯して、一般に著しい發達を遂げた時代である。斯かる傾向は既に文化文政期に發生して居るのであるが、此の時代に入つていよ〳〵著しくなり、流派を超越した獨立派の歌人が次々に輩出して歌壇を代表するに至つた。而して此の時代の和歌の注意すべき特色は、（一）各種各樣の清新な近代

的歌風が並び興つて、和歌史上に燦然たる光輝を放つた事と(二)和歌が全國に普及し、又あらゆる階級に行はれて大衆文藝となり、遠く奈良時代と對比すべき國民和歌の時代を現出した事とである。是より先づ從來の諸流派に屬する著しい歌人に就いて述べ、次いで流派に關係のない勤王家や女流歌人の和歌の概觀を記す事にする。

加納諸平

先づ鈴屋派の最も注意すべき歌人は、天保から安政にかけての加納諸平と、弘化から慶應に至る頃の人橘曙覽とである。諸平（安政四年歿五十二）は遠江國濱名郡白須賀の人夏目甕麿の子である。甕麿は寛政十年に宣長の門に入り、其の歿後には大平に師事した國學者である。諸平は幼少の頃和歌山に赴いて大平の門に入り、其の地の醫師加納伊竹の養嗣子となつて、通稱を杏仙と云ひ、柿園と號した。醫學を修



諸平筆蹟
（福井久藏氏藏）

める傍大平に就いて國書を學び、二十三歳の時に近世の歌人の作を類題別に撰集した『類題鰒玉集』の初篇を刊行した。其の後嘉永七年までに七篇十四卷を上梓したが、八篇は脱稿してゐたけれども遂に刊行されなかつた。(此の撰集は同門の長澤伴雄の撰んだ『類題鴨川集』八卷（近世の類題歌集である）と共に廣く行はれた)其の後天保二年二十六歳の時藩命を帶びて『紀伊國續風土記』の撰述に從事し、ついで三十歳の時更に『紀伊國名所圖會』を撰ぶべき命を受け、晩年の安政三年には彼の建議によつて設けられた國學

所の教授となつた。家集には『柿園詠草』二卷嘉永六年刊行と『柿園詠草拾遺』一卷明治十八年刊がある。是まで鈴屋派には餘り勝れた歌人が現れなかつたが、諸平の歌は群を抜いてゐる。其の歌風は大體から言へば、新古今乃至玉葉風雅に近いものであるが、萬葉の影響も見え、此等の何れにも囚はれずして、自由に獨自の詩境を詠んで居る。

負ひかへるえびらの露に雨見えて夕かげくらしこやのたか垣
吉水の花のしづくにはれ〳〵てはてはしらめる月の影かな
棹ふれし筏はひと瀨すぎながらなほかげなびく山ぶきの花
月にこぐ海士の舟歌こゑふけて秋風たかし伊勢のはま荻
沖つ洲に夕ゐる鷗むれ立ちて波のほあかし月や出づらむ
天草や天よりをちのから山も雲になびきて日はくれにけり　（柿園詠草）

此等が諸平の佳作である。『紀伊國續風土記』を撰述する爲に三度熊野を巡つた時、其の地の風物を詠んだ作は家集中の異彩である。左に其の中の數首を抄出して見る。

山暖がけぶりふきけむ跡ならし椿のまき葉霜にこほれり
みづちすむ淵を千尋の底に見て太刀の緒かため行く山路かな
五百重波たてりと見ゆるむら山のはての綠や海路なるらむ
沖さけて浮ぶ鳥船時のまにかけりも行くかいさな見ゆらし

壁たてるいはほとほりて天地にとゞろきわたる瀧の音かな（同上）

諸平は又近世の長歌作家の隨一と言はれて居る。其の作歌は家集（拾遺を含めて）に五十三首ある。歌風は萬葉を標準とし巧みに古語を用ひて、豪壯雄勁な古調を詠んでゐるが、中には中世風の趣味を含むものもある。「登巳嶽時作歌」は二百句に近い堂々たる長篇であるが稍冗長の嫌がある。寧ろ蒙古襲來を詠んだ「神風歌」の如きものが勝れてゐる。

諸平と前後して安政年間に歿した鈴屋派の歌人には、足代弘訓・石川依平・和田巖足等がある。弘訓は既に述べたやうに（九三八頁參照）有名な國學者であるが、歌にも長じてゐた。家集に『海人の囀』五卷の外に『足代弘訓翁家集』一卷其の他がある。長歌や今樣をも詠んでゐる。其の歌風は、

足代弘訓

夕ぐれに降る薄雪の心ちして朧月夜に散るさくらかな

明けぬるか千木の片そぎ見えそめて杉の梢に烏なくなり

のやうに平明で優雅である。石川依平（安政六年歿六十九）も亦略同じ歌風を詠んだ人である。依平は遠江掛川の人で、號を柳園又は橿が下と云つた。初め眞淵門下の栗田土滿に學び、次いで宣長の門人となつて國學を修め和歌を嗜んだ。其の歌風は宣長に似て典雅纖細な歌が多い。家集に『柳園詠草』二卷がある。其の下卷には萬葉假名で書いた萬葉調の長歌七首を收めてゐる。

石川依平

隅田川わたりせ遠くかすむなりきのふは見えしをつくばの山

處女等がつみしうはぎは時過ぎて小草花さく春日野のはら

ゆふだちは雲ものこらぬ山松のこずゑにしきる蟬の聲かな
もののふのいのちを露とあらそひし荒野のすゑに秋風ぞふく　（榊園詠草）

此等が代表的な作である。弘訓・依平の二人の歌風にはさほど特色がないが、次の巖足は個性の明かな作を詠んでゐる。

和田巖足

和田巖足（安政六年歿七十三）は熊本の人で、長瀨眞幸の門に入つて國學と和歌を學んだ。不幸にして寃罪を蒙り、不遇な半生を送つたが、豪放磊落な人であつて、和歌に心を慰めてゐた。文武兩道に達した人で、酒を嗜み時に飄逸な歌を詠んだが、又國事を憂へて氣概のある歌を詠んだ。家集の『和田巖足家集』一巻は短歌と長歌の二部に分つてゐる。歌風は雄渾な萬葉調を主としてゐるが、中古の歌風も混つて居る。

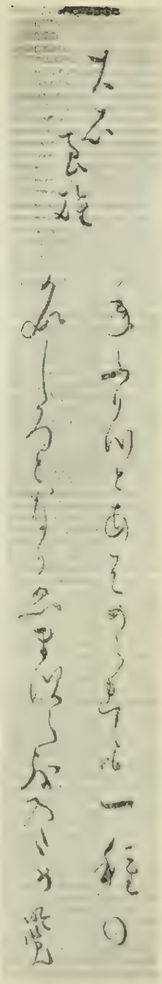
荒駒のくゐはららかすあがきより村消えかかる春の野の雪
酒のまむ友どちもがもしく〳〵に雪の降る夜は寂しきものを
荒野なる尾花吹き越す秋風にししまつ征矢もそよとこそなれ
ますらをの心たらひに花は見む醜（しこ）の御楯はいのちはかなし
虎は走せみづちは翔る天雲の絶間さやけき秋の夜の月　（和田巖足家集）

此等が巖足の特色を發揮した作である。

橘曙覽

巖足よりも更に注意すべき歌人は、流派を離れて獨自の歌風を創めた橘曙覽（あけみ）である。曙覽（慶應四年歿五十七）は越前福井の紙商正玄五郎右衛門の長子である。正玄家は井手左大臣橘諸兄から出て居るので、一に

井手姓を名乘つた。幼名五三郎、諱を茂時、後に尙事と改め、又嘉永七年（四十三歲）大病の癒えた時橘姓に因んで曙覽（赤實の意）と改めた。二歲で母に死別し、十五歲で父を喪つたので、人生を果敢んで大道村妙泰寺の住職明導に就いて佛經を學んでゐたが、やがて明導の感化を受けて詩歌に志すやうになつた。それより京都や江戶に暫時遊學した後、かねて宣長の國學を敬慕してゐたので、三十三歲の時飛驒の高山に赴き、田中大秀の門人となつて四年間國學の敎授を受けた。曙覽は淡泊無慾の人であり、而も家庭的に苦勞が多かつたので、三十五歲の時家業を異母弟に讓り、赤貧に甘んじて生涯隱者の生活を營んだ。初め城南足羽山に隱棲した時、其の居を黃金舍（こがねのや）と云ひ、三年の後城西三橋に移つて藁屋と云つ



曙覽筆蹟
（芳野幹一氏藏）

た。（其の他志濃夫廼舍。松戶などの別號がある）曙覽は敬神尊王の精神に富んだ高潔の士であり、而も古學に通じ和歌に秀でてゐたので、其の名聲を傳聞して敎を請ふ者が極めて多かつた。元治二年に越前太守松平慶永（春嶽）が、鷹狩にことよせて曙覽の草廬（藁屋）を訪れた事は、彼の閱歷を飾るべき光榮である。藁屋を改めて志濃夫廼舍（忍ぶの屋）と云つたのは、其の時春嶽侯が橘に因んで命名したものである。家集の『志濃夫廼舍歌集』五卷は、曙覽が自ら撰んだ草稿を其の儘板下にして、明治十一年に刊行

曙覽の歌風

せられた。なほ全集には曙覽の息井手今滋氏の編纂した『橘曙覽全集』一卷がある。

曙覽の歌風は萬葉に入つて萬葉を出たのであつて、如何なる素材をも捉へ、平語俗言を用ひて自由に歌つた。ありの儘を率直に歌つた客觀的敍景も勝れて居るが、純眞な心に浮んで來た人事を詠んだものには、他の歌人の企て及ばぬ妙味がある。其の他敬神勤王の思想を歌つたものの多い事、詠史畫讃の多い事、及び屢連作を試みて居る事なども彼の特色である。

すくすくと生ひたつ麥に腹すりて燕飛びくる春の山畑
夕顔の花しらじらと咲きめぐる賤が伏屋に馬洗ひ居り
稻子丸うるさく出でて飛ぶ秋のひよりよろこび人豆を打つ
白雲のゆきかひのみを見送りて今日もさしけり蓬生の門
蟻と蟻うなづきあひて何かことありげにはしる西へ東へ　（志濃夫廼舍歌集）

此等は明治の新派の魁とも見るべき作風である。尊王愛國の精神の發露した作は、赤心報國七首を始めとして家集中隨所に散見する。

正宗の太刀の刄よりも國のためするどき筆の鋒揮ひみむ
國を思ひねられざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな　（同上）

是は赤心報國中の二首である。堀名銀山を歌つた八首は連作として勝れて居り、次に抄出する獨樂吟中の作には、清貧に甘んじた高邁脫俗な人としての面目が躍動して居る。

たのしみはめづらしき書人にかり始め一ひらひろげたるとき
たのしみは稀に魚煮て兒等皆がうましうましといひて食ふ時
たのしみは小豆の飯の冷えたるを茶漬てふものになして食ふ時
たのしみはほしかりし物錢ぶくろうちかたぶけて買ひ得たる時（同上）

かくの如く如何なる題材をも捉へて無雑作に詠み、而も個性を鮮明に現してゐるのは曙覽の特色であつて、後に述べる大隈言道の歌風と共に、江戸末期の歌壇に於ける二大異彩である。

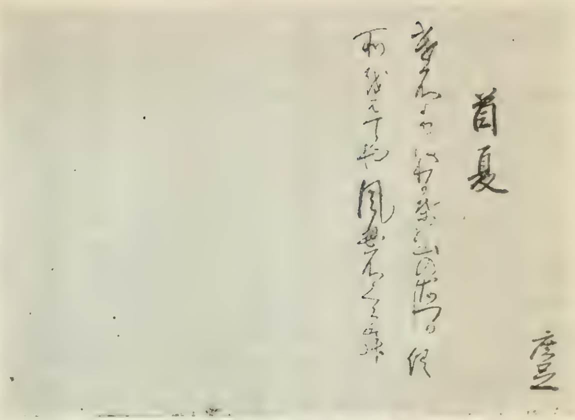
幕末の江戸派　中島廣足

次に江戸派には、天保から安政にかけての歌人に中島廣足があり、明治になつて歿した歌人に井上文雄がある。中島廣足（元治元年歿七十三）は和田嚴足と同じく熊本の人で、肥後藩士中島五郎平（祿二百石）の子である。十一歳の時父が歿して家を嗣いだが、二十五歳にして病の爲に隱居し、是より國學と和歌に專念し、晩年の文久元年には藩主に召されて國學の師範を命ぜられた。廣足は長瀨眞幸の門に入つて國學を修め、千蔭の門人一柳千古に就いて和歌を學び、又獨學によつて語學に通じてゐた。號を橿園又は蛭麿と云つた。其の著述には語學書の『詞の玉緒補遺』六卷『詞八衢補遺』二卷、歌論書の『橿園隨筆』二卷其の他考證や隨筆が數種ある。なほ『増補雅言集覽』（洋三冊明治三十六年刊）の増補は廣足の手に成つたものである。廣足は和歌竝に文章に秀でてゐた。家集の『橿園集』は『橿園歌集』『橿園長歌集』『橿園文集』（各三卷）から成つて居る。『橿園歌集』（天保十年刊行）は自撰短歌集であつて、其の後の作歌は別に『しのすだれ』（七卷三冊）に收められて居る。最近彌富破摩雄横山重兩氏校訂の『中島廣足全集』二卷が刊行せられた。廣足の歌は

平淡流麗で氣品が具はつてゐた。

朝日さす松のむらだちむら〳〵に霞いさよふ春の山の端
夕風にみだるる見れば草むらの露はみながら螢なりけり
風清き空にとびかふかはほりの數さへ見ゆる夏の夜の月
しめりゆく土のかをりも涼しげにひと村そそぐ夕立の雨
入日さすとよはた雲のいろくれてうす霧なびく秋の海原
老人のひなたほこりの程もなく又かきくらし降る時雨かな
漕ぎ捨ててねぶる浦わのゆふしほに蘆の一葉の夢ぞ流るる

（橿園歌集。しのすだれ）



中島廣足堅詠草（福井久藏氏藏）

此等によつて其の歌風を窺ふ事が出來る。廣足は三十歲の頃長崎に移り、三十餘年を其の地で過したのであつて、其の頃詠んだ長歌には、唐人や南蠻人に關する新奇な題材を詠んでゐる。「詠火食鳥歌」「觀虎作歌」「觀清人戲場作歌」「詠紅毛舶入貢歌」等がそれである。此等は長崎情調を詠んだ歌の嚆矢であらう。

井上文雄

廣足よりも更に注意すべき歌人は井上文雄（明治四年歿七十二）である。江戸に生れ、醫を學んで田安侯の侍醫を勤めてゐたが、後に辭して專ら歌人として立ち、家を歌堂又は柯堂と號した。初め岸本由豆流に學

び、後に一柳千古に師事して國學に通じ、歌文に秀で、江戸派の最後を飾る歌人と言はれて居る。其の著書には『冠註大和物語』三卷『大井河行幸和歌考證』一卷などがあり、歌論に『伊勢の家づと』三卷『道のさきはひ』一卷、家集に『調鶴集』三卷同續篇一卷があり、其の他隨筆文集などがある。文雄は萬葉派や桂園派を攻撃して、用語格調の自由を唱へ、內容に雅俗の區別を認めず、專ら「性情の誠」即ち個性を尊重したのである。『伊勢の家づと』『道のさきはひ』等に見える かくて彼の詠歌には王朝趣味のものがあると共に、田園趣味を歌つて居り、題材用語は極めて自由であり、格調は感情に應じて變化してゐる。彼は元來勤王家であるが、六十九歲の時幕府の末路に同情を寄せた歌を詠んで、明治政府の忌諱に觸れ牢獄に投せられた。これは熱情家であり任俠の士である事を示すものであるが、其の反面には又洒脫な所があつた。文雄の歌に對する見解並に性格は右の如くであるから、歌風も亦一樣でない。

片をかの道の小寺のつつじ垣ほろ／＼散りて人かげもなし
旅人の朝たつとよみ靜まりてうまやの火影霧にのこりぬ
かしこにも里はありけり夕日さす竹よりおくに犬の聲する
秋の日もななめになりぬ飴賣ると笛吹くをぢが今日も來にけり
山寺の庭のよろの葉さらさらと秋風そよぐゆふべさびしも　（調鶴集）

此等は何れも清新な敍景歌である。田園の景趣を多く歌つてゐるのは彼の著しい特色である。

おもと人半蔀おろす袖口のあらはなるまで吹く野分かな

かづけ物ささげて行くは雪の山つくりて歸る舍人なるらむ　（同前）

のやうな王朝趣味も亦好んで歌つてゐる。又輕妙洒脫な作には、

賤の女は晝寢してけり水あまる庭のつつるに熱瓜ひやして

さしのぼる麓の里の小夜きぬた月うち出づる心地こそすれ　（同前）

又性格の反映と見るべき作には、

世の中は一人のめしひ杖つきて數多のめしひ引きありきけり

世の中のうゐさきままに酒のみてゑひてねぶりてまた起きて飮む　（同前）

の如きがある。要するに文雄は江戸派の流を汲んだ人ではあるが、晚年には流派から超脫して、自由の天地に個性の鮮明な歌を詠んだのであつて、前に述べた曙覽や後に記す安藤野雁・大隈言道などと共に、明治の新派の先驅として注意すべき歌人である。

幕末の桂園派

次に桂園派の歌人には八田知紀・渡忠秋、及び桂園の三女と呼ばれた柳原安子・秋園古香・高畠式部等があり、又前に記した熊谷直好も文久二年まで生存してゐた。此等の中で直好に次ぐ歌人は知紀である。知紀（明治六年歿七十五）は鹿兒島の藩士で、號を桃園と云つた。文政八年三十歲の時京都の藩邸藏役を命じられて以來京都に住んだ。和歌は幼時から嗜み、天保元年景樹の晚年に其の門人となり、明治維新後は宮內省に召されて、歌道御用係を命じられた。御歌所長高崎正風は知紀の高足である。歌書紀行雜筆など多くの著作がある。家集の『しのぶ草』四卷には長歌及び文章が添へてある。知紀の歌風は純然

たる古今調で、桂園派の弊として平弱に陥つて居るが、詠歌の伎倆は勝れてゐた。

吉野山かすみの奥は知らねども見ゆるかぎりは櫻なりけり

いさり火の影しらみ行く浪の上にあらはれわたる春霞かな

夕立の晴るるを待ちて行く道の草葉にかかる月の影かな

大比叡の峯に夕ゐる白雲のさびしき秋になりにけるかな（しのぶ草）

此等が知紀の得意の敍景歌である。渡忠秋及びそれ以下の女流歌人は、何れも桂園派の平明流麗な調を詠んだのであつて、とり立てて言ふべき事もない。

幕末の萬葉派

是までに述べたのは、流派若しくは學統に關係のある歌人であるが、此の外に殆ど孤立的に特色ある歌を詠んだ人々がある。先づ萬葉調の歌人には土佐に鹿持雅澄がある。土佐に萬葉學を移植したのは、眞淵の門人谷眞潮（寛政九年歿七十一）であつて、其の門から今村樂・中山巖水・宮地仲枝等が現れて、萬葉研究に貢獻する所があつた。又雅澄より少し先輩に大平の門に學んだ大倉鷲夫（嘉永三年歿七十一）があつて、

大倉鷲夫

大海は四方にあれども燒太刀の土佐の荒海の月にしかめや

安見しし我が大君の敷きませる御國ゆたかに春は來にけり

朝日子のとよさかのぼる土佐の海の青海原は見れどあかぬかも（鷲夫歌集）

鹿持雅澄

のやうな萬葉調を詠んだ。雅澄（安政五年歿六十八）は土佐藩の徒士鹿持惟則の長子で、土佐郡福井村に生れ、古義軒又は山齋醜翁と號した。其の先祖は飛鳥井雅康の孫雅量から出てゐる。二十歳の時藩士中村某に

就いて漢籍を學び、又宮地仲枝の門に入つて國學を修め、其の後は藩老福岡氏の藏書を借覽して、殆ど獨學を以て古典を研究した。其の名聲を傳へ聞いて門人となるものが極めて多かつた。後には藩黌の師範を命ぜられた。敬神尊王の念の篤い學者であつて、土佐に於ける勤王家を薫陶した功勞者である。彼は國學に志して後間もなく、契沖の『萬葉代匠記』に刺戟せられて、萬葉の研究を畢生の事業とし、遂に大部の『萬葉集古義』（宮内省刊本百四十一冊）を完成した。此の書は文政十年三十七歳の時には、既に本文の解釋を一通り終り、此の年から改寫を始め、天保十一年五十歳の頃までには、略完成したのであるが、其の後も改訂を續け、此の間に種々の附卷も脱稿したのであつて、全く生涯の心血を灑いだ著述である。此の書は契沖以來の萬葉研究を綜合し、且つ創見に富んだ一大研究であつて、國學史上宣長の『古事記傳』と比肩すべきものである。明治十二年に御内帑金を以て始めて開版せしめられた事は、著者歿後の一大光榮である。宮内省御藏版本は本文二十卷註釋九十五冊、及び附卷の『總論』『枕詞解』『人物傳』『品物解』『名所考』『玉蜻考』等二十六卷の外に、『古言譯通』五卷、『鍼嚢（はりぶくろ）』（一名歌詞三格例）二卷、『雅言成法』二卷以下數種の語學研究書や、『永言格』三卷の如き歌學書をも含んで居る。雅澄の著書には此の外に『續日本紀』『日本後紀』以下十六書の歌謠を註解した『南京遺響』三卷や、『土佐日記地理辨』一卷等があり、なほ稿本の儘で傳はつてゐるものが數十冊ある。雅澄は萬葉集を崇拜した人であるから其の歌は純萬葉調である。相當多くの歌を詠んでゐるが、類似の想を詠んだものが多い。併し古語古調を巧みに用ひて、敍景抒情共に自由に歌つて居る。長歌は殊に巧みであつて、諸平に次ぐべき近世

長歌の作家と言ってよい。家集の『山齋集』（明治四十一年に山本修三氏によって刊行せられた）は短歌三巻長歌二巻文章二巻より成り、歌の大部分は萬葉假名で書いてある。

吾妹子し待つとしいはば岩根ふみ百重の山も百夜越え來む
月清み玉の浦回を漕ぎ來れば離れ小島になみのよる見ゆ
月讀の光を清みわたつみの手纒の玉のみだれあへる見ゆ
照る月は照らずともよし照れれども見すべき人のありといはなくに
百船の楫の音やみて月夜よき三犬女のうらはたづのみぞ鳴く
神風をなごめ奉りてみかどべに吉くしてまゐこ亞米利加奴
朝日さす吾が山の上に霞立ち來鳴くうぐひす聞かくしよしも
神御典讀みと讀むまに思はぬに千鳥しば鳴き小夜明けむとす　（山齋集）

右は作歌年代順に抄出したのである。家集は年代順に序列されてゐるから、情熱的な抒情歌を多く詠んだ壯年期から、平淡穩雅な歌の多い晩年に至るまでの推移を見るのに便利である。

萬葉派の歌人として更に注意すべきは岡山の平賀元義である。元義（慶應元年沒六十六）は池田侯の中老池田勘解由の家來平賀新兵衞長治（長春とも）の子で、壯年の頃、時祖母の實家神津家の氏を冒して、神津衞吉直元（一に義元）と稱したが、三十三歳の時故あつて脫藩して平賀元義と云つた。浪人して後は備前備中美作伯耆の間を往來して、郷土誌や神社の考證に熱中し、又古學を講じてゐた。學統は明かでないが、

平賀元義

古學に通じ敬神尊王の念に篤く、地方的には相當に知られてゐた。酒色を好み潔癖であつて、奇行に富んでゐた事が傳はつて居る。詠歌中に屢々「妹」「吾妹子」を詠んだので、吾妹子先生の綽名を得たと云ふ。元義の事が廣く世に紹介せられたのは明治三十年頃からであつて、『平賀元義集』二卷は岡山の人々によつて漸次集成せられたもので、もと纏まつた家集はなかつた。（元義の紹介者羽生永明氏の『註解平賀元義歌集』がある）其の歌風は純萬葉調であつて雄々しい力があり、感情を率直大膽に歌つてゐるのが特色である。なほ細かな點に就いて言へば、（イ）枕詞や郷土の地名の多い事、（ロ）同語の反復の多い事、（ハ）屢神話や史上の英雄を題材にしてゐる事、（ニ）「妹」「吾妹子」と共に「益荒雄」といふ語を好んで用ひてゐる事、（ホ）古語古調によつて近代的歌風をも詠んでゐる事などが特色である。元義は長歌旋頭歌も詠んでゐる。長歌も調が高く勝れてゐるが、見るべきものは短歌である。

大君の加佐米の山のつむじ風ますらたけをが笠ふき放つ
大井川あさかぜ寒み大丈夫と思ひてありし吾ぞはなひる
天地の神にいのりてますらをを君に必ず生ませざらめや
妹が家の板戸押し開きわが入れば太刀の手上に花散りかかる
月よみの光さやけしほことりて男さびする丈夫のとも　（平賀元義集）

此等は彼の特色を發揮した作である。なほ勝れた敍景歌には次の如きものがある。

戸を開けて見れどもあかずよべの雨にぬれたる山の山櫻花

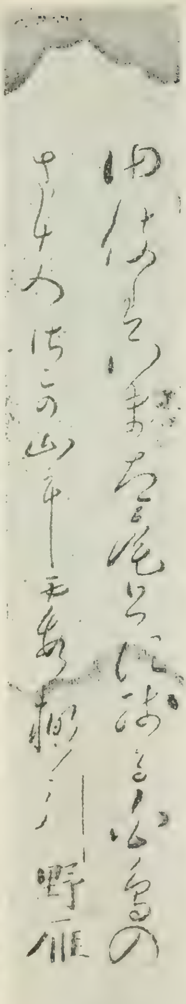
雨晴れて妹が園生を見にくればさくらも桃も今さかりなり
しらいとの栗子の村の棟かげ夕風すずしやすみて行かな
おほきみの三門國守萬成坂月おもしろくわれひとり行く
山はみな霧にかくれて霧の上に月ばかりこそ澄みて見えけれ
奈養の嶺を朝日に見れば降りしける雪の上より霧たち昇る　（同上）

右に擧げた作歌中の地名はすべて郷土のものである。

獨創的歌風 安藤野雁

幕末期に流派に關係のない獨得の歌を詠んで、曙覽・元義等と同じく明治になつて始めて世の注意を惹いた歌人に、安藤野雁と大隅言道の二人がある。野雁（慶應三年歿五十三）は岩代國桑折の代官所の地方役人北村重有の子で、通稱を謙次と云ひ、後に刀禰と改めた。四歳の時父に死別して代官寺西氏の家に養はれ、十六歳で半田銀山の役人安藤政直の養子となつた。其の後間もなく、桑折に近い瀬上村の舊家内池永年（大平門下）に學び、更に永年の紹介によつて大平の門人となり、大平の歿後は村田春門の門に入つた。（何れも文書によつて教を受けた）天保八年二十三歳の時代官寺西元榮が、九州日田の郡代に轉任するに當つて、郡代手附となつてかの地に下り、五年の後江戸に歸つた。江戸に歸つた後の生活は詳かでないが、番町の塙の塾に寄寓して、和漢書を耽讀した事が傳はつてゐる。其の後は關東諸國を流浪してゐたが、晩年には武藏大里郡冑山の富豪根岸家の食客となり、慶應三年三月に熊谷で病歿した。（以上淺瀬金造氏編「安藤野雁集」附錄「安藤野雁に就いて」に據る。）野雁は金錢に無頓著であり、服裝を顧みない癖があつて、常に弊衣を纏ひ荒繩の帶を締め、雨天

にも草履を穿いて平氣で歩いてゐたと云ふ。又最も酒を嗜んで、醉へば野山に臥しなどして、種々の逸話を遺してゐる。野雁は幼少の時から和歌を詠んだが、多年萬葉研究に從事して「萬葉集新考」稿本三十五卷の中十卷現存「大伴家持卿傳」稿本一卷等を述作した。從つて彼の歌風は萬葉の影響を受けて居る。家集として從來世に知られてゐるのは、元治元年五十歳の時に成つた自撰家集の「野雁集」一卷續日本歌學全書に收むであつて、長歌短歌合せて百八十餘首を收め、卷末に「古へぶり今ぶりすべては二百首なり」と記してある。「古へぶり」は萬葉假名で書いた長歌及び反歌十六首を指すのであり、「今ぶり」はそれ以外の平假名で書いた近代的歌風の短歌を指すのである。「野雁集」に收めたものは、多くの歌の中の一部であつて、



野雁筆蹟
（渡邊金造氏藏）

これ以外の作歌並に文章は、諸家所藏の稿本色紙短冊などによつて傳はつてゐる。渡邊金造氏編纂の『安藤野雁集』一卷昭和九年出版には、『野雁集』補遺を附すの外に、三十八首の長歌集『道乃菅能根』、短文二十二篇を含む『刀禰記』、及び慶應二年北武藏に起つた騷動を記した『冑山防戰記』何れも未刊本が收めてある。野雁の長歌には長短樣々あつて、すべて萬葉調であるが、題材思想は清新である。殊に『道乃菅能根』には遊女・讃・聾・憎・蚊歌・圍碁・堅魚・幽靈の如き新奇な題材を取扱つて居る。長歌にも勝れた作品があるが、殊

に誦すべきは短歌である。野雁の短歌は萬葉の精神を體得して、平淡な調によつて獨得の心境を率直に大膽に歌つて居るのであつて、其の歌風は曙覽・言道等と共に近代的歌風の魁となつてゐる。

いづこかはさしてわが宿ゆきまじり野にも山にも花のへに寢む

小鳥なくしのの垣根の朝つゆに一枝さけるやまぶきのはな

さびしさは水底までにとほりけり夕日のすめる秋のすな川

水あせて石あらはなる山川に夕日ながるる秋のいろかな　（野雁集）

此等は野雁の特色ある敍景歌である。又抒情歌には、

別れなば君はあづまへ歸るべしゆくへ知らぬはわが身なりけり

消え殘る身の油火をかかげても讀ままほしかる書にもあるかな　（同上）

の如き作がある。野雁は前にも述べたやうに、奇行逸事の多い人であつたが、其の性格の一面は自ら歌にも現れて、次のやうな飄逸奇矯な作がある。

軒端よりふりさけ見れば富士のねはあまり俄かに立てりけるかな

居ながらに見らるるものをことさらに幾度立ちて山を見るらむ

秋ふくる庵のあまりさびしきに盜人だにも入りて來ななむ　（同上）

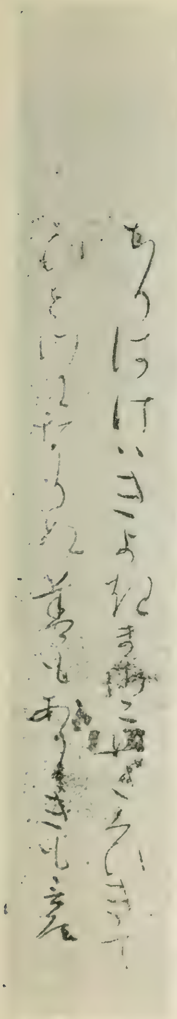
大隈言道

次に大隈言道（慶應四年歿七十一）は福岡の商家大隈茂助言朝の第四子で萍堂と號した。其の先祖は舍人親王四代の後裔少納言通雄から出てゐる。言道は若い頃藩士二川相近に就いて和歌と書道を學び、天保三年

三十五歳の頃に至つて、清新な一家の歌風を創めた。(此の年野村望東が其の夫貞貫と共に入門した)かくて天保七年に家を弟に譲り、妻子と共に市外今泉のさゝのや(篠舍)に隱棲して門人に教へ、天保十年四十二歳の時には、豐後日田に廣瀨淡窓を訪れて暫く其の門に遊んだ。言道が天保三年以來唱道した歌風は、傳統から離脱した獨創的なものであつて、其の主張は中年期に書いた『ひとりごち』一卷、及び其の原稿とも云ふべき『こぞのちり』二卷に見えて居る。『ひとりごち』の卷頭に、傳統的な歌を罵つて木偶歌と云ひ、天保の民は天保の歌を詠むべきであると叫んだ後、作歌の心得を說いて、

> 善人たらんと欲せば、先づ心よりはじむべし。善き歌よまんと欲せば、先づ心よりはじむべし。心を種として吾が歌を詠ずるに、俚心俗意もとよりにて、いまだ風姿髣髴たる事を不レ得、年を經月にわたりて漸にすこしづつ古人に近づく。全く不レ似を以て古人にちかしとす。古人によく似たるを以て古人に遠しとす。古歌を學ぶ道の、いと〳〵はるかなるを知るべし。

と言つて居る。言道は斯かる主義のもとに新歌風を唱へ、其の門に集る者も相當にあつたが、更に廣く之を弘める爲に、安政四年六十歳の時大阪に出た。其の後文久二年(六十六歳)に精選歌を集めて『草徑集』


言道筆蹟
(竹內篁園氏藏)

三卷を上梓し、在住十年後の慶應三年に病の爲に歸鄕し、翌年七月に他界した。言道は中島廣足・萩原廣道・八田知紀等と交り、又其の門人となつて歌を學ぶ者もかなり多かつたが、歿後一時全く忘れられてゐた。其の眞價が一般に認められたのは、明治三十二年に佐佐木信綱博士が『續日本歌學全書』に、『草徑集』を收めて刊行せられて以來の事である。言道は極めて多作家であつて、其の歌集には此の外に、中年期までの歌を集めた『南樓集』(後に散逸)『ささのや集』三卷『晃居集』(今傳らず)『戊午集』二卷『今橋集』二卷があり、又『草徑集』の後集に『草徑集二篇』三卷『續草徑集』一卷がある。佐佐木信綱・梅野滿雄兩氏共編の『大隈言道』(一卷大正六年刊行)には、現存せる言道の諸歌集から選出し、之に前記の歌論を加へ、なほ傳記を附してある。言道の歌風の特徴としては題材が廣汎である事、用語格調が自由である事、着想觀察が斬新奇拔であり且つ微細である事、表現が平淡にして新味のある事、などを擧げることが出來る。

かへる雁歸りて春もさびしきに童の拾ふ小田のこぼれ羽
そなたには窓さへなくて山里の家のそともの山吹の花
松杉の影ことごとにうつりたる庭めづらしき宿の月かな
秋風に門田のいなご吹かれ來てをりをりあたる窓の音かな
夕づく日入りての後の松の間のくらきに見ゆる水の一筋
見渡せばさもながながし平戸より對馬の沖にわたす白雲　（草徑集）

此等は特色ある敍景である。言道の作歌には自然や人事を忠實に描寫したものが多く、殊に草木禽獸

蟲魚などの特質を巧みに捉へ、又好んで小兒の姿態言動を詠んで居る。

ささだちて山路過ぎ行く牛の親に子牛より來る村時雨かな
浦千鳥一つびとつに濱崎の松の間すぎてまたも群れつつ
潮先に行くうろくづの童どちをどりをどりてさもや嬉しき
いくばくの劣りまさりも見えぬ子の負へる負はるる哀なる哉（同上）

此等は動物や幼兒に對する微妙な觀察を見るべき例である。要するに言道は、前に述べた曙覽と閲歴を同じくし、新風を起して生前に廣く認められなかつた點も相似て居る。歌風に於ては曙覽が萬葉に入つて萬葉を出たのに對して、言道は寧ろ『古今集』に入つて古今風から離脱した點に相違があるが、共に新境地を開いて、近世和歌史の最後に異彩を添へた歌人である。

幕末の女流歌人

幕末期には多くの女流歌人があつた。勤王の志の篤い女性で歌に長じた村岡局（津崎矩子）・大橋卷子・若江薫子・松尾多勢・黑澤登岐等は世に知られてゐるが、歌人として最も名高いのは、野村望東尼と大田垣蓮月尼の二人である。

野村望東尼

望東尼（慶應三年歿六十二）は福岡藩士浦野勝幸（祿三百石）の三女で、名をもとと云つた。十七歳で同藩士郡三兵衞利貫に嫁したが、間もなく離縁になり、二十四歳の時同藩士野村新三郎貞貫の後妻に迎へられた。天保三年二十七歳で夫と共に大隈言道の門に入り、（貞貫の先妻が遺した三人の男子の中二男は、言道の師二川相近の養嗣子となつた）弘化二年に夫婦共に城南平尾村向陵の山莊に隱栖し、風月を友として睦じく暮してゐたが、安政六年五十四歳の時夫に先立たれ、悲歎の餘り尼

になつて望東（は名もとに因る、）と稱した。文久元年十一月から翌年正月にかけて京阪の旅に出た時、大阪に言道を訪れ、京都では蓮月尼にも會つたが、此の頃時局は益多端となり、尼も痛く國事を憂ふるやうになつた。是より平尾山の庵は志士の會合所と變り、平野國臣・高杉晋作・僧月照等も此處に潛伏した事があり、望東尼は又當時大宰府に幽閉せられてゐた三條實美に謁して、女ながら國事に奔走したが、やがて佐幕黨の爲に捕へられ、慶應元年十月に玄海灘の孤島姫島に流された。流謫二年の後高杉晋作の取計ひにより、獄を脱出して山口に逃れ、更に三田尻に移つたが、慶應三年十一月に享年六十二で其の地に病歿した。望東尼の文久元年以後に於ける生活は「上京日記」「姫島日記」「防州日記」などに詳かである。又家集には山荘の地名によつて名づけられた「向陵集（かうりようしふ）」一卷がある。「向陵集」には二十七歳頃から晩年に至るまでの作品が、年代順に收められて居り、其の詞書には勤王志士との交渉を語るものが多い。望東尼の歌は言道の感化を受けて、技巧を弄せず平淡な調によつて、清新な想を自由に詠んで居る。殊に敍景歌には觀察の精緻、印象の鮮明、表現の輕妙などの長所を發揮して居る。

誰が乘れる舟と知らねどちとせ川わが心さへ浮べてぞ行く

人影を雲間に遠く見出でつつわが訪はるるに定めてぞ待つ

たち出でて見る人もなき月かげをよきて過ぎゆく冬の夜の雲

窓近きまがきの椿花ごとにあなた向きても咲きいづるかな

朝月夜かけしらけたる篠原の霜のうちなるうぐひすのこゑ

川の瀨に洗ふかぶらの流れ菜を追ひ爭ひて行くかもめかな　（向陵集）

望東尼は敍景よりも寧ろ抒情を得意とした。

君と我いづれかまされる無きを思ひ又はあるにも逢はで忍ぶは　（子をうしなひける人に）

歸り來て君がぬぎます衣手に夏の夜ふかき露を知るかな

ともすれば君がみけしきそこなひて叱られし世ぞ今は戀しき　（貞貫の一周忌に）

遠ざかる影を見おくる小山田の稻葉のつゆも淚がほなる　（平野國臣を見送る時の歌）（同上）

而して晚年の詠歌には女丈夫の面目を發揮した次のやうな作がある。

數ならぬこの身は苦にうもれてもやまと心の種はくたさじ

こと國の人の姿をうつ筒はやまとだましひいかにこもれる

くれ竹のうきふししげき世の中にこの君と思ふ人なかりけり

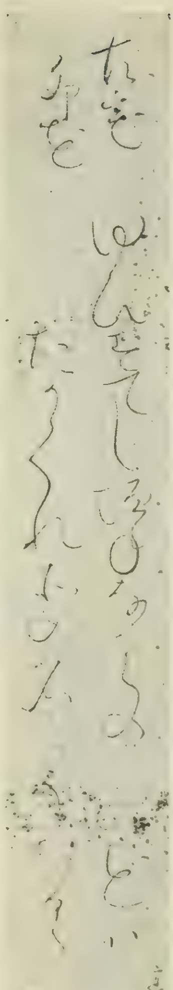
阿蘇の山もゆる思ひにとこ岩もくだけて輕くとびまろぶかな　（同上）

此等は益荒雄風とも言ふべき歌である。此の外に「姬島日記」の中にも懦夫を起たしめるやうな作歌がある。

大田垣蓮月

次に大田垣蓮月（明治八年歿八十五）は京都の知恩院の寺侍大田垣光古（みつひさ）の女で、名を誠（のぶ）と云つた。光古に男の子が無かつたので、彥根の藩士古川重二郎を養つて誠の壻とした。誠は早く母を喪ひ子は夭折し、夫も三十歲の時世を去つたので、父と共に剃髮して蓮月と稱した。四十歲の頃父に死別して後岡崎に住み、

其の後轉々と住まひをかへて、晩年には西賀茂神光院の御茶所に隱栖して、高く清き生涯を終つた。蓮月は容姿端麗で、和歌書畫に長じ武技にも秀でてゐたが、出家の後は手づくねの陶器に自詠を刻して、生活の資にあててゐた。「手すさびのはかなきものを持ち出でてうるまの市に立つぞわびしき」は其の頃の歌である。又風流を好んで、嘗て花の頃旅に出て「宿かさぬ人のつらさをなさけにて朧月夜の花の下臥」と詠じた。其の秀でた才色と風流な尼生活とに關しては、種々の佳話が傳はつてゐる。家集の『海士の刈藻』一卷は詠歌の一部分であつて、明治三十年刊行の『蓮月尼歌集』二卷には多くの歌が補つてあり、又『蓮月尼全集』には『海士の刈藻』よりも遙かに歌數の多い拾遺が添へてある。蓮月



蓮月筆蹟（著者所藏）

は其の和歌に關して、自ら「むかしよりいとまなくいやしき身にて、よき大人によりて學ぶことをせざりければ、人の口まねにてかたことのみなり」と言つて居るから、特に師に就いた事はないやうである。併し當時女流歌人としての名聲は遠近に聞えてゐた。曙覽も遙々其の名を聞いて文通し、文久元年の秋上京した時には、七十一歳の蓮月を訪れて歌物語をしてゐる。其の歌風は桂園派に近く、平淡優美であつて、繪畫的敍景を得意としてゐた。

川そひの柳のいとにかかりけりのこる氷のかたわれの月
おり立ちて朝菜あらへば賀茂川の岸の柳にうぐひすの鳴く
里の子が機おる音もとだえしてひるねの頃のあつき旅かな
岡崎の月見に來ませ都人かどのはたいも煮てまつらなむ
いにしへを月にとはるる心地してふしめがちにもなる今宵かな
夕づく日入江の松にかげろひてなごりさびしき秋のむら雨
山里は松の聲のみ聞きなれて風ふかぬ日はさびしかりけり　（海士の刈藻）

此等が代表的作歌である。蓮月も時事を詠じてゐるが、望東尼と異なつて愼ましやかな態度がある。

是までに述べた歌人以外に、なほ幕末期の漢學者や勤王家で詠歌に長じた人が尠くない。漢學者中では賴春水・賴杏坪・西山拙齋・中林竹洞・田能村竹田・菅茶山等を擧げる事が出來る。又勤王家の中では佐久間象山・佐久良東雄・伴林光平（ともはやしみつひら）・有馬新七・平野國臣等が特に勝れた歌を遺して居るのであつて、其の慷慨の情を洩らした作には、專門歌人に見られない熱情が溢れてゐる。

江戸時代後期の著しい歌人の家集は大抵『續日本歌學全書』十二卷、『校註國歌大系』中の『近代諸家集』五卷及び『明治初期諸家集』一卷などに收められて居る。此の他に著名な國文學者の歌文集は『有朋堂文庫』に收めてあり、女流歌人の歌文集は『女流文學全集』の中に殆ど網羅せられて居る。

第四章　俳諧の復興

一　安永天明期

正風復興の運動

享保の頃天下の俳風が著しく墮落して、所謂暗黒時代となつた事は既に述べた所であるが、元文寛保の頃から蕉風復歸の精神が徐々に萌え、寶暦の頃からは各地に俳諧革新の聲が起り、遂に安永天明期の俳諧復興を見るに至つた。當時の俳諧革新運動は一人の人物を中心として起つたのではなく、京阪の蕪村・闌更、江戸の蓼太・白雄、尾張の曉臺、伊勢の樗良、加賀の麥水等が、それぞれ異なつた立脚地から復興運動を起したのが期せずして合流したのである。尤も此等の中で最も傑出し、且つ後世に多大の影響を與へたのは蕪村であるから、一般に蕪村を天明期の代表者として居る。今此等の俳人の事績や俳風などを說く前に、革新運動に與からない俳人で、而も俳諧史上の一異彩であつた横井也有、及び蕪村一派の人々と交渉のあつた炭太祇に就いて述べて置く。

横井也有

横井也有（天明三年歿八十二）は名を時般、通稱を孫右衛門と云ひ、別號を半掃庵・知雨亭などと稱した。其の先祖は北條高時の子相模次郎時行であつて、父祖代々尾張侯の重臣で、也有は二十六歲で家督を嗣ぎ千二百石を食んでゐた。寶暦四年五十三歲の時城南前津の里に隱栖して後は、悠々自適詩歌俳諧に餘生を送つた。文武諸藝に通じた謹直温厚の士であるが、又頗才諧謔に富み、父祖の趣味に傚つて俳諧

を嗜み狂歌戯文を能くした。俳諧は殆ど獨學であるが、「俳諧は俗談なり」と言つた支考の説に共鳴したのか、或は當時都鄙に流行した雑俳の影響を受けたのか、とにかく通俗にして狂體に近い俳句を詠んだ。例へば

食へもせぬもの引きに出る子日哉
くさめして見失うたる雲雀かな
足と鍬三本洗ふ田打かな
綿取の笠や蜻蛉の一つづつ　（蘿葉集）

などによつて其の俳風を知る事が出來る。

鶉衣

也有の俳句の特色は輕い滑稽、若しくは上品なをかしみにあるのであるが、或點に於て類似點を有する大江丸や一茶などの俳風に比して、遙かに劣つて居る。併し其の狂文的俳文に至つては古今獨歩であつて、也有の名高い所以は全く俳文にあるのである。彼の俳文を集めたものは『鶉衣』（四編十二卷）である。書名は其の前篇の首に掲げられた也有の語に、「あやしくはえもなききれ〴〵をあつめつゞりたるを、うづら衣とはいふなり。げにその鶉ならば、ただふか草のふかくかくろへて、かりにだも人には知らるまじきものにこそ。」とあるやうに、つぎだらけの弊衣を「鶉衣」といふ意に基づいて、小品文集の名としたのである。『鶉衣』は前篇後篇續篇及び拾遺より成つて居る。前篇と後篇は、也有と同藩士で親交のあつた紀六林（天野信景の門人堀田治右衛門方舊であつて、本姓紀氏、六林と號した。）が寫

し傳へたのを、也有の歿後に太田蜀山人が傳へて上木したものであり、續篇は也有の親友の子石井垂穂が、家藏の遺篇を輯めて刊行したものであり、拾遺は和學者で狂歌狂文に長じた六樹園石川雅望が、更に殘篇を拾つて版にしたものである。所收の文章は四篇を通算して二百四十八篇あるが、名文と認むべきものは主として前後兩篇にある。中でも傑出してゐるのは、長短解・餅辭・朝寢辭・旅賦・借物辨・百魚譜・百蟲譜等である。『鶉衣』所收の文中には、題辭・序跋・消息・紀行・弔詞などもあるが、最も興味のあるのは、卑近な題材を捉へて、獨得の機智頓才による見解觀察を下した戲文である。彼の俳文に對する理想は『六林文集』の序に見えてゐる。即ち序中に芭蕉・支考・許六三人の俳文を推賞した後に、

只和漢の故事古語をしり、俗の諺にも入りわたり、其影を用ひてあらはならず、長きを縮め堅きをこなして、俗ならず雅に過ぎず、主意よくもとするを貫きたるをこそ、調ひたる文章といはめ、誠に難からざらめやは。

と述べて居る。而して此の理想は彼の俳文によく實現せられて居るのであつて、古今和漢雅俗に亙つて故事成句を自由に引用して、圓轉滑脱にして滑稽諧謔を盡し、而もよく人情の缺陷を穿ち、社會の表裏を指摘して居る。時として譬喩が巧緻に過ぎる慊はあるが、通俗にして野卑に亙らず、卑近にして而も高尚優美なる趣味を含んで居る所に、學識と性格が反映して居るのであつて、そこに他の俳文狂文と自ら異なつた特色がある。蜀山人や六樹園が珍重して、特に之を刊行したのも尤もであつて、彼等の狂文は也有に負ふ所が少くないのである。左に文例一篇を掲げて置く。

文例

木履說

木履々々、笠は東坡が春の野がけの尻に敷かるる折もあるべきに、などや汝は夏の日の宰予が枕にも雇はれざる。日和つづきて隙なる時は、椽の下に寢ころび、蓑の霜夜にともなひ、又は座頭の杖にさされて、日待の壁にふらつきては、かたぶくまでの月をも見るらむ。たまたまかるわざのつなわたりにはかれて、高みに人を見おろす事もあれど、常は沓ぬぎにひざまづき、洗濯の日のこしかけとなりて、それよりうへの交は知らず。かく下ざまのものながら、狩人の笛となりては、口に吹かるるためしも有とや、その鹿の命を斷てるは罪深き身の果なれど、佛も下駄もおなじ木のきれと、例の一休のしめしに逢ひて、はじめて輪廻の鼻緒は切れてん。抑足高きものを木履足駄と號し、たけ低きを下駄といへるは、いづれ一體分身にして、ここに尊卑の差別はあらねど、俳諧のうへに二つの姿を論ずべくは、ぼくりぼくりと靜なるは雪降の朝にして、下駄々々といそがしきは、むら雨の夕べなるべし。（鶉衣前篇）

也有にはなほ詩集・歌集・狂歌集・漢和聯句集・雜筆など二十餘篇があるが、「鶉衣」の外には取立てて言ふほどのものは無い。

炭太祇

也有は俳人と言ふよりも寧ろ俳文の大家であり、而も孤立した隱逸の高士として晩年を送つた人であるから、天明期の俳諧復興には關係がなかつたが、當時京都に於て清新にして高雅な俳風を創めて、ひたすら句作に思を凝らした炭太祇（明和八年歿六十三）は、天明調の先驅者の一人として注意すべき俳人である。太祇は江戸の人で姓を炭（すみ）氏と云つたが、（俳號と連ねてタンタイギと呼ばれてゐる）本名通稱などは傳はつてゐない。初め俳諧を貴志沾洲（せんしう）の門人雲津水國（享保十九年歿五十三歲）に學んで號を水語と云つたが、後に立

羽不角の門人で『俳諧武玉川』の選者として名高い慶紀逸の門人となつた。寛延年間（四十一二歳頃）には江戸俳壇の點者の一人となり、號を改めて太祇と云つたが、其の後間もなく江戸を出て行雲流水の旅を續けた。俳友の三宅嘯山が『太祇句選』の序に、「本より山水の癖ありて、みちのくつくしの果までも杖を引き」と記して居るのによれば、其の足跡は奧羽から筑紫に及んだのである。かくて大行脚を終へた後に、寶暦の初年に京都に住み、寶暦六年(四十八歳)の頃門人呑獅(島原の妓樓桔梗屋の主人治助)に招かれて島原に居を定め、點者の生活を始めた。不夜城中に住んだからやがて不夜庵主人と稱した。太祇の俳風は此の頃に至つて始めて確立したのであつて、是より蕪村・召波・几圭・嘯山等と親しく交り、京都の俳壇でも活躍するやうになつた。

以上略述した閲歴によつて、彼の俳風の因つて來る所を大體明かにする事が出來るのであるが、なほ彼が鬼貫の風を慕つて晩年に『鬼貫句選』を編み、蕪村が其の跋を書いたのも注意すべき事である。太祇は少壯の時から俳諧に耽り、之を生涯の樂としたのであつて、多くの門人を擁して自己の俳風の宣傳に努めた一般の宗匠點者と、全く趣を異にしてゐた。彼は點者となつた事はあるが、それは生活の資を得る爲であつて、寧ろ閑居して俳諧三昧に日を送る事を無上の樂としたやうである。從つて當時彼の俳風を理解し之に共鳴したのは、蕪村一派の俳友と少數の門人だけであつた。それ故大明調の先驅者とは言ひながら、俳壇に影響する所は殆ど無かつたのであつて、其の眞價が認められるやうになつたのは、明治の正岡子規等が之を紹介して以來の事である。太祇が洗煉推敲に耽つたことは稀に

見る所であつて、嘯山が『太祇句選』の序に記してゐる所によれば、常住坐臥にも日課の句を怠らず、而も一つの題にも十餘句を試み、一句を作るにも五句七句と作り換へる程に苦心慘澹したのである。從つて生涯に詠み遺した句は夥しい數に上つたであらうと思はれるが、元來野心を懷いてゐなかつたから、自ら句集を編む事もなかつた。今傳はつて居る太祇の句集としては、彼の歿後に俳友の嘯山雅因の二人が選んだ『太祇句選』一冊と、門人の岡五雲(二世不夜庵)の編んだ『太祇句選後篇』一冊とがあるだけである。太祇は元祿期の蕉門一派が主として閑寂な自然美を吟じたのに對して、寫生や感覺的描寫に長じ、殊に人事趣味を詠む事を得意とした。自然を對象とした句にも人事の配合の妙を得たのが多く、殊に艷麗な若しくは複雜な人事美を寫し出す事は最も得意であつた。而して句の中に應會話を挿入して人物を躍動させて居るのは、鬼貫の句に「なんと今日の暑さはと石の塵を吹く」や「草麥や雲雀があがるそれさがる」の如き句法の影響を受けたのである。其の他一體に平談俗話を用ひて圓滑輕妙な句を詠んでゐるのは、紀逸等の雜俳から得た所が多く、奇拔な格調はこれ亦鬼貫の俳風に學んだのであらう。要するに太祇は從來の卑俗な俳風から脫離して、清新にして情味の豐かな句を詠んだのであつて、天明調の興隆に寄與する所の多かつた一偉才である。

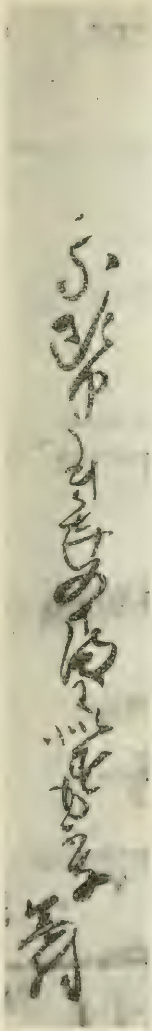
東風吹くと語りもぞ行く主と從者

矢橋乘る娵よむすめよ春の風

やぶ入の寢るやひとりの親の側

山吹や葉に花に葉に花に葉に
二階から物のいひたや鉾の兒
白雨や膳最中の大書院
玄關にて御傘と申す時雨かな
冬枯や雀のありく戸樋の中
寒月の門へ火の飛ぶ鍛冶屋哉　（太祇句選）

太祇が京都にあつて孤立して新風を興した頃は、各地に於ても從來の俳風に慊らずして、復古若しくは革新の運動を起す者が續々現れた。所謂天明期の俳諧復興は、此等の俳人によつて盛觀を呈したのであるが、殊に藝術家としての天分に富み、新たに漢畫を興すと共に清新な俳風を樹立したのは與謝蕪村である。蕪村は芭蕉歿後二十三年の享保元年に、攝津國東成郡毛馬村に生れ、本姓を谷口と云


蕪村筆蹟
（古文書鑑に據る）

つたが後に與謝と改めた。名を寅字を春星と云つたが、通稱は詳かでない。蕪村は其の號であつて、畫には四明・子漢・春星・長庚・謝寅などと署名して居る。其の生國に就いては或は丹後といひ、或は攝津の天王寺村とする說もあるが、蕪村の作「春風馬堤曲」（安永六年の作）及びそれに添へた書簡に自ら「馬堤は

「毛馬塘也則余が故園也」と記して居るのに據れば、長柄川に沿うた毛馬村で成長した事は確かである。弱年の頃江戸に出で、始め談林派の内田沾山に學んだが、後間もなく當時雪門の老俳人であつた夜半亭早野巴人（寛保二年歿六十六）に師事した。巴人は其角の門人であり、又嵐雪の教をも受けた脱俗高潔の士であつて、蕪村は其の家に寄寓して其の感化を受けた。其の後蕪村は寛保二年（二十七歳）に師に死別したが、當時江戸の俳壇には他に師事するに足る人が無かつたので、同門の先輩砂岡雁宕に誘はれて、其の郷里なる下總結城の雁宕の家に滯留し、翌年には白河の關を越えて芭蕉曾遊の地を遊歴し、松島の瑞巖寺塔中の天麟院に暫く滯在した。其の後更に出羽から陸奥にかけての大行脚を試みた後、再び結城に歸つたのは延享の初年頃である。かくて蕪村は遠く異境の山水風物に接して、心身の試練を積んだのであるが、『奥の細道』の如き紀行を書くこともなく、又傳へられた句作も少いのは、未だ獨自の詩境を見出してゐなかつたのであらう。彼は少壯の頃から畫を嗜んでゐたと云はれてゐるが、東國滯留中の遺作には、未だ晩年の蕪村を想起せしめるやうな作品はない。併し當時既に俗流を拔いた句風を創めようとしてゐた事は、下野國蘆野の遊行柳の蔭で詠んだ「柳散り清水涸れ石ところどころ」の如き句によつて察せられる。

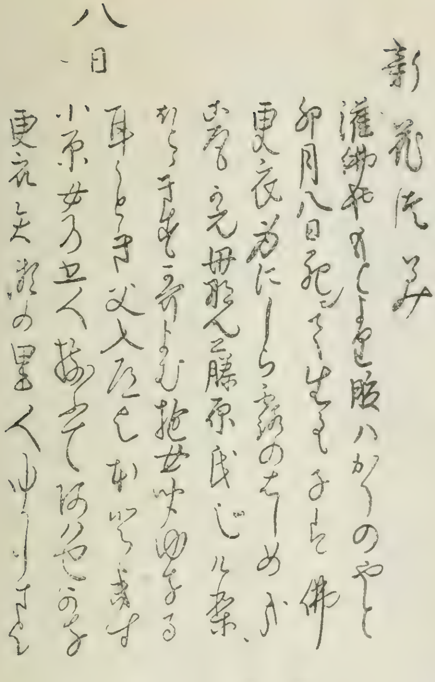
蕪村は東國に居る事十餘年の後、寶暦の初年（三十六七歳）の頃は京都に住んでゐたが、畫俳に沒頭する暇もなく丹後に去り、風光明媚の與謝に遊んで宮津の見性寺に三年餘を送つた。丹後に於ては其の地の俳人と歌仙の興行を試みた事もあるが、當時は主として繪筆に親しんでゐた。其の後寶暦七年

(四十二歳)に再び京都に歸つた頃から畫名は漸く高くなり、頻りに彩管を揮つて大作を試み、明和三年(五十一歳)には、讃岐國琴平の俳人に請待せられて其の地に渡り、請はれるままに畫筆を執つた。其の後明和五年に至る間に三度讃岐に渡つたのは、主として畫の爲であつて、當時畫名は既に四國にも喧傳せられた。當時の遺品として名高いのは、丸龜の妙法寺滯在中に揮毫した襖畫であつて、寒山拾得圖・水墨蘇鐵圖・山水圖等の大作は今なほ存して、世に此の寺を蕪村寺と呼んで居る。蕪村は其の後近畿地方を旅行した外は、專ら京都にあつて俳諧に精進し、明和七年(五十五歳)の春には先師巴人の跡を嗣いで二世夜半亭と稱し、始めて點者として世に立つた。かくて安永以後は蕪村の俳風の完成期であつて、當時彼と交渉のあつた俳人には樗良・曉臺・士朗・大江丸等があり、門人には几董・召波・大魯・月居等があつて、蕪村の俳風は其の畫と共に益圓熟して行つた。畫は固より彼の好む所であり、且つ生活の資を得る爲でもあつたから、生涯之を捨てなかつたのであつて、池大雅と並稱せられたのは主として安永以後の作品によるのである。大成せられた彼の俳風に就いては下に述べる。さて蕪村は天明三年十二月年六十八で歿し、遺骨は洛東一乘寺村の金福寺なる芭蕉庵の傍に葬つた。其の終焉記(几董作)は几董編の『から檜葉』の卷頭に掲げられてゐる。(以上蕪村の傳は「日本文學講座」所收河東碧梧桐氏の「蕪村研究」を參考とした)

蕪村の著作

蕪村は平生句集や遺稿を編む意志が無かつたから、纏まつた句集を遺してゐない。只老境に及んで自ら版下まで書いた『夜半樂』二冊と『新花摘』一冊とは、彼の貴重な記念となつて居る。前者は安永六年の春刊行したもので、其の中に收められた「春風馬堤曲」は、幼時を追慕して一氣に作つた句詩交混

渚の十八首より成る抒情的自由詩であつて、句々聯絡があり一貫した氣分が流れて、一篇の長詩となつて居るのは俳諧史上の珍什である。（『夜半樂』にはなほ『春風馬堤曲』の外に、同じ形式の『澱河歌』三首を載せてゐる。）又後者は安永五年の夏、其角の『花摘』に倣つて、一夏中毎日十句づつの發句を書き續けようとしたものであるが、病の爲に果さず、後に常總地方を漂浪した頃の追憶の斷想を書き添へたもので、天明四年に門人月溪の畫を加へ蕪村自筆の版下によつて上木せられた。蓋し蕪村の面目は此の一卷に最もよく現れて居る。（圖版參照）



新花つみ

蕪村が終生に詠んだ句は十萬八千にも達すると言はれて居るが、（蕪村句集の蓼太の序文參照）其の句選としては、歿後に几董が選んだ『蕪村句集』二卷があり、又文集には其獨亭忍雪・醉庵其成の編んだ『蕪村翁文集』二卷がある。なほ近年刊行せられた全集には潁原退藏氏編『蕪村全集』一卷がある。

蕪村の俳風

蕪村は天明の俳諧復興期の代表的俳人であるばかりでなく、元祿の芭蕉と並んで俳諧史上に最も傑出した一人である。而して此の二人の俳風は正に對



同挿繪

立の姿をなして、二つの時代の俳風を代表して居るのである。即ち芭蕉の俳風が主觀的傾向の著しいのに對して、蕪村のは主として客觀的態度で詠まれて居る。芭蕉は直ちに大自然に接して其の詩趣を味はつたのに反して、蕪村は自己の經驗や觀察を直ちに表現することは稀であつて、古典や歴史の中から素材構想を得たものが多いのである。從つて芭蕉の人格は其の作品の上に彷彿として見えるが、蕪村の句によつて其の人を窺ふ事は極めて困難である。又芭蕉の詩味は寧ろ連句の附合に最もよく見られるが、蕪村の天分は發句の上に遺憾なく發揮せられて居る。先づ蕪村の連句の一例として左に「桃李」(蕪村几董兩吟歌仙)の中から表六句を抄出して見よう。

牡丹散つて打かさなりぬ二三片　　蕪村

卯月廿日のあり明の影　　几董

すはぶきて翁や門をひらくらむ　几董
聟のえらびに來つるへんぐゑ　蕪村
年ふりし街の榎斧入れて　蕪村
百里の陸地とまりさだめず　几董

かくの如く蕪村の連句は蕉風に比して一層藝術的香氣が高いのである。而して蕪村は感覺的若しくは繪畫的な客觀美を、極めて印象的に描寫する事を得意としたのであるが、發句の上には更に種々の特徴を發揮してゐる。左に句例を引いて著しい特色を列擧して置く。

(一)表現又は著想の奇拔なもの
をちこち〳〵と打つ砧かな　大徳の糞ひりおはす枯野かな
(二)情趣の纖細なもの
春の夕たえなむとする香をつぐ　涼しさや鐘をはなるゝ鐘の聲
(三)印象的繪畫的描寫の勝れたもの
初午や物種賣に日のあたる　水鳥や枯木の中に駕二挺
(四)感覺的描寫に成功したもの
瘦臑の毛に微風あり更衣　夕風や水青鷺の脛を打つ
(五)平淡にして詩趣の豐かなもの

春風や堤長うして家遠し　楠の根を靜かにぬらす時雨かな

(六)複雜な人事を詠んだもの

御手討の夫婦なりしを更衣　負くまじき角力を寢物語かな

(七)空想的傳奇的趣味を詠んだもの

公達に狐化けたり宵の春　河童の戀する宿や夏の月

(八)古典趣味を基調とするもの

瀧口に燈を呼ぶ聲や春の雨　鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉

(九)支那の故事を背景とするもの

畑打や法三章の札のもと　易水にねぶか流るゝ寒さかな

要するに蕪村の俳諧は想像空想から成るものが多く、又智的要素が豐富であつて、詩人的人格の所産である芭蕉の文藝と好對照をなして居る。かくて蕪村が從來の俳人が未だ手を著けなかつた新しい詩境を開拓した功績は顯著であるが、彼は自己の俳風を天下に弘めようとする野心がなく、其の門弟も多くなかつたから、當時の俳壇にはさまでの勢力がなかつた。蕪村は其の後久しく畫家として喧傳せられ、俳人としては殆ど忘れられてゐたのであつて、其の眞價が認められるやうになつたのは、明治の正岡子規一派の人々が賞揚して以來の事である。殊に子規の著「俳人蕪村」及び子規・鳴雪・碧梧桐・虚子等合著の「蕪村句集講義」に負ふ所が多い。

蕪村の門下

蕪村の畫の門人には呉月溪を始め紀梅亭。横井金谷・松本奉時等があり、俳諧の門弟には高井几董・黑柳召波・吉分大魯・江森月居等がある。而して蕪村門下の雙璧は几董と召波とである。几董（寛政元年歿四十九）は京都の人で初め春夜樓晋明と云ひ、後に剃髮して詐善居士と云つた。其の父は几圭と號し、蕪村が師事した夜半亭巴人の門人である。

榎本其角┬松本淡々
　　　　└早野巴人┬與謝蕪村┬黑柳召波─黑柳維駒
　　　　　　　　　│　　　　├高井几董
　　　　　　　　　│　　　　├吉分大魯
　　　　　　　　　│　　　　└江森月居
　　　　　　　　　└高井几圭

几董は蕪村門下中で最も尊信を受け、同門の句集を次々に編み、師の歿後天明四年には夜半亭を繼いだが、四年の後多望な前途を惜しまれて世を去つた。几董は蕪村の如き學識天分を有してゐなかつたが、句作には推敲を重ねた人で、殊に連句に長じてゐた。彼は蕪村の俳風の外に太祇からも影響を受けて、平淡輕快な調によつて閑雅な詩趣を吟じて居る。自撰句集に『井華集』二册がある。

高井几董

磯山や小松が中を春の水
門口に風呂たく春の泊りかな
朝霧や二人起きたる臺所
朝露や膝より下の小松原
貫之が船の灯による千鳥哉
明ほのやあかねの中の冬木立

黒柳召波

夜神楽や水涕拭ふ舞の袖　（井華集）

召波（明和八年歿享年未詳）は京都の人で春泥舎と號した。蕪村の俳風を忠實に守り師から深く信頼せられたが、明和八年に師に先立つて世を去り。蕪村をして「我俳諧西せり」と痛歎せしめた。（春泥句集の序）彼は又太祇の俳風の影響をも受けてゐる。召波の句には超俗高雅な趣味、典雅流麗な表現があり、又敬虔な態度が見られる。句集には『春泥句集』（内題には春泥發句選とあり）二冊がある。是は其の子維駒が父の遺稿を整理し、父の版下の儘を出版したもので、巻頭に蕪村自筆の序がある。

元日や草の戸越しの麥畠

わか竹や村百軒の麥の音

白馬寺に如來うつしてけさの秋

名月に辻の地藏のともし哉

人聲の小寺にあまる十夜哉

あちこちとして居りたる落葉哉　（春泥句集）

吉分大魯

几董召波に次いで注意すべきは吉分大魯（安永七年歿五十餘）である。阿波國の徳島藩士であつて、公務の餘暇に俳諧を嗜み、やがて致仕して京都に出た。明和の頃几董と前後して蕪村の門に入り、安永二年に剃髪して大魯（初の號は馬南）と號した。其の後大阪に住んで蘆陰舍を興して門人を導いたが、安永六年に其の地を去つて漂浪生活を送り、蕪村に先立つて京都で歿した。句集には門人が集めた『蘆陰句選』一冊があ

る。蕪村は其の序に「大魯はもとより攝播維陽の一大家と呼ばれて我門の嚢錐なり」と言つて居る。かくて大魯は蕪村及び其の門流に重んぜられたが、俳風は大いに異なつてゐた。

うしろより雨の追ひ來る燒野哉

海を出て砂踏む蟹が暑さかな

眼の限り臥し行く風の薄かな　（蘆陰句選）

此等は彼の特色ある敍景である。藤井乙男博士は「其句太祇の迂餘曲折を好み、几董召波の細心鏤刻を事とするに反して、一氣呵成直截明快、恰も白雨亙杉に灑ぐが如し」有朋堂文庫『名家俳句集』の緒言と評して居られる。大魯は又平淡な表現の中に深い純情を籠めた句を詠んで居る。

牡丹折りし父の怒ぞなつかしき

なかなかに忘れじ瓜の漬けかげん　（久しく召遣へる少女に暇くれて）

我にあまる罪や妻子を蚊の喰ふ　（妻兒が飄泊ことに悲し）（蘆陰句選）

此等は蕪村及び其の一派の俳風に見當らない特色である。

蕪村七部集

蕪村及び其の門人の俳諧は『蕪村七部集』文化五年刊行に略盡されて居る。『蕪村七部集』は『其雪影』二冊明和九年刊『一夜四歌仙』一冊安永二年刊行『明烏』一冊安永二年刊行『續明烏』二冊安永五年刊行『桃李』一冊安永九年刊行『花鳥篇』一冊天明二年刊行『五車反古』二冊天明三年刊行の七部を收めたものである。尤も編者は『續一夜四歌仙』を「花鳥篇序」と題して入れて居るから、實は八部から成つて居る『其雪影』は明和九年に几董が其の父几圭の十三回忌追善の爲に撰んだ集で。其の一半は蕪村門流の作品である。『一夜四歌仙』蕪村

の編は安永二年九月に樗良の上京を機會に、一夜興行した蕪村・樗良・几董・嵐山の四人の歌仙四卷であつて、次の『明烏』と共に俳諧革新の旗幟を鮮明にした頃の集である。(『續一夜四歌仙』は『一夜四歌仙』の後を繼いで、曉臺・几董・月溪・青蘿の歌仙四卷を收めたもので几董の撰である。)『明烏』は几董が蕪村一派の連句發句を集め、師の校閲を經て上梓したものであり、『續明烏』は同じく几董が其の續篇として編んだ集で、七部集中最大のものである。次の『桃李』(几董編)と『花鳥篇』(蕪村撰)は共に蕪村一派の重要な集であるが、殊に代表的な集は『五車反古』である。これは維駒が父召波の十三回忌追善の爲に編んだもので、蕪村は其の序を絶筆として他界した。

蕪村派以外の俳人

蕪村の歿後僅かに六年にして三世夜半亭の几董も世を去つて、蕪村調の直系は絶えたのであるが、當時の俳壇には蕪村一派の外に、各地に復古若しくは革新の運動を起した俳人が續出した事は、既に述べた通りである。而して蕪村派以外の俳人で、世俗の間に天明調の先驅として喧傳せられたのは大島蓼太(天明七年歿七十歳)である。

大島蓼太

蓼太は信濃國伊那郡大島の人で、江戸に出て櫻井吏登(嵐雪の門人雪中庵二世)に師事し、三十三歳の時に雪中庵三世となつた。蓼太は世才に長け、人氣を集める事に妙を得てゐたから、從來江戸座の爲に壓倒せられてゐた雪門を復興し、更に蕉風復活を標榜して大いに名聲を揚げた。かくて晩年には高足四十餘人、門下三千人と稱せられる程の盛況を招來し、其の名は全國に聞えた。其の編著は二百餘部に達して居ると云はれて居る。蓼太の句集には門人の手に成つた『蓼太句集』初篇(一冊)二篇・三篇(以上各二冊)がある。その俳風は「世の中は三日見ぬ間に櫻かな」「むつとして戻れば庭に柳かな」の如く、

概ね卑俗淺近を旨としたものである。彼が俗間に名を轟かしたのは、俗耳に入り易い斯かる句風を宣傳した爲であるが、一方には蕪村等の影響を受けて、天明調に近い句も作つて居る。例へば

　菜の花にのどけき大和河内かな
　絶え〴〵に溫泉（ゆ）の古道や苔の花
　刈跡の薄にすがるいなごかな
　わが影の壁にしむ夜やきり〴〵す

加舍白雄

蓼太と竝んで江戸で勢力のあつたのは加舍白雄（かやしらを）（寛政三年歿五十七）である。信州上田の藩士の次男で（異說がある）伊勢派の白井鳥醉の門に入り、師の歿後は江戸信州などに住み、又北越奥羽を行脚し、安永九年に江戸に春秋庵を開いて門人に敎へた。白雄は通俗な俳論を說き、句作に於ては技巧を退けて、平明な寫生を宗とした爲に、多くの門人が集つて、一時江戸の俳壇に重きをなした。其の著『俳諧寂栞』三冊は卑近な俳論を說いたもので、俳諧の入門書として廣く行はれた。句集には門人川村碩布の編んだ『白雄句集』二冊がある。句集には客觀的な寫生の外に、清新な情趣を詠んだものも少くないが、纎細に過ぎる弊風も見受けられる。

　榛の木に鶯鳴くや眞晝中
　土舟や蜆こぼるゝ水の音
　人戀し燈ともし頃を櫻散る

夕潮や柳がくれに魚わかつ

大寺や素湯の煮え立つ秋の暮　（白雄句集）

此等が代表的な句である。

加藤曉臺

江戸の蓼太・白雄等と對峙して、關西に覇を唱へたのは名古屋の加藤曉臺、鳥羽の三浦樗良、京都の高桑闌更等であつて、北陸に勢力のあつたのは堀麥水である。加藤曉臺（一に久村氏寛政四年歿六十一歳）は美濃派の武藤白尼（連阿房）の門に學んだが、明和五年から元祿の『冬の日』を慕つて蕉風の復古を唱へた。其の後各國を旅行し、又蕪村及び其の一派の人々とも交際し、晩年には極めて勢力があつた。『秋の日尾張五歌仙』（一冊明和五年刊行）は復古提唱の撰集として名高い。句集には門人暮雨庵臥央の撰んだ『曉臺句集』二冊がある。其の俳風は概ね平俗で、纖弱の弊に陷つて居る。

日暮れたり三井寺下る春の人

蜩の啼けば瓢の花落ちぬ

秋の山ところどころに煙立つ　（曉臺句集）

三浦樗良

三浦樗良（安永九年歿五十二）は志摩國鳥羽の武士の家に生れた。幼少の頃から俳諧を嗜み、初めは中川乙由（岩田涼菟門人）の麥林風の流を汲んでゐたが、之に慊らずして寶曆九年以來蕉風復興を唱へ、平淡にして清新な句を詠んで、蕪村一派と共に天明中興の一人となつた。句集に門人の甫尺が編んだ『樗良發句集』二冊、及び之を增補し更に附合文集をも加へた菊舍主人編『樗良集』四册がある。

山寺や誰もまゐらぬ涅槃像
櫻散る日さへ夕となりにけり
嵐吹く草の中より今日の月
我が庵は榎ばかりの落葉かな　（樗良發句集）

斯くの如く淡々たる表現によつて、自然に對する眞情を詠むのが樗良の特長である。

高桑闌更

高桑闌更（寛政十年歿七十三）は金澤の商家に生れ、夙に和田希因（初北枝門後乙由門）に俳諧を學んだ。寶暦の末頃から蕉風復歸を唱へ、諸國を巡遊して江戸に住み、二夜庵を再興して名聲を揚げ、後京都に南無庵を營み、多くの門弟を擁して俳名が高かつた。句集には門人の手に成つた『半化坊發句集』二冊がある。其の句は平淡で動もすれば卑俗に墮した。

蝙蝠の轅におつる嵯峨野かな
五月雨や鼠の廻る古葛籠
枯蘆の日に日に折れて流れけり　（半化坊發句集）

堀麥水

堀麥水（天明三年歿六十六）も金澤の商家に生れ、初め麥林舍乙由の門に學んだが、稍老境に達して卑俗な美濃風伊勢風に慊らずして『虛栗』の調を慕ひ、安永六年に句集『新虛栗（しんみなしぐり）』二冊を著して自己の新風を世に示した。句集に雪岱編『樗庵麥水發句集』一冊がある。其の句は概ね平明であるが、晩年のものには故意に表現の奇を求めた傾向がある。麥水の長所は寧ろ前者にある。

水のない川掘る人や桃の花
占野行き紫野行きひばりかな
谷々に日なた細めて今朝の秋
よわくくと日の行届く枯野かな　（樗庵麥水發句集）

芭蕉
- 雪門 服部嵐雪 ― 櫻井吏登 ― 大島蓼太
  - 大島完來
  - 大伴大江丸
  - 鈴木道彦
  - 建部巣兆
- 美濃風 各務支考
  - 太田巴靜
  - 武藤巴雀 ― 武藤白尼 ― 加藤曉臺 ― 井上士朗
- 伊勢風 岩田涼菟 ― 中川乙由 ― 佐久間柳居 ― 白井鳥醉 ― 加舍白雄
- 立花北枝 ― 和田希因
  - 高桑闌更
    - 成田蒼虬
    - 櫻井梅室
  - 堀　麥水

安永天明の頃は國學者の古典研究が盛に行はれた時であるから、俳諧も亦其の影響を受けて、蕪村一派を始め一般に古典的な詩趣を求める者が多く、又一方では過去の俳諧に關する研究も漸く盛になつた。尤も當時は蕉風復歸の運動が中心となつてゐたから、芭蕉に關する研究が主であつた。當時は又古今の俳諧を撰集することも次々に行はれ、三宅嘯山（享和元年歿八十四）が撰んだ『俳諧古選』五卷や『俳諧新選』五卷の如きものが刊行せられた。前者は安永天明以前の古今の佳句を選び、漢文で短評を下したものであつて、蕉風以外に貞門談林の風格をも窺ふ事が出來るのは極めて便利である。又後者は安永天明以後の復興期の句を廣く選んだもので、佳句の洩れたものもあるが、當代名流の作風を通覽する事が出來る。

二　文化文政期

文化文政期の俳壇

天明三年に蕪村が歿して後、同七年に蓼太が逝き、次いで寛政年間には几董・白雄・曉臺・闌更等も相踵いで歿したので、享和の頃俳壇は俄かに寂寥を感ずるに至つた。かくて享和から文化の頃にかけて、天明調は頽廢期となつたが、さすがに盛時の餘光はなほ存して、相當勝れた俳人が各地に現れ、殊に點者は殆ど全國に分布せられて、地方的にも盛況を呈した。試みに文化文政期の俳壇に重きをなした俳人を擧げれば、當時最も隆盛であつた江戸には、蓼太の門人に雪中庵四世を繼いだ大島完來があり、白雄門下には鈴木道彦・建部巣兆を始めとして、女流俳人の榎本星布・川村碩布等があり、又獨學自修の俳人には夏目成美があつた。次に上方には京都に蕪村門下の江森月居、闌更門下の成田蒼虬等が居り、大阪には淡々の流を汲んだ大伴大江丸以下二三の俳人があつた。其の他名古屋には曉臺門に井上士朗があり、東北には松窓乙二があり、北陸中國四國九州等にも、それぞれ地方的に名を知られた俳人が極めて多かつた。今此等の俳人中で注意すべき四人、即ち江戸の道彦・成美、名古屋の士朗、大阪の大江丸に就いて簡單に記した後、此の時代の俳壇に一大異彩を添へた小林一茶の事を記す事にする。

鈴木道彦

鈴木道彦（文政元年歿六十三）は仙臺の人で、江戸に出て醫を業とし、白雄に就いて俳諧を學んだ。成美・巣兆・士朗・乙二等と親しく交り、名聲は極めて高かつた。元來才能があつた爲に、江戸俳壇に重きをなし

たが、俳風は平俗であつて佐彌は師に及ばなかつた。自選句集に『蔦本集』二冊があり、續集に門人の編んだ『續蔦本集』二冊がある。其の妻應々尼も俳諧を能くし、道彥の歿後には門人を率ゐた。

夏目成美

夏目成美（文化十三年歿六十八歲）は江戶淺草の藏前の札差井筒屋の子である。其の父は一雨と號し、俳諧を嗜んでゐたので、成美も其の感化を受けたのであるが、師とする者は無く殆ど獨行の俳人である。多くの門下を有して江戶俳壇に雄飛した。富裕な人であつて、獨自の俳風を創め、閑雅な情趣を詠み、纖細な感覺を表現する事に長じた。

撫子のふし〴〵にさす夕日かな
はや秋の柳をすかす朝日かな
後の月葡萄に核のくもりかな（成美發句集）

成美は博識の人であり殊に文章に長じてゐた。句集に『成美家集』二冊『成美發句集』一冊があり、俳文集に『四山藁』二冊、隨筆に『隨齋諧話』二冊がある。

井上士朗

井上士朗（文化九年歿七十一）は名古屋の醫師で號を枇杷園と云つた。俳諧を曉臺に學び、又國學書畫にも通じてゐた。士朗は江戶の道彥と相竝んで世に其の名を知られたが、其の句は平淡であつて、曉臺に比して遙かに劣つてゐた。句集に門人の輯めた『枇杷園句集』二冊と『枇杷園隨題發句集』二冊がある。

大蟻の疊を步く暑さかな
名月に露の流るる瓦かな

足輕のかたまつて行く寒さ哉　(枇杷園句集)

大伴大江丸

此等が代表的な句である。大伴大江丸 文化二年歿八十六 は大阪の飛脚問屋(島屋と稱した)の主人であつて、少壯の頃に松木淡々に學び、又談林派の活井舊室などにも從つたが、後に蓼太の門人となつた。彼は家業の關係から大阪と江戸の間を數十回往來し、又屢信濃路を旅行して東西の俳人と交り、歌仙唱和の媒介などもして、俳壇に於ける重要な役目を務めた。彼は人事を詠む事を得意としてゐたが、滑稽味を帶びた輕妙なものが多いのは、談林調の系統を引いたのである。其の遺著には晩年に成つた自筆版下の『俳懺悔』と『俳諧袋』(各二册)がある。何れも自句の間に隨筆(古人の傳記佳話名言など)を挿入したもので、『俳懺悔』の卷頭には、蓼太の教を受けるに至つた由來を記した俳諧懺悔文を掲げて居る。

さゐ引の友にあひたり宇津の山
粥杖や馬の內侍をしとと打つ
蟹とりて甲に物かくしほひかな
夕すずみ地藏こかして逃げにけり
夜の明けて山の高さよ鹿の聲
淸盛の文張つてある火桶かな　(俳懺悔)

小林一茶

文化文政期の代表的俳人は小林一茶 文政十年歿六十五 である。輕妙な滑稽趣味の句を多く詠んだ點に於ては大江丸に似てゐるけれども、其の伎倆は遙かに彼を凌駕し、而も其の俳風は寧ろ自己の生活を赤裸々

に詠んで、從來何人も企てなかつた獨自の詩境を拓いたのであつて、後世芭蕉蕪村と共に最も注意すべき俳人とせられてゐる。其の俳風を考察するには、先づ悲慘を極めた生涯の閲歴を眺める必要がある。一茶は信濃國水内郡柏原驛の百姓小林彌五兵衛の子であつて、寶暦十三年に生れ通稱を彌太郎、名を信之と云つた。三歳の秋生母を喪ひ、八歳の時から繼母の手に育てられたが、十歳の夏異母弟專六が生れてからは、繼子としての虐待を受けて、子守と農作の手傳ひに追ひ使はれた。此の頃一茶は柏原驛の本陣中村六左衛門の同情を受けて、手傳ひの暇々に手習と讀書を授けられてゐた。六左衛門は新甫と號し俳諧を嗜み、又其の家には俳諧師長月庵若翁（肥前大村の藩士堀孫左衛門で、服部南郭の門に學び又俳諧に長じてゐた。）が寄寓してゐたから、一茶は既に此の頃此等の人々から、俳諧の手ほどきをしてもらつたであらうと云はれて居る。一茶が幼少の頃近所の子供に「親のない子はどこでも知れる、爪を咥へて門に立つ」と唄ひ罵られたのを悲しんで、「我と來て遊べや親のない雀」といふ句を詠んだ事は『おらが春』に見えて居る。さて一茶が十四歳の時祖母が死んだ頃から、繼母の殘忍性はいよ／＼募つたので、遂に善良な父も見るに忍びずして、翌年彼を江戸へ奉公に出した。其の後十年間の事は詳かでないが、天明七年二十五歳の頃、葛飾派の二六庵竹阿に從つて俳諧を學んだ事が知られて居る。寛政二年に竹阿が逝いて後は其の跡を繼ぎ、二六庵菊明坊一茶と號して始めて點者となつたが、一派の人々と調和する事が出來なかつたので、寛政四年の頃葛飾派を脱退し、其の後約四年間京阪から中國四國九州にかけての漂泊を續けた。寛政七年三十三歳に江戸に歸つた頃から、一茶の俳風

は一變して、漸く本領を發揮するやうになつたのであるが、此の頃最も親しく交つたのは夏目成美である。其の後一茶の身には再び不幸が續いた。即ち享和元年(三十九歲)には鄕里に在つて父に死別し、(此の時枕頭で記した終焉日記は言々句々涙で綴られて居る。)次いで遺產分配に關して繼母及び異母弟專六を相手に、十二三年の間紛爭を續けた。此の間に一茶は屢江戸に出で、そこから房總地方を旅行して紀行を綴り、又句作は一日も怠らなかつた。日記にして句帳を兼ねた「一茶旅日記」には、文化元年から五年までの句が收められて居り、又「七番日記」は文化七年(四十八歲)から書き續けられて居り、「我春集(わかはるしふ)」なども此の頃に成つた。文化九年(五十歲)以後は漸く長い漂浪生活に倦んで鄕里に安住し、文化十一年の春五十二歲で始めて妻帶し、三男一女があつたが何れも夭折し、妻も亦同棲八年の後文政六年に病歿した。其の後一茶は後妻を二人まで代へ、三度目の妻を迎へたが三年の後薄倖な生涯を終つた。時に文政十年十一月十九日(享年六十五)であつて、柏原の明專寺に葬られた。一茶が病歿した時妻は懷胎中であつたが、翌年女兒を產み、繼母も其の年に齡八十五で他界した。

一茶の一生は右に述べたやうに極めて悲慘であつたから、其の性格は自ら他の俳人と異なつてゐた。彼は生來飄逸な一面を持つてゐたが、逆境に育つた爲に强者に對する反抗心があり、又僻み心があつた。(例一)一茶は又幼時から不遇孤獨の境地に置かれたから、自己を哀憐の眼で凝視したのであり、(例二)自己を憫む心はやがて弱者に對する同情心となり、其の同情は禽獸草木にまで注がれた。(例三)一茶は時に我が境遇に安住して、「めでたさも中位なりおらが春」「下谷一番の顔して更衣」などと吟

じ、又漫晴れやかな氣持になつて句作に耽つたのであつて、斯かる場合には飄逸洒脱な本來の面目を發揮してゐる。(例四)

(例一)わが門へ來さうにしたり配餅
　　づぶぬれの大名を見る炬燵哉
(例二)ままつ子や涼み仕事に藁たたく
　　椋鳥と人に呼ばるる寒さかな
(例三)痩蛙負けるな一茶ここにあり
　　けふも〱絲引きずつて蜻蛉哉
(例四)おれとしてにらみくらする蛙哉
　　御佛の鼻のさきにて屁ひり蟲

一茶の滑稽趣味を詠んだ句には同情が含まれて居り、笑の中にも涙の籠つてゐるものが多い。此の點に於ては單に諧謔を詠んだ也有・惟然・大江丸等とは大いに異なつて居る。彼は又洒脱にして奇警な句を得意に吟じた。

遠山が目玉にうつる蜻蛉かな
錢箱の穴から出たりきりぎりす
山里は小鍋のなかも名月ぞ

梟が拍子とるなり小夜砧

の如きは一茶ならではと思はれる句である。一茶は又用語格調の方面にも奇警飄逸な一面を示してゐる。例へば、

罷り出でたるは此の藪の蓙にて候

下下の下下下の下國の涼しさよ

けろりかんとして鴉と柳かな



おらが春

の如きである。一茶の句集には又詩趣の豊かな次のやうな句がある。

有明や淺間の霧が膳を這ふ

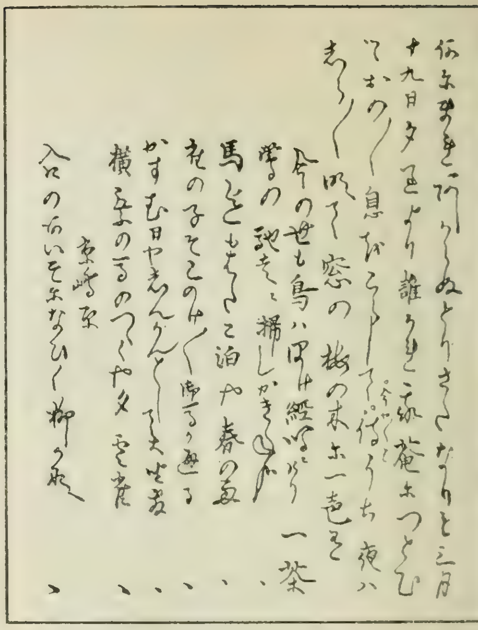
霞む日や夕山かげの飴の笛

芝原や小春仕事に塗る鳥居

けふも〳〵霞んで暮す小家哉

併し此等は彼の本領ではなかつた。要するに一茶の特色は既に述べたやうに、傳統的な俳風から離脱して、率直に自己を表現した所にあるのであつて、彼が風雅

を生命とした芭蕉や、藝術的香氣の高い俳風を樹てた蕪村に對して、直率なる人生表現の詩人として、俳諧史上特筆すべき地位を得た所以も爰にある。尤も一茶の連句は發句に比して遙かに見劣りがする。元來連句は一座の人々の詩的情調の融合を第一義とするものであるから、獨自の俳風を强調する一茶にとつては不得意であつたのである。



同　右

一茶の著作

一茶の著作で最も名高いのは『おらが春』であつて、之に次ぐものは『我春集』である。『おらが春』(一冊嘉永五年刊行) は文政二年五十七歳の正月に起稿し、其の年の十二月に擱筆した日記體の句文集であつて、隨筆と自句とを書き連ね、自ら挿繪を加へた原稿を其の儘上木してゐる。其の自筆の挿繪八葉は、實は西鶴の『日本永代藏』『櫻陰比事』や了意の『東海道名所記』、增穗殘口の『艶道通鑑』などの挿繪の中から部分的に寫し取つて、適當に修正し配置したものである事は、山口剛氏の考證(『西鶴成美一茶』參照)によつて明かにせられてゐるのであつて、爰にも一茶の瓢逸洒脫な一面が窺はれる。次に『我春集』(無題の稿本一巻で題號は後人の命名) は是より先文化七年(四十八歲)の正

月から、年末に至るまでの發句連句及び雜筆を收めたものである。彼の句選には文政版の『一茶發句集』と、それを增補した嘉永版の外に『一茶句帳』(文化句帖 文政句帖)がある。近來發見せられた『七番日記』『八番日記』『九番日記』等は詳密な日記と句帳とを兼ねたもので、彼の傳記資料として貴重であるばかりでなく、句作に專念した一茶の面目を窺ふことが出來る。而して『七番日記』は文化七年から九箇年に亙る日記であるが、是より以前に一番から六番までの日記を書いた筈であつて、散逸したのは惜しい事である。此等の日記に記された發句の數は驚くべき多數に達する。

天保期の概觀

文化文政時代の俳壇には、一茶を始め天明調の末流を汲む俳人等があつて、なほ相當に活氣があつたが、天保時代には傑出した俳人がなく、俳諧は益民衆文藝となり、寒村僻地に至るまで宗匠があつて、番頭小僧人夫駕舁の如き者の間にも、發句を口にする者が出るやうになつた。かくて俳諧が天下に流行した結果、宗匠は大衆の意を迎へて自己の地位を保たうとしたから、彼等の俳風はいよ／＼俗了して大衆文藝となつた。天保期の著名な俳人は櫻井梅室・成田蒼虬(さうきう)・田川鳳朗・谷川護物・鶴田卓池等である。梅室・蒼虬・鳳朗・卓池は天保の四老人と稱せられた。此等の俳人中で世俗的に名聲の最も高

櫻井梅室

かつたのは梅室である。櫻井梅室(嘉永五年歿八十四)は金澤藩の刀研師で、文化元年に家職を弟子に讓つて京都に上り、闌更に師事した。初め京阪の俳壇に名を知られ、後に一時江戸に下つたが、晩年には再び京都に住んで名聲を轟かした。かくて嘉永四年には二條家から花の下の允許を得た。梅室は特に連句に

長じ、天保期の第一流と稱せられた。

元日や鬼ひしぐ手も膝の上

夕燕ひとつは谷へ歸りけり

秋の花一本折れば皆動く

斯くの如く其の俳風は俗談平話に近いものであつて、天明調に比して著しく俗化してゐる。梅室よりも伎倆に於て天保調を代表する者は蒼虬である。成田蒼虬（天保十三年歿八十三歳）も金澤の人で、父は四百石の知行を得てゐた。父が罪に連坐しやがて獄中で歿したので、京に上つて闌更の門に入り、遂に上方の巨匠となつた。其の妻枝月尼も俳諧を能くした。

成田蒼虬

我が立てる煙は人の秋の暮

百合切つて並べて置くや草の上

ものかげは常より暗し今日の月

此等が代表的な發句であるが、其の俳風が凡俗である事は他の俳人と同樣である。

其の他の俳人

上方の梅室や蒼虬に對して江戸の俳壇で最も勢力のあつたのは、前に擧げた田川鳳朗（弘化二年歿八十四）と谷川護物（天保十五年歿七十）であり、地方に盛名のあつたのは三河の鶴田卓池（弘化三年歿七十九）である。鳳朗と護物は鈴木道彦の門に遊び、卓池は初め曉臺に學び、其の歿後に士朗に師事した。此等の人々の俳風も亦梅室蒼虬と同じく、輕妙平俗な調若しくは理智的卽興的な句を詠んだのであつて、時代の傾向は爭はれない。

天保期の代表的俳人の作風が以上述べた通りであるから、其の他の宗匠の俗調は推して知るべきである。斯くて弘化以後の俳壇は益墮落して、俗俳流行のまま幕末期を終つたのであつて、天明を去る一百年の後明治になつて、子規一派の俳諧革新運動が起るまでは、俳諧不振時代が續いたのである。

第五章　狂歌狂詩雜俳

一　狂歌狂文

天明調の狂歌

江戸を中心として現實享樂主義の各種の平民文藝が興隆した安永天明から、文化文政にかけての頃は、狂歌・狂文・狂詩・雜俳。黄表紙・洒落本等の滑稽諷刺を宗とする、各種の文學が流行した時代である。本章に於ては小說以外の諧謔文學の發達變遷を別々に辿つて見ようと思ふ。狂歌は前期の元祿頃に、上方に貞柳一派が現れて享保年間には殆ど天下を風靡する勢を示したが、明和天明の頃には大いに衰へ、且つ平凡なものになつた。當時は一般文藝が上方から江戸に遷つた時であるが、狂歌も亦江戸に於て清新な一派が興つて、遂に上方を壓倒するに至つた。これを天明調の狂歌と云ふ。江戸の狂歌は是より先寛文の頃に、石田未得・齋藤德元・半井卜養等を先驅として興り、明和の頃には風來山人(平賀鳩溪)木室卯雲(二鐘亭半山)等が現れて狂歌を作つたのであるが、天明調は此等の人々とは關係無しに、唐衣橘洲(からころもきつしう)・四方赤良(よものあから)・朱樂菅江(あけらくわんかう)等によつて唱道せられたのである。而して此等の人々が盛に狂

歌を詠んだのは、其の師内山椿軒の薫化によるのであつて、其の源は椿軒に發して居るのである。

内山椿軒（天明八年歿六十七）は名を淳時（あつとき）、通稱傳藏と云ひ、字を文卿、號を椿軒と云つた。牛込の加賀屋敷（今加賀町）に住んだので一に賀邸と號した。和漢の學に通じた博識多才の人で、和歌漢詩を作り書に長じ、又狂歌狂詩を詠んだ。其の和歌の師坂光淳（靜山と號した）は、平淡な語を用ひて當意即妙の歌を詠んだ人であつたから、椿軒も其の風を承けて自由に和歌を作り、又機智にまかせて狂歌狂詩を詠んだ。彼の和歌を集めたものに『遺珠集』十卷がある。其の歌風は平凡で云ふに足らぬものであるが、狂歌には自由奔放の趣がある。彼の狂歌は門人唐衣橘洲が撰した『狂歌若葉集』（二冊天明三年刊行）に五十六首收められて居る。試みに二三首を抄出して見よう。

柳かげ風身にしみて笠ぬぎてしばしとてこそ立ちとまりつえ

寶船二三里さきにほの見えてはつゆめちかくなる床の浦

うすひ坂雨にしゐもちつく禰宜をかへしてよめばきねとこそなれ

椿軒は門人を集めて詩歌會を催す傍、屢狂歌をも作らせたのであつて、是がやがて天明調狂歌の興隆の源となつたのである。即ち明和六年に唐衣橘洲の四谷忍原横町の宅に、四方赤良等數人が相會して始めて狂歌會を開き、次いで翌明和七年の春には狂歌合を催した。此の狂歌合は三輪花信齋の筆に成つた樣々な畫を題にして、唐衣橘洲・平秩東作（へづつとうさく）・四方赤良・坡柳（本名未詳）・元木網（もとのもくあみ）・蛙面房懸水（醫師津田意安）の六人が詠んだ狂歌を十五番合せて、内山椿軒並に萩原宗固（靜山門人）に判を乞うたものである。近年林若樹氏によ

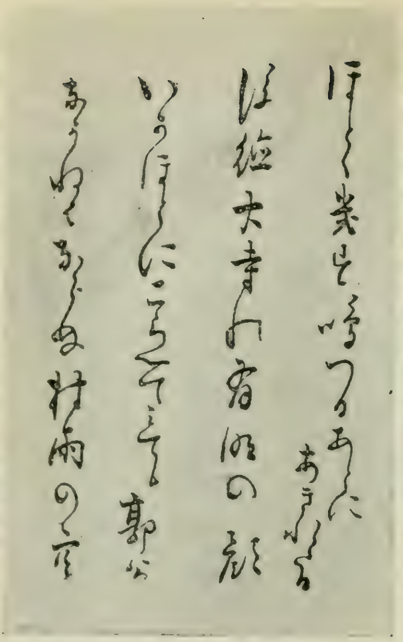
つて『日本名著全集』の『狂文狂歌集』の中に收められた『明和十五番狂歌合』が是である。さて橘洲宅の狂歌の會合に相會する者は、其の後漸く增加したのであるが、最も名聲の高かつたのは、四方赤良・唐衣橘洲・朱樂菅江の所謂狂歌三大家を始めとして、平秩東作・大根太木・元木網・其の妻智恵内子・大屋裏住・濱邊黑人等である。此等の人々は或は和漢の學に通じた士分であり、或は敎養あり資產ある町人であつて、狂歌は其の職業でなく全く趣味として嗜んだのである。從つて彼等の狂歌には、輕妙洒脱の中に一種の品位があつた。

狂歌三大家の傳記は下に述べるとして、それ以外の人々の略傳を記して置く。平秩東作は立松懷之の狂名である。もと尾張の人で、江戸に出て內藤新宿の馬宿の株を買ひ、稻毛屋金右衛門と稱した。儒學に通じ、數部の著書がある。寛政元年歿享年六十四。大根太木は松本氏で、通稱山田屋半右衛門、俳號を雁奴と云つた。町人辻番請負となり、飯田町中坂下に住んでゐた。歿年未詳。元木網は渡邊正雄、通稱大野屋喜三郎である。京橋北紺屋町で湯屋を營んでゐたが、晩年に薙髮して向島水神の森に閑居した。和學に通じ書にも長じてゐた。文化八年歿八十八。其の妻通女は卽ち智恵内子であつて、夫に劣らぬ狂歌の名人であつた。大屋裏住は久須美氏、通稱を白子屋孫左衛門と云ひ、初め更紗屋を業とし、後本町横丁の金吹町の大家となつた。野呂松人形の名人であつたと云ふ。文化七年歿七十七。濱邊黑人は斯波孟雅、通稱三河屋半兵衛の事で、本芝二丁目で書肆を營んでゐた。寛政二年歿享年七十四。

四方赤良

天明狂歌壇を代表する者は四方赤良である。本名を大田覃（文政六年歿七十五）通稱を直次郎（晩年に七左衛門と改めた）號を南畝と云ひ、又杏花園・巴人亭・遠櫻山人と號した。四方赤良・四方山人・蜀山人・寢惚先生などは其の戲號である。寛延二年に御徒組吉左衛門正智（自得翁）の嫡子に生れ、幼少の頃から漢學

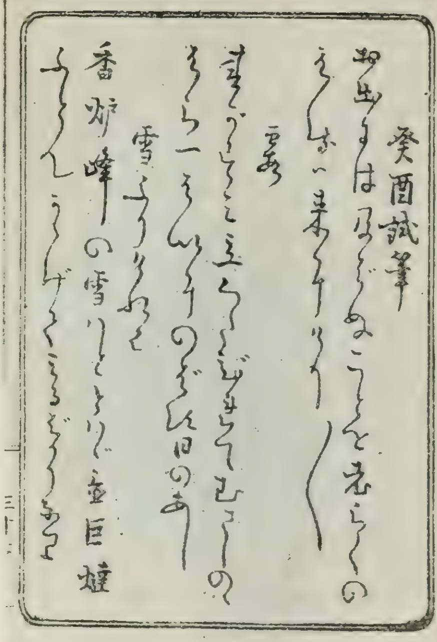
を松崎觀海〔太宰春臺門人〕宮瀨龍門に學び、又和歌狂歌を椿軒に學んだ。十七歳の頃父の職を繼いで漸次重く用ひられ、寛政十一年には大阪銅座の監査、同十二年には竹橋外御書物取調御用を仰せ付けられ、文化元年には長崎海外御用出役、同五年には武相二州の檢視御用出役を命ぜられ、同七年六十二歳で職を退いた。南畝は極めて博覽宏識の人であつて、其の著述は和漢古今雅俗に亙つて居り、而も早熟で十八九歳の頃から狂詩狂文狂歌を作り、漢詩は二十歳の頃既に一家の風をなしてゐた。其の後安永天明期には黄表紙洒落本噺本等を著作して、創作方面にも傑出した伎倆を示したが、生涯を通じて嗜んだのは狂歌であつて、四方側の首領として重んぜられ、後世狂歌と云へば直ちに蜀山人を想起せしめる程有名になつた。



蜀山百首（蜀山版下）

小說以外の著作は大抵『蜀山人全集』〔新百家說林五卷索引一〕に收められてゐる。蜀山人は斯くの如く多方面の學識と趣味とを抱いてゐた上に、頓才に富み性質が飄逸であつたから、其の狂歌狂詩狂文などには性格が現れて、著想が清新奇拔であり、且つどことなく氣品がある。彼は當時の一般の狂歌師と同じく、古典的な詩歌を滑稽化したり、緣語懸詞の如き言語上の技巧を弄んで居るけれども、それに囚はれる事

なく、清新な滑稽味の創造に成功して居るのであつて、在來の淺薄な言語の遊戯に過ぎなかつた狂歌は、彼に至つて始めて一個の文藝となつたのである。彼は又狂詩に於ても一派を創めたのであつて、當時京都の銅脈先生と對峙して、東西の二大家と稱せられた。（狂詩に就いては後に述べる）狂文は是より先風來山人の『風來六々部集』『飛花落葉』などがあつて以來、戯作者の間にも行はれたのであるが、南畝は巧みに和漢兩樣の狂文を綴つて奇才を揮つたのである。南畝の狂歌集には『めでた百首夷歌』（一册文化三年刊行）『蜀山百首』（一册文化三年刊行）などがあり、狂文集には六樹園編『四方のあか』（二册文化五年刊行）四方歌垣編『四方の留粕』（二册文化二年刊行）があり、狂詩狂文集には『寢惚先生文集』等（一六頁参照）がある。其の他狂歌を主とし狂詩狂文を收めたものに、四方歌垣が編んだ『千紅萬紫』（一册文化十四年刊）及び其の續篇の『萬紫千紅』（一册文化十五年刊）がある。



千紅萬紫（眞顏版下）

兩國の橋より長き春の日に鎗一三一本立つかすみかな

春雨の細きうみそにくらぶればふしだらけなる青柳の絲
一刻を千金づつにしめあげて六萬兩の春のあけぼの
ほととぎす鳴きつるあとにあきれたる後德大寺の有明の顔
をみなへし口もさが野にたつた今僧正さんが落ちなさんした
ひとつとりふたつとりては燒いてくふ鶉なくなる深草のさと

此等が蜀山人の著名な作である。

唐衣橘洲

朱樂菅江

蜀山人に次いで注意すべきは唐衣橘洲と朱樂菅江とである。橘洲の本名は小島謙之、字は温之、通稱源之助（享和二年歿六十歳）であつて、號を醉竹庵橘洲と云つた。唐衣と云ふ號は其の師の椿軒が附けたのである。田安侯に仕へた士であつて、四谷忍原横町に住んだ。朱樂菅江の實名は山崎景貫、字は道父、通稱は郷助（寛政十年歿六十一）であつて、幕府の御先手與力を勤め、牛込廿騎町に住んでゐた。彼も亦椿軒の門下であつて、初め菅江と號したが、菅公を憚つて一時漢江と改め、後又もとの如く菅江とした。朱樂の號は蜀山の家に同好の者と相會した夜、行燈に「あけらかん」と落書したのに始まると言はれて居る。橘洲菅江の二人は、蜀山に比べれば何れの點に於ても一歩を讓るのであるが、其の狂歌にはそれぞれ特色があつて、天明狂歌の巨擘たるに恥ぢない。試みに此の二人の狂歌を比較して見ると、橘洲のは奇拔にして輕妙であり、且つ措辭格調に苦心の痕が見え、菅江のは或は雄麗巧緻に、或は輕快自由であつて、聲調の美を具へて居る。唐衣橘洲の代表作は、

ほとゝぎす須磨の浦ではなけれどもなれをまつ風村雨の空

菜もなき膳にあはれは知られけりしぎやき茄子の秋の夕暮

からうすの音うちやめば小夜砧耳についたるゆふがほの宿

ひとり見て相手ほしさのもみぢ狩鬼ともくまん林間の酒

次に掲げるのは朱樂菅江の名高い作である。

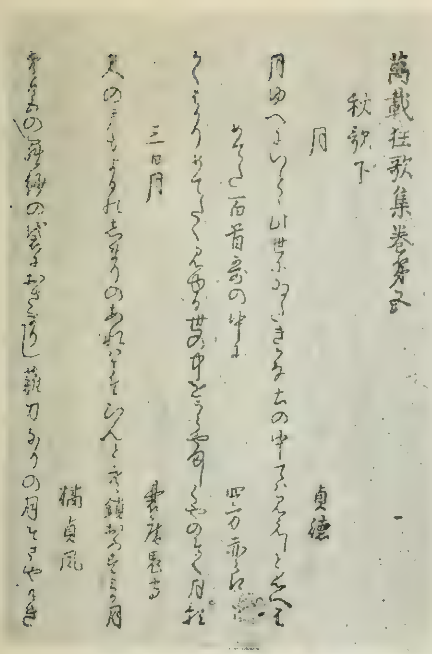
やれ／＼としほのひるめしいそぐなり青うなばらのへるにまかせて

まれにくる蚊はたたいてもふせぐべしいぶせあたかの關の杉のは

よせぎれと見ゆるお寺の錦かなどこもかしこもはぎだらけにて

里の子に追ひかけられていが栗の地を逼げまはる風のはげしさ

天明期の狂歌集



萬載狂歌集

天明期の著名な狂歌作者にはそれぞれ家集があるが、其の外に當時の狂歌集も續々刊行せられた。其の著しいものは唐衣橘洲が撰した『狂歌若葉集』二冊天明二年刊行 四方赤良撰の『萬載狂歌集』二冊天明三年刊行『德和歌

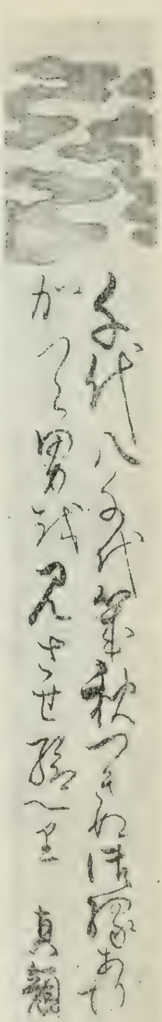
文化文政期の狂歌

後萬載集』二冊天明五年刊行『狂歌才藏集』二冊天明七年刊行朱樂菅江撰の『故混馬鹿集』（初め狂言鶯蛙集）二冊天明五年刊行の五部であつて、天明狂歌の精華は此等に網羅せられて居る。なほ家集撰集の外に狂歌の作法を說いた著書が上梓せられ、又當時の狂歌流行の盛況を窺ふべき資料としては、狂歌師細見ともいふべき普栗釣方撰『狂歌知足振』一冊天明三年刊行や、赤良・橘洲・菅江の三人の手に成つた狂歌評判記の『俳優風流』三冊天明五年刊行などが現れた。

橘洲等が組織した狂歌會は、其の後同好者が四方から集まつて年々盛大に赴いたが、天明の末頃には各巨頭は門下を率ゐて一社を作り割據の姿となり、寛政の末頃には更に分裂して何側若しくは何連と稱する多くの社を生じ、互に競爭するやうになつた。赤良の四方側、橘洲の醉竹側、菅江の菅江側、木網の落栗側等は其の著しいものである。當時此等の社中にあつて狂歌を詠んだ者の中には、幕臣學者歌人俳人戲作者浮世繪師俳優書肆遊女等があつて、各階級各職業を網羅したのである。二三の例を擧げれば、戲作者戀川春町は酒上不埒と號し、戲作者で浮世繪に長じた山東京傳は身輕折助と稱して狂歌を作り、名優市川白猿（五代團十郎）は狂名を花道列爾と稱して堺町連を率ゐ、又畫工勝川春章・同春英・鳥居清長・喜多川歌麿等も狂歌に巧みであつた。かくて狂歌は同じく現代社會を寫す事を主眼とする戲作浮世繪芝居などと密接な關係を結んで、益民衆文藝として廣く喜ばれるやうになつた。例へば黄表紙洒落本に狂歌を挿入し、浮世繪版畫にも一首の狂歌を掲げるものが多く、又狂歌集に繪入本が刊行せらるるが如きである。

鹿都部眞顔

寛政から文化の頃江戸の狂歌は實質的には既に衰退したのであるが、量的には隆盛の極點に達したのである。而して當時牛耳を執つたのは狂歌堂眞顔と六樹園宿屋飯盛である。眞顔（文政十二年歿七十七）は通稱を北川嘉兵衛と云ひ、日本橋數寄屋町に住み、家守を業とする傍汁粉屋を營んでゐた。若い時から文才



眞顔筆蹟

（福井久藏氏藏）

があつて、戀川春町に就いて戯作を試みたが、（戯作名を戀川好町と云つた）後に蜀山の門に入つて狂歌を學び、號を狂歌堂鹿都部眞顔と云ひ、後に蜀山から四方の號を讓られて四方歌垣と稱した。彼が四方側の判者となつて以後は、專ら點料によつて生活したのであつて、狂歌を專業とする事は眞顔に始まると言はれて居る。狂歌の家集に『蘆荻集』（四冊文化十二年刊）狂文集に『四方歌垣戯文草』（一冊文化七年刊行）等があり、撰集には『類題俳諧歌集』（六冊文化十一年刊）其の他多くの著がある。

宿屋飯盛

次に宿屋飯盛（文政十三年歿七十八歳）は和學で名高い石川雅望、通稱糠屋七兵衛（後に五郎兵衛と改めた）の戯號であつて、六樹園・五老齋・逆旅主人などと號した。小傳馬町三丁目に宿屋を營んだ浮世繪師石川豐信の子で、幼時から和漢の學を修め、初めは父の業を繼いで旅宿業を營んだが後に廢し、天明三年頃蜀山の門に入つて以來文藝に親しんだ。其の後寛政三年に危禍に遇つて後は專ら和學に耽り、辭書で名高い『雅言集覽』五十卷や、源氏の註釋『源注

餘滴』二十卷などの著述を完成した。彼は擬古文の大家であつて、自由に雅言を用ひて『北里十二時』『都の手ぶり』の如き隨筆や、『近江縣物語』『飛驒匠物語』『天羽衣』『梅が枝物語』等（一一二一頁參照）の雅文小說を書き、又『しみのすみか物語』や『吾嬬那萬俚』の如き笑話や狂文などを綴つた。此等の雅文小說や戲文の上には、よく彼の學殖が現れてゐて、他の狂歌師の追隨を許さぬものがある。狂歌の家集には野崎左文氏編『六樹園家集』（新群書類從所收）があり、撰集で世に行はれたものには明和安永以降の狂歌を選んだ『萬代狂歌集』（四册文化十年刊行）等がある。飯盛は學識を誇つて他に依ることを欲せず、一方眞顏は町人氣質の社交家であつた爲に、兩人の間はとかく不和であつたが、文化の末頃眞顏は狂歌を古の俳諧歌の遺風であると主張して、頻りに古語を用ひ又上品な格調を唱道し、飯盛は狂歌を落首の名殘であると說いて、わざと卑俗な調を主張し、互に門下を率ゐて激烈な競爭を續けた。當時各の門人三千と稱して狂歌壇未曾有の盛況を呈した。左に兩人の狂歌の例を擧げて置く。

鹿都部眞顏

あらそはぬ風の柳の絲にこそ堪忍袋ぬふべかりけれ
かすていらかすむ夕べは杉折の杉間の月もおぼろ饅頭

宿屋飯盛

獏のすむ野邊ともしらず旅寢してうまき都の夢をくはれき
なき母の乳房をこふるおり〳〵は數珠をひねりて泣きやみぞする

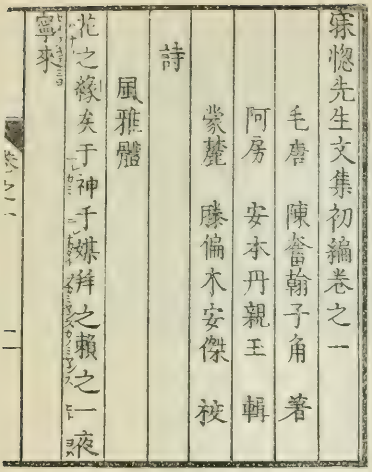
初咲の梅は幹か市びとの二りん三りんあらそうて見る
背も腹も爺にくはれてかゆければよるの衣をかへしてぞ着る
蛤にはしをしつかとはさまれて鳴たちかぬる秋の夕ぐれ
歌よみは下手こそよけれあめつちの動き出してたまるものかは
世わたりの道にふたつの追分やたからの山に借錢のやま（以上狂歌才藏集）

眞顏飯盛二人の狂歌には秀逸もあるが、其の門流に至つては言語の末技に囚はれて、狂歌の眞髓から遠ざかつた者が多く、其の流行の盛大な割合に傑出した作者はなかつた。かくて文政六年に狂歌界の首領四方赤良が世を去り、同十二年には眞顏が歿し、翌年天保元年には飯盛も卒して、天明調は漸次衰へて行つた。其の後天保の頃は眞顏の流を汲んだ四方側と、飯盛の遺鉢を承けた六樹園側の外に、多くの派があつて互に門戸を張つてゐたが、其の作風は平凡で言ふに足らぬものであつた。當時芍樂亭菅原長根通稱次郎右衛門弘化二年歿七十九が俳諧體の狂歌を唱へて文政調と稱し、一時勢力があつたが、到底頽勢を挽回する事は出來なかつた。かくて天保以後江戸の狂歌は彌衰頽し、一方關西の貞柳調の末流も亦凋落して見るべきものがなかつた。

二　狂　詩

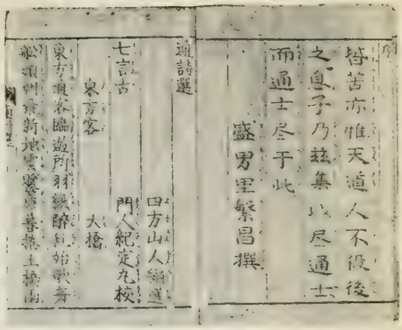
狂歌狂文が流行した天明期はまた狂詩が盛に行はれた時である。狂詩の源流は平安時代に發してゐ

るいであつて、三浦安貞は其の著『詩轍』に、『本朝文粹』に載つてゐる源順の「題二夜行舍人一狂歌」を以て權輿として居る。併し近世狂詩の一源流と見られて居るのは、平安末期以來漢文學者の餘技として行はれた聯句であつて、五山の詩僧の作には卑俗滑稽を宗とした狂詩に近いものが多い。又五山の詩僧の中には、支那の狂體の詩に倣つて、狂詩を作る者が少くなかつたのであつて、此等は聯句と共に後の狂詩の源をなすのである。五山詩僧の狂詩で遺存するものは、慶長元和の頃の著名な儒僧文之和尚（元和六年寂六十七）の『南浦文集』下卷所收の、「戲言」と標記せられたものを以て最古とするのである。其の後元祿享保の頃には、詩人の間に餘技として狂詩を作る者が漸く多くなり、服部南郭祇園南海等もこれを試みて居る。次いで寶暦十一年には、桂井蒼八著『古文鐵砲前集』同後集が刊行せられ、又其の頃都賀庭鐘編の『漢國狂詩選』なども上梓せられた。前者は『古文眞寶』に擬した狂文狂詩集であり、後者は唐以降の支那の狂詩を選んだものである。此の頃狂詩を作つた人には、庭鐘の外に内山椿軒や平賀源内等があつたが、椿軒の門に學んだ大田南畝は京都の銅脈先生と共に天明狂詩の祖と云はれて居る。



寐惚先生文集

大田南畝は狂詩の方面では寐惚先生と稱した。明和四年に刊行した『寐惚先生文集』（二卷。以下狂詩狂文集は概ね一卷である）は、


皆苦亦惟天道人不役後之息子乃茲集以尽通士而通士尽于此
盛男里繁昌撰
通詩選　四方山人編選　門人紀定丸校
七言古
東方客　大橋

李不盡通詩選

狂詩史上で劃期的に名高い集であつて、是より江戸上方の狂詩狂文集が續々刊行せられた。『寢惚先生文集』の卷頭には風來山人並に服部南郭の序を揭げ、卷尾に物茂卿の跋を載せてゐる。南畝は十七歳の頃から狂詩を作つたのであつて、此の集の成つたのは十九歳の時である。當時の狂詩の體には、古詩律詩五言絶句七言絶句など樣々のものがあり、平仄押韻も正詩に準據して居るが、多くは押韻を守るのみで平仄は顧慮せられてゐない。南畝の狂詩は「唐宋の法を用ひ、當時の洒落と風雅を煉りまじへ」（四方歌垣の語『萬紫千紅』序）たもので、古典趣味を基調としてゐる事は彼の狂歌と同様である。

江戸四季遊　春　四首之中

川長兩國橋　花火燃ニ前後一　歌響屋形舟　皆翻ニ妓子袖一

観ニ大名行列一

車上ニ屋根一馬引レ溝　路行人爲ニ排傍一留　先供通過鎗持出　奴穴高ニ於檀那頭一　（寢惚先生文集）

南畝は其の後『唐詩選』に擬して『李不盡通詩選』（天明四年刊行）『李不盡通詩選笑和』（天明七年刊行）『狂詩諺解』（天明七年刊行）を刊行した。『李不盡通詩選』は『唐詩選』の七言古詩に擬し、『李不盡通詩選笑和』は同じく五言絶句に擬

し、『狂詩諺解』は同じく七言絶句を振つたものである。而して後の二部には俚諺解を附して居る。何れも南畝の學才と機智を窺ふに足るものである。試みに『李不盡通詩選』の卷頭の一首を原詩と對照して掲げて見よう。

東方客　　大橋

東方通客臨二遊所一　羽織醉亂始二歌舞一　船頭朝飛新地雲　暖簾暮捲土橋雨
仲町櫓下切悠悠　山開祭度幾春秋　三十三間堂何在　如レ矢光陰空自流

滕王閣　　王勃

滕王高閣臨二江渚一　佩玉鳴鸞罷二歌舞一　畫棟朝飛南浦雲　朱簾暮捲西山雨
閒雲潭影日悠悠　物換星移幾度秋　閣中帝子今何在　檻外長江空自流

江戸の寢惚先生と對峙した京都に於ける狂詩界の大立物は銅脈先生（享和二年歿享年未詳）である。京都の人で姓を畠中名を正盈また賦と云ひ、字は子允、通稱は頼母觀齋と號した。銅脈先生は其の戲號であつて、一に太平館主人とも稱した。聖護院宮の諸大夫であつたが、性磊落不羈であり、博識多才の人であつて、詩に長じ狂詩に巧みであつた。又滑稽本の作者としては『針の供養』や『風俗三石士』の如き、注意すべき著作を遺してゐる。銅脈が狂詩を作つたのは南畝より寧ろ早いのであるが、彼が胡逸滅方海の戲號で最初の狂詩狂文集『太平樂府』を刊行したのは、『寢惚先生文集』に後れる事二年後の明和六年である。南畝は該博であり機智に長じてゐたが、銅脈は寧ろ鋭敏な觀察力と犀利な諷刺に長じ、其の詩

風には高尙な品位があつて、時に南畝を凌駕するものがある。其の狂詩集には『太平樂府』の外に『勢多唐巴詩』明和七年刊行『太平遺響』安永七年刊行『狂詩畫譜』天明六年刊行『太平遺響二編』寛政十一年刊等があり、又寛政二年に南畝と共に著した『二大家風雅』がある。彼が狂詩集に太平の二字を用ひて以來、是に倣つた集が續々刊行せられた一事によつても、其の狂詩が後世模範とせられた事が察せられる。銅脈の狂詩の代表作は七言古詩の體によつた「婢女行」太平樂府所收であるが、長篇であるから割愛して、五言七言の絶句體のもの各一首を掲げて置く。

鈴　鹿

鈴鹿多二雲助一　山中博奕催　伊勢道中六首之中
負終當二燒火一　散作二護摩灰一　（太平樂府）

獨二宿先斗町一

蕎屋去時正半宵　川原霜白往來寥
花兒火影冷燒レ薦　按摩笛聲夜過レ橋
藝子仲居送レ客返　衛禽鷗鴨依レ沙嚶
酒醒喉渴未レ須レ睡　處々寒彈向レ曉悄　（太平遺響）

江戸の南畝京都の銅脈を中心として東西に狂詩家が續出し、又南畝と銅脈が互に唱和して以來之に倣ふ者もあつて、狂詩は三都を始め都鄙に亙つて興隆した。江戸の南畝に從つて狂詩を作つた者は多かつたが、中でも勝れてゐたのは腹唐秋人及び閑雲先生の二人である。腹唐秋人文政四年歿六十四は江戸の書家中井敬義、通稱嘉右衞門の戯號である。狂歌狂詩を能くし狂詩の書に『本町文醉』天明五年刊行がある。書名は『本朝文粹』を捩つたのであるが、本町は著者が江戸本町に住居したのに因んだのである。所收の

作は主として江戸の景物を詩題としたものである。闇雲先生の本名は詳かでないが、其の著『娛息齋詩文集』（明和七年刊行）の卷頭に「闇雲先生者生常陸國、住神田八丁堀」とある。此の集には狂詩二十四首狂文八章を收めてあつて、詩才はかなり勝れて居る。

過二墨水一

秋葉二園梅兒墳一　下戸上戸相與群　獨羨屋船二上節一　燒餠焦レ胸未レ堪レ聞

顧つて上方を見ると、銅脈と前後して毛護夢先生（本名未詳）片低先生（本名未詳）等があり、又大阪に天所先生（實名未詳）等があつたが、何れも銅脈には遠く及ばなかつた。但し『毛護夢先生紀行』（明和八年刊行）は東海道中の狂詩四十一首から成るものであつて、稍異彩を放つて居る。かくて天明以後狂詩は江戸上方共に衰へたのであるが、文化文政頃に名を成した者に江戸の方外道人・半可山人等があり、京都に安穴道人・愚佛等があつて、專ら平易流暢な平民的狂詩を鼓吹した。方外道人は本名を福井健藏、號を梅庵と云つて代々醫を業とした。狂詩の著書に『茶菓子』（初篇・二篇天保四年刊行）『江戸名物詩』（天保七年刊行）『千果詩』（弘化四年刊行）等がある。南畝に次ぐ狂詩の名人であつた。半可山人（本名植木八三郎）は南畝に私淑したやうであるが、伎倆は遙かに及ばなかつた。『半可山人詩鈔』（天保九年刊行）の著がある。當時上方には安穴愚佛等が輩出して、狂詩は江戸よりも遙かに盛であつた。安穴道人は本名を中島規（安政二年歿七十七）と云ひ、字は景寬、通稱文吉、戲號を椋隱と云つた。京都の儒者であつて詩文と書に長じ、傍洒落本を書き狂詩を能くした。同好の狂詩家の作品をも收錄した集に『太平新曲』（文政二年刊行）『太平二曲』（文政三年刊行）『太平三曲』（文政四年刊行）があり、又自家の集には『天

保佳話」天保十一年刊行「天保佳話二編」天保十一年刊行等がある。其の作は罵倒に近いものであつて滑稽味に乏しい。

江戸者嘲レ京

木高水清食物稀　人人飾レ表内證晞　牛糞路連二大津一滑　茶粥音向二叡山一飛
算盤出合無二立引一　筋壁連中假二權威一　女雖二奇麗一立小便　替物茄子怕二數違一　（太平新曲）

安穴道人の許に集まつた狂詩家の中で最も名を知られたのは愚佛本名未詳町人かである。後に獨立して銅脈二世と自稱して、都鄙に門人があつたが、其の詩風は平凡卑俗であつて機智滑稽に乏しい。其の著には「續太平樂府」文政三年刊行「太平文集」文政六年刊行「續太平文集」文政七年刊行「太平風雅」文政十一年刊其の他がある。

堅田落雁

日暮雁下堅田涯　爲レ跡爲レ先行列斜　寄レ言此邊獵師夥　先達附レ氣莫レ懸レ霞　（續太平文集）

犬咬合

椀々椀々亦椀々　亦々椀々又椀々　夜暗何疋頓不レ分　始終只聞椀々々　（續太平樂府）

此等によつて察せられるやうに、愚佛の狂詩は極めて平民的であつて、天明期の作風に比して著しく墮落して居る。蓋し當時の狂詩家は漢詩文の素養を缺き、機智頓才に乏しかつたから、其の詩風は和習を帶び卑俗に流れたのである。要するに狂詩の隆盛期は天明期であつて、其の後の作は徒らに天明二大家の後塵を拜して新しみがなく、更に天保以後は野卑猥雜に流れて、殆ど見るに足るべきものが無くなつた事は狂歌と同樣である。

其の後幕末には一時全く衰へたが、明治になつて再び濹上漁夫（成島柳北）醉多道士（田島象二）などが現れて、其の鼓吹に努めてより、新聞雜誌の狂詩欄が一時振つたのであるが、明治三十年の頃から狂詩は姿を潛めるに至つた。

三　雜　俳

雜俳

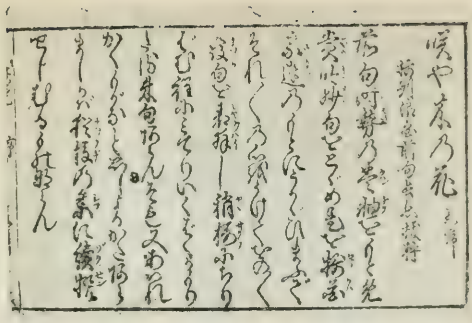
寶暦前後から文化文政期までを中心として、流行した短詩形の民衆文藝を總括して雜俳と云ふ。其の主要なものは前句附と、それから分離獨立した川柳であるが、此の外に笠附(冠附)・沓附・小倉附・段々附・もぢり・折句・五文字附など種々の形式のものがある。

雜俳の種類

前句附は例へば「こりや尤もな思案なりけり」に「笠にある名をば呼生ける行倒れ」と附けるやうに、七七の前句に五七五の附句を附けるのが普通であるが、五七五に七七を附ける事もある。笠附は上五文字を題にして其の下に七五の二句を附けるのであり（例「氣味惡い――まだありさうな足袋の砂）」、沓附は下五文字を課して之に上五と下七を附けさせるのである。（例「思ふさま立あと叩く――額の蚊」）小倉附は笠附の一種で、小倉百人一首の歌の初句を題にして、其の下に七五の二句を附けるのであり、（例「きりぎりす――啼くや霜夜の妹の機」）段々附は五文字の題に七五を附け、更に其の下五を題にして七五を附け、此の方法を段々に續けるのであるが、同じ句は繰返して書かない事になつてゐる。折句は和歌の折句に倣つて、三音又は二音の題の一音づつを各の句に詠み込むのであるが、其の形式には種々のものがある。次に「もぢり」は題の中七に懸詞のやうに二つの意味を持たせて、上五と下五に連ねて各が別々の意味になるやうに仕立てるのであり、（例へば「親に孝するが第一竹細工」の「するが」は爲るの意と駿河を兼ねてゐる）五文字は笠附を一層平易にしたもので、題も附句も字數の一定しない狂俳である。川柳の形態に就いては下に述べる。要するに雜俳の中で文學として見るべきものは、前句附と川柳であつて、其の他は極めて低級な遊戯的文藝である。而して附け方の稍困難なものは一時行はれてやがて廢れた。

前句附の起原

雜俳の起原であり又主流として最も長く行はれたのは前句附である。前句附は一つの前句を題にして、多くの附句を附けるのであるが、斯かる附合は古く連歌や宗鑑の俳諧連歌などにも行はれ、其の句風も殆ど前句附と異なる所はない。併し雜俳の前句附は、貞門の俳諧の附合から二句の附合だけを獨立させたものを起原とするのである。卽ち貞門の俳諧には、既に述べたやうに煩瑣な法式が設けられてゐたから、入門者に對しては附合練習の一方便として前句附を奬勵したのであつて、夙に萬治頃から行はれてゐた。俳諧修業の爲の前句附は先づ上方に起り、次いで江戸にも行はれたのであつて、是が三都を始め田舍にまで廣く流行するやうになつたのは、元祿期になつてからである。元祿頃には貞門及び談林の末流を汲む人々を中心として、大抵の俳諧師は前句附の點者を兼ねたのであつて、其の高點集も盛に刊行せられた。前句附の撰集として現存する最も古いのは、大阪の靜竹窓菊子編著の『咲や木の花』（横小本一巻 元祿五年刊）と『難波土產』（横小本一巻 元祿六年刊）であつて、其の書式の横小本(普通の俳書は半紙本)はそれ以後雜俳集の定型となつた。當時點者として最も名高かつたのは、上方では井原西鶴・前田由平・富尾似船・高村和及等であり、江戸では岸本調和・立羽不角等であつた。



咲や木の花

元祿の初頃までの前句附は未だ俳諧の附合と大差のないものであつた。例へば

前句 のぞけば暗き夕顔の家
附句 僧ひとり淋しき雨の夜をわびて
前句 寢てゐる顔をつくづくと見る
附合 二人目の醫者の藥をたのみにて（咲やこの花）

然るに其の後附句に興味の中心を置いて、奇警な著想を喜ぶやうになり、又點者は敎養の乏しい者にも普及させようとする結果、前句を簡易にする傾向を生じて、意味の漠然としたものや同語を繰返すものが多くなつた。例へば

一方は海一方は山
重箱にたたみ込んだる組み肴
まちつとの事く
伸び上り蚊屋のつり手に姉を呼び（寶の市）
さりとはくくく
鰒汁をくはぬたはけに喰ふたはけ（長ふくべ）

かくて前句附は時代を下るにつれて彌民衆化して雜俳となつたのであつて、後に附句が獨立する兆は既に右に擧げた例にも見えてゐる。民衆的な前句附が興隆した元祿期には、他の雜俳も亦次々に流行

した。即ち笠附は京都の堀内雲鼓が鼓吹して以來次第に流行し、上方では笠附のみを集めた増田圓水撰の『俳諧住吉躍』(元祿九年刊行)以下次々に出版せられ、江戸では松淵・喜至撰の『冠獨步行(かむりひとりあるき)』(元祿十五年刊)以下續々發刊せられた。其の後元祿の末頃には前句附と笠附とを併せ載せたものが刊行せられ、寶永の初頃には各種の雜俳を集めた草芬堂撰『誹諧萬人講』(寶永二年刊行)の如き書が出版せられた。(沓附・小倉附・段々附等は元祿期に發生した)かくて俳諧入門の爲に行はれた前句附並に冠附は、元祿末期から雜俳となつて益廣く流行したが、其の中心は上方にあつて、其の點者は俳諧師が之を兼ねてゐた。試みに當時最も活躍した點者を擧げれば、大阪の來山・園女・才麿・團水・海音・文流等、京都の似船・鞭石・雲鼓・鷺水等である。而して江戸は未だ上方に及ばなかつたけれども、不角・調和に次いで現れた露月・竹丈・蝶々子・白應等は雜俳專門の點者であり、彼等を中心に興隆した江戸の雜俳は上方と異なつて、初めから俳諧から獨立して流行し、寶永正德頃には俳諧の系統を引いた前句附にも影響を及ぼすに至つた。

雜俳流行の弊

さて前句附及び笠附の點者は、元祿の頃既に高點句に對して景品を與へる事が廣く行はれてゐたが、雜俳が流行するにつれて投機的な點取を目的とする者が多くなり、寶永正德の頃には博奕に等しい三笠附が最も盛に行はれた。笠附・三笠附などの流行と其の弊風に關しては、太宰春臺が『獨語』の中に次の如く記して居る。

> 元祿の初の頃より前句附と云ふこと起れり。其の法宗匠より下の句を一句出だして、多くの人に上の句を附けさせて、點に第一第二の品を命じて、甲乙の次第に從ひて賞を行ふ。其の賞は或は布帛或は器物など、そ

こばくの直なる物を出だす。布帛器物に望なきものは、其の直なる金銀をとる。此の賞をえんとて、貴賤となく我も〳〵と句を附けて、日々に點錢を費す。是則博奕の類なり。この事盛に行はれて、世の俗人皆是を好むほどに、下の句に上の句を附くるも猶むづかしとて、宗匠より上の句初の五文字を出だして、次の七文字五文字を諸人に附けさすることになれり。是を冠附とも笠附とも云ふ。かくいやしきわざになりぬれば、下部のわらはけすまでも俳諧と云ふことを知りて、笠附して褒美とらんとするほどに、詞いよ〳〵いやしくなれり。寶永の頃より冠の五文字を三つ出だして、三つの冠に各七文字五文字を附けさせて勝負を分くることあり。是を三笠附と云ふ。是いよ〳〵博奕にちかし。其の後五文字の冠をも出ださず、下の七文字五文字の詞をもやめて、ただ數の文字を封じて、外より此の數をはかりて札をいれて、其の數のあたれるを勝として、金錢をとらすることになりぬ。ここに至りては正しく博奕なれども、本の名を存して猶三笠附といふ。この三笠附盛になりて、賤しき者は云ふに及ばず、士君子もこれをなしてとくつかんとするほどに、德はつかずしておほくの財を費し、身を失ひ家を亡す者數をしらず。此の事上に聞えて、享保の初よりきびしく三笠附を禁ぜらる。其の後禁を犯して刑罰にあふ者あれども、今に至るまで猶たえずと聞ゆ。和歌の流其の末變じて博奕となるべしとは、住吉玉津島の神もいかでかしろしめさん。淺ましく悲しきは俳諧のわざはひならずや。

享保以後の前句附

京保年間に富籤賭博に類する遊戲的雜俳を禁止せられた爲に前句附は一時衰へたが、元文以後江戸を中心として再び興隆し、寶曆から安永天明にかけての頃其の頂上に達した。此の頃江戸に於て流行

萬句合

したのは前句附の萬句合である。元文寛保頃萬句合の點者として最も活躍したのは蝶々子・收月・苔翁等であつて、彼等の撰した萬句合の拔書集は相踵いで刊行せられた。而して此等に收められてゐる附句は、輕妙にして警拔なものが多いのであつて、やがて川柳點によつて代表せられる寶曆以後の句風の先驅となつて居る。次いで寶曆明和頃になると萬句合は益盛況を呈し、江戸の點者は二十數名に達したが、就中最も名聲の轟いたのは柄井川柳である。川柳が萬句合の點者となつたのは、寶曆七年四十歳の時からであつて、一會の寄高は二萬五千六百餘句に達したと云はれて居る。（柳樽第三十篇の序參照）以て其の隆盛を察すべきである。萬句合は點者が豫め前句の題を出して置き、諸方面の應募者から送り屆けられた附句の中から秀逸を選んで、是を半紙一枚に細字で五六十句づつ記し、二三枚乃至五六枚を一部として上梓する例であつた。其の形が伊勢暦に似てゐるので暦摺と呼ばれた。玆に川柳に就いて記すべきであるが、是に先立つて川柳點其の他の前句附の句風に、多大の影響を與へた江戸座の俳諧師の前句附に就いて簡單に述べて置く。

江戸座の前句附

江戸を中心に萬句合が隆盛を極めた頃、其角の流を汲む江戸座の俳人は一般の流行に押されて、自己の俳風に極めて近い前句附の點者となつて、江戸獨得の輕妙洒脱な句風を鼓吹した。享保頃前句附の點者として最も頭角を現したのは、其角門下の初代深川湖十（元文三年歿六十三）を始めとして、自在庵祇徳（寶曆四年歿六十四）慶紀逸（寶曆十一年歿六十八歳）等である。殊に湖十は三代引續いて名聲が高く、湖十點は川柳點と相竝んで世に喧傳せられた。而して此等の點者が選んだ前句附の高點句集には、前句を省いて單に附句のみを擧げ

たものが多く、其の句風には滑稽諷刺皮肉の妙を得て川柳點に近いものがある。就中紀逸は巧みに卑俗な人情に警句を吐き、其の社中の秀逸を撰集した『誹諧武玉川(たまがは)』十八篇十八冊は長い年月に亙つて刊行せられた。即ち此の集の初篇が刊行せられたのは寛延三年であつて、當時大いに歡迎せられたので、引續き寶暦六年までに十篇を刊行し、其の後は『燕都枝折(えどしをり)』と改題して、安永五年までに八篇(六篇以下二世紀逸の撰)を續刊して都合十八篇となつた。此の集は川柳點の『誹風柳樽』に先立つて續刊せられたものであるが、同時代の佳作を選んだものであるから、兩者の間には同吟又は類句が極めて多い。此の點から考へても、江戸座の前句附が川柳點に影響する所の多かつた事が察せられる。今紀逸點の附句の例を示す爲に、『武玉川』の初篇の中から數句を抄出して置く。尤も『武玉川』は前句附の前句を省略したものであるから、『柳樽』と異なつて五七五の附句の外に、七七の附句をも收めて居る。

冬籠ひとり口利く唐本屋
美しい娘の供のそり返り
雫の傳ふさを鹿の角
蠅をうつして代る關守

柄井川柳

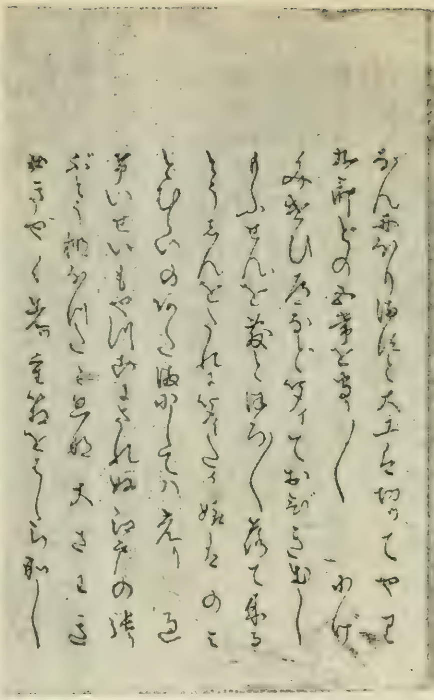
柄井川柳(寛政二年歿七十三)は幼名を勇之助字を正通と云ひ、後に父の名を襲うて八右衛門と稱した。號を川柳別號を緑亭又は無名庵と云つた。代々淺草新堀端龍寶寺(寛永寺の末寺)の門前に住み、其の附近の名主を勤めてゐたので、川柳は寶暦五年に父が隱退した後其の職を嗣いだ。川柳は初め談林調の俳諧を學んだ

が、寶暦七年（四十歳の時）に前句附の點者となり、萬句合によつて其の名聲を揚げ、やがて湖十點紀逸點を壓倒するに至つた。偶慶紀逸の『誹諧武玉川』が初篇出版以來好評を博したのに刺戟せられて、明和二年に川柳の門人呉陵軒可有（別號木綿居士）が、川柳點の萬句合の中から佳句七百五十六句拔萃して、『いもせ川柳樽』と題して小本一冊を刊行したのは、即ち『誹風柳多留』の初篇である。其の後『柳樽』は年々刊行せられて世に持て囃され、遂に他の附句集を全く壓倒したが、寛政二年に二十三篇（是までを古川柳と云ふ）を發行した年、川柳は世を去つたので、翌年刊行の二十四篇の卷頭には川柳の肖像を掲げ、（圖版參照）卷末には追善句を載せた。（『柳樽』の編者可有は川柳に先立つて歿し、第二十四篇から第二十九編までは、社中の和笛老人が後を承けて編者となつた。）


川柳肖像（柳樽所載）

初代川柳の歿後長男彌惣右衞門が後を繼いで二世川柳となり、次いで其の弟の八藏孝達が三世川柳となつて家は絶えたので、江戸町奉行附同心をしてゐた同社中の人見周助（風梳庵賤丸と號す）が推されて四世川柳となつた。二世三世は全く宗匠としての詩才が無く、爲に川柳は一時衰運に向つたのであるが、四世は中興の祖と云はれた。四世の時川柳は前句附の形式から全く離れて、最初から一句立として作られるやうになつたから、名稱を改めて俳風狂句と云つた。時に天保三年である。（五世の時更に柳風狂句と改めた。）川柳の見るべきものは初代川柳の頃の諸篇であつて、其の後は漸く古川柳

の精髓を失つて卑猥な風俗を寫し、不自然な笑を強ひ、わざとらしい技巧を弄する低級な狂句となつて行つた。併し川柳の家名は次々に嗣ぐ者があつて、六世の時に江戸時代を終り、『柳樽』は天保九年發行の百六十七篇まで續刊せられた。（其の家名は現代に傳はつて十三世に及んで居る。）



柳　樽（第四篇）

『柳樽』は『武玉川』の例に倣つて、前句を省いても意味の通ずる附句を集めたのであるが、後には前句附から完全に獨立して十七文字から成る短詩の一體となつた。是を川柳と稱したのは、川柳點獨得の句風が他を壓倒して廣く行はれた爲であつて、後には川柳點にあらざるものをも總括して川柳と呼ぶやうになつた。川柳は既に述べたやうに、俳諧の附合修業の方便としての前句附の附句が獨立したものであるから、俳諧の發句と相似てゐる。併し發句には季題を詠み込み、又「や」「かな」「けり」などの如き切字を用ひる事を原則としてゐるが、（例外のある事は勿論である）川柳はもと附句であつたから、此等の法則の束縛を受ける事はない。是が發句と川柳の相違する最も著しい特徴であるが、なほ川柳は人事趣味を主とし、滑稽諷刺皮

肉を宗とするものであり、又表現は大體に於て口語調である。尤も此等は發句にも見られるのであるが、それは部分的であつて、川柳の如く之を基調としてゐない點に於て區別せられる。

川柳は主として町人社會が生んだ民衆文藝であるから個性の現れはない。俗語を用ひ卑近な題材を捉へて、世相の矛盾や反面を諷刺的に寫し、人情の缺陷や弱點を皮肉に穿ち、又嚴粛な史實や古典的な詩歌を愚弄して、無邪氣な滑稽を表現したものが多く、殊に笑の中に眞理眞情を語り、卑俗な人情風俗の中に詩趣を見出し、また歌人が顧みなかつた卑近な自然美を捉へてゐるのは川柳の獨壇場である。左に『柳樽』初篇の中から佳句を抄出して置く。

足洗ふ湯も水になる旅戻
飯事の世帶くづしが甘えて來
振袖はいひそこなひの蓋になり
國の母生れた文を抱きあるき
前垂で手を拭く下女の取廻し
袖口を二つ鳴らして嫁をよび
源左衞門鎧を著ると犬が吠え
箱王が兩の袂に蟬の聲
こそぐつて早く受取る遠眼鏡

惣領は尺八を吹く面に出來
大名は一年置に角をもぎ
本降になつて出て行く雨宿り
母親は勿體ないがだましよい
粉のふいた子を抱いて出る夕涼
船の子へ蟹なげてやる蜆取　（柳多留初篇）

なほ次に掲げるのは川柳獨得の敍景詩である。

松原の茶屋はいぶるが景になり
横丁に一つづつある芝の海
長噺とんぼのとまる槍の先　（同　右）

右に掲げた例によつて明かであるやうに、川柳の寫す所は教養の乏しい町人の眼に映じた世相人情であるから、題材は比較的狹小で變化に乏しく、内容は卑俗淺近で動もすれば卑猥に流れ、表現はとかく誇張に過ぎ、滑稽は時に駄洒落に墮する弊がある。此等の短所は古川柳時代の句には比較的少いが、時代を下るに從つて甚しくなり、遂に川柳の本質から遠ざかつてしまつた。要するに川柳は狂歌狂文黄表紙洒落本滑稽本等と共に、江戸の太平が生んだ輕妙洒脫な滑稽文學であつて、平民社會の生活並に風俗言語の研究資料として貴ぶべきものである。

第六章　上方の讀本と黄表紙・洒落本

一　初期の讀本

江戸小説の分類

讀本の體裁と内容

江戸時代後期の小說は、内容に應じて體裁が大體一定してゐるから、一般に體裁によつて分類せられてゐる。即ち赤本・黑本・青本・合卷・洒落本（以上小本）、讀本（半紙本）、滑稽本・人情本（以上中本）などの如き名目は、體裁と共に内容をも示して居る。本章に述べるのは此等の中で最も重きをなす讀本の發達である。讀本は赤本・青本・合卷などの如く、畫を主とする草雙紙に對して、文章を讀む事を宗とする小說を指すのである。從つて廣義の讀本中には、前期に行はれた假名草子・浮世草子・八文字屋本の類をも包含させる事が出來るのである。併し普通には狹義に解釋して、寶曆明和の頃當時衰へた八文字屋本に代つて、上方に現れた近路行者（きんろぎやうじや）・上田秋成・建部綾足等の小說を先驅として、寛政から文久の頃までの間、江戸に現れた空想的理想的小說を指すのである。寶曆明和頃の初期の讀本には未だ一定した形態が具はらなかつたが、寛政以後江戸に流行した讀本には、大體一定した體裁があつた。即ち初めは一冊二十丁内外の半紙本五冊から成るものであつたが、長篇の續物が流行するやうになつてから、（一冊の丁數は大體同じであるが）冊數は數十冊にも及び、馬琴の『里見八犬傳』の如きは九輯百六冊から成つて居る。卷頭には漢文の序があり、本文は漢字假名交りで、平易な漢字以外には振假

名を施し、又所々に挿繪がある。なほ後には編中の主要人物を描いた口繪を卷首に載せるやうになつた。表紙は初め無地の厚表紙であつたが、文化の頃から圖案模樣を描いたものを用ひるやうになつた。

初期の讀本

寶暦前後は所謂文運東遷期であつて、學問が普及し、一般の趣味も著しく向上した結果として、小說界に著しい變動が起つた。卽ち從來行はれた現實社會から取材した浮薄な寫實小說に對して、不滿を感ずる者が多くなつた爲に、教訓物が歡迎せられ、一方では軍記や御家騷動や敵討等の如き、歷史傳說を題材とした實錄物が流行するやうになつた。斯かる傾向は末期の八文字屋本にも認められるのである。後の讀本は卽ち此の傾向を追ふと共に、漢學者や國文學者の手に成つた、支那小說の飜案物や雅文小說等の影響をも受けて居るのである。

飜譯小說

江戸時代の初期以來隆盛を極めた漢學は、專ら政治道德の學問として講究せられたのであるが、元祿頃から趨勢が一變して、新たに詩文の學が擡頭すると共に、支那の演義小說を飜譯したものが漸く現れた。元祿二年から五年に亙つて刊行せられた、僧義轍及び其の弟月堂共譯の『通俗三國志』五十卷首一卷は其の魁である。是に次いで刊行せられたのは、夢梅軒章峰・稱好軒徽庵共譯の『通俗漢楚軍談』十五卷元祿八年刊清池以立の『通俗呉越軍談』十八卷元祿十六年刊行及び『通俗周武王軍談』二十四卷寶永刊本等であつて、寶永から享保の頃には通俗の二字を冠した飜譯演義小說が續々現れた。次いで寶暦頃には更に支那の白話小說、卽ち俗語小說に親しむ學者が漸く現れ、餘技として此等の飜譯若しくは飜案を試みる者が輩出するやうになつた。其の先驅として注意すべきは岡島冠山であつて、之に次いで現れたのは岡白駒(はくく)・近路行者等

である。

岡島冠山

岡島冠山（享保十三年歿五十五歳）は名を援之（すけゆき）（後に璞と改む）字を明敬、通稱を喜兵衛と云つた。冠山は其の號である。長崎の人で、初め支那語の通事として長門の萩侯に仕へてゐたが、寶永の初年頃（三十歳頃）職を辭して京都に上り、支那の演義小說『皇明英烈傳』を飜譯した『通俗元明軍談』（二十卷寶永初年刊）を刊行し、また『水滸傳』の飜譯にも從事した。冠山は京都に遊ぶ以前から宋學を修めてゐたが、戸田大隅守に聘せられて江戸に出て後林鳳岡の門に學び、晩年には再び京都に住んだ。江戸に居る頃多くの學者と交つてゐたが、殊に荻生徂徠及び其の門下と往來し、彼等に支那語の研究を鼓吹したのは注意すべき事であつて、徂徠の『明律國字解』や『六諭衍義』等の訓點は、冠山に負ふ所が多いと云はれて居る。冠山は江戸と上方の間を往來して、其の地に支那俗語の知識を普及したのであつて、支那語學に關する著書は三十種の多きに達して居る。冠山が支那の演義小說の紹介に著手した事は既に述べたが、後の小說に最も影響する所の多かつたのは、彼によつて初めて紹介せられた『水滸傳』であつて、原作に訓點を施した『忠義水滸傳』（四卷）と、之を飜譯した『通俗忠義水滸傳』（四十四卷）同拾遺十卷を刊行した。前者は歿年の享保十三年に刊行せられ、後者は歿後の寶暦七年に、初篇中篇下篇の四十四卷が上梓せられ、拾遺十卷は寛政二年に出版せられた。『水滸傳』は宋末の『宣和遺事』に基づいて、宋の徽宗の世に起つた群盗と、三十六人の豪傑の事を取扱つた百八十回から成る演義小說であつて、『三國演義』『西遊記』『金瓶梅』と併せて支那小說中の四大奇書と稱せられて居る。此の『水滸傳』が冠山によつて初めて我が國に紹介

せられて以來、安永年間には之を飜案した建部綾足の『本朝水滸傳』や、仇鼎散人の『日本水滸傳』が刊行せられ、天明三年には伊丹椿園の『女水滸傳』が現れ、更に寛政以後には換骨脱胎の諸作が續出して、我が小說界の一系統となるまでに流行したのであつて、冠山が我が小說の發達に貢獻した所は尠くないのである。（なほ四大奇書の一なる『西遊記』の譯本としては、西田維則の手に成つた『通俗西遊記』初篇六卷が寶曆八年に刊行せられて以後、二三の譯者によつて繼續せられ、天保二年に五篇まで刊行せられた。）

冠山に直接教を受け、又は彼に刺戟せられて支那語の研究に從事し、或は支那小說を讀んだ學者は江戶にも上方にも現れたが、小說の紹介者として最も注意すべきは岡白駒（明和四年歿七十六）である。白駒は播磨の人で、字を千里又は太仲と云ひ、號を龍州と稱した。冠山に始まつた支那語の研究に刺戟せられて、（其の師は詳かでないが冠山と交渉のあつた事は明かである）支那の白話小說に親しみ、明末の馮夢龍が編刊した三言即ち『喩世明言』『警世通言』『醒世恆言』の三種の奇談集の中から數話を拔いて、之を訓讀した『小說精言』（四卷寛保三年刊行）『小說奇言』（五卷寶曆三年刊行）等を刊行した。白駒に次いで同じく明末の短篇小說集の紹介を試みたのは、其の門人で前記二書を出版した風月堂主人澤重淵（通稱莊左衞門）であつて、白駒の編譯に倣つて『小說粹言』（五卷寶曆八年刊行）を出版した。『小說粹言』の奧付の續刊豫告には『小說選言』『小說恆言』『小說英言』『小說奇觀』『西遊記』『連城璧』『照世盃』等の書名を揭げて居る。『小說選言』以下の四書は白駒の編著であるが、遂に刊行せられなかつた。尤も孔雀道人點の『照世盃』四卷は

明和二年に刊行せられた。要するに冠山白駒等が支那小說を紹介して以來、珍奇な異國小說の翻譯が續出したのであつて、此等はやがて讀本發生期に於ける飜譯小說又は飜案物の流行を促したのである。

以上述べた冠山白駒等の事蹟は、青木正兒氏著『支那文藝論藪』所收の「水滸傳が日本文學史上に布いてゐる影」「岡島冠山と支那白話文學」、『書誌學』第一卷第四號所載の長澤規矩也氏論文「江戸時代に於ける支那小說流行の一斑」、山口剛氏遺著『江戸文學硏究』所收の「讀本の發生」等に據つた所が多い。

都賀庭鐘

冠山や白駒等によつて支那小說が紹介せられて以來、白話小說の飜譯を試みる者が次々に現れたが、此の機運に乘じて支那の短篇小說を飜案して、後世讀本の祖と稱せられたのは都賀庭鐘（寛延から明和頃の人）である。字は公聲、通稱は六藏、號を近路行者・大江漁夫・千里浪子・巢居主人・草官散人などと稱した。大阪の儒醫で書畫にも長じてゐたが、本業の醫よりも寧ろ小說作者として名を成したのであつて、上田秋成も彼に學んだと傳へられて居る。漢學の外に國文學にも通じてゐたが、其の師に就いては傳ふる所がない。庭鐘と深交を結んだ蒹葭堂の木村喜右衞門（狂名曉鐘成）は、大阪の酒造家の子であるが、學問を好み、多くの書を藏してゐたのであつて、庭鐘が支那の小說や雜書に通じてゐたのは、恐らく喜右衞門の藏書に負ふ所が多いであらう。庭鐘の著作中には『國字演義醫王耆婆傳』（五卷寶曆十三年刊）や、支那の狂體の詩を選んだものなど注意すべきものがあるが、讀本の基を成したのは『古今奇談英草紙』（寛延二年刊行）『古今奇談英草紙後篇繁野話』（明和三年刊行）『古今奇談莠句冊』（天明六年刊行）『席上奇觀垣根草』（寛政五年刊行）の四部の作である。以上四部は何れも半紙本五冊、其の內容は『垣根草』の十三話以外はすべて九話である。

『英草紙』以下の說話の大部分は前期の了意の『伽婢子』『狗張子』などの系統を引いた、支那の傳奇小說の飜案物であつて、其の角書を見ても察せられるやうに、其の原話は支那の『今古奇觀』（明末か清初の編刊）其の他の怪異小說の中から取つたのである。『英草紙』の原據の中には詳かにし難いものもあるが、青木正兒・山口剛・長澤規矩也三氏の研究によつて明かになつた所を示せば次の通りである。

後醍醐帝三たび藤房の諫を折話　『警世通言』の「王荊公三難蘇學士」による。
馬場求馬妻を沈て樋口が聟と成話　『喩世明言』又は『今古奇觀』の「金玉奴棒打薄情郎」による。
豐原兼秋音を聽て國の盛衰を知話　『今古奇觀』又は『警世通言』の「兪伯牙摔琴謝知音」による。
黑川源太主山に入て道を得たる話　『今古奇觀』又は『警世通言』の「莊子休鼓盆成大道」による。
紀任重陰司に到て滯獄を斷る話　『喩世明言』の「鬧陰司馬貌斷獄」による。

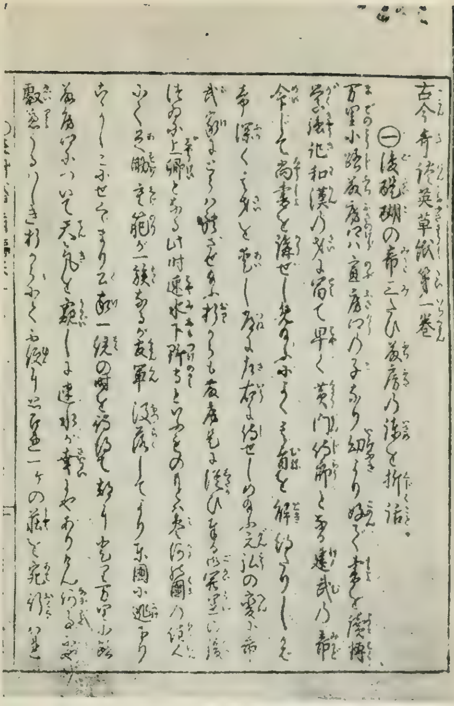
庭鐘の作品は右に述べたやうに、主として支那の怪異小說を飜案したものであるが、思想の方面には因果應報や、輪廻轉生說や、易占の命數や、儒教思想などが交錯して居る。此等は原作にもあるのであつて、必ずしも作者の特色とは言ひ難いのであるが、說話に一種の史論を下して居るのは、彼の作品の著しい特色である。試みに『英草紙』の第五話「紀任重陰司に到て滯獄を斷る話」を例に取つて、彼の史論の一斑を窺ふ事にしよう。此の說話は後宇多天皇の弘安年中に、紀任重といふ聰明博識の人が夢に閻魔王廳に赴いて、後鳥羽天皇の文治建久の頃から今に至るまで決斷を得ざる三件、即ち

幼を欺きて命入水告事　告人 養和之幼主言仁　被告 清盛妻二位尼

功を賞せず骨肉を傷ふ告事　告人 源範頼・義經　被告 源頼朝・其臣廣元

功臣を忌みて家を令ニ斷絶一告事　告人 畠山重忠　被告 北條時政・其女政子

に明かな裁決を下すといふ趣向である。此の三件は史家が多少疑問を挿む餘地のある史實であるが、作者は先づ此の事件に關係のある史上の人物を、原告被告證人などに擬して陳狀せしめ、然る後に任重の裁決に託して私見を述べて居る。即ち第一の史實に關しては、安德天皇が實は姬宮であつたのを、淸盛の計ひによつて皇子として帝位に即け奉つたのであつて、壇浦で二位尼が抱き奉つて入水したのは、其の眞相の發覺を恐れたのであるとして居る。



英草紙

第二の義經が賴朝と不和になつて滅亡を招いた事實に就いては、其の基因を賴朝の性格上の缺陷と、其の背後にある大江廣元の奸智とに歸して居る。又第三の畠山氏が滅ぼされた原因に就いては、重忠に對する政子の戀が叶はなかつた根に基づくとして居るのである。これは「英草紙」の中の一例である

が、次いで成つた『繁野話』『莠句冊』になると史論は益著しくなり、更に『垣根草』になると殆ど其の大半を占めて居るのである。要するに史論考證を試みて居るのは博識を衒つたのであつて、此の特徴は後の讀本作者に影響する所が少くなかつた。（馬琴の讀本の考證癖は其の著しい例である。）

庭鐘の小說の特色はなほ其の文章にある。彼は是まで行はれた八文字屋本系統の平弱に過ぎた文章を棄てて、假名草子時代の簡勁な和漢混淆文を復興し、而も和文調を加へて簡潔流麗な新文體を創めたのである。斯かる文體は歷史上の事件を題材とする傳奇的小說には、極めてふさはしいのであつて、後の讀本の文體を確立した功績は特筆すべきである。蓋し庭鐘は漢學の外に廣く古典や俗文學にも通じてゐたのであつて、彼が創めた新文體は此等の素養から得たのである。庭鐘の文章には時に原作を直譯した所もあるが、槪して漢語和語を適度に混用して流麗である。左に揭げるのは『後醍醐帝三たび藤房の諫を折話』の一條であつて、優麗な文の一例である。

文例

藤房何の罪とはしらねども、叡慮にまかせて旅だちて、いつかへりいつあふさかのせきならん、しられずしらぬ旅の行衛の心ほそく、ゆき／＼てむさし野の、はてなき道にかかり見わたせば、其廣きこと雲をしのぎ、霧にへだてて、ただ目のおよぶ所にかぎれり。春の末草葉のしげりしあひだ、はるかにむかふに流るる川あるは、かの調布さらす玉川にこそとおもへども、問ふべき人なく川を目につけて行けども、曠野の内遠近も目當違ひて、ゆけども／＼川ははるかむかふにありて、同じ程なるはいかにと思ふ内、からうじて一人の田夫に行逢ひたり。『やおれむかうに見ゆる流は何とよぶ川ぞ』と尋ね給へば、此田夫云『此あたり西は秩父根

東は海北、南の向が岡都築が原より北は河越にいたり、此あひだをむさし野といふ、縦横十部に跨れり。其の内にただ三の川あり、玉川久米川入間川なり。年とらず川などいへるは、あるにかひなき細き流れにて、節分の夜はきわめて水流れざる故かく名るとなり。それゆへ水にとぼしく、野に出るもの器に水を貯へ持て渇をうるほす。此あひだに川もながれも目にさへぎることなし」と答ふ。（英草紙第一巻）

『英草紙』は近世小説史上の劃期的作品であつて、是より「古今奇談」「古今奇説」「古今怪談」「古今小説」などと角書した同類の作品が次々に刊行せられた。此等は何れも支那小説中から取つて、之を本朝の物語に飜案したものであるが、趣向は平凡であり文章も概ね拙劣であつて、庭鐘の作に比して遥かに劣つて居る。只玆に注意すべきは庭鐘に刺戟せられて、支那小説の飜譯又は飜案を試みた伊丹椿園（寶暦より安永頃までの人である）の諸作である。本名を浦邊源曹と云ひ、攝津伊丹の人であるが、傳記を詳かにしない。

伊丹椿園

博識で畫を能くし、又極めて達筆であつたと傳へられて居る。其の著作に『兩劍奇遇』（五巻安永七年刊行）『古今翁草』（五巻安永七年刊行）『古今小説唐錦』（四巻安永九年刊行）『怪異談叢』（五巻天明元年刊行）『古今奇談深山草』（五巻天明二年刊行）『女水滸傳』（四巻天明三年刊行）等がある。何れも支那小説の飜案物である。最後のもの以外はすべて短篇の怪異小説であつて、一々其の原據を明示して居る。飜案の手腕に於ても文章から見ても、庭鐘には遥かに及ばないが、後の作者に影響する所の少くなかつた初期讀本作者の一人である。庭鐘の作品に刺戟せられ、或は之を粉本とした讀本は極めて多いが、最も勝れて居るのは次に述べる建部綾足及び上田秋成の作品である。

建部綾足

建部綾足（安永三年歿五十六）は本名を喜多村金吾久域、字を孟喬と云ひ、別號を寒葉齋吸露庵と稱し、俳號を

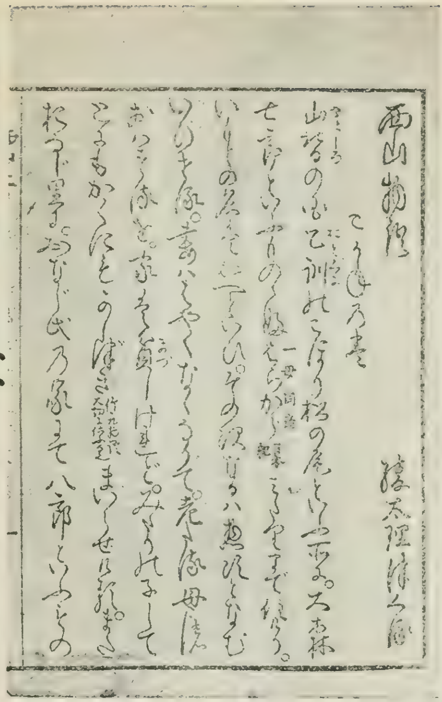
都因、後に凉袋(更に凌岱と改む)と云つた。祖父政廣は弘前藩主津輕信政に仕へて祿一千石を食み、

```
近江北村氏庶流
喜多村監物政廣
　　├──校尉政方──┬─監物
山鹿素行次女　　　　　│
　　　　　大道寺友山女┴─久域
```

山鹿素行に師事して兵學を修め、又素行の次女を娶つて政方を生んだ。政方の次男久域は卽ち綾足であつて素行の孫に當る。二十歳の頃嫂と通じた爲に家を追はれ、京都に上つて東福寺に入つたが、間もなく去つて俳諧に志し、爾來蕉門各派の俳人に師事した。延享の頃江戸淺草の雷門のほとりに住み、風神に因んで凉袋(後に凉岱)と號し、多くの門弟を擁して俳壇に雄飛してゐたが、寶暦の末頃賀茂眞淵に就いて古典の研究に志して以來、專ら尙古主義を奉じて片歌の復興に努めた。當時綾足は卑俗な俳諧に慊らずして、俳諧の源は片歌にありと信じ、寶暦十三年に『片歌百夜問答』を著述して以來、頻りに片歌の唱道に力を盡し、遂に伊勢の能褒野に日本武尊の歌碑を建てた。綾足は明和の頃京都に住み、人々を集めて古典を講說し、又片歌を宣傳してゐたが世に認められなかつたので、轉じて文章と繪畫に專念するやうになつた。繪を修めたのは何時頃の事であるか詳かでないが、長崎の熊代熊斐(くましろいうひ)に學び一家の風をなしてゐた。又文學者としては京都に居る頃『西山物語』『本朝水滸傳』『漫遊記』などを作り、なほ日記紀行隨筆などを遺して居る。其の後明和の末頃には再び江戸に移り、各地を巡遊して安永三年に武藏の熊谷で客死した。

『西山物語』(三冊明和五年刊行)は明和四年の作である。此の作は洛外西八條村に起つた實話に基づいて結構したものである。其の實話は上田秋成も耳にしたのであつて、彼が當事者の一人から聞き取つて綴つた

文章が、藤井乙男博士の著「江戸文學研究」に載せられて居る。「西山物語」の筋は――京の西山の松尾に大森七郎といふ者があつて、老母妹かへ弟惣治と四人睦じく暮してゐた。又同じ村に七郎の従兄弟に八郎なる者があつて、其の子宇須美は七郎の母の病を介抱する間にかへと行末を契つた。其の後八郎の家が繁昌したのに反して、七郎の家運は次第に衰へて兩家は漸く疎遠になり、宇須美とかへの結婚は全く望みのないものとなつた。七郎は妹の爲に種々奔走したが、八郎は釣合はぬ縁として固く拒んだので、七郎は遂に決心して或日妹に婚禮の晴著を裝はせて八郎の家に伴ひ行き、最後の談判を試みたが遂に容れられなかつたので、其の場に妹を殺して歸つた。八郎はかへの屍にとりついて歎き、宇須美は此の事あつて以來病の床に就き、且つかへの亡靈にも會つて益苦悶したが、其の後縁談を拒んだ事情も判然して兩家はもとの通り和解した。――といふのである。此の説話の筋は大體巷談の儘であるが、是に七郎の家に傳はつた楠正成遺愛の寶刀の祟の事や、武士道の義念を絡ませ、又八郎が結婚を拒んだ動機



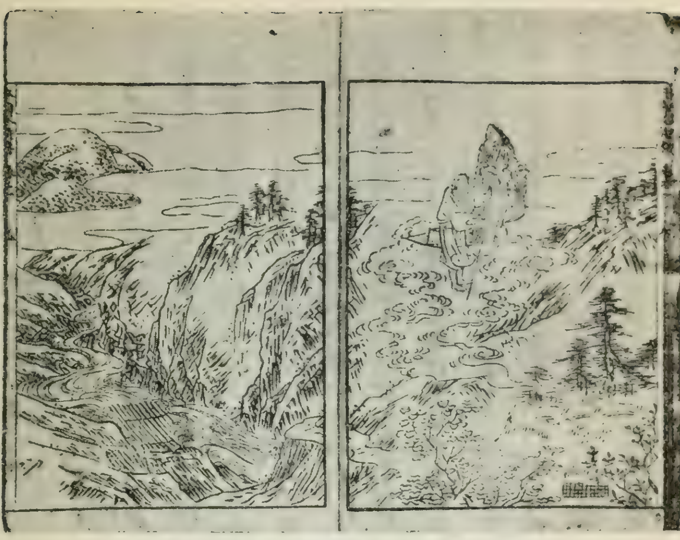
西山物語

を雙方不吉な相性に由るものとして居るのは、人情に遠ざかり且つ散漫に流れる結果となつてゐる。かくて此の作はかなり不自然であり、且つ組織の統一も缺けて居るのであるが、唯注意すべきは其の文章である。是より先眞淵の國學の影響を受けて、國學者の間から古語普及の一助とする爲に書かれた雅文小説が二三現れた。荷田在滿の作『白猿物語』（元文四年成る）及び『落窪物語』（寛保三年成る）眞淵の作と言はれる『由良物語』（年代未詳）などが是である。『西山物語』は此等に倣つて雅文で綴つたもので、記紀萬葉祝詞伊勢源氏などの古語を取入れて、一々其の出典を註記して居る。（圖版參照）斯かる文體が小説にふさはしからぬものである事は言ふまでもないが、雅文で書かれた讀本の嚆矢であり、且つ後の讀本作者に多少影響を及ぼしてゐる點に於て注意すべき作品である。

本朝水滸傳

綾足の作で更に重要なものは安永二年出版の『本朝水滸傳』（別名吉野物語）である。刊行せられたのは初篇十卷だけであつて、二篇十五卷は寫本の儘傳はつて居る。此の作の發端は萬葉にある柘枝（つみのえ）說話に基づいて、吉野の味稻（うましね）が柘枝仙女と契つて産ませた百人の子が、成長して後貴族英雄となつて、父母の棲む伊吹山に集まるといふ趣向であるが、實は冠山の『忠義水滸傳』などの影響を受けて『水滸傳』を翻案したのである。卽ち琵琶湖を水滸に擬し、人物を國史中に求めて、惠美押勝を宋江に、道鏡を高俅に擬し、押勝が道鏡の專橫を憤つて、道祖王を奉じて伊吹山に立籠つた事を物語り、やがて大伴家持等の援助を得て勢大いに振つた事などを綴つて居る。文章は主として古語を用ひて居るが、又屢々卑近俗語をも交へてゐるのであつて、一種の雅俗折衷體である。馬琴は其の著書『江戸作者部類』に此の文體の

不調和や、筋の拙劣な點などを擧げて居るけれども、其の長所をも認めて、「其のおもむき水滸傳を摸擬したれども、水滸の古轍を踏まずして別に一趣向を建てたるは、當時の作者の及ばざる所也。實に今のよみ本の嚆矢也」と言つて居る。馬琴が評したやうに、體裁不調和の書ではあるが、趣向は後の讀本に近いのであつて、『西山物語』よりも更に多くの影響を與へた點に於て、讀本發生期の重要な作品の一に數ふべきものである。



本朝水滸傳挿繪

綾足の『本朝水滸傳』が刊行せられて以來、『水滸傳』の飜案が次々に現れた。其の流行の魁となつたのは、京都の佐々木天元（仇鼎散人）の『日本水滸傳』（十冊安永六年刊行）と伊丹椿園の『女水滸傳』（四冊天明三年刊行）とである。其の後江戸の讀本作者京傳・馬琴や、合卷作者京山・種彦等が頻りに『水滸傳』まがひの作品を書いたのは、此等の影響によるのである。

綾足の作品には此の外に旅行中に集めた奇事異聞を記した『をり〳〵草』（五卷後に漫遊記と改題）があり、蕉門の傳人の逸事を書き留めた『蕉門頭陀物語』一冊があり、其の他日記紀行家集などがある。綾足と種々の點

に似た文學者で、互に交涉のあつたのは上田秋成である。

上田秋成（文化六年歿七十六）は通稱を東作、字を秋成と云ひ、號を無腸、別號を餘齋又は鶉居と稱した。享保十九年に大阪曾根崎の娼家の娘（一說妓女）の腹に生れたが、父の名は明かでない。四歲の時から大阪の商家上田氏に養はれ、五歲の時惡性の痘瘡に罹つて左手の指は殆ど不具になつた。養家はかなりの資產家であつたので、青年時代は遊蕩に耽つてゐたが、生來學問文藝を嗜み、都賀庭鐘に就いて漢學を修め、高井几圭を師として俳諧に遊び又戲作を愛讀してゐた。初めは戲作者になるつもりであつたらしく、明和三年（三十三歲）には和譯太郎の戲名で八文字屋本系統の『諸道聽耳世間猿』と『世間妾形氣』とを出版して奇才を發揮した。併し此の年に加藤美樹を師として、國學竝に和歌を學んで以來、戲作を廢して古典趣味を求め、明和五年（綾足の西山物語が刊行せられた年）には初期の讀本の傑作『雨月物語』を書き上げた。明和三四年頃は恰も建部綾足が京阪に滯在した時代で、秋成は綾足の講說を聽いたのであるから、美樹の教を受けたのも、綾足の紹介によるのであらうと云はれて居る。綾足と秋成は共に俳諧和歌を能くし、又國學を修めて後に小說に筆を染めたのであつて、閲歷は相似て居り、殊に小說の創作上には多少の交涉があつたやうである。其の後明和八年には火災に罹つて資財を失ひ生活に窮したので、安永二年に醫術を學んでやがて開業したが、天明八年には患者を



秋成肖像（鏡草所收）
文麗筆富岡鐵齋摸

誅診して死に至らしめたので廢業した。此の頃秋成の身邊には種々の不幸が重なり、而も眼疾の爲左眼の明を失つた。かくて寛政五年五十歳の時妻（剃髪して瑚璉尼と稱した）を伴なつて京都に移り、困窮の中に文筆生活を送つてゐたが、同九年に妻に先立たれ、更に翌年には左眼が稍癒えた代りに右眼が殆ど失明した。かくて晩年は全く孤獨の身を羽倉邸内の假寓に寄せてゐたが、七十四歳の時八十部許りの草稿を庭の古井に投じ、文化六年七十六歳で卒した。以上述べたやうに秋成は生れた時から極めて不遇であり、肉體的にも不具であり、殊に晩年は悲慘であつた。從つて性質は狷介で人と相容れず、自ら世を白眼で視る傾向があつたので、其の性癖は筆端に現れてゐる。壯年の頃に著作した前記の隨筆にも既に其の傾向を認めるのであるが、殊に晩年の『膽大小心錄』三卷や『癇癖談（くせものがたり）』二卷等には、諷刺皮肉があり不平不滿の聲を聞くのである。

秋成の國學に關する著述や和歌の事は既に第三章に述べて置いた。小說家としての作品には、壯年の頃書いた『諸道聽耳世間猿』（五卷明和三年刊行）と『世間妾形氣』（四卷明和三年刊行）とがある。前者は見聞を材料にして、種々の人物の失敗を皮肉に描寫した十五話から成り、後者は題名が示すやうに、妾と主人の愛欲の明暗表裏を寫したものである。共に八文字屋本の摸倣作であるが、作者獨得の皮肉な世態觀察や諷刺的な人情描寫があり、文章も西鶴を摸倣して流暢であつて、氣質物の最後の名作と云はれて居る。

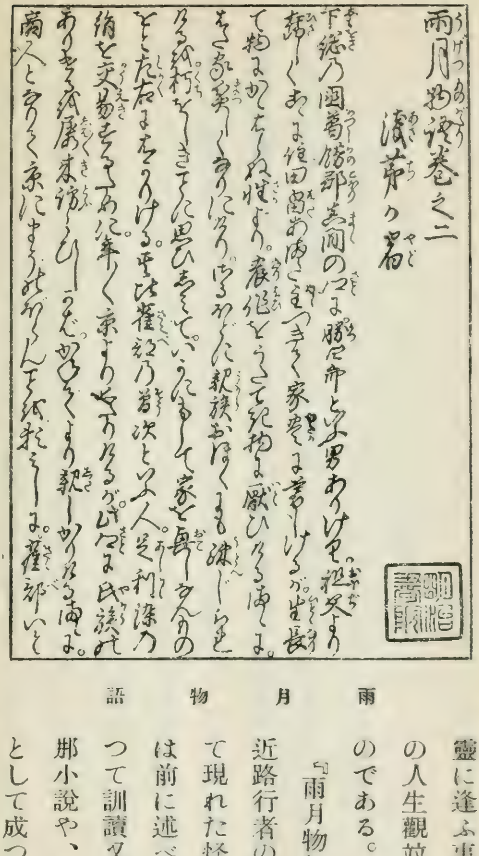
雨月物語

秋成の不朽の作品は『近古奇談雨月物語』五冊である。其の草稿が成つたのは明和五年三月であるが、出版せられたのは八年後の安永五年である。此の作品は庭鐘の『英草紙』や『繁野話』などに傚つて、怪異

說話九篇卽ち「白峯」「菊花の約(ちぎり)」「淺茅が宿」「夢應の鯉魚」「佛法僧」「吉備津の釜」「蛇性の婬」「青頭巾」「貧福論」を收めて居る。此の作品は『英草紙』の影響を多く受けてゐるが、一體に古典趣味があり文章に雅文體が混つて居るのは、綾足の作品に刺戟せられたもののやうである。九篇の說話の中には『今昔物語』や『宇治拾遺物語』などから暗示を得たものがあり、又謠曲や西鶴の小說などから影響を受けたものもあるが、大部分は支那小說の飜案である。其の原據に就いては、これまで諸家の考證によつて殆ど明かにせられて居るから、今其の主要な點を述べて置く。先づ「白峰」は『保元物語』の「新院崩御の事」と『山家集』『撰集抄』などにある西行の白峯陵參拜の話とを基にして、謠曲の「松山天狗」を參照して構想したものであり、「菊花の約」は『喩世明言』の「范巨卿雞黍死生交」の飜案であるが、直接には『英草紙』の「豐原兼秋音を聽て國の盛衰を知話」を粉本とし、更に西鶴の『武家義理物語』の中の「約束の雪の朝食」を參酌して、武士の節義を中心に描寫したものである。「淺茅が宿」は『伽婢子』の「遊女宮木野」を原據とし、これに萬葉の眞間手古奈の傳說や、同じく卷第十六の有由緣歌の一なる、旅にある夫を慕つて死んだ妻の詠んだ歌などを參考して作つたのであり、「夢應の鯉魚」は『古今說海』中の「魚服記」の飜案であるが、人物の名の興義は『古今著聞集』から借りてゐる。「佛法僧」は『怪談とのゐ袋』(臥仙子文坡作 明和五年刊行)の「伏見桃山亡靈行列の事」と『伽婢子』の「幽靈評諸將」とを合せて成つたのであり、「吉備津の釜」は吉備津の鳴釜の說話から思ひ付いたのであるが、其の筋は『伽婢子』の「牡丹燈籠」から取つて居る。「蛇性の婬」は『西湖佳話』の「雷峰怪蹟」を飜案し、これに平安朝物語式の物怪(もののけ)の色彩を加

へたのであり、又「青頭巾」は『怪談とのゐ袋』の「禪座を以て怪を伏す奥州の禪僧」と「魔佛を以て一如とす悟道の聖人、附すたれし寺を取立てし僧の事」の二話から取材したもの、而して最後の「貧福論」は『史記』の「貨殖傳」や魯褒の「錢神論」などから暗示を得て、『伽婢子』の「幽靈評諸將」「長良僧都錢の精靈に逢ふ事」などに據つて、作者自らの人生觀並に社會觀の一端を示したものである。

『雨月物語』は淺井了意の『伽婢子』や近路行者の『英草紙』などの系統を引いて現れた怪異小說であつて、其の說話は前に述べたやうに、從來漢學者によつて訓讀又は飜譯せられて流布した支那小說や、在來の怪異小說などを粉本として成つたものである。併し此等の題材は秋成の勝れた構想によつて、原話から離れた別個の渾然たる作品となつて居るのであつて、聊かも飜案の痕を止めてゐない。所收の九話に通じて見られる最も著しい特色が、怪異分子にある事は言ふまでもないが、それぞれ異なつた色調を以て淒慘身に逼る感があり、而も讀者をして神韻縹渺た


雨月物語巻之二
浅茅が宿
下総の国葛飾郡真間の郷に勝四郎といふ男ありけり。祖父より旧しくここに住み田畠あまた主づきて家豊かに暮しけるが生長て物にかかはらぬ性より。農作をうたてき物に厭ひけるままに。はた家貧しくなりにけり。さるほどに親族おほくにも疎じられけるを朽をしきことに思ひしみていかにもして家を興しなんものをと左右にはかりける。其比雀部の曾次といふ人。足利染の絹を交易するために年々京よりくだりけるが。此郷に氏族のありけるを屢来訪らひしかば、かねてより親しかりけるままに。商人となりて京にまうのぼらんを頼しに。雀部いと

雨　月　物　語

る神祕境に彷徨せしめるのは、彼獨得の手腕である。蓋し斯かる特長を具へたのは、其の題名が謠曲「雨月」から取られて居るのを見ても首肯せられるやうに幽靈能に學ぶ所が多いのである。『雨月物語』の長所はまた其の文章の妙にある。雅文に漢語を混へて優雅にして簡潔流暢であるのは、浪漫的怪異小說に極めて適切であつて、後の諸本の文體の準據となつたのも當然である。馬琴は殊に此の作を愛讀したのであつて、其の『椿說弓張月』は「白峯」から多大の影響を受けて居る。『雨月物語』の中で殊に傑出して居るのは「菊花の約」「淺茅が宿」「吉備津の釜」の三篇である。左に掲げるのは「夢應の鯉魚」の中の情景併せ得た一節である。

文例

我此の頃病に苦しみて堪へ難きあまり、其の死したるをも知らず、熱き心地少しさまさんものをと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやや忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井にかへるここちす。山となく里となく行き行きて、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴びて遊びなんとて、そこに衣を脫ぎ去て身を跳らして深きに飛入りつも、彼此を游ぎめぐるに、幼きより水に狎れたるにもあらぬが、欲ふに任せて戲れけり。今思へば愚なる夢ごころなりし。されども人の水に浮ぶは魚のこころよきにはしかず。ここにて又魚の遊びをうらやむ心おこりぬ。傍にひとつの大魚ありていふ。師のねがふ事いと易し。待たせ給へとて、杳の底に去と見しに、しばしして、冠裝束したる人の、前の大魚に跨りて、許多の鱗魚を率ゐて浮びきたり、我にむかひていふ。海若の詔あり。老僧かねて放生の功德多し。今江に入りて魚の遊躍を願ふ。權に金鯉が服を授けて水府のたのしみをせさせ給ふ。只餌の香しきに昧まされて、釣の絲にかかり、身を亡ふこ

となかれといひて、去りて見えずなりぬ。不思議のあまりにおのが身をかへり見れば、いつのまに鱗金光を備へて、ひとつの鯉魚と化しぬ。あやしとも思はで、尾を振り鰭を動かして心のままに逍遥す。まづ長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大灣の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影映る、深き水底に潛くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつつなき。ぬば玉の夜中の潟にやどる月は、鏡の山の峯に清みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山、竹生島、波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ。さしも伊吹の山風に、朝妻船も漕ぎ出づれば、蘆間の夢を覺され、矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたたかなれば浮び、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。

春雨物語

秋成の小説にはなほ晩年の作と思はれる『春雨物語』がある。稿本五卷が傳はつて居るが、書中の「樊噲」の見出しの下に「什之上」とあるから、もと十篇あつたのが散逸したのである。今は『名著文庫』『有朋堂文庫』『上田秋成全集』等に收められて居る。現存する五篇（一二三四及び十の上）は「血かたびら」「天津處女」「海賊」「目一の神」「樊噲」（「樊噲」の後半は散逸して居る。）で、何れも歴史事實に取材した傳奇的物語である。卽ち「血かたびら」は藤原仲成と藥子の亂の事を記したもの、「天津處女」は僧正遍照を主人公とする說話、「海賊」は『土佐日記』から素材を得た物語であり、「樊噲」は伯耆の大藏といふ無頼漢の生涯を寫し出したものである。以上五篇の中で怪異的色彩のあるのは「血かたびら」と「目一の神」とであつて、其の他には見當らないのは『雨月物語』と稍異なる所である。卽ち此の作は怪

異的小説から歴史小説に遷らうとする過渡期の作と見られる。趣向に變化の妙がなく、『雨月物語』に比して遙かに劣り、文章は古雅枯淡であるが、草稿の儘傳はつたものであるから、文脈の亂れた所などがあつて洗煉を經てゐない。『春雨物語』と同類の小品にはなほ歌文集『藤簍冊子』の中に「月の前」と「剣の舞」の二篇がある。前者は西行が頼朝から銀の猫を貰つた説話を取扱つたものであり、後者は靜御前が鶴岡社頭で歌舞した説話を描いたものである。此の二篇も亦『雨月物語』より數等劣つて居る。要するに秋成は多方面に奇才を發揮したのであるが、薄倖な境遇に煩はされて、創作に力を注ぐ餘裕が無かつたやうである。併し『雨月物語』の如き勝れた怪異小説を作り、和漢雅俗を折衷した新文體を創めて、讀本の源を開いた功績は不朽である。而して上方の小説は秋成を最後とするのであつて、其の後の小説は江戸に現れたのである。

二　赤本・黑本・青本・黄表紙

草雙紙と其の分類

上方に於て初期の讀本が發達してゐる頃、江戸では後の江戸小説の源流である赤本・黑本・青本や黄表紙などいふ、幼稚な通俗小説が徐々に發達してゐた。赤本・黑本・青本・黄表紙は、後に發生する合卷と併せて當時草雙紙と呼ばれた。（草雙紙は單に合卷のみを指すこともある）「草」は種（くさ）で雜駁の義であり、「雙紙」は冊子の假借であつて、古典的傾向を帶びた讀本などに對して、通俗を宗とする種々の小説を云ふのである。草雙紙中最初に發生したのは赤本で、これが黑本青本となるまでは童幼婦女の弄物であつたが、黄表紙に

至つて大人の娛樂的讀物となり、次いで多くの冊數から成る合卷となつて、草雙紙の完成を告げたのである。草雙紙は室町時代から江戸時代初期にかけて行はれたお伽草子の系統を引いて居るのであるが、もと童幼の弄物として發生したものであるから、文章よりも繪を重んじた。從つて草雙紙は合卷に至るまで、頁每に挿繪を入れてゐるのであつて、是が他の小說と區別せられる一つの特徵となつてゐる。草雙紙を一に繪草紙と呼んだのは其の爲である。草雙紙の發達を說くのには、赤本・黑本・青本・黃表紙・合卷などの如き名稱に從ふのが便利である。赤本から黃表紙までの稱呼は、言ふまでもなく表紙の色によるのであるが、青本の現存するものは黃若しくは萌黃であつて、青色表紙は發見せられてゐないので、名稱の起原に關して種々の說がある。又黃表紙は當時青本と呼ばれたが、今日は內容の異同によつて、青本と黃表紙を區別し、黑本と青本とは併せて一種と見る事になつてゐる。以下發生の順序に從つて、赤本・黑本及び青本・黃表紙の三種の發達を述べ、合卷は後に別に說くことにする。

赤本

赤本は黑本青本と共に普通刊記がないから、其の發生時代を明確に云ふ事は出來ないが、延寶より以前に溯り得るであらうと云はれて居る。赤本の盛行期は延寶から享保までの四五十年間であるが、子供相手の赤本は、江戸時代末期に至るまで依然として刊行せられた。赤本の發生期には紗綾形(さやがた)・毘沙門龜甲形・萬字つなぎ等の所謂行成(かうぜい)表紙を附けてゐたが、後に專ら丹表紙を用ひるやうになつて赤本の名が行はれた。行成表紙も赤本も內容には變りがない。其の大さは初めは半紙半截二つ折の小本(縱四寸七分 横三寸二分)であつたが、(圖版參照)元祿享保期には別に豆本(縱一寸七分 横一寸二分)を派生し、享保以後小本は大半紙半截二

つ折の中本形（縦六寸許り横四寸三分）となり、紙數は一冊五枚となつて、茲に草雙紙の形式が定まつた。題紙は黄色の紙を貼り附けたものが多いが、後には白色のものや繪題簽などが行はれた。内容は初めは「桃太郎」「かち〳〵山」「猿蟹合戰」「花咲爺」「文福茶釜」「鼠の嫁入」などの御伽噺であつたが、後には金平淨瑠璃や歌舞伎狂言の簡單な筋書などが現れた。繪を見せるのが目的で、文章は繪の説明に過ぎなかつたから、作者は殆ど畫工である。作者の署名のないのが多いが、奥村政信・近藤清春・鳥居清滿・西村重長・羽田珍重・藤田秀素などの署名が散見する。要するに赤本は文學としては言ふに足らぬものであるが、江戸小説の濫觴として注意すべきものである



桃太郎（赤本）

黒本青本

赤本の盛行期に次ぐ享保から安永頃に刊行せられたのは黒本と青本である。此の二つは表紙の色を異にするばかりで、内容は殆ど同じであり、又同じ書肆から二種のものを竝行して出版してゐるから、區別を立てる必要はない。五枚一冊の中本である事、頁毎に繪のある事、文章が繪の解説又は話の筋書の程度である事などは、すべて赤本と同様である。外題は表紙の色とは別の色紙（赤青黄など）に印刷したのを貼附し、（繪入の題簽もある）内容は御伽噺もあるが歌舞伎や淨瑠璃の筋書が多く、後には歴史傳説敵

討說話妖怪談などが加はつて來た。かくて內容が複雜化するにつれて、赤本の如く一冊で完結する事が出來なくなつて、二冊乃至三冊に亙るのを常例としたのは、一進步を示すものである。赤本は自畫自作であつたが、黑本青本は作者畫工の協力に俟つたものが多く、又作者の署名も見られるやうになつた。繪は作者の下繪又は立案に基づいて描かれたらしく、其の畫風は主として鳥居派である。作者の名を記す事は丈阿（本名未詳）に始まると言はれて居る。丈阿は別號を永觀堂と云ひ、寶曆明和頃に多くの草雙紙を作つた。其の畫工は鳥居清倍・同清滿・同清經・富川房信等であつた。

黃表紙の發生

黑本青本は依然として童蒙の弄物であつたが、安永四年に戀川春町の作『金々先生榮花夢』が現れてからは、大人の慰み（主として通人の娛樂的讀みもの）に供せられるやうになつた。是を青本と區別して黃表紙と云ふ。黃表紙の體裁は青本と同じであつて、二冊若しくは三冊を常例としてゐるが、內容には世相を反映するものが多く、挿繪にも時代の風俗を寫すやうになり、題紙の意匠もこれに應じて精巧になつた。即ち赤本以來極めて遲々とした步みを運んだ草雙紙は、黃表紙に至つて一飛躍をなしたのであつて、是より江戸小說は長足の進步を遂げた。

黃表紙の前期

黃表紙は安永から文化の初頃まで三十年間に亙つて流行し、其の間に現れた部數は凡そ二千部に近く、其の題材も多種多樣であるから、時代的に變遷の跡を辿る事が出來る。其の變遷は寬政の初年を境として、前期と後期とに分たれる。前期は安永天明期であつて、此の間に行はれた作品には、赤本以來の作意の名殘を留めて、御伽噺風の荒唐無稽な趣向もあるが、現代世相の寫實に立脚して、洒落

滑稽諷刺を興味の中心として居るのは著しい進歩である。蓋し安永天明期は國史上所謂田沼時代であつて、江戸の逸民は太平の氣分に浸り、洒落滑稽を弄して日常生活を遊戯化した時であるから、從來專ら幼童婦女を對象とした繪草紙は、一變して通人娛樂の讀物となつたのである。而して天明年間は黄表紙の全盛期であつて、代表的作者が相踵いで輩出し、年々刊行せられた作品も極めて多數に上つて居る。當時蜀山人の『菊壽草』（天明二年刊行）『岡目八目』（天明三年刊行）の如き黄表紙評判記や、岸田杜芳の『草雙紙年代記』（天明三年刊行）の如き黄表紙の發達を述べた作品が現れたのを見ても、其の流行の程度を想像する事が出來る。（『草雙紙年代記』に倣つて式亭三馬が作つた黄表紙に『稗史億說年代記』（享和二年刊行）がある。共に草雙紙研究資料として有名である。）安永天明期の代表作者は戀川春町と朋誠堂喜三二であるが、天明寬政を通じての黄表紙作者の大立物は山東京傳である。京傳は既に安永の頃から、黄表紙の作者竝に畫工として活躍してゐるが、寬政二年以後彼の作風は一變し、同時に黄表紙一般の作意も亦一轉した。

黄表紙の後期

寬政以後文化の初頃に至るまでは、卽ち黄表紙の後期である。是より先天明七年に松平定信が老中となつて以來、田沼時代の積弊を一掃する爲に、幕府は頻りに文武の奬勵儉約の勵行に意を用ひた。偶當時黄表紙の中に時政に對する諷刺を試みたものがあつたので、幕府は其の刊行を禁じ、寬政二年には更に風俗矯正の方針の下に、洒落本禁止令を下した。かくて幕府の峻嚴な取締は、やがて黄表紙の作風を一變させる結果となつたのである。卽ち京傳作の『心學早染草』（寬政二年刊行）以來、教訓の意を寓した作や怪談物軍記物などが流行し、更に寬政七年以後は讀本の影響を受けて、專ら敵討物が流行した。

敵討物の魁としては既に天明三年に、南杣笑楚満人の『敵討三味線由來』が刊行せられたが、當時は世評に上らず、其の後同人の作『敵討義女英』（寛政七年刊行）が世に持て囃されて以來忽ち流行して、敵討物は全盛を極めるやうになつた。黄表紙流行期の著名な作者は、戀川春町・朋誠堂喜三二・市場通笑・岸田杜芳・森羅萬象・唐來參和・山東京傳・芝全交・曲亭馬琴・十返舍一九・式亭三馬等である。此の中で春町・京傳（北尾政演）一九等は自ら畫を描いて居るが、專門の畫師で黄表紙の爲に筆を揮つた人々の中では、鳥居派の清滿・清經・清長等を始め、勝川春常・歌川豐國・北尾重政等が最も活躍して居る。黄表紙の興味が此等の畫工の當世寫生の筆致と、繪組の妙に俟つ所が多かつた事は言ふまでもない。以下代表作者としての春町・喜三二・參和・京傳・全交の五人に就いて、其の略傳と注意すべき作品の解說とを記す事にする。

戀川春町

戀川春町は駿河小島侯の臣倉橋格通稱壽平（寛政元年歿す）の戲號である。小石川春日町に住んでゐたので戀川春町と稱したのである。狂歌戲作の外に浮世繪に長じ、自作の黄表紙は勿論、喜三二の作にも盛に描いて居る。繪は鳥山石燕に學んだのであつて、喜多川歌麿と同門である。初めは青本を書いたが、安永四年に劃期的の作『金々先生榮花夢』を出版して以來、黄表紙作者の祖として喧傳せられた。黄表紙の作で『金々先生榮花夢』以外に名高いのは、『高慢齋行脚日記』（三册自畫安永五年刊行）『夫は楠木是は嘘氣 楠無益委記』（三册自畫安永八年刊行）『悦贔屓蝦夷押領』（三册北尾政美畫天明八年刊）『鸚鵡返文武二道』（二册北尾政美畫寛政元年刊）等である。『金々先生榮花夢』の構想は『枕中記』の盧生の夢の故事に基づいて居るのであるが、直接には謠曲の「邯鄲」を取つて之を當世風に

飜案して居る。「きんきん」は當時の通人の詞であつて、作中の主人公金村屋金兵衞の名もこれに因んである。其の筋は――志を立てて江戸に來た田舍者の金村屋金兵衞が、目黒の粟餅屋に立寄つて、粟餅の出來るのを待つ間に夢路に入り、豪商和泉屋清三の養子となつたが、吉原深川品川などの遊里に



金々先生榮花夢

出入して、金銀を費ひ散らした爲に放逐せられた時に夢から醒め、一生の樂も僅かに粟餅一臼の如きものだと悟つて鄕里へ歸つた――といふのである。小說としては極めて幼稚なものであるが、當時の通人生活の一端を寫し、通言を點綴し、なほ挿繪によつて風俗を示して居るのであつて、世相の一面に觸れて居る點に於て、黄表紙の發達上重要な位置を占めて居る。此の作が世に出て以來黄表紙は忽ち流行を來したのであつて、此の作意を襲うた作や續篇に擬した作も次々に現れた。次に『楠無益委記』は楠未來記の洒落である。未來の風俗を滑稽的に想像した作であつて、世相を皮肉に諷刺して居る。又『悅最蝦夷押領』は判官蝦夷渡りの說話を假りて、爲政者の政策を素破拔いた作であり、『鸚鵡返文武二道』は天明八年の喜三二の作『文武二道萬石通（まんごくどほし）』の例に倣

つて、松平定信の文武奬勵の新政を諷した作である。

朋誠堂喜三二

朋誠堂喜三二（文化十年歿七十九）は秋田藩士平澤平格である。狂歌狂詩に長じ、狂歌の戯號を手柄岡持と云ひ、狂詩には韓長齡と稱した。黄表紙の作者としては春町と竝び稱せられ、其の畫は多く春町の筆に成つて居る。黄表紙の名作には『長生見度記』（二册春町畫天明三年刊）『文武二道萬石通』（三册喜多川行麿畫天明八年刊行）などがある。前者は春町の『楠無益委記』の趣向に倣つて、當世を諷刺し、人物の弱點を穿つたものであり、後者は時代を鎌倉時代として、現代の文武奬勵の幕政を皮肉に諷した作である。殊に後者は評判の高かつた作であつて、遂に當局の忌諱に觸れ、爾來喜三二は戯作の筆を斷つに至つた。一説には自殺したとも傳へられて居る。

唐來參和

唐來參和（文化七年歿六十二）は姓を加藤と云ひ、もと武士であつたが、後に遊女屋の婿となつて通稱を和泉屋源藏と云ひ、本所松井町に住んでゐた。天明三年から五年に至る間の洒落本の作に『通神孔釋三教色』と『和唐珍解』とがある。黄表紙は天明四年から寛政九年までの十四五年間に、十六七種ばかり書いてゐる。其の中で世評の高かつたのは『莫切自根金生木』（三册歌麿門人千代女畫天明五年刊行）と『天下一面鏡ノ梅鉢』（三卷一册榮松齋長喜畫寛政元年刊行）とである。前者は黄表紙に類の多い金慾とは反對に、金々先生の隣に住む萬々先生といふ有福者が、金の出來るのに困却するといふ趣向を立てたものである。廻文の題名に盡きざる金の廻り合せを寓して居るのも面白い。後者は喜三二の『文武二道萬石通』と同じく、定信の文武奬勵を諷した作であるが、是は老中定信を菅公に擬して表面に善政を謳歌してゐる。此の作は殊に好評を博し、當時盛に市中を

賣り歩いたと言はれて居る。

芝全交

芝全交（寛政五年歿す）は本名を山本藤十郎と云ひ、大藏流の狂言師である。芝の西久保神谷町に住んでゐたので芝（司馬とも書く）と名乘つた。安永九年から寛政六年までの間に四十餘種の黄表紙を書いた。其の當り作は出世作の『龍宮咄大違寶船』（三册重政畫天明元年刊）を始め、『遊妓寔卵角文字』（三册重政畫寛政二年刊）『鼻下長物語』（三册政美畫寛政四年刊）『十四傾城腹之内』（三册重政畫寛政五年刊）等であり、殊に好評を博したのは『大悲千祿本』（一册政演畫天明五年刊）である。『大悲千祿本』は謠曲「田村」に基づいて、千手觀音の靈驗によつて田村麿將軍が、鈴鹿山の鬼神を退治した事を骨子とし、其の間に俠客神田の與吉や、天明三年の淺間山噴火の降灰などを織り込んだ作であつて、手に關係のある洒落滑稽を以て終始して居る。

山東京傳

黄表紙流行期の初から終まで絶えず活躍した作者は山東京傳である。京傳は姓を岩瀨、名を醒、通稱を傳藏と云ひ、山東庵京傳と號した。寶曆十一年に生れ、文化十三年に五十六歳で歿した。父祖は代々伊勢に住んだが、父傳左衞門は江戸に出て深川木場の質屋伊勢屋に奉公し、後に其の養子となつて二男二女を擧げた。長男は京傳で二男は京山である。京傳は十三歳の時父に伴はれて養家を出で、銀座二丁目に移り、其の後浮世繪師北尾重政の門に入つて繪を學び、北尾政演と號した。十七歳の頃から草紙の挿繪を描いて名を知られ、やがて戲作者となつたが、十九歳の頃から狹斜の巷に出入して通人生活を始めた。彼が黄表紙洒落本を得意に書いたのは、此の間の體驗に負ふ所が多いのである。其の後寛政五年三十三歳の時、銀座一丁目に移つて袋物（煙草入煙管）を商ひ、屋號を京屋と云つた。此の頃

から四十歳頃までは商人として働き、文壇から遠ざかつてゐたが、やがて讀本作者として復活した。かくて京傳の作者生活は寛政の中頃を境として前後二期に分たれる。前期は天明から寛政三年頃までで、黄表紙洒落本の作者として名を成した時代であり、後期はそれ以後文化の末までで、主として讀本合巻の作者として活躍した時代である。而して彼が本領を發揮したのは前期であつて、後期には寧ろ馬琴や種彦の下位に立つたのである。なほ京傳は晩年に隨筆雜書の著作に從事したのであつて、近世の風俗を考證圖解した『近世奇跡考』五卷『骨董集』四卷などは最も名高い。

京傳の黄表紙

京傳の黄表紙の總數（安永七年から文化三年に至るまでの間に書いた作。）は二百十餘部に達し、而も絶えず題材趣向を變へて新しい方面を開拓して居る。京傳の黄表紙の著しい特色は、彼が畫工であるだけに、文と繪の關係が最も理想的に出來上つて居る事である。尤も黄表紙界の大立物となつた寛政以後は、自ら描く暇がなくなつて北尾重政・同政美等の畫を用ひて居るが、作者の工案によつて文と繪組の調和の妙を得て居る事に變りはない。『戲作外題鑑』に安永七年（當時京傳十七歳）出版の『お花半七開帳利益札遊合』（二冊少通變人作北尾政演畫）を京傳の處女作として居るが、其の頃までは寧ろ畫工として知られてゐた。天明二年の自畫作『手前勝手御存商賣物（ごぞんじのしやうばいもの）』（三冊）が蜀山人の『稗史評判岡目八目』に推賞せられて以來、京傳の名は戲作界に認められ、天明五年に『江戸生艶氣樺焼（えどうまれうはきのかばやき）』（三冊自畫作）を出版するに及んで、其の名聲は大いに揚つた。『江戸生艶氣樺焼』は彼の黄表紙の中で最も名高い作である。百萬長者仇氣屋の獨息子の艶次郎といふ醜男で自惚の强い若者が、浮名の立つ事に腐心して様々な失敗を重ねた揚句、賣名の爲に浮世

屋の醜い妓女の浮名を相手に心中の眞似をして、却つて父親に助けられて果さず、最後には浮名と夫婦になつたといふ筋の作である。此の作は通人生活の裏面を滑稽に寫したもので、中には實在の人物を暗示し秘事を穿つた所があるので、忽ち世の歡迎を受けた。當時艶次郎は自惚男の異名となり、作中に描かれた艶次郎型の牡丹鼻を京傳鼻と稱したのを以ても、此の作が持て囃された事が窺はれる。



江戸生艶氣樺焼繪題簽

かくて此の作は大當りであつたので、京傳は更に其の續篇を書いて居る。其の後寛政の初頭には當時の改革を諷刺した『孔子縞于時藍染』（三冊自畫作 寛政元年刊）の如き作を試み、更に黄表紙界の作風を一轉させた『大極上請合賣心學早染草』（三冊 政美畫 寛政二年刊）などを出版したが、寛政三年に洒落本の爲に刑に處せられて以後は、他の黄表紙作者と同じく教訓物に轉じ、更に敵討物に移つた。

寛政期の傑作中で注意すべきものは、心學の教訓を表にし滑稽を裏に描寫した『心學早染草』、奇抜な構想と滑稽洒落で終始させた『忠臣藏即席料理』、『忠臣藏前世幕無』（共に三冊重政畫 寛政六年の刊行）等である。京傳は寛政の前半には年々十數種の黄表紙を書いたが、寛政六年から著しく減じ、享和から文化三年に至る間には年々數部を公にするに過ぎなかつた。是は京傳ばかりでなく、他の作者も亦同樣である。蓋し當時黄表紙は既に行詰つて、趣向が大同小異となり、畫

丁も或は他界し或は老いて、畫風は著しく情氣を帶びて來た。かくて文化の初頭、殆んどすべての作者が敵討物を書くやうになつて以後は、黄表紙の特色たる滑稽洒落は失はれて、漸次凋落の路を辿つたのである。

三　洒落本

黄表紙と並んで流行した小説に洒落本がある。通と滑稽を宗として、遊里生活を寫實的に描寫したものであるから、洒落本と稱せられるのであるが、一に通書情史又は艶史などと呼ばれた。又土器色の表紙を附けた小本であるから、其の形態によつて蒟蒻本とも呼ばれた。普通は半紙二つ截（半紙四つ折）五十枚以内の一冊讀切であるが、大形半紙や美濃紙の四つ折の大きさの物があり、冊數も二冊乃至五冊に及ぶのもあつた。洒落本が通と滑稽を要素とする點は黄表紙と同じであるが、其の形態内容文體等は全く異なつて居る。即ち洒落本は雅味のある唐本仕立のものが多く、挿繪は一二葉多きも數葉を超える事はない。又其の世界は遊里に限られ、寫す所はここに遊ぶ男女の風俗言動の寫實であり、從つて分量も多く内容も概ね複雜である。又洒落本は狂言本（脚本）の體裁を學んで、人物の會話によつて其の言語動作を活寫し、地の文は會話と區別して註のやうに記してゐるのが定型である。其の他題號序跋などに洒落と衒學的態度が認められる事も特色であるが、此の事は更に後に述べる。要するに洒落本は黄表紙と同じく、通人粹士が遊戲的氣分で書いた片々たる作品であるから、小説としての價値は

論ずるに足りない。併し當時の社交場としての遊里に於ける、男女の風俗儀禮人情言語などを其の儘に寫し出してゐるから、風俗史料や言語史料として貴重なものである。又犀利な觀察や寫實的若しくは心理的描寫は、對話を主とする文體と共に明治小說の源流となつて居るのであるから、文學史上では重要な位置を占めて居る。

作者及び畫工

洒落本の作者は主として黃表紙作家狂歌師等であるが、江戶小說の著名な作者は殆ど是に筆を染めて居る。尤も初期の作品は和漢の學に通じた人々が、匿名で戲に書いたものが多く、何人であるか分らないのが多い。著名な作者は山東京傳を筆頭に、田舍老人多田爺・山手馬鹿人（大田南畝）・朱樂館主人（朱樂菅江）・萬象亭（森島中良）・唐來參和・田螺金魚・式亭三馬・十返舍一九・柳亭種彥等である。又插繪は主として浮世繪師の北尾重政・北尾政演（山東京傳）・勝川春章・勝川春潮・勝川春好・喜多川歌麿・葛飾北齋・溪齋英泉等の手に成つた。其の繪は主として略畫であるが、筆致にはそれぞれの特色が發揮せられてゐる。

時代的區分

洒落本は寶曆から天保に至る九十年間に亙つて四百餘種現れてゐるが、文政以後には殆ど見るべきものがない。而して寶曆明和期は其の發生期であり、安永天明から寬政の初までは全盛期であり、（之を更に前期中期に分つ）それ以後は末期である。是より此の四期の變遷を著名な作を擧げて述べようと思ふ。

一）發生期の洒落本

洒落本は源を遊里細見に發してゐるのであつて、享保十三年に江戶で刊行せられた撃鉦先生作「両巴巵言」（以下書名を記さないが、これは皆一冊物である）や、延享四年大阪で上木せられた探花亭主人の作「百花評林」などは、洒落

本の發生に關係のある作品である。此等は遊里の情景若しくは遊女の品評を漢文で記した戲書で、細見の新様式であるが、其の形態は後の酒落本と殆ど同じである。普通酒落本の起原と見做されてゐるのは、寶曆七年に江戸で刊行せられた『北州異素六帖』、及び同年に大阪に現れた『聖遊廓』（此の二部は下に解說する。）であるが、當時大阪にはこれに類した初期の酒落本が次々に刊行せられた。卽ち『聖遊廓』に先立ち或は同じ頃に大阪で上梓せられたものには、醉妓先生作『本朝色鑑』（寬曆年間刊行）外山翁作『浪花色八卦』、獻笑閣主人作『月花餘情』（寶曆六年以前作刊行年月未詳）八幡大名作『穿當珍話』（寶曆七年刊行）等がある。此等はそれ〴〵奇拔にして滑稽な趣向を立てて、大阪の遊里の様を寫し遊女の品評を記したもので、發生期の酒落本の特質を示して居る。其の大部分は未だ漢文で記されてゐるが、『月花餘情』の一部分には嫖客と遊女の遊を會話體で記してゐるのであつて、後の酒落本の文體の源泉となつて居る。

聖遊廓

酒落本は其の發生期に於ては江戸よりも寧ろ上方に多く現れたのであるが、大阪の酒落本として最も名高いのは、作者未詳の『聖遊廓』（寶曆七年刊行）である。後に改題して「雪月花」と云つたのは、作中の三聖を雪月花に擬した爲である。此の作は孔子老子釋迦の三聖が李白の營む揚屋に落合つて、それ〴〵大道太夫・大空太夫・假世太夫を相方とし、白樂天・鐵拐仙人等の幇間に取圍まれて遊ぶ様を滑稽に寫し、更に釋迦が梵字の書置を遺し、假世太夫を連れて駈落したのを、文珠の智慧で淸明の許へ方角を聞きに使を出す事を記し、最後に淨瑠璃まがひの「道行妹背の送り火」を掲げて居る。一篇の趣向が斯くの如くである上に、人物の會話中に出て來る陶淵明の相方を菊とし、費長房の相方を鶴とし、周茂の相

方を蓮とし、東坡の栢方の舞臺子を李節推とし、韓退之の蔭子を孟東野とするなど、作者が漢學の素養ある人であつた事を示してゐる。『聖遊廓』は未だ狂文に近いものであるが、人物の會話を中心に揚屋の樣を寫してゐるのと、卷末に「くるわ唐韻」と題して、内容に關係のない廓言葉を唐音で書き列ねたものを添へて居るのは、やがて江戸に起る洒落本に近いものである。此の作の破天荒な試みは當時驚異の眼で見られたらしく、やがて其の作意に倣つて寶曆十三年に先賢卜子夏作『聖遊廓二篇列仙傳』が刊行せられ、天明三年には唐來參和の作『通人三教色』の如きものが現はれた。此等は純然たる洒落本である。

異素六帖

大阪で『聖遊廓』が刊行せられた年に、江戸に無々道人作『北州異素六帖』（寶曆七年刊行二冊）が現れた。題名は支那の『義楚六帖』を捩つたもので、「異素」に色の意味を託し、上に冠した「北州」は吉原を示してゐる。作者無々道人は澤田東江（寛政八年歿六十五）である。東江は林鳳谷に就いて朱子學を修め、高頤齋に書道を學んで書家として名を知られた。此の作品は上下二卷から成る。上卷には儒者佛者歌學者の三人が色道を論爭した後、歌學者が吉原に關する題五十五を出して、之に詩と歌とを引合せる事を提案するまでを記してゐる。下卷はそれを承けて、太夫の揚屋入に「紫陌紅塵拂」面來。無」人不」道看」花囘」と「乙女の姿しばし留めん」とを合せるやうな方法で、前の五十五題にそれぞれ『唐詩選』の句と『百人一首』の下の句とを合せて、之に戲文の註を施し、且つ所々に挿繪を入れて居る。要するに『異素六帖』は其の趣向や狂文的な表現に、洒落と滑稽を示したまでのもので、未だ本格的の洒落本にはなつて居ない。

發生期作品の特徵

以上擧げた作品によつて察せられるやうに、發生期の洒落本は漢學の素養のある人が、支那の情史に刺戟せられて、世に用ひられない不平を戲作に洩らしたのが多いのである。從つて作者の名も匿名で、而も茶化したのが多く、書名も支那の典籍の捩りが多い。又卷頭には漢文(戲文)の序跋を載せ、本文も主として漢文體を用ひ、時に漢詩を挿入したのもあつて、作者の衒學的態度は隨所に認められる。而して此等の影響は後の純粹の洒落本に及んで殆ど常式となつた。

(二)前期の洒落本

『異素六帖』と『聖遊廓』が相踵いで東西に現れてから十三四年の後には、江戸に於て純然たる洒落本が次々に刊行せられた。江戸の洒落本の祖と稱せられるのは『遊子方言』であるが、其の前年に刊行せられた白岡先生作『廓中奇談』(明和六年刊行)の如きは、形式も内容も共に既に本格的洒落本になつてゐる。

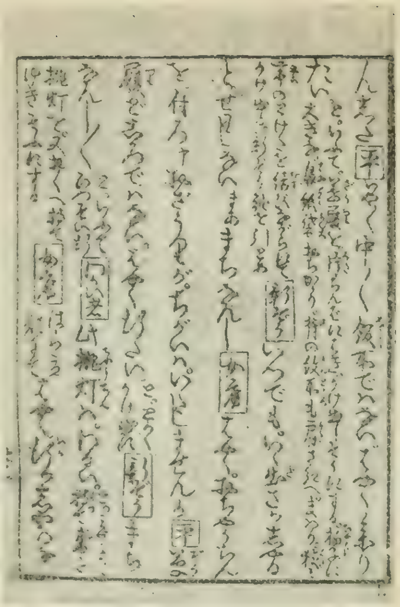
廓中奇談

白岡先生は誰の事か明かでない。此の作品は「船窓笑話」「弄花卮言」「掃臭夜話」の三話から成つてゐる。「船窓笑話」には吉原通ひの船中で、客と藝者と幇間が吉原の遊女嫖客や藝者の噂をする事を記し、「弄花卮言」には客が茶屋に上りそこから廓に入つて、翌朝茶屋の迎へで歸るまでの遊びぶりを寫してゐる。而して「掃臭夜話」は夜鷹と若衆の立話を記したもので、前話と皮肉な對照をなして居る。此の作は純寫實の最初の作品であるが、更に注意すべきは田舍老人多田爺の作『遊子方言』である。

遊子方言

其の刊行年月は從來未詳とされてゐたが、朝倉無聲氏は明和八年板の『虛實馬鹿語』に此の書名が見え、又『中古風俗志』附錄に明和七寅年に此の書の版行せられた事を記してゐるのに據つて、明和七年の刊行と推定せられた。(雜誌『江戸趣味』所載朝倉氏の論文參照) 作者多田爺は此の作の再版本の奧附に見える板元多田屋利兵衞の事で

あらうと云はれて居る。題名は「揚子方言」の洒落であるが、猶「方言」には吉原の廓言葉を聞かせてゐる。其の内容は三十四歳の通り者が、二十歳位の息子を誘つて、中の町の茶屋から廓に上つて盛に通人振るが、野暮の本性は直ちに暴露して遊女に振られたのに反して、(作者は茲に通り者の口を借りて通を說いてゐる。)生息子は却つて厚遇せられて、面白く遊ぶといふ趣向であつて、是を發端・中の町・



遊子方言

夜のけしき・宵の程・更けての體・しののめの頃の五條に亙つて書き上げてゐる。表面通人を裝ふ半可通と生息子とを對照して、半可通が野暮をさらけ出す滑稽を描寫したのは、此の作が最初であつて、此の構想は其の後の洒落本に摸倣せられて遂に定型となつた。又本書は「夜のけしき」の一條を除く外は、すべて狂言本の形式を學んで、人物の會話で筋を運び、(地の文は細字で二行に註してある)而も是によつて廓の情景や人物の性格などを鮮明に寫し出してゐるのであつて、此の形式も後の洒落本の常式となつた。要するに洒落本の外形内容は此の作に至つて決定し、其の構想描寫文章は後の洒落本に範を垂れたのであつて、是が江戸の洒落本の祖と稱せられたのも當然である。左に文體を示す爲に發端の一節を抄出して置く。

［通り者 むすこ 二人］舟宿のみせより、もふ舟はできたかと、くわへ煙管にていづる。［女房］氣のどくそうな顔ちとおまち被成てくださいませ。船頭がみんな出はらいまして、ようく只今かへりました船頭が參りますが、大ぶはらがへつたと申て、茶漬をたべて參ります。［通り者］そりやとんだ事ッた。［女房］さやうで御座りますれど、汐時がよう御座りますから、舟はたちまちで御ざります。［通り者］そんなら、ま一ぷくのみましよ。○こいふて待うちに、まへの河岸へおごり舟二三人いりたるやね舟がつき、男三四人あがれば、通り者は煙草のむやうに思入ありて其ふねからあがる人は、みなしつた顔のやうな見へをして、物をいひかけられたそうな顔にてゐる。其中に年ごろなおぢいが默禮して行［通り者］どいつもみんなおれが知らない奴だ。あん中にしつた顔なやつは、たつた二人ばッちない。［むすこ］今おまへに、辭儀していッた達者さふなおぢいは、折ふしこゝらで見る人じやが。［通り者］あれはおれが久しい近附だ。やほなおぢいさ。ありや鎌地屋本次郎といふおぢいだ。跡のにた山、本多の、いきに見へるやつは翠助といふやつだ。あいつはおれを、しつた顔していつたが、おら、つるどあッた事ない。兎角おらを知つ顔したがる人のあがるを見るにつけても、はやく行たいどうだ。○河岸から［船頭］さあお召しなはりやせ。○女房二人をおくり、ふねおしいだす［女房］御きげんようお召し被成ませ。○舟は大川へ出る。

辰巳の園

『遊子方言』の影響を受けて、吉原以外の岡場所の特色を寫したのは、夢中散人寢言先生作『辰巳の園』であつて、『遊子方言』と同じ年に刊行せられた。作者の實名は未詳。同じ作者の筆に成つた洒落本に『南閨雜話』安永二年刊行『芝居晶屓方言』などがある。『辰巳の園』の辰巳は江戸の東南に當る深川の遊里を指すのであつて、此の作は深川を背景に取つた最初の作である。構想は『遊子方言』に倣つて、通人を裝ふ如雷が、田舍侍の新五左衞門を深川へ案内する途中、舟の中で頻りに通を振りまはすが、目的

の妓樓尾花屋に上ると、如雷の氣障な半可通が忽ち暴露するといふ滑稽を寫してゐる。此の作は明和の頃頓に繁昌に赴いた深川の遊里を描寫しようとしたもので、卷末に深川の通言を列ねて解釋を施してゐるのは、細見から發足した遊里案内記としての、初期の洒落本の名殘を留めてゐる。

其の他の作品

『辰巳の園』に次いで、『遊子方言』や『辰巳の園』の影響を受けながら、背景を擴張し或は描寫に新しみを見せた作が相踵いで現れた。其の著名なものを擧げれば、江戸の各遊里と江戸三座の賑ひを題材とした金々先生作『當世氣轉草』(安永二年四月刊行) 品川の遊里を描寫した浮世遍歴齋道郎苦先生作『婦美車紫鹿子』(安永三年刊行) 深川の裏櫓の情景を寫した山手馬鹿人(大田蜀山)の作『深川新話』(安永八年刊行) 輕井澤を背景に江戸客と地女の滑稽な對照を見せた、同じく山手馬鹿人の作『輕井茶話道中粹語錄』(安永年間刊行) 深川情調を『辰巳の園』よりも一層寫實的に描寫した蓬萊山人歸橋の作『美地之蠣殼』(安永八年刊行) などである。此等の作の多くは、構想は『遊子方言』以來の型を襲つてゐるが、背景は吉原以外の岡場所や地方の遊里や劇場などに移り、其の描寫は風俗言語動作に亙つて微細を極めてゐる。

(三)中期の洒落本

其の後洒落本は天明期になつて、遊里の外面的描寫ばかりでなく、嫖客と遊女の手練手管や戀愛の表裏などを鋭く穿つやうになつた。此の穿ちの傾向は山東京傳に至つて其の極に達するのであるが、彼が天明五年に處女作『令子洞房』を公にした前後には、『遊子方言』以來の型を破り、或は當時流行の寫實的暴露的描寫に反抗しようとする機運が起つた。田螺金魚の作『妓者呼子鳥』唐來參和の作『和唐珍解』萬象亭の作『田舍芝居』等は、種々の意味で注意すべき作品である。

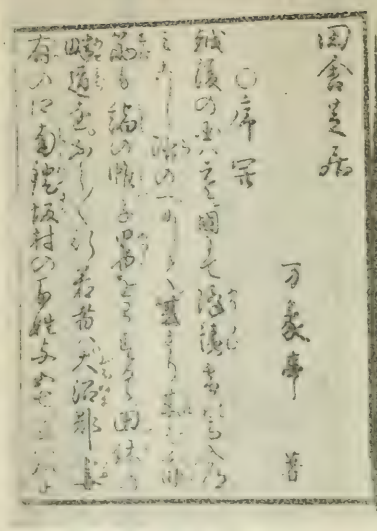
『妓者呼子鳥』（安永六年刊行）は再版の時に『妓者虎之卷』と改題した。作者田螺金魚は神田三河町邊の町醫の子であると云ふが、傳は詳かでない。此の作は當時漸く盛になつた町藝者を題材とした洒落本中で最も勝れたものであり、且つ人情を寫した點に於て異彩を放つた。橘町の女藝者で名高かつた辨天お豐と、木挽町のお富に關する話を骨子として、多少の潤色を加へたもので、其の梗概は下に述べる通りである。露時雨と云ふ通人と深く契り交したお豐は、讎敵のお富に對する嫉妬の爲に狂氣して、夜毎に秋葉の宮に呪の釘を打ちに行つた。お富は二人の中を切らせる爲に、手管で嫌ふ男に賴んで、露時雨の爲に入用な金二十兩を工面し、其の義理で露時雨の爲に掘つた腕の文身を消された。露時雨はお富の苦勞を變心したものと誤解して、逆上の爲に刀で刺した時、苦しい息の下から語る眞情を聞いて後悔し、自分も同じ刃で切腹して心中を遂げた。お豐はこれをお富の仕業と睨んで益嫉妬に悶え、其の一念が瞋恚となつてお富の墓を襲うてゐたが、或浪人が其の陰火を眞二つに切つた時、病床に臥してゐたお豐は、一聲叫んで息が絶えたと云ふ。此の作品は同じ作者が其の翌年に、當時の高利貸鳥山撿校が、吉原松葉屋の遊女瀨川を身請して、通人の間に衝動を與へた事件を素材とした『契情買虎之卷』（安永七年刊行）と共に、人情本風の洒落本の嚆矢と云はれて居る。當時洒落本は花街の穿ちにのみ走つて、讀者は漸く單調に飽いてゐた時であつたから、作者は心理描寫によつて新生面を開かうとしたのである。其の後心理描寫の傾向は益著しくなつて、遂に人情本の流行を導いたのであるから、『妓者呼子鳥』並に『契情買虎之卷』は洒落本展開の上に重要な位置を占めて居る。

和唐珍解

「和唐珍解」(天明五年刊行)は和銅珍開の捩りである。作者唐来参和の傳は既に記した。此の作は長崎丸山の揚屋に於ける唐人の遊興を空想で書いたのであつて、人物は「國姓爺合戰」から借りて唐人を李踏天、通詞を和田唐内、遊女を栴檀とし、唐人と通詞の用語を唐音で記して居る。作品としては在来の型を襲うてゐるが、背景人物言葉などを珍奇にして、目先の變化を圖つた所に特質が見られる。「(通人)三教色」は同じ作者の筆で前年に刊行せられた。次に

田舎芝居

「田舎芝居」(天明七年刊行)の作者は、將軍家の奥醫桂川國訓の子森島甫斎(後に中原中良と改めた)通稱萬藏と云ひ、號を森羅萬象別號を萬象亭と云つた。平賀源内の門人で蘭學に通じ、其の方面の著書もあるが、狂歌師戯作者として名を知られた。此の作は在来の洒落本と全く趣を異にして、越後の片田舎に催された芝居の見物の風俗や劇場の情景や狂言の措精などに、田舎者の戀を織り交ぜたもので、會話には方言を用ひてゐる。斯かる珍趣向を立てた趣旨は、作者が歌舞伎のほめ詞に倣つて掲げた序によつて明かである。即ち「遊子方言」「辰巳の園」以来、通の寫實に偏し穿ちの弊に流れて來たのに對して、虚を以て實の如く書き爲す、戯作本来の面目に復歸すべき事を唱へる爲の作品である。從つて此の作は作者自らも序中に「洒落本にあらずして野夫本



田舎芝居（序開）

なり」と言つてゐる通り、純洒落本ではないが、其の後之を摸倣した竹塚東子作『田舍談義』(寛政二年刊行)が現れ、更に一九の滑稽本の出現に刺戟を與へた點に於て注意すべきものである。なほ此の作が當時洒落本作者に衝動を與へた事は、京傳が其の序文を見て、自分の事を罵つたものと思ひ、萬象亭と絶交したと傳へられて居るのによつても推察せられる。(馬琴の『物之本江戸作者部類』に據る。)

京傳の洒落本

安永天明期に洒落本作者の間から、種々の反動が起つた事は右に述べた通りであるが、大勢は依然として穿ちを專らとし、觀察の精緻と現實の暴露は、天明から寛政の初頭にかけて其の極度に達した。

令子洞房

而して此の時代を代表する洒落本作者は山東京傳である。京傳の洒落本の處女作は『令子洞房』であつて、天明五年(作者二十四歳の時)に成つた。畫は北尾政演卽ち彼の筆である。此の作品は在來のものと異なつて、作者の遊蕩生活の體驗に基づいて、嫖客と遊女の心得や、戀愛の虛實や、遊女の境遇などを、十二條に亙つて細かに記した隨筆體のものである。作品中に遊里の心得や通の傳授を記した例は從來にもあるが、此の作には人情の機微を穿ち、筆致に獨得の味があつて、京傳の後年に於ける飛躍を豫告して居る。

さて京傳は『令子洞房』を刊行した翌年から寛政二年までの五年間に、『客衆肝膽鏡』(天明六年刊行)『通言總籬』(天明七年刊行)『古契三娼』(同上)『吉原楊枝』(天明八年刊行)『靑樓和談新造圖彙』(同上)『通氣粹語傳』(同上)『傾城買四十八手』(寛政二年刊行)『戲作四書京傳予誌』(同上)其の他二三部を著作して、いよいよ本領を發揮し、洒落本作者の隨一となつた。何れにも自畫を挿入してゐる。

客衆肝膽鏡

『客衆肝膽鏡』は一に『客衆肝照子』とも記し、題名は『古今集紐鏡』の洒落

古契三娼　**吉原楊枝**　**通氣粹語傳**　**傾城買四十八手**

である。遊里の類型的な男女の風俗言語態度などを微細に活寫した作品である。次の『通言總籬』は便宜上後に解說する。『古契三娼』は支那の虎溪三笑（虎溪は廬山にある溪の名。虎溪三笑は慧遠法師が陶淵明・陸修靜を送る道すがら道を談じ、覺えず虎溪を通り過ぎて大いに笑つたといふ故事。）の捩りで、古契は古傾城の契情の意である。此の作品は慧遠・陶淵明・陸修靜の三人に擬した遊女上りの妾姿が、もと勤めてゐた吉原深川品川の風俗人情などの相違を語り合ふといふ趣向である。『通言總籬』に於て吉原を取扱つたのに對して、三つの遊里の比較を試みた作で、微細な穿ちを主としてゐる事は從來と同樣である。『吉原楊枝』は『令子洞房』の續篇とも云ふべきもので、遊客の心得と遊里の案内を記してゐる。『新造圖彙』は『訓蒙圖彙』に倣つて、廓の風俗人情習慣魂膽などを白畫で說明した特殊の作品で、京傳の天稟を窺ふべき好資料である。（一一四九頁參照）又『通氣粹語傳』は支那の『忠義水滸傳』を洒落本に應用したもので、人物の名も原本の人名を捩つてゐる。黃表紙に近い作であるが、彼が後に書いた『忠臣水滸傳』の腹案となつた點に於て有名である。『傾城買四十八手』は題名が示す通り、相撲の四十八手に擬して、客と遊女の間の魂膽手管を京傳獨得の鋭利な觀察によつて穿つた作で、後の作者に種々の影響を與へた。

通言總籬

さて『通言總籬』は京傳の洒落本中の傑作と稱せられて居る。總籬は大籬とも云ひ吉原の大店の意である。此の作は彼が天明五年に發表して好評を博した黃表紙の、『江戸生艶氣樺燒』の續篇に擬したもので、人物もかの作品中の艶次郎を始め、北里喜之介惡井志庵などを再び登場させてゐる。其の内容

は二部に分たれてゐる。第一部には若檀那艶次郎が志庵を同伴して、日本橋の伊勢町新道の喜之介の住居を訪れ、もと吉原の遊女であつた喜之介の女房のおちせを交へて、四人が深川品川などの遊里の噂をして吉原に移り、そこの細かい穿ちに話の花を咲かせた後、三人打連れて吉原に出掛けるまでの事を記してゐる。此の筋は多くの洒落本に見る定型である。第二部では三人が茶屋駿河屋に上り、そこから松田屋へ繰り込んで、女藝者幇間などに取圍まれての騒ぎを演ずる。其の後艶次郎は遊女おす川に冷遇せられたのに反して、喜之助は或遊女と忍び合ふのであるが、作者は此の二人の描寫の代りに、隣座敷の二組の客と女郎の相反した場面を對照的に寫してゐる。かくて翌朝三人連れ立つて歸途に就く樣を記して、最後に淨瑠璃の一節を添へてゐる。此の作中に描いた松田屋のおす川の座敷の模樣は、大店松葉屋の遊女瀨川の座敷を其の儘に寫したものであり、現れて來る遊女もそれ〳〵實在の人物を、會話の言葉の調子や癖によつて、それと覺らせるやうにしたもので、飽くまで穿ちを宗としてゐる。



通言總籬挿繪（京傳畫）

蓋し作者の體驗によつて記したものであると云はれてゐる。要するに此の作は彼が黄表紙に試みた滑稽を、洒落本の通に換へたものであつて、當時好評を博したのは其の微細な觀察と暴露的な描寫によ

るのである。

洒落本禁令

洒落本は天明期に入つて遊里描寫が益微に入り細を穿つた爲に、風紀上面白からぬ弊害を伴なふやうになつた。是に於て幕府は遂に寛政二年十月二十七日に洒落本禁止令を出した。然るに京傳は板元蔦屋重三郎の勸めに應じて、「娼妓絹籭」「錦之裏」「仕懸文庫」の三部の洒落本を書き、翌年の春に刊

娼妓絹籭

行させた。何れも繪は作者の筆である。『娼妓絹籭』は角書に「手段詰物(てくだつめもの)」とあるやうに、將棊の書「將棊絹籭」の捩りであつて、書中にも將棊の術語を多く用ひてゐる。背景を大阪新町とし、人物を梅川忠兵衞としてゐるが、實は吉原の遊女が客に對する義理と人情の二道に惱む哀れな心情を中心に寫した作品である。此の作は『錦之裏』と共に、京傳が前に發表した「傾城買四十八手」の所謂眞の手を更に精細に示したものであるが、又他の一面から見れば、人情本風の作に轉じようとする意圖があつたものとも見られる。

錦之裏

『錦之裏』は角書に「青樓晝之世界」とある。題號の由來は自序に「蓋妄作(むだがき)の茶表紙も年々歳々穴相似て、歳々年々趣向新しからざれば、一ツぐつと捻(ひねつ)てみた青樓の晝の世界。夜の景色の花美(はで)とはうつて變(かはつ)た案じの小冊(さつ)。此奴(こいつ)は一ツ新幟ならめと、其儘錦の裏と題す而已(のみ)」とあるので明かである。時代を後一條院の御代とし、場所を攝津の神崎の廓とし、人物を夕霧伊左衞門としてゐるが、實は吉原の晝の有樣を微細に穿つたのである。前半には例の手法で廓內の情景を細かに描寫してゐるが、後半は人情本風になつてゐる。

仕懸文庫

『仕懸文庫』は角書に「大磯風俗」と記し、扉に「大磯廓中光景、鎌倉遊子傳記」を

記してゐる。即ち大磯を背景に取り、曾我兄弟と朝比奈を嫖客とし、梶原源太を半可通として、現代の深川の仲町に於ける客と遊女の魂膽を穿つた作である。題號は作者が自ら書中に「仕懸文庫といふは、子どもの著がへを入てもたせて來る文庫なり。大磯にて著用をしかけといふ事人の知る所なり。尤仕懸文庫を持せる事は繩町にかぎるゆへに此冊子の外題とす」（○大磯は深川、繩町は仲町、子どもは遊女である）と記してゐるので明かである。

京傳

右の三篇は何れも勝れた作であり、而も禁令直後に現れた爲に一層世の注意を惹いて非常な好評を博し、又後の作家に及ぼした影響も少くなかつた。さて此の三部の作は何れも表面時代物であり、而も袋にも教訓讀本の四字を冠らせ、序跋にも教訓めいた事を述べて居る。是は言ふまでもなく取締の眼を逃れんが爲の用意である。併し遂に當局の吟味を受けて、京傳は手鎖五十日を申付けられ、板元は身上半減の處分を受け、且つ三部の作は絶版を命じられた。時に寛政三年三月で京傳三十一歳であつた。小心な京傳は此の事に懲りて最も得意とする洒落本の筆を絶ち、其の他の作者も取締に畏縮して、さしもに流行を極めた洒落本も一時下火になつた。

四）末期の洒落本

洒落本禁止令は一時戲作者に一大衝動を與へたが、三日法度の例に洩れず、時を經るに從つて取締が弛んで、寛政五六年頃から再び多くの洒落本が刊行せられた。尤も此の頃からの作品は心理描寫を主としたから、自然構想の變化に富んだものになつて、漸次人情本に近づいて行つた。此の頃の作者として注意すべきは梅暮里谷峨・式亭三馬・十返舍一九・鼻山人（東里山人）等である。

梅暮里谷峨

梅暮里谷峨（文政四年歿七十二）は

傾城買二筋道

本名を反町三郎助（後に與左衞門と改む）と云ひ久留米の藩士で、江戸詰の大目付役を勤めてゐた。梅暮里と號したのは彼が住んだ藩邸が本所埋堀にあつた爲である。讀本合卷の作もあるが、洒落本作者として最も名を知られた。『傾城買二筋道』（寛政十年刊行）は傑作であり且つ末期の洒落本の代表作である。これは二十年前に發表せられた田螺金魚の作『妓者呼子鳥』及び『契情買虎之卷』の影響を受けて、實情の描寫に成功した作である。其の内容は吉原を背景とし、美男の五郎がまだ馴染の淺い須磨衣に、金の無心を言つて愛想盡かしをされた話と、醜夫の文里を嫌ひ通してゐた年若い遊女一重が、三年間盡してくれた眞情にほだされて、遂に深い仲になつた話とを對照させたものである。即ち二筋道を說いてはゐるが、遊女の愛を得る道は金や容貌ではなく、畢竟眞情である事を示したのであつて、其の構想に新しみがあり、其の心理描寫が極めて巧みであつた爲に、忽ち好評を博した。

廓の癖　宵の程

作者は此の新作が盛に賣れたので、其の翌年に後篇として『廓の癖』（寛政十一年刊）を書き、引續いて三篇として『宵の程』（寛政十二年刊）を發表した。此の二篇は一重と文里の後日譚であつて、『廓の癖』には二人が深みに陷つて金に詰つて逢へなくなつた結果、一重が思ひ惱んで病床に就いた事を物語り、更に『宵の程』では文里も亦一重の身を案じて病みつき、而も親に勘當せられたが、結局妻と親が一重の眞情に同情して、家庭に入れて同棲させる事になつてゐる。『傾城買二筋道』及び其の續篇は種々の點から見て、小說史上重要な位置を占めて居る。其の主な點を擧げれば、(一)其の構想並に描寫の態度が從來の洒落本と全く異なつて人情本に接近してゐる事、(二)其の形態が人情本と同じく中本製となつて居り、且つ續

篇が刊行されて居る事、(三)此の作が發表せられて以來其の作風に倣つた洒落本が續出し、殊に爲永春水の人情本に多くの影響を與へた事等である。要するに此の作は洒落本が人情本に展開する過渡期の作としての特質を具へ、後の小説に多くの影響を與へた點に於て注意すべきものである。

式亭三馬　辰巳婦言

次に式亭三馬は後章に述べるやうに滑稽本作者であるが、寛政十年に洒落本の處女作『辰巳婦言』を發表した。「辰巳」は深川であり、「婦言」は口繪に今樣普賢菩薩を掲げて居るのを見ると、普賢の振りである。口繪は喜多川歌麿の筆で洒落本に前例のない彩色畫である。角書に「石場妓談」とある通り、深川の古石場新石場の世界に、遊女一人と客三人の間の魂膽手管の腕競を書いたものである。凡例に「諸君子の非言を不顧名家の糟粕を嘗て、予が分に應じたる新石場の世界を著す」とあるやうに、蓬萊山人歸橋作『富賀川拜見』(天明二年刊行)の構想に傚ひ、京傳の作『傾城買四十八手』『錦之裏』『仕懸文庫』等の趣向を學んだ所があるが、描寫には三馬獨得の辛辣な觀察がある。此の作者も亦七年の後に續篇『船頭深話』(文化三年刊行)を出し、更に其の翌年に三篇として『船頭部屋』(文化四年刊行)を刊行してゐる。此の三部は春水の人情本『春色梅兒與美』に多大の影響を與へてゐる。三馬の洒落本にはなほ『傾城買談客物語』(寛政十一年刊)など注意すべき作がある。

面美多勤身

右に述べた諸作の外に猶注意すべきは寛政年間に刊行せられた『面美多勤身』である。廓通交と廓集交の署名があるが傳は詳かでない。題名は思ひ立つ身に深川の辰巳を懸けてゐる。伊勢の御遷宮を拜して來た二人の男が、深川の遊里で東海道筋の驛々の遊女茶屋女や名所名物の品評をするといふ趣向

のもので、至る所に穿ちと洒落がある。旅行に結びつけて地方の遊女の樣を寫したのは新しい構想であつて、一九の『道中膝栗毛』の先蹤となつてゐる。

鼻山人

文化文政期になると洒落本は益人情本風のものが多くなつた。此の頃の傾向を代表する作者は鼻山人である。東里山人とも號した。本名は細川浪次郎と云ひ幕府の與力を勤めてゐたが、京傳の門人となつて洒落本人情本合卷讀本等を書いた。洒落本の代表作は『娼妓美談籬の花』（文化十四年刊）及び其の後篇『廓宇久爲壽』（文政元年刊）であつて、京傳の影響が認められる。尤も此の作は形態は洒落本であるが、内容は殆ど人情本になつてゐるのであつて、過渡期の代表的作品として注意せられる。其の後洒落本は天保嘉永の頃までも引續いて時々刊行せられたが、殆ど見るべきものはない。

洒落本を集成したものには山崎麓・高木好次兩氏が編纂し且つ解説を施した『洒落本大系』十二卷があつて、殆どすべての作が收められて居る。此の外には尾崎久彌氏編『洒落本集成』（既刊三卷）があり、國書刊行會編纂の『徳川文藝類聚』第五『江戸時代文藝資料』第一などにも集められて居る。又洒落本の選集には『近代日本文學大系』第十一卷『日本名著全集』第十二卷（洒落本集）岩波文庫の『洒落本集』等がある。『日本名著全集』には山口剛氏の詳細な解題が附いてゐる。

第七章　江戸の讀本と合卷

一　山東京傳

江戸に於ける讀本の興隆

明和から天明にかけて上方に庭鐘・秋成・椿園等の小説が刊行せられた頃、江戸にも讀本に筆を染め

る者が漸く現れた。『操草紙』五冊明和八年刊行を書いた淡海子傳記未詳『奇傳新話』六册天明二年刊行の作者蜉蝣子本名未詳、『坂東忠義傳』十册安永七年刊行を著作した三木成久等は、江戸の讀本作者の先驅である。次いで寛政期になると、江戸には勝れた作者が續々輩出して、遂に上方に代つて文壇の中心となつた。江戸に於ける讀本を代表する作者は山東京傳と曲亭馬琴である。京傳は寛政元年に讀本の處女作『通俗大聖傳』五册を發表し、馬琴の讀本の處女作『高尾船字文』五册は寛政七年に刊行せられた。京傳と馬琴の外には宿屋飯盛の戲號を用ひた石川雅望が、寛政二年に支那小說『醒世恒言』の飜譯『通俗醒世恒言』五册を出版し、又洒落本作者の森羅亭萬象や振鷺亭等も、寛政四五年以來次々に讀本を發表した。かくて天明寛政頃は江戸の讀本の發生期であるが、此の頃はなほ黃表紙洒落本の全盛期であつて、讀本には未だ勝れたものが現れなかつた。江戸の讀本が活氣を呈したのは、洒落本作者の大立物の京傳が、寛政の末頃から讀本に主力を注ぐやうになつてからである。

京傳の讀本

京傳は右に述べたやうに、二十九歳の時寛政元年に彼の讀本の處女作『通俗大聖傳』を發表して居るが、專ら讀本を著作するやうになつたのは、洒落本の爲に刑に處せられた寛政三年以後である。此の頃京傳の後輩である馬琴は漸く名聲を揚げて、互に頡頏して下らなかつた時であるから、京傳の讀本の佳作も亦此の間に成つた。尤も京傳が讀本作者として喧傳せられたのは、文化元年四十四歲以後であつて、寛政十年に書いた『忠臣水滸傳』前篇後篇各五册北尾重政畫は、例の『水滸傳』の飜案物であり、享和三年の出版の『復讐奇談安積沼』五册、北尾重政畫や、文化元年刊行の『優曇華物語』七册、喜多武清畫などは、在來の種々の說話を結集し

た敵討物であつて、未だ成功作とは認められない。京傳の讀本の特色は歌舞伎淨瑠璃の題材趣向を取つて書き上げた、勸善懲惡主義の作品にあるのであつて、代表作と見るべきものは『櫻姬全傳曙草紙』（五巻六册文化二年刊行）『善知鳥安方忠義傳』（五巻六册文化三年刊行）『昔話稻妻表紙』（五巻六册文化三年刊行）『本朝醉菩提』（八巻十册文化六年刊行）、『雙蝶記』（五巻六册文化十年刊行）の五部である。（以上何れも畫工は歌川豐國）

復讐奇談安積沼

『復讐奇談安積沼』は奥州安積郡の產小幡小平次といふ旅役者が、妻と其の情夫の爲に殺害せられた巷談に基づき、これに傳奇的要素や怪談的要素を加へて成つた單純な趣向の敵討物であるが、好評であつたと云ふ。

優曇華物語

『優曇華物語』は肥後の田舍侍網干兵衞夫婦が、犬太郎玄海と云ふ惡僧に殺害せられ、其の子皎二郎の妻弓兒の養父渥美左衞門高教も、玄海の後身大蛇太郎と云ふ賊魁に殺されたので、年少の皎二郎と弓兒が共同の敵大蛇太郎を討つといふ筋の物語である。此の作は和漢古今の怪奇的說話を織り込んだ複雜な筋のものであるが、畢竟武士道に因果話を絡ませた勸懲主義の小說である。作者は相當苦心した作であるが、筋の進行を急いだ爲に統一を失ひ、且つ趣向も概ね平凡であつたから、前作よりも却つて不評判であつた。

櫻姬全傳曙草紙

京傳は『優曇華物語』の不成功を悔いて、翌年文化二年には題材趣向を變へ、且つ挿繪長紙の意匠などにも苦心して『櫻姬全傳曙草紙』を發表した。此の作品は古くから歌舞伎や淨瑠璃で名高い淸玄櫻姬の說話に基づいて、之を因果話に附會し且つ勸懲主義に書き上げたもので、其の趣向には支那小說『金翹傳』及び李笠翁の戲曲『風箏誤傳奇』の翻案を挿入し、又鈴木正三の作『二人比丘尼』の一部や、馬琴

の讀本『小夜中山石言遺響』(文化元年刊行)などから暗示を得た所がある。其の梗概を云へば次の通りである。後鳥羽院の御代に丹波の桑田の長者鷲尾義治なる者があつて、其の妻の野分に子のない爲に、白拍子玉琴を妾にしたが、野分は嫉妬の餘り懷妊中の玉琴を殺害させた。(是より玉琴の怨靈は種々の場面に於て野分及び其の娘に報いる)玉琴の死骸からは一人の男兒が生れ、鷲尾家の舊臣で、今は回國修行をしてゐる眞野彌陀二郎に拾はれて、清水寺で育てられたのが卽ち清玄であり、野分はやがて懷胎して櫻姫を生んだ。櫻姫は十六の春花に憧れて清水寺に詣でた時、清玄に見そめられたが、姫はかねて慕はれてゐた信田平太夫の爲に奪ひ去られ、救はれた後に介抱を受けた美男の伴宗雄と相思の仲となつて夫婦の約束をした。併し父義治は信田平太夫の策略に陷つて、怪賊蝦蟇丸に殺害せられた爲に、野分と櫻姫は離れ／＼に零落し、姫はやがて病歿して鳥部野に送られた。其の墓守は前の清玄のなれの果てであつて、櫻姫が間もなく蘇生したのを見て之を挑み、偶來合せた彌陀二郎の爲に殺された。一方野分は亡夫の仇蝦蟇丸の詭計に懸つて妻となつて毒婦の性を發揮し、其の先妻を殺させ、其の遺した二人の娘を虐待してゐたが、やがて蝦蟇丸は鷲尾家の舊臣の爲に討たれてお家の再興となり、伴宗雄と櫻姫はめでたく結婚した。併し櫻姫は玉琴の怨靈に惱まされて離魂病に罹り、姫の姿が二人となつて現れたが、やがて常照阿闍梨の法力によつて、一人の姫は小蛇となつて飛び去り、一人の姫は骸骨となつた。而して母野分は雷に打たれて死に、宗雄は剃髮して法然上人の弟子になつたと云ふ。『曙草紙』は以上の梗概によつても知られるやうに、比較的變化の妙があり、筋の運び方も大體に於て無難

であつて、確かに京傳の讀本中の傑作である。殊に當時の一般讀者は清玄櫻姫の名に惹きつけられ、且つ初代豐國の妖艶精緻な挿繪に魅せられたのであつて、爾來作者も時好に投ずる爲に、專ら豐國の繪を入れるやうになつた。

善知鳥安方忠義傳

『善知鳥安方忠義傳』は三輯十五卷十八冊から成つて居る。此の中で京傳の筆に成つたのは第一輯であつて、第二・三輯は時を隔てて松亭金水が書き繼いだのである。（第二輯は嘉永二年出版、第三輯は萬延元年刊行）今は第一輯のみに就いて述べる。此の作は平將門の後日譚を取扱つた歌舞伎淨瑠璃の諸作に據り、謠曲「善知鳥」と將門の史話とを參酌して脚色したのである。其の內容は謀叛の爲に誅せられた將門の遺子相馬太郎良門と瀧夜叉姫が、蝦蟇の精の妖術によつて大逆を企てた事を骨子とし、之に死を以て良門を諫めた安方及び其の妻の兄鷺沼則光の忠義や、安方の子千代童の孝心などを織り込んだものである。題名は安方の片袖が鳥と化して飛び去つた事から名附けたのである。此の作も其の趣向が民衆に喜ばれて好評を博し、更に天保七年七月市村座上演の『世善知鳥相馬舊殿』に仕組まれて大當りを取つて以後、種々の狂言に仕組まれて有名になつた。なほ文化八年刊行の馬琴の合卷『相馬內裏後雛棚』は此の作の影響を受けて居る。

稻妻表紙

『昔話稻妻表紙』は足利將軍義政時代を背景とする大和國主佐々木判官貞國の御家騷動を骨子とし、之に不破伴左衞門と名古屋山三郎、佐々良三八郎と浮世又平、軍學者梅津嘉門の三話を織り交せたもので、『善知鳥安方忠義傳』よりも更に筋を複雜にし、每回場面を變へて讀者の興味を惹かうとした苦心

の作である。此の作は組織が極めて錯綜し、且つ餘りに歌舞伎めかした所が多く、必ずしも勝れたものではないが、當時は人氣に投じて大いに行はれた。題名を初代團十郎の不破の衣裳模樣から取り、見返しの題字に定家の假名を集め、巻首に室町時代の小歌を題して居るのは、すべて凝性な京傳の好みである。此の作は歌舞伎芝居の諸要素を撮綴したものであり、殊に不破名古屋の狂言の集成とも言ふべきものであるから、前作よりも一層歌舞伎に多くの影響を與へた。即ち文化五年には大阪中の芝居で此の作を脚色した『けいせい品評林』（奈河篤輔の作）を、又同時に角座でも『けいせい輝草紙』（近松徳叟の作）を上演した。次いで文化六年には江戸の市村座に鶴屋南北の作『浮世柄比翼稲妻』を上演して喝采を博した。かくて京傳は自作が狂言に演じられて好評を得たのを見て、文化六年には其の後篇『本朝醉菩提』（内題には本朝醉菩提全傳とあり）を刊行した。


稲妻表紙見返

京傳の讀本中の佳作は以上述べた三篇であつて、其の後に發表した『本朝醉菩提』と『雙蝶記』とは、當時に於ても評判の作品では無かつた。『本朝醉菩提』は內題に「稲妻表紙後篇」と冠してゐるやうに前作の後日物語として、一休禪師を主人公とする高僧外傳を書いたのである。題名は作中に取入れた一

体の奇行を、支那小說の『濟顚大師醉菩提傳』(明人桃花庵作)中の主人公道濟禪師に擬した爲である。是より先馬琴は文化三年に『椿說弓張月』の前篇を公にし、文化五年に『三七全傳南柯夢』を刊行して、益名聲を揚げたのに反して、京傳は『本朝醉菩提』が苦心した作品であるに拘らず不評判であつた爲に、暫く讀本の筆を休めてゐた。併し文化十年になつて馬琴の盛名に對抗する爲に、新しく趣向を凝して『雙蝶記』を公にした。此の作は題名が示すやうに、竹田出雲等合作の『雙蝶々曲輪日記』(寛延二年竹本座上演)から思ひ付いて、北條高時の遺臣大佛貞直の再興の事を骨子とした時代物であるが、其の中間に種々の世話物を挿入して居る。『本朝醉菩提』と共に例によつて場面の變化が多く、筋は紛糾を極めてゐるのであつて、京傳の短所は其の極度に達した觀がある。

京傳の讀本の總評

以上擧げた作品以外に、なほ敵討を主題とする『梅花氷裂』(三冊豐國畫 文化三年刊)と『浮牡丹全傳』(四冊豐廣畫 文化六年刊)の二篇があつて、京傳の讀本は總計十一篇ある。此の中で初作『通俗大聖傳』には未だ特色が現れてゐないから姑く之を除いて、其の他の十篇を通じて現れた京傳の特色を云ふならば、其の大部分は敵討物又は御家騷動物であり、人物事件も多くは型にはまつて變化に乏しく陳腐である。又其の構想は當時評判の歌舞伎淨瑠璃、又は著名な說話から取材して、之を集成補綴したもので、一體に創意が缺けてゐる。而して其の趣向は徒らに人物を多くし、場面の劇的變化を主とした爲に、筋が支離滅裂となり一篇を貫く勸懲主義も極めて不徹底に終つて居る。かくて京傳は讀本作者としては、到底組織的才能を有する馬琴に遠く及ばなかつたのである。尤も京傳は豐かな藝術的趣味を有してゐたから、題名裝釘

標題挿繪などには獨得の意匠を凝らし、又風俗の描寫や親子の恩愛を寫す事に長じたのであつて、此等の點に於ては馬琴の讀本に見られない特色を發揮して居る。最後に文章に就いて言へば、最初は支那小說直譯體を用ひたが、やがて京傳獨得の齒切れの惡い文を綴り、最後には馬琴の刺戟を受けて流暢な文體に移つたのであつて、文才から見ても馬琴より遙かに劣つて居る。

二　曲亭馬琴

讀本流行期は寛政の末頃から江戸時代の終まで續くのであるが、此の五六十年の間に現れた著しい作者には、京傳・馬琴を筆頭として、六樹園飯盛・栗杖亭鬼卵・感和亭鬼武・小枝(さえだ)繁・高井蘭山・十返舍一九・式亭三馬・柳亭種彥等があり、其の他合卷洒落本の作者や狂歌師學者畫工等の中からも續々現れて作者は極めて多數に上つて居る。併し讀本流行期の初から終まで著しい活躍を續けて、幾多の名作を次々に發表したのは曲亭馬琴である。馬琴は本名を瀧澤解、字は瑣吉、通稱を佐七郎（後に清右衞門と名乘り晩年に篁民と稱した）と云つた。號は曲亭馬琴の外に、著作堂主人・玄同陳人・飯臺老人・蓑笠翁などと稱した。父は旗本松平信成（川越藩の分家）の家宰を勤めた大右衞門（後に運兵衞と改む）であつて、馬琴は其の五男（其の中二人は早世）として明和四年に江戸深川の松平邸内に生れた。其の家は士分とは云へ極めて微祿の者であつた上に、父は馬琴が九歲の時病歿したので、彼は一家困窮の中に成長した。馬琴は天明四年（十九歲）に母に死別した頃から、武士として立つ事を斷念し、何か一藝によつて生活しようとして、儒醫易書な

どを修めたが思はしくなかつたので、當時流行の黄表紙洒落本に刺戟せられて文筆生活に入つた。俳諧は幼少の頃から嗜み、寛政二年（二十四歳）には俳書を著したが、此の年始めて京傳を訪れ、黄表紙の草稿を示して指導を請うた。此の原稿は彼の初作「廿日餘四拾兩盡用而二分狂言」（二冊歌川豐國畫）であつて、翌年京傳の斡旋によつて京傳門人大榮山人作として出版せられた。馬琴は此の頃京傳の家に寄寓して代作をしてゐたが、間もなく京傳の盡力で書肆蔦屋重三郎方に住み込み、手代を勤める傍著作に從事し、寛政五年（二十七歳）には曲亭馬琴の名で七種の黄表紙を刊行して漸く名聲を揚げた。此の年馬琴は蔦屋の周旋により、飯田町中坂下の伊勢屋（下駄傘商）會田氏の寡婦（名は百）に入夫したが、彼は之を潔しとせず依然瀧澤氏を名乘り、唯名だけを淸右衞門と改めた。是より漸く生活の安定を得て讀書と著作に耽り、讀本作者の大立物となり、又家庭的には一男三女の父となつた。男子は名を鎭五郎と云ひ、成長して醫を學び宗伯と改め琴嶺と號した。宗伯は文政六年に神田明神下同朋町に一家を構へて醫を開業したので、馬琴は長女さきに婿を迎へて之に家を讓り、翌年宗伯の家の隣りに移つた。かくて馬琴は五十六歳にして始めて氣樂な生活に入つたが、妻お百は趣味教養のない上にヒステリー症の發作があつて、絶えず馬琴を苦しめた。馬琴は家庭的に極めて不遇な人であつて、天保六年（六十九歳）には宗伯が病歿し、次いで天保八年には長女の婿も世を去つて、重なる不幸に悲歎に暮れてゐたが、自分も天保四年以來視力が著しく衰へ、やがて天保十一年には失明するに至つた。併し負けじ魂があり且つ精力絶倫の人であるから、盲目となつてからも宗伯の寡婦お路を勵まし、口述筆記によつて創作を繼續したのであつて、當

時彼の焦慮とお路の心勞とは吾人の想像以上である。かくて天保十二年に老妻お百に先立たれた頃、既に讀者の人氣も衰へたので、胸中憂愁に充たされてゐたが猶創作を止めず、遂に『女郎花五色石臺』四編（五六七篇柳下亭種員作 八九十篇柳水亭種清作）の合卷を最後の作として、嘉永元年十一月六日に享年八十二で他界した。昭和三年の秋今上陛下御卽位の大典を行はせられた時、特に贈從四位の恩命を蒙つた事は、吾人の記憶に新たな事である。



馬琴肖像（鈴鹿三七氏藏）

數奇を極めた馬琴の生涯は凡そ右に述べた通りであるが、更に其の性行の一端を云へば、元來剛直で自負心の强い人であつたから、性格の相容れざる交友とは屢不和を生じた。彼が師事した京傳や、彼の爲に挿繪を描いた北齋などと絶交するに至つたのは、其の著しい例である。併し肉親に對しては慈愛を注ぎ、殊に子煩惱であつた。馬琴は又禮儀正しく謹嚴な人であつたから、親交を結んだ知己も少くなかつた。殊に名聲が高まるにつれて、當時知名の學者文人と親しく交つたのであつて、其の交友の中には蒲生君平・渡邊華山・谷文晁・屋代弘賢・山崎美成・狂歌堂眞顏・東條琴臺・寺門靜軒等があり、又彼の作品を愛讀して屢批評感想を書き送つた心友には、伊勢の殿村篠齋・小津桂窓、越後の鈴木牧之等の如き富豪があつた。思ふに馬琴の創作は、其の背後にあつた此等の知己の感化激勵に負ふ所が少くなかつたであらう。馬琴の創作を觀るに當つて特に注意すべき

は彼が意志鞏固精力絶倫の人であり、而も健康に惠まれてゐた事である。馬琴が獨學によつて當時の戲作者中稀に見る博學多識の人となり、而も一代の文豪として三百數十種の多作を成し得た精力は驚くの外はないのであつて、其の精勵振りは六十年間の長い文筆生活の間一日も安逸を思はず、老境に入つてもなほ早朝から深夜まで、讀書と執筆に餘念が無かつた程である。加之馬琴が極めて周到緻密の人であつた事は、自ら版下や下繪を書いたばかりでなく、數十年間丹念に日記を書き、又餘暇を利用して夥しい和漢書を抄錄謄寫した事などによつて知られる。

馬琴の時代的區分

馬琴の創作生活は『月氷奇緣』を公にした享和三年（三十七歳）を第一の境とし、未曾有の大作『里見八犬傳』の初輯を刊行した文化十一年（四十八歳）を第二の境として、三期に區分する事が出來る。第一期（自寛政三年至享和二年）は京傳の下風に立つて、主として黄表紙を書いた壯年期の十二年間である。此の間に書いた黄表紙は約百種に達して居るが、當時は寛政改革の後で、一般作者が教訓物に轉じた時であり、殊に馬琴は黄表紙の本領とする輕妙な洒落には極めて緣の遠い人であつたから、勝れた作は殆ど無い。但し此の間に淨瑠璃の『伽羅（めいぼく）先代萩』の世界に『水滸傳』の一部を取入れた讀本の初作『高尾船字文（せんじもん）』（五冊寛政八年刊行）を書き、又『漢楚軍談』の飜案物や軍書の類を著作して、後年讀本の作者として飛躍する準備をしてゐたのは注意すべき事である。第二期（自享和三年至文化十年）は、彼の讀本にして始めて好評を博した『復讐小說月氷奇緣』を發行した享和三年以後の十一年間である。此の時代の初頃は京傳との競爭時代であつて、互に影響しながら流行を追つて、淨瑠璃歌舞伎などから取材した短篇（多くは二冊乃至三册もの）を續々公にし、文化

五年以後は遂に京傳を凌駕して讀本界の覇者となつた。殊に文化四五年頃は讀本流行の頂點に達した時であり、且つ競爭者の京傳が最後の奮躍を試みた頃であるから、馬琴は是に對抗して最も多作し、年々八九種の讀本を著作して居る。かくて第二期に書いた讀本の數は四十餘部に達し、其の種類は敵討物傳說物巷談物史傳物等に亙つて居る。終生の名作に數へられる『椿說弓張月』『三七全傳南柯夢』等は第二期の作である。第三期は文化十年から歿年までの三十五年間である。此の期の初頃京傳は世を去り、文化四五年頃以後盛に輩出した群小作者も、其の後馬琴の爲に壓倒せられて、殆ど獨舞臺の觀を呈した。此の間馬琴の創作態度は既に確立し、伎倆も愈老熟したのであつて、前後二十八年に亙つて書かれた『里見八犬傳』は第三期の代表作である。第三期に書いた作品は『里見八犬傳』『朝夷巡島記』『近世說美少年錄』『俠客傳』の四部であるが、何れも長篇であつて其の冊數は合計百八十餘冊に達して居る。文化七年以後は合卷の方も主として長篇を書いた。

馬琴著作の分類

馬琴の讀本は題材の上から見て、巷談傳說から取材したものと、歷史中の偉人の傳說を取扱つたものとに分たれる。而して前者は第二期の作品の大部分を占めて居るのであつて、更に之を主題によつて敵討物巷談物傳說物の三種に分つ事が出來る。後者卽ち史傳物は第二期にもあるが、殊に第三期の長篇はすべて是であつて、馬琴の讀本を代表して居る。さて敵討物は草雙紙に於ける復讐物の流行の

(イ)敵討物

影響を受けたもので、第二期の初頃の作は殆ど是である。例へば『復讐小說月氷奇緣』（五卷流光齋畫 享和三年刊行）は足利義持の家來永原左近を殺害した石見太郎が、左近の子熊谷倭文と其の妻玉琴の爲に復讐せられる話を綴

つたものであり、『復讐奇談稚枝鳩』（五巻歌川豊國畫文化二年刊）は呉松と其の姉息津が、一方は父の仇一方は夫の寃を雪ぐ話を巧みに交錯した作であり、『小夜中山石言遺響』（五巻蹄齋北馬畫文化二年刊）は小夜中山夜泣石と無間鐘の說話を取り、安永頃の作『鐘由來夜啼石狹夜之中山敵討』（五巻）に據つて綴つた怪異的要素の多い作品である。此等は第二期の初頃の作品であるが、其の後文化五年に上梓した『雲妙間雨夜月』（五巻歌川豊廣畫文化五年刊）は歌舞伎の鳴神上人から取材し、『金瓶梅』に據つて脚色した作で、伊原武章の遺子妙と太次吉が、父の讐雷法師を討つ事を骨子として居る。右に述べた敵討物の素材は、從來の歌舞伎淨瑠璃や讀本源流の小說などから得たものであり、其の構想も亦此等に共通する所が多いのであり、趣向表現も概ね幼稚であつて、馬琴の作としては勝れたものとは言へないのである。卽ち此等の作品は善を代表する主人公が、樣々な辛苦を重ね奇しき運命に弄ばれた後、遂に惡を表象する敵を討つた事を物語つて居るのであつて、其の筋の進行上屢用ひられて居るのは、神佛の加護や幽靈怪獸などの不可思議な働きなどである。馬琴は元來武士的精神若しくは儒教道德を中心思想として創作した人であるから、怪異的要素を混へる事は決して本意ではなかつた。併し從來の文藝は殆ど之を含んで居り、一般民衆も主としてこれに興味を感じたのであるから、馬琴は勢ひ一の方便として之を利用したのである。而して此の事は彼が屢其の作品中に記して居る所である。

（ロ）巷談物

敵討物の中には巷談から取材したものも混つて居るが、歌舞伎淨瑠璃小說などによつて、世に普く知られて居る戀愛事件や人情話などを素材とし、是を彼獨得の儒敎道德や因果應報によつて改作した

ものは即ち巷談物である。其の著しい例を擧げれば、『旬殿實々記』十二巻豊廣畫文化四年刊行は部一中の語物の『お俊傳兵衛河原の心中』、天明年間の淨瑠璃『近頃河原の達引』、其の他歌舞伎に取扱はれて名高くなつたお俊傳兵衛の巷談を素材とした作であり、『三七全傳南柯夢』六巻葛飾北齋畫文化五年刊は流行唄や歌舞伎や紀海音作の淨瑠璃『笠屋三勝二十五回忌』などに取扱はれて有名になつた三勝半七の情話を、忠孝節義の物語に書き改めた作であり、其の續篇の『占夢（ゆめあはせ）南柯後記』七巻北齋畫文化八年刊は近松門左衛門の作『長町女腹切』、近松半二の作『京羽二重娘氣質』等の淨瑠璃や、歌舞伎の『露時雨裳浪（つゆしぐれもすそのなみ）』其の他によつて、普く知られてゐるお花半七の情話に據つた作である。又『松染情史秋の七草』六巻豊廣畫文化五年刊は歌舞伎の『心中鬼門角（しんぢうきもんかど）』、淨瑠璃では紀海音の作『お染久松袂の白絞』、菅專助の作『染模樣妹背門松』、近松半二の作『新版歌祭文』などに取扱はれて名高くなつたお染久松の巷談を、楠氏一族の忠節に結び附けた作品である。其の他『小説比翼文』二册北齋畫文化元年刊は平井權八小紫の情話に據つた作であり、『括頭巾（くくりづきん）縮緬紙衣』三册豊廣畫文化四年刊は再版の時「椀久松山物語」と改題してあるので知られるやうに、椀久松山の街説を扱つたものであり、『常夏草紙（とこなつさうし）』五巻勝川春亭畫文化七年刊はお夏清十郎の情話を素材とし、『美濃舊衣八丈綺談』六巻盈齋北嵩畫文化十年刊は白木屋お駒と髪結才三の話を取扱つたものである。かくて在來の著名な市井の情話は大抵馬琴の讀本の材料に取られて居る。

勸善懲惡を標榜する馬琴の讀本に、市井の情話を題材とするものが多いのは、一見甚しい矛盾であるやうに思はれるが、是には以下述べるやうな理由があつた。第一は此等の情話は、從來歌舞伎淨瑠璃小説などの好題材となつて普く流布されて居るものであつて、是を讀本に應用する事は讀者の興味

を最も容易に惹く所以である。第二には輕薄な現代の男女の情事を一變して、過去の忠臣孝子節婦の悲壯な事件に改作する事は、作者が換骨脱胎の妙を示す事になる。第三には當時馬琴は京傳を始め幾多の作者を尻目にかけて、矢繼早に新作を公にした頃であるから、一々新しい趣向を思ひめぐらす暇がなく、手近な巷談の中から取材する事は、極めて賢明な策であつたのである。馬琴が市井の巷談を次々に取扱つたのは、凡そ右の如き理由に據るものであらうと思はれる。さて巷談物は下に述べる史傳物と共に、馬琴の讀本の重要なものであるから、今其の一例として巷談物の傑作の一に擧げられる『三七全傳南柯夢』の素材と構想を觀察して見よう。

三七全傳南柯夢の梗概

　此の作の題材となつた巷談は、元祿八年十二月に大和國五條新町の赤根屋半七が、島の内美濃三勝といふ遊女と、大阪千日の墓所で情死した事件に基づく。此の情話は間もなく流行唄に謠はれ、西澤一風の浮世草子『新色五卷書』（元祿十一年刊）に扱はれ、やがて大阪の歌舞伎芝居にも演じられたが、更に寶永五年には紀海音の淨瑠璃『笠屋三勝二十五回忌』となつて、操芝居に上場せられた。馬琴が直接據つたのは、其の後明和九年豐竹座に上演せられた竹本三郎兵衞・豐竹應律等作の『茜屋半七みのや三勝艶容女舞衣』であつて、是に東晋の干寶の撰『捜神記』、唐の李公佐作の小說『南柯記』、及び『南柯記』を粉本とした明の湯顯祖作の戯曲『南柯夢』などから、部分的に素材を得て巧みに原話を換骨脱胎して、勸善懲惡主義の讀本に書き上げたのである。其の構想を觀る爲に梗概を云へば――天正年中奈良の豪族積井順昭は、茶室の天井に楠の一枚板を用ひる爲に米谷山の大楠を伐らせようとしたが、斧は跳ね返り樹皮

の間から鮮血が迸り、樹上の樵夫は墜落したりして、不思議な事が續いた。偶楠氏の郎黨の後裔で今は零落して樵夫になつてゐる赤根半六は、楠と杉の精が互に語るのを聞いて伐木の秘法を知り、大楠の精の大蟻を殺して遂に伐採の功を樹てた。尤も半六は伐木の際斧を取落して、通り掛つた琵琶法師丹波都（たばいち）を傷付けやがて死に至らしめたので、謝罪の爲丹波都の娘おさん（後の三勝）を我が子半七に配する事を約束した。（以上搜神記竝に南柯記に據る）併し半六は伐木の功によつて立身し、やがて野心を起して家老蟻松典膳の娘園花を娶りおさんを放逐した。おさんは藥賣笠松平三に養はれ、やがて京に上つて舞々となつて笠屋三勝と名乘つた。其の頃續井家の若殿吉稚丸は物見遊山の爲に上洛し、佞臣今市金八郎布施蝶九郎等の取持ちで三勝に溺れたので、扈從してゐた半七は若君の放蕩を止めさせる爲に、三勝の手を取つて浪速に奔り、簑屋といふ假毛屋を營んでゐた平三の許で働いてゐた。是より先半七はおさんとの婚約を重んじて、園花とは只名ばかりの夫婦であつたが、園花の母敷浪は半七の行方を知つたので、娘の爲に三勝と縁を切らせようとして訪れると、圖らずも三勝は前夫の丹波都との間に生れた娘おさんである事が判つた。三勝は儘ならぬ運命を歎き悲しんでゐると、一方半七は是まで怨の重なつた佞人今市を殺したので、二人は主家を辱めない爲に自殺を決意し、死場所を求めて千日寺に行くと、意外にも前非を悔い且つ半七の罪に代らうとする半六と不貞を恥ぢた敷浪が自殺してゐた。偶來合せた續井家の老臣厚倉二郎太夫は、仔細を聞いて半七の忠孝に感じ、半六と敷浪の屍體を、商人赤根半七と舞々笠屋三勝とが情死したものとして世に傳へさせた。かくて半七は忠孝の士として賞せられ、典膳

に代つて家老に取立てられ、三勝は其の正室となり園花は側室となつて一家悉く繁榮した—と云ふのである。「南柯夢」と題したのは、『南柯記』に於ける槐の樹の穴中の槐安國に赴いて、王女の婿となつた淳于芬の榮華の夢を、半六の榮華になぞらへた爲である。馬琴の巷談物の作意構想は殆どすべて此の類である。

(八)傳說物

次に傳說物は古物語や謠曲などに取扱はれてゐる、有名な傳說を素材とした作品である。此等の作中には市井の巷談から得た要素も混つて居るが、其の主とする所によつて別に一類とするのである。例へば『松浦佐用媛石魂錄』(前集三卷歌川豐廣畫文化四年刊行 後集七卷柳川重信畫文政十一年刊)は、『萬葉集』卷五の領巾振山の傳說歌で知られてゐる大伴狹手彥の妻佐用媛が、領巾を振つて別を悲しんだ古傳說に基づいた作である。『盆石皿山記』(豐廣畫前篇二卷文化二年後篇二卷文化三年刊)は御伽草子の『鉢かづき』の繼子物語に播州皿屋敷の巷談を織り込み、なほ發端に苅萱傳說を加へて成つた作である。『勸善常世物語』(五冊葛飾北馬畫文化三年刊)は謠曲「鉢の木」の佐野源左衛門と最明寺時賴の傳說に、殺生石の傳說を織り込んだものである。又『墨田川梅柳新書』(六卷北齋畫文化四年刊)は謠曲の「隅田川」「班女」や、近松の作『雙生隅田川』や、八文字屋本の『梅若丸一代記』等に取扱はれてゐる梅若傳說を、承久の亂に結び附けて脚色した作であり、『皿々鄉談』(八卷北齋畫文化十二年刊)の前半は謠曲「唐船」に據り、後半には『落窪物語』の繼子いぢめの說話を取扱つて居る。此等の傳說は巷談物と略同じ手法によつて脚色せられて居るが、題材の性質上寧ろ因果應報を主として居る。傳說物の人物の運命や事件などは、殆ど原話の儘に取扱はれて居るのであつて、換骨脫胎の妙を見る事が出來ない。從つて馬琴の

讀本としては敵討物と共に比較的特長がなく見劣りがする。

(二)史傳物

馬琴の讀本中で最も重要なものは史傳物である。史傳物は歴史上の英雄の一生を、支那小説の脚色法と馬琴獨得の豐贍な想像によつて書き上げた、一種の歴史小説である。史傳物は其の性質として背景が廣大であり、現れる人物も多く、事件は概ね複雑であるが、殊に馬琴の作品は支那の長篇小説の結構脚色を模範とし、而も廣く史實を考證して成つたものであるから、何れも長篇である。而も馬琴の史傳物は、彼の敵討物巷談物傳説物の後に創作したものであるから、從來の諸作に試みたあらゆる趣向を利用し、又最も圓熟した創作的伎倆を傾注してゐるのであるから、彼の傑作は殆ど此の中にある。第二期の『椿説弓張月』は其の最初の作品で、次いで成つた『賴豪阿闍梨怪鼠傳』『俊寛僧都島物語』等、及び第三期に著作した『南總里見八犬傳』以下四部の長篇はこれに屬する。

椿説弓張月

『椿説弓張月』(葛飾北齋畫工)は前篇後篇續篇拾遺殘篇の五篇二十九册から成り、文化三年に前篇を發表して以來、毎年一篇づつ刊行して、文化七年に完結した長篇である。角書に「鎭西八郎爲朝外傳」とある通り、爲朝が伊豆の大島に流されて以後の外傳を、讀本風に書いたのである。其の梗概は下の通りである。爲朝は宮中で信西と武道に就いて論爭したのが原因で九州に追はれ、阿曾忠國の女白縫姫の婿となつて鎭西に威を振うた。やがて院宣を奉じ靈鶴を求めて琉球に渡り、次いで保元の亂には父と共に院に參じたが、敗れて伊豆の大島に流された。大島に流された後は、諸島を巡つて土民の教化に努め、又惡代官を懲しめて島民を悦服させたが、工藤茂光が朝命を奉じて征め寄せたので大島を逃れた。爲



椿說弓張月挿繪（北齋畫）

朝は其の後讃岐に渡つて新院の白峯陵を拜した後、肥後の大原山で白縫姫に再會し、やがて其の間に舜天丸が生れた。當時琉球では佞寧王が暗愚であつた爲に、姦妃奸臣等が跋扈して內亂が起り、王女の寧王女は辛うじて小琉球に遁れたが、偶風浪の難に遭つて漂著した爲朝に救はれた。此の王女は今は亡き白縫姫の靈が宿つて勇婦となつてゐるので、爲朝はこれと協力して賊臣を滅ぼし、妖賊蒙雲を誅して國內を鎭定した。かくて王女は島民から國王に推されたが固辭し、爲朝は仙術によつて昇天したので、其の子舜天丸が王位に卽いて舜天王となつたと云ふ。此の作の初二篇は『保元物語』『難太平記』などに負ふ所が多く、續篇以下には支那の『水滸後傳』（水滸傳の續篇）を飜案した所が多いが、最も注意すべきは英雄不死傳說に基づいて、主人公の爲朝を

大島に終らしめずして、其の後に於ける花々しい活動を空想によつて寫し出してゐる事である。馬琴は元來史上の英雄の末路が屢悲慘であり、而も其の子孫が父祖の勳功に報いられてゐないのに同情したのであつて、其の現實の不合理を彼の作品の上に補正しようとするのが、史傳物に共通する特色である。從つて此の作品は、馬琴にとつて最も得意とする題材を取扱つたのであつて、彼の史傳物に見る殆どすべての特色が發揮せられて居る。試みに其の主要な點を擧げれば、(一)主人公の爲朝が智仁勇を兼ねた理想的英雄として描き出されて居る事、(二)其の一生の徑路に波瀾曲折があり、而も最後の成功に導くまでに漸層の妙を示して居る事、(三)其の舞臺が京都九州から伊豆七島琉球に亙つてゐて、背景が極めて雄大である事、(四)因果應報により事件が巧みに聯鎖せられ、且つ前後照應の妙を得て居る事、(五)勸善懲惡の思想が首尾一貫してゐて全體の統一があり、結構が整然としてゐる事などである。(此等には自ら短所を伴ふのであるが、其の事は更に下に述べる。)かくて此の作は當時極めて好評を博し、『三七全傳南柯夢』及び『里見八犬傳』と併せて馬琴の三大奇書と稱せられた。

頼豪阿闍梨怪鼠傳

『頼豪阿闍梨怪鼠傳』十卷北齋畫 文化五年刊 は『平家物語』『源平盛衰記』などにある頼豪阿闍梨の話に附會した筋があるので、斯く題したのであるが、實は木曾義仲の子義高の外傳を書いたのである。其の筋はかなり複雜であるが、義高が乳母唐絲の助力を得て、父の仇頼朝を討たうとして苦心慘澹する事を骨子とし、是に義仲に辱められて自滅した猫間中納言家の再興や、猫間光實の義高に對する復讐などを絡ませてゐる。馬琴の讀本には、一般に合卷風の怪異譚靈驗譚などが多く取入れられてゐるのであるが、

此の作にも賴豪の靈から授けられた妖鼠術や、生血を塗つた西行の金猫の怪力などの事があつて、怪奇的要素に富んでゐる。

俊寛僧都島物語

次に『俊寛僧都島物語』八卷曲亭畫 文化五年刊はこれも亦『平家物語』『源平盛衰記』などにある俊寛遠流の話を骨子とし、是に『異本義經記』の牛若丸と鬼一法眼の說話や、文耕堂長谷川千四合作の『鬼一法眼三略卷』の筋を結び附けた作である。俊寛の原話にない俊寛妻子の苦難や、鱶士兄弟の忠節を物語り、又鬼一法眼を俊寛の後身としたり、牛若丸を俊寛の娘鶴の前の許嫁とするやうな荒唐無稽な筋が多いのは、新しい趣向によつて讀者の興味を惹かうとしたのである。此の作と『賴豪阿闍梨怪鼠傳』とは彼の史傳物中では二流の作であつて、當時も好評ではなかつた。

里見八犬傳

『椿說弓張月』と竝んで馬琴の讀本の代表作と云はれるのは『南總里見八犬傳』畫工柳川重信溪齋英泉 二世重信歌川國貞等である。九輯五十三卷百六册から成る我が國小說中の最大長篇である。第一輯五卷を發表したのは、京傳が世を去る前々年の文化十一年作者四十八歲で、最終篇の刊行を見たのは二十八年後の天保十二年作者七十六歲の春であつて、『朝夷巡島記』『近世說美少年錄』『俠客傳』の三大長篇は是と竝行して著作せられた。此の間に作者は長男宗伯に先立たれ、天保四年頃から右眼が漸く見えなくなり、天保十一年の末には左眼も失明し、其の後は宗伯の寡婦みち女に口述して、漸く完結したのであるから、此の作は馬琴晩年の奮鬪の結晶である。『里見八犬傳』は嘉吉の役に沒落した結城氏の忠臣里見季基の子義實孫の義成二代の興亡を骨子とし、之に江戸房總を始め關東一帶に亙る廣い地域を舞臺として活躍する八犬士一生の忠節を記した、大規模の作品である。

梗概

第一輯から第二輯に跨る凡そ十四回は發端であつて、其の梗概

は——下總の豪族結城氏朝の臣里見季基が主家没落の時討死し、其の嫡子義實は安房の一隅に落ち延びた。其の後義實は館山の城主安西景連と不和を生じた時、忠犬八房が景連の首を噛み切て歸つた爲に遂に大勝して安房の國主となつた。八房は此の時の功勞によつて、約束の通り義實の女伏姫を得て



里見八犬傳表紙

富山の奥の洞に棲んだ。伏姫はやがて犬の氣に感じて懷妊した事が分つたので、身を恥ぢて自害すると、其の疵口から白氣が立昇り、襟に懸けてゐた數珠の八顆の親珠が燦然と輝いて八方に飛び去つた。——と云ふのである。此の八個の珠には、それぐ\仁義禮智忠信孝悌の文字が彫つてあつたので、其の靈玉の活きによつて犬塚信乃戍孝・犬川莊助義任・犬飼現八信道・犬田小文吾悌順・犬坂毛野胤智・犬村大角禮儀・犬江親兵衛仁・犬山道節忠與の所謂八犬士が次々に生れて來る。此の八勇士には種々の人物が配せられ、種々の事件が起り、互に離合集散して、局面は彌複雜を極め波瀾重疊するのであるが、最後には八犬士が打揃つて里見家に歸參し、遂に管領扇谷定正及び山内顯定の大軍と決戰して大勝し、里見家を見事に再興して大團圓となる。なほ最終篇には、八犬士が其の功勞

によつて里見義成の姫を室に迎へて、それ〴〵一城の主となつて子孫繁榮した事と、八犬士が最後に因緣の深い富山に隱栖し、やがて仙術を得て忽焉と行方知れずなつた事とを附加してある。

『里見八犬傳』の大體の構想は、支那小說の『水滸傳』『三國志』『搜神記』などに據つてゐるが、部分的には其の他の支那の小說歷史や、我が國の『北條五代記』『甲陽軍鑑』『本朝三國志』『房總志料』等を始め、里見家に關する諸文獻を廣く參考してゐる。作者が參考資料の蒐集に非常な努力を拂つた事や、創作中に苦心を重ねた事などは、最終篇に添へた回外剩筆に詳しく記されてゐる。斯かる準備の下に書かれた上に、此の作品はもと支那の『水滸傳』『三國志』『西遊記』等に匹敵する雄篇とする意圖によつて著手せられたものであり、而も晚年二十八年間に亙つて精力を傾けた作品であるから、彼の讀本の特色は悉く此の一篇に發揮せられて居る。其の長所としては結構の雄大、脚色の整備、趣向の巧妙、背景の宏大、文章の典麗などを擧げ得るのであるが、其の反面には彼の短所缺點も亦少からず認められる。例へば(一)八犬士が悉く道德の權化であつて人間味がない事、(二)考證癖と衒學的態度による餘談の多い事、(三)作中の人物の口を借りて屢道義の說明を試みてゐる事、(四)勸善懲惡主義の徹底に努めながら、屢不倫な男女や慘虐な事件などが取扱はれてゐる事、(五)文章が形式的修飾に流れて眞實性を缺いてゐる事などである。尤も當時の讀者は主として、大江戶及び關東一帶を背景として、次々に描き出される個々の劇的事件や怪奇的な場面に對して、懷古的興味を感じたのであり、又和漢文の修辭を巧みに利用した七五調の絢爛な文章に魅せられたのであつて、右に擧げた短所もさほど問題に

はされなかつた。當時最も世評の高かつたのは、「信乃と濱路の別離」「芳流閣上の格鬪」以上三輯「房八夫婦の身代り」四輯「額藏の危難救助」「荒芽山中の奇遇」以上五輯「對牛樓の復讐」「庚申山の怪異」以上六輯「妖婦船蟲の最期」八輯等である。左に文體を示す爲に伏姫の富山の生活を寫した一節を抄錄して置く。

文例

旦にはかの珠數をおし揉て遙に洲崎の方に祈念し、又あるときは父母のおん爲に、經の偈文を謄寫して、前なる山川におし流し、春は花を手折て、佛に手向奉り、秋は入る月に嘯て、坐に西天を戀めり。されば山果膝に落て、朝三の食秋風に飽き、柴火爐に宿りて、夜薄の衣寒氣を防ぐ。仄歩山嶮けれども、蕨を首陽に折るの怨なく、岩窓に梅遲けれども、嫁て胡語を學ぶの悲みなし。姫はおん年二十に滿ず、容顔固より玉を欺く。巫山の神女が雲となりし夢の面影を留め、小野小町が花に比し歌の風情を殘せり。金屋の内雞障の下、養れ給ひし日は更にもいとはず、今山居久しうなりて、衣裳は垢つき破れたれども、肌膚は殘雪より皓く、雲鬟梳るに由なけれども、綠髮春花より芳し。細腰いよ〳〵瘦て、風に堪ざる柳のごとく、玉指ます〳〵細りて、笆に惱る筝に似たり。（第二輯卷之一）

朝夷巡島記

『里見八犬傳』と同じ頃に逐次發表せられた『朝夷巡島記』以下の三篇は、何れも完結しなかつたが、それぞれ重要な作品であるからついでに解說して置く。『朝夷巡島記』書工歌川豐廣は文化十一年に初篇を發行して以後殆ど隔年に一篇づつ刊行し、文政九年に第六篇を出して中絶した。『椿說弓張月』と同じく、不遇な英豪朝比奈三郎義秀が逆境から起ち上つて、理想的英雄となる徑路を、支那小說の『快心編』を參酌して書いた作である。卽ち義秀は和田義盛の子ではなく、源義仲が戰死する時側室鞆繪の胎内に

宿つてゐたもので、生母は捕へられて義盛の妻となつて義秀を產みやがて自害した。かくて義秀は乳母の鄕里なる安房の朝夷で成長して後豪勇の士となり、多田藏人光仲や吉見義邦等と協力して、奸智に長けた北條時政等を膺懲すると云ふのが、一篇の趣向である。作者が自ら言つてゐるやうに、『吾妻鑑』『源平盛衰記』其の他の軍記に傳はつてゐない所を空想で書き上げた點に、作者の苦心があるのであつて、若し完結してゐたならば、彼の傑作の一に數へられたであらう。

近世說美少年錄

次に『近世說美少年錄』（畫工歌川國貞岩窪北溪）は文政十一年に初輯五冊を發行し、天保五年までに四輯（每輯五冊）を刊行して一時中絕してゐたのを、更に弘化二年に其の續篇を『新局玉石童子訓』（畫工一陽齋後豐國）と改題して、初篇から四篇まで二十冊を發表し、其の後弘化四年（嘉永元年）に六篇まで續刊したが、其の年十一月に作者が病歿した爲完結しなかつた。大內義隆を弑して毛利元就の爲に滅ぼされた陶晴賢に關する史實に、お夏淸十郞の巷談を絡ませた作であつて、晴賢を末朱之介とし、元就を大江杜四郞としてゐる。前篇即ち「美少年錄」と題せられてゐる部分に於ては、大內家の重臣陶瀨十郞と淫奔な歌妓笠屋お夏との間に生れた美貌の朱之介晴賢が、母の血を享けた上に境遇の感化によつて、亂倫醜行の數々を演ずる事を寫して居る。次いで續篇の「新局玉石童子訓」には、容姿も美しく性格も善良な美少年の大江杜四郞成勝を始めとして、峰張九四藏通世や紫六郞通能等を活躍させて、例の通り惡人滅び善人榮えるといふ勸懲主義の作品としてゐる。前半に淫婦惡少年の淫蕩生活を多く寫して居るのは、後半に於ける主要人物の性行と對照させる爲であつたとも思はれるが、馬琴の作風としては全く異例に屬する。是に就い

ては支那小說の『檮杌閑評』の翻案の興味に心を惹かれたのと、時代の好尚に投合せんとした爲であらうと言はれて居る。又作者が一時稿を中止し、數年の後に改題して稿を續いだのも、前半の作風に不安を懷いた爲であつて、後半が一變して勸善懲惡主義の作風になつてゐるのは、名譽回復の意圖があつたのであらうと言はれて居る。水谷不倒氏著『草雙紙と讀本の研究』の說に據る

俠客傳

『開卷驚奇俠客傳』柳川重信圖　貞秀二代重信は天保元年に起稿し、翌年から每年一集五冊づつ發表し、天保五年に四集まで刊行して未完成の儘になつてゐる。中絕したのは作者の病氣や長男宗伯の死去などによつて、氣力が喪失した爲である。南朝の忠臣の遺子の忠節を書いた作であるが、貴の俠客は忠義の志の篤い仁人であるとの作者獨自の見解によつて、主要人物を遊俠に見立てて著作したので『俠客傳』と題したのである。此の作品が支那小說の『女仙外史』及び『好逑傳』によつて筋書を立て、これに『平妖傳』・『快心編』・『水滸傳』等の趣向を部分的に取つて作り上げた事に就いては、麻生磯次氏の詳密な研究がある。國語と國文學第八十二號所載「俠客傳と支那小說」參照　其の内容は新田氏の子孫である脇屋義隆の子小六丸といふ美貌の義人が、家臣館英直夫婦に育てられ、次いで野上著演の養子となつて、著演等と共に南朝に忠節を盡す事を物語り、次いで楠正成の曾孫で正元の女姑摩姬といふ佳人此の作の中心人物が、家來の隅屋惟盈夫婦の手に養育せられ、成長して女傑となり、君父の仇足利義滿及び義持を暗殺しようとして、樣々の苦難に遭つてゐる所で中絕してゐる。此の作品は本文中に加へられた註記に據り、又是までの筋から推察すると、主人公は姑摩姬であつて、小六はやがて此の女傑と手を携へて、足利氏に對する恨を晴らす事になるのである。

然らば初の方に描かれてゐる館英直や野上著演等が盡く悲慘な最期を遂げて居るのは、やがて後に主人公等が樣々な苦境を切り拔けて、本望を遂げる爲の準備と見られる。かくて此の一篇は殆ど序幕で中絕してゐるが、若し完結してゐたならば、所謂三大奇書に次ぐべき名作となつたであらう。

馬琴の讀本の特色は、既にそれ〴〵の種類に就いて大略を記して置いたから、總評は省略して、最後に作家としての業績の一端を述べて置く。馬琴の讀本の作風には、今日から見れば種々の缺陷があり、又其の性格にも多少の缺點はあるけれども、彼が當時及び後世に及ぼした影響感化には特筆すべきものがある。第一は馬琴が驚くべき努力家であり、從つて稀に見る多作家であつた事である。彼があらゆる困難窮乏と鬪ひながら、五十餘年に亙る長い創作生活の間、殆ど一日も筆を休めなかつた不撓の精力と、生涯に書き上げた作品が二百九十餘部に達してゐる事は、人心に多大の感激を與へる。第二は當時の戲作家中比類のない讀書家であり博識であつた事である。馬琴が讀書家であつた事は、衣食を節して購つた和漢書が五六千卷六十餘櫃に達した事によつて窺はれ、又其の博識强記は『八犬傳』の中に散見する該博な考證に徵して明かであるが、なほ其の著書に考證的隨筆として名高い『燕石襍志』五卷『玄同放言』三卷『兎園小說』九卷等があり、近世小說史の好資料としての『近世物之本江戶作者部類』二卷、歲時記として廣く行はれてゐる『俳諧歲時記』二卷の如き好著があるのを見ても明瞭である。從つて馬琴の讀本は他の作家の作品と異なつて、著しく學者的であり品位が具はつてゐるのであつて、彼が戲作者の地位を高めた事は見逃し難い。第三は小說を娛樂に終らしめずして、道

德的教化力を有たせた事である。既に述べた通り、彼の讀本は勸善懲惡によつて一貫して居り、各事件は因果應報によつて結ばれてゐるのであるから、一般讀者に及ぼした道義的感化は極めて偉大である。殊に史傳物に於て武士的精神を鼓吹し、尊王精神を發揮した事は最も注意を要する。馬琴が勤王の精神を懷いてゐた事は、『俠客傳』『八犬傳』などによつても窺はれ、又交友中に蒲生君平・渡邊華山等があつた事によつても明かである。

三　其他の讀本作者

文化から文政の初頃は讀本の全盛期であつて、文壇の殆ど總ての作者が之に筆を染め、年々夥しい作品が刊行せられた。江戸の讀本作者で京傳や馬琴に次いで注意すべきは、高井蘭山・小枝繁・感和亭鬼武・宿屋飯盛・柳亭種彥等である。

高井蘭山

高井蘭山天保九年歿七十七は名を伴寛、通稱を文左衞門と云ひ、芝御組屋敷の與力高井伴昌の子である。『和漢朗詠國字鈔』八巻『平家物語圖會』十二巻等の著がある。讀本の作には鎌倉時代の史料を材料とし、勸善懲惡を骨子としたものが多い。北條時政義時泰時三代に亙る史實に基づいた『星月夜顯晦錄』六編三十册自文化六年至九年刊は彼の傑作であり、之に次いで見るべきものは白面金毛九尾の妖狐の說話に據つた『繪本三國妖婦傳』十五册文化元年同二年刊行である。『水滸傳』の飜譯で名高い『新編水滸畫傳』九十巻自文化二年至文政十一年刊行の二篇巻十までは馬琴の作でそれ以下は蘭山によつて完成せられた。此の外『孝子嫩物語』五册文化五年刊行『繪本鎌倉年代記』五册天保十四年刊等があるが、其の價値は乏しい。

小枝繁

小枝繁文政九年歿六十八は本名を

露木七郎次と云ひ、水府御主殿附の役人で劍道に長じト筮に通じてゐた。其の讀本の作には『繪本東嫩錦』（五卷文化二年刊行）『小栗外傳』（十五卷文化十二年完結）『景清外傳』（十五卷文化十二年刊行）等があるが何れも二流の作品である。

感和亭鬼武

感和亭鬼武（文政元年歿五十九）は本名を前野曼七と云ひ江戸の人である。初め代官の手代役を勤め、後に一橋家の臣前野氏を嗣いで勘定役となつたが、早く隱居して戲作者となつた。多くの黄表紙合卷讀本などを著作したが、讀本の代表作『自來也說話』（十二卷文化三年刊）以外には特に言ふべき作はない。此の作品は當時好評であつて、間もなく近松德叟によつて狂言『柵自來也談』に仕組まれ、大阪角の座に上演せられて大當りであつた。なほ美圖垣笑顏の合卷『兒雷也豪傑譚』（一一三九頁參照）は此の讀本を粉本としたのである。

一九三馬種彦の讀本

滑稽本作者の十返舍一九や式亭三馬、合卷作者の柳亭種彦等も亦流行を追うて讀本を書いてゐる。即ち一九には『深窓奇談』（五卷享和二年刊行）『怪談雨夜鐘』（六卷享和三年刊行）などがあり、三馬には『阿古義物語』（十二卷文化七年刊）『繪本魁草紙』（五卷文化八年刊行）等がある。又種彦は『阿波鳴門』（五卷文化四年刊行）『淺間嶽面影草紙』（三卷文化六年刊行）其の續篇『逢州執着譚』（五卷文化九年刊行）『綟手摺昔木偶』（五卷文化十年刊行）、及び讀本と淨瑠璃の折衷を試みた『勢田橋龍女本地』（三卷文化十年刊行）等の作がある。當時狂歌師の多くが和漢の學に通じてゐた事は既に述べたが、彼等の間からも亦讀本を試みる者が現れた。例へば四方歌垣には『月宵鄙物語』（十卷文化五年刊行）、芍藥亭長根には『坂東奇聞濡衣草紙』（五卷文化三年刊行）の如き作品がある。

六樹園飯盛の讀本

殊に狂歌師中の和學者で雅文に長じた六樹園飯盛（石川雅望）は、擬古文の讀本『飛驒匠物語』『近江縣物語』『天羽衣』『梅が枝物語』等を書いて異彩を放つてゐる。

『飛驒匠物語』（六卷文化五年刊行）は『今昔物語集』の中の「百濟川成飛驒工挑語」に、左甚五郎の傳說を取合せ、

之に『更級日記』にある竹芝寺の傳說を加へて成つたもので、彼の雅文小說中最も勝れて居る。『近江縣物語』（五卷文化五年刊行）は藤原保輔同齊光二人の强盜に佳人園生、才子梅丸及び梅丸の戀敵常人等を配した物語であつて、作者は之を近江國の閑居に於て、一老翁の物語る所を記したと稱してゐる。此の假託は其の題號と共に、『萬葉集』の「靑みづらよさみの原に人もあはぬかも石走る淡海縣の物語せむ」に據つたものである。なほ此の作には支那の李笠翁の十種曲中の「巧團圓傳奇」を飜案した痕が歷然としてゐる。次に『天羽衣』（中本二卷文化五年刊行）は彼が支那の『醒世恒言』を飜譯した『通俗醒世恒言』（五卷寛政二年刊行）中の「今縣令競義婚孤女」の筋を取り、謠曲「羽衣」や『今昔物語集』中の「尼共入山食茸舞語」などに據つて作つたもので（日本名著全集の讀本集解題（山口剛氏）に據る）相當勝れた作品である。最後の『梅が枝物語』（一卷文化七年刊行）は竹田小出雲。文耕堂。三好松洛等合作の淨瑠璃『ひらがな盛衰記』四段目の梅が枝無間鐘の段を、自由な擬古文で飜譯した短篇である。以上の解題によつて知られるやうに、飯盛の讀本には在來の讀本と同じく支那小說の影響も認められるが、素材は我が古典文學から得たものが多く、殊に其の文章は悉く優雅な擬古文であつて、他の作家とは全く趣を異にして居る。元來讀本には庭鐘の『英草紙』以下の作風から發展したものと、綾足の『西山物語』などの系統を引いたものと二つの流がある。併し後者は國學者の餘技であり、殊に讀本全盛期には全く前者に壓倒せられたのであつて、六樹園飯盛の讀本の如きは、當時に於ける特殊の存在であつた。

右に述べたのは總て江戸の作者であるが、初期讀本の發祥地である上方にも相當盛に行はれた。尤

も作者作品の數は多いけれども、質に於ては到底江戸に及ばなかつた。元來上方は早くから印刷術が發達してゐたから、各種の名所圖會や岡田玉山の『繪本太閤記』（八十四卷寛政九年—享和二年刊）のやうな精巧な畫入本が續々上梓せられ、小說類も亦盛に刊行せられた。尤も黃表紙合卷は江戸の專有物であつて、上方に現れた小說は主として讀本であつた。上方の讀本作者には栗杖亭鬼卵を筆頭に、手塚兎月・石田玉山・秋里潮夕・曉鐘成・東籬亭菊人等があるが、何れも讀本專門の作者ではなく、鬼卵以外には殆ど勝れた作品を遺してゐない。

栗杖亭鬼卵

栗杖亭鬼卵（文政六年歿八十三）は本名を中山（後大須賀）周藏と云ひ、別號を知白・陶山・佛卵などと稱した。遠江國日坂の人で後に大阪に住んだ。俳諧狂歌を能くしたが、讀本作者として最も聞え、二十餘種の著作がある。其の大部分は淨瑠璃歌舞伎巷談などから取材したもので、『新編復讐蜻蛉卷』（五卷文化五年刊行）『長柄長者黃鳥墳』（五卷文化七年刊行）『繪本更科日記』（三編十五卷自文化八年至文政四年刊）等は注意すべき作品である。最後の一篇は勇士山中鹿之助一代の事蹟を骨子とした作で、題號は初篇に鹿之助の母で勇婦の更科の事を物語つてゐるのに因る。結構雄大脚色穩健文章平淡で、彼の傑作であり、且つ上方の讀本中最も見るべき作である。

讀本の末流

文化文政期の讀本は大體述べ終つた。元來讀本は勸善懲惡の道德思想の鼓吹を主とする觀念的小說であり、其の文章は和漢混淆雅俗折衷から成るものであるから、洒落本合卷滑稽本人情本等の大衆文藝とは異なつて、其の讀者は自ら限られてゐた。加之馬琴以後の群小作家の作品は、趣向文章共に平凡であつて、傑出したものは極めて稀である。かくて讀本は文政の終頃からいよ〱衰へ、弘化以降

は他の一般江戸小說と共に衰滅したのである。而して岳亭丘山（本名八島定國生歿未詳）が譯者未詳の『繪本西遊記』八編四十卷の第三篇以下を書き繼ぎ、萩原廣道（文久三年歿四十九）が蒜園主人の名で『俠客傳』の第五集を續作し、松亭金水（文久二年歿六十八）が『朝夷巡島記』『善知鳥安方忠義傳』の後を繼いで完結したのは、讀本末期の情勢を語るものであつて、一般作者の創作は何れも生氣がなく、取り立てて言ふべきものはない。丘山の作『神稻水滸傳』の三篇以下が、知足館松旭友鳴吉兵衛によつて書き繼がれ、明治十三四年に至つて二十八編百四十卷の完成を見たのは、讀本最後の長篇である。

四　合卷と柳亭種彦

寛政前後に黄表紙が其の本領とする滑稽洒落を忘れて、筋の複雜な敵討物を主とするやうになつた結果、從來の五丁一冊を單位とする三冊乃至六冊の制限に不足を生じたのは、卽ち合卷發生の動機であつて、文化三年に現れた三馬の作『雷太郎强惡物語（いかづちたらうがうあくものがたり）』は合卷の鼻祖と稱せられて居る。此の作は當時の黄表紙に例の多い教訓物であつて、取立てて言ふ程の物ではないが、全篇十卷の長篇を五卷づつ合綴して、前後二篇の二冊物に製本した新型であり、且つ極めて好評を博した作であつた爲に、其の翌年から此の體裁に倣つたものが續出して、合卷の流行を見るに至つた。合卷は黄表紙の延長であつて、文化の末頃までは二者竝行して刊行せられたが、文政の初年に黄表紙は全く廢れて、專ら合卷のみが行はれるやうになつた。文化文政期は江戸小說の全盛期であつて、合卷も文政頃發達の頂上に達し、

天保改革以後讀本や人情本滑稽本が振はなくなつた後もなほ相當行はれ、長篇の續物は明治の初年まで續刊せられた。即ち合卷の行はれた時代は前後六十餘年に亙つて居る。



雷太郎強惡物語

合卷は黄表紙と同じく、主として婦女童幼の爲に作られた繪草紙であるから、文章は平易を旨とし、すべて假名で記されて居り、筋の發展は主として挿繪によつて説明せられて居る。體裁を美しくする事は合卷の發生當時からであつて、文化四年刊行の京傳作『於六櫛木曾仇討』に始めて豐國の描いた口繪を加へ、（なほ題紙には役者の似顏を描いた。）更に文化七年出版の京傳作『絲櫻本朝文粋』の表紙に鳥居清峰の錦繪を用ひて以來、表紙口繪挿繪は年と共に精巧華麗を競ふやうになり、遂に柳亭種彦の『偐紫田舎源氏』の如き艶麗なものを見るに至つた。合卷の發達期は恰も歌舞伎劇の爛熟期であるから、其の作中には歌舞伎や淨瑠璃から多くの材料を取つて居り、挿繪には舞臺繪を用ひ、人物の如きも亦役者の似顏で描いたのであつて、種彦などの『正本製』の如き所謂紙上演劇が發生する因縁は、既に合卷の初期に胚胎してゐるので

ある。合卷と戲曲との關係は右の如く密接であるから、其の畫工は主として歌舞伎繪に長じた浮世繪師であつて、最も多く描いたのは歌川豐國、及び其の門人の一陽齋國貞・一勇齋國芳などであり、之に次ぐ者は勝川春亭・同春扇・溪齋英泉等である。要するに合卷の價値を左右するものは挿繪であるから、繪草紙として極度の發達を遂げたのである。

讀本の影響

右に述べたのは主として體裁の進步に就いてであるが、其の內容も亦之に應じて發展した事は言ふまでもない。合卷が流行した文化文政期は恰も讀本の全盛期であり、又歌舞伎芝居の爛熟期であるから、此等が合卷の發達に多大の影響を與へたのは當然である。合卷の發生期に於て紙數の制限から開放せられた時、競うて複雜な趣向を立てたのであるが、彼等の多くは一方に讀本作者を兼ねてゐたから、讀本と同じ題材趣向及び筋を合卷に應用する事が自然多くなつた。かくて合卷は婦女子の娛樂として悅ばれたばかりでなく、大人の讀物としても歡迎せられるやうになり、其の結果として讀本と同じやうな、堅苦しい眞面目な筋や古典趣味などを取入れるやうになつて、漸次讀本に接近して行つた。殊に讀本の特色とする勸善懲惡主義の教訓を寓した作や、和漢の古典を飜案した長篇の讀物が流行するやうになつてからは、全く讀本に隷屬した觀を呈した。尤も合卷は依然として童蒙を相手とする繪草紙であるから、讀本に比して體裁を異にするばかりでなく、內容に繁簡難易の相違がある事は勿論である。

歌舞伎淨瑠璃の影響

讀本の影響よりも更に著しいのは歌舞伎竝に淨瑠璃の影響である。草雙紙に及ぼした歌舞伎及び淨

瑠璃の影響は、赤本黒本青本黄表紙と時代を下るに從つて愈著しくなつたのであるが、合卷に至つて其の極度に達した。合卷には初期の頃から陰淒な怪談や、悽慘な敵討や、淫靡な情話や、悲壯な忠孝譚や、派手な俠客風俗などが織り込まれて居るのであつて、其の內容は變化に富み、筋は極めて複雜である。而してそれ等の要素は浮世草子や讀本などから得たものもあるが、多くは歌舞伎及び淨瑠璃から得て居るのであつて、讀者は古今の名作の部分部分が、美しい繪物語となつて次々に展開して來る點に、滿足と悅びを感じたのである。蓋し當時は頹廢的氣風が一般民衆の間に漲つた結果、新奇を悅び强烈な刺戟を求めたのであつて、合卷の作意並に畫風は此の風潮を追つたものである。要するに合卷は文學的價値の上から言へば、讀本風の古典文學の飜案物が重きをなして居るけれども、數量の方面から見れば、歌舞伎劇や操芝居の趣向の綴合改作飜案などから成るものが却つて多いのであつて、表紙口繪挿繪に役者の似顏や舞臺風を描き出した所以も、作者を俳優に假託したものが多い所以も、是によつて明瞭である。

合卷作者

　合卷の見るべき作品は、文化文政から天保の頃までに現れ、それ以後は漸次下り坂に向つたのである。合卷發生期に行はれたものは、主として二三冊乃至五六冊の讀切物であつたが、文化の末頃から三馬や種彥等が續物を作つて以後は、短篇物が漸く衰へて讀本風の長篇が流行し、幕末の頃には益長大になつた。文化文政期の合卷作者を代表する者は柳亭種彥で、山東京山が之に次ぐのであるが、京傳・馬琴・一九・三馬其の他の戲作者も殆ど合卷を試みて居る。今京傳・馬琴・京山の作に就いて略述し

た後に、種彦に就いて稍詳しく述べる事にする。

京傳の合卷

京傳が寛政三年に洒落本の爲に處刑せられた後、專ら敎訓物敵討物を書いた事や、讀本に於て到底馬琴に對抗し難い事を悟つた後、主として合卷に筆を染め、而も口繪や錦繪仕立の表紙の先鞭を著けて、樣式の發達に貢獻した事などは既に述べて置いた。文化の初頃京傳が書いた黃表紙や合卷は時代の流行を追つた敵討物であつたが、漸くそれが飽かれた頃、卽ち文化五六年頃から、彼は歌舞伎や淨瑠璃から取材した情話物に轉向して、初期の合卷に異彩を添へた。卽ち文化六年に刊行せられた『八百屋お七傳松竹梅取物語』十五卷二冊國貞畫や『お夏清十郎風流伽三味線』十卷二冊春亭畫などは、當時好評を以て迎へられた作品であつて、其の後文化十二年に歿するまで主として此の種の情話物を續刊した。歌舞伎淨瑠璃の飜案改作は此の頃の小說界の流行であつて、京傳に限つた事ではないが、合卷に於て最も早く成功を收め、且つ生彩ある多くの作品を發表したのは京傳である。京傳の晚年には三馬や種彦等も同じ傾向を追つて、歌舞伎や淨瑠璃の筋を取入れた狂言好みの作品を書いたが、到底京傳の作には及ばなかつた。

馬琴の合卷

馬琴は當時の讀本作者の大立物であつて、草雙紙は片手間に書いたのであり且つ得意でもなかつた。併し合卷の作には當時好評を博した名篇が尠くない。其の代表作は支那の小說を飜案した長篇であつて、『西遊記』を飜案した『金毘羅船利生纜』八編英泉畫自文政七年至天保二年刊『水滸傳』を女物に改作した『傾城水滸傳』十三編豐國國安畫自文政八年至天保六年刊『金瓶梅』に勸善懲惡の敎訓を加へた『新編金瓶梅』十編國安國貞畫自天保二年至弘化四年刊『金翹傳』を飜案した『風俗金魚傳』五編國安畫自天保八年至天保十年刊等は何れも好評を以て迎へられた。此等の中で最も名高いのは『傾城水

滸傳』である。此の作は『里見八犬傳』と同じく支那の『水滸傳』を原據とし、更に綾足の『本朝水滸傳』を參考した飜案物であつて、百冊十三編から成り、十年間に亙つて刊行せられた。是より先刊行した『金毘羅船利生纜』には女性が乏しい缺點があつたのに鑑みて、此の作には原作の百八豪傑を悉く賢女烈婦に作り替へ、なほ遊女を點出したのであつて、當時讀者は其の趣向の妙を激賞すると共に、次々に現れて來る烈女の活躍に對して大いに喝采したのである。其の後此の作品の摸倣作が現れ、笠亭仙果（二世種彦）は續篇として嘉永三年から『女水滸傳』（三編、二世豐國畫）を續刊したが、馬琴の此の作に比して遙かに劣り、而も完結を急いで失敗に終つた。

山東京山

合卷の發生期から末期に亙つて活躍したのは京傳の弟山東庵京山（安政五年歿九十歳）である。本名を岩瀨百樹、通稱を相四郎又は利一郎（利市とも）と云つた。幼年の頃に外叔母鵜飼氏の養嗣子となつたが離緣せられ、更に佐野東洲の養子となつた。併しこれも離緣となつて町人になり、兄京傳の勸めによつて戲作に從事し、京傳の歿後には其の家を嗣いだ。文化四年（三十九歳）に出版した『復讐妹脊山物語』は彼の初作であつて、九十の高齡で歿するまでに五十餘部の作品を書いた。初めは讀本や滑稽本なども作つたが、其の本領は合卷である。合卷作者としては初め敵討物を書き、次いで人情本洒落本の趣向を加味するやうになり、更に教訓物氣質物に轉じ、晩年には專ら長篇を書いた。其の作はさほど勝れてはゐないが、浮世草子氣質物を飜案した作には好評を得たものがある。『大晦日曙草紙』（二十六編國貞等畫自天保十年至安政六年）、『教訓乳母草紙』（十編國芳畫自弘化元年至嘉永六年刊）『教草女房形氣』（二十編豐國畫自弘化三年至安政五年）等は其の著しいものである。京山は又近世

風俗の考證家であつて、『蜘蛛の絲卷』二卷・『歷世女裝考』四卷の如き著書がある。

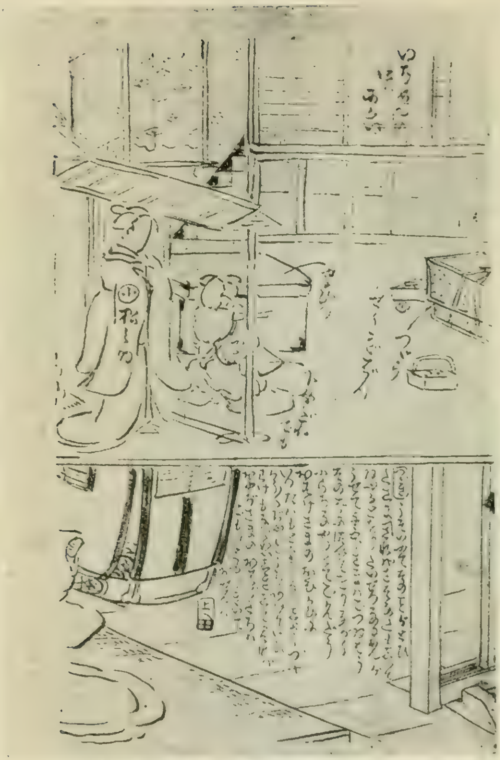
柳亭種彥

合卷作者はかなり多く現れたが、其の著名な者は寧ろ讀本や滑稽本の作者であつた。此の間にあつて合卷に全力を注ぎ、代表的名作を書いたのは柳亭種彥（天保十三年歿六十）である。種彥は江戸の人で、本姓は源、名を知久（ともひさ）、通稱を高屋彥四郎と云ひ、號を柳亭種彥と云つた外に愛雀軒・足薪翁・修紫樓などと稱した。彼は食祿二百俵の幕士であつて、其の先祖は甲斐の横井氏であると云ふ。天明三年に本所の吉田町に生れた。少年の時から文藝を嗜んで俳諧漢畫を學び、又狂歌川柳にも巧みであつた。幼少の頃疳癖が强かつたので、父が「風に天窓はられて睡る柳かな」の句を與へて訓戒した事がある。彼が狂名を柳風成（後に心の種俊と改めた）と云ひ、川柳に木卯と號し、草雙紙に柳亭の號を用ひたのは皆是が爲である。種彥は通人ではなかつたが、歌舞伎狂言には深い興味を持ち、殊に二代目坂東三津五郎（秀佳）の藝を愛して巧みに其の眞似をしたので、朋輩から三津彥と呼ばれた。彼が種彥と號したのは、心の種俊と諱名の三津彥とを合せたのであると言はれて居る。種彥はまた俳書淨瑠璃本狂言本などの蒐集家並に考證家として知られた人であつて、其の著書に『還魂紙料（すきかへし）』『用捨箱』があり、編著に『淨瑠璃目錄』『俳書目錄』の如きものがある。

種彥の合卷

種彥が戯作に志したのは二十四五歲の頃からであつて、文化年中には讀本を書いたが、馬琴の盛名に壓倒せられて世評を得る事が出來なかつたので、文化八年（二十九歲）に『鱸庖丁青砥切味』といふ草雙紙の處女作を書いて以後は主として合卷を發表した。合卷の作は極めて多數あるが、文政十二年に『修紫

田舍源氏』の初篇を刊行するまでは短篇物を書いたのであつて、『昔々歌舞伎物語』や『正本製』等は長篇物に移る過渡期の作である。短篇物は主として古淨瑠璃や著名な狂言の飜案又は綯交せであつて、作者の歌舞伎趣味は裝釘挿繪の上にも現れて居る。彼は殊に近松の作を好んだのであつて、『心中天網島』を原據とした『桔梗辻千種之衫』(國貞畫文政三年刊)、『心中宵庚申』を飜案した『新うつぼ物語』(國貞畫文政六年刊)、『國姓爺合戰』に據つた『唐人髷今國姓爺』(國貞畫文政八年刊)などを著作し、又『昔々歌舞伎物語』(國丸畫初篇天保元年刊後篇天保二年刊)の



正本製草稿

前篇(作者の所謂初日)は『夕霧七年忌』を、後篇(作者の所謂二日目)は『水木辰之助餞振』を原據として居る。

種彥の歌舞伎趣味の最も凝つたものは『正本製』である。題名は歌舞伎芝居の正本の體裁に仕立てた合卷の意である。初篇は『昔々歌舞伎物語』に先立つ文化十二年に出版せられ、其の後年々一篇づつ出して、十六年後の天保二年に至つて十二篇を出版して

完結した。此の作は十二編から成つて居るけれども續物ではなく、初篇はお仲淸七、第二篇は小稲判兵衛、第三篇は顏見世物語といふやうに、一篇づつ題材を異にする讀切合卷である。徹頭徹尾芝居仕立になつて居るのであつて、序文を口上に擬し、本文を正本の體裁に似せて作り、國貞の口繪には舞臺裝置樂屋の內部を始めとして、芝居の年中行事や俳優の日常生活などを示し、插繪には役者の似顏を寫したものであつて、讀者に芝居を見ると同じ興味を與へようとしたものである。かくて『正本製』は其の獨創に富んだ樣式と各篇の取材並に仕組の變化が、芝居好きの民衆に歡ばれたのであるが、其の興味の一半が歌舞伎繪の名手國貞の繪にあつた事は言ふまでもない。此の作が當時好評を以て迎へられた事は、十二篇まで續いた事や、其の後摸倣作が次々に現れたのを見ても察せられる。

邯鄲諸國物語

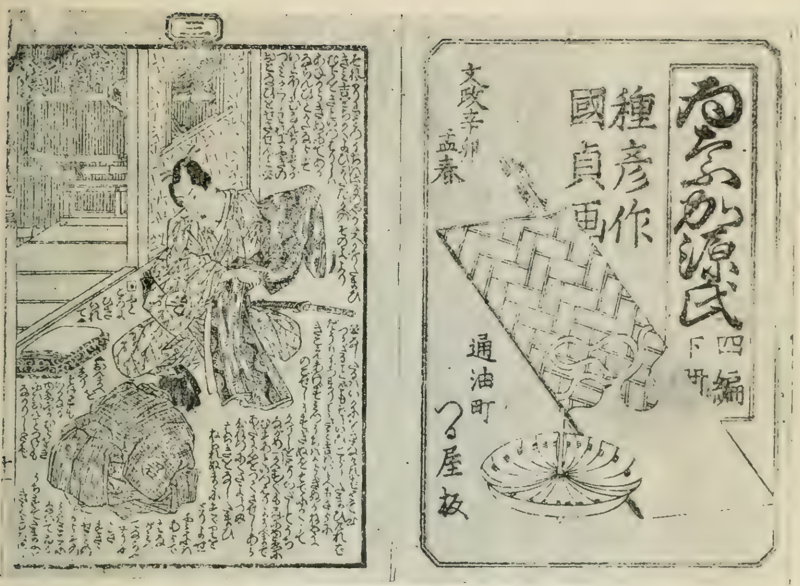
　種彥の合卷で稍異彩のあるのは『邯鄲諸國物語』（國貞畫一名種彥諸國物語）である。序によれば『西鶴諸國咄』や『其磧諸國物語』等に倣つた作で、邯鄲の二字を冠したのは「取りどころ實無き夢物語といふ意」である。續物ではなく卷毎に獨立した讀切合卷の集合體である。其の說話の中には古い說話集から取材したものもあるが、例によつて淨瑠璃や狂言などの飜案綯交ぜが多い。本書の初篇は『田舍源氏』の十一篇十二篇十三篇を出した天保五年に刊行せられ、同十二年に八篇（近江・出羽・大和・播磨の卷々）まで發行して未完の儘になつてゐたのを、其の後門人笠亭仙果が九篇から二十篇までを書き續いで、安政三年に完結した。此の作は『田舍源氏』の賣行に誘はれて相當好評を以て迎へられた。

偐紫田舍源氏

　種彥の傑作であり又合卷中で最も名高いのは『偐紫（にせむらさき）田舍源氏』である。文政十二年の春（作者四十七歲）初篇

二冊を發表した時、意外の好評を博したので、翌年から每年二篇づつ刊行し、更に天保四年以後は三編乃至四編づつ出版して、天保十三年までに三十八編百五十二冊を公にした。偶水野忠邦の改革に當つて、種彥は此の作の爲に取調を受けたので、遂に完結に至らずして筆を絕つた。尤も第三十九篇と第四十篇の草稿は現存して居るのであつて、近頃『日本名著全集』の中の『修紫田舍源氏』下卷に始めて收錄せられた。既刊三十八編の繪はすべて歌川國貞の筆である。種彥が此の著作に著手した頃は、馬琴が讀本執筆の餘力を以て長篇の合卷『金毘羅船利生纜』『殺生石後日怪談』『傾城水滸傳』などを續刊して、漸く種彥の本領を侵さうとする勢を示した時であるから、彼は之に對抗する爲に、特に民衆に其の名を知られた『源氏物語』を取つて、之を讀本式の合卷に飜案する事を思ひ付いたのである。種彥は『湖月抄』などによつて、源氏の一端を窺つてゐたかも知れないが、直接の參考材料となつたのは、假名草子流行時代に現れた源氏の俗譯、及び源氏から取材した古淨瑠璃の類である。此等の參考書目は『田舍源氏』の第三篇の卷頭に揭げて居る。題名を「修紫」としたのは作者を今式部のお藤といふ女に擬した爲であり、「田舍」を冠したのは通俗の詞で綴つた爲である。

『田舍源氏』は外面的には室町時代の將軍家の物語に飜案して居るが、實は江戶時代の貴族生活を寫し出さうとしたものである。當時の貴族生活の代表的なものは將軍家であるから、作者は素より之を標準としたのであつて、此の作中に描寫された榮華は、誰の眼にも直ちにそれと映じたのである。併し當時は大奧の生活を其の儘寫す事は勿論、それをほのめかす事さへも固く禁じられてゐたから、大



田舍源氏四編下（見返と本文）

物や說話の筋は實際と何等の交涉もなく、只外面的な風俗を寫すに止め、殊に綺に邸宅衣服調度などをそれらしく見せるやうに苦心したのである。さて此の作は東山義正の子光氏を光源氏に擬して、其の遊蕩生活を次々に描寫して居るのであるが、原作を忠實に飜案したのでなく、人物を減じて一人に二三の役を兼ねさせ、又原話の順序を變更し或は削除すると共に、慶元祿時代の戲曲小說などの趣向を取入れ、又原作の和歌を俳句に替へなどして、通俗を旨とし且つ變化を圖つたのである。從つて原本の卷の切目などには殆ど無頓著であるが、既刊の第三十八篇までには桐壺から藤袴までの三十帖を飜案し、稿本の第三十九篇と第四十篇とには眞木柱を飜案して居る。斯くの如くして飜案された『田舍源氏』は當時流行の讀本と同樣に、近世の武士

的精神若しくは儒教道德を中心として居るのであつて、主人公光氏の遊蕩生活も實は父や兄に對する節義を全うする爲であり、又家の寶を詮議する爲の方便とせられて居る。併し作者は元來創作的伎倆を十分に具へてゐなかつたから、勸善懲惡主義に終始した馬琴の讀本に比して、遙かに不徹底なものになつて居るのであつて、表面の愛慾生活と內面の道德主義との矛盾撞著は至る所に暴露して居る。尤も讀本と合卷とは自ら讀者を異にして居り、鑑賞の態度も今日と同一でなかつたから、文學的價値はさまで問題とされなかつた。元來合卷の讀者は內容文章よりも、寧ろ美しい挿繪に見入つたのであるから、種彥も此の點には最も意を用ひて自ら下繪を書いたのであつて、此の作が上流婦女の間にまで盛に持て囃されたのも、主として國貞の妖艶な表紙繪や挿繪に心を惹かれたのである。（卷頭圖版參照）當時此の作が上下に流行した事に就いては種々の逸話が傳はつて居る。例へば板元の鶴屋は一時傾きかけた身代を此の作の賣行によつて立直し、國貞は別に源氏繪を描いて其の流行の魁となり、歌舞伎芝居には此の作の趣向を取入れて大當りを取り、更に此の作の流行は市井の隅々にまで及んで、煎餅鮨蕎麥に源氏の名を冠して呼ぶやうになつたと云ふ。

種彥が原作を今樣の繪草紙に引直すに就いては、先づ趣向や挿繪などに工夫を凝らしたのであるが、文章に於ても亦原文の妙味を失はないやうにする爲に苦心したのである。左に揭げるのは夕顏の卷を飜案した最初の一節である。（讀み易くする爲に適當に漢字を當てて置いた）

光氏はひたすらに浮世狂ひにかこつけて、寶の劍を詮議せんと、心を千々に碎けども、それと思へる事もな

し。なほも人の繁き所へ、立入らんには如くべからずと、六條三筋町といへる廓へ、忍び歩きの頃なりしが、かの惟吉が母いたく煩ひ、尼になりける由を聞き、さらば彼を訪ねんと、五條の家に赴きて門前に駕籠をとめ、人してかくと言はせ給へば、惟吉あわてて出で迎へ「此の程母の病氣につき暫しお暇蒙りて、御館へも罷り出でず、思懸けなき御來駕」ト頭を大地にすりつくれば「いやとよ、汝が母の乳房を含みて我は成長せり。病ふに臥すと聞きながら、打捨て置くは本意にあらず。案内せよ」ト仰すれば「然らばお駕籠の儘ながら」ト、くぐりを入りて門の戸を、開けんとすれど門に、錠を下してありけるにぞ、急がはしげに惟吉は、鍵持て來んと走り行く。光氏は駕籠の簾うちかけて、大路の樣を見渡し給ふに、此の家の傍に、板垣をまばらにしなして、緣先の障子はくわらりと押開き、蒲の簾いと白う、涼しげなるに女の透影、笑ふ聲など聞えければ、如何なる者の集るならん、我とは見知る者あらじと、駕籠より下りて差覗けば、座敷も二階も奥深からず物はかなき住居にて、古帷子の解分を板戸へ張りしを立寄せたる「垣根も折戸も青やかに、心地よげに這ひかかれる、蔓に白き花のみぞ、おのれ獨りが笑の眉、開きしは何なるか」ト問はせ給へば駕籠舁く男「あれこそは烏瓜、其の名は黒き烏めきて、花は白く實は赤く、かかるいぶせき垣根にのみ咲き候」ト答ふるにぞ「實に此の邊は小家がち、うちよろぼひし軒のつま、這ひまつはれるは口惜しの花の契や、一房を折り持て參れ」ト宣へば、かの男は心得て、此の押上げたる網戸の內へ立入れば、年の頃二十に足らぬ顏よき娘、黄なるすずしの前掛し、花にもまさる雪の肌、白き團扇に打招き「これに載せて上げ給へ、花は露けくとが〱しき、蔓の茨が美しい、あなたのお手にさはらう」ト、さもおもはゆげに立出づる。折から隣の門の戸を、開いて惟吉罷り出で、それと見るより立寄つて、娘の持ちし團扇のまま、花を受取り御前へ持

ち、『門の鍵を置き失ひ、かく騒がしき街中へ、置き參らせし無禮の段。然しあなたを光氏君と存ぜし者は候まじ。いざ御供』ト門の内、駕籠舁き入るればこなたの娘、心ありげに見送りつ、ただうつかりと佇めり。
（田舍源氏四篇下）

田舍源氏の續篇

種彥の歿後に『田舍源氏』の續篇として刊行せられたものには、一筆庵可候（溪齋英泉）の『其由縁鄙廼俤』以下四種許りある。『其由縁鄙廼俤』の七篇以下十一篇までは柳下亭種員の筆であり、十二篇以下二十三篇までは笠亭仙果の手に成つた。是とは別に『其由縁鄙廼俤』の五篇の後を承けて著作したものに、仙果の『足利絹手染の紫』がある。其の十七篇以下二十篇までは松亭金水の作である。仙果はまた別に嘉永五年から『根元實紫』を書き、文久二年までに十七篇を出し、種員は宇治十帖の飜案として、嘉永三年から『薄紫宇治曙』八編を著作した。但し七篇以下は仙果の作である。かくの如く『田舍源氏』の續篇に擬した作は次々に現れたが、いよいよ低下して見るべきものは殆どない。

さて種彥は『田舍源氏』第三十八篇を刊行した天保十二年の夏の初から秋の末にかけて病の床に就いた。此の頃大奧の女中松惠といふ者があつて、『田舍源氏』の中絶を案じて作者の平癒を祈る爲に、七日間堀内の妙法寺に代參を立てた事が露顯して、暇を出された事件がある。又作者は其の翌年此の作の爲に組頭の召喚を受けて取調べられ、板元の鶴屋は絶版を命ぜられた。種彥は元來小心者であつたらしく、此の事件以來ひたすら謹愼してゐたが、遂に病を得て同年秋八月に他界した。享年六十であつた。

嘉永安政期の合卷

幕末の頃合卷に筆を染めた著名な作者には、從來活躍を續けてゐた馬琴や京山の外に、種彥の門人

に二世種彥を名乘つた笠亭仙果通稱高橋彌太郎（慶應四年歿六十三）及び柳下亭種員と號した坂本屋新七（安政五年歿五十二）があり、狂歌師眞顏の門人に美圖垣笑顏と號した美濃屋甚三郎（弘化三年歿五十八）があり、又三馬の子式亭小三馬通稱菊池虎之助（嘉永六年歿七十四）及び三馬の門人樂亭西馬通稱西宮新六（安政五年歿六十歲）等も作者として名を成した。其の他明治の初年まで大作を書いたのは萬亭應賀の服部幸三郎（明治二十三年歿七十二）二世春水の染崎延房（明治十九年歿六十四歲）三世種彥の高畠藍泉（明治十八年歿四十八歲）等である。かくて合卷は幕末まで盛に行はれたのであつて、當時持て囃された名作は殆どすべて長篇である。就中大作であり而も世評の高かつたのは『白縫譚』『釋迦八相倭文庫』『兒雷也豪傑譚』『北雪美談時代加賀美』等であつて、何れも依然として歌舞伎の飜案作である。以下此の四篇を簡單に解說して合卷を終る事にする。

白縫譚

『白縫譚』は九十編から成る合卷中の最大長篇であり、而も種彥以後の傑作と稱せられる作である。嘉永二年に初篇を出して以來、明治十八年までに七十一編を刊行して未完結の儘であつたが、『續帝國文庫』には第九十篇までを收めて居る。初篇から三十一篇までは柳下亭種員の作であつて、それ以下は笠亭仙果、次いで柳水亭種淸（種員門人）の手によつて嗣がれ、畫は二世豐國・二世國貞・芳幾・周重の四人の續作である。題名は女主人公である大友氏の息女若菜姬が男裝して、白縫大盡となる事から取つたのであるが、一方では背景となつてゐる筑紫に因んで不知火を聞かせたのである。此の作は淸初の呂熊の作『女仙外史』(明の唐賽兒の亂を敍したもの)や『椿說弓張月』『田舍源氏』『正本製』などに據つて、黑田騷動に天草騷動を織り交ぜた作であつて、筋は復讐陰謀忠節などが交錯せられて極めて煩雜であ

り、趣向は目まぐるしい程變化する。幻術や靈の援助の下に變態的な美男美女が變幻出沒する事を中心としてゐるのは、幕末に於ける頽廢的氣分の反映であつて、同時代に現れた草雙紙に共通する特色である。此の作は讀者の好奇心をそそつて好評を博し、やがて古河默阿彌脚色の『しらぬひ譚』となつて上演せられ大當りを取つた。

釋迦八相倭文庫

『釋迦八相倭文庫』は五十八編から成り、前の『白縫譚』に次ぐ大作である。作者は萬亭應賀一人であるが、畫は二世豐國二世國貞及び惺々狂齋の三代の續作である。初篇を出したのは弘化二年で、完結を告げたのは明治四年であるから、前後二十七年に亙つて刊行せられた。此の作品は假名草子の『釋迦八相物語』（寛文六年板行）、井上播磨掾正本の『釋迦八相記』、近松門左衞門作の『釋迦如來誕生會』などによつて流布せられた釋迦一代記を題材とし、前記諸作の趣向の外に『田舍源氏』や歌舞伎芝居の趣向をも取入れて脚色せられたもので、釋迦一代に示現した八相を、巧みに今樣風の合卷に寫した所に作者の苦心がある。此の作も櫻田治助脚色の『花見臺大和文庫』となつて上演せられ、又錦繪となつて持て囃された。

兒雷也豪傑譚

『白縫譚』と併稱せられたのは『兒雷也豪傑譚』である。天保十年に初篇を發行して以後、明治元年に至るまでに四十三編刊行せられてなほ完結してゐない。初篇から第五篇までは美圖垣笑顏の作で、以下は一筆庵主人・柳下亭種員・柳水亭種清が次々に續作し、畫は國貞以下七人の筆に成つた。此の作品は宋沈俶の『諧史』中の怪盜我來也の說話から取材した感和亭鬼武作の讀本『報仇奇談自來也說話』（十二卷文化三年刊）を

原據とし、之に東里山人作『聞説女自來也』文政三年刊行や、種彥作『國字小說三蟲拇戰』文政二年刊行、其の他の戲作から趣向を取つて作り上げた勸善懲惡主義の草雙紙である。角書に「蝦蟇妖術大蛇怪異」とあるやうに、超人間的な怪奇的要素を豐富に交へた變幻極まりなき趣向が、其の挿繪と相俟つて讀者の興味を惹いたのであつて、怪傑自雷也の名は三歲みの見得と共に童幼の間にまで喧傳せられた。尤も前後三十年に亙る長期の作品であり、作者も四度まで代つて居るから、前後の矛盾や錯誤があつて不統一に陷つて居る。さて此の作は兒雷也物の傑作として世評が高く、同じ題材を取扱つた末流の作も次々に現れ、又默阿彌脚色の『兒雷也豪傑譚話』となり、錦繪にも描かれて長く流行した。

時代加賀美

『北雪美談時代加賀美』は嘉永八年安政二年に二世春水作二世國貞畫として初篇が刊行せられ、三十八篇から明治の代になり、明治十四年から柳水亭種淸作となり、明治十六年に四十八篇まで續刊せられた。其の間で見るべきは二世春水作の初の部分であつて、時代を下るにつれて合卷としての特色は漸く失はれた。此の作は其の題號が示す通り、加賀騷動を題材に取つたものである。加賀騷動が始めて歌舞伎になつたのは、天明元年初演の奈河龜輔作の『加賀見山廓寫本』であつて、爾來淨瑠璃や歌舞伎に種々に仕組まれて有名になつたのであるが、此の合卷は芝居の加賀見山の後日譚である。併し從來の歌舞伎芝居の有名な趣向を寄せ集めて、徒らに筋を複雜にし變化を求めたのであつて、是までに解說した四篇の中では最も劣つて居る。

要するに種彥以後の合卷作者は、從來取扱はれた各種の題材を取り混ぜ、是に過去の戲曲脚本小說

等のあらゆる趣向脚色を加へて、徒らに長篇の續物としたのであつて、只管局面の變化を求めた弊として支離滅裂に陷つたのである。かくて末期の合卷は形に於ては長大になつたが、實質は漸次衰頽したのである。而して最後に現れた種清・二世春水・假名垣魯文等の作は、新聞紙が發行せられると共に繪入小說として連載せられ、やがて明治時代の家庭小說の源泉となつた。

第八章　滑稽本と人情本

一　初期の滑稽本

滑稽本

滑稽本は滑稽諧謔を宗とする文藝の意味であるから、是を廣義に解する時は、江戸時代の通俗文學の大半に亙るのであるが、普通には十返舍一九・式亭三馬・瀧亭鯉丈等の作品を中心とし、更に溯つて寶暦明和頃流行した談義物の中で、滑稽諷刺を主とする諸作以下を含めてゐる。滑稽本は後の人情本と共に、江戸時代では中本と呼ばれた。中本は小本と半紙本の中間に位する大さのもので、俗に大蕩翦本とも云ひ、糊入みよし紙二つ截一册二十枚前後の本である。尤も中本と同じ大さの本は、黑本黃表紙洒落本讀本の中にも散見し、又所謂滑稽本の中には、中本以外の小半紙や稀に横本小本などもあるのであるから、形態による名稱は必ずしも內容と一致しない。從つて今日は一般に內容によつて、

中本

滑稽本人情本などの如き名稱が用ひられて居る。滑稽本の作者は極めて多いが、著名なのは風來山人

作者と畫工

平賀源内・山東京傳・十返舍一九・式亭三馬・感和亭鬼武・瀧亭鯉丈・一筆庵主人・梅亭金鵞等である。滑稽本の中には畫を中心とする特殊のものもあるが、之を除くと大抵一冊に三四葉の挿繪がある。京傳・一九・一筆庵等の作品には自畫を入れたのが多く、又挿繪の畫工として多く執筆したのは、歌川豐國・歌川國直・北川美丸・葛飾北齋・勝川春扇・喜多川月麿・勝川春亭・歌川國貞等である。

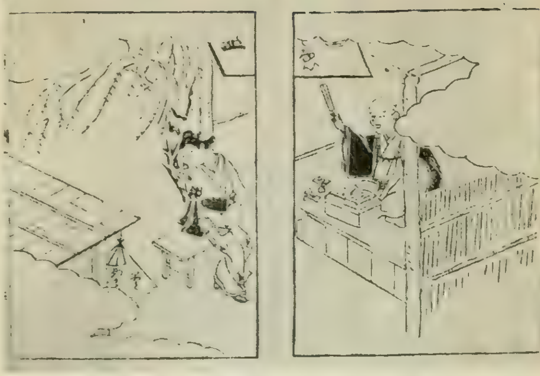
時代の區分

滑稽本は其の祖と云はれる『當世下手談義』が現れた寶暦二年から、明治初期の『西洋道中膝栗毛』に至るまで、前後百二十年に亙つて行はれ、此の間に四百數十種の作品が刊行せられた。此の百二十年間は作風によつて次の三期に區分せられる。寶暦から明和安永天明を經て寛政に至るまでの四十年間は發生期であつて、主として半紙本が行はれた。次いで享和元年に洒落本系統の『田舍芝居』が現れ、其の翌年其の影響を受けた一九の『東海道中膝栗毛』の初篇が刊行せられて以後は中本時代であつて、其の初の『道中膝栗毛』や三馬の『浮世風呂』及び『浮世床』の如き長篇によつて代表せられる享和文化から、文政にかけての二十餘年間は最盛期であり、鯉丈・一筆庵・金鵞等の諸作が流行した天保以後は衰頽期である。

談義物

滑稽本は其の源を寶暦頃流行した所謂談義物に發して居る。談義はもと淨土宗の說法を云ふのであつて、元祿享保期には特に上方で盛に行はれた。當時浮世草子には此の談義を取扱つた作品が現れたが、其の後貝原益軒の通俗教訓書や心學の流行の刺戟を受けて、八文字屋の氣質物の滑稽な趣向に倣ひながら、教訓の意を寓した戲作が流行したのは卽ち談義物である。談義物の中で最も古く且つ代表

的なものは、寶暦二年に刊行せられた靜觀房好阿の作『當世下手談義』五册である。靜觀房好阿は本名を山本善五郎と云ひ、もと兩國橋の邊で淡雪豆腐を賣る日野屋の主人であつたが、店を他に讓り、其の附近で手習師匠をする傍、戲作を試みたのであると云ふ。（水谷不倒氏著『草雙紙と讀本の研究』一二九頁參照）此の書は「工藤祐經が靈芝居へ傳言せし事」以下七條の教訓諷刺の意を寓した興味本位の話を收めたもので、當時大いに好評を博したので、引續き其の續篇の『教訓續下手談義』（五册寶暦三年刊行）を發表した。かくて靜觀房の談義物が世に流行するにつれて、他の作者からも其の作風に倣つたものが續々刊行せられて、所謂談義物の流行を見るに至つた。即ち伊藤單朴（本名伊藤半右衞門）の『教訓雜長持』（五册寶暦二年刊行）及び『錢湯新話』（五册寶暦四年刊行）、嫌阿彌佛の『當風辻談義』（五册寶暦三年刊行）臥竹軒の『下手談義聽聞集』（五册寶暦四年刊行）、止藏坊の『當世花街談義』（五册寶暦四年刊行）、墮落助の『禁現大福帳』（五册寶暦五年刊行）、柳堤房皆阿の『花菖蒲待乳問答』（同上）以下類書が年々刊行せられた。此等の戲作を順次に見て行くと、滑稽諷刺の中に教訓を説いた作品が、漸次教化を離れて滑稽本に移動して行く徑路を窺ふ事が出來る。かくて寶暦十三年に現れた風來山人の『根南志具佐』『風流志道軒傳』などになると、諧謔を專らとする作品となつてゐる。



當世下手談義挿繪

風來山人

風來山人は小說に滑稽本の一分野を開いた功勞者である。通稱を平賀源内、名を國倫(くにとも)と云ひ、號を鳩溪・風來山人・天竺浪人・紙鳶堂と云ひ、淨瑠璃作者としては福内鬼外の號を用ひた。讃岐志度浦の人で、父は高松藩の家老笠井内記に仕へた足輕であつた。源内は幼少の頃から奇才があり、物頭役眞田宇右衛門に仕へ、其の斡旋で藥園の足輕となつた頃から、本草學に志してゐた。やがて青雲の志を懷いて郷里を出で、江戸大阪次いで長崎に遊學し、此の間に儒學國學蘭學を修め、特に本草窮理に心を潛めた。其の後再び江戸に出た時、幕府の醫官田村元雄に就いて物產學を研究し、寶曆頃元雄と共に湯島に於て我が國最初の物產會を開いた。次いで寶曆十二年には自ら會主となつて物產會を開き、三十餘國の出品二千餘點を錄して『物類品隲』(六卷寶曆十三年刊行)を著した。是より先源内は高松侯に認められ、其の扶持を受けてゐたが、事情があつて寶曆十一年に之を辭して以來は仕官の途を塞がれ、加之才學に秀でたのに任せて人に取り入る事に妙を得てゐた爲に、師友に忌まれて遂に立身の機會を失つた。源内は物產學に通じてゐた外に、蘭學によつて得た科學的知識を應用して、電氣機械・寒暖計・懷中鏡・火浣布・源内櫛・金唐革・紅革などを發明考案した。併し一般社會は却つて彼を山師と稱し、其の考案に成つたものも徒らに婦女の玩弄物や見世物に利用せられた。源内が滑稽諷刺を宗とする戲作や淨瑠璃を書いたのは、世に容れられなかつた不平鬱憤を晴らす爲であつた。かくて晩年には一種の偏執者となり、遂に安永八年に殺人の爲に獄に下され、其の年の暮に獄中で病歿した。時に享年五十一であつた。(一に五十七歲又は四十八歲とも傳へられて居る。)

根南志具佐

『根南志具佐』（半紙本二編十巻）の前篇は寶暦十三年後篇は明和六年に刊行せられた。前篇は寶暦十三年六月に女方の俳優荻野八重桐が隅田川で溺死した事件を脚色し、後篇は明和四年四月に病歿した市川雷藏（栢車）と、翌年五月に早世した坂東彦三郎（二代薪水）の二人の事を結び付けて書いたのである。卽ち前篇では閻魔王が名優瀨川菊之丞の繪姿を見て其の美貌に迷ひ、龍神配下の水虎に命じて地獄に召寄せさせる事にしたのを、八重桐が聞いて師匠の身代りになる爲に入水した事にしてゐる。而して後篇では閻魔王はなほも菊之丞の事を忘れかねて、自ら娑婆に現れて墮落してゐると、雷藏が其の場に飛び込んで、家の荒事で閻魔王以下十王を散々に蹴散らすといふ趣向を立ててゐる。此の作は當時世間に取沙汰のあつた名優の死を取入れ、而も遊里劇場寺院に亙る遊蕩的な世相を、皮肉に諷刺した爲に忽ち民衆の興味を惹き、前篇は三千部の賣行を見たと稱する程の大當りであつた。

風流志道軒傳

『根南志具佐』の發行書肆は此の作の好評に利を占めたので、更に源内を動かして同類の戲作『風流志道軒傳』（半紙本五卷）を寶暦十三年に刊行した。『根南志具佐』は當時辻談義で名高かつた深井志道軒の自著『元無草』の題號に倣つたのであるが、此の作品は更に志道軒を利用して、滑稽の中に諷刺を含めた架空的な物語としてゐる。卽ち淺草觀音の申子として生れた深井淺之進は、父母の意志によつて出家したが、風來仙人の勸めに從つて、人情を究める爲に江戶を始め諸國の遊里を巡つた後、海を渡つて大人國・小人國・長脚國・長臂國・穿胸國などの異鄕を巡遊して唐土に渡つた。偶乾隆帝の命を受けて、富士山の雛形を取り寄せる爲に歸國する途中、女護が島に漂著して女郞にはあらぬ男郞となつて物思

ひをして居ると、忽ち風來仙人が現れて、今は既に八十歳にもなつてゐる淺之進を江戸に連れ歸つた。それが淺草寺の境内で辻講釋をしてゐる志道軒其の人であると云ふのである。さて志道軒は姓を深井氏、名を榮山と云ひ、もと知足院の僧であつたが、僧界の墮落を見て悟る所があり、淺草寺の境內に現れて辻講釋を始めた名物男である。風來山人は、寺から出で僧侶や女を罵倒した志道軒と、意氣投合する所があつて此の作をなしたのである。從つて此の書中には至る所に世相に對する彼の不平憤懣を洩らして居る。

文例

其外の國々には、家業を知らぬうてんつ國、髮は本田に銀ぎせる、短羽織に日和下駄、淨るり三絃座敷藝、お花といへる地色に打込み、只遊ぶ事を第一とす。しかるに此國折々は大水出でて、親の代より讓りうけし家業株、町屋敷諸道具、衣類なんどを押流され、火の降ること度々なり。又その隣國にきやん島といへるあり。神儒佛の教もなく、からだはしぼり染のごとく、はりこみといふ網にて、あくたいといふ魚を取つて肴にし、大酒を呑んできほひ歩行を業とす。又おそろしき國あり、其名を愚醫國といひ、又藪醫國ともいふ。此國の人みな頭を丸め、折に總髮なるもあり。學問を表にかざり人の病を直す事を業とすれども、近年甚だ下根になり、書物を見れば目の先くらみ、尻の下より火焰もえ出で、暫時も學問することならず。只世間功者にとばかり心懸け、輕薄を常とし、てれん追從の妙術をきはめ、羽織は小袖より長く、竹輿のすだれは息杖よりもふとし。牽頭媒屋敷の賣買、天窓をふり立てかけまはり、見え第一の藥箱も、銀金具はかがやけども、中の藥は吟味もせず、牛膝は牛の膝と覺え、鶴虱には鶴の虱を尋ぬるといふ古人の詞に違ひなき、笑止

千萬なる國にぞ有りける。又四角四面なる國あり、其名をぶざ國といひ、又しんござ國ともいふ。此國の人面大にして國なまりをいひちらし、他國より來し者に横柄をいへば能き事と心得、しつぶかくして女郎にきらはれ、陰で笑はるゝを知らざるほど愚なる國なり。又いかさま國となんいへる所に到れば、此國の人寄集まり、舟に乘て漕出し、樗蒲一島といふ島へ連行き、目の一より六ツある猛獸に喰付かせて、裸にせんと謀りければ、淺之進早々にぞ逃歸りけり。（風流志道軒傳　卷之四）

『風流志道軒傳』に描かれてゐる異郷巡りの話は、在來の地獄巡り極樂巡りの趣向を更に擴張したものであるが、此の奇拔な趣向は後の多くの作品に摸倣せられた。卽ち滑稽本には遊谷子の『異國奇談和莊兵衛』（四卷安永三年刊行）、深井某の『異國再見和莊兵衛後編』（四卷安永八年刊行）、笑止亭の『異國風俗笑註列子』（五卷天明二年刊行）等がある。又馬琴の讀本『夢想兵衛胡蝶物語』は遊谷子の『和莊兵衛』を粉本とした作である。風來山人の滑稽本にはなほ市井の瑣事を題材とした『放屁論』（前後二編）、『天狗髑髏鑑定縁起』、『飛んだ噂の評』、『力婦傳』（以上各一冊）等があつて、何れにも彼の奇才を發揮してゐる。此等は彼の洒落本『里の苧環』『太平樂卷物』『蛇蛻青大通』等と共に、門人が刊行した『風來六々部集』（四卷寛政九年刊行）に收められてゐる。

風來山人等の影響を受けた初期滑稽本の作者の中で注意すべきは、狂歌師の平秩東作、黄表紙作者の朋誠堂喜三二、洒落本作者の山東京傳、風來山人の門人萬象亭などである。平秩東作（立松懷之）は明和二年に『水濃往方』五冊を刊行し、安永九年に粥腹得心の戲號で『當世阿多福假面』一冊を發表してゐる。前者は別名を「近代隱逸傳」と云ひ、七人の隱者の生活を談義物の作風によつて書いたものであ

る。而して後者は戯名に貝原篤信を聞かせてゐるやうに、益軒の『大和俗訓』を下世話に砕いたものである。即ち醜婦の下女お福が主家を再興した苦心に基づいて、婦女の徳を說き立てる事を滑稽交りに綴つてゐる。此の二つの作品は朋誠堂喜三二の『古朽木』などと共に、談義物から滑稽本に移る徑路を最もよく示して居る。『古朽木』は其の扉に「頭は猿智恵に下手談義を學び、尾は口がましく根無草を慕ふ」とある通り、『下手談義』の趣向を取り、『根南志具佐』の架空譚に倣つた作であつて、其の間に黄表紙に屢取扱はれた桃太郎・かち〳〵山・花咲爺などを結び附けてゐる。

京傳の滑稽本

京傳の黄表紙洒落本讀本等の作に就いては既に述べたが、天明寛政頃には滑稽本の方面にも縱橫の才を揮つてゐる。其の主要な作は『指面草』『百人一首和歌始衣抄』『小紋新法』『小紋雅話』『新造圖彙』『奇妙圖彙』などであつて、畫は何れも自作である。

指面草

『指面草』（一冊天明六年刊行）は黄表紙の名作『江戸生艶氣樺燒』を發表した翌年の刊行であつて、彼の滑稽本の代表作である。其の梗概は――子安觀音が晝寢の間に、傍に置いてゐた申子の子胤箱を引つくり返した爲に、附けて置いた符牒が混亂して以來、子を授けられた家々に家風に相違した子供が產れた。かくて何處の家庭でも親の歎きを見たが、偶其の中の二人の親が、金龍山の觀音に詣でて通夜をしてゐると、夢に三十三體の菩薩が現れて、一切衆生の子胤を間違へたのは皆方便である事を告げ、やがてそれぞれの魂を入れ替へてくれたので、何れもめでたく榮えた――と云ふのである。題名は俗に淸水觀音の詠歌と傳へてゐる「なほ賴めしめぢが原のさしも草我世の中にあらむ限りは」(新古今集釋敎歌)に因つたもので、作中にも艾や灸の事が散見する。此の作は黄表紙に屢見る

不調和から起る滑稽を基にし、是に八文字屋本の氣質物の趣向を取入れたのであつて、京傳の奇才を發揮してゐる。次に『百人一首和歌始衣抄』（一册天明七年刊行）は翠幹子（芝全交）の『百人一首戲講釋』に倣つて、百人一首の中から十八首を拔き出して洒落本風の註釋を施した作で、形式はすべて和歌註釋書に擬してある。『小紋新法』（一册天明六年刊行）『小紋雅話』（一册寛政二年刊行）は當時流行した小紋染に刺戟せられて、見立の洒落滑稽を自畫と註とで示した作であり、『新造圖彙』（一册天明九年刊行）と『奇妙圖彙』（一册享和三年刊行）は洒落と滑稽を宗とする圖案に輕妙な註を加へたもので、京傳の畫才と奇智を見るべき佳作である。『小紋新法』以下の四部は安永天明期に狂歌師を中心に流行した見立作即ち寶合に倣つて、こじつけの珍趣向を洒落本に應用したもので、京傳以外の作品には一拂齋（芝全交の門人 芝甘交の別號）の『人遠茶懸物』（一册天明六年刊行）竹杖爲輕（萬象亭）の『畫本纂怪興』（二册寛政三年刊行）等がある。



新造圖彙

道中記地誌形式の作

初期の滑稽本には道中記や地誌の形式に倣つて、人生を滑稽に寫した作品がある。其の最も古いのは鈍苦齋の『人生一世善惡兩道中獨案内』（一册寶暦六年刊行）であつて、名の示す如く人倫五常の道を旅して、隱居所安樂寺に至る人生の正道と、其の脇道とを道中案内記風に書いてゐる。此の作品の趣向に倣つたのは萬

象亭の『當世導通記』（一冊天明二年刊行）である。田舍に生れた息子が通人になつて放蕩の末、親に勘當せられるまでの徑路を道中記に擬した作であつて、後の滑稽本に影響する所が多い。右に擧げた道中記風の戲作に倣つて、地誌まがひに書いた作に多羅福孫左衛門の『無彈砂子（むだすなご）』（一冊天明六年刊行）がある。題名は俳人菊岡沾凉の著『江戸砂子』（八卷享保十七年刊江戸の名所舊蹟誌）の捩りである。此の書は年中行事服裝食物遊里音曲遊戲などの雜事を、地名に擬した正月の里・稻荷山・雛村が崎・松魚が浦などに附會して、洒落滑稽を列ねた作である。作者の本名は詳かでない。

上方の滑稽本

以上述べたのは安永天明期に江戸に現れた初期の滑稽本であるが、當時上方に於ても銅脈先生の『片假名世醉記』（一冊安永元年刊行）『針の供養』（五冊安永三年刊行）や、睟川子（西村定雄）の『徒然睟が川（すゐがかは）』（五冊天明三年刊行）其の後篇『ままの川』（四冊天明五年刊行）等が刊行せられて居る。此等は黃表紙洒落本の趣向を取入れた作である。かくて安永天明期には上方にも滑稽本が行はれたが、寛政以後其の中心は江戸に移つて、一九や三馬によつて代表せられる本格的滑稽本が盛に流行するやうになつた。

二　十返舍一九

滑稽本隆盛期

是までに述べた初期の滑稽本は、主として半紙本の短篇であつたが、享和二年に一九の『東海道中膝栗毛』初篇が中本仕立で刊行せられて以後、中本の長篇が續々出版せられて、滑稽本の隆盛期となつた。中本の滑稽本は『當世下手談義』の系統を引いた滑稽諷刺の文學が洒落本に流れ込み、それが遊

里描寫の埒外に出た萬象亭作『田舍芝居』（一〇八五頁參照）を魁として起つた。『田舍芝居』は初め小本として出版せられたが、享和元年の再版では中本に改められ、翌享和二年には『道中膝栗毛』初篇が同じく中本として刊行せられたのであつて、是より滑稽本は此の形を襲ふやうになつた。

十返舍一九は本名を重田貞一（さだかず）、通稱を與七（或は餘七）と云つた。一九と號したのは幼名の市九を取つたのであり、十返舍と云つたのは、大阪に居る頃志野流の香道を學んだ關係から、黄熟香の十返しに因んだのである。別號を十遍舍・十偏齋・醉齋などと稱した。明和二年に駿河の府中に生れ、青年の頃江戸に出て小田切土佐守の屋敷に仕へてゐたが、侯が大阪町奉行を命ぜられた時に隨從してかの地に赴いた。其の後故あつて致仕し、大阪の或村木商の聟になつたが間もなく離緣して、寛政六年三十歲の時再び江戸に出て、通油町の地本問屋蔦屋重三郎の


一九署名

食客となり、家業の手助をしてゐた。翌寛政七年に石川雅望の腹案に基づき、蔦屋の註文によつて書いた黄表紙『心學時計草』（三冊自畫）は一九の處女作である。（是より先一九は大阪に居る頃、近松餘七の名で並木千柳・若竹笛躬等と淨瑠璃『小田の結納』『齋藤の色直』『木下蔭狹間合戰』（寛政元年道頓堀大西座上演）を合作してゐるが、當時は未だ二十四五歲であるから、恐らく助手を務めた程度であらう。）是より草雙紙の作者となつて次々に黄表紙を發表し、漸く其の名を知られたが、未だ當り作はなかつた。

文化元年出版の黄表紙『化物太平記』（三冊自畫）は岡田玉山の『繪本太閤記』に擬した作であるが、出版後間もなく『繪本太

閣記』と共に絶版を命ぜられ、一九は手鎖五十日、版元は過料に處せられた。これは當時幕府の禁令に「一枚繪草紙類、天正之頃以來之武者等名前を顯し書き候儀は勿論、紋所合印名前等紛敷認め候儀も決て相成間敷候」とあつたのに觸れた爲である。

其の後寛政の末に長谷川町の或町家の入夫となつたが、間もなく去つて更に妻を娶り、其の間に一女一男が生れた。女兒のマイは踊の師匠となつて藤間姓を名乘り、父の晩年に於ける生活を助けたと云ふ。一九は江戸に出てから八年の後、享和二年三十八歳の時『東海道中膝栗毛』の初篇を發表して喝采を博して以來、一躍して滑稽本の一大作家となつた。當時讀書子は既に黄表紙に倦怠を感じてゐた時であつたから、此の作は忽ち都鄙の人氣を集め、發行書肆の勸誘もあつて、爾來二十一年の久しきに亙つて其の續篇の稿を續けた。此の間に一九は黄表紙讀本合卷洒落本人情本などをも次々に發表してゐるが、主力を注いだのは『道中膝栗毛』であつて、天保二年には更に其の續々篇の初篇二篇合せて四冊を刊行したが、未完成の儘其の年八月七日に他界した。享年六十七であつた。

一九の性行

一九は生來滑稽を好み、狂歌狂文にも長じてゐたが、又浮世繪を能くした。彼の黄表紙の挿繪は殆ど自畫であり、『道中膝栗毛』の挿繪も八篇までは彼の筆である。其の他自畫を入れた著作は極めて多い。一九は滑稽本作者であり、又洒を嗜み、其の門人の多くは狂歌に長じてゐたから、後世は勿論當時に於ても、極めて剽輕な人物のやうに誤信して、種々の奇行や滑稽な逸話を附會してゐる。併し實際の性行は想像とは反對に極めて眞面目であり、又稍感情家であつた事は、種々の傳記資料によつて

立證せられる。彼が創作に對して細心の注意を拂つた事は、『道中膝栗毛』の續刊中常に讀者の批評に耳を傾け、又屢其の希望を容れて居るのを見て明かである。彼は元來學問の素養は無かつたけれども、著作の態度は眞摯であつて、必要に應じて古今の書籍を涉獵し、又『道中膝栗毛』の執筆中には屢旅行して實地を見聞し、材料の蒐集に努めたのである。要するに一九は滑稽文學者に例の多いやうに、作中の人物とは反對に、案外眞面目な性格の人であつたのである。

一九の著作

一九は三馬と共に滑稽本の二大作家と稱せられてゐる。此の二人の優劣は作風を異にしてゐるから遽に決し難いが、三馬の作品は一九に刺戟せられた所が多く、しかも『道中膝栗毛』は他の作者の間からも續々摸倣作が現れて、遂に滑稽本中の部類の稱呼にまでなつたのであるから、一九が文學史上に遺した功績は偉大であると言つてよい。一九は稀に見る多作家であつて、其の種類は黃表紙合卷滑稽本の外に、讀本洒落本人情本噺本等に及んでゐる。黃表紙は寛政七年から晩年までに百六七十部書いて居り、合卷は此の間に凡そ百九十餘種を發表してゐる。讀本は享和二年に刊行した『深窓奇談』以下十五六種、洒落本は享和元年刊行の『恵比良之梅』以下十五種、人情本は發生期の作として好評のあつた『清談峯之初花』以下六七種著作してゐる。滑稽本作者の一九に噺本の著作のあるのは寧ろ當然であつて、『落咄風通神』以下十七八種の作があり、最も得意とした滑稽本は其の『道中膝栗毛』以下に二十種許りを發表してゐる。かくて一九が終生に書いた作品は四百數十部に達してゐるが、黃表紙讀本合卷などは流行を追うた怪談物復讐物が大部分であり、其の他の作も概ね趣向の見るべきものがなく平

凡である。只注意すべきは洒落本である。一九が洒落本に筆を染めたのは『道中膝栗毛』以前である。其の描寫は動もすれば猥雜に墮ち、駄洒落に過ぎる缺點はあるが、洒落本末期の作者としては振鷺亭に次ぐものと言はれて居る。要するに一九は元氣旺盛であり、又相當の野心家であつた爲に、手當り次第に各種の作を試みたのであるが、滑稽本以外には成功しなかつたのであつて、彼が盛名を馳せたのは專ら『道中膝栗毛』によるのである。

東海道中膝栗毛

『道中膝栗毛』は正篇八編十八册と續篇十二編二十五册とから成る。先づ正篇に就いて述べる。正篇の題名は『東海道中膝栗毛』であるが、初め二册の内題には「浮世道中膝栗毛」と記されてゐる。其の編次及び出版年代は初篇一册享和二年刊自江戸至箱根　後篇二册享和三年刊自箱根至大井川　三篇二册文化元年刊自岡部至荒井渡　四篇二册文化二年刊自新井至桑名　五篇二册追加一册文化三年刊自桑名至伊勢參宮　六篇二册文化四年刊自伏見至京都　七篇二册文化五年刊京見物　八篇二册文化六年刊行大阪見物であつて、發端一册は文化十一年に追刊せられた。

正篇即ち『東海道中膝栗毛』は五十三次を背景とし、江戸人の野暮の標本とも見るべき二人の旅人を主人公として、行く先々で滑稽を演ずる樣を寫した一種の滑稽紀行文學である。其の記す所は、主人公が道すがら吐き散らす洒落輕口冗談狂歌狂句や、至る所で演ずる滑稽な悲喜劇の連續であつて、一貫した筋はない。試みに初篇の內容を言へば、——神田八丁堀に獨住するのらくら者の彌次郎兵衞と居

初篇の梗概

候の北八が、伊勢參宮と京大阪見物を志して東海道中の旅に出る。支拂の滯つてゐる酒屋米屋の前を通る時に、二人は早や狂歌狂詩を口ずさみ、品川では狂句の附合をやる。六郷の渡を越えて萬年屋で晝支度する時、北八は鯉の瀧上りの懸物を見て、「おらア又鮒が素麵を食ふのかと思つた」と冗談を云

ふ。茶店を出ると大名行列に逢ひ、先拂奴大名侍などを見て惡洒落を言ひ、やがて戻り馬に乘つて馬方同士が語る野鄙な情話に興ずる。神奈川で馬を下りると、茶屋女に呼び止められて休息し、次いで伊勢參りの子供に引掛つて一杯喰はされる。日も傾いた頃二人は親子を裝つて戸塚の驛の新しい宿に上ると、意外にも開店祝のもてなしに逢ひ、種々の滑稽を演ずる。翌朝其の宿を出ると忽ちちよんがれ坊主に强請(ねだ)られ、彌次は一文遣る筈のを誤つて四文與へて釣錢をくれと云ふ。次いで藤澤の茶店で休んでゐると、旅人が江の島への道を尋ねたので、二人で散々に揶揄ひ、やがて茶店の老婆が誤つて炭火の附いたままの團子を出すと、彌次は之を北八に薦めて火傷をさせる。大磯からは退屈凌ぎに互に謎をかけ合つて行き、小田原では北八はういらうを餠のつもりで買つて、彌次の狂歌の材料となる。やがて宿に著くと早速言葉尻の咎め合を始めるが、北八は風呂の底を踏み拔いて大失策を演じ、其の直し賃に二朱を取られて塞ぎ込み、彌次は女中に二百與へて好意を期待してゐると、北八の奸計に妨げられて失敗に終る。明くればいよいよ箱根八里であつて、湯本の土産店では彌次がやぶにらみの娘とは知らずに、自分の顏ばかり見てくれる嬉しさに、三百の品をうかうかと四百で買ひ取つて大笑となる。

趣向の典據

『道中膝栗毛』全體の趣向は大體右に述べたやうなものである。此の作品の趣向は元來滑稽の才を有した一九の獨創と、旅行による實地の體驗見聞に基づく所が多い事は言ふまでもないが、過去の作品から受けた影響も亦少くない。卽ち長い驛路を舞臺とし、道化方とも云ふべき二人に種々の滑稽を演



東海道中膝栗毛（第三篇下）

じさせ、又方言を寫し狂歌を挿んで、滑稽を助長してゐるのは、かの假名草子の『竹齋』及び其の影響を受けた『東海道名所記』を摸倣したのである。又此の作品に名所舊蹟の由來や、名物乘物里程などの說明を挿入してゐるのは、當時盛に刊行せられた各地の名所圖會や道中記類の影響を受けてゐるのである。『道中膝栗毛』が滑稽紀行文學の形式を具へたのは、主として此等の影響によるのであるが、此の作品の特質は彌次郎兵衞北八兩人の氣質と、それから起る種々の滑稽にあるのであつて、此の點から言へば洒落本の系統を引いて居るのである。是より先洒落本界には既に述べたやうに、田舍の人情風俗などを田舍言葉のをかしさを中心として寫した『田舍芝居』及び其の摸倣作の『田舍談義』が現れ、又東海道

筋の驛々に於ける遊女や茶屋女の滑稽を書いた作には、『而美多勤身』が出版せられて居る。續つて一九の著作を見ると、『道中膝栗毛』の初篇を公にした前年には、『惠比良之梅』『滑稽野郎玉子』『青樓夜話色講釋』等の洒落本を刊行し、翌年には更に同類の作を九種許り出してゐる。今此の二つの事實を綜合して考へると、一九が『田舍芝居』以下の洒落本から滑稽本への過渡期の作品に刺戟せられて、江戸人の野暮の代表と見るべき二人の人物を中心に、東海道中の滑稽を洒落本の態度によつて寫すに至つた徑路は自ら明白である。

此の作品の興味は、大抵の讀者が體驗してゐる遊戲氣分の旅行を取扱つた點と、「旅の恥はかき棄て」を信條とする無邪氣な滑稽を連續的に寫してゐる點とにある。此の二つの中で重きをなすのは勿論後者であるが、數々の滑稽の趣向は、限りある作者の創意にのみ依る事は到底不可能である。從つて一九は、趣向の上には能狂言や、八文字屋本の氣質物や、新古の落語などから材料を取つて、其の筋の一部を適當に變へて用ひてゐる。而して其の滑稽の動機は、大抵利慾と肉慾とに基づくのであるから、道義的批判を以てすれば、破廉恥不道德の謗を免れないものが多い。併し彌次北八は教養を缺き、思慮が淺く感情に走り易く、而も極めて樂天家であつて、江戸人としては缺點の多い凡人の標本であるから、其の失敗や恥辱や惡戲や惡洒落は、結局一時の笑として濟まされるのである。此の作が初篇以來都鄙に亙つて非常な好評を以て迎へられたのは是が爲である。

六十ぐらゐのかつぱをきて、ふろしきしよつたるおやぢ、此みせ先にたちとまりて、親仁「モシちつとものを問ますべい。江の島へはどういきます。彌「お

めへえのしまへいきなさるか。そんならこりよヲまつすぐにいつての、遊行さまのお寺の前に橋があるから、北「ほんに橋といやア、たしかそのはしの向うだつけ、いきな女房のある茶屋があつたつけ。彌「ソレソレ、去年おらが山へいつた時とまつた内だ。アノかゝアは江戸ものよ。北「だうりで氣がきいてるらア。親仁「モシモシ、其はしからどういきます。彌「その橋の向うに鳥居があるから、そこをまつすぐに、北「まがると田圃へおつこちやすよ。彌「エ、手めへだまつてるろへ。ソノみちをずつと行と、村はづれに茶屋が二軒有ところがある。北「ほんにそれよ。よくくさつたものをくはせるちや屋だ。彌「ソリヤア手めへのいふのは右側だらう。左側の内はいゝはな。去年おらがいつた時、ぴち〳〵する鯛の燒もの、それに大平が海老のはね出るやつに、玉子とくわると大椎茸に、そして、親仁「モシ〳〵、わしはそんなものはくはずとようござる。そこから又どういきます。彌「そこをずつといきあたると、石の地藏さまがありやす。北「アノ地藏さまは瘡の願がきくさうだ。おらが方のへたなすがあれでなほつた。彌「ほんに瘡といやア、新道の金箔屋のたぬ吉めは草津へいつたつけがどうしたしらん。北「あれは大福町に所帯をもつてるらア。彌「大ふく町といふはどこだ。北「大ふく町はおいらが通りをまつすぐに當座町へ出て、判取町から店賃町を通つて、地代屋敷の算盤ばしをわたると、そこが大福町だ。親仁「そんなことよりやア、江の島へゆく道ををしへてくんさい。彌「ほんにさうだつけ。其地藏さまから大ふく町をまつすぐにいくとの、親仁「えのしまへいくにもそんな町がござるか。彌「イヤ〳〵、こりやア江戸の町だつけ。親仁「エ、この衆は、おえどの事は聞申さない。らつちもない衆だ。ドレ先へいつて聞きますべいトぶつ〳〵こごとをいひながら行過る。（道中膝栗毛初篇）

膝栗毛の趣向は既に正篇に盡きたのであるが、世評は猶未だ衰へなかつたので、發行書肆は更に一

九を勵まして引續き『續膝栗毛』を執筆させた。『續膝栗毛』の初篇二册が刊行せられたのは文化七年作者四十六歳で、十二篇を出して完結したのは十年後の文政五年である。續篇は彌次郎兵衛北八が大阪から讃岐の金毘羅に詣で、次いで宮島見物に出掛け、それより引返して木曾街道六十九次の長途の旅行を經て善光寺に參詣し、更に上州草津温泉に浴して江戸に歸著するまでの、滑稽な旅行を長々と敍してゐる。其初篇二册は「金毘羅參詣」角書を示す以下同樣、二篇二册は「宮島參詣」、三四五六七篇合計十册は「木曾街道」、八篇二册は「從木曾路善光寺道」、九篇二册は「善光寺道中」、十篇二册は「上州草津温泉道中」、十一十二篇合計五册は「中山道中」である。『續膝栗毛』は作者自らも其の初篇の序中に、「趣向糟粕となりたれば覺束なし」と告白して居るやうに、珍らしい趣向は既に用ひ盡した後であるから、創意はいよ〳〵乏しくなり、至る所に他人の作の蹈襲や二番煎じがあり、而も餘り引延ばした爲に讀者も漸く飽きて來た。要するに膝栗毛の見るべき部分は正篇であつて、續篇は其の惰力で行はれたに過ぎない。續篇の價値はとにかくとして、正篇の初篇發表以來前後二十年に亙つて、よく人氣を持續する事が出來たのは、全く驚異に値する事であつて、作者は終篇の出版に當つて「戲作の書のかばかり編數をかされ出せる例なく、予が生前の悅び偶中の祥なれば、めでたく筆を採おさめぬ」と記し、又馬琴は『江戸作者部類』に「げに二十餘年相似たる趣向の册子の、斯くまでに流行せしは前代未聞のことなり。只是一奇といはまくのみ」と述べて居る。

膝栗毛の摸倣作

さて『道中膝栗毛』の滑稽諧謔を盡した趣向は、當時最も好評を博したので、早くから其の摸倣作が

現れた。即ち感和亭鬼武は文化二年に『有喜世物眞似舊觀帖』（三編三冊自文化二年至文化六年刊行）を發表して膝栗毛の趣向を逆に田舍者の江戸見物の滑稽な有樣を寫して居る。又翌文化三年には、京都に貧道人（本名未詳）の作『膝栗毛續篇』（二冊）が現れて（膝栗毛五篇の先を越して尾張宮の宿以西の旅を書いたもの）一九を狼狽させた。（膝栗毛第五篇附言參照）其の後文化四五年頃になると益類書又は摸倣作が續々現れたので、一九は膝栗毛の聲望を獨占する爲に、餘力を以て江戸近郊の遊戯的小旅行を題材とした諸作を次々に發表した。即ち文化六年には江の島開帳を當込んで『滑稽江の島土産』（三編五冊自文化六年至七年刊行）を出し、其の後引續き『串戯教訓六阿彌陀詣』（三編五冊自文化八年至十年刊行）、『滑稽諺言大師めぐり』（三冊文化九年刊行）、『滑稽誹語堀の内詣』（三冊文化十三年刊）、及び其の後篇として『雜司ケ谷紀行』（三冊文政四年刊行）等を續刊した。此等の趣向には『道中膝栗毛』に似た所が多く、興味の索然たる事は『續膝栗毛』と同じである。

膝栗毛發端

一九は膝栗毛の續刊中にも屢讀者の註文を容れてゐるが、殊に『續膝栗毛』の第五篇を出版した文化十一年には、『道中膝栗毛發端』一冊を發表した。此の書は彌次北八の江戸出發以前に於ける素性と、神田八丁堀の裏店住ひの滑稽を寫したもので、作者は序に「彌次郎兵衛喜多八の稱、異國の龍馬にひとしく、千里の外に轟たれば、渠等が出所を問ふ人有。依て今その起る所を著し、……馬の耳に風もひかさぬ趣向のとつて置を棚からおろして如斯」と記してゐる。併し此の一册も亦畢竟蛇足の感を免れない。

續々膝栗毛

一九は又晩年に至つて書肆涌泉堂の需によつて『續々膝栗毛』（二編四冊天保二年刊行未完）を書いた。是は膝栗毛の續篇ではなく、彌次北八二人が長い旅行を終つて、江戸に歸つた後の長屋住ひの滑稽な生活を

寫したもので、趣向から見れば發端の延長に過ぎない。而して此の作には、發端及び既刊の諸作と相似た趣向が多く、又當時好評を博した三馬の『浮世床』や、瀧亭鯉丈の『滑稽和合人』や『花暦八笑人』などの影響をも受けてゐて、創意を缺いて居る。かくて一九は晩年に至るまで戯作の筆を擱かなかつたが、膝栗毛正篇以外には殆ど新意を出す事がなく、晩年に近づくに從つて摸倣癖はいよ〳〵加はつて行つたのである。

膝栗毛の影響

一九は三馬や鯉丈等の先輩として彼等に多大の影響を與へ、殊に其の代表作の『道中膝栗毛』は、滑稽本の全盛期を開いた劃期的作品であり、且つ享和から明治初年に至るまで、六七十年間に亙つて流行した膝栗毛物の鼻祖であつて、文學史上極めて重要な位置を占めて居る。此の作品の續刊中に多くの摸倣作が現れた事は既に述べて置いたが、一九の後には二世一九を名乘つた十字亭三九の綠井鳳助が『續々膝栗毛』の三篇を著し、同じく二世一九（實は三世）と稱した九返舍一八（三亭春馬）は『奧羽一覽道中膝栗毛』を書き、又狂訓亭主人（爲永春水）は『近郷道中膝栗毛』を出版した。此の外一九の後塵を拜した群小作者の間から、何栗毛・何詣・何參・何紀行・何行脚など稱する摸倣作が引き續き出版せられて、明治初年の假名垣魯文の作『西洋道中膝栗毛』に及んだ。『道中膝栗毛』の影響はなほ歌舞伎や版畫などにも及んでゐる。即ち此の作の趣向を歌舞伎に取入れた最初の脚本は、鶴屋南北作の『獨道中五十三驛』（文政十年六月河原崎座上演）であつて、爾後怪談狂言滑稽所作事などに脚色せられて、此の方面にも膝栗毛物の一類を見るに至つた。又浮世繪の方面では、廣重の名作で保永堂版の「東海道五十三次」や、北溪の筆に成つ

た「五十三次北齋道中書譜」其の他の風景版畫の流行に刺戟を與へてゐる。以上述べた所によつて『道中膝栗毛』が後の文藝に多大の影響を與へた事を知るべきである。

三　式亭三馬

一九と伯仲の間にある滑稽本作者は式亭三馬（安永五年生 文政五年歿）である。本名を菊池久徳、字を泰輔（或は太輔）通稱を西宮太助と云つた。式亭三馬と號した由來に就いては二三の説があるが、『客者評判記』の序（自笑の文）に「花の御江戸に其名も高き式亭三馬叟は云々」とあるから、彼の歌舞伎趣味から式三番をもぢつたものと見る説に從ふべきであらう。別號を本町庵・四季山人・遊戲道人・滑稽堂などと稱した。三馬は板木師菊池茂兵衞の嫡子で、安永五年に江戸淺草田原町三丁目に生れた。茂兵衞は八丈島爲朝明神の神主菊池壹岐守の妾腹の子であると傳へられて居る。（『古今百馬鹿』巻末に記された門人春亭三曉の説）通稱を西宮太助と云つたのは、茅場町の地本問屋西宮新六と親しい縁故があつたので、其の名前を貰つたのであると言はれて居る。馬琴の著『江戸作者部類』によれば、三馬は幼少の頃西宮新六に仕へ、やがて手代となり、年季が明けてから山下御門外の書林萬屋太次右衞門の婿養子になつたが、妻が早世した爲離縁して石町の裏屋に住み、後に大阪の某から賣藥の店を委ねられて本町二丁目に開店したと云ふ。これと略同じ事が活東子の『戲作者六家撰』にも記されてゐるが、最初の奉公先を本石町の書肆翫月堂としてゐる。なほ三馬の『式亭雜記』に、妻の兄翫月堂とあるのによれば、其の妹を妻としたらしく思はれる。要するに三馬

は父が板木師であつた關係から、幼年の頃から書肆に奉公し、後に本町二丁目に賣藥店を開いて、彼が著作中に頻りに宣傳した仙方延壽丹（京都の田中宗悦の調劑）白粉下江戸の水、其の他の賣藥化粧品などを商ふ傍著作に從事したのである。彼は以上のやうな閲歴の人であるから、書肆に奉公してゐた頃戲作淨瑠璃歌舞伎等に關する書に親しんだ以外には、特に學問をしてゐないのであるが、かなりの藏書家であつた事は、彼の藏書印のある雜書が傳存してゐるのによつて察せられる。三馬は戲作の外に狂歌狂文を能くし、書畫に巧みであり、又書物や挿繪の體裁に新工夫を案出する才を有つてゐた。

三馬は十六七歳の頃から戲作者を志してゐたが、寛政六年十九歳の時には、既に黄表紙の初作『天道浮世出星操』及び『人間一心覗替繰』を刊行した。其の後引續き黄表紙を書いたが、寛政十一年には當時評判の『俠太平記向鉢卷』（三冊畫工歌川豐國）を出版した。此の作は其の前年に起つた火消人足の喧嘩を題材としたものであるが、偶よ組の人足が憤慨して、作者及び發行書肆西宮新六の住宅を破壞したので表沙汰となり、人足等は入牢し、新六は過料、三馬は手錠五十日に處せられた。併し此の事件以來三馬の名聲は大いに揚つたと言はれて居る。三馬は初め喜三二・京傳、殊に芝全交の作風を慕つてゐたが、文化以後は流行を追うて敵討物を書いた。文化三年に『雷太郎强惡物語』を出版して、自ら合卷の創始者と稱した頃から、歌舞伎又は古淨瑠璃の筋を組み合せた複雜な筋の合卷を次々に發表し、又文化の初頃には一時馬琴に對抗して讀本を書いた。三馬の黄表紙は二十四五部、合卷は凡そ八十種、讀本は四種あるが、何れも一流の作者の壘を摩する事は出來なかつた。彼は又寛政十年に洒落本『辰巳婦言』、

同十一年に『傾城買談客物語』などを出し、次いで文化の初頃に『三人醉酊』『辰巳婦言二篇船頭深話』『辰巳婦言三篇船頭部屋』等を公にして、人情を主とする寫實的描寫を試みて居るが、洒落本は得意でなかつたからやがて滑稽本に轉向した。三馬の作品は百數十種あるが、不朽の名を成したのは『浮世風呂』『浮世床』以下二十餘部の滑稽本に因るのである。三馬は江戸に育ち江戸言葉に練達してゐたから、都會生活を穿つ事が得意であつた。殊に會話によつて人物を活躍させる事と皮肉な人生觀察とは彼の本領であつて、これが他の作者の追隨し難い特色となつてゐる。

三馬の性格

三馬は無口で愛敬がなく、從つて交際は上手でなかつた。加之神經質で氣むづかしく、又洒癖の惡い人であつたと傳へられて居る。彼は學者氣質を嫌ひ、又自分と性格を異にする人を遠ざけた。戲作者中では一九・烏亭焉馬・南仙笑楚滿人（爲永春水）、浮世繪師では歌川豐國と親しくしたが、京傳・馬琴とは相容れず、殊に馬琴を忌んで敵視してゐた。三馬の性格は右の如くであるから、其の滑稽は一九に比べて大いに趣を異にしてゐる。即ち一九は好人物であつたから、其の諧謔は朗かで無邪氣であるが、三馬のは奇警であつて、笑の蔭には皮肉な眼が光つて居る。

浮世風呂

三馬の滑稽本の傑作と稱せられるのは『浮世風呂』と『浮世床』である。『浮世風呂』は正しくは『諢話浮世風呂』（四編九册畫工北川美丸）と云ふ。其の初篇（二册）は男湯の卷で、一九の『東海道中膝栗毛』の初篇發表後八年の、文化六年に出版せられ、二篇（二册）は女湯の卷で同七年に、三篇（三册）は女湯の續きで同九年に、四篇（三册）は再び男湯の卷で同十年に刊行せられた。

初篇

初篇は九月半ばの朝湯の光景に始まつてゐる。まだ戸の開



浮世風呂前篇挿繪

かない中から中風病みの豚七が現れ、次いで二人の若者が來て豚七を揶揄つてゐると、大戸が開いて番頭と若者の間に無駄口が交される。七十許りの隱居が來る頃から客が追々多くなり、風呂屋の前を物賣托鉢などが通る。やがて子供を連れた男、夜遊から歸つた若者、藪醫者などが來て、種々の世間話が始まる。藪醫者は隱居を相手に病藥や俳諧や漢學の話をして無智を暴露してゐる。其の後に八兵衞と松右衞門とが來て地主の零落した話をし、三助は田舍言葉で山の芋が鰻になつた話をする。折から豚七は湯氣にのぼせて正氣を失ひ大騷となる。街頭では物賣の聲々がする。次は晝時の光景であるが、錢湯の閑散時であるから描寫も簡單である。併し江戸子氣質の老人と若者の警拔な洒落交りの會話があり、西

國者が桶に浸してあつた褌を、貸手拭と間違へて顔を洗ふ滑稽などがあつて面白い。以上上巻午後の光景になると、手習から歸つた子供が大勢來て、子供らしい喧嘩を演じ、生酔が來て番頭を揶揄つてゐる。二階では五六人の客が將棋に熱中してゐると、太吉の母が迎へに來て、遊びに耽つて家業を顧みない親泣かせの不孝者と叱りつける。浴室には五人連の座頭が來て滑稽な失策を演じ、生酔が散々に惡戯をしたり揶揄つてゐる。やがて生酔は勇み肌に喧嘩を吹きかけて追ひ出される。以上下巻

二篇三篇　二篇三篇の女湯の巻に現れる人物も亦男湯と同じく、中流以下の様々な階級職業に屬する女である。大體現れる順序に從つて擧げるならば、町藝者・料理屋の娘・子供を連れた年増女・上方の女房・多辯な女・嫁を連れた姑・乳母・子守・常磐津の師匠・小娘・剽輕な女・山出しの下女・國學に熱中する婦人・屋敷下りの女中や義太夫語りの女房等である。而して女湯に於ては男湯と異なつて、喧嘩口論惡戯立廻りなどはないから、客商賣の女が語る客や芝居の噂、老婆が話す嫁の惡口や信心の話、下女の口に上る主人の棚下しや夫婦喧嘩、少女の語り合ふ稽古事や遊戯の話など、主として對話を描寫し、之によつて家庭生活社會の裏面婦人の反面などを穿つて居る。第四篇は再び男湯に戻つて居るが季節は正月に

四篇　なつて居る。男湯の情景は既に初篇に大體描寫したから、此所では女湯と同じやうに會話中心の描寫を試みて、隠居の金錢に關する話、似而非俳諧師の俳諧地口の話、若隠居の遊蕩時代の話、老人の昔自慢などを次々に寫し、又背景を擴張して、街頭の光景や人事を比較的多く描寫して居る。

『浮世風呂』は右に述べたやうに、種々の人物の會話を中心に、彼等の日常生活の表裏を、平面的斷

面的に描寫したものであるから、動もすれば變化がなく單調に流れ易い。作者は此の弊から免れる爲に、風呂屋の前の情景や二階の人事を挿入したり、時間の推移による世相の變化などを寫して居る。併し單調を破り滑稽を助長する方法として最も屢試みて居るのは、正反對の人物事件を對照させる事と、特に變つた人物を登場させて、場面に變化を與へる事とである。例へばよい〳〵の豚七と血氣壯の若者との對照、氣短な江戸の八百屋と悠長な上方のけち兵衞との對話、上方女と江戸女との言葉爭ひ、饒舌で無駄口の多いお舌と、無愛想で無口なお苦との對話などは前者の例であり、豚七の上氣失神、西國者の粗忽な失策、五人連の座頭の滑稽、おだてられて大聲で唄ふ山出し女、肥つた下女の地響立てての轉倒、古ぶりの物學びなどする兒子と鴨子の對話、蕣茸に中毒した藥種屋苦九郎の亂舞などは後者の例である。

作者は『浮世風呂』の卷頭に、三笑亭可樂の落語に刺戟せられて、此の作を執筆したと記してゐる。これは事實であるか假託の言であるかは判然しないが、此の作品の滑稽な趣向が、噺本から得たものの多い事は、從來諸家が指摘した所である。由來三馬は既に述べた通り、滑稽本を書く前に、京傳に刺戟せられて洒落本を書いたのであつて、彼の滑稽本には京傳の黄表紙や洒落本の影響を見るのであるが、他の一面に於ては落語の影響をかなり多く受けて居る。落語の影響に就いて山口剛氏は、——噺本の中に『浮世風呂』の滑稽と同想のものを多く見るばかりでなく、落語家の話術が篇中の會話に應用されてゐることを指摘し得る。——と言つて居られる。(日本名著全集滑稽本集の解題參照)又高須芳次郎氏は、三馬の変

友中に落語を中興した立川焉馬や、三笑亭可樂及び其の門下の人々がある事を擧げて、三馬は落語家の行き方を小説の上に活用したのであると述べて居られる。（『爛熟期頽廢期の江戸文學』二八五―八頁參照）尤も落語や黄表紙の影響は此の作品に限らず、三馬の他の滑稽本にも認められるのであるから、此の事は姑く措いて、此の作品の趣向に及ぼした先行文學の影響に就いて記して置く。此の問題に關しても既に諸家によつて考證せられて居る。即ち此の作が種々な人物の出入する風呂屋を背景に取つたのは、寶曆四年刊行の伊藤單朴作『錢湯新話』、及び其の影響を受けた京傳の黄表紙『賢愚湊錢湯新話』（三册享和二年刊行）に倣つたのであると言はれて居る。尤も三馬が此等の作の趣向を採用した直接の動機としては、一九の『道中膝栗毛』の影響を認めざるを得ない。即ち三馬が此の作品の初篇を脱稿した文化五年には、一九の『道中膝栗毛』が好評の中に七篇まで出版せられてゐるから、一九が遊戯的旅行を背景としたのに對して、三馬は遊戯的社交場としての風呂屋を背景に選んだのであらう。此の事は田舍に生れて旅行の經驗を積んだ一九と、江戸に生れて一生都會生活を送つた三馬との閲歷の相違から考へても當然と思はれる。『浮世風呂』と『膝栗毛』との關係はなほ内容の方面にも認められる。即ち藤村博士は此の事に就いて、――田舍者が褌を貸手拭と間違へた滑稽は、膝栗毛で北八が越中褌を手拭と間違へて頬被りした失敗の類であり、二階で浴客が將棋に熱中してゐる條は、膝栗毛の鳴海の紋屋の亭主が同じ事に夢中になつてゐる話と似たものであり、又五人座頭の滑稽は、膝栗毛の盲の川渡りと類を同じうする。其の他人物の類似もあるから、摸倣とまでは云はぬが膝栗毛の影響の存する事は認められる。――と述べて

居られる。（『上方文學と江戸文學』二七四—六頁參照）尤も藤村博士も言はれたやうに、膝栗毛の影響は初篇に於て見るのであつて、二篇以下は三馬獨得の穿ちを主としてゐるのである。

さて『浮世風呂』に取扱つた人物は、既に述べたやうに、悉く中流以下に屬する老若男女であつて、それぞれ性格の上に何等かの缺陷を有つて居る。殊に風呂屋に於ては赤裸々の姿で現れるのであるから、其の言語動作は外面的にも既に滑稽の要素を含んで居るのであるが、作者は更に傍觀的な而も皮肉な人生批判の態度を以て、彼等の短所や社會の表裏を穿たうとして居る。從つて『浮世風呂』の滑稽は、個々の類型的な性格若しくは性癖の弱點の暴露から起る、微笑又は苦笑にあるのであつて、此の點は無邪氣な朗かな笑を感ずる膝栗毛と大いに趣を異にして居る。

會話の描寫

三馬は元來對話の精細忠實な描寫によつて、人物を紙上に躍動せしめるは勿論、言葉の癖によつて氣質性癖を描き分ける獨得の手腕を有したのである。從つて會話の描寫は三馬の作品の生命であるから、其の表現には周到な注意を拂つて居る。例へば子供の唄を

　おウ月さまいイくウつウ、十三ななつ。そりやまだ年ヤわアけへなア。

の如く記し、又物賣の聲を、

　「おやめあやめ引。「金時、湯出大角豆。「豆腐引。「蒲ア燒は能、かばやき。「瀬戸物燒繼引っ　やきつぎはごさりませんか。

の如き形式で記してゐる。假名や音符で表現し難い聲の大小や特色は、註に大聲・小聲・かんばしつた

聲・キイロ聲などと記し、或は「上方詞の江戸訛りはおつな所をひつぱつて云ふ也」「アイといふ返答をア、といふは、すべて少女の通り言也」の如き說明の註を加へ、又時としては讀方の注意を促す爲に、「此女かたことばかり竝べる故、よく〳〵ふりがなに氣をつけて讀み玉ふべし」と註してゐる。其の他特殊の言葉遣や、假名書きでは意味の通じない個所には左側に註を加へてゐる。かくの如く種々の方法を工夫して、言葉の癖や調子までも忠實に描寫しようとしたのは、三馬の著しい特徵であつて、彼の作品が言語史料としても尊重せられる所以である。以上述べた所は『浮世床』以下の諸作にも同樣に發揮せられて居る。

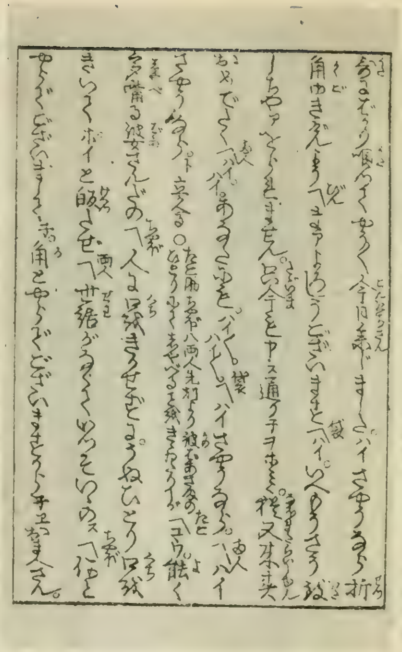
浮世床

『浮世風呂』が初篇刊行以來滿都の喝采を博したので、三馬は其の第三篇を發表する前に、更に背景を床屋に移して『柳髮新話浮世床』（二編五册畫工歌川國直）の初篇を書いてゐた。『浮世床』の初篇（三册）は文化九年の出版、二篇（二册）は同十一年の刊行である。此の作品の趣向は只背景が錢湯から理髮店に變つただけで、人物も略同じ階級の者であり、描寫の態度にも變りはない。併し床屋は錢湯のやうに、多くの客が落合つて話が混雜するやうな事はないから、前作に比して談話を複雜にし、且つ組織を秩序整然とする便があつた。尤も他の一面には、客は一人づつ變つて行くが、相手になる亭主と下剃は固定してゐるから、變化の妙を示すのには不便である。かくて一長一短を免れないが、作者獨自の會話の描寫はいよ〳〵洗煉せられて冗漫がなく、文章の上から見ると確かに前作を凌駕してゐる。此の作の部分的の趣向には、『浮世風呂』の類想があり、又膝栗毛や落語から取つた筋もあるが、屢川柳を引いて居るのは異な

る所である。三馬は既に述べたやうに、性格の相違から馬琴と衝突してゐたので、馬琴は『江戸作者部類』に於て、三馬の無學と狹量を罵つてゐるが、三馬は此の作中に馬琴の讀本に痛烈な攻撃を加へて居る。此の作品には瀧亭鯉丈が後を嗣いだ三篇三冊溪齋英泉畫文政六年刊があり、又『浮世風呂』の女湯之卷の例に倣つて、二世楚滿人爲永春水が書いた『青柳新話玉櫛笥』一冊文政九年刊行一名「女浮世床」があるが、殆ど見るべき價値はない。

表裏を穿つた作

三馬の滑稽本で最も著名なのは、右に解說した二部であるが、此の外になほ皮肉な穿ち又は諷刺的な描寫を獨立させた作品がある。『無而七癖酩酊氣質』三冊文化三年刊行『當世七癖上戸』歌川國直畫三冊文化七年刊『切拔繪本浮世七役早替胸機關』歌川豐國畫三冊文化七年刊『癖所謂癖物語四十八癖』國直畫四編四冊自文化八年至同十五年刊行『人間萬事虛誕計』國貞畫一冊文化十年刊



浮世床二篇卷下

『例之酒癖一盃綺言』豐國畫一冊文化十年刊『善惡表裏人心覗機關』國直畫二冊文化十一年刊行『古今百馬鹿』國直畫三冊文化十一年刊行等がそれである。此の中で『早替胸機關』は京傳の黃表紙『市川團藏的中狂言早業七人前』三冊享和二年刊行に倣つて、境遇の變化から起る言行の相違を、俳優の早替に擬して表現した作である。此の書は張附けた繪の開閉によつて、人物の變化を早替りで示すやうにした工夫が人氣を呼んで大當りであつたと云ふ。此の作品に類似してゐる

のは『人間萬事虛誕計』と『人心覗機關』であつて、前者には人間の虛と誠の二面を寫し、後者には人心の表裏兩面を穿つてゐる。（『人間萬事虛誕計』には鯉丈續稿の後篇二冊がある。天保四年刊行）

酒癖を描寫した作

右の三部よりも更に注意すべきは、醉人の性癖を皮肉に穿つた『酩酊氣質』『七癖上戸』『一盃綺言』等である。『酩酊氣質』は醉客を「かつぎ上戸」「あくたい上戸」「面白くない上戸」等十二種に分つて、其の性癖を自問自答の形式によつて描寫した作品である。次の『七癖上戸』は『酩酊氣質』が好評を博したので、更に腹立上戸・笑上戸・泣上戸等八種の癖を書いた作であり、『一盃綺言』は前記二作を承けて、更に酒客の性癖を會話中心に「わる口を吐てうれしがらす酒癖」「醉たる上にて愚痴ばかりいふ酒癖」「盃のとりやりのむづかしき酒癖」以下都合八つを描寫したものである。以上三部は酒を嗜んだ作者の體驗から成る作であるだけに、よく眞を穿つてゐる。殊に最後の作が最も勝れて居る。今獨白によつて人物を活寫した「盃のとりやりのむづかしき酒癖」の後半を抄出して置く。

大一座ゆゑ向から又一つさかづきをさす。「ヤ又お盃、ヤこれはくありがたい。エ、ト、ありがたいはありがたいなれども、一體此お盃は、まづどういたしたお盃だな。ヘエ、でござりますかな、夫はなるほどおもひざしありがたい。なれども權兵衞樣があがつて、それから又四郎樣がめちあがつて、三郎兵衞樣からあなたへ廻つたお盃なら、やはりお順に廻りさうなものでござります。おもひざしとお見出しにあづかつたは、千萬まことにありがたい。なれどもこれは、お順く、イエイエイエ、御覽、御覽の通り、千兵衞さんの方から只今まいります。お指圖ではなけれども、これはお順、ハイくでござりますかナ、さやうござらばお

性癖を穿った作

手もとを、拜、拜見、ハイハイ、でもござりませうが、まづく。」

酒癖の描寫から更に進んで、一般男女の性癖を穿つたのは『四十八癖』である。其の初篇には「女房をこはがる亭主の癖」「亭主を尻にしく女房の癖」「萬事を氣にする人の癖」「通物になりたがる人の癖」「何事も苦勞にする人の癖」「詞數の多き人の癖」「人の非を數ふる人の癖」の七種を、人物の會話又は獨語によつて描寫して居る。次いで二篇三篇には各八種、四篇には四種の癖を書き分けてゐる。「四十八癖」と題したのは、『酩酊氣質』の角書と共に、「無くて七癖有つて四十八癖」といふ俚諺に基づいてゐる。以上の諸作は人の性癖を類別し、其の特徴を誇張して表現する所から生ずる滑稽を狙つたものであるが、性癖は客觀的に穿つて見れば畢竟馬鹿に相違ないから、三馬は更に『古今百馬鹿』を書いた。卷首に掲げた板元の豫告によれば、百まで書く豫定であつたが、刊行せられたのは初稿上下二冊であつて、これに四種の馬鹿を書いてゐる。卽ち「鼻毛をのばす御亭主馬鹿」「負て腹立つ下手象棊馬鹿」「お客をしかる幇間馬鹿」「腹自慢する大食馬鹿」の四話であつて、各說話は「萬一あらば



古今百馬鹿挿繪 (鼻毛をのばす御亭主馬鹿)

大きな馬鹿」と云ふ作者の簡單な批評の言葉で終つてゐる。要するに以上の諸作は、それぞれの性癖を微細に穿つた點に滑稽があるのであるが、殊に人間の弱點を諷刺的嘲笑的に寫した所に作者の本領が最もよく發揮せられて居る。就中『四十八癖』と『古今百馬鹿』とは會話の描寫が最も微に入つて、作者の文章の練達の極致を示してゐる。此の二篇は『浮世風呂』『浮世床』と併せて三馬の代表作と見るべきであらう。

芝居趣味の作

三馬の滑稽本の主要なものは以上で終つたのであるが、此の外になほ歌舞伎通の一面を示した作品が七八種ある。彼の歌舞伎通を示す著作には、役者の年中行事を繪と文で説明した『俳優三階興』（歌川豐國畫一冊寛政十三年刊行）、劇場に關する一切の事を『訓蒙圖彙』に倣つて滑稽本風に現した『戯場訓蒙圖彙』（豐國畫八巻五冊享和三年刊）等がある。併し滑稽本として見るべき作は、芝居見物の滑稽を穿つた『戯場粹言幕の外』（三冊文化三年刊行）『三芝居客者評判記』（三冊文化八年刊行）、田舍芝居のをかしみを描寫した『狂言田舍操』（四冊文化八年刊行）『田舍芝居忠臣藏』（二冊文化十年刊行）、當時流行の茶番を題材とした『素人狂言紋切形』（三冊文化十一年刊）等である。此等の中で最も勝れて居るのは『客者評判記』である。此の作は役者評判記の形式に倣つて、卷首には「見物左衞門が化の皮は狐にあらぬ通力のお國戯場」と題する前文一章を掲げ、次に見物の位付を示した後に、贔屓連・芝居好・見功者・棧敷張・身振好。聲色好・鶉棧敷の見物・古實者・昔贔屓等を、評判記の形式と掛合とによつて寫してゐる。前文一章は烏亭焉馬五代目團十郎合作の『五百崎蟲の評判』の前文を摸倣したものであるが、其の他は趣向文章繪の三者相俟つて、作者得意の才を發揮してゐる。

三馬の門人として傳へられる者は十數名あるが、後に人情本で名を成した三鷲（爲永春水）以外には殆ど記すべき作品を遺してゐない。三鷲の事は後に述べる。三馬の實子虎之助は父の歿する時十一歳であつたが、後に小三馬と稱して戯作者になつた。併し父ほどの才はなかつた。滑稽本の全盛期は文化年間を頂上とし、文政の半頃から漸次衰運に向つた。其の過渡期の代表作者は瀧亭鯉丈である。

瀧亭鯉丈

鯉丈（天保十二年歿享年六十餘歳）の傳には詳かでない所がある。本名の池田八右衛門は養父の名を嗣いだのである。養父は三百石の旗本であつたが、早く世を去つた爲に祿に離れたのであつて、鯉丈は其の娘の二度目の婿に迎へられたと云ふ。鯉丈の生家は詳かでなく、彼の職業に就いては縫箔師・一中節の三味線彈・寄席藝人等であつたと傳へられて居り、又乘物師から竹細工人に轉じたとも言はれて居る。彼の居所が轉々したのと同じやうに、種々の職業に轉じたものと思はれる。元來學問の素養は無かつたが、一九・三馬等に私淑して、『道中膝栗毛』の摸倣を試み、又『浮世床』の第三篇や『人間萬事虛誕計』の後篇などを刊行した。人情本の作も數種あるが、世に名を知られたのは滑稽本の『花暦八笑人』及び『滑稽和合人』によるのである。

花暦八笑人

『花暦八笑人』は五編十五册から成つてゐるが、鯉丈の作は第四篇までの十二册である。初篇は文政三年に發表し、第四篇は天保五年に出版せられた。而して第五篇の上卷は一筆庵主人（四篇までの畫工

溪齋英泉の戯作號）の作、中巻下巻は輿風亭枝成の作で、嘉永二年に刊行せられた。「八笑人」と題したのは陰陽の八將神の遊行に擬したのであり、角書の「花暦」は四季の花の名所案内としての花暦を取



八笑人三篇追加挿絵

つたのである。此の作品は文化文政期に江戸に流行した茶番狂言（即ち素人芝居）の滑稽を題村としたもので、八笑人中の一人卒八は作者自身であり、他の七人もそれ〴〵モデルがあつたと言はれて居る。初篇の巻頭には「八笑人遊行日」と標記して、「飛鳥山花の雲」「角田川の花筏」「高田の里の螢狩」「兩國川の涼船」「百花園の秋七草」「海晏寺の楓狩」「青樓の夜の雪」「淺草寺の歳の市」の八項を掲げてゐるが、四篇までに書かれたのは前半の四つである。人物の會話の描寫を中心として筋を運んでゐる事は、一九・三馬等の滑稽本と同じであるが、地の文は「福壽草の咲初（さきそめ）しより、四季の花（はな）盛（ざかり）たがへぬ時津風、靜けき御代の春なれや云々」の如き五七調で記してある。此の作中に現れて來る人物は、所謂能樂者の眼七・卒八・安波太郎・出目助（以上容貌の特徴による）呑七・頭武六・野呂松（以上性行による）などである。此等の人物は容貌性格に異狀があり、日常生活に於ても常規を外れて居るのであるが、自らはそれ〴〵通人を以て

任じて居る。滑稽は此の點に胚胎するのであつて、彼等は先づ持合せの智慧を搾つて、眞面目に茶番狂言の珍趣向を案出して稽古に取掛るが、此の時既に種々の事件があつて小失敗を演ずる。やがて群衆の出盛る場所を選んで實演する段取になると、仲間の脱線的行爲や不慮の事件があつて、趣向が部分的に崩壞し、最後には思ひも寄らぬ一大事が突發して、茶番全部が失敗に終つて大笑となる。これが『八笑人』に共通する構想であつて、四つの説話の筋は大同小異である。

茶番の流行と其の影響作

茶番は大阪の俄狂言に對する江戸の素人狂言である。茶番はもと享保の頃、江戸の芝居の大部屋連中が即興的に趣向を凝らして演じた餘興であつたが、(茶番は其の席の茶菓の番に當つた者の意である。)其の後江戸の民衆の間に演劇趣味が高まるにつれて、樂屋を出て素人の間に流行して素人狂言の源となつた。かくて寶暦頃には茶番の名人が續出すると共に、稽古本も刊行せられ、安永天明期には通人戲作者の間から名人が多く出て、趣向は益發達した。寛政享和から文化文政にかけての四十年間は其の全盛期であるが、當時の茶番は大阪の俄狂言と合流し、素人狂言は茶番から分れて流行の極に達した。此の頃茶番又は素人狂言を題材とした滑稽本が續出したのは當然であつて、『八笑人』以前の作には櫻川慈悲成の『滑稽素人芝居』（享和三年刊行）『壽(ことぶき)茶番狂言』（文化九年刊行）『口豆飯茶番樂屋』（文化十三年刊）、一九の『方言(むだ)競(くらべ)茶番種本』（文化十四年刊）、三馬の『素人狂言紋切形』（文化十一年刊）『茶番早合點』（文政七年完結）等がある。『八笑人』は此等の作品に刺戟せられて現れたのであつて、一九・三馬等の作品の影響も認められるが、更に當時流行した落語や茶番の影響を多く受けて居る。所收の四編の趣向が大同小異であり、又滑稽の一半を占める

人物の會話が駄洒落無駄口の連發であるのは、一九や三馬の作に比して劣る所以である。併し其の人物や茶番の滑稽は誇張せられてはゐるが、何物をも遊戲化しようとする當時の逸民の生活をよく寫し出して居るのであつて、次に述べる『和合人』と共に、一九の膝栗毛物や三馬の氣質物等に次いで見るべき作品である。

滑稽和合人

鯉丈は『花暦八笑人』の初篇を發表した後、間もなく『滑稽和合人』を著作した。初篇は文政六年の出版、二篇はそれより五六年後に脫稿し、三篇も稍間を置いて天保十二年に刊行せられた。而して四篇は鯉丈の歿後に爲永春水が稿を繼ぎ、弘化元年に刊行した。四篇は『道中膝栗毛』の趣向を摸倣した作品であり、而も鯉丈の作風よりは遙かに見劣りがする。題號は和合神のもぢりで、仲よき連中の意である。此の作は『八笑人』が全部茶番の錯誤失敗の滑稽を取扱つたのに對して、かの作中の人物と同類の六人が演ずる惡戲の奇拔な趣向と、其の實行の失敗から起る滑稽を書いたものである。例へば初篇は――和次郎の不在中に訪れて來た矢場七・張吉・茶見藏の三人が、和次郎を驚かす爲に惡戲を仕組んで置いて、佛壇や押入に隱れた儘眠つてしまつた。やがて夕方に和次郎が歸宅し、仲間の揚次郎や土場六も來合せて、惡戲の仕返しをしようと計畫するが、意外の闖入者があつたり、自ら錯覺を起したりして、折角の企が失敗に終る――といふ筋である。他の二篇三篇の趣向もこれと大體同じであつて、構想の變化に乏しいことは『八笑人』と同樣である。其の惡戲の工夫には怪談や落語から得たであらうと思はれる所もあるが、又當時實際に行はれた珍趣向の饗宴や食通會などの反映と見るべき點がある。要す

るに此の作品は『八笑人』の茶番を惡戲に替へたまでのもので、遊戲氣分の滿ちた幕末の世相の一面を誇張して寫してゐる點は共通して居る。これを『八笑人』と比較すれば、前作が比較的無難であるのに反して、後者の滑稽には擽りの慊があり、惡趣味が多く、著想にも前者の蒸返しがあつて、作者の趣向の枯渇を暴露して居る。

衰頽期の滑稽本

鯉丈以後の作者には二世一九・一筆庵可候・二世楚滿人（爲永春水）・梅亭金鵞・假名垣魯文などがあるが、何れも一九・三馬の作の剽竊摸倣を事とし、而も幕末の頽廢的氣分が滿ちてゐて、文學的價値はいよ〳〵低下して行つた。從つて此の時期を滑稽本の衰頽期とする。此の時期に現れた作品の中で注意を惹くのは、

魂膽夢輔譚

一筆庵可候の『魂膽夢輔譚（こんたんゆめすけばなし）』と金鵞の『妙竹林話七偏人』の二部である。『魂膽夢輔譚』（五編十五冊自天保十五年至弘化四年刊行）は角書に「教訓滑稽」とある。其の題號に見えるやうに、寶永年間刊行の八文字屋本の『魂膽色遊懷男』（五冊作者其磧又は自笑）の趣向を踏襲し、之に教訓的要素を加へた作である。内容は浮世夢輔なる者が福祿壽に祈願して魂を入れ替へる祕法を授けられ、猫・鸚鵡・蛙・狐・猿・殿樣・隱居・藪醫者・女・侍などと魂を取替へて、魂と肉體との不調和から生ずる錯誤の滑稽を描き、其の間に慾心から起る樣々な失敗を織り込んで、教訓の意を寓してゐる。此の作は八笑人以後新しい趣向がなくなつた結果、過去の作品の趣向を借りたのであつて、空想を恣にした點に異彩がある。

一筆庵可候

一筆庵可候（嘉永元年歿五十九）は本名を池田義信通稱善次郎、後に里介と改めた。浮世繪師として名を知られた溪齋英泉である。戲作者としては合卷滑稽本などを書いた。構想には長じてゐたが描寫は概ね拙劣である。滑稽本の作には右に解說したものの外に

『人間一生善惡道中記』（七編自弘化元年至文久二年刊行）などがある。

七偏人

次に『妙竹林話七偏人』（五編十五冊自安政四年至文久三年刊）は第五篇の自序に記されてゐる通り、鯉丈の『八笑人』と『和合人』とを摸倣した作で、作中の人物を七人にしたのも、兩者の人物の數を折衷したのである。尤も題名は角書にもあるやうに竹林の七賢人に擬したのである。此の作は、江戸柳橋新道に住む似而非風流人の喜次郎を中心に集まる能樂者七人に、半可通の大愚を配して、茶番や惡戲が失敗に終る滑稽を四季に書き分けたのである。人物の會話は駄洒落無駄口の連發であり、茶番や惡戲も鯉丈の摸倣で而も野鄙猥雜に墮して、滑稽本末期の傾向を代表してゐる。

梅亭金鵞

作者梅亭金鵞（明治二十六年歿七十三）は本名を瓜生政和通稱熊三郎と云ひ、號は金鵞の外に梅亭主人・梅亭化叟・吾妻雄兎子などと云つた。父は吉田勝之丞と云ひ、江戸兩國藥研堀に柳剛流の劍術道場を開いてゐたので、彼は幼少の頃から父に就いて劍術を修業した。弘化三年二十三歳の時瓜生家の養子となつたが、間もなく武道を棄てて文筆に志し、松亭金水（中村經年（讀本人情本の作者））の門人になつて版下の筆耕を業とする傍著作を始めた。滑稽本の作には『七偏人』の外に一九の『六阿彌陀詣』の續篇としての『滑稽千社參』（後に滑稽立志編と改題）及び『雜司ケ谷紀行』の後篇『王子紀行』等があり、又人情本も六七部著作した。金鵞は幕末期から明治にかけて活躍した人で、明治維新後には自ら『滑稽雜誌』『嬉笑新聞』などを發行し、又『團々珍聞』の主筆となり、『やまと新聞』の編輯にも從事した。

假名垣魯文

金鵞は其の友人假名垣魯文（野崎文藏明治二十七年歿六十六）と共に滑稽本最後の作者である。魯文は一九の『膝栗毛』に倣つた初作『滑稽富士詣』（十四冊萬延元年刊）を發表して以來名を知られた。其の後の滑稽本には

『西洋道中膝栗毛』『安愚樂鍋(あぐらなべ)』『胡瓜遣』などがあるが、此等は明治時代の刊行である。

五　人情本

人情本は滑稽本と共に洒落本から分離した小説であつて、形は滑稽本と同じく中本（美濃紙半截の大さで一冊二十枚前後）であり、筋を會話體で進め、地の文を脚本のト書のやうに記してゐる點も、滑稽本と同じである。中形繪入讀本とも呼ばれたのは、構想趣向の方面に讀本に倣つた所があるからであり、繪入を冠したのは合卷と同じく婦女子の眼を惹かんが爲に、表紙口繪を色刷にし、且つ入念な挿繪を用ひてゐるからである。表紙口繪の色彩の美は末期に近づくに從つて益加はつて行つた。人情本は文政から慶應に至るまでの五十年間に流行した小説であつて、凡そ百八十種許り刊行せられた。爲永春水は天保六七年頃に人情本一流の元祖と自稱したけれども、其の萌芽は既に述べたやうに、安永天明期の洒落本中に認められる。即ち安永の末頃現れた田螺金魚の『妓者呼子鳥』（以下卷數刊行年代の註記なきものは前出）及び『契情買虎之卷』は、人情本の傾向を帶びた洒落本の嚆矢であつて、是より此の系統を引いた作品が次々に現れた。其の主なものを擧げれば、寛政享和頃に梅暮里谷峨の『傾城買二筋道』及び其の續篇の『廓の癖』『宵の程』や、一九の『倡客眞話傳授之卷 鄽意氣地(さとのいきぢ)』（一卷享和二年刊行）などが現れ、更に文化から文政の初頃までの間に、鼻山人の『娼妓美談籬の花』其の續篇の『廓宇久爲壽』及び『廓中餘情由佳里(ゆかり)の月』（二冊文政元年刊行）や、一九の『清談峯之初花』（前篇二冊文政二年刊 後篇三冊文政四年刊）等が刊行せられて、いよ〳〵人情本に接近して行つた。殊に『梅の花』以下

の作は殆ど人情本と區別し難いのであつて、『由佳里の月』や『清談峯之初花』などは、屢人情本に入れられて居る。要するに人情本なる稱呼は天保六七年頃に始まつたけれども、此の種類の作品は既に文政の初頃から現れてゐるのである。

初期の作者

人情本の代表作者爲永春水の『春色梅兒譽美』が出版せられた天保三年以前は人情本の初期である。此の頃の主なる作者は一九・鼻山人・二世楚満人（爲永春水）一筆庵主人などである。今初期の作風を示す爲に

清談峯之初花

一九の『清談峯之初花』の梗概を記して見る。主人公の捨五郎は西國の浪人の孤兒で、地主の呉服商福松屋福六に引取られて成長した。福六は捨五郎に妻の姪おくんを娶せて家督を讓らうとしたが、福六の妾腹の子に福太郎があるので、自分は放蕩に耽り勘當の身になつて旅に出た。其の後捨五郎は上州の或絹屋に奉公してゐる中に主人に見込まれ、其の娘おはしに言ひ寄られたので、江戸に出て呉服商を始めた。偶或豪家の妾であつた女に近づかれたが、體よく退けてゐると福太郎に口説かれて家出したおくんに邂逅した。妾はおくんが操を立て通した身の上を聞いて感激し、やがて尼になつた。かくて捨五郎は祖父に廻り合つて、其の家督を相續しおくんと結婚したと云ふ。此の作のやうに戀する男女が樣々な誘惑と鬪ひながら互に誠實を示して、最後に幸福な結婚生活に入るといふのは、人情本に極めてありふれた筋である。一九は初期人情本作者の一人であつて、右の外に『所緣の藤波』（初篇三册文政四年刊行）『水加賀美』（二編六册文政五年刊行）『於保呂月』（三編九册文政七年刊行）等五六種の人情本を書いてゐる。

鼻山人

一九と共に人情本の發生期の作者として擧げられるのは鼻山人（一〇九三頁參照）である。洒落本人情本讀本合

卷などを著作してゐるが、最も注意すべきは洒落本から人情本への過渡期の作品を作つて、人情本の發生に盡した功績である。彼の作つた人情本は天保の頃までに二十種ばかりある。其の中の著しい作は『風俗粋好傳』（二編六册文政八年刊行）『廓鑑餘興花街壽々女』（三册文政九年刊行）『永明間記廓雜談』（前篇九册文政九年刊・後篇九册文政十年刊）『廓の意氣地』（十二册文政十一年刊）『廓中餘情由佳里の梅』（三編九册天保元年刊行）『言語光澤合せ鏡』（三編九册自天保五年至八年刊行）等である。鼻山人の人情本は先輩の舊作を剽竊したものが多いが、洒落本讀本や歌舞伎などを取入れて、比較的自由な態度で書いたのは、型にはまつた人情本界に於ては珍らしい感じがする。鼻山人の得意の作は、彼の洒落本『花街鑑』の續篇として作つた『花街壽々女』（新吉原萬字屋抱への名妓玉菊が若くして病歿した後の、幸介の愁歎の情を中心として描いた作）や、『契情買虎之卷』及び『傾城買二筋道』に倣ひ、讀本歌舞伎の筋の一部分を取入れた『由佳里の梅』などである。

曲山人

人情本の作者中で最も勝れた手腕を有つてゐたのは曲山人である。曲山人の傳記は詳かでない。別號を司馬山人・三文舍自樂と云ひ、文才に秀で書道に長じ畫に巧みであつたが、天保七年頃短命で世を去つた。人情本の作に『人情其儘女大學』（二編六册自畫天保元年刊行）『小三金五郎假名文章娘節用』（三編九册自天保二年至五年刊行）『教外俗文娘消息』（初篇二篇六册天保六年刊・三四篇春水作天保十年刊）『娘太平記操早引』（初篇二篇六册天保八年刊・三四篇金水作天保十年刊）がある。題名は何れも婦女の通俗的な讀物の意を寓したものである。曲山人の代表作であり、又人情本中の傑作と稱せられるのは『假名文章娘節用』である。繪は作者の筆に成つたものを、歌川國直が摸寫したものである。此の作は初篇の自序によれば、或人の稿本を補綴したのであるが、原本が如何なる物であつたか詳かでない。普通には曲山人

假名文章娘節用

の創作に近いものと見られてゐる。先づ梗概を記して見る。

斯波家の藩臣假名家文字之丞の子文之丞は奥勤の腰元玉章と契り、手を携へて京に出奔したが、玉章は一子金五郎を生んで産後の肥立が惡くて歿した。偶文之丞は古鐵買の六兵衞が妻に先立たれ、二人の幼い娘を抱へて當惑してゐるのに同情を寄せ、妹娘お龜を貰ひ受けて育てた。六兵衞はやがて姉


假名文章娘節用挿繪

娘お鶴を里子に出した。さて文字之丞は文之丞を勘當し、其の弟文次郎に嫁を迎へて家督を讓り、隱居して白翁と稱した。白翁は人傳に文之丞の消息を知り、行く行くは孫の金五郎に文次郎の娘お雪を配して、家を嗣がせる心組であつた。金五郎とお龜は行末夫婦になれると思つてゐたが、白翁が金五郎を呼び寄せたので、お龜は死を覺悟して家出をした。其の後金五郎は大磯で、今は遊女眞名鶴となつてゐるお鶴に會ひ、次いで額俵屋と云ふ茶屋の抱藝者小三となつてゐるお龜に邂逅した。金五郎はやがて小三を身請して一子金之介を擧げた。白翁は金五郎の放蕩を案じて、お雪と結婚させた後に小三の許を訪れて、金五郎を思ひ切るやうに賴んだ。小三は事情を聞いて、金五郎を幸福にせんが爲に、金之介と乳母を姉お鶴（其の後身請

されたが主人に先立たれたので尼になつてゐる）に預けて置いて、切實な思を書置に綴つて自害してしまつた。――かくの如く其の内容は他の人情本と異なつて、義理と人情の絡まつた人生悲劇を描いたものである。頑是ない金之介を中に据ゑて煩悶する、金五郎と小三の境遇も哀れであるが、殊に義理に迫められて男の爲を思つて、獨り寂しく刃に伏した小三の心情は、讀者に涙を催さしめる。

小三金五郎の情話は元祿十四年の出來事で、淨瑠璃では宇治加賀掾の『難波役者評判』や、豐竹座上場の『小さん金五郎浮名の額』（元祿十五年上場）などに語られ、其の他祭文小歌などにも謠はれて有名になつた。又歌舞伎には安永頃から種々に脚色せられ、江戸では文化八年中村座上演の『東都名物錦繪始』が著名であつて、今日も上演せられてゐる。山口剛氏は曲山人の此の作は『東都名物錦繪始』との類似もあるが、寧ろ其の書替の『裏模様菊伊達染』（文政二年六月河原崎座興行）の二番目清元の『小さん金五郎浮名の立額』を基にすると共に、昔の小三金五郎物の何れかを參照したのであらうと言つて居られる。（日本名著全集『人情本集』解說參照）

人情本の初期から全盛期にかけて最も活躍した作者は爲永春水（天保十四年歿五十四歲）である。本名佐佐木貞高通稱越前屋長次郎と云ひ、江戸の人である。生來隻眼であつた爲に綽名を眼長と呼ばれた。初め貸本屋青林堂を營み出版した事もあるが、後に書籍仲買商に轉じ、中年の頃講談師伊東燕晋の弟子になつて、爲永正輔と稱して寄席の前座を勤めたが成功しなかつた。彼は素より學問は無かつたが、書物と縁が深かつたので、夙に讀書を好み自ら博學を誇つてゐた。高座にはかなり長く上つたが、得意でなかつたので、此の間に戲作者を志して式亭三馬の門に入り三鷺と號した。併し三馬の門下には先輩が

多かつたので、去つて振鷺亭の後を嗣ぎ二世振鷺亭と稱し、更に南仙笑楚滿人（通稱補彦太郎）の遺兒に請うて二世楚滿人を名乘つた。初めは草雙紙合卷などを書いたが世に認められなかつたので、焦慮の揚句書肆の需めにまかせて、馬琴舊作の讀本を補綴再版して馬琴を憤慨させた事もある。かくて文政四年三十二歳に鯉丈と合作の過渡期の人情本『明烏後正夢』（あけがらすのちのまさゆめ）五編十五册（四篇五篇は文政七年刊行）を刊行して始めて名を知られた。是より次々に人情本を發表し、文政十一年には爲永春水と改め、讀本の作風を繼承する故を以て教訓亭と號したが、後に狂訓亭と改めた。春水が人情本の代表作者と認められたのは、天保三年四十三歳の時に發刊した『春色梅兒譽美』以下の作品によるのであつて、彼の文名が確立したのは晩年である。偶天保十三年に水野忠邦の改革があつて、春水は其の人情本が風俗を紊すものと認められ、手鎖を申付けられ板元は過料に處せられ、又板木は沒收燒却せられた。かくて彼は其の年七月に憂悶中に世を去つた。春水の著作には讀本六種、合卷二十餘部、滑稽本五六部あるが、最も多いのは人情本で凡そ六十部ある。尤も晩年の人情本には門人の手に成つたものが多い。

春色梅兒譽美

『春色梅兒譽美』（四編毎編三卷）の一二篇は天保三年に、三四篇は天保四年に出版せられた。題名の梅暦は春を知らせる梅の意で、作中の人物が幾多の辛酸を嘗めて、最後にめでたく榮える事を寓したのである。畫工は三篇までは柳川重信、四篇は大抵其の門人重山の筆である。此の作は丹次郎とお長米八及び仇吉との間の義理人情に、お由と藤兵衞及び半兵衞と此絲の情話を織り交せて、それ〴〵の戀に解決を與へてゐる。其の筋は大體次のやうである。遊女屋の唐琴屋の養子丹次郎は、養父母の死んだ後で惡

番頭鬼兵衛の奸計の爲に家を追はれて、中の郷に貧しい生活をしてゐる。唐琴屋の内藝者米八は、同輩の此絲と其の馴染客の千葉藤兵衛の情に縋つて、婦多川(深川)の藝者となつて戀人の丹次郎に貢い



春色梅暦三篇下（重信畫）

でゐる。丹次郎の許嫁のお長は鬼兵衛に迫まられてゐたたまらず、此絲の取計らひで金澤に居る番頭の許へ行く途中、雲助の爲に古寺へ昇ぎ込まれた。お長は幸にして女俠の小梅のお由に救はれて、其の妹分となり、蝶吉と名乘つて女義太夫語りとなり、これも米八に劣らず丹次郎に仕送りをしてゐる。お由は七年前の戀人藤兵衛に邂逅し、母親の物語によつて、母は藤兵衛の父の妾であつた事や、お由と米八は姉妹であることが分る。藤兵衛は本田次郎といふ侍の内意を承けて、榛澤六郎の落胤を探索してゐたが、丹次郎がそれである事を知つた。藤兵衛は米八の丹次郎に對する實意を試す爲に、頻りに口說いて見るが遂に應じない。丹次郎は藝者仇吉と戀に陷り、米八に覺られて仇吉と米八の間に鬪爭が演じらる。かやうにして米八お長お由此絲等は、義理と情に絡まれて樣々の辛苦を重ねるが、やがて丹次郎

は藤兵衞の取計らひと、本田次郎の情によつて實父に會ひ、お長と結婚して榛澤家を嗣ぎ、又米八は丹次郎の妾となつて三人圓滿な生活に入る。お由は母の計らひで藤兵衞の妻になり、お長米八を庇護した此絲も其の情人半兵衞と夫婦になつて、皆々めでたく榮えたと云ふ。

構想

此の作は讀本や歌舞伎淨瑠璃などから種々の趣向を取つてゐる。卽ち髮結の女俠お由と藤兵衞は、梅の由兵衞長吉殺しを取扱つた京傳の讀本『繪本梅花氷裂』（三巻文化三年刊行）（原田由良・並木宗輔合作の淨瑠璃『茜染野中隱井（あかねぞめのなかのかくれゐ）』（元文三年豊竹座上演）及び初代並木五瓶作の歌舞伎『隅田春妓女容性（すみたのはるげいしやかたぎ）』（寛政八年江戸桐座上演）を基にした作）及び春水が二世楚滿人時代に其の後篇として作つた『梅花春水』（梅野與四兵衞物語後編）（四巻文政九年刊行）の一部の筋を取入れたのであつて、唐琴屋・お長・お由なども『梅花氷裂』中の人物の名を借りてゐる。次に藤兵衞と米八の關係は、三馬の酒落本『辰巳婦言』の藤兵衞と遊女のおとまの事を應用し、且つ藤兵衞は春水と交際のあつた深川の通人津國屋藤次郎をモデルにしてゐる。又半兵衞と此絲の情話は、延享以來歌舞伎に於て種々に脚色されてゐる小紫權八の說話から得てゐるのである。かくて此の作は趣向の上にも工夫を凝して、讀者に興味を與へようとしてゐるが、作者は寧ろ深川情調の描寫によつて、一層讀者を歡ばせようとしたのである。卽ち春水が最も力を注いだのは、男女の痴情や戀の葛藤の描寫であつて、戀に憂身を窶す丹次郎の口說や、彼を繞る深川藝者や素人娘の情緒などは、眼前に見るやうに細かに寫し出されてゐる。

梅暦の續篇

『春色梅兒譽美』が世に現れた時、從來の堅苦しい讀本に物足りなさを覺えた讀書子や、合巻に倦怠

を感じた婦女は忽ち喝采を以て迎へた。かくて春水は意外な大當りを悅んで、引續き其の續篇として『春色辰巳園』を發表し、更に讀者の需めに應じて、發端として『春色惠之花』を書き、なほも拾遺として『英對暖語』と『春色梅美婦禰』を發表し、天保十二年に至つて全部の完結を告げた。此等の續篇にも亦歌舞伎淨瑠璃讀本合卷洒落本などの趣向を取つて居るが、今はそれ等の考證を省略して、簡單な解說を加へて置く。『梅暦餘興春色辰巳園』（四編十二冊歌川國直畫 自天保四年至六年刊行）は、『梅兒譽美』の中に書いた米八と仇吉の達引を更に擴張した作で、題名は夢中山人の洒落本『辰巳之園』（明和七年刊行）に傚ひ、之によつて背景の深川遊里を聞かせたのである。春水は此の作に米八と仇吉の達引を三度まで繰返させてゐるが、最後には二人が和解して、お長と共に丹次郎に仕へることにしてゐる。次に『春色惠之花』（二編六冊溪齋英泉畫天保七年刊）は、其の序に「米八於蝶此絲がまだ莟なる惠の花、惠は則看官の惠を祈る發端六冊」とある通り、「惠」に芽ぐむの意を寓して莟の花を聞かせ、之に發端の意を籠めたのである。此の作品は『梅兒譽美』の以前に遡つて、丹次郎がまだ養家に居る頃の米八とお長の丹次郎に對する戀愛と、お由と藤兵衛及び此絲と半兵衛の愛の端緒及びいきさつを書いたものである。次に『春色英對暖語』（五編十五冊歌川國直畫天保九年刊行）は、內題の下に「梅ごよみ拾遺別傳」とあるやうに前作の拾遺である。題名は振鷺亭の洒落本『辰巳風俗永代談語』（文化年間刊行）に傚つたもので、永代橋の彼方は卽ち辰巳の花街であるから、是によつて『辰巳之園』の續篇である事を示したのである。題號が示すやうに『永代談語』の趣向に傚つて、若旦那宗次郎に對する藝者の增吉とお柳（遊女名柳川）の戀愛の葛藤を描き、之にお粂お房の姉妹藝者が、岑次郎を中心に戀を爭ふ筋を加

へた作である。一人の男を中心とする戀の三角關係は『梅兒譽美』以來反復せられてゐるのであつて、此の作に於ては彌趣向に窮した感がある。加之此の作の各卷に補筆校合に當つた門人の署名があるのを見ると、門人との協力に成つたのであつて、爲に全篇の統一を失つてゐる。『春色梅美婦禰』（五編十五冊歌川國直畫天保十二年刊）は梅見船の意であつて、是に作中の夢見の事を聞かせたのである。內容は前作の岑次郎が從妹のお京を妻とし、お粂お房を妾として、平和な生活に入るまでの徑路と、此絲と半兵衞の結末とを詳かにし、最後に岑次郎が千葉の藤兵衞・小梅のお由・丹次郎・お蝶・米八・仇吉・半次郎・此絲・增吉等を梅見傍迎島の別莊に招待して、盛な饗宴を開く事を記して居る。卽ち『春色梅美婦禰』は『英對暖語』の續篇であると共に『梅暦』全體の拾遺ともなつてゐる。なほ此の作にも補筆校合に從事した門人の名を記して居るから、春水一人の筆に成つたのではない。

春告鳥と其の續篇

『梅暦』は前後六十冊に亙り、中本としては珍らしい大作であつて、此の頃作者は殆ど人情本界を獨占して大いに得意であつた。春水の代表作は言ふまでもなく『梅暦』であるが、『春色惠之花』を出した後で、『梅暦』の姉妹篇を別の書肆から刊行してゐる。『風月花情春告鳥』（五編十五冊國直畫天保八年刊）、其の續篇の『春色籬之梅』（五編十五冊國直畫自天保九年至十一年刊）、『春色籬之梅』の別傳としての『春色園之梅』（四編十二冊天保九年刊）等がそれである。『春告鳥』は作者が東都人情本の元祖と自稱した最初の作であるだけに、並木宗輔竹田出雲等合作の淨瑠璃『ひらがな盛衰記』（元文四年竹本座上演）第二段目の、梶原源太平次兄弟の腰元千鳥に絡まる戀を取入れなどして、從來の作とは稍異なつた趣向を凝らして居る。其の續篇の『春色籬之梅』も亦『ひらがな盛衰記』の外

に、侠客腕の喜三郎や『雨月物語』中の「夢應の鯉魚」などを加へて異色を添へてゐるが、男女の情話は類型的である。『春告鳥』は稍見るべき價値があるが續篇は平凡である。要するに春水は幕末頽廢期に於ける浮薄淫靡な風潮に迎合して、無氣力好色の男子と、之を取りまく無自覺無節操の婦女との間の痴情を、冗漫な文章で長々と描寫し、而も同じ趣向を飽く事なく繰返したのである。其の文學的價値の低い事は勿論であるが、彼が『梅兒譽美』に此絲・蝶吉・お由・米八四人の亂行を描きながら、實は貞操節義の爲であるとし、「貞烈潔くして大丈夫に恥ぢず」と辯じて（其の後も屢同じやうな辯明をしてゐる）當局の彈壓を免れようとした態度などは、最も卑劣と言ふべきであつて、彼が晩年に人情本の爲に刑に處せられたのは寧ろ當然である。

春水の人情本には代表作の『梅兒譽美』及び『春告鳥』の二種の外に、なほ幾多の作品（門人との合作又は門人の代作が多い）があるが殆ど千篇一律である。只注意を惹くのは、型にはまつた人情本以外に、讀本風の長篇の『貞操婦女八賢誌』や『いろは文庫』などを著作した事である。『貞操婦女八賢誌』は馬琴の『里見八犬傳』を摸倣して、八犬士を女子に替へた作である。尤も天保五年出版の初輯から天保十年刊行の三輯までの十四冊は春水の作であるが、それ以下は二世爲永春水なる染崎延房の筆で、嘉永元年までに二十九冊を刊行して完結した。次に『正史實傳いろは文庫』は人情本中の最長篇で、天保七年から明治五年までに十八編五十二冊出版せられた。從來二代春水の代作と言はれてゐたが、近來は四篇乃至五篇までは春水作で、以下二代春水作と見られて居る。畫は溪齋英泉以下數人の筆である。

此の作は赤穂義士に關する實錄口碑などを參考し、人名は淨瑠璃『假名手本忠臣藏』に據つて書いたもので、角書に「正史實傳」とあるけれども、實は義士銘々傳を人情本風に書いたものである。地の文は七五調を混へ對話は口語である。蓋し人情本中では『假名文章娘節用』と共に最も穩健な作で、當時も盛に讀まれた。なほ此の作は明治初年に米人 Edward Greey の手で飜譯せられ、The Royal Ronins と題して紐育で出版せられた。

松亭金水

爲永春水と同時代の人情本作者には松亭金水や三亭春馬等があつた。松亭金水（文久二年歿六十八）は本名を中村經平（一に源保定）通稱源八と云ひ、別號を積翠道人・松亭主人と云つた。もと筆耕及び手習師匠をしてゐたが、春水に私淑して作者となつた。天保二年頃初作を發表して以來、合卷讀本人情本などを書いたが、人情本以外には見るべき作がない。先輩の未完成の人情本の續篇も書いたが、自作の代表的なものは『伊達模樣錦廼褂』（四編十二冊自天保六年至八年刊）及び『閑情末摘花』（五編十五冊自天保十年至十二年刊行）である。金水の作は概ね情趣に乏しいが、結構が整然として居り教訓の意を含むものが多い。

三亭春馬

次に三亭春馬（嘉永四年歿享年未詳）は本名を磯部源兵衛と云ひ、吉原の大文字屋の養子になつて村田市兵衛と名乘つたが、離緣になつて質屋を營んだ。狂歌を學び又一九の門人となつて九返舍一八（二代一九）と號したが、天保四年に合卷『尾形鱗生傳』を發表する時から三亭春馬に改めた。多くの合卷を書き、又『奥羽一覽道中膝栗毛』等の滑稽本を著したが、人情本作者として最もよく知られた。人情本の代表作は『春秋二季種』（五編十五冊刊行年代未詳三篇以下は松園梅彦の作）及び『松竹梅臺前裁多氣競』（十編

三十册自天保十年至文久元年刊八篇以下松園梅彦の作である。彼は吉原の妓女の子に生れ花街に育つた爲に、遊里を背景とする情調を寫す事に長じてゐた。

人情本末期の作者

以上述べた外に春水の門人に狂言亭春雅・狂文亭春江・狂花亭春蝶・芳訓亭春鶯・狂仙亭春笑（二世春水）等があり、其の他金水門人梅亭金鵞・二世梅暮里谷峨・朧月亭有人等も人情本を書いた。此の中で狂仙亭春笑や梅亭金鵞等は江戸末期から明治への過渡期の戯作者である。金鵞の事は既に述べたから、春笑に就いて一言して置く。春笑（明治十九年歿六十四歳）は本名染崎延房と云ひ、對馬嚴原の藩士で江戸の藩邸に住んだ。幼少の頃から文學を嗜み、爲永春水の門人となり、十九歳の頃から著作を發表し、後に二代春水と稱した。獨創力は乏しかつたが舊作を脱胎摸倣補綴する才があつた。『里見八犬傳』を通俗にした『假名讀八犬傳』（二十八編中十六篇まで）や『時代加賀見』（既出）『黄金水（わうごんすゐ）大盡盃』十七編などの如き長篇の合卷を書き、人情本では既に述べたやうに『いろは文庫』を完結した。明治維新後も從來著作した諸作の續篇を刊行し、又新聞記者となつて續き物を執筆し、其の方面の開祖と言はれた。

第九章　淨瑠璃の盛衰

一　義太夫劇完成期

操劇最盛期の概觀

近松と海音が對峙した寶永正德享保の三十年間と、それに次ぐ竹田出雲の活躍時代、即ち元文以後

寶暦の前半期に至る二十年間（前後合せて五十年）は、義太夫節淨瑠璃の全盛期である。近松海音對立時代は既に述べたやうに、作品の方面から見ると最盛期であるが、操劇としての完成は、茲に述べる元文以後の二十年間に成されたのである。姑く此の時代を義太夫劇完成期と名附けて置く。此の時代は竹本豐竹兩座の競爭が前代よりも更に激烈を加へて、互に人形の構造に改善を施し、人形遣や舞臺裝置の方面も長足の進歩を遂げ、演技は著しく寫實的になつた。更に太夫を見ると、竹本座の竹本政太夫や竹本頼母等は義太夫の後を承けて堅實な藝風を大成し、是に對して豐竹座の豐竹若太夫及び其の門下の駒太夫等は、華麗な語り口を以て對抗し、且つ互に曲節の改善に努力して、兩座の特色は益發揮せられた。かくて元文以後の二十年間に操芝居は發達の頂上に達し、遂に歌舞伎を壓倒するに至つた。偶延享元年に竹本座に於て『假名手本忠臣藏』を上演するに當つて、人形遣の名人吉田文三郎が竹本此太夫（後の豐竹筑前少掾）と衝突した爲に、此太夫以下が竹本座を去り、遂に竹豐兩座の太夫の入替が行はれた。此の事件は當時操劇が表現を重んじた爲に、やがて太夫の横暴を招來した事を示すものであつて、太夫の入替を斷行した結果は兩座の藝風の特質が失はれ、やがて義太夫劇の衰運を招來した。

合作流行

義太夫劇全盛期の作者の多くは、享保期以來活躍を續けてゐるのであるから、今は溯つて享保期以來の作者と、其の著名な淨瑠璃に就いて簡單に述べて置く。享保以後の淨瑠璃には一人の作者の手に成つたものは比較的に少く、大部分は二人若しくは數人の合作であるから、此の時代を合作流行時代とも呼んでゐる。享保以後義太夫劇全盛期に亙つて活躍した作者には、竹本座に長谷川千四・松田和

吉・竹田出雲・三好松洛等があり、豐竹座に西澤一風・田中千柳・並木宗輔・安田蛙文等があつて、互に新作を續々發表して伎倆を競うた。義太夫節で今日に至るまで廣く行はれてゐる名作は、彼等の合作に成るものが最も多きを占めて居る。而して此の時代の代表作者は出雲であるが、彼に就いて述べるに先立つて、先輩として享保年間以來名作を書いた人々と、其の代表作に就いて述べて置く。尤も長谷川千四に就いては既に記して置いた。（八〇七頁參照）

松田和吉

竹田出雲の先輩で竹本座の爲に多くの名作を書いたのは松田和吉（生歿未詳）である。其の閲歴は殆ど傳はつてゐない。正徳三年正月に竹本座上演の『河内國姥火』を發表して以來、寛保元年までの凡そ三十年間に、現存する二十四五篇の作を書いてゐるが、最も活躍したのは享保十五年に文耕堂の號を用ひて、長谷川千四との合作『三浦大助紅梅靮』を書いて以後の十年間である。此の十年間の前半は千四との合作が多く、後半は三好松洛との合作が多いが、又此の間に竹田出雲とも合作してゐる。併し當時出雲は後輩であつたから、文耕堂が中心作者となつてゐたであらう。文耕堂は『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』『義經記』等から取材して、現代の人情を織り交ぜる事を得意としたのであつて、従来取殘されてゐた史實を利用し、而も劇的效果を擧げるやうに脚色したのは一大功績である。當時紀海音・竹田出雲・並木宗輔と共に淨瑠璃作者の四天王と稱せられたのも當然と思はれる。文耕堂を立作者としての名高い作は、千四との合作『須磨都源平躑躅』『鬼一法眼三略卷』『壇浦兜軍記』、松洛との合作『敵討襤褸錦』『御所櫻堀川夜討』『行平磯馴松』及び出雲との合作『大塔宮曦鎧』『小栗判官車街道』

『ひらがな盛衰記』等である。(最後の作は文耕堂・竹田出雲・三好松洛・淺田可啓・竹田小出雲（出雲の子）等の合作である。以上何れも竹本座上演である。)今此等の中で最も注意すべき作品を解説して置く。

文耕堂の代表作

『大塔宮曦鎧』（享保八年二月初演）は後に改題して「太平記曦鎧」と云つた。『太平記』の大塔宮の北條氏御討伐を主題とし、之に六波羅の侍齋藤太郎左衛門一族の悲壯な最後を取入れて脚色した作で、齋藤の古武士氣質が巧みに寫し出されてゐる。二段目の「陣太鼓」と三段目の「身代り音頭」が最も有名で、殊に「身代り音頭」は享保九年同十一年に歌舞伎に演じられて以來屢上演せられて今日に及んでゐる。『須磨都源平躑躅』（享保十五年十一月初演）は『平家物語』及び『源平盛衰記』に據り、忠度と岡部六彌太及び敦盛と直實の、二組の公達と武士を對照的に取扱つた作である。二段目切の扇屋の場は「扇屋熊谷」の原作であつて、『源平魁躑躅』と題して今も歌舞伎に演じられて居る。並木宗輔等合作の『一谷嫩(ふたば)軍記』は此の淨瑠璃から多くの影響を受けてゐる。『鬼一法眼三略卷』（享保十六年九月初演）は『異本義經記』の鬼一法眼の事と辨慶生立の說話とを主材とし、これに謠曲の『湛海』『橋辨慶』などの趣向を加へてゐる。歌舞伎では享保十七年以來屢演じられたが、殊に三段目「菊畑」と四段目の「檜垣茶屋」の一條大藏卿などは最も有名で、今も屢上演せられてゐる。五段目の五條橋の牛若丸千人切は後の「五條橋」狂言の原作であり、又新歌舞伎十八番の中の「虎之卷」は菊畑の場から脫化したものである。『壇浦兜軍記』（享保十七年九月初演）は近松の『出世景清』の改作で、景清を一層偉大な人物にしてゐる。歌舞伎としては享保十八年に大阪角の芝居で興行せられ、更に元文三年には江戸の河原崎座で上演せられて以來屢演じられてゐるが、後世は專ら第三段目の遊女

阿古屋の琴責めの場が繰返されて今日に及んでゐる。『御所櫻堀川夜討』（元文二年正月初演）は『平家物語』の土佐坊斬られの事及び『義經記』の土佐坊義經の討手に上る事に基づいて、土佐坊堀川攻めを中心とした作である。歌舞伎では寶暦十二年大阪の三桝大五郎座で上演せられ、江戸に於ては安永二年に市村座に上演せられて以來屢興行せられた。今日も屢演じられるのは三段目の辨慶上使と四段目の藤彌太物語とである。最後に『ひらがな盛衰記』（元文四年四月初演）は『源平盛衰記』によつて、義經の義仲討伐、樋口次郎兼光の孤忠、佐々木高綱梶原源太の宇治川先陣爭、義經と梶原の逆櫓の論爭、源太の箙の梅の風流などを素材として、義と情の波瀾葛藤を巧みに寫した作である。二段目の梶原源太が情人千鳥と共に勘當せられる場、三段目の剛直一徹な老船頭權四郎及び其の婿になつてゐる松右衛門實は旭將軍四天王の一人樋口兼光の義烈、四段目の遊女梅が枝（もとの千鳥）と源太の母延壽の、源太に對する眞情を現す無間の鐘の段などは、此の作の趣向の眼目である。後に歌舞伎の所作事として屢演じられる「源太」及び「無間鐘」は、此の淨瑠璃から脱化したものである。無間鐘の趣向は、是より先享保十六年に江戸の中村座で興行せられた『傾情福引名護屋』に於ける、瀬川菊之丞の葛城が好評を博したのに刺戟せられて取入れたもので、人形遣の名手吉田文三郎の梅が枝が評判であつたと傳へられて居る。

竹田出雲

　操芝居の極盛期の代表的立作者は文耕堂の後輩竹田出雲（寶暦六年歿六十六）である。出雲は別號を千前軒、俳號を千々と云つた。竹田家は代々機巧（からくり）芝居の古い座として名の聞えた竹田芝居を經營してゐた。彼の父は竹本義太夫を援けて竹本座の座本となつた竹田出雲、後の近江掾（享保十四年歿八十一歳）の二男で、享保年中に

父の名跡を繼いで出雲掾清定と名乘り、竹本座の座本となつた。幼少の頃から父の薫陶によつて機巧芝居に通じ、又二十歲頃から近松の指導を受けて作者としての素養を積んだ。淨瑠璃作者としては享保の中頃以後三十餘年間に三十數篇を書いて居る。尤も單獨の作は享保年中の十篇許りであつて、其の後のものは松田文耕堂・長谷川千四・並木宗輔・三好松洛等との合作である。單獨の作で最も名高いのは『蘆屋道滿大內鑑』であり、晚年の合作中で一代の名作と稱せられるのは時代物の『菅原傳授手習鑑』『義經千本櫻』『假名手本忠臣藏』及び世話物の『雙蝶々曲輪日記』等である。出雲は時代物を得意としたのであつて、世話物は極めて稀である。彼の時代物は從來の作風と同じく、義理人情の葛藤を主としてゐるが、事件を一層複雜にし、又身代りなどを加へて深刻な人情を寫して居る。近松の時代物は夢幻的要素が勝つて、動もすれば不自然に陷つてゐるが、出雲の作は寫實的であり、背景の描寫にも細心の注意が拂はれて居り、全曲の統一と各場面の聯絡も具はつてゐるから、近松の時代物に比して一大進步を遂げた觀がある。加之出雲は機巧に通じてゐた爲に、竹本座の座本となつて以來、人形や道具立の改善に努めて操芝居の面目を一新し、淨瑠璃の脚色にも舞臺效果を著しくして、歌舞伎に接近せしめた。後世近松の作品にして歌舞伎芝居に上つたものは意外に少いのに反して、出雲の作が長く歌舞伎に上演せられて居るのは、右に述べたやうな特長があるのに因るのである。當時竹本座が前後無比の盛況を呈したのは、太夫や人形遣に名人が多かつた爲でもあるが、座本と作者を兼ねた出雲の手腕に俟つ所が極めて多かつた。

文耕堂や出雲等と合作した三好松洛の本名生歿は詳かでないが、長谷川千四と同年輩で安永初年にかなりの高齢で歿した。伊豫の人で幼少の頃寺に入り、後に松山城外の眞言宗願成寺の住職になつたが、故あつて還俗し大阪に出て一時醫を業とした。其の後出雲に就いて淨瑠璃の作者となり、元文から明和に至るまでの三十六年間に凡そ五十餘篇の作を綴つた。其の大部分は時代物で而も合作であるが、當時の名作にして彼の伎倆に俟つ所の多かつた事は、下に解說する諸作によつて明かであらう。松洛自ら立作者となつて書いた淨瑠璃も二三あるが、名曲は寧ろ文耕堂・出雲・千柳等を立作者とする合作にある。竹本座の立作者に就いては大體を述べ終つたから、左に當時竹本座に上場せられた前記の代表作五篇の簡單な解說を記して置く。

蘆屋道滿大內鑑

「蘆屋道滿大內鑑」（享保十九年十月初演）は五段物（以下特に記さざるものは總て五段物）で出雲の作である。葛城山麓に住む獵師が篠田の森の狐と同棲して子を產ませたと云ふ古傳說に、式神を使つた陰陽博士安倍晴明の出生を附會して脚色したもので、「信太妻（しのだづま）」の戲曲の代表作である。信太妻を取扱つた淨瑠璃には延寶六年刊行の山本角太夫の正本「信太妻」を始として、宇治加賀掾の正本「晴明道滿行力諍」や、海音作「信田森女占（しのだのもりをんなうらかた）」等があり、歌舞伎では元祿正德の頃上演せられてゐる。本曲は此等を原據として、更に筋を複雜にし變化の妙を示したもので、信太妻の綜合的作品と稱せられて居る。歌舞伎芝居としては寬延元年大阪角の座の興行が最初であり、江戸では元文二年中村座上演を始として、爾來三都の劇場で屢演じられた。最も名高い段は、第二段の阿部保名が戀人榊の前に死別して、形見の小袖を抱いて狂ひ步く狂亂

の場と、第四段切の白狐葛の葉の子別れの場である。前者は清元の名曲「保名」によつて殊に名高く、歌舞伎の所作事として屢演じられた。

菅原傳授手習鑑

『菅原傳授手習鑑』（延享三年八月初演）は竹田出雲・並木千柳・三好松洛・竹田小出雲の合作である。本曲は菅公流謫の史實を素材とした近松作の『天神記』（正徳三年竹本座初演）を粉本とした曲で、其の人物趣向名文句などを取つた所もあるが、原作にない種々の傳説を加へ、幾多の創意があつて、義太夫劇全盛期の傑作の一に數へられて居る。此の作は(一)菅丞相から筆道の祕事を傳授せられた武部源藏が妻戸浪と共に、主君の大恩に感激して菅公の一子菅秀才を守護する忠節と、(二)これも同じく菅公の恩顧を受けた忠僕白太夫、及び其の三つ子の兄弟梅王松王櫻丸が、それ〳〵の妻千代お春八重と協力して、犧牲的忠義の爲に魂膽を碎く事の二つを中心として、君臣の情義親子の恩愛夫婦の至情などの悲壯な人情を巧みに綯ひ交せて居る。傳ふる所によれば、初めに同じ親子の別れを三人の作者が持場を定めて書く事に決したが、出來上つた結果は圖らずも二段目道明寺の菅公刈屋姫の生別れ（松洛作）、三段目佐太村の白太夫櫻丸の死別れ（千柳作）、四段目寺小屋の松王丸小太郎の首別れとなつたと云ふ。此の三つは何れも作者の創意であり、而も此の作中で最も好評を博した場であつて、今もなほ屢歌舞伎に上演せられて居る。殊に出雲の作寺小屋の段は、源藏が今の妻戸浪との不義の爲に、菅家の勘當を受けたのにも拘らず、才能を認められて特に祕傳を授けられた舊恩に感激しての痛ましい苦衷を寫し、又一方では是まで深い思慮があつて、わざと時平に仕へてゐた松王丸が女房千代と謀つて、一子小太郎を菅秀才の身代り

に立てる悲壯な忠節を寫してゐるのは、全曲中で最も人を感動させる場である。此の操芝居が延享三年八月二十一日から竹本座で興行せられると、天滿宮の信仰の厚い大阪人の非常な歡迎を受けて、翌四年三月まで大入を續け、四年二月からは江戸の豐竹肥前掾座でも興行せられて好評を博し、秋まで打續けられた。又歌舞伎では延享三年十月に京都で上演せられて以來、三都の劇場に於て屢演じられて非常な好評を博した。並木五瓶の脚本『天滿宮菜種御供（てんまんぐうなたねのごくう）』は此の淨瑠璃に據つた所が多い。

義經千本櫻

『義經千本櫻』（延享四年十一月初演）は出雲・松洛・千柳の合作で、前の手習鑑や後に述べる忠臣藏と併せて當代の傑作に數へられ、又數ある判官物の代表作と言はれてゐる。本曲は壇の浦に於ける平家沒落後の史實を背景に取り、安德帝（少女）を始めとして、維盛（鮨屋彌助）知盛（渡海屋銀平）教經（横河覺範）內侍の局（銀平女房）等が、それぞれ變名變裝して源氏に復讐しようとする事を仕組んだ作であるが、中心は寧ろ源氏方にあるのであつて、義經辨慶梶原忠信等を活躍させ、殊に忠信と忠信の姿を借りてゐる狐忠信に、重要な位置を與へてゐる。題名は花の吉野山を背景とする場があるのに因る。最も名高い場は第二段の渡海屋から大物浦船軍（知盛が碇を負つての入水）、第三段の鮓屋（いがみの權太の活躍）、第四段の河連法眼館（狐忠信と眞の忠信の對比）等である。此の作の二段目は謠曲の「船辨慶」に據つた所が多く、又狐忠信の想と彌助彌左衞の名は近松の『天鼓』に據つたものである。（日本名著全集の淨瑠璃名作集解題（黑木勘藏氏執筆）に據る）此の曲は初演の翌年に歌舞伎に移され、爾來今日に至るまで屢演じられ、四段目の道行は常磐津富本清元に語られてゐる。

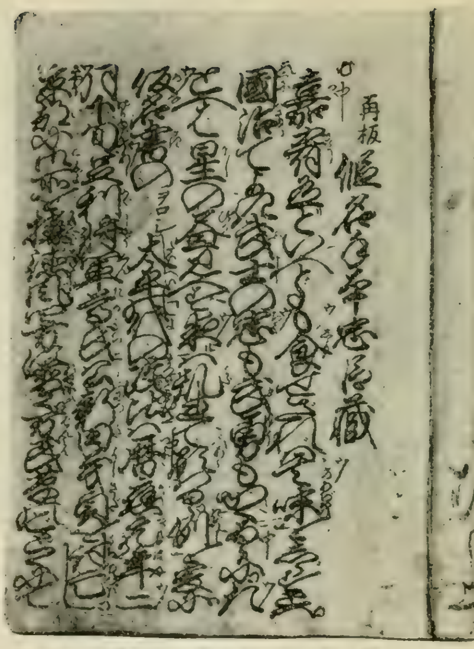
假名手本忠臣藏

『假名手本忠臣藏』（寛延元年八月初演）は十一段から成り、出雲・松洛・千柳の合作である。此の淨瑠璃は言ふま

でもなく、赤穗義士の仇討を取扱つたものであるが、時代を足利時代とし、人物の名を高師直・鹽谷高貞・大星由良之助・寺岡平右衛門などとしてゐるのは、すべて近松の『碁盤太平記』（寶永三年初演）に據つたのである。赤穗義士の復讐は元祿十五年十二月の出來事で、其の翌年には江戸の歌舞伎に取入れられ、操芝居では寶永三年上演の近松作『兼好法師物見車』の一部にも取扱つてゐるが、忠臣藏淨瑠璃の最初は『兼好法師物見車』の後追として作られた前記の『碁盤太平記』である。其の後吾妻三八の脚本『鬼鹿毛武藏鐙』（寶永七年大阪篠塚庄松座興行）を基にした海音の淨瑠璃『鬼鹿毛無佐志鐙』（正德三年豐竹座興行）、並木宗輔・並木丈輔・安田蛙文合作の『忠臣金短冊』（享保十八年豐竹座興行）其の他の新作が現れて、義士物は劇界に大流行を見るに至つた。而して出雲等が此の曲の執筆を思ひ立つた直接の動機は、延享三年五月に江戸の名優二世澤村宗十郎が、上方に於て並木永輔の作『大矢數四十七本』の大岸宮内を演じて頗る好評を博したのに刺戟せられたのである。（本曲の七段目の大星は宗十郎の其の當藝を準據としたものであると云ふ）かくて義士物には『碁盤太平記』以來多くの作が現れたが、此の淨瑠璃は此等の先行曲の長所を採り、是に新しい趣向を加へて成つた傑作であつて、義士劇は本曲によつて完成を告げたのである。本曲は初日以來大當りを續け、其の後操にも歌舞伎にも頻りに演じられて何時も人氣を呼んだ。かくの如く世に持て囃されたのは、總ての人物が理想的人物として寫されて居る事や、武士以外に勘平・お輕・天河屋義平の如き町人の爲に氣を吐く者があつて、一般觀衆を滿足させた事などにも因るであらうが、文藝的批評眼を以てしても十分眞價を認め得るのである。即ち一篇の組織は從來の五段物の型を破つて特に十一

段となつてゐて、人物の數も多く其の筋は極めて複雜であるが、巧みに場面の變化を圖り、人物事件に照應の妙を示しながら、最後の討入によつてそれ〴〵統制せられて居るのであつて、何れの點から見ても劇的效果を十分に收めて居る。此の淨瑠璃は直ちに歌舞伎に移され、同年十一月に大阪の嵐座

雙蝶々曲輪日記



假名手本忠臣藏

に上場せられ、翌寛延二年に江戸の三座に於て競爭の姿で演じられて以來、今日に至るまで狂言中の名狂言として喧傳せられて居る。尤も歌舞伎としては其の後種々の改修が加へられてゐる。

最後に『雙蝶々曲輪日記』（寛延二年七月上場）は出雲・松洛・千柳の合作で、九段から成る世話物である。濡髮長五郎と放駒長吉の二人の俠客を主材とし、是に山崎與次兵衞の子與五郎と藤屋の遊女吾妻の戀愛、及び南與兵衞等を取合せて脚色した作である。本曲は西澤一風・田中千柳合作の『昔米萬石通』（享保十年豐竹座上場）に、近松の作『山崎與次兵衞壽の門松』（享保三年竹本座興行）を取合せた作で、八段目の與兵衞住居の「引窓の場」が全篇の山である。初演の時は千柳・松洛合作の『夏祭浪花鑑』（延享二年七月竹本座初演）の類作として不評判であつたが、間も無く

歌舞伎に移され、寛延二年京都布袋屋で興行せられて好評を博した。爾來屢歌舞伎並に操座に上演せられ、又書替狂言も現れて、出雲の少數の世話物中の代表作と稱せられてゐる。

豐竹座の作者

竹本座が竹田出雲等の作を上場して盛況を呈した頃、一方豐竹座には並木宗輔（並木千柳と同じ人）を始め、並木丈輔・安田蛙文・淺田一鳥等の作者があつて、新作に創意を試み人形舞臺裝置に美を盡して、竹本座に劣らぬ隆盛を見たが、淨瑠璃の文學的價値は概ね劣つてゐた。豐竹座の作者には海音引退の後に新たに八文字屋本作者西澤一風（七六一頁參照）が入つて、田中千柳を相手に合作十曲許りを作つて、竹本座に對抗してゐたが、一風は數年後に去り、千柳も彼に先立つて享保十年に京都に去つた。一風に代つて立

並木宗輔

作者となつて豐竹座の爲に健闘したのは並木宗輔（寶暦元年歿五十七）である。大阪の人で通稱を松屋宗助と云ひ、號を千柳・舍柳・市中庵などと云つた。一風の門に學び、享保十一年に一風を立作者とする『北條時賴記』に合作者の名を連ねて以來、二十六七年間を淨瑠璃作者として過した。作者としては初め並木宗助と稱したが、元文元年以後宗輔に改め、延享二年から寛延三年に至る六年間は竹本座の作者となつて千柳の號を用ひた。（千柳の號は田中千柳に始まるのであつて、宗輔の千柳は二代目である）豐竹座の作者時代には竹本座の出雲・文耕堂・松洛等と對抗して豐竹座の爲に奮闘したが、名作は寧ろ晩年に多い。即ち終生の作品は四十餘篇に達し、其の中凡そ三十篇は豐竹座上場のものであるが、當時の傑作に數へられるのは、前に解說した竹本座の出雲・松洛等との合作である。豐竹座の爲に書いた三十篇の中二十二篇は合作で、主として安田蛙文と協力した作である。中でも著名なのは說經節の『かるか



須磨の浦の場（□）

現代の「一谷嫩軍記」（文樂座）熊谷陣屋の場

や』を原據とした丈輔との合作『苅萱桑門筑紫轢』（享保二十年八月初演）石川五右衛門釜煎の刑を題材に取り、同じ素材を扱つた近松作『傾城吉岡染』（正徳二年竹本座興行）の趣向を加へて成つた單獨作『釜淵双級巴』（元文二年七月上場）、及び彼が三段目まで書いて他界した『一谷嫩軍記』（寶暦元年十二月興行）は末尾に作者淺田一鳥・浪岡鯨兒・並木正三・難波三藏・豐竹甚六の署名の外に、故人並木宗輔を掲げてゐる。淺田一鳥以下は宗輔の門人で、此の中並木正三は歌舞伎作者並木家の祖として知られた人である。此の作は『須磨都源平躑躅』と大體同じ題材を取扱ひ、且つかの作の影響を受けてゐるが、更に新しい趣向を多く加へてゐる。熊谷敦盛の物語に忠度と六彌太の物語を織り交せた作で、二段目中の渡打際組打（敦盛最期）と三段目切の熊谷陣屋の場が眼目で、最も見るべき所である。初演當時大好評を博し、翌年には江戸の中村座と森田座で競演せられ、次

いで大阪の中の芝居にも上場せられて以來、操劇並に歌舞伎に繰返されて今日に及んでゐる。なほ新歌舞伎十八番の一なる『蓮生物語』は、三段目切から脫化した熊谷蓮生坊の後日物語であつて、是も有名である。

二　義太夫劇衰頽期

衰頽期の概觀

寶暦六年に竹本座の作者兼座本の竹田出雲が世を去つてから、寛政の終頃までの四十年間は操劇の衰頽期である。是より先寬延元年に吉田文三郎と竹本此太夫の衝突の結果、東西二座の太夫の入替があつたのは、操芝居が衰運に向ふ第一歩であつて、其の後も屢同じやうなことが繰返された。寶暦元年には竹本座の立作者並木宗輔が歿し、同七年には更に竹田出雲を喪ひ、同九年には人形遣の名手吉田文三郎が退座し、又出雲の死後竹本座の座本となつた竹田近江は豪奢を極めた廉によつて寶暦十一年に入牢した。次いで明和元年には豐竹座の創立者豐竹越前少掾(豐竹若太夫)が、六十年來守り立てた其の座の衰運を憂ひながら世を去り、翌年に豐竹座は遂に退轉するに至つた。一方竹本座は同じ年に二代政太夫を喪ひ、明和三年には兩座に勤めた豐竹上野少掾(内匠理太夫)が歿し、明和四年十二月には豐竹座と同じ運命に陷つて中絕し、竹豐二座の跡座では、歌舞伎芝居が上演せられるやうになつた。其の後豐竹座は明和四年に豐竹此吉が座本となつて、北堀江に於て再興せられたが、殘骸に過ぎないのであつて、事實上は明和二年に滅んだのである。豐竹座は元祿十六年の創立以來六十二年の命

兩座の轉退

脈を保つた。又竹本座は明和六年に竹田新松を座本として再興せられ、明和八年正月には近松半二の傑作『妹脊山婦女庭訓』が大當りで、數年以來の不入を一時に取返したが、それ以後は僅かに名殘を留めるに過ぎなかつた。明和八年は初代義太夫が櫓を揚げた貞享二年から數へて八十七年になるが、事實上は五年前の明和四年に絶えたのである。

近松半二

竹豐兩座の末路を飾つた作者は竹本座の近松半二（天明三年歿五十九）である。父は伊藤東涯の門に學んだ大阪の儒者穗積以貫であるが、半二は青年の頃放蕩に耽り、家學を捨てて出雲の門に入つて淨瑠璃作者となつた。父以貫は近松門左衛門と親交があり、半二も近松の作を敬慕してゐたので近松を名乘つた。寶暦元年の作『役行者大峯櫻』に始めて作者の名を列ねて以來、三十三年の作者生活を送る間に五十餘曲を作つてゐるが、其の大部分は出雲・松洛・竹本三郎兵衛等との合作である。三郎兵衛は吉田文三郎の子文吾で、父の後を嗣いで竹本座に出勤し、又竹本三郎兵衛の名で作者としても活躍した。半二が操劇衰頽期に現れて一時人氣を挽回する事が出來たのは、其の作が舞臺藝術としての效果を收めた爲であるが、これには舞臺技巧に長じた三郎兵衛の助力が大いに與つてゐる。半二の淨瑠璃には近松の作を書替へたものや、歌舞伎脚本を摸倣したものが多い。

半二の名作

半二を中心とする合作淨瑠璃の中で好評を得たものを年代順に擧げれば、『奥州安達原』（寶暦十二年九月興行）、『本朝二十四孝』（明和三年正月興行）、『太平記忠臣講釋』（明和三年十月興行）、『關取千兩幟』（明和四年八月興行）、『傾城阿波鳴門』（明和五年六月興行）、『近江源氏先陣館』（明和六年十二月興行）、『妹脊山婦女庭訓』（明和八年正月興行）、『伊賀越道中雙六』（天明三年四月興行）等である。又半二の單獨作で人氣のあつたのは『お染久松新版歌祭

文』(安永九年九月興行)である。(以上竹本座若しくは竹田新松座上演)『奥州安達原』は前九年の役後に安倍貞任宗任兄弟以下の一族が再擧を謀る事を主題とし、是に奥州に關係のある善知鳥の傳説と、安達原の鬼女の傳説を加へて脚色した作品で、上場の翌年には歌舞伎に移されて大當りであつた。『太平記忠臣講釋』は當時好評を以て迎へられ又歌舞伎にも移されて今日まで演じられてゐるが、『假名手本忠臣藏』及び『鬼鹿毛無佐志鐙』を粉本としたもので創意に乏しく、全曲の統一も缺けてゐて合作の弊に陷つてゐる。次に『傾城阿波鳴門』は近松の『夕霧阿波鳴門』の書替であり、『伊賀越道中雙六』は奈河龜輔の脚本『伊賀越乘掛合羽』を淨瑠璃に移した近松東南作の、同じ題名の作を藍本として改作した曲である。又半二獨作の『新版歌祭文』は、海音の『袂の白しぼり』及び之を改作した菅專助作『染模樣妹背門松』(明和四年十二月興行)を粉本とした作で、半二の名曲の一つである。以上擧げた諸作よりも更に種々の意味に於て注意すべきは次の四篇である。

本朝二十四孝

『本朝二十四孝』は半二が三好松洛・竹田因幡・竹田小出・竹田平七・竹本三郎兵衞等と合作したものである。近松の『信州川中島合戰』を原據とし、信玄と謙信の確執を題材に取つた諸作を參酌した曲で、筋を複雜にし技巧を凝らした點に半二の特徴が認められる。其の筋は極めて錯雜してゐるが、要するに武田上杉兩家の謀將山本勘助と直江山城守の智略の展開を中心とし、これに信玄の子勝賴と其の身代に立つ蓑作とを繞る、八重垣姫と濡衣の情事などを配したもので、題名は三段目の勘助住家に於ける筍掘りに因んだのである。此の作は四段目に於て、見物席を斜に割つて御殿をせり上げにしたのが

人氣を呼んで大當りを取り、同年五月に大阪の中座にて上演せられて以來、歌舞伎並に操劇に繰返し演じられた。

關取千兩幟

『關取千兩幟』は半二・松洛・竹田文吾・同小出・八民平七・竹本三郎兵衞の合作で九段から成る。此の作は當時大阪の人氣相撲の稻川と千田川を標本とし、『雙蝶々曲輪日記』の力士達引の趣向を借りて脚色したもので、二段目の岩川内の段は最も有名である。此の段には關取岩川（後の操劇では猪名川に改めてゐる。）が、義理の爲に晴れの勝負を鐵ヶ嶽に讓らうと覺悟する苦衷と、それを悟つた岩川の戀女房おとわが自ら身賣して、入用の金子二百兩を以て夫を救ふといふ切實な人情を寫してゐる。本曲は明和六年に歌舞伎に移され、又淨瑠璃としては一二の改作が現れ、他流にも語られて今日に至つてゐる。

近江源氏先陣館

『近江源氏先陣館』は半二を立作者とし八民平七・三好松洛・竹本三郎兵衞以下數人の合作で、再興の竹本座に上演せられた。大坂陣の史實を題材として脚色したもので、同じ題材を取扱つた淨瑠璃には海音作『義經新高館』（享保三年豐竹座興行）、並木宗輔作『南蠻鐵後藤目貫』（享保二十年、豐竹座上演）及び其の改作『義經腰越狀』（寶曆四年豐竹座上演）等がある。此等は題名によつて明かであるやうに、當時幕府の禁制を憚つて、何れも時代を鎌倉時代又は南北朝時代とし、人物事件も其の時代のものに假託してゐる。本曲は此等の諸作を粉本とし更に趣向を凝らしたもので、世界を鎌倉時代に取つてゐる事は、從來の諸作と同じである。九段から成つてゐて、最も名高いのは第八段の盛綱陣屋で、是に次ぐのは第六段の四斗兵衞住家である。盛綱陣屋の段は全篇の眼目であつて、高綱の首實檢の場に於て、一子小四郎が父の僞首を誠らしく見せかける爲に、それに取附いて切腹する健氣な最期と、其の痛ましさに感激して、時政公を欺いて高綱の首に相

違なしと斷言する盛綱の苦衷とは、觀客の涙をそそる場面である。此の作は明和七年に歌舞伎にも移されて以來屢演じられて好評を博した。なほ本曲は豐臣氏の末路の史實を脚色した戯曲を大成した傑作であつて、後の時代物に多大の影響を與へて居る。

妹背山婦女庭訓



「妹背山婦女庭訓」番附（明和八年正月）

最後に『妹背山婦女庭訓』は明和八年正月に近松半二・松田ばく・榮善平・近松東南等が合作した五段物で、王代物の傑作と稱せられてゐる。謠曲・幸若舞・淨瑠璃・歌舞伎等の大職冠物によつて、俗耳に熟してゐる鎌足の入鹿討伐の事件を主材とし、之に京阪人士に遍く知られてゐる猿澤池の采女衣掛柳の傳説、神鹿殺しの科によつて石子詰に遭つた十三鐘の傳説、及び謠曲『三輪』の苧環の說話などを取入れて、複雜な趣向を凝らした作である。此の曲は惡人の入鹿を滅す主題よりも、寧ろ表面に不忠を裝ひ、内心に忠節を勵む大判事清澄と太宰小貳定香とが、忠義と相互の確執と我が子に對する愛情と、此の三つの板挾みになつて苦悶する悲壯な情義を寫し、之に清澄の子息久我之助と定香の愛娘雛鳥とが、死後に於て夫婦となる悲戀を

織り込んでゐるのであつて、三段目切の山の段が其の眼目である。三段目は天智天皇と釆女を入鹿の毒手から救ふ第二段を承けて展開せられるのであつて、吉野川を挾む妹山脊山の美しい背景の前に於て、相愛の久我之助と雛鳥以下の義士節婦が演ずる悲壯な人情悲劇は、樂劇として稀に見る美しい場面である。是に次いで名高いのは四段目であつて、烏帽子折に身を窶してゐる鎌足の嫡子淡海を中心に戀を爭ふ、入鹿の妹橘姫と杉酒屋の娘お三輪が、互に苧環を手繰つて入鹿の三笠山の御殿に行き、共に愛人の爲に美しい犧牲となるのも、亦觀衆の喝采を博する場面である。此の曲は初演の年に大阪で歌舞伎に演じられ、安永七年には江戸でも興行せられて以來屢繰返された。又四段目の道行は富本及び常磐津の「お三輪」となつて語られてゐる。

菅專助

近松半二が操芝居の最後の名作者として活躍してゐた頃、豐竹座の作者に菅專助(生歿未詳)があつて、其の座の末路に注意すべき作を遺した。專助は太夫名を豐竹光太夫と云ひ、明和から寛政三年までの間に二十五六曲を綴つた。時代物世話物共に得意であつたが大部分は改作である。歌舞伎狂言の脚色を應用して、劇的效果を收める事に長じてゐたから、其の作品は歌舞伎に多く演じられたが、伎倆は素より半二に及ばなかつた。說經節や古淨瑠璃で名高い俊德丸の說話を素材とした若竹笛躬との合作「攝州合邦辻」(安永二年北堀江座興行)は時代物の傑作であり、紀海音作「お染久松袂の白しぼり」を改作した「染模樣妹背門松」(明和四年北堀江座興行)は世話物の代表作である。菅專助は上方の淨瑠璃界に現れた最後の作者であつて、其の後には著しい作者がなく、文化以後上方には殆ど新作が絶えた。但し近松柳・近松湖水軒・近松千葉

軒谷作の『繪本太功記』(寛政十一年道頓堀若太夫座初演)は上方淨瑠璃の最後の名曲である。此の曲は岡田玉山の『繪本太閤記』中の、光秀を中心とする前後の事を素材として脚色したもので、幕末期の操芝居及び歌舞伎芝居に流行した多くの太閤記物中の傑作である。

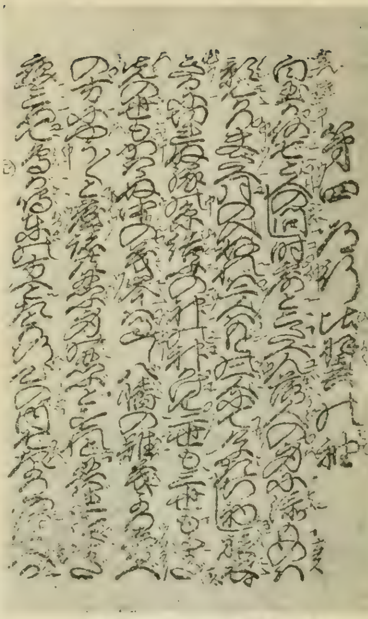
江戸の作者

以上述べたやうに、上方の淨瑠璃は文化以後全く振はなくなつたのであるが、轉じて江戸を見ると、明和安永期には福内鬼外や紀上太郎等の名作者があつて、淨瑠璃史上に最後の光彩を放つた。今此等の作者竝に作品に就いて述べるに先立つて、江戸の義太夫節の事を一言して置く。江戸に義太夫節が移されたのは、竹本座の人形の名人辰松八郎兵衞が正德年間に江戸に下つて、操芝居を興行したのに始まる。享保の末頃八郎兵衞が歿すると共に辰松座は絶えたが、新たに豐竹肥前掾が下つて、元文年中に江戸肥前座の櫓を揚げて義太夫節を流布し、次いで寛保元年の冬に豐竹越前少掾(若太夫)が駒太夫以下の名人を率ゐて下り、江戸肥前座で名聲を揚げて以來、江戸の淨瑠璃及び操芝居は義太夫節によつて統一せられた。其の後延享三年の大火に、江戸に於ける從來の説經節半太夫節外記節等の諸座が燒失した後、上方から義太夫節の太夫が續々江戸に下つたので、明和の頃には遂に江戸淨瑠璃の全盛を見るに至つた。當時江戸の操芝居には、肥前座・外記座・結城座の三座が相竝んで盛況を競ひ、作者には福内鬼外や紀上太郎等があつて、上方に代つて最後の盛況を呈した。尤も江戸の義太夫節は語るよりも謠ふ傾向が著しいのであつて、其の曲風が完成したのは此の頃である。

福内鬼外

福内鬼外は平賀源内(一一四四頁を參照)の淨瑠璃作者としての戲號である。明和七年正月外記座に上演した

『神靈矢口渡』を初作とし、『源氏大草紙』(明和七年肥前座初演)、『弓勢智勇湊』(明和八年肥前座初演)、矢口渡の後日譚『荒御靈新田神德』(安永八年結城座興行)其の他三曲を綴り、又歿後に興行せられた遺作に『靈驗宮戸川』(安永九年肥前座初演)・『實生源氏金王櫻』(寛政十一年肥前座初演)の二曲がある。此等の曲中には吉田仲二や二世森羅萬象(源平藤橘)等との合作もあるが、大部分は鬼外の筆に成つたと思はれる。鬼外は戯作に於ては諷刺的な滑稽本を多く書いたが、



神靈矢口渡

淨瑠璃はすべて時代物であつて、怪異趣味を混へたものが多い。『神靈矢口渡』は鬼外の代表作であり、又江戸の淨瑠璃の代表的作品である。南朝の忠臣新田義貞の子新田左兵衛佐義興が、武州矢口渡で足利勢の爲に謀殺された事件(太平記にある)の後日譚として、義興の弟義岑や遺臣の活躍を寫し、是に義岑と遊女臺の情事と、義岑に對する渡守の娘お舟の悲戀を絡ませ、且つ新田明神の緣起を結び附けた作である。外題は武藏國荏原郡矢口村(現在東京市蒲田區矢口町)の新田明神の靈驗を取入れたのに因る。五段組織の作で、三段目由良兵庫邸に於ける兵庫之助が、一子友千代を若君の身代とする場と、四段目に於ける渡守頓兵衛の一人娘お舟が、義岑の身代となつて父の刃に斃れる場とは全篇の眼目である。構想は鬼外の創意に成つたのであるが、脚色には『一

谷嫩軍記』『菅原傳授手習鑑』『義經千本櫻』其の他の影響を多く受けて居る。傳ふる所によれば、新田神社の神官が或日作者を訪れて社殿の荒廢を歎き、且つ其の復興に就いての援助を請うたので、鬼外は日ならずして此の作を書いたが、忽ち滿都の喝采を博し、是より新田明神に參詣する者が多くなつたので、堂宇の修復も忽ちに成つたと言はれて居る。此の作に寫された義理人情や人物の性格等には、上方淨瑠璃に見られない特色があり、又音樂的要素が豐かである點などに、江戸淨瑠璃の特徴が認められる。此の作は寛政六年江戸桐座で歌舞伎に演じられて以來、繰返されて今日に及んでゐる。

其他の作者

福内鬼外に次いで作者として名を知られたのは、紀上太郎・松貫四・吉田角丸、及び鬼外の門人森羅萬象等であつて、安永天明の頃まで江戸の淨瑠璃には相當見るべきものがあつた。今日なほ生命を有する『戀娘昔八丈』『糸櫻本町育』『碁太平記白石噺』『生寫朝顏話』等は當時の著名な作品である。『戀娘昔八丈』（安永四年江戸外記座初演）は松貫四・吉田角丸の合作に係るお家物である。享保十二年江戸新材木町の材木商白子屋の娘お熊が、入聟を嫌つて手代の忠七と通じた上に、下女を唆かして聟を殺さうと謀つた事が表沙汰になり、お熊忠七を始めとして父母下女などがそれ〴〵處刑せられた事件を、萩原家のお家騷動に附會した作である。題名はお熊が牽かれた時白無垢に黃八丈の小袖を重ねてゐたのに因る。

紀上太郎と其の名作

『糸櫻本町育』（安永六年外記座初演）は次の『碁太平記白石噺』と共に紀上太郎の作である。紀上太郎は三井南家の主人治郎右衛門高業（寛政十一年歿五十三歳）の戲號である。高業は江戸駿河町に住み、幕府の爲替御用達を勤める傍學者文人と交り、鯛屋貞柳の門に入つて狂歌に長じてゐた。『糸櫻本町育』は元祿頃から俗謠に歌はれ

た、本町二丁目の絲屋の娘のお絲と手代左七の情話を仕組んだ歌舞伎狂言に據り、先行淨瑠璃の脚色を取入れて成つた當時評判の作である。本曲は同じ作者によつて後日譚が書かれて居り、又此の作の初演の年の秋には『本町育浮名花聟』と題して歌舞伎に演じられ、更に文化七年には鶴屋南北二世櫻田治助合作の書替狂言『心謎解白絲』（こころのなぞとけてしらいと）が演じられて益有名になつた。『碁太平記白石噺』（安永九年外記座初演）は享保三年奥州足立村の百姓四郎左衛門が、白石在で或劒客に殺されたのを、其の二人の娘が五年の後復讐した事件（六一二頁參照）から取材し、之を竹田小出雲・近松半二等合作の『太平記菊水之巻』（由比正雪・丸橋忠彌の慶安事件を南北朝の事柄に假託した作　寶暦九年竹本座興行）の世界に移した作である。『生寫朝顔話』は奈河晴助の脚本『けいせい筑紫𤢖』（つくしのつまごと）（文化十一年大阪角座初演）を淨瑠璃に改作したもので、現存する院本には增補の二字を冠し「山田案山子遺稿翠松園主人校補」とあるが、改作者は詳かでない。晴助の脚本は世に「朝顔日記」と呼ばれるもので、大阪の畸人芝屋司馬叟の長話「蕣」を近松徳叟が脚色したのが根元で、それが讀本になり、更に脚本の『生寫蕣日記』（文化九年堀江市の側芝居上演）となつたのを晴助が改作したのである。本曲は女主人公深雪と宮城阿曾次郎の戀物語を、大内家のお家騒動に結び附けた時代物であつて、辛苦の爲に盲女になつた深雪が、尋ねる夫の前とは知らず、琴の音に胸中の悲歎を漂はせて、聞く者の涙をそそる宿屋の段は最も有名である。

文樂座　淨瑠璃の發祥地である大阪には、竹本豐竹二座の退轉後の寛政の末頃に、淡路國出身の素人義太夫節の太夫植村文樂軒が、高津新地の席で興行を始め、更に文化年間に船場博勞町の稲荷境内に常芝居を設けた。これが現在の文樂座の起原である。

其の後盛衰があり、芝居も轉々して明治十七年に船場御靈神社境内に定小屋を設立したが、先年燒失したので、更に昭和四年に現在の位置に新築せられた。寛政以來百二十年の歴史を經、此の間に植村家は四代續いたが、明治四十二年から松竹土地建物興行株式會社の經營に移つて現在に及んでゐる。文樂座の義太夫節は豐竹の系統を引いてゐるのであるが、明治の攝津大掾によつて曲節の上に多くの變革が加へられた。(石割松太郎氏著『人形芝居雜話』に據る)

三　歌舞伎淨瑠璃と江戸長唄

江戸時代後期の劇場音曲

寶暦から文化文政期に至る間は、次の章に記す通り、歌舞伎芝居が漸く操芝居を壓倒して、全盛を極めた時代である。當時歌舞伎の中心は漸次江戸に移ると共に、江戸の芝居に於て所作事が急激に發達し、やがて完成せられた時代であるから、其の地に用ひられた歌舞伎淨瑠璃(所作事淨瑠璃)や長唄が、長足の發達を遂げたのは當然である。所作事は舞又は踊と振とから成るもので、舞と踊とは主として音樂の調子に從ひ、振は寧ろ詞章に應ずべきものであるから、其の地として發達した淨瑠璃は、自ら音樂的要素に重きを置き、又長唄は劇場音曲として取入れられた後は、劇的内容を多く收めるやうになつた。而して當時劇場に用ひられた音曲の主要なものは、義太夫節と豐後節系統の三流、及び江戸長唄である。此等の中で義太夫節は既に前代から歌舞伎芝居と交渉を開始して、所謂チョボ(義太夫淨瑠璃の詞章中で役者の臺詞以外の語る部分)の發生を見たのであつて、爾來所作事の地として重要な地位を占めて居る。今は義太夫節を除く外の淨瑠璃、特に豐後系の常磐津節・富本節・淸元節に

就いて略述した後に、地唄化せられた江戸長唄の事を併せて記すことにする。

前代の劇場音曲としての淨瑠璃には、外記節・半太夫節・河東節・一中節・豐後節等があつて、寶曆以後にも用ひられたが、當代になつて新たに所作事の地として盛に流行したのは、豐後節の系統から出た

豐後節

常磐津・富本・清元の三流である。豐後節は一中の門から出て享保十五年に受領した宮古路豐後掾（元文五年歿八十一）が獨立して創めた一流である。享保十九年に江戸に下り、得意の世話淨瑠璃を語つて世に持て囃されたが、元文四年に風敎上に害があるとして禁止せられた。（豐後掾は禁止前元文二年に京都に歸つた）是より先豐後掾の高弟宮古路文字太夫（安永十年歿七十三（一說六十七））は享保十九年に師と前後して江戸に下つてゐ

常磐津節

たが、豐後節禁止の後再興に努力し、寛保三年に漸く許されて芝居に出勤し、延享四年に常磐津（日本橋常磐橋の側に住んだのに因る）と改めた。常磐津節は此の文字太夫を祖として發達し、安永天明期を最盛時代として、所作事の地及び狂言淨瑠璃として重要な位置を占めるに至つた。其の曲風は豐後節より更に艶麗で且つ上品であつて、江戸人の好尙に適したので座敷淨瑠璃としても流行し、爾來江戸の代表的音曲として今なほ盛に行はれて居る。其の曲數は一千を超えてゐるが、現代に傳はつてゐるのは其の中の百數十曲である。就中『積戀雪關扉』（俗稱「關の扉」天明四年十一月桐座初演寶田壽萊作詞）『戾駕色相肩』（俗稱「戾り駕」天明八年十一月中村座初演初代櫻田治助作詞）『兩面月姿繪』（俗稱「葱賣」寛政十年九月森田座初演木村園夫增補）の三曲は最も名高い。最後に擧げた曲は、往來の「雙面」と「葱賣」の所作を合せ、之に道成寺の押戾しの趣向を取入れて、隅田川物と抱き合せたものである。左に冒頭の一節を抄出して置く。

名にし負ふ、月の武藏に影きよく霞を流す隅田川。岸をわくれば下總と昔は云うて今も猶、よしある人のこと問はば、ありのまに〳〵在原のまめな心を都鳥。群れつつ寄する白波は瀨々に堰かれてはつとして、伊達な浮世を渡守。　常世出〽川淀にうつす姿もおのづから、色ある露の水馴棹。さす手も遠き唐土の五湖の景色はいざ知らず。知るべを松の名にめでて緣も深きふたば草、葉ごしがくれの二人連れ、來るを遲しと待ち居たる。　常世〽待乳山夕ごえ來れば五百崎の、隅田河原に獨りかもねんとすさみしもことわりや。見ぬ唐土の八景はいざ知らず、はて面白き景色ぢやナア。それはさうと夫軍助殿の知らせ故、此所へお出でなさるる松若樣をさつきにからお待ち申して居るが、どうして此樣に遲い事ぢややら。ほんに待たるるとも待つ身になるなとは、よう云うたものぢやナア。〽暫し案じて佇めり。（以下省略）

富本節

富本節は常磐津文字太夫の門下常磐津小文字太夫（明和元年歿四十九）が、寛延の初頃分離して創めた流派である。小文字太夫は受領して富本豐前掾と名乘つたので、此の一派を富本節と云ふ。二代目豐前太夫の時、其の父小文字太夫の高弟齋宮太夫の助力を得て、歌舞伎芝居に出勤して以來隆盛になり、主として道行と所作事の地に用ひられ、又座敷淨瑠璃としても流行した。曲節は常磐津節よりも一層濃艷であり而も高雅な趣がある。文化から天保へかけての頃を隆盛期とし、天保以後は新興の清元節に壓迫せられて漸く衰へ、今は僅かに一縷の命脈を保つに過ぎない狀態になつて居る。初代以來の曲數は五百に達して居るが、長く行はれたのは其の中の凡そ四十曲である。其の最も名高い曲は二代目瀨川菊之丞七回忌追善として演じた『其俤淺間嶽』（通稱「淺間」安永八年三月市村座初演增山金八作詞）であつて、これに次いで名曲として

知られてゐるのは、夕霧伊左衞門の口說を作つた『春夜障子梅』(はるのよしやうじのうめ)（通稱「夕霧」天明四年森田座初演寶田壽來作詞）『義經千本櫻』の道行淨瑠璃として出した『幾菊蝶初音道行』(いくきくてふはつねのみちゆき)（通稱「忠信」文化五年五月中村座興行）等である。富本節の曲は大部分は清元節に語り直されてゐる。



鳥居清長畫「契情畢富士」の道行
（天明四年閏五月市村座興行）

圖版の清長筆錦繪は、天明四年閏五月市村座興行の「契情畢富士」の一番目道行の場（淨瑠璃ちどり戀の玉鉾）を畫いたものである。中央に立つてゐるのは三代澤村宗十郎の十郎祐成であり、後方中央の太夫は二代豐前太夫、脇は初代齋宮太夫である。（町田博三氏考證に據る）

清元節は富本節の流祖小文字太夫の高弟富本齋宮太夫を祖とし、其の門に學んだ二代齋宮太夫（文化九年に富本と分離して豐後路清海太夫と名乘つた）（文政八年刺殺せらる享年四十九）が師の歿後の文化十一年に、清元延壽太夫と稱へて獨立して創めた流派である。二代目延壽太夫の時に基礎が確立して以來富本を壓倒して榮え、豐後三流中最も人氣を集めた。其の曲節は清艷優美であり且つ讒みがあつて、江戶趣

味が豐かであるので、劇場音曲としては道行所作事等に用ひられ、又座敷淨瑠璃としては主として町人社會に歡迎せられ、時に上流にも迎へられた。尤も曲風は時勢に應じて改められ、一時は輕妙洒脫な趣味に向つたが、幕末期以來初代の風に接近して品位あるものとなり、現代に於ても常磐津と共にかなり盛に行はれて居る。清元節には段物は無く何れも端物であつて、大部分は世話物である。其の曲數は三百に達すると言はれて居るが、後世に傳はつたのは百二三十曲である。其の名曲は「北州千歳壽」（俗稱「北州」文化十五年春開曲大田蜀山作）、「深山櫻及兼樹振」（俗稱「保名」文政元年三月都座初演篠田金治作詞）、「色彩間苅豆」（通稱「かさね」文政六年六月森田座興行四代鶴屋南北作詞）、「〆能色相圖」（通稱「神田祭」天保十九年九月河原崎座興行三桝屋二三治作詞）、「六歌仙容彩」（天保二年三月中村座興行松本幸二作詞）中の「文屋」と「喜撰」等である。

其他の淨瑠璃

以上述べた常磐津節以下の淨瑠璃の詞章は、主として狂言作者の筆に成つたもので、時代を下るに從つて漸次通俗を宗とするやうになつた。江戸時代後期の淨瑠璃には、右に擧げたもの以外に、なほ豐後節から派生して上方に行はれた繁太夫節・薗八節・宮薗節等があり、江戸には同じく豐後節から出た富士松節、それから分れた新内節・鶴賀節などがあつて、劇場音曲として又民衆的語物として流行したが、其の勢力は前記の豐後三流には遙かに及ばなかつた。

江戸長唄

是までに述べた淨瑠璃とは全く異なつた歌舞伎音曲で、當代に大成せられたのは江戸長唄である。長唄は小歌や端歌に對して長篇の歌謠を云ふ。江戸に於ける長唄の名は、前代の延寶以來見えて居るが、劇場音曲として發達の途に上つたのは、元祿享保期からである。現存する「七福神」「矢の根五郎」

「傾城無間の鐘」「傾城道成寺」「風流相生獅子」（石橋の所作事）等は、享保頃江戸の歌舞伎芝居に用ひられた古曲である。次いで元文頃には、上方の女方佐野川萬菊の門弟佐野川市松が江戸に下り、役者を勤める傍美音を以て一中節や豐後節などを語つてゐたが、寶暦年間に富士田吉次と稱して長唄に轉じ、大いに名聲を揚げた。當時江戸には唄の名人が多く現れたが、殊に吉次は淨瑠璃節を加味した新曲即ち唄淨瑠璃を盛に作つたので、爾來江戸長唄は從來の形式を離れて、專ら淨瑠璃風のものとなつた。かくて江戸長唄は明和から寛政頃までの間に完成せられ、文化文政天保の頃隆盛期に達し、其の後引續き榮えて現代に及んで居る。

詞章

江戸長唄には謠手と三味線彈とがあつて、三味線方は多く杵屋の姓を名乘つたから、長唄の一名を杵屋物とも呼んで居る。江戸長唄は元來は歌舞伎本位の抒情的歌曲であつて、其の詞章はもと組歌と同じく、前後の關係を顧慮しない不統一なものであつたが、歌舞伎淨瑠璃の形式を取るやうになつてからの新曲には、戲曲的敍事的要素を持つたものが多く、勝れた歌曲は主として此等の中にある。其の詞章は主として狂言作者の筆に成つたものであるが、稀には謠手や三味線彈の作もある。曲數は凡そ二千に達して居り、素材の範圍は極めて廣いのであるが、主要なのは三番叟物・道成寺物・石橋物・草摺曳物・狂亂物・丹前物等である。

名曲

種々な意味で名曲として世に知られてゐるのは、道成寺物の位置を確立した『京鹿子娘道成寺』（解題、參照）、「鷺娘」と「うしろ面」で名高い『柳雛諸鳥囀』（寶暦四年四月、市村座所作事）、淸元の「吉原雀」の基となつた『教草吉原雀』（明和五年十一月市村座、所作事初代櫻田治助作）、「安宅」で知られてゐる『隈取安宅松』（通稱「安宅」明和

（六年十一月中村座興行）有名な「越後獅子」を含む「遲櫻手爾葉七字」（文化八年三月、中村座興行）、「藤娘」で知られてゐる「歌へすぐ〳〵餘波大津繪」（文政九年九月、中村座興行）、座敷用の名曲「吾妻八景」（文政十二年四代、杵屋六三郎作曲）、歌舞伎十八番の「勸進帳」（天保十一年三月河原崎座興行三代並木五瓶作詞）、祝儀物の代表曲「鶴龜」（嘉永四年十代杵屋六左衛門作曲）等である。左に揭げるのは「京鹿子娘道成寺」の冒頭の一節である。此の曲は寶曆三年三月、江戸の中村座で演じられた「男伊達初買曾我」（藤本斗文の作）の第三番目であつて、所作事の名優中村富十郎が江戸下りの初目見得狂言として、自ら振りを附け自ら白拍子を演じて、好評を博した名曲である。



京鹿子娘道成寺

〽鐘に恨は數々御座る。初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり。晨鐘の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響くなり。聞いて驚く人もなし、我も五障の雲晴れて、眞如の月を詠めあかさん。〽言はず語らぬ我が心、亂れし髮の亂るるもつれないは唯移り氣な、どうでも男は惡性者。櫻々と謠はれて、言うて袂のわけ二つ、勤さへ唯うかうかと、どうでも女子は惡性者、都育は蓮葉な者ぢやえ。〽戀の分里、武士も道具を伏編笠で、張と意氣地の吉原、花の都は歌で和らぐ敷島原に、勤する身は誰

と伏見の墨染、煩惱菩提の撞木町より難波四筋に、通ひ木辻に禿立から室の早咲、それがほんに色ぢや。一い二う三い四う、夜露雪の日の下の關路も、ともに此の身を親呢み重ねて、中は丸山ただ丸かれと、思ひそめたが縁ぢやえ。（以下省略）

大薩摩節

普通江戸長唄と稱するものの中には、本來の曲の外に同じ劇場音曲である大薩摩・めりやす・唄淨瑠璃などを包含させて居る。大薩摩は薩摩外記の流を汲んだ大薩摩主膳太夫（寶曆九年歿六十五）が創めた流派である。勇壯豪快を特色とするものであるから、主として荒事に用ひられた。其の家元は三代で絶えたので、文政以後は三味線方の杵屋の手に移り、江戸長唄の附屬の如く考へられるやうになつた。めりやすは上方に起り、享保頃から江戸の芝居に用ひられ、やがて江戸長唄に附屬して劇場音曲となり、安永天明頃からは宴席にも流行した。劇場用としては役者の臺詞の間や無言の動作に合せて、沈靜な調子で彈く三味線曲であつて、享保十六年中村座上演の『傾情福引名護屋』の第二番目の「無間の鐘」を嚆矢として居る。曲數は三百餘りある。歌は上方歌其の儘又は其の改作であつて、長唄より短く小歌よりは長い。次に唄淨瑠璃は歌舞伎の所作事の地に用ひる歌謠的要素に富んだ淨瑠璃である。既に述べたやうに、寶曆明和の頃富士田吉次によつて完成せられたもので、長唄が三下りを基調とするのに對して、淨瑠璃の基調である本調子によるものであり、又長唄が抒情的であるのに對して、敍事的であるのが著しい相違である。唄淨瑠璃は初め江戸在來の外記・半太夫・河東等の曲節を取つて成つたのであるが、吉次は更に一中・義太夫・豐後等の曲風を加味して之を完成したのである。

第十章　歌舞伎大成期の脚本

一　全盛期

江戸時代後期の歌舞伎

江戸時代後期は歌舞伎の大成時代であつて、是を上方江戸共に隆盛を極めた全盛期と、江戸を中心として榮えた爛熟頽廢期とに分つ事が出來る。正徳から寛延に至る四十年間は操芝居の極盛期であつて、此の頃歌舞伎は操の爲に壓倒せられてゐたが、寶暦以後再び興隆し、寛政に至るまでの五十年間は、京阪江戸共に歌舞伎の全盛期となつた。享和以後の七十年間は、京阪が衰へて中心が江戸に遷つたのであつて、其の前半の文化文政期は爛熟期であり、後半の天保以後は頽廢期である。

全盛期の狀況

歌舞伎の準備期から全盛期に至る間に、劇場建築や舞臺装置は長足の進歩を遂げて殆ど完成を告げた。卽ち享保九年に二階棧敷が免許せられて以後、樂屋を三階とするものが多くなり、建築が宏壯になるにつれて、舞臺竝に觀客席も完備するに至つた。大道具小道具などは元祿期の末頃既に相當發達し、花道の利用も其の頃江戸に始まつてゐたが、全盛期になると操芝居で發達した道具仕掛の影響を受けて、廻り舞臺が盛に利用せられ、更にセリ上げ・セリ下げ・ガンドウ・田樂返しなどが工夫せられて、脚色竝に演出に甚大の影響を與へた。次に狂言竝に演技に就いて言ふと、是まで淨瑠璃操劇に於て發達した劇的要素は殆どすべて攝取せられて、脚色演出共に空前の發展を遂げ、江戸の劇場音樂に

は義太夫節・宮古路節、次いで常磐津節・富本節及び江戸長唄が取入れられ、且つ歌舞伎化せられて、浪漫主義的な所作事が狂言毎に配せられるやうになつた。

全盛期の名優

全盛期に於ける歌舞伎芝居の盛況は凡そ右に述べた通りであるが、更に俳優を見ると、元祿以來の門閥の外に新たに多くの門葉を生じ、其の家の藝は代を重ねるに從つていよ〳〵圓熟し、又獨創的な新意匠が次々に現れて、演技は殆ど完全な發達を遂げた。試みに著名な俳優を擧げるならば、寶曆以前の上方の名優に姉川新四郎・中村十藏・中山新九郎があり、江戸に荒事の名人二代目市川團十郎（栢莚）寫實的藝風を得意とした澤村宗十郎（訥子）を筆頭に、大谷廣次・坂東彦三郎・市川團藏・市村羽左衛門等があり、東西の劇場に立つた女方に瀨川菊之丞があつた。此等より稍後れて現れた名優には、江戸に四代目團十郎を名乘つた二代松本幸四郎、二代廣次等があり、京阪と江戸の間を去來した立役に尾上菊五郎（梅幸）女方に中村富十郎があつて、東西兩劇壇は相對峙して盛觀を呈した。次いで安永天明から寬政にかけての極盛期には、上方に中村歌右衛門・中山文七・五代嵐三右衛門（雛助）等があつたが、此の頃文藝の中心は京阪を去つて江戸に遷りつゝあつたから、上方の名優で江戸に下る者が多く、江戸は上方に比して遙かに優勢になつた。即ち江戸には二代中村仲藏・四代松本幸四郎・五代市川團十郎（白猿）尾上新七・尾上松助（新七松助共に初代菊五郎の高弟）・女方の三代瀨川菊之丞等が居つて、江戸趣味の藝風を演じて滿都の人氣を集めた。

當時の狂言作者

次に寶曆を中心とする全盛期には、天才的な狂言作者が續々現れて、それ〴〵系統を開き、其の劇

作法は役者の技藝と同じく代を重ねて益進歩した。尤も當時の狂言は在來の名狂言の接合、若しくは淨瑠璃の書替が多く、而も作者は役者の指圖を待つて執筆したのであるから、其の作品は役者本位であつて、名優の得意な技藝を見せる爲に脚色せられたのが多い。從つて當時の脚本は淨瑠璃の作に比して遙かに劣つてゐる。以上で全盛期に於ける歌舞伎芝居の概況を終つたから、是より著名な狂言作者と其の作品に就いて述べる。

並木正三

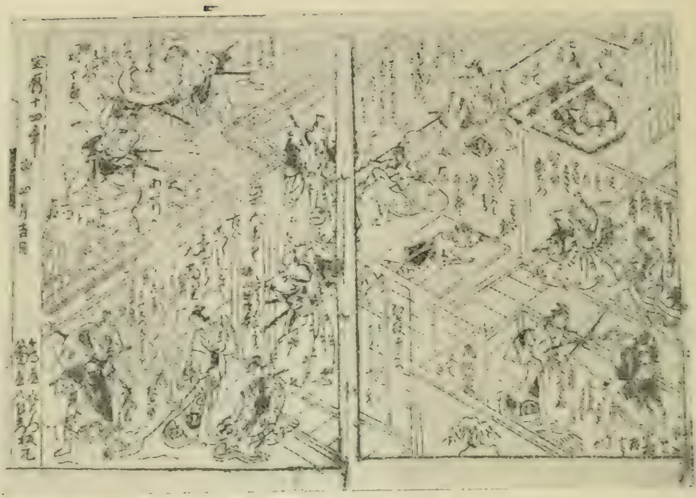
寶暦以前の操芝居極盛期には、劇作の心得ある者は殆ど淨瑠璃作者になつたから、歌舞伎狂言の作者には近松兵庫等以後注意すべき者が現れなかつた。然るに歌舞伎芝居が再び擡頭した寶暦頃から、上方にも江戸にも勝れた狂言作者が相踵いで現れた。先づ上方の作者に就いて言ふと、其の先驅となり又後の作者に影響する所の多かつた天才に、並木正三（安永二年歿四十四）があつた。正三は大阪道頓堀宗右衛門町の菓子商高砂屋平左衛門である。父が芝居茶屋泉屋の入壻となつたので、彼は幼少の頃から歌舞伎芝居や操芝居に出入してゐたが、寛延二年に並木宗輔の門に入つて淨瑠璃作者になり、一時豐竹座の爲に執筆した。併し其の本領は歌舞伎狂言であつて、間もなく狂言作者に轉じ、當時大阪の名優であつた中村歌右衛門や三桝大五郎等の爲に時代物殊に叛逆物を多く書いた。彼の作は淨瑠璃や狂言を書替へたり、取合せたものが多いので、譯文（はめもの）の名人と稱せられたが、獨得の脚色によつて新しい價値を有するものが多いのは、淨瑠璃作者としての修養に負ふ所が多い。彼は又操芝居の機巧を應用して、舞臺裝置に種々の斬新な工夫を創めたのであつて、當時名作者と呼ばれたのは、脚色上の伎倆と名優

狂言の代表作

の演出と舞臺裝置の新工夫とによるのである。

二十年許りの作者生活を送る間に書いた狂言は百種に達して居るが、就中當時傑作と言はれたのは、時代狂言の『けいせい天羽衣』『三十石艠始』『桑名屋德藏入船物語』『三千世界商往來』等である。

『けいせい天羽衣』（寶暦三年十二月大阪三桝定助座上演）は、當時諸國に疫病が流行し、其の咒に「キノニノハノモノ北川惣左衛門宿」と書いた札を家毎に張つたのを材料に取り、古淨瑠璃の『當流羽衣松』によつて脚色した規模の雄大な叛逆物である。即ち桂左衛門後の北川惣左衛門が山名宗全の陰謀の志を繼ぎ、「キノニノハノモノ」の暗號を呼び交はして、疫病神となつて天下を密行してゐる赤松四郎に邂逅し、協力して足利將軍家を覆さうとする事を仕組んだものである。此の狂言は實悪の名優歌右衛門の山名宗全と赤松四郎の役、及び大仕掛のセリ上げが好評を博して、翌年四月まで大入を續けたと傳へられて居る。



「三十石艠始」繪本番附（明和元年）

『三十石艠始』（寶暦八年十二月大阪中山文七座上演）は、安田蛙文の狂言『鰻娘山崎通』と、竹田出雲等の淨瑠璃『鰻

舞々曲輪日記』の趣村を借り、『假名手本忠臣藏』の脚色を應用した作である。此の狂言は大阪人に親しみのある河村瑞軒（三桝大五郎の役）を叛逆者に仕立てた構想と、數艘の三十石船が淀川を上る豪壯な場面と、大詰の廻り舞臺の裝置とが觀客を驚かして大當りであつたと云ふ。『桑名屋德藏入船物語』（明和七年十二月大阪中川吉太郎座上演）は、大膽不敵な船乘の桑名屋德藏が、海上で亡靈と問答した說話を、丸龜のお家騷動に結び附けた叛逆物で、複雜で變化に富んだ脚色が、中村歌右衞門等の演出と相俟つて喝采を博した。最後の『三千世界商往來』（安永元年正月大阪市山助五郎座上演）は『桑名屋德藏入船物語』の好評に刺戟せられて、更に在來の淨瑠璃や自作の淨瑠璃『容競唐土噺』（明和五年）などによつて雄大な構想を試みたもので、異國情調を漂はせた脚色と、俳優の技藝と、大詰の三段返しの舞臺裝置とによつて、一大成功を收めたと稱せられて居る。要するに正三は時代歌舞伎を完成し、且つ舞臺裝置に種々の工夫を凝らした一大功勞者であつて、彼が冐した並木氏は次々に門下によつて繼承せられて狂言作者の門閥となり、明治維新前まで劇界に重きをなした。正三と同じく並木宗輔の門に學んで、淨瑠璃と歌舞伎の作者を兼ねた者には、なほ並木丈輔・並木永輔等があつたが、殊に名高いのは正三の高弟奈河龜輔（なかはかめすけ）と並木五瓶とである。五瓶は後に江戸の狂言作者として名を成した人であるから、便宜上後に述べる。

奈河龜輔

　奈河龜輔（生歿未詳）は奈良に生れ、放蕩の爲に身を持崩して河内の緣家に寄寓した事があるので、奈良と河内に因んで奈河と名乘つたと傳へられて居る。正三の門に入り、大阪にあつて明和天明の二十餘年間に狂言作者として活躍した。現在知られて居る作は五十篇許りあるが、世話物は凡そ十篇で他は時代

物である。其の傑作は「競伊勢物語」「伊賀越乘掛合羽」「伽羅先代萩」「加々見山廓寫本」「殿下茶屋聚」



「加々見山廓寫本」辻番附（安永九年）

筆であつて何れも時代物である。「競伊勢物語」（安永四年四月大阪嵐松治郎座上演）は業平の傳説を主材とし、正三の「惟喬惟仁御位諍」を參酌して脚色した筋の複雑な作であり、「伊賀越乘掛合羽」（安永五年十二月大阪嵐七三郎座上演）は從來の伊賀越仇討の狂言を大成したもので、近松東南の浄瑠璃「伊賀越道中雙六」、及び半二の同じ題名の浄瑠璃の藍本となつてゐる。（一二六八頁參照）「伽羅先代萩」（安永六年四月大阪中の芝居上演）も伊達騒動を脚色した在來の狂言の集成作であつて、浄瑠璃の「伽羅先代萩」（松貫四吉田角丸等の合作天明五年正月結城座所演）は、此の脚本に歌舞伎及び浄瑠璃の「伊達競阿國戯場」を參酌して成つたものである。次に「加見山廓寫本」（安永九年九月京布袋屋芝居上演）は加賀騒動に謠曲「望月」の復讐譚、浄瑠璃のお菊幸助の説話、及び俳人加賀千代の傳などを配した結構の雄大な作である。此の狂言は容楊黛作の浄瑠璃「加々見山舊錦繪」（天明二年）に取入れられて以來、其の後日狂言や書替が續出し、又合巻『北雪美談時代加賀見』に影響を與へてゐる。最後

い殿下茶屋聚』天明元年十二月大阪嵐川由吉座上演 は實錄で知られてゐる天下茶屋の仇討を大坂陣に取入れた作で、翌年二月まで打續けられた當狂言である。龜輔は正三の後を承けて時代狂言の諸様式を確立した人であつて、其の劇作上の法則は後の作者に廣く影響した。尤も彼の脚色は稍煩雜に過ぎるので、後世多くは省略して演じられた。正三の作は淨瑠璃に據る所が多かつたが、龜輔は新たに實錄や講釋から廣く取材し、且つ脚色上の法則を定めて、後の作者に多大の影響を與へたのであつて、時代歌舞伎の完成者と稱せられて居る。彼の門下で最も名高いのは奈河七五三助で、龜輔の名は七五三助の高足奈河篤助が嗣いだ。かくて奈河は並木と相並んで、幕末に至るまで上方作者の名流となつた。

津打治兵衛

續つて江戸を見ると、當期の作者の先輩として、享保から寶暦の頃にかけて活躍した津打治兵衛 寶暦十年歿七十八(一說八十二) がある。治兵衛は江戸歌舞伎中興の作者と稱せられ、其の門流から多くの作者を出し、又彼の後に次々に作者が現れて、江戸の狂言作者は漸く上方と對峙する狀態となつた。津打治兵衛は幼名を治三郎、俳名を英子と云ひ、大阪の俳優兼狂言作者津山治兵衛 初代津打治兵衛 の子であるが、元祿の末頃江戸に下り、二代目團十郎の藝風に適した江戸前の作を書いた。其の後長い作者生活を送る間に、時代世話混淆の作百數十篇を書いたが、此等の中には合作が多い。其の代表作と見るべきものは、清水清玄と丹波與作とを取合せた『一心二河白道』寶永七年三月中村座上演 (江戸の五番續の狂言は此の作から四番續となつたと言はれて居るのは、是が名作であるが爲であらう。)曾我の狂言に揚卷助六の事を仕組んだ『式例和曾我』享保元年正月中村座上演、盛綱の藤戸の先陣と累殺しの與右衛門とを組合せた『大角力藤戸源氏』享保十六年正月中村座

上演）曾我の狂言に八百屋お七を結合した『寶曾我女護島臺』（元文三年正月、中村座上演）、同じく曾我の狂言に景清・助六・累（かさね）などを組合せた『初髻通曾我』（はつもとゆひかよひそが）（元文四年正月、市村座上演）、淡島（あはしま）の狂言に清玄を挿んだ『淡島案花髻』（寶暦三年五月、市村座上演）等である。此等によつても知られるやうに、彼は時代物と世話物との綯交（ないま）ぜを得意としたのであつて、此の作風は其の後江戸歌舞伎の特色として長く行はれた。門下の津打傳十郎（明和八年歿）は寶暦三年から三代治兵衛と名乘つて、淨瑠璃と歌舞伎の作者を兼ねてゐた。

藤本斗文

津打治兵衛と略同じ頃の作者に藤本斗文（生歿未詳）があつた。三代澤村長十郎事宗十郎の門に入り、長作と稱したが、後に脚本作者に轉じ、元文三年に立作者となり、治兵衛に次ぐ作者と稱せられた。初めは市川海老藏の爲に書き、後に大谷廣次及び中村助五郎の爲に書いた。趣向の名人で男達や角力取の狂言を得意とし、又舞臺裝置の工夫にも長じてゐた。津打九平次との合作『初髻通曾我』（はつもとゆひかよひそが）（元文四年正月、市村座上演）中村清三郎との合作『男文字曾我物語』（寛延二年正月、中村座上演）、『男伊達初買曾我』（寶暦三年正月、中村座上演）等は代表作で、何れも大當りであつた。殊に最後の狂言は六月十日まで打續け、此の當りを祝ふ爲に五月二十八日に舞臺上で曾我祭を行つて以來、毎年催される事になつたので有名である。

壕越二三次

治兵衛や斗文より稍後に現れた江戸の作者は壕越二三次（にさうじ）と金井三笑である。壕越二三次（安永七年歿五十八）は初め澤村宗十郎の門下となり、澤村二三次と名乘り、延享二年に始めて市村座に出たが、後に作者に轉じ、寛延三年に立作者の地位を得て以來壕越と改姓し、明和八年に名を菜陽と改めた。二三次は立作者としての初作『初髻伶人袖』（れいじんのそで）（寛延三年十一月森田座上演）から、絶筆の『從韓貢入船』（安永六年十一月森田座上演）に至るまでの

二十六七年間に、七十篇許りの脚本を書いたが、(此等の中には合作も少くない)大部分は時代狂言を世話にくづしたものである。舞臺上の經驗を積んだ作者であるから、場面の變化を得意とし、又一狂言中に一幕の淨瑠璃物（主として常磐津節）を加へる常例を開き、又道具立にも新工夫を創めて、後の作者に多大の影響を與へた。是より先斗文は名題の文字に意匠を凝らしたのであるが、二三次は文才があつて淨瑠璃に名文を綴り、又斗文に傚つて名題に意を用ひて、『花街曲輪商曾我』（寶暦二年正月、中村座上演）『由良千軒嚔湊』（同四年七月、市村座上演）『色蒔繪曾我杯觴』（安永二年正月市村座上演）等の如く、凝つた名題並に文字を使つてゐる。これも後の作者に範を垂れた。

金井三笑

金井三笑（寛政九年歿六十七）は通稱を金井筒屋半九郎と云ひ、代々中村座の手代であつたが、斗文に就いて劇作法を學び、寶暦四年に三平と稱して作者となり、世話狂言を本領として菜陽と並び稱せられた。三笑も舞臺上の意匠に長じ、道具幕・書割幕・遠見の折返しなどを創めて觀客を驚かし、又文才があつて長唄常磐津富本等の作詞者として名高かつた。其の名作は今の助六劇の型を定めた『江戸紫根元曾我』（寶暦十一年正月市村座上演）、『義經記』の堀川と高館を主材とする『日本花判官贔屓』（同年十一月、中村座上演）歌舞伎十八番の一の『蛇柳』を含む『百夜草鎌倉往來』（寶暦十三年七月中村座上演）、曾我と梅若と小栗を組合せた『色上戶三組曾我』（明和二年正月市村座上演）以下甚だ多い。殊に最後に擧げた作は大當りであつて、是より三平を改めて三笑と稱した。

菜陽三笑が代表してゐた頃、江戸の歌舞伎は漸く上方を凌ぐほどの繁昌を來したが、其の狂言は時代世話の混合が多く、脚色も從來の狂言の取合せが多いのであつて、未だ上方の狂言の上に出る事は

出來なかつた。然るに菜陽三笑等に次いで現れた櫻田治助が江戸世話狂言を確立し、且つ舞踊劇に非凡の才を發揮し、又上方から下つた並木五瓶が東西の作風を融合すると共に、時代世話の混亂を救つて以來、江戸の劇壇は始めて上方を凌駕するやうになつた。櫻田治助（文化三年歿七十一）は藤田氏で、通稱を笠屋善兵衛と云ひ、俳號を左交と云つた。寶暦三年に津打治兵衛の門人となつたが、後に壕越菜陽に就き、寶暦八年から作者生活に入り、同十年に上京して上方狂言を學び、明和元年の冬江戸に歸つた。やがて三代市川團藏の恩顧を受けて、明和五年に市村座の立作者となり、同年春興行の『江戸花陽向曾我』を出世作として次々に名作を發表した。初めは三代市川團藏・五代市川團十郎等の爲に書いたが、安永七年團十郎が中村座を退いて後は、四代松本幸四郎と提携し、其の藝風に適する脚本を書いて、世話狂言作者として大いに名を揚げた。名作として知られてゐるのは中村座上演の『御攝勸進帳』（安永二年十一月）、『伊達競阿國戲場』（安永七年七月）、『劇場花萬代曾我』（天明元年四月）、『江戸花三升曾我』（天明三年正月）、『大商蛭小島』（天明四年十一月）、『契情吾妻鑑』（天明八年正月）などである。治助は時代と世話を兼ねた作者であつて、其の脚色の範圍は極めて廣く、殊に得意とする世話狂言に巧みに世態風俗を寫し、臺詞は輕妙で警句に富んでゐるので、江戸趣味に投合して大いに歡迎せられた。治助は一番目と二番目の間に截然たる作意の別を立て、二番目に三日毎に變つた作意を見せるやうな趣向を試みて好評を得た。斯かる趣向はやがて時代世話が分離せられる機運を促したのであつて、治助の功績の一である。當時は狂言毎に必ず一幕の淨瑠璃による所作事を演ずるのが慣例であつたが、治助は常磐津富本の淨瑠璃や長唄を百二十餘曲綴つて、

所作事に非凡の手腕を揮つた。彼の才は脚本に於てよりも、寧ろ此等の詞章に發揮せられてゐるのであつて、舞踊劇の發達に一大貢獻をした。治助はかなり長い作者生活を續けたから、其の門から幾多の作者を輩出した。門弟の松島半二は二代治助であつて、其の門下の三代治助は幕末に於ける江戸の代表作者の一人である。

並木五瓶

並木五瓶（文化五年歿六十二）は前半生を京阪の劇壇に過ごし、後半生を江戸で送つたのであつて、當時の狂言作者として極めて重要な位置を占めてゐた。大阪道修町の和泉屋と云ふ役木戸（劇場の木戸番頭）の子で五八と云ひ、初め煙草屋を營み、後に今宮で一時酒屋を營んでゐたが、並木正三の晩年に其の門下となつて狂言作者となつた。作者生活に入つたのは何時頃であるか詳かでないが、安永元年（二十六歳）には角の芝居小川吉太郎座の立作者並木十助の配下として出てゐる。（伊原青々園氏は、五瓶は初め並木十助の門下となり、後に並木正三の弟子となつたのであらうと言つて居られる。）安永二年に五八を吾八に改めたが、此の年師匠の正三が歿した。次いで安永三年の暮に京都に於て立作者となり、翌年に再び大阪に歸り、やがて五兵衛と改名したが、天明六年には文字を改めて五瓶と稱した。上方に於ては主として大阪の角の芝居に在つて、初代尾上菊五郎・嵐雛助・中山文七・中村富十郎・淺尾爲十郎等の爲に執筆した。（以上前期）其の後寛政六年の冬四十八歳の時に、三百兩の給金で江戸堺町の都座に聘せられる事になり、三代澤村宗十郎に從つて江戸に下つた。これより歿するまで十四年間は、櫻田治助と對峙して多くの當り狂言を書いた。初めは三代澤村宗十郎三代瀨川菊之丞などの爲に書いたが、宗十

郎の歿後には、四代市川團藏五代松本幸四郎等の爲に筆を執つた。（以上後期）

五瓶が四十年の作者生活の間に書いた作品は百十餘篇に達して居り、殊に江戸作者としての伎倆は治助を凌いでゐた。前期の上方時代の最初の傑作は、菅公の一代記を脚色した『天滿宮菜種御供』（安永六年三月角の芝居上演）であつて、二幕目の切の時平の七笑は當時世評が高かつた。其の後の代表作は『金門五山桐』（安永七年四月角の芝居上演）、『けいせい黄金鯱』（天明二年十二月同座上演）、『島廻戯聞書』（寛政六年二月中の芝居上演）、『五大力戀緘』（寛政六年五月京の西の芝居初演）等である。『金門五山桐』は數ある石川五右衞門の狂言中の著名なもので、其の二幕目の南禪寺樓門の場面は獨立して用ひられ、今も時々演じられて居る。『けいせい黄金鯱』は、大凧に身を縛つて名古屋城の金の鯱の鱗三枚を盜んだ曲物の金助と、盜賊向崎甚内の巷談を、美濃の齋藤家のお家騷動に結び附けたもので、空想的要素の多い複雜な筋の狂言である。又『島廻戯聞書』は島津侯の琉球征伐に櫻風呂の菊野殺しを配したものである。其の三幕目以下の曾根崎五人斬を獨立させたのは即ち『五大力戀緘』であつて、同年五月に之を京西の芝居に上演して大當りを取り、是より三代宗十郎に重んぜられ、やがて伴なはれて江戸に下つた。江戸に於ける最初の作は、天草騷動を脚色した『花都廓繩張』（寛政六年十一月都座上演）であるが、上方風の狂言であつた爲に極めて不評であつた。江戸に於て名聲を轟かしたのは、寛政七年の春興行に都座で、一番目に『江戸砂子慶曾我』二番目に『五大力戀緘』を演じて、七十餘日間の好評を博して以來である。其の後の傑作には『青樓詞合鏡』（寛政九年三月桐座上演）、『月武藏野穐狂言』（寛政九年七月桐座上演）などであるが、最も歡迎せられたのは、梅の由兵衞と小三金五郎を新たに脚色した『隅田春妓女

容性』（寛政八年正月都座上演）、及び浮世草子淨瑠璃歌舞伎などで知られてゐる越前三國の玉屋新兵衛の昔譚を、深川を背景に脚色した『富岡戀山開』（寛政十年正月桐座上演）である。

五瓶の業績

江戸で書いた名作は何れも世話物であつて、二番目狂言として演じられた。從來江戸の狂言には時代物と世話物とを混淆した不自然な作が多かつたが、五瓶は兩者の間に截然とした區別を立て、一日の興行に於て一番目を時代物とし二番目を世話物としたのである。五瓶は上方下りの作者として、上方の理智的な作風を江戸に移し、在來の感情に偏して壯快を尙んだ不自然な江戸風の狂言に改善を試みたのであつて、彼は上方狂言作者の殿將であると共に、やがて出現すべき江戸の大劇作者鶴屋南北を導いたのである。五瓶は元來寫實を得意とし、人物の動きや筋の運びを合理化しようとした作者である。かくて彼は時代物よりも世話物に長じてゐたのであるが、是は一方に於て彼が結託した俳優が寫實風の世話事に堪能であつた爲でもあり、又時代の趨勢に促されたのでもある。五瓶の劇作上の識見は『作者式法戲財錄』（一卷續燕石十種卷一所收）によつて窺はれる。

上方最後の作者辰岡萬作

治助五瓶の二大作者が活躍した寛政頃、上方の歌舞伎は既に衰へて江戸が中心となつたのであつて、上方に於ける最後の作者は辰岡萬作と近松德叟である。辰岡萬作（文化六年歿六十八）は若女方辰岡久菊の子である。龜輔に就いて其の劇作法を承け、實錄講釋から取材し、是に世話を加味した時代物を多く書いた。萬作を祖とする辰岡系は幕末期にかけて上方の作者を代表してゐた。萬作の當り作は、大久保彥左衞門の傳說を太閤記の世界に取入れた『けいせい青陽鷦』（寛政六年正月、角の芝居上演）、白石の姉妹の復讐事件を脚色した

『姉妹達大礎』寛政七年正月角座上演、石田局と石川五右衛門を仕組んだ『艶競石川染』寛政八年四月角座上演、主君の遺児を抱いて毒酒を呑む加藤清正を取扱つた『けいせい遊山櫻』寛政九年正月中の芝居上演、蓮如上人の肉附面の傳説を脚色した『雪國嫁威谷』寛政十一年七月中の芝居上演等であつて、此等の多くは後輩近松徳叟との合作である。要するに萬作は時代物を得意とし、殊に傳説から素材を取つて、世話風の華麗な舞臺面を見せる事に長じてゐた。

近松徳叟

近松徳叟文化八年歿五十九は大阪坂町の娼家大桝屋の主人で、初め近松半二に就いて淨瑠璃作者となつたが、天明三年半二が歿し且つ歌舞伎芝居が興隆したのに刺戟せられて、狂言作者に轉じた。寛政七年に立作者となり、並木五瓶辰岡萬作などの先輩に引立てられ、殊に萬作とは屢合作した。寛政七年に立作者になつて以來、主として大阪に在つて、小説の飜案物(お家騒動)を多く書いて好評を博した。例へば『けいせい英草紙』文化四年正月、中の芝居上演、『梛白來也談』文化四年九月、角の芝居上演、『けいせい輝草紙』文化五年正月、角の芝居上演、『舞扇南柯話』文化五年九月中の芝居上演等は、其の名題によつて知られるやうに、それぞれ『英草紙』、『自來也説話』、『昔話稻妻表紙』、『三七全傳南柯夢』に據つた作である。徳叟が小説の飜案物を多く綴つたのは、當時讀本合卷などが社會の寵兒となつた爲であつて、是より狂言と小説の關係はいよ〳〵緊密になつた。

二　爛熟頽廢期

爛熟期の劇界

寶暦から寛政にかけての頃、東西の劇壇に於て著しい發展を示した歌舞伎は、文化文政期に其の中心が江戸に遷ると共に、江戸獨得の成長發達を遂げていよ〳〵爛熟期に入り、やがて天保期には行詰



江戸二丁町芝居圖（廣重畫）

つて漸次衰頽して行つた。文化文政期には時代狂言は既に固定し、江戸の民衆の之に對する興味も亦漸く去つて、世話狂言に集注せられた。世話狂言は前代の末頃までに一先づ完成せられた様式を承けて益寫實的になり、やがて徹底した寫實劇としての所謂生世話の流行を見るに至つた。鶴屋南北・河竹新七等の脚本は卽ちそれである。當時は社會一般が變化を求め、感覺的刺戟を欲した時代であるから、役者も狂言作者も大衆に迎合して、複雜にして變化の多い內容と形式を工夫する事に苦心した。從つて構想脚色は怪奇殘虐淫靡滑稽を織り交ぜた複雜多樣なものになり、殊に殘忍な殺し場と淫蕩的な濡れ場を中心とする變態的煽情的な美を描出す事を主とし、役者の演出舞臺裝置もこれに應じて特殊の發達を遂げた。卽ち役者は一人で數役を兼ねて、一幕中になほ十回以上の早變りを演じ、大道具

も蛇の目廻しによつて、場面を目まぐるしく變化させるやうになつた。要するに歌舞伎は文化文政期に至つて行詰つたのである。

頽廢期の概況

天保以後は從來完成せられた諸要素の摸倣集成を事とした時代であつて、狂言作者も最後の大劇作家の河竹新七(古河默阿彌)以外には勝れた人物がなく、役者の方面にも立役敵役女方の區別が亂れ勝になり、技藝は傳統の末節に囚はれて、往年の精神的な妙技は再び見られなくなつた。かくて幕末期の歌舞伎は世相を反映して頽廢的氣分に充たされ、遂に墮落の道を辿つて行つた。

當代の名優

爛熟頽廢期の歌舞伎芝居の概況は右に述べた通りであつて、前代のやうな潑剌たる生命は認められなくなつたが、民衆の好劇心は益盛になり、名優も次々に輩出して家の藝を繼承すると共に、時代の要求に適應した技藝を演じて、劇場はいよ〱繁昌した。尤も江戸中心時代であるから、代表的な役者は自ら江戸に集まつた。卽ち文化文政期には、上方に七代片岡仁左衞門・二代嵐吉三郎・三代中村歌右衞門・五代市川團藏、女方に二代中村富十郎等があつたが、更に江戸には三代尾上菊五郎・五代松本幸四郎・三代坂東三津五郎・三代坂東彦三郎・七代市川團十郎、女方に五代岩井半四郎・四代瀨川菊之丞・二代澤村田之助等があつて、江戸の劇壇は上方を遙かに凌駕する盛況を呈した。次いで天保嘉永期になると、上方はいよ〱衰へて、僅かに尾上多見藏・片岡市藏・八代片岡仁左衞門、女方に中山南枝・四代山下金作等があつたばかりであるが、江戸には六代團藏・四代彦三郎・四代三津五郎・五代宗十郎・十二代市村羽左衞門・四代市川小團次・八代團十郎、女方に四代菊五郎・五代菊之丞・坂東しうか等があつ

大成期の演劇書

て、前代に引續いて相變らず盛であつた。



「お染久松色讀販」繪入根本（文化十年）
（歌舞伎圖說に據る）

文化文政天保の頃には民衆の好劇心に促されて、歌舞伎繪・繪入根本(ねほん)・正本。歌舞伎趣味の小說等が盛に流行した。歌舞伎繪や小說などの代表的な作者作品に就いては既に述べたから、茲には其の他に就いて略述して置く。繪入根本の形式は臺帳と同じであるが、元祿期の狂言本とは全く異なつて、臺詞とト書と舞臺書きとから成つてゐる。其の簡單なものは半紙本一二冊であるが、普通は一部六七册から成つて居る。毎冊に舞臺面を描いた挿繪があるので「繪入」の二字を冠してある。江戸には寶曆期に現れたが、流行するまでに至らず、上方では安永六年に八文字屋から奈河龜輔の「伽羅先代萩」五册が刊行せられ、歌舞伎衰頽時代になると狂言作者又は芝居通の間から、歌舞伎年代記が次々に著作された。其の最も著名なのは、初代立川焉馬編著の「花江都(はなのえど)歌舞伎年代記」九卷（天保十二年刊）であつて、其の後編には豐芥子編「續歌舞伎年代記」三十卷（安政頃成る）がある。此の外江戸には文政頃に「江戸芝居年代記」三卷（編者未詳）が成り、大阪には幕末期に「大歌舞伎外題年鑑」五卷（編者未詳）が現れて、前記の年代記と共に後世研究資料として廣く利用せられて居る。

鶴屋南北

文化文政期の代表的劇作家は鶴屋南北（文政十二年歿七十五）である。江戸乘物町の紺屋海老屋伊三郎の子で、源

藏と云つたが後に伊之助と改めた。初めは家業に從事してゐたが、好きな道に志して金井三笑の門に入り、安永四年十一月(二十一歳)中村座に出勤し、翌年顔見世の番附に始めて勝俵藏の名を掲げられた。其の後四十歳を過ぎる頃までは、三枚目以下の下級作者として隱忍してゐる間に、他日の飛躍の素地を養ひ、享和元年(四十七歳)に始めて二枚目の地位を得た。其の後文化元年五十歳の時、初代菊五郎の高弟尾上松助(松緑)の爲に「天竺徳兵衛韓噺」を書いて七十餘日の大入を取り、當時不振に陷つた河原崎座を救つた爲に大いに重んぜられ、同年十一月に始めて立作者となつた。併し立作者とは名ばかりで、未だ實權を握るに至らなかつたが、其の後間もなく先輩の治助及び五瓶が相踵いで世を去つたので、文化五年以後は名實共に立作者となる事が出來た。是より彼の活躍時代が始まるのであるから、正に大器晩成の人と言ふべきであつて、劇作上の伎倆は老いて益圓熟の域に達した。其の後文化八年に至つて俵藏を改めて鶴屋南北と稱し、此の頃から文政天保の頃に至るまでの江戸劇壇は、殆ど彼によつて獨占せられてゐた。鶴屋南北の家は初代から三代目に至るまでは道化方の俳優であつたが、俵藏は三代目南北の娘お吉の聟になつたので、四代目鶴屋南北を名乘つた。從つて彼は作者としては初代である。南北は始め道化方の俳優大谷徳次などに隨つてゐたが、後に尾上松助の引立によつて立身したのであつて、五十歳前後の作は主として松助の爲に執筆せられた。然るに文化十二年に松助が病死した後は、當時の名優であつた立役としての三世坂東三津五郎、敵役としての五世松本幸四郎、女方としての五世岩井半四郎等の爲に書き、なほ晩年には三世尾上菊五郎や七世市川團十郎等の

爲に執筆したのであつて、彼が書いた狂言は此等の名優の伎倆と相俟つて人氣を集めたのである。

南北の脚本

南北は先輩たる治助や五瓶によつて興つた寫實的世話物を承けて、市井の風俗流行を寫し、又江戸人の洒落滑稽を盡す事を得意としたのであつて、所謂生世話物は彼によつて完成せられたのである。南北は元來學識は無かつたが、當意即妙の奇才に富んでゐたので、大膽奇拔な趣向を立て、而も複雜な筋を巧みに組織立てる天禀を具へてゐた。南北は時代の傾向に應じた濡れ場殺し場を得意とし、殊に怪談物によつて名聲を轟かしたのであつて、其の脚色上の奇拔な趣向は、舞臺上の新奇な工夫と奇拔な宣傳法と相俟つて、社會の耳目を驚かした。五十歳以後の二十五年間に書いた脚本は百十餘篇に達し、(主として世話物)晩年に姥尉輔の名で、餘技として書いた正本製の草雙紙は十數部ある。左に脚本中の傑作を時代順に擧げて置く。

南北の名作

天竺德兵衛韓噺（いこくばなし）　半二の淨瑠璃「天竺德兵衛郷鏡」に據る。文化元年七月河原崎座

時桔梗出世請状（ときもききやうしゆつせのうけじやう）　光秀を取扱つた淨瑠璃を集成した作。文化五年七月市村座

阿國御前化粧鏡（おくにごぜんけしやうのすがたみ）　前作に累與右衛門の說話を加へた作。文化六年六月森田座

心謎解色絲（こころのなぞとけたいろいと）　淨瑠璃「絲櫻本町育」を新たに脚色した作。文化七年正月市村座

繪本合法衢（ゑほんがつぽうがつじ）　讀本「繪本合法辻」に據る。文化七年五月市村座

謎帶一寸德兵衛（なぞのおびちよつとくべゑ）　通稱「大島團七」　文化八年七月市村座

於染久松色讀販（うきなのよみうり）　海音の淨瑠璃「お染久松袂の白しぼり」の改作。文化十年三月森田座

隅田川花御所染　淨瑠璃「加々見山舊錦繪」に女清玄を合せた作。文化十一年三月市村座

杜若艶色紫（かきつばたいろもえどぞめ）　通稱「土手のお六」　文化十二年五月河原崎座

櫻姫東（あづま）文章　京傳の「櫻姫全傳曙草紙」に據る。文化十四年三月河原崎座

浮世柄比翼稻妻（うきよづかひよくのいなづま）　京傳の「昔話稻妻表紙」を翻案。文政六年三月市村座

東海道四谷怪談　四谷左門町の怪談を小幡小平次の怪談に取入れた作。文政八年七月中村座

獨道中（ひとりたび）五十三驛（つぎ）　五十三驛の怪談。文政十年閏六月河原崎座

東海道四谷怪談

右に掲げた名作中で、南北が最も得意とした怪談物の代表作は『東海道四谷怪談』である。此の脚本は前に綴つた『謎帶一寸徳兵衛』が當時大當りであつたので、怪談物の演出を得意とした三代菊五郎が、特に南北にそれに類した新作を求めた爲に、書き上げたと傳へられて居る。從つて『東海道四谷怪談』の結構は大體かの狂言から借りてゐるが、部分的には從來の多くの自作中から素材を取つてゐる。要するに繼ぎはぎの作ではあるが、亡靈の趣向に十分技巧を盡して、怪談劇の代表的傑作たらしめて居る。其の筋は複雜であるが、第二幕目を中心にして梗概を記すならば次の通りである。

梗概

鹽谷家の浪人民谷伊右衛門は、舅四谷左門が我が惡事を覺り、妻お岩の離縁を迫るのを恨んで闇討にし、今はわびしい生活をしてゐる。お岩は夫が父の仇とは知らず、敵討の助太刀を賴みたい爲に夫の冷酷を忍んでゐると、伊東喜兵衛（鹽谷の敵高家の家來で、伊右衛門の近くに裕福な生活をしてゐる）の孫娘のお梅は伊右衛門を慕つて、祖父に夫婦にしてくれと强請つてゐる。お岩は出産した後で、

伊東の指圖で按摩宅悦が盛つた毒藥を飮んで、恐ろしい醜い容貌に變り果て、お梅と結婚することを承諾して歸つて來た夫に虐待せられて憤死する。伊右衞門は又小汐田又之丞の小者小佛小平が、主人の難病を救ふ爲に、民谷家傳の祕藥を盗み出さうとしたのを捕へて責め殺した後に、お岩と不義をした體にして戸板に縛りつけて川へ流した。是よりお岩と小平の亡靈は執念深く伊右衞門を惱まし、伊東一家も此の怨靈の爲に前後して呪ひ殺される。此の狂言にはなほお岩の妹お袖をめぐる因果譚が織り込まれてゐる。即ち鹽谷の家來佐藤與茂七はお袖の夫であつて、主家の仇討の機を窺つてゐるが、お袖の周圍には道ならぬ戀をする直助(實はお袖の兄)權兵衞があつて、此等の人物の間に起る怪奇と凄慘に充ちた事件は、お岩の怪談を一層引立てて居る。



三代菊五郎のお岩亡魂
(歌川國安筆入錦繪)

獨道中五十三驛

　南北の特色は怪異と凄慘と滑稽とにあるのであるが、此の三方面を兼ね備へた晩年の傑作は『獨道中五十三驛』である。此の作は當時持て囃された一九の『東海道中膝栗毛』から思ひ付いて、五十三驛を背景に取り、之に『戀女房染分手綱』『碁太平記白石噺』を始めとして、龜山仇討・お半長右衞門・白井權八小紫などを綯ひ交せた、極めて複雜な筋の怪談物である。名題に示されてゐるやうに、一人で十役を

兼ねた三代目菊五郎の早變りを見せる爲の狂言であるが、是には長谷川勘兵衛の機巧大道具の工夫に俟つ所が多かつた。此の脚本は彼の怪談物の集大成であるばかりでなく、從來の諸作に發揮せられた彼のあらゆる特徴は、悉く具はつてゐるのであつて、長所と共に短所をもよく示して居る。

南北の特色

南北は、金錢と色慾の奴隷となつて狂奔しつつ自ら身を滅す人生を次々に描いて、陰慘淒艶な空氣を舞臺上に横溢せしめる事を得意とした。殊に怪談物にあつては『四谷怪談』や『獨道中五十三驛』などに見るやうに、妖艶な濡れ場の後に陰慘にして幻妖味に充ちた場面を見せ、殘忍な責め場殺し場に次ぐに滑稽な笑ひを以てするなど、絶えず觀客の感情を攪亂し興奮せしめるのであつて、是が頽廢期の江戸人から異常な喝采を以て迎へられたのも當然である。要するに彼は所謂生世話物を創めて江戸の社會を如實に描き、其の氣分情調までも巧みに捉へたのであり、殊に從來例のない奇怪殘忍な怪談物によつて、不朽の名を遺したのである。蓋し後の河竹新七と共に、江戸の劇壇が生んだ二大劇作家である。

其他の作者

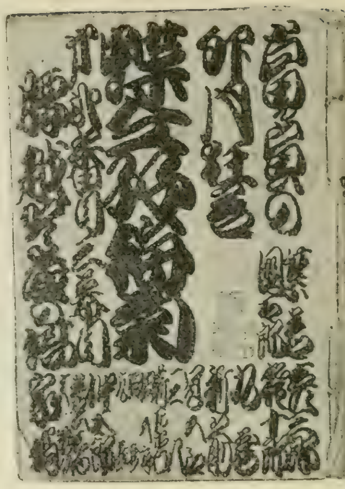
南北の活躍時代の狂言作者には上方に奈河七五三助の門人奈河篤助（とくすけ）（天保十三年歿七十九歳）、及び篤助門下の奈河晴助（はるすけ）（文政九年歿四十五）があり、江戸には南北の助筆で後に相當認められた福森久助（文政元年歿五十二）、南北の子二代勝俵藏（天保元年歿五十歳）、治助の門人二代櫻田治助（文政十二年歿六十二歳）、初代河竹新七の門人の二代瀨川如皐（天保四年歿七十七）等があつた。併し何れも鶴屋南北には遠く及ばなかつた。かくて南北歿後の脚本界は江戸上方共に寂寞であつて、僅かに三代櫻田治助（明治十年歿七十六）、三代瀨川如皐（明治十四年歿七十六歳）、二代河竹新七の三人が頭角を現してゐ

けての大劇作家となつた。此等の中で特に新七は傑出した才能を有し、やがて他の二人を壓倒して、幕末から明治時代にかけての大劇作家となつた。

河竹新七
（默阿彌）

河竹新七（明治二十六年歿七十八）は卽ち古河默阿彌である。文化十三年に江戸日本橋の商家越前屋勘兵衞の長子として生れた。幼名を芳三郎と云ひ、少年の頃一時遊蕩に耽つて、堅氣な父から勘當せられたが、十七歲の頃京橋尾張町の貸本屋好文堂の手代となり、俗文學院本脚本の類を耽讀し、又貸本業の關係から芝居の樂屋にも出入したのであつて、後年作者となる素地は此の間に養はれた。かくて天保五年十九歲の時父に死別して後、四代鶴屋南北の孫で初め鶴屋孫太郎と云つた所謂孫太郎南北（五代目南北）の門に入り、翌年師匠から與へられた勝諺藏を名乘つて、始めて市村座の見習作者となつた。其の後病の爲に一時劇場から退いた事があり、又天保十一年の秋には家業を嗣いだ弟が病歿した爲に、遂に師匠に名を返して實家の越前屋（當時芝の金杉に移つて質屋を營んでゐた）を相續した。併し實務に疎かつた爲に、天保十二年には柴晋輔と名乘つて再び狂言作者となり、爾來歿するまで作者生活を續けた。次いで天保十四年（二十八歲）には、二代目河竹新七を襲名して始めて立作者となつたが、（明治十四年に古河默阿彌と改名した）其の後十數年間は未だ世に名を成すに至らなかつた。彼が眞に立作者として活躍するやうになつたのは、安政元年（三十九歲）に四代市川小團次と提携して以後である。卽ち此の年河原崎座に迎へられた小團次が、彼の作『都鳥廓白浪』を演じて好評を博して以來、慶應二年に小團次が歿するまでの十年間は、互に結託して次々に新作の世話狂言を上演して、江戸末期の劇

壇に最後の光輝を放つたのである。此の間に書いた狂言が、主として江戸情調を漂はせた世話物であつて、殊に白浪物が多いのは、作者の最も得意な方面でもあるが、一には小團次の藝風に最も適應し



默阿彌自筆正本表紙

た狂言を提供したのであつて、代表的作品は殆ど此の頃に成つた。當時新七の脚本を演出した俳優には、歌舞伎頽廢期の終を飾つた小團次以外に、市川團藏・坂東彦三郎、女方の四代尾上菊五郎・二代尾上菊次郎等があつた。新七の作者生活は三十六七年間で、其の間に書いた作品は時代物九十篇、世話物百三十篇、外に淨瑠璃所作事百四十篇の多きに達するが、最も重要なのは世話狂言である。(彼の作品を最も廣く集めたものには『默阿彌全集』(春陽堂發行)二十七卷がある。)左に明治以前の代表作の名題を時代順に掲げて置く。

蔦紅葉宇都谷峠（つたもみぢうつのやたうげ）　通稱「文彌殺し」　安政三年九月市村座
鼠小紋東君新形（ねずみこもんはるのしんがた）　通稱「稻葉幸藏」「鼠小僧」　安政四年正月市村座
網模樣燈籠菊桐（あみもやうとうろのきくきり）　「傾城玉菊」と「小猿七之助」　安政四年七月市村座
花街模樣薊色縫（さともやうあざみのいろぬひ）　通稱「十六夜清心」　安政六年二月市村座
三人吉三廓初買（さんにんきちさくるわのはつがひ）　通稱「三人吉三」　萬延元年正月市村座

八幡祭小望月賑（はちまんまつりよみやのにぎはひ）　通稱「縮屋新助」「美代吉殺し」　萬延元年七月市村座
青砥稿花紅彩畫（あをとざうしはなのにしきゑ）　別名「辨天娘女男白浪」通稱「白浪五人男」　文久二年三月市村座
勸善懲惡覗機關（かんぜんちようあくのぞきからくり）　通稱「村井長庵」　文久二年八月守田座
茲江戸小腕達引（ここがえどこうでのたてひき）　通稱「腕の喜三郎」　文久三年八月市村座
曾我綉俠御所染（そがもやうたてしのごしよぞめ）　通稱「御所五郎藏」　文久四年二月市村座
三保浦松月横櫛（みほのうらまつつきのよこぐし）　「切られお富」の書替　元治元年七月守田座
船打込橋間白浪（ふなべうちこむはしまのしらなみ）　通稱「鑄掛屋松五郎」　慶應二年二月守田座　（以上世話狂言）
富士三升扇曾我　通稱「敷皮の曾我」「生立曾我」　慶應二年二月守田座　（時代物）

鼠小紋東君新形

今新七が最も得意とする白浪物の特色を説明する爲に、二三の代表作の解說を試みよう。「鼠小紋東君新形」は二代目松林伯圓の得意の講談鼠小僧次郎吉に據つて、新たに脚色した作である。其の梗概は——鼠小僧は惡日に生れた爲に親に捨てられたが、女賊のお熊に拾はれやがて成長して義賊となり、大名屋敷の金子を盜んでは貧困者に施してゐた。さて刀屋新助は刀代として預つた金子百兩をお熊に奪はれ途方に暮れて、馴染の藝者お元と心中しようとしてゐると、今は稻葉幸藏と名乘つてゐる鼠小僧に引留められ、入用の百兩を惠まれたが、其の金子は稻毛の屋敷から盜み出した極印附であつたので、新助お元は召捕られ、稻毛の辻番の與惣兵衛(實は幸藏の父)は手引の嫌疑を受けて入牢した。幸藏は卜賣者となつて世を忍んでゐたが、偶此の事を聞き、自分一身の爲に無實の罪に泣いてゐる人々

を救ふ爲に、遂に意を決して自首して出た――と云ふのである。此の狂言は安政四年正月市村座の春興行として上演せられたが、忽ち江戸人の共鳴を得て好評を博し、三月越し百餘日の大入を取つた。


三人吉三（大正十四年六月歌舞伎座）
吉右衛門　左團次　羽左衛門

『三人吉三廓初買』は八百屋お七と吉三の世界を借りて、所化上りの和尚吉三、侍上りのお坊吉三、女裝してゐるお孃吉三の三人の盜賊の因果話を仕組み、これに梅暮里谷峨の洒落本『傾城買二筋道』の一重と文里の情話を挿入した作である。此の狂言は安森家から盜み出された短刀の庚申丸と、之を賣つた代金百兩とを中心に、複雜奇怪な因果話が展開されるのである。即ち庚申丸は海老名軍藏に賴まれて傳吉が盜んだのであるが、研師の手から金貸の太郎右衛門に渡り、刀の代金は道具屋の木屋文藏（文里）の手代十三郎の手から紛失して、情婦のおとせの手に入つてゐる。おとせは其の金子を十三郎に渡さうとしてお孃吉三に奪はれ、其の金を狙つてゐた太郎右衛門は、同じくお孃の爲に庚申丸を奪はれた。偶其所にお坊吉三が通り掛つて、お孃と金の奪合ひを演じてゐると、和尚吉三が現れて之を引留め、三人は義兄弟の契を結び、金子は和尚が貰つて立去る。（圖版參照）和尚とおとせは傳吉の子

で、和尚は父の勘當を受けた身であるが、十三郎は實はおとせにとつては雙生兒の兄である事が分つたので、傳吉は庚申丸を盜み出した報と知つて罪を悔いる。百兩の金子は其の後和尚吉三が傳吉を訪れた時、窃に置土産にして立去つた後、おとせに言ひ寄る武兵衛の手に入り、更にお坊吉三に奪はれ、傳吉は其の金子の立替を迫つてお坊に殺された。かくて三人の吉三に對する詮議が嚴しくなつたので、お孃お坊は吉祥院に居る和尚吉三の許に匿れてゐたが、和尚は何事も因果とあきらめて、畜生道に墮ちた十三郎おとせの兄妹を身代りに立てて他の二人を逃走させた。併し其の僞者である事が分つて捕手に圍まれたので、庚申丸と百兩を馳け付けた十三郎の養父久兵衛に渡して、三人互に刺し違へて自害した。以上述べた外に、なほ一重文里の情話があつて、筋は極めて錯綜してゐるが、一體に人情味があり又繪畫的な場面に富んでゐるので、今もなほ屢演じられてゐる。尤も明治三十一年以後は三人吉三の件だけを『三人吉三巴白浪』の名題で上演してゐる。終の六幕及び七幕も有名であるが、最も美しいのは第二幕の大川端庚申塚の場であつて、お孃吉三がおとせの所持する百兩を奪ひ、川へ突き落した後で述べる「月も朧に白魚の、篝も霞む春の空、つめたい風もほろ醉に、心持よく浮か〴〵と、浮かれ烏の只一羽、塒へ歸る川端で、棹の雫か濡手で泡、思ひがけなく手に入る百兩……」の臺詞は世に喧傳せられてゐる。

次に『青砥稿花紅彩畫』は豐國の見立錦繪から想を得て、上方の五人男の狂言を書き替へた作で、俗稱「白浪五人男」「辨天小僧」「辨天娘女男白浪（めをとしらなみ）」などの名題で世に普く知られて居る。辨天小僧菊之助

は鎌倉の呉服屋濱松屋幸兵衛の子であるが、十二の時迷子となり、やがて義賊日本駄右衛門の手下になつて、忠信利平・赤星十三郎・南郷力丸と共に白浪五人男と謳はれた。或日辨天小僧は娘に化け、供侍を裝うてゐる南郷力丸を從へて濱松屋へ買物に行き、萬引と見せかけて店員の打擲を受け、それを言掛りに駄右衛門と呼應して强盜を働いた。然るに幸兵衛の述懷によつて、幸兵衛の伜宗之助は駄右衛門の實子であり、辨天は幸兵衛の子である事が分り、又辨天が嘗て信州路で殺した信田小太郎は故主であり、小山の息女千壽姬(小太郎の許嫁)を欺いて取つた胡蝶の香合は、幸兵衛が小山家の爲に詮議中の重寶である事を知つて、過去の重なる惡業を悔いた。やがて捕手が廻つたので、五人は稻瀨川に勢揃ひして思ひ〳〵に落ちたが、辨天は捕手の爲に極樂寺の山門の屋上に追ひ詰められ、



十三代羽左衛門の辨天小僧

父に返す爲に持つてゐた香合は滑川に落ちたので、いよ〳〵覺悟して立腹を切り、香合は青砥藤綱の計らひで拾ひ上げられた。かくて他の四人もそれ〳〵捕はれて縛に就いた。此の狂言中で屢演じられるのは、辨天小僧が文金高島田の令孃を裝うて現れる濱松屋店の場(圖版參照)から、稻瀨川に五人男が勢揃をするまでの第三幕及び第四幕であつて、四幕目の五人男の「つらね」の臺詞は有名である。

村井長庵

右に解說した白浪物は、何れも盜賊を義賊として脚色せられてゐるが、「勸善懲惡覗機關」には珍らしく惡に徹した村井長庵を描いてゐる。此の狂言は町醫村井長庵の講談を脚色したもので、一名を「村井長庵功破傘(たくみのやれがさ)」、俗稱「村井長庵」と呼ばれてゐる。村井長庵は極惡非道の藪醫で、妹婿の重兵衞を殺して其の娘の身代金を奪ひ、罪の發覺を恐れて手下の三次をして妹をも殺させた後、人殺しの罪を浪人藤掛道十郎に著せて遂に牢死せしめた。長庵は更に、今は吉原で遊女小夜衣となつてゐる重兵衞の娘と馴染んでゐる主家伊勢屋の養子千太郎から、身請金を捲き上げる爲に脅迫して死に至らしめたが、伊勢屋の手代久八が主人殺しと名乘つて出たのと、道十郎の女房の訴とによつて、長庵は捕へられて大岡奉行の白洲に引き出され、重なる罪を匿しかねて遂に罪に服し、久八は千太郎の兄と分り、而も無罪となつて伊勢屋の養子に迎へられた。此の狂言は右の梗概によつて知られるやうに、大惡の長庵と誠實な久八とを對照させ、而も市川小團次をして此の二役を兼ねさせたものであるが、なほ至る所に作者の卓絕した手腕を認めるのであつて、作者が自ら三人吉三などと共に、終生の快心の作としたと云ふのも當然と思はれる。要するに默阿彌が最も得意とした白浪物の主人公は、最後の村井長庵は別として、何れも義俠心に富んだ人物として描き出されて居るのであつて、此の點に作者の惡人に對する獨自の解釋が認められる。かくて惡の中に美を認めたのは、德義を重んじ同情に富んだ作者の性格が反映して居るのであつて、默阿彌の作の貴い所である。

默阿彌の作風

默阿彌の脚本も亦在來の狂言の書替又は增補から成るものや、小說講談の類を脚色したものが多い

のであつて、純然たる創意と見るべき作は稀である。卽ち彼は徹底的な寫實劇を大成した大南北の世話狂言の作風を承けて、更に之を藝術的に磨き上げると共に、他の多くの先輩の長所特質を十分に取入れた。近世演劇史上の最後の集大成者である。其の構想には當時の文學者一般に見るやうに、勸善懲惡主義や因果應報の思想に囚はれた傾向があつて、稍型にはまつた憾が無いでもないが、よく江戶末期の頽廢的な世相人情を寫し出すと共に、結構布置の妙を得、しかもよく俳優の藝風を十分に發揮せしめるやうに工夫して、舞臺藝術としての效果を收める事に細心の注意を拂つたのは、彼の長所である。默阿彌の長所として更に重要な點は、彼が完成した生世話物を從來の時代物以上に、詩的且つ繪畫的な藝術とする爲に、特に臺詞と音樂に對する研究を積んだ事である。卽ち臺詞には推敲洗煉を重ねたのであつて、優五七調の美辭麗句を連ね、父母音の利用による韻律美の豐かな名文句を綴つてゐるのであつて、文筆の才に乏しかつた鶴屋南北を遙かに凌駕してゐる。彼は又淨瑠璃所作事の作者の大家であつて、一生の間に書いた狂言淨瑠璃は百二三十餘曲(外に所作事十三曲)の多きに及んで居る。其の所作事作者としての勝れた手腕は、普通の狂言に於ても發揮せられて居るのであつて、劇中の音曲としては淸元節を最も多く利用し、之によつて濡れ場に詩美を漂はし、殺し場の凄味を和らげなどして、夢幻的な情景を描き出す事に成功して居る。要するに默阿彌の狂言には、大膽な脚色や嶄新な創意を見る事は稀であるが、右に擧げた長所によつて江戶の世話狂言を完成し、且つ明治時代の歌舞伎を開いた一大功勞者である。

明治時代の默阿彌

默阿彌は明治二十六年まで生存した人であり、殊に明治の初め十數年間は圓熟期であるから、ついでに其の頃の名作を記して置く。彼は明治五年に守田座の座主守田勘彌に迎へられて座附作者となつて以來、前期に見られなかつた時代物御家物を書き、又新時代の傾向を追うて所謂散切物や活歷物にも手を著けて、依然として劇壇に重んぜられてゐたが、明治十四年十一月（六十六歲）に新富座に『島衛月白浪』（明石の島藏に松島千太）を上演したのを記念興行として隱退し、同時に古河默阿彌と改名した。尤も隱退後もなほ執筆を餘儀なくされた。明治時代の傑作は、

明治時代の名作

太鼓音智勇三略	時代物	通稱「酒井の太鼓」明治六年三月村山座
梅雨小袖昔八丈	世話物	通稱「髮結新三」明治六年六月中村座
島衛月白浪	散切物	通稱「島藏と千太」明治十四年十一月新富座
新皿屋敷月雨暈	世話物	皿屋敷の新脚色　明治十六年五月市村座
水天宮利生深川	世話物	通稱「筆屋幸兵衞」明治十八年二月千歲座

等である。此等の脚本は九代市川團十郎・五代尾上菊五郎・三代澤村田之助・市川左團次・八代岩井半四郎等によつて演じられた。

後記

本書の上卷を公にしましたのは昭和七年九月であつて、當時下卷の原稿も大體出來上り、其の一部分は既に組版に著手せられてゐました。偶國文學の研究は日を逐うて盛になり、新研究が續々發表せられましたので、此の際出來るだけそれ等を參酌して、記述の精確を期したいと思ひ、暫く原稿を手許に留めて補正に從事しました。然るに意外に手間取つて、漸く昨年の暮になつて脱稿を告げました。起稿以來六箇年餘を費した事になります。最初の豫定では明治時代までを、凡そ一千頁に纏めるつもりでありましたが、近世文學は多方面に亙つて發展して居り、これに關する研究も近年いよ〱行屆いて來ましたので、自然記すべき事項が多くなり、江戸時代までで既に二百五十餘頁を超過する結果になりました。若し此の方針で明治時代までも說いたならば、餘り大部になるので、一先づ是で打切つて下卷を出版する事にしました。

上卷以來參考に供した諸家の著書や論文は、引用の箇所に一々註記すべきでありますが、餘り煩雜になるので著しいもの以外は省略しました。下卷の執筆中に多大の便益を得ましたのは、『日本文學大辭典』、新潮社版『日本文學講座』、岩波講座『日本文學』、改造社版『日本文學講座』、及び『國語と國文學』『國語國文』所載の諸論文や、『日本名著全集』の解題などであります。茲に負ふ所を明かにして、執筆者に敬意を表して置きます。

最後の下卷の出版を待たれて、著者又は發行所へ督促の書面を寄せられた多數の讀者に、發行の遲延を陳謝いたします。

昭和十一年二月紀元節の佳辰に

著者

索引

（裏面の凡例を見よ）

凡例

一、此の索引は國文學史新講中の人名書名作品名件名（外國のものを除く）を五十音順に配列したのであるが、各項目は日本文學大辭典の例に傚つて、發音式假名書の順位によつて序列した。例へば「往生要集」はオウジヨウヨウシユウ、「戀娘昔八丈」はコイムスメムカシハチジヨウの如き假名書によつて位置を定めた。

一、人名は名（僧侶は法號）によつて掲げ、其の下に姓氏を註記し、雅號又は戲號によつて知られてゐる者はそれによつた。例へば「大江朝綱」は「朝綱（大江—）」とし、「小澤玄中」は「蘆庵（小澤—）」とし、「佐々木長次郎」は「爲永春水」とし、「杉森信盛」は「近松門左衞門」として出すが如きである。尤も多くの號を有する者にあつては、廣く行はれて居るのに從ひ、作品の種類によつて號を異にする場合には、「大田南畝」と「蜀山人」と「寢惚先生」とをそれぞれ掲げるやうにした。又何亭何舍何軒の如き雅號は之を附けて、「曲亭馬琴」「十返舍一九」の如き樣式で示した。なほ淨瑠璃作者狂言作者等は「紀海音」「並木宗輔」「鶴屋南北」のやうな名で擧げた。

一、書名作品名の角書は除いて掲げるのを原則とし、角書を連ねて呼ぶ慣例になつてゐる物、又は角書によつて他の類似のものと區別せられる物は之を附ける事にした。例へば「近古奇談雨月物語」や「柳髮新話浮世床」の類の角書は之を除き、「櫻姫全傳曙草紙」や「奥羽一覽道中膝栗毛」の如きは角書を附けて出した。又稍長い書名例へば「日本國現報善惡靈異記」の如きものは、略稱の「日本靈異記」によつて掲げた。なほ他のものと紛れ易い書名の下には種類を註記して置いた。

一、參照すべき頁を示した數字の中に太字で印刷してあるのは、其の個所に詳細な記事のある事を示したのであり、同じ項目の下に二つ以上の太字の數字があるのは、其の各が重要記事である事を示したのである。

あ

う

え

お

か（かい―かと）

か（かな―かん）

け

源氏義鏡 七三七
源氏物語 一三三・一八九・一九七・二〇三・二〇六・二一八・二二五・二三六・二三九・二七一・二九一・二九三・二九四・三〇一・三〇七・三一三・三一五・三一八・三三三・三三七・三三八・三六九・三九四・四一六・四一七・四一八・四二〇・四二三・四二四・四三三・五二四・六四九・六六五・七二七・七四九・九二三・一一三三
源氏物語繪巻 二八七
源氏物語攷 九四二
源氏物語湖月抄 六五二
源氏物語新釋 九〇三
源氏物語玉の小櫛 九二四・九二五
源氏物語評釋 九四八
乾什(岩本―) 八一一
幻住庵記 六九七
建春門院中納言(健壽のこと) 四四五
顯昭 二三七・二四五・二五八・二六二・二六九・三七三・三八三・一一九五
顯昭陳狀 三六一・三八三
賢女手習幷新暦 七九一
言志錄 八八二
元政上人 六二七・六五一・六五三
鎌倉比事 七三三・七三五
現存三十六人詩歌 四五四
現存和歌六帖 三九三
源注拾遺 六六三
顯註密勘 三六九
源注餘滴 九四二・一〇三六
玄同放言 一一一九
源内(平賀氏、風來山人・福内鬼外參照) 八四七・八五九・九〇八・一一四四・一一三三
源平鬪諍錄 一一九六
源平盛衰記 三六〇・四〇四・四〇九・四二五・四四九・五三五・六三三・一一一二・一一一三・一一九五・一一九六・一一九七
源平雷傳記 八二一
玄峰集 七〇三
憲法十七條 一三・一〇三
建保内裏詩歌合 四五二
建武年中行事 四八一
幻夢物語 五四七
蘐門遺稿 九一〇・九一二・九一九・九二五
元隣(山岡―) 七二〇・七二一・七二六・七三五・八二〇
建禮門院右京大夫 三七五・三八九
建禮門院右京大夫集 三七六
元祿曾我物語 七六七
元祿太平記 七四六・七六六・七六七

こ(こい―こさ)

戀川春町 八六八・一〇三五・一〇六八・一〇七〇
戀川好町(鹿都部眞顔參照) 一〇三六
語意考 九〇四
戀女房染分手綱 一二四四
戀娘昔八丈 一三一四
耕雲(長親を見よ)
耕雲口傳 四九三
耕雲千首 四九二
興雅僧正 四八六
合巻 八五五・八五九・八六一・一〇四六・一二二四
厚顔抄 六六三
孝經集說 八六五
蒿蹊(伴―) 三二一・九〇七・九二七・九三二
江家次第 二五〇
光嚴院 四六二・四七二・四七三
孝行物語 七二八
江湖詩社 八九三
翱之惠鳳 五九八・五九九
甲子吟行 六九一
孔子家語 六二一
孔子縞于時藍染 一〇三五
江侍從 二三九
後宮色道指南 七四三
篁洲(原―) 七三〇・八〇五
考證學派 八四四・八六一・八六五
考證千典 九四二
好色一代男 七四六・七四八・八五二・八五三
好色一代女 七三二・七四五
好色五人女 七五二・七五九
好色二代男 七五〇・七五一
孝子善物語 一一二三
江西龍派 五五七
行宣(藤原―) 二三九
校正榮華物語略註 九四八
小歌 三八五
皇大神宮儀式帳 一二六
江談抄 二二七・二三六・二五五・二六〇・二六一・四二〇・四二一・四八五
慊堂(松崎―) 八八三・八八九
弘道館記 八八九
弘道館記述義 八八九
篁墩(吉田―) 八四四・八六六
江陵集 五五〇
弘仁格式 一一八
弘仁私記 二六八

こ（こし―こん）

し（しい―しめ）

し（しや―しゆ）

し（しよ）

し（しら―しん）

そ

た

て

と

な

に

ぬ ね

の

は

へ

ほ

み

ら

り

る

れ

ろ

わ

國學者歌人系統圖

○荷田春滿
- 荷田在滿—荷田御風
- 荷田蒼生子—菱田縫子
- 賀茂眞淵
  - 村田春道（春海の父）
  - 村田春郷（春海の兄）
  - 小野古道
  - 田安宗武
  - 楫取魚彦
  - 加藤千蔭
    - 大石千引—天野政德
    - 一柳千古—井上文雄
    - 木村定良
    - 賀茂季鷹
    - 清原雄風—村田了阿
  - 加藤枝直
  - 荒木田久老—足代弘訓
  - 建部綾足
  - 內山眞龍—小國重年（又宣長に學ぶ）
  - 山岡俊明
  - 村田春海
    - 清水濱臣—岡本保孝—木村正辭
    - 本間遊清—横山由清
    - 岸本由豆流—井上文雄
    - 小山田與清
      - 伊能頴則（又[illegible]に學ぶ）
        - 榊原芳野
        - 鈴木雅之
      - 山崎美成
      - 間宮永好—久米幹文
  - 加藤美樹—上田秋成
  - 谷眞潮
    - 中山嚴水
    - 今村樂
    - 宮地仲枝—鹿持雅澄
  - 塙保己一—屋代弘賢
  - 栗田土滿—石川依平
  - 本居宣長
    - 本居大平
      - 本居內遠
        - 村上忠順
        - 久米幹文
        - 本居豐頴
        - 小中村清矩
        - 千家尊澄
        - 池邊眞榛
      - 長澤伴雄
      - 田中大秀（重出）
      - 大倉鷲夫
      - 內池永年—安藤野雁（重出）
      - 中山美石
      - 加納諸平
        - 海上胤平
        - 伴林光平
      - 安藤野雁（後春門の門人）
      - 近藤芳樹
    - 栗田土滿
    - 稻懸棟隆
    - 夏目甕麿
    - 石川依平
    - 石塚龍麿
    - 鈴木朖
    - 本居春庭
      - 足代弘訓
        - 御巫清直
        - 佐々木弘綱
      - 東條義門
      - 富樫廣蔭
        - 堀秀成
        - 落合直澄
    - 小國重年
    - 長瀬眞幸—中島廣足
  - 日下部高豐
  - 清原雄風
  - 釋海量
  - 田中道麿
  - 澁谷伎文子
  - 鵜殿餘野子
  - 進藤筑波子

○細川幽齋
- 三條西實條
- 中院通勝
- 八條宮智仁親王
- [illegible]

- 栗田土滿
- 稲懸棟隆
- 夏目甕麿
- 石川依平
- 石塚龍麿
- 鈴木朖
- 本居春庭
  - 足代弘訓
    - 御巫淸直
    - 佐々木弘綱
  - 東條義門
  - 富樫廣蔭
    - 堀秀成
    - 落合直澄
- 小國重年（重出）
- 長瀬眞幸
  - 中島廣足
  - 和田巖足
- 田中道麿
- 田中大秀（大平に學ぶ）
  - 橘曙覽
  - 足立稲直
- 村田春門
- 藤井高尙
  - 淸水宣昭
- 石原正明
- 細井貞雄
- 伴信友
- 平田篤胤
  - 大國隆正—福羽美靜
  - 平田鐵胤
  - 六人部是香
  - 矢野玄道
  - 井上頼圀
  - 飯田武郷
  - 丸山作樂
  - 生田萬
  - 鈴木重胤
  - 佐藤信淵
  - 權田直助
  - 岡熊臣

- 內池永年—安藤野雁（重出）
- 中山美石—海上胤平
- 加納諸平—伴林光平
- 安藤野雁（後鈴門の門人）
- 近藤芳樹

- 淸原雄風
- 日下部高豐
- 田中道麿
- 油谷倭文子
- 鵜殿餘野子
- 進藤筑波子

○細川幽齋
- 三條西實條
- 中院通勝
- 八條宮智仁親王
- 佐方宗佐
- 烏丸光廣
- 松永貞德
  - 元政上人
  - 宮川松堅
  - 望月長好
  - 北村季吟
  - 加藤盤齋

○契沖
- 今井似閑
- 海北若沖
- 安藤爲章

○香川景樹
- 木下幸文
- 高橋殘夢
- 穗井田忠友
- 熊谷直好
- 菅沼斐雄
- 釋誠拙
- 兒山紀成
- 八田知紀
- 渡忠秋
- 柳原安子
- 秋園古香
- 高畠式部

淨瑠璃系統圖

〔注意〕古淨瑠璃の系統には不明な點が少くない。姑く通說に從ひ、疑問のある個所には×印を附けて置いた。

- 杉山丹後掾
  - 江戸肥前掾（肥前節）
    - 江戸半太夫（半太夫節（江戸節））
      - 十寸見河東（河東節）
  - 近江大掾（語齋）（近江節（語齋節））（岡島吉左衛門）
  - 長門掾（一說淨雲門人）
- 薩摩淨雲
  - 薩摩次郎右衛門（薩摩節）（淨雲の子）
    - 土佐少掾（土佐節）
      - 廣瀬式部太夫（式部節）
      - 手品市左衛門（手品節）
    - 薩摩外記（外記節）
      - 大薩摩主膳太夫（大薩摩節）
  - 櫻井丹波掾（金平節）（和泉太夫）
    - 二代和泉太夫

- ×虎屋源太夫
  - 虎屋永閑（永閑節）
  - 井上播磨掾（播磨節）
    - 清水理兵衛
      - 竹本義太夫（義太夫節）
  - ×伊勢島宮内（伊勢島節）
    - ×宇治加賀掾（嘉太夫節）（一說源太夫門人）
  - ×山本角太夫（角太夫節）（山本土佐掾）
    - 都太夫一中（一中節）
      - 宮古路豊後掾（豊後節）
        - 常磐津文字太夫（常磐津節）
          - 富本豊前掾（富本節）
            - 富本斎宮太夫
              - 清元延壽太夫（清元節）
        - 富士松薩摩掾（富士松節）（宮古路加賀太夫）
          - 鶴賀新内（新内節）
        - 宮古路薗八（薗八節）
        - 宮古路繁太夫（繁太夫節）
    - 岡本文彌（文彌節）
    - 松本治太夫（治太夫節）

昭和十一年五月五日印刷
昭和十一年五月十日發行
昭和十三年十月廿日三版發行

國文學史新講下卷

定價金五圓

著者　次田潤
東京市豐島區池袋三丁目一五三九番地

發行者　三樹退三
東京市神田區錦町一丁目十六番地

印刷者　河合勝夫
東京市本所區厩橋一丁目廿七番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區厩橋一丁目廿七番地

發行所　株式會社明治書院
東京市神田區錦町一丁目
【振替貯金口座東京四九九一番】
電話神田(25)三一四七番・三一四八番・三一四九番



